誕生! 超世代「ライトヘビーノベル」誌

企画・監修
本田透
supervisor
HONDA,Toru

ファウスト

novel

神野オキナ イラスト＝左折
木之本みけ イラスト＝とりしも
砂浦俊一 イラスト＝羽仁倉雲
将吉 イラスト＝KEI
にょにょにょ イラスト＝赤電車
蓮海もぐら イラスト＝吉井ダン
平坂 読 イラスト＝ヤス
本田 透 イラスト＝しかげなぎ
山本 弘 イラスト＝名瀬さおり

illustration

伊藤ベン
西E田

comic

小野敏洋
サガノヘルマー
しっと
玉置勉強
火浦R

essay/column

あかほりさとる
ういろう
大塚ひかり
かーず
鏡 裕之
黒石 翁
サンキュータツオ
竹熊健太郎
堀越英美
本田 透
みやも
安田理央
柳下毅一郎
YU-SHOW
米光一成

特集

倉田英之と「R.O.D」
倉田英之インタビュー
アニメ会の「R.O.D.-THE TV-」イッキ観レビュー
みさくらなんこつ 二次元ワールド!
専属契約!バーチャル天才女子高生作家の実像に迫る!

スペシャル対談

スペシャル☆解脱対談
滝本竜彦vs.本田透
そのまま突入二次元対談
みさくらぽんこつvs.本田透

cover illustration 伊藤ベン　cover design ヤマシタツトム

phantom

illustration 西E田

c o n t e n t s

ファントム

連載小説&読みきり小説

コミック

特集

エッセイ・コラム

スペシャル対談

カバーイラストレーション／伊藤ベン
巻頭口絵／西E田

ファントム刊行のことば

小説市場において「ライトノベル」が一大市場を形成しつつある昨今ですが、かつて「漫画」に対して「劇画」という勢力があらわれ、両者が融合することで『あしたのジョー』をはじめとする傑作が生まれ、漫画文化の黄金時代が到来しました。ライトノベルもまた然り、既存のライトノベルにくわえて、より高年齢の読者を対象とした〝ライトヘビーノベル〟とでも呼ぶべきジャンルが勃興しつつあります。ライトノベルの文法を踏襲しつつ、大人の鑑賞にも耐えうる新しい文学運動としてのライトヘビーノベルを市場に根付かせることが『ファントム』の最大の目標となります。『ファントム』は〈才能あるゲーム作家やライトノベル作家を、文芸作家という旧来のコースに乗せるためのシステム〉に風穴を開け、ライトノベルそのものを新しい文学運動として根付かせ認知させるために刊行します。

ゆくゆくはライトノベル市場を漫画文化に続く日本の一大コンテンツ産業に成長させるための魁、礎とならん、という志だけは遠大な『ファントム』にご期待とご協力を是非ともお願いします。

——本田透

Innocent World

本田 透
しかげなぎ／Illustration

1　悲しきダメ人間

「さあ、死ぬのよ！　死ね、さっさと死ね！　あんたさえこの世からいなくなれば、世界は救われるのよ！」
「いやだ、いやだあっ！　どうして僕がっ？」
「あんたみたいなダメ人間は、どうせ生きてたって誰にも愛されずに誰をも愛せずに虚(むな)しく人生を終えるしかないのよっ！　だからって、自分が愛されないからといって、世界を道連れにしようだなんて許せないわ！　そういうのを『逆恨(さかうら)み』っていうのよ！」
「だから、誤解だって。僕は身に覚えがない」
「あんたが世界を滅ぼすのよ、今岡真人(いまおかまさと)！　いい？　顔も醜(みにく)い奴は、心も醜いのよっ！」
「あっ、あんまりだあっ……！」
　たとえば、
『一人の清楚(せいそ)な美少女とか一人の純真なイケメン少年が、この世界の命運をなぜか握ってしまっている』
　これならば実にワクワクするシチュエーションだ。
　しかし、
『一人の哀れな童貞キモメンオタク男が、世界を滅亡に追い込

む運命を自分でも知らないうちに背負わされている』という状況は、物語としては実に意味がない。ヒキがない。ありえない。

オレンジ色の光沢を放つエナメルスーツに細い肢体を包んだツンデレツインテールツリ目の未来少女に踏みつけられ、額に「宇宙ガン」を突きつけられている——そんな絶体絶命の主人公のルックスが、全然パッとしないどころかたぶん一生彼女ができないと周囲の人間に一目で確信させる喪男だなんて。

いったい誰が、そんなオープニングの漫画を読みたがるだろうか？

だが今、俺の目の前で展開されている光景は、まぎれもなく現実。

真人は別に二目と見られないような醜悪な顔ではないが、女たちに言わせれば「絶対に誰にも愛されない」というドス黒いオーラを全身に漂わせている。髪型や服を変えたり、顔を整形したりすればすむという問題ではない。真人は魂が「喪」なのだ。この二〇〇七年の東京では、愛されないということは一種の生得的な才能で、真人は愛されないことにかけては天才なのだ。

俺には、真人がなぜそこまで女に忌み嫌われるのか、その正確な理由がわからない。外見だってダメといえばダメだが最悪というわけではないし、小心者ではあるけれど、決してだいそれた悪事を働くタイプではない。だが、女は真人を見ると無性にノルアドレナリンを分泌させられてイライラするらしい。女を嫌がらせるフェロモンでも出しているのだろうか？

ああ、それにしても未来からやって来た女の子に宇宙ガンを突きつけられて自決を迫られるなんて……。

そう。同時代人の女だけでなく、未来世界の女からも忌み嫌われている。それが真人なのだ。

俺は真人の友達で、名前は坪井明良。

この世界ではイケメンと呼ばれているらしいが、そんなことはどうでもいい。

俺はなんとかして真人に彼女をつくらせようと、ここ数カ月いろいろと努力してきた。だが、ダメだった。見事なまでの失敗つづき。かえって真人の心にトラウマを植えつける結果ばかりを招いてしまった。このまま真人が未来少女に殺されてしまえば、俺は真人を無駄に苦しめた役立たずの悪友ということになってしまう。それだけは回避しなければならない。そんな結末だけは。

話は五分だけ遡る。

今日から大学が夏季休暇に入ったため、俺はやることもなくマンションの自室で夜を過ごしていた。二〇〇七年の東京は、ありえない暑さだ。俺は暑さに慣れていない。エアコンをフル

稼動させたリビングに籠り、壁に埋め込んである65V型プラズマテレビで『悪魔のいけにえ』を観ながら腹筋に勤しんでいた。マスクを被った大男が、チェンソーで若い男女をグチャーッ！ と切り刻むという素敵な映画だ。

東京に来てからというもの、慣れない生活スタイルに馴染めずストレスがたまる一方。

俺はいつしか、夜な夜な『悪魔のいけにえ』を観つつ汗を流すのが日課になってしまっていた。

「ここに来てからだんだん心が汚れてきているような気がする」

我ながら自分で自分の中に鬱積していくルサンチマンのごとき感情がおそろしい。東京は実に陰惨で浅ましい都市だ。古代の神話に出てくる「大いなるバビロン」そのもの。男も女も原始部族のごとき呪術的な装飾品と他人を欺くための化粧で素顔を隠して自らをどぎつく着飾り、世界滅亡を告げる黙示録の騎士のラッパを聴いて発狂した「おしまいの人間」たちのような邪悪きわまりない不自然な姿で狭い街の中をあくせくと動きまわり、そして人間の男女同士でセックスをしようとしてあがいているのだ。

不潔だ！ 男と女が？ 人間同士で？ セックスを？ しかも、生殖のためではなく、自らの肉体的快楽のためになんて！ 信じがたい光景を、俺はこの数カ月、えんえんと見せつけられてきた。

これで魂が汚れないはずがない。奴らはセックスのためなら、平気でどんな嘘でもつく。心にもない台詞をいくらでも繰り出す。しかもそれらの台詞はコンビニで売っている雑誌やテレビでオンエアされているドラマからの流用ばかり、そんなもので人間が人間を騙す。詐欺だ。ぺてんにかけるのだ。ただ目の前にいる女の膣にペニスを挿入したいがために「愛している」と言うのだ。

「愛している」俺はこれほど崇高で美しい言葉を知らない。人間はみだりに「愛している」などという言葉を使うべきではない。それが俺の育った故郷での常識だった。しかし、東京は違った。愛の大安売り！

偽りの愛、口先の愛、性欲や虚栄心やそのほかもろもろの身勝手なエゴイズムを「愛」という名前のオブラートに包みさえすれば、人間は何をしてもいい。それが東京。

呪われた都市。大いなるバビロン。原始宗教の用語を借りれば、この街は「天罰」を下されるべき悪徳の街だ。

俺は腹筋を切り上げると、ベランダに出た。このマンションは五十八階建てで、俺は最上階に入っている。ここから下を見降ろすと、人がゴミのように小さく見える。呆れることに、ネコの額のように狭い街のいたるところに無駄なクルマがあふれかえっている。みすぼらしいほどに細い道路は無個性な大量生産型大衆車の群れでびっしりと埋め尽くされ、二十四時間常に渋滞している。

自分の足で歩いたほうが速い。
そしてそれらの無駄なクルマの中には、たいていの場合、男と女が一組ずつ閉じ込められている。
どうやら東京の女は、クルマを持っていない男とはセックスしないらしい。いや、奴らの言葉で言えば「恋愛」をしないと言うべきか。
なんと、奴らは「セックス」と「恋愛」を同義で使っている。
おぞましいことだ。なぜ女がクルマを欲しがるのか、俺にはまったく理解できない。俺の故郷の女どもも意味不明のおそろしい連中だったが、東京の女ときたら、もはや同じ人間という種族だとすら思えない。まるで異星人だ。これほど膨大な数のクルマが街中にあふれかえっていれば、街が灼熱地獄になるのも当然だろう?
こうして夜空を見上げても、星はほとんど見えない。スモッグが東京の上空を覆い尽くしているのだ。真っ黒な夜空の下で、仮装パーティに参加中のナマハゲみたいな格好の男女が、排気ガスと騒音を撒き散らす公害製造機の中にひきこもって「愛」を囁き合っているのだ。
神は旧世紀にすでに死んだが、もし俺が神だったら、こんな腐った街は炎で焼き尽くすか、洪水ですべてきれいさっぱり流してしまうところだ。
「吐き気がする」
目の前の現実を凝視していると、どんどん魂が汚れていく。もちろん魂だけではない。薄汚れた空気を吸うことで肺から全身の血管までが汚染されていく。
俺は脆弱なのだ。こんな野蛮な街の半人間どもとは、心身のつくりが違う。デリケートなのだ。
野蛮人どもめ。未開の呪術民族どもめ。快楽に己を見失って地球環境を破壊しつづける化け物どもめ。
とはいえ、こんなおそろしい東京にも、まともな人間だって存在する。たとえば、俺が転入した大学の「二次元妹研究会」に所属している今岡真人という男。真人は「キモメン」で「オタク」だという。
「キモメン」とは、「顔がブサイクで女にモテない男」という意味だ。
真人はさほど珍妙な顔をしているとは思えないが、この街では顔の構造上に生じるささいな個性を「醜い」と断じるらしい。そして、外見が「キモメン」の男は、絶対に女に相手にされないという。
東京では、男と女がお互いに交尾する相手を探しまわり、生殖目的でもなんでもない快楽のためのセックスをし、しかもその行為を奴らは「恋愛」だと言い張っているわけだ。ところが「キモメン」は絶対に相手にされない。
むろん俺の目から見れば、どいつもこいつも同じような顔にしか見えない。顔などは個人を識別するための記号にすぎない。「イケメン」と言われている男と真人の顔に、それほどの違いがあるのだろうか? 俺にはわからない。
俺は奴らに言わせると「イケメン」ら

しいが、俺も真人も、目が二つ、鼻が一つ、口が一つ、耳が二つ。同じだ。多少、頭蓋骨の形が異なっていたり、パーツの配置が違ったりするが、だからどうだというのだろう?

さらに真人は「オタク」という人種らしい。オタクがどういう人種なのか、俺はよくわかっていないのだが、どうやらアニメやゲームや漫画といった芸術に造詣の深い人間を指すらしい。

なるほど「二次元妹研究会」の面々は、いつも集まってアニメを鑑賞したりゲームや漫画の感想を言い合ったり、フィギュアと呼ばれている仏像を製作したりしている。

俺は当初、この街の人間は原始人レベルだと心底馬鹿にしていたが、「二次元妹研究会」の面々と出会って反省し、心を入れ替えた。

研究会の連中は非常に優れた審美眼を持った芸術家的感性の持ち主ばかりだ。彼らは理知的だ。芸術を愛する心を持った立派な「人間」と言っていいだろう。しかも彼らは、化粧だの髪型だの服装だのクルマだのといった表層的な文化には興味を示さない。真に重要なものは「心の中」にある、と知っている。

こんな原始的で野蛮な社会の中で、そのような価値観を持ちつづけて生きていられること自体、賞賛に値する。真人もその立派な人間の中の一人だ。

ところが、そのように精神世界に価値を置く人間たちを、この街の大勢の連中が「オタク」と呼んで差別している。

自分たちよりも理知的な精神を持った人間を差別しながら、自分の性欲に「愛」という偽物の名前をつけて刹那的な快楽に身をゆだねるサル以下の連中が、この街では「偉い」種族なのだ。まるでSF小説に出てくる、価値観のすべてが逆転した悪夢世界そのものだ。

そして俺は、そんな真人に「彼女」をつくらせないといけない。

だが、それは実に難しい。この街の女の多くは救いがたいぐらいに愚かで、テレビと雑誌の情報に洗脳されたまま目を瞑って闇を彷徨っている禽獣。俺がいくら真人に彼女をあてがおうとしても、女どもは口を揃えて「明良君が好き」と言い出す。

馬鹿か、お前ら?

まるで示し合わせているかのように同じ反応、同じ言葉、同じ目つき。発情した動物のような浅ましい目つきで俺の顔を見るな、心が汚れる!

唯一の光明といえば、真人が億万長者だということだけ。真人は早くに両親を失い、莫大な遺産を相続して一人で大邸宅に暮らしている。

東京は表向き「民主主義」が統治する都市なのだが、おそろしいまでに貧富の差が拡大していて、実体は資本を持つ階級となんの資本も持たない階級とに二極化されている。

そして真人は資本階級だ。大昔の言葉で言えばブルジョワジーだ。で、この街

の女どもは「金」を「愛」してやまない原始部族だから、真人の持っている金をちらつかせれば、少しは可能性が高くなるというわけだ。
だがもちろん、そんな女を真人にあてがっても意味がない。
それは「真の愛」ではないからだ。
俺は真人に「真の愛」を与えなければならない。あいつの財産目当てに股を開く素人売春婦を真人に与えても救われない。そもそも真人は億万長者だからセックスには困らない身分なのだ。
売春婦なら吉原に行けばいくらでも買える。にもかかわらず、真人は未だに童貞を守っている。「真の愛」「本当の恋愛」「本当に好きな人に童貞を捧げたい」というのが真人の信念だった。信念というよりは、魂の叫びとでも言えばいいだろうか。
なんとストイックな。なんと誠実な。
なぜ真人が女に蔑まれ、俺ごときがモテなければならないのか?
俺はこの街の女のほとんどは人間の皮を被った豚だとしか思っていないのに、奴らにはそれがわからない。この街の女は、男のしゃっつらしか見ていないのだ。
俺はガウンを羽織ってソファに腰掛け、目を閉じて前頭葉に意識を集中した。
「さて、『真人に彼女をつくらせる計画』をそろそろ進めないと」
もっとスマートなプロジェクト名を考えるべきなのだが、面倒だ。あまりにも難易度が高いので、名称のことに頭を使う余裕がない。
しかし、まもなく……。
ゴンゴンゴン!
玄関のドアを叩く音が廊下に響き渡った。
こんな夜に来客か。しかも、客はかなりあわてているらしい。
何かいやな予感がしたが、俺はとりあえずドアを開けてみた。
「たっ、助けてくれ、明良。僕は女に殺される!」
やはりというか、息を切らした真人が転がり込んできた。
俺は真人をリビングに案内すると、とりあえず座らせて落ち着かせた。
「はぁはぁ、もうダメだ。ごめんよ、ごめんよう。明良まで巻き込んでしまうつもりなんてなかったんだけど、もう、行くところがなくて」
「落ち着け。何があったんだ」
「実は、信じてくれるかどうかわからないけど。僕、宇宙人の女の子に命を狙われているんだよ!」
俺は軽い眩暈を覚えた。
「ちょっと待て。いいか、宇宙人なんて存在しない。そもそも、なぜそいつが宇宙人だってわかったんだ?」
「だって、宇宙人みたいな服を着てるし、宇宙ガンを持ってるんだよ! ドライヤーの先に剣玉のボールみたいなものがくっついていて、エリマキトカゲみたいなフードが備わっている銃だよ。で、その剣玉ボールがオレンジ色に光ってるん

だ。あんな恥ずかしいものを真面目に作る地球人なんているわけないよ、宇宙人に間違いないよ！　日本語しゃべってたけど」

　真人はかなり混乱している。俺が感じていたいやな予感はどうやら的中しそうだ。厄介な事態になりそうだ。

「いきなり道の真ん中で襲われたんだよ。自宅に逃げ込む暇もなかったので、僕は桧山さんの家に助けを求めたんだ」

　桧山玲於奈……俺と真人の友人の一人だ。「二次元妹研究会」唯一の女性部員で「オタク女」という種族に所属している。オタク趣味を持っているぐらいだから他の女と比べればずっと理知的な女なのだが、やはり玲於奈もキモメンは苦手だったらしく、先月部室で真人に告白されたとき、

「ごめんなさいっ、私、坪井君が好きなの！」

　と即座に断りを入れたという。

　結局、この街の女は、網膜で思考することしかできないのだ。それでも他の女のように、

「私、キモオタにコクられちゃった。きんもーっ！」

　と学校中に言いふらしたりしないだけ、まだ玲於奈はずっと「まし」な女なのだ。

　もちろん、俺は彼女に好かれるような行動など、何もした覚えがない。むしろ進んで嫌われようとしているぐらいだ。何しろ奥手な真人が、彼女を好きだと自分から言い出したのだから。俺が彼女に好かれている場合ではない。

「でも、桧山さんに『わけのわからないことを言って私の部屋に入って来ないで』と怒られて追い出されちゃって……。もう明良のところしか……ごめんよ、ごめんよ」

「まあ、宇宙人に狙われてるなんて言い出したら、普通追い出されるよなぁ」

「そ、そうだよね。ごめん、僕、自宅に帰るよ。途中で宇宙ガンに撃たれて蒸発しちゃうかもしれないけど、でも、明良に迷惑かけられないし。僕が自分勝手だったよ！　ごめんよ、ごめんよ」

「いや、俺は別にかまわないよ。家に戻るのが危ないというのなら、しばらくここに隠れていればいい」

「ええっ？　明良、君はなんていい奴なんだ。でも、そう言われると、ますます帰らなければならないという気分になるね。友達を危険に巻き込むなんて、やっちゃダメなことだよねっ！」

　真人は玄関口まで戻って、靴を履きだした。本当に帰るつもりだ。まったく、どこまで人がいいのやら……。

「いや、帰らなくていいから。危ないからここにいろよ」

「たぶんあまりにモテないんで宇宙人少女の幻覚を見ただけだよ、大丈夫だよ。僕はまだ現実と妄想の区別ぐらいついているから。そう、あれは幻覚なんだ……ぐはっ！」

　真人がしゃべり終わらないうちにドア

が乱暴にぶち開けられて、オレンジ色の光沢を放ちつつもヌメッと濡れたようなエナメルの全身スーツに細い肢体を包んだツンデレツインテールツリ目の「宇宙少女」が現れた。ちなみに「ツンデレ」という言葉は最近、二次元妹研究会で覚えた。

　ドアの角で頭を打った真人はよろよろと倒れ込み、尻もちをついた。その真人を足蹴にし、胸の上にまさしく「宇宙ガン」としか形容しようのない恥ずかしいデザインの銃を突きつけた「宇宙少女」、いや「未来少女」が、ベタベタな日本語で怒鳴りはじめた。

「さあ、死ぬのよ。死ね、さっさと死ね！　あんたさえこの世からいなくなれば、世界は救われるのよ！」

「いやだ、いやだあっ。どうして僕がっ？」

「あんたみたいなダメ人間、どうせ生きてたって誰にも愛されずに誰をも愛せずに虚しく人生を終えるしかないのよっ！　だからって自分が愛されないからといって、世界を道連れにしようだなんて許せないわ！　そういうのを逆恨みっていうのよ！」

「だから、誤解だって……。僕は身に覚えがない！」

「あんたが世界を滅ぼすのよ、今岡真人！　いい？　顔も醜い奴は、心も醜いのよっ！」

「あっ、あんまりだあっ！」

　……というわけで、話は現在に戻る。

　このツンデレツインテールツリ目のエナメルスーツ少女の正体を、俺は一目で喝破(かっぱ)した。

「教えてやろう真人、こいつは宇宙人ではない！」

「ええっ、じゃあなんなんだ？　特撮系エナメルスーツマニア？」

「こいつは、未来人だ！」

　生意気そうな笑顔を浮かべて真人にストンピングを浴びせているツインテール少女の顔めがけて、俺はビシッと人差し指を突き立て、その正体を暴露してやった。

　たちまち、ツインテールエナメルマニア少女は真っ青になってあわてはじめた。

「ちょっ、ちょっとっ？　なっなんであんた、あたしの素性を知ってるのよう？」

「やはりな。そのケバケバしくて無駄に未来派ぶったファッションセンス、いくらこの街の女が狂っていても、そんな恥知らずな格好はしない。故にお前は未来人、決定だ」

「僕には全然わからないよ！　どっちにしても非現実的な存在であることに変わりはないよっ！　いったいどうなってる……ぐはっ！」

　頭を抱えて叫ぶ真人の顔面に、ツンデレ未来少女がまた下段蹴りを入れた。

「とーにーかーくー！　あたしの仕事を邪魔しないでよねっ。ちゃっちゃっとこのダメ人間を殺して未来に帰るんだか

らっ！」
「ダメだ、ダメだ！　このまま手ぶらで帰れ！」
　三人で噛み合わない口論をつづけていると、いつの間にかもう一人、客が増えていた。地味なデザインの清楚なワンピースを着て、麦藁帽子と眼鏡の似合う女の子……桧山玲於奈だ。ついさっき真人を追い出したはずの玲於奈が、なぜここに？
「こんにちは。あれっ、どうして今岡君がここに？　それに、その変わったコスプレ姿の女の子は？」
「ああっ、桧山さん、来ちゃダメだよ！　この子は宇宙人で、しかも僕を殺そうとしてるんだよ。巻き込まれちゃ危ないよっ、早く逃げてっ」
「違うぞ、真人。この女は未来人だ！」
「あー、もう、次々と邪魔が入って、やる気なくなってきたぁ！」
　一時休戦。
　俺は三人をリビングルームに招き入れた。そして、ひとまず未来少女の言い分を聞いてから今後のことを相談しようと提案した。最初は問答無用で真人を殺すつもりに見えた未来少女だったが、意外にもおとなしく承知して部屋に入って来た。
「あたしの名前は新庄美優。あんたの言うとおり、未来からやって来たのよ。で、そっちのキモオタの名前と素性は詳しく知ってるんだけど、あんたたち二人は誰なのよぅ」
　二人がけのソファを一人で占領して腹ばいに寝転がった未来少女・美優が、ジロジロ～とぶしつけに俺と玲於奈の顔を交互に見比べてきた。
「俺は真人の友達で坪井明良。こっちの眼鏡の子は俺らの共通の友達で、桧山玲於奈。三人は同じ大学のサークルに所属している友人なんだ」
「うわ、眼鏡かけてる女、初めて見た。ダサッ……」
「こ、この人、怖いわ、坪井君。ありえないコスプレしてるし、妙な銃を腰にぶら下げてるし。もしかして、アレ？」
　玲於奈と美優の間で、冷たい視線の応酬がしばらくつづいた。
　なんだ、この緊張感は。背中に寒気を感じた。
「え、えっと、その、当事者の僕としては、僕が死ななければならない理由を知りたいんだけど……わけがわからないうちに殺されるのだけはいやだよ」
　部屋の隅で四人分のお茶を注いでいた真人が切り出した。
「そんなこと、どーでもいいじゃん。あんた、どうせ死ぬんでしょ？」
「そ、そうだけど……」
　ギロリと美優に睨まれた真人は、力なくうなだれて固まってしまった。
　もちろん、俺としては黙って真人が死刑を執行されるのを待っているわけにはいかない。だが相手は宇宙ガン（正式名称は知らない）を持っているから、素手

で立ち向かうのは危ない。使える武器は全部、倉庫に隠してある。美優が見ている前で取り出すのは無理だ。そこで俺は、携帯電話のメールを受信するふりをして密かに救援を呼んだ。間抜けにも美優は気づいていない。とはいえ、呼び出した助っ人がここに到着するまで、まだ少しばかり時間がかかる。俺はひとまず時間を稼ぐことにした。
「ちゃんと理由を聞かないと判断のしようがないじゃないか。お前が善か悪か、真人が罪人なのか無実なのか、説明しろ」
「うーん。じゃあ、説明してあげてもいいわよ?」
「さっき僕が頼んだときには却下したくせに、明良の言うことは素直に聞くんだね……」
「なんですって？　このキモメン、ブッ殺すわよ！」
「ごっ、ごめんなさいっ、ごめんなさいいいいっ！」
「いいから、聞かせてください。私もいったい何がどうなっているのか……」
「うるさいわね、眼鏡女！　無関係なあんたにまで聞かせる義理はないんだけど、いちいち質問されるのウザいから、しゃべってあげるわよ」
　美優の長話がはじまった。どうやら、しゃべりだすと止まらなくなる性癖があるらしい。
「この今岡真人って男はねー、今はただのひきこもり学生だけど、将来Innocent World という、と～ってもおそろしいシステムを発明することになっているのよ。Innocent World は、人間の意識を広大な仮想空間の中に取り込んで永遠に仮想世界の住人にしてしまうというシステム。昔々『マトリックス』って仮想世界を描いた古典映画があったでしょ？　あれのスタンドアロン版よ。あれのパクリとも劣化版とも言うわね」
「つまり、バーチャル空間なんだけど、ネットワークで各人の意識がつながっているわけじゃないってこと？」
「そう。太古のパソコンみたいに、一人ひとりが自分だけの世界に永遠にひきこもれるという画期的なんだか退化なんだかわからないシステムなのよ。何しろ自分以外の人間は全部コンピュータのプログラムだから、絶対に自分を傷つけたり困らせたりする行動を取らないわけ。だから、Innocent World に一度アクセスした人間は、誰一人現実には戻って来られなくなるの。みんな、死ぬまでInnocent World にログインしたっきり、羊水状の液体に満たされたカプセルの中で一生を終えてしまう。ただ夢を見ているうちに人生を終えてしまう。それがInnocent World」
「本当にそんなシステムがあるなら、今すぐ欲しいよ！　僕なんて、どうせ現実を生きてたってつらくて苦しいだけだし。それ、いくらで買えるの？　アキバで売ってる？」
「ハァ？　あんたがつくるのよ、今岡真人！　あんたは、親から莫大な資産を受

け継いでいるのよね?」
「使い道がないので使ったことないけど、たぶんね……」
「あんたはモテない恨みで根性の曲がったマッドサイエンティストに成長し、その資産を継ぎ込んで二十年後にInnocent Worldのプロトタイプを完成させてしまうのよ!」
「ええっ、なんの意味もない虚しい人生だと思ってたのに、僕にそんな輝かしい未来が? そうなんだ! 頑張ってInnocent Worldを開発するよ、僕!」
「って、あたしに励まされてどーすんのよっ。つくるな、って言ってるでしょ!」
「どうしてInnocent Worldをつくっちゃいけないんだよ? だって、僕みたいなどうしようもないキモオタのクズみたいな人間でも、Innocent Worldの中でなら幸せに生きていけるんだろ? たとえば、明良君みたいなイケメンに変身して、かわいい女の子と結婚して家族をつくって幸せに暮らしていけたりするんだろ? 現実じゃ一生しがないひきこもりの僕でも、Innocent Worldの世界の中でなら何にだってなれるんだろ? 身長一五八センチの僕でも、プライドヘビー級チャンピオンにだってなれるんだろ? 最高じゃないか! それに夢の世界なら、妄想の世界なら、誰にも迷惑をかけないじゃないか。僕だったらInnocent Worldを発明した人間にノーベル平和賞を受賞させてあげるところだよ!」
日頃はオドオドとしていて自信も覇気もない真人が、目をらんらんと輝かせて美優に食ってかかった。Innocent Worldの発明者になるという自分の運命を知って、突然「人生の意味」を見出したのかもしれない。しかも、そのInnocent Worldは、どうやら真人自身が欲しくて欲しくてしかたがないものなのだ。「永久ひきこもりシステム」……誰をも頼らず、誰にも迷惑をかけず、自分で自分自身を救うシステム。たとえその救いが単なる「夢」だとしても、真人が味わってきた地獄のような現実よりは、はるかに価値があるのだろう。
「あのねえ。みんながみんな、ひきこもりになって現実を捨てちゃったら、社会のシステムが崩壊しちゃうでしょっ! 誰がお米をつくるのよ、誰が電気を供給するのよ? 実際、あんたの発明したInnocent Worldが爆発的に普及したせいで社会は崩壊してしまったのよ、そして大戦争が起きたの! Innocent Worldを打ち壊そうとするグループ、裕福層にしか入手できないInnocent Worldを国有化して大衆に平等に分配しようとするグループ、Innocent Worldを独占しつづけようとするグループ、世界中の国が様々な派閥に分かれて争い、地球環境が汚染され、大勢の人間が死に絶え、とうとう人類は地上に暮らす反対派と地下に潜った賛成派の二つの勢力に永久に分断されてしまったのよ!」
「ええっ。でもそれは僕の責任じゃない

よ。そもそも、どうしてそんなに揉めなきゃならないんだよ？」
「こんな二〇〇七年の原始時代に暮らしているあんたには理解できないかもしれないけどねー。反対派から逃れるために地下に潜ってまでInnocent Worldにすがって生きつづけている連中ってのは、これが全員、男なのよ。わかる？　男ってのは夢みがちな動物だと古来から言われていたんだけど、夢みがちどころか妄想狂だらけだったのよ。で、Innocent Worldを打ち壊そうとする反対派の中核には女が多かったわけよ」
「女の人は現実的だもんね……」
「ま、実際にはInnocent World賛成派の女とか、Innocent World反対派の男もいたんだけどねー。歴史書によると、ブサイクな女の一部は賛成派にまわり、同様にイケメン男の多くは反対派にまわったらしいわ。でも、地下に潜ったブサイク女たちは地下帝国に入国させてもらえず地上に追い返されたんだって。そして、地上に残った男はその後突如発生した新種のウイルスによって絶滅。結果として、短期間の間に見事に男と女が地下と地上に別れて真っ二つに分裂しちゃったわけ」
美優の説明はなかなか簡潔で、真人もすぐに呑み込めたらしい。
「ってことは、イケメンって、Innocent Worldにひきこもった奴以外は将来絶滅するんだ。ざ、ざまあみろ！　やったぁ！　もしかして、そのイケメン絶滅ウイルスも、地下のもぐら男たちが発明したんじゃないの？」
「そんなことまで知らないわよ！　あたしが生まれるずっと前の話だしぃ」
「そうなんだ。でもさ。男と女が地下と地上に分かれて暮らしているのに、どうして種族が保存できているの？　男女が一緒にいないと子孫は生まれないんじゃないの？　話がおかしいよ。Innocent Worldの中で子供をつくっても、現実には子供は生まれてこないんだし。イケメンが絶滅した女ばかりの国だって同じことだろ？」
「あたしたちが暮らす地上の国では、男のDNAを大量に冷凍保存してあるから、当分の間は大丈夫らしいわ。人工授精で自分の好きなタイプの子供を産めるわけ。ただし男の子を産んでもウィルスにすぐやられてしまうから、女の子しか産めないけどね」
「じゃあ、地下の男の国は？　子供を産む役割を担う女性がいないのに、誰がどうやって子供を産むんだろう？」
「知らない。でも男たちはじわじわ繁殖していて絶滅しそうにないから、人工的に子供をつくるシステムでも開発したんじゃない？　ま、どうせウイルスが蔓延（まんえん）している地上には出て来られないから、地下で何をやっていようがどうでもいいんだけど。それに地下に潜った男の大半は、元はこの時代で言うところのキモメン、つまり劣等民族だったしね」
「僕の同胞たちは、とうとうそんな立場

にまで追い詰められてしまうのか……」
　真人はがっくりと肩を落とした。
「今っていうか、未来では地上と地下の二大国家の間で世界最終戦争が勃発しているの。わが軍は目下地下帝国に進攻中なんだけど、万里の長城のごとく張り巡らされた分厚い超合金のシールドをどうしても突破できなくて。あれさえブチ破ることができれば、ウィルスを撒いて男どもを絶滅させられるんだけどぉ」
「ひどいや。どうしてそんな皆殺し戦争をしなくちゃいけないんだよ？　男は地下でInnocent Worldにひきこもっておとなしくしてるんだろ？」
「偉い政治家が決めたことなんだから、あたしに言われても知らないってば。とにかく、このままじゃ埒が明かないということになって、過去に戻ってInnocent Worldを発明した今岡真人を暗殺してしまおうという決議がなされたわけ。Innocent Worldが消えれば地下の男たちは世をはかなんで自害するか、ひきこもりを諦めて女を求めて地上に出て来てウイルスで全滅でしょ？　いいアイデアじゃん。で、刺客として選ばれたのが、このあたし。この新庄美優様は、数千人の候補者の中から選ばれたエリートスナイパーってわけ」
「うーん、タイムマシンまで発明されてるのか。スゴイや、未来。でも、どうやって未来に戻るの？」
「えっ？　え、えーと、その。な、なんとかなるわよ！　仕事が終わったら回収しに来てくれるって言ってたしぃ」
「それに、タイムパラドクスの問題もあるしね」
「タイム腹ドッグ？　何それ？　とにかく過去に来てみたら、問題の今岡真人、あんたもキモメンなんて呼ばれてる被差別者だったなんて大笑いね。そりゃひきこもりシステムつくりたくなるわよね、アーハハハハ」
「う、うるさいなぁ……」
「この世界じゃまだキモメンって言われて笑われてるだけで済んでるみたいだけど、いずれ顔面カースト制度が法制度化されるのよ。容姿の醜い人間は国連決議で劣等民族として認定されて、大弾圧される運命なの。つまり、あんたはまだ建前だけでも平等に扱ってもらえているぶん幸せってわけ」
「ええ？　ど、どうしてそんなひどいことに？」
「民族紛争は国内暴動や終わりのないテロや絶滅戦争につながるので、民族差別は廃絶方向に向かうわけ。これはイスラム勢力との果てしない抗争に疲れ果てたアメリカが主導するの。でも、すべての人間を差別しちゃいけないなんて言っても誰も納得しない。そこで新たに人間の階級欲・差別欲を満たすために採用されたのが、いわゆる顔面カースト思想。ブサイクな人間はいくらでも差別していい、人間は容姿によって身分が決まる、という思想よ。つまり外国と争って戦うと結束されても被害も大きいから、国内

で弱い立場の人間をつくって一人ずつバラバラに分断して苛めたほうが世の中が平和になるという高度な政治的判断。わかる？」
「あ、あんまりだ！　そんな世の中になっちゃったから、地下に潜ってでもInnocent World にひきこもろうとする人間が増えたんじゃないの？」
「うーん、そうかもね。でも、キモいものはキモいんだから、しょうがないじゃん。実際あんた、ほんとキモいし！」
「うわあああっ！　こんなにかわいい女の子から、こんなにズバズバと容赦なくキモがられるなんて、さすがに生まれて初めてだあっ！　もういいよ、もうっ、死ねばいいんだろ死ねば。今すぐこのマンションの屋上から飛び降りてやるよっ！　うわあああああーっ！」
「あっ、逃げるな！　待ちなさいよ！」
　真人は泣きながら走り出して、廊下の向こうへと消えていった。美優があわてて追いかけていく。玲於奈は、いま交わされた会話がはたして現実なのか判断しがたいといった表情で固まっていた。
「玲於奈、危ないからここで待っていろ。真人を連れ戻してくる」
「で、でも、あの女の子、危ないわよ？」
「俺なら心配ない。助っ人を呼んである」
「助っ人？」
　そう。そろそろ駆けつける頃のはずだ、俺の相棒が。
　俺はベランダに出るや否や、闇の中へとひらりと飛び降りた。
　背後から、玲於奈の悲鳴が聞こえてきた。

2　十九歳の密かな欲望

　俺の体は重力に引かれて落下していく。このまま無傷で着地できるほど俺は器用ではないが、「助っ人」が間に合ったので問題ない、たぶん。
　その助っ人、上琉ぐりんはネコ耳、片目眼帯、エプロンメイドドレスという暗闇でも目立ちすぎる姿で俺の真下……駐車場のアスファルトの上に突っ立っていた。
「うわ、わ、何やってるんですかっ、明良先輩っ」
「ぐりん、屋上まで俺を抱えて飛べ、急げ！　真人が危ない」
「ええっ、そんなこと言われても」
　実に頼りにならなさそうな助っ人ぐりんは、背中に背負ったランドセル型のバーニアを噴射させると、垂直に飛び上がった。加速しながら、落下中の俺と交錯し、そして……。
「はうーっ、キャッチしそこなってしまいましたっ、さようなら明良先輩っ！」
「ばっ、馬鹿ぁーっ！　俺をキャッチしろっ！」
「でもでも、真人様がっ」
「先に俺を助けろっ！」
「はうあーっ！　ボクは、ボクは、どうすればーっ？　思考回路はショート寸前ですっ！　参考文献『あれか、これか』

キルケゴールっ！」
「そんな葛藤するような問題かぁっ！　早く助けろっ」
「わかりました〜」
　猛スピードでUターンしたぐりんは落下していく俺に追いつき、俺の体を捕まえて小脇に抱えると、再び屋上めがけて上昇しはじめた。
　あと〇・三秒ほどぐりんが躊躇していたら、俺は今頃コンクリートの上に潰れたトマトのように飛び散っていただろう。
　……しかし、よくも地面に激突する前にこれだけ会話を交わせたものだ。
「階段を使って昇ればよかったじゃないですか、明良先輩。ボクが駆けつけなかったら死んでたじゃないですか」
「そんな余裕はない。真人が未来から来た刺客に追われている！」
「げげっ！　刺客ですかっ？　ボク、帰っていいですか？」
「ダメだ、お前が真人を守らないでどうするんだ！」
「ううう、先輩はボク使いが荒いです」
　泣き言を言いながらぐりんはマンションの屋上まで急上昇し、フェンスを飛び越えてコンクリートの床の上に着地した。勢いあまったぐりんが着地に失敗して前のめりに倒れたため、脇に抱えられていた俺もゴロゴロと投げ出された。ぐりんは、どこまでも頼りにならない。が、今、あの「宇宙ガン」に対抗できるのは、ぐりんだけだ。
「なっ、何よ、あんたたち。まだ邪魔するつもり？」
　宇宙ガンを構えてフェンスの角のコーナーに真人を追い詰めていた美優が、呆れ顔で俺とぐりんを交互に眺めている。美優は、撃たれたくなければフェンスを越えてダイブしろと真人に迫っていたようだ。どうやら自分の手で真人を撃ち殺すのは気がひけるらしい。美優が躊躇していてくれたおかげで間一髪間に合ったのだといえる。
「あれっ、この女、さっきの眼鏡と違う!?　なっ、何よ、なんなのよ、頭にネコ耳、片目に眼帯、身体中に包帯、半裸とも言っていいようなエプロンメイドドレス、脚にはルーズソックス、首には鉄の首輪と巨大な鈴、お尻にはネコのしっぽっ？　さらにさらに、頭からはアンテナみたいな一対の触覚毛髪……って、背中に赤いランドセル背負ってるしっ、アホみたいにチチでかいしっ！　いったいなんなのよ、この変態女はっ？」
　美優はぐりんのコスチュームにショックを受けたらしい。そりゃ、そうだろう。俺もまったくわけがわからない。
「そういうお前も、おかしなエナメルスーツを着込んで、恥ずかしいデザインの銃を振りまわしているじゃないか」
「あっ、あたしのはスナイパーの制服なのよっ。機能性重視っ。こいつの格好は明らかに機能性を無視、逸脱、あたしの理解の範疇外だわっ！」
「うーん、説明しましょう。ボクのコス

チュームは～、二〇〇七年の東京のオタクさんが一番好きなパーツをできる限り再現して寄せ集めてつくった特注品なのです。つまり、ボクの魅力で真人様をメロメロの萌え萌えにするために、ボクはわざわざこんな人間性を放棄した姿で未来からやって来たのですっ。参考文献『知覚の現象学』メルロ＝ポンティ」

　ぐりんが腰に手を添えて大威張りしはじめた。この危機的な状況を理解できているのだろうか。

「あっ、萌え萌えってのは二〇〇七年東京用語で、胸がきゅんきゅんトキメいちゃう好き好き大好き愛してるっていう意味ですっ。とりあえず真人様を殺そうとする人は、ボクがブチコロシマス！」

「じゃ、あんたも未来人っ？　でも、あんた、チチでかいし、女でしょっ？　女のくせに、どうして真人に味方するわけっ？」

「それは～。真人様は、ボクのご主人様だからですっ！」

「ご主人様ぁ？　そんな言葉、死語よ、死語っ！　なんでこんな旧世紀の遺物みたいな男尊女卑思想に染まった女が未来に残ってるのよ？」

　美優に追い詰められてコーナーに押し込まれ、ガタガタと震えていた真人が、突然降って湧いた人生最大の幸運に目を輝かせた。

「ええええっ？　ぼ、僕が、君のご主人様だって？」

「イエス、マスター、なのです」

「そ、そんな。ついさっきまで、このまま飛び降りて死ぬつもりだったけど、やっぱり死にたくないっ。美優様、どうか僕を見逃してくださいっ。人間彼女さえできれば、絶対にInnocent Worldなんてつくりませんからっ！」

「あーっ、うるさいっ！　あんた、からかわれてるのよ。あんたみたいなキモメンが、こんなネコ耳ネコ尻尾完全装備のエロボディ美少女のご主人様になれるわけないでしょっ！　そもそも奴隷だのご主人様だのなんて不平等な発想自体、女を馬鹿にしてる罪で死に値するわっ。というわけで、やっぱ、あんた、殺すっ！」

「うわーん、助けてよう」

「わかりました。真人様を殺そうとする悪い奴はブチコロシマス！」

「ふん、そんなわけわかんないゴテゴテした格好で、何ができるというの。チチだって重くて邪魔だろうし……ぐはっ！」

　ぐりんが予備動作もなくいきなり加速して突進し、美優の身体に体当たりをした。俺の目にもぐりんの動きはまったく見えなかった。美優は転がりながら体勢を整え、横っ飛びに飛ぶと同時にぐりんめがけて宇宙ガンを撃った。レーザーだ。しかし、ぐりんはレーザーが届くよりも早く、背中のバーニアを噴射させて、美優の視界から瞬時に消えた。

「上っ？」

　美優が上空めがけてレーザーを乱射するが、ぐりんは美優の背後に音もなく

立っていた。
「しまっ……」
「真人様のためなら何をしてもいいのだ、外道成敗（げどうせいばい）！」
　ぐりんがランドセルから伸びているソードに手をかけた。ぐりんがあのソードをひとたび抜くや否や、刀身が瞬時に高温を発し、美優の肢体を強化スーツごと真っ二つに焼き斬ってしまうだろう。もはや逃げられないと諦めた美優は両手で顔を覆い、腰を抜かして力なくへたり込んでしまった。
　ぐりんが実は強いとは知っていたが、まさかこれほど強かったとは。
だが……。
「ダメ、ダメだよ、美優様を殺しちゃ、ダメだって！」
　意外なことに真人がぐりんの腰にすがりついていた。
「なぜですか、真人様。真人様の敵である人間は殺さなければならない。これがボクに与えられたルールその二。しかし、真人様に逆らってはいけない。これがルールその一。ボク、判断に困ります。あうあ〜っ、ボク、思考回路がオーバーヒートします！　さっ、参考文献『罪と罰』ドストエフスキー？」
　ぐりんが躊躇している隙に、美優は素早くぐりんの間合いから飛び出すと、床の上を側転しながら体重を乗せた飛び蹴りでフェンスを突き破り、そのまま夜空へとダイブしてしまった。
　油断した。逃げられた。まさか飛び降りるとは！　おそらくあの強化スーツは、この程度の高さからなら落下しても人体を保護できる耐久性を備えているのだろう。
「馬鹿っ、あいつを逃がしてどうするんだ、ぐりん」
「しかし、真人様が〜。うあーっ、ボクはどうすれば、どうすれば。あうあうあうあうあうあう。参考文献『嘔吐』…サル…トル…」
「ああっ、ぐりんさんが口から泡を吹いて倒れてしまった。いったい、僕が何をしたというの？　もうわけがわからないよっ！」
「二つのルールが衝突してダブルバインドの無限ループに落ちたんだ。とりあえず部屋に連れて帰ろう」
　美優はすでに逃げ去っているはずだが、もしまだこの場を見張られていたらまずい。俺は丸腰だし、いま再び襲われたら真人を守りきれない。
　俺はぐりんを抱え上げると、真人を連れてもう一度俺の部屋へと戻った。リビングに入ってみると、玲於奈もまたソファの上に突っ伏して失神していた。さっき俺が飛び降りるのを見て、たぶん俺が自殺したと思ったのだろう。俺は階段を使うよりもぐりんに拾わせるほうが早く屋上に着くと判断して飛び降りたのだ。一刻を争う事態だったので玲於奈に説明している時間がなかった。
　玲於奈はそのままソファの上に寝かせておくことにして、俺はぐりんと二人で

倉庫にしまっていたある機械を引っ張り出してきた。初期型のInnocent Worldだ。現行のInnocent Worldは羊水状の生命維持スープの中に人間を浮かばせる大掛かりな生命維持カプセルとして設計されているのだが、これはヘッドセット一体型のゴーグルを頭部に装着するだけでInnocent Worldにログインできる簡易タイプだ。長時間アクセスしつづけているとカロリーを摂取できないなどの弊害で生命機能が低下するため、俺の故郷ではもう使われていない骨董品だ。本体は人間一人が入れる程度のサイズの卵型カプセル。中には椅子が一つ据えられている。カプセルの形状はいかにも「未来の機械でございます」と言わんばかりの古めかしい流線型デザイン。計器類が目立たぬ場所に隠れているので使いづらいことこの上ない。

　真人は目を白黒させて、

「明良。こ、これは何っ？」

「旧式のInnocent Worldだ。これを使えば数時間だけだがInnocent Worldにアクセスできる。今では使われなくなった複数ユーザーの同時ログイン機能も搭載しているから、多人数で同時に同じInnocent Worldに入ることができる」

　俺はさっそくゴーグルを頭に装着してログインする準備を整えた。

　カプセルの中は狭いうえに椅子が一つ置かれているだけなので、二人一緒に入ることはできない。だがゴーグルさえ起動させればログイン可能なので、俺はカプセルに入らず自室のソファの上に座ったままだ。

　じゃあ、カプセルは何のためにあるのかというと、アクセス中は肉体を動かすことも外界の情報を認識することもできないので万一の安全に備えてカプセルに閉じこもったほうが安全だという理由らしい。

　実際問題、今回のアクセスは短時間で片づけないといけない。いつまた美優が襲ってくるかもしれないのだ。

「真人、さあ、ゴーグルをつけてカプセルに入れ。椅子に座れ」

「あの、今さらだけど、もしかして明良も未来から来たの？　いったいなんのために？」

「それはInnocent Worldの中で説明する」

「ほ、本当に大丈夫かなあ～？」

　俺はゴーグルの耳元のタッチセンサーに触れて、ログインした。

　一瞬、視界が真っ白になる。

　だが、時間とともに少しずつ感覚が蘇ってくる。

　見慣れた光景が目の前に広がった。

　広大な鍾乳洞の中に、様々なビルが乱立している。ただし、地面から上へと伸びているのではなく、いずれのビルも天蓋から下に向かって伸びている。

　天蓋には地上の女どもが何十年かけて掘り進んでも突き破ることのできない分厚い超合金の層が幾重にも重ねられて敷かれている。

足元の不安定な岩盤の上に建物を建てるよりも、この合金層を土台にしてさかさまに建てたほうがビルが安定するのだ。

足元に広がっているのは、地下世界の最下層部となる大地……スラングで言う「地上」。ここには日光がなくても自生して酸素を供給してくれる植物が大量に植えられ、公園などが整備されている。

地下都市では空気が汚染されると一瞬にして致命的な災害につながる恐れがあるので、排気ガスのような危険な環境破壊成分はまったく排出されていない。もちろん原子力もない。核廃棄物を捨てる場所がないからだ。

従って、地下都市は地熱発電と地下水脈を使った水力発電によってすべてのエネルギーを賄(まかな)っている。

人間の数に対してエネルギーの量が不足しているので、個人の部屋にはいわゆる電化製品の類はまったくない。たった一つ、Innocent Worldを除いて。

ところが、実はInnocent Worldにログインしない人間も大勢いる。彼らは二人一組のカップルになって、緑豊かな公園のそこかしこを歩いている。

カップルの構成は、一人は男、もう一人はたいていの場合、女だ。

しばらく俺は公園の中央にある噴水のほとりで真人を待った。

「うわっ、こ、これが仮想空間？　まるで現実と変わらないじゃないか！」

ようやく真人の姿が隣に現れたのを確認して、俺は話しはじめた。

「あまり時間がないので、手短に話す。この仮想世界は、現実の地下帝国をそっくりそのままシミュレートしたプログラムだ」

「なんだか平和だね。自動車も走ってないし、工場の煙突も見えないし、緑でいっぱいだし。僕が生きている世界よりもずっと空気がきれいなんじゃないかなあ？」

「エネルギーが足りないから、無駄な消費活動や不必要な生産活動は厳格に禁止されている。俺たちがおおっぴらに生産しているものと言えば、Innocent World、衣食住の最低限の必需品、そしてフェミィだ」

「フェミィ？」

「この公園を見ろ。俺たち以外にも人間が大勢歩いているだろう」

「そういえばそうだね。しかもアベックばかりだ。これじゃ、今の世界の公園と同じじゃないか。男も女も無機質なモノトーンの服を着ている点が僕の世界とは違うけど。でも、地下帝国には男しか住んでいないんじゃなかったの？」

「全員が全員Innocent Worldにログインしたっきりでは、都市の機能を維持することができない。そこでかつて地下に帝国を建国するにあたって、当時の評議会の連中はルールを定めたんだ。Innocent World賛成派の男だけがInnocent Worldにログインする権利を与えられ、Innocent World反対派の男

は現実世界を生きつづけて国家と都市の運営に従事すべし、と」
「そういえば、反対派の男ってのもいたんだね。でも、反対派まで一緒に地下に潜ったのはどうして？」
「Innocent World反対派の男には、東京風に言えばイケメン系とキモメン系という二系統の人種がいた。そのうちイケメン系の反対派はほぼ全員が地上に残って女と共存する道を選んだが、キモメン系はInnocent Worldに賛成しようが反対しようが、いずれにせよ女とイケメン男の連合軍に狩られて殺される運命にあった。だから、否応なしに地下に潜らざるを得なかったんだ」
「じ、人種って」
「美優も言ってただろ。俺たちの世界では、肌の色や瞳の色では人種を分類しない。そのような野蛮な差別は大昔に廃絶された。その代わりに容貌が美しいか醜いかによって人種を分類していたんだ」
「ちょっと待って。これって全部、僕の妄想なんじゃないの？　キモイ、キモイと言われつづけたことによって『僕はキモメンなんだ』という強迫観念が増大して、とうとうありもしない悪夢のような幻覚が見えるように……」
「まあ、最後まで聞け。これが妄想ではなくて現実だということをわかってもらうために、Innocent Worldを見せてるんだぞ？」
「ああ、そうか。そうだよね。この機械こそが『Innocent Worldは現実に存在する』という動かぬ証拠だよね。疑ってごめんね」
　真人は本当に人がいい。
　俺としてはありがたいはずなのだが、お人よしが高じてさっきのように美優を見逃せなんて言い出すので、よくよく考えると実に困る。本人に悪意がないぶん、かえって厄介だ。
「地下に避難して来た元Innocent World反対派の男たちは、帝国の建国時に現実世界の維持を担当する役割を与えられ、シベリアンという階級名をつけられた。俺はそのシベリアンの子孫なんだ」
「でも、地下に女はいないはずじゃなかったっけ。それじゃ、子孫は生まれてこないでしょ？」
「そう。人間の女はいない。かつてはInnocent Worldを求めて地上から地下へ亡命しようとする女も大勢いたが、俺たちの先祖が超合金のシールドを地殻の中に何重にも敷き詰めて、絶対に女が入って来られないようにしてしまったからな。ところが、Innocent Worldにアクセスもできず現実の女もいないという状況が数年つづくと、理性を保てなくなって発狂したり自殺したりするシベリアンが続出しはじめ、大規模な暴動もたびたび発生した。さらに子孫がまったく増えないので、人口の減少が大問題となった。そこで、これらの問題を解決するために導入されたのがクローン出産制度およびフェミィ制度だ」
「フェミィ？」

「公園を歩いているアベックを見ろ。男も女もみんな美しいだろう。この男たちの先祖はブ男だったのに、どうして美しくなったのだと思う？」
「そうだね。どうしてかなあ、整形？」
「違う。あいつらは全員、政府の人口統制機関がつくったクローンなんだ。ブサイクな人間はキモメン出身と言われて差別されるから、遺伝子操作で全員の顔を平等に美しくつくってあるんだ。だから今ではもう顔の美醜の概念そのものがなくなってしまった」
「『顔面平等』なんだね！　羨ましい世界だなあ～」
「Innocent Worldにアクセスできないシベリアンは、みなバイオ技術でつくられた人造女性『フェミィ』を一人与えられる。そのフェミィを妻にして生きていくんだ。この改革によってシベリアンは性欲や愛情といった人間的欲求を現実で満たし、Innocent Worldシステムの維持のために働きつづけることが可能となったんだ。そして今では、シベリアンもInnocent Worldも全員クローン技術によって人工的に産まれてきた男ばかりというわけだ。ついでに、俺たち男もフェミィも、性器は持っているが生殖能力は持っていない。完璧な人口統制を実現するためだ」
「ええっ？　じゃあ、明良はクローン人間で、ぐりんさんは明良の奥さんなの？」
「いや、俺は独身だ。俺は二〇〇七年の東京に飛んでお前を守るという任務を遂行するためだけに生産され、育てられてきた。だから俺には俺専用のフェミィもいない。ぐりんは、お前の妻になるためにつくられた特別製のフェミィだ」
「僕の？　ど、どうして？」
「俺の任務は、ただ刺客からお前を守るというだけではない。もう一つの重大な任務がある。それは、お前の才能をInnocent Worldの開発だけではなく、バイオ技術の方面にも使わせて、世界を俺たち人類にとってもっとマシなものに変えるという任務だ。……かなりしゃべったな。そろそろログアウトするか」
　真人は興味深げにフェミィたちの顔を観察していたが、去り際にはっと悟ったかのように目を見開いてつぶやいた。
「そういえば、歩いている女の子たちの表情が、みんな、ぐりんさんに似てるね。不思議ちゃんっていうか、心ここにあらずっていうか、感情が乏しい感じがするよ」
「そうなんだ。問題はそこだ」
　無表情なぐりんが紅茶を注いでくれているのを見ながら、俺と真人はソファに並んで座った。
　もう一つ部屋に備えつけてある来客用のソファは今、眠っている玲於奈が占領している。
「Innocent Worldは仮想世界にすぎないが、キャラクターは全員リアルな人間と寸分たがわない人格を持っている。これは、真人、お前がつくった最初のAI

プログラムが完璧なものだったからだ。そして未だにInnocent Worldの根幹をなすAIプログラムのシステムを理解し解読した人間は現れていない。真人、お前を除いて」
「へえー。でも……、僕、そんな天才じゃないよ？」
「それに対して、地下帝国のバイオ科学者たちがつくったフェミィは、生身の身体を持っている点ではInnocent WorldのAIよりも優れている。だが、肝心の人格が薄っぺらいんだ。あまりに未熟で不完全なんだ。シベリアンは長年、安っぽい擬似人格しか持たないフェミィの妻との暮らしに耐えながら、自分たちは現実の人間と暮らせているのだから、ひとりぼっちでInnocent Worldにひきこもっている連中よりもマシで幸福なのだと自らに言い聞かせてきた。しかし、ときおり法律を破って死刑覚悟でInnocent Worldにアクセスするシベリアンが現れる。そういう奴らはみな死刑執行の寸前まで『Innocent Worldは法悦境だった、俺は真実の愛を見つけたんだ』と叫びつづける。今ではシベリアンはみんなフェミィと暮らしながら現実の世界を管理させられている自分の運命を呪い、憤っている。もはや、誰もがシベリアンをやめたがっており、新たに生まれた連中もシベリアンになりたがらない。このままではInnocent Worldの住人を皆殺しにしようとかInnocent Worldシステムそのものを破壊しようとか言い出して暴動を起こす連中が現れるのも時間の問題だ」
「つまり、天才AI科学者になる運命の僕に、フェミィのためのAIもつくれと？」
「そうだ。Innocent Worldのほうの研究は適当でかまわない。わざわざ実物を持って来てやったんだから、これを調べれば簡単に同じものを開発できるだろう？　あまった時間で、フェミィに埋め込むAIをInnocent Worldに搭載されているものと同じレベルに引き上げるための理論、『大統一理論』を完成させて欲しい。完成した暁には、こっちの世界では『大統一理論』の痕跡を消去し、俺が理論を未来に持ち帰る。それでタイムパラドクスも回避できるし、人類は滅亡を免れるんだ」
「でも、よくわからないな。フェミィとかクローンとか言っても、人間だよね。君だってクローンなんだろ？　男はちゃんと人格を持てるのに、女の子はどうしてみんなぐりんさんみたいになっちゃうの？」
「はい、お茶ですよぉ、ご主人様！」
　ぐりんがティーカップに注いだお茶を自分の唇でふぅふぅと吹きながら真人の口元まで近づけていった。
「真人様、なんならボクが口移しで飲ませてあげてもいいけど～」
「もしかしてぐりんさんって、普通の人間として育てられていないんじゃないの？　人格操作されてるっぽいよ。突然、

参考文献がどうとか言い出すし」
「俺たち男は従来の人間と同様のプロセスを経てゆっくり成長するが、フェミィは三年で十五歳程度の肉体に成長する促成栽培生物なんだ。何しろエネルギー資源がない国だからな。そもそも、こいつらは人間じゃない。シベリアンの精神安定のための道具なんだ。時間をかけてゆっくり育てている余裕はない。そこで促成栽培だ。で、フェミィはみな、本来の人格の代替として、主人のシベリアンが設定したＡＩプログラムをインプットされるわけだ。あっ、突然意味もなく大昔の参考文献を引っ張り出すのは、単なるぐりんのプログラムの癖だ。どうも知性をひけらかしているつもりらしい」
「人権蹂躙（じゅうりん）というか、ひどいね。ぐりんさんには自分自身の意思も主体性もないってこと？」
「そうそう。ボクは真人様の命令に従うようにつくられてるんだよ。参考文献『好き好き大好き』Ｒ.Ｄ.レイン」
「ああ、そうだ。フェミィは人間の肉体を持っているが、人間ではない。身体を持ったプログラムだ。だからこそ人間と同じレベルのＡＩが、『大統一理論』が、必要なんだ」
「ひどいよ、明良。ぐりんさんだって同じ人間のはずだよ！　どうして人間として育てないんだ？　ちゃんと人間として育てれば、人間らしい人格を持てるようになるだろ？」
「資源不足なんだからしかたがない。それに、人間にしてしまうと男に反抗するだろ？　そうなれば地下帝国は破滅してしまう。かつて地上の世界が大戦争によって崩壊したように。地下帝国が滅びたら、もう人間は絶滅するしかない。だからフェミィには本当の人格は与えられない。憲法第九条で禁止されているんだ。必ずＡＩを刷り込まなければならないんだ」
「そうなんですよ、地上の女はおそろしいんですよー。まあボクは全身兵器に改造してもらってるから、美優なんてメじゃないけど」
　ぐりんはそう言いながら自分の左の二の腕をガチャッと取りはずして、肘の関節部分に格納しているナパーム弾の補充をはじめた。ぐりんは真人を守護するための特注クローンなので、全身が武器で、生身の人間の数万倍の戦闘力を持っているのだ。
「ひどいや、ひどいや。僕にはわからないよ、最初は僕を殺しに来た美優様が悪人だと思ってたけど、ぐりんさんをこんなロボットみたいにしてしまって、意志も奪って、頭の中にＡＩを埋め込んで、こんなことをして平然としているなんて……本当の悪は地下帝国の男たちなんじゃないの？」
　どうやら真人は未来の世界のあまりの殺伐（さつばつ）とした状況を知って、深く傷ついたらしい。涙を流しながらぐりんの肩を抱いて、ごめんねごめんね、と謝りはじめた。

「あのー、ボクは自我を持ってないから、謝罪されても反応のしようがないんだけど。参考文献『春秋左氏伝』中国人」
「僕がモテない腹いせにInnocent Worldなんかつくらなければ、ぐりんさんだって普通の女の子として生きられたかもしれないのに。悪いのは僕なんだね、僕が人類をこんな悲惨な運命に追いやってしまうなんて」
「真人、俺たちの世界がこういう状況になるまでには、実に長い戦争の歴史があった。お前一人の責任じゃないし、俺の責任でもない。それに、フェミィは貴重な資源だから擬似人権を保障されている。たとえ主人といえどシベリアンがフェミィを虐待したら刑罰を受けるし、フェミィを殺したら死刑になる。違法改造も禁止されている。ぐりんは例外で、お前を守るためにつくられた特注品なので全身兇器タイプに改造されているんだ」
「どうして。なぜそんなにまで男と女が対立することになっちゃったんだろう? 地球の上と底に別れてまでいがみ合いつづけるなんて」
「それはやはり、Innocent Worldに原因があるな。Innocent Worldとフェミィ、この二つの技術によって、男にとって人間の女は不必要になったんだ。Innocent Worldには男が求める理想の女性の人格があり、フェミィには理想の女性の肉体がある。この二つを『大統一理論』に統合すれば、地下世界は真の楽園となる。そう、お前にはInnocent Worldの精神世界とフェミィの物質世界を統合する最高のシステムをつくって欲しいんだ。真人、このままではお前は物質世界を嫌悪して精神世界一辺倒に走り、Innocent Worldをつくり上げる運命にある。だからぐりんを連れて来た。物質世界の女の肉体の素晴らしさを覚えれば、お前は変わるだろうし、未来も変わる。もっとよい方向に」
「というわけで真人様、ボク、なんでもサービスするよっ」
「断る！ 身体が人間でも、頭の中はプログラムだろっ。それも、きわめてレベルの低いプログラムだ。ぐりんさんには悪いけど、ぐりんさんとセックスしたって、結婚したって、僕の心は満たされないよっ！ 君たちだってフェミィのつくり物の単純な人格に満たされないから孤独に苦しんでいるんだろっ？ 僕だって同じだよっ！」
抱きついてきたぐりんを押しのけようと暴れながら真人が叫ぶが、ぐりんの怪力に抗（あらが）えるわけがない。真人はそのままカーペットの上に押し倒されて、ぐりんに手脚を押さえられてしまった。
「って、うわーっ、やめて、キスしないでっ！ せっかくカッコいいことを言ってたのになぁ〜」
「んー、真人様のいけずぅ。参考文献、えーと、えーと……」
「とにかく、ほんものの自我を持った女の子の愛を得られなければ、僕は何も変

わらないよっ。僕は桧山さんが好きなんだっ！　僕が生まれ変わって桧山さんを口説いて、Innocent Worldをつくらない真人間になればいいんだろっ！」
「いやしかし、それではタイムパラドクスの問題が……、歴史が変わってしまう」
「美優様はそんなこと気にせずに僕を殺そうとしてるじゃないか！」
「いや、あいつら女どもは感情で動いていて、何も考えてないから」
　そのとき、ベランダの方向から、ぱちぱちと乾いた拍手の音がした。
　美優がベランダに潜んで、俺たちの話を立ち聞きしていたのだ。
「あっ、怨敵発見、怨敵発見！　ブチコロシマース」
「わーっ、ぐりんさん、だめだってば！　待って、待って！」
「なかなか立派なこと言うじゃん、このキモメン。そのネコミミつけたヘンな女の弱点を解析し終えるまではあんたに迂闊に手出しできないから、一カ月だけ猶予をあげてもいいわよ！　その間にあんたが人間彼女つくれたら、生まれ変われたと認めて見逃してやってもいいわ」
　つまり、ぐりんに歯が立たないので真人を殺すのを諦め、真人にどうかInnocent Worldをつくるのをやめてくださいと頼んでいるらしい。美優は尊大にもほどがある性格なので、無理やり高圧的な言い方をしてしまうのだろう。なんだかかわいげがあるな。
　うん？
　俺が人間の女を、先祖代々の宿敵を、かわいいだなどと……。
　しかもこんな傲慢な性格の、地上帝国の走狗を？
　俺も真人に影響されて、気が弱くなってきているのだろうか。
「美優様、ありがとう！　僕はきっと生まれ変わって、未来をもっといい方向に変えられる人間になるよ」
「ハ。あんたみたいなキモメンが生まれ変われるわけないじゃん。鏡見てから言いなさいよね。まあ、あたしも二〇〇七年の東京を観光しておきたいし、一カ月だけ待ってあげるわ。というわけで、一時休戦ね。今夜からあたし、ここに住むことにしたから。ほら、明良、さっさと部屋を用意しなさい！」
　美優が俺のほうに人差し指をビシッと突きつけて、高らかに宣言してきた。
「ええっ？　俺のマンションだぞ、ここは」
「あんたとそのボケ女がインチキしないように見張ってあげるのよぅ。その女の弱点もリサーチしたいしぃ」
「あのな。そんな危険なことを言い放つ奴を住まわせられると思ってるのか？」
「認めないならこれから最終決戦に突入よ。今すぐ自爆して真人ごと吹っ飛んでやるぅ！　さぁさぁ、どうするの？」
「自爆だって？　そんな馬鹿な……」
　俺は断れなかった。
「わぁ、ラブコメみたいな展開になってきたね！　みんなで仲よくしようね」

「真人様がそう言うのなら、ボクもこの高飛車女とお友達になってみせるよ〜。明良先輩、さっそく美優ちゃんのお部屋をつくりましょう、おー！　参考文献『翔んだカップル』柳沢きみお」
「なっ、何をヘラヘラしてるのよ、あんたたちっ！　やい、キモメン、あんたに残された期間は一カ月なんだからねっ！　わかってんのっ?」
　と言いながら、美優はちらっと俺の顔を覗き込んできた。
　美優も俺も、なぜか視線が合ったとたんに頰を赤らめてしまい、あわてて目を逸らし合った。
　いやな予感がする。すでに十二分に想定外の事態に陥っているのだが、それだけではすまない、もっと根本的な破滅が俺に迫っている。俺自身の自我が根こそぎ崩壊してしまうようなクリティカル的な変化が起きそうな予感を、俺は感じていた。

3　Innocent World

翌朝。
　人類の未来を決定する重大会議が、俺のマンションのリビングルームで密かに開かれていた。出席者はInnocent World開発者（予定）の今岡真人、Innocent Worldの開発を「なかったこと」にするために未来から真人を殺しに来た新庄美優、真人を刺客から守りつつInnocent Worldとフェミィを融合する「大統一理論」の研究を真人に依頼すべく未来からやって来た俺・坪井明良、俺の助手で本来は真人の妻になる予定だった上琉ぐりん、そして真人に惚れられている現代人の桧山玲於奈。
「玲於奈。そういうわけだから、真人とつき合ってやってくれ」
「何が、『そういうわけ』なの？　全然わからないわ」
　俺は何度も懇切丁寧に未来の状況を説明し、玲於奈をInnocent Worldにアクセスさせてまで説得を試みたのだが、玲於奈はどうしても首を縦に振らない。
「妙なコスプレ姿で平然としている他の二人の女の子はともかく、坪井君まで未来から来たなんて信じられないわ。現代人とまったく同じ言語を使ってるし、妙な訛りもないし……」
「だから、俺は生まれたときからこのプロジェクトのために育てられてきたと言ってるだろ？　とにかく、玲於奈が真人の彼女になってくれて、そのまま結婚してくれればだな、未来は救われるんだ。真人はInnocent Worldとフェミィの二つの技術を融合し、救世主となる。つまり全人類が理想の伴侶を得られる世界が来る」
「ハ。あたしはまだ納得したわけじゃないわよ。あたしは、このキモメンに人間彼女ができればInnocent Worldを開発する動機がなくなるだろうからチャンスを与えてあげてるだけで、『大統一理論』

なんて絶対反対！」
美優が憎まれ口を叩くが、いずれにしても、真人の今後の運命がどう変わるかは玲於奈しだいなのだ。ここでさらに玲於奈が真人を拒絶すれば、さらなる混沌が訪れるだろう。そうなれば、俺と美優は命のやりとりをしなければならない。そして、ぐりんがその気になれば、美優などは一撃で殺されてしまうだろう。
胸がズキズキと痛んだ。
「な、何よ？　あたしの顔に何かついてる？　じろじろ見ないでよ」
「え？　い、いや、なんでもない……」
夕べから俺はなぜかこの女を意識しすぎているようだ。俺の祖先を迫害し、今また俺の母国を滅ぼそうと残虐な攻撃を仕掛けてきている敵国の殺し屋相手に。
「明良、こういう話はやめようよ。よくないよ。桧山さんが人身御供みたいじゃないか」
「『みたい』じゃなくて、人身御供なのよ。この女さえ自分の人生を犠牲にして、あんたのいけにえになれば、世界は救われるのよっ！　人類の歴史がおかしな方向に曲がったのは、全部、今岡真人、あんたがモテない怨念でInnocent Worldを発明したからなのよっ！」
「うう、美優様、ごめんなさい、ごめんなさい」
美優が真人のこめかみに宇宙ガンを突きつけた瞬間、その美優の頬にぐりんが人差し指を突き立てた。ぐりんの指には注射針が内蔵されていて、その針を使って一瞬で人間を絶命させる猛毒を注入したり、即効性の様々なドラッグを投与したりすることができる。
「今度、真人様に銃を向けたら、ブチコロシマース」
美優は舌打ちをしながら宇宙ガンをホルダーにしまい込んだ。そして悔し紛れに玲於奈を睨むと、
「とにかく、さっさとうなずきなさいよ、眼鏡女！　あんた一人の人生と、全人類の未来と、どっちが大事だと思ってるの？　そんなの考えるまでもないでしょ？　あんたさえこの身も心も醜い腐れ外道の異常性欲の餌食になれば、何もかも丸く収まるんだから！」
美優がしゃべればしゃべるほど、逆効果になっていく。最初はうなずきそうな気配だった玲於奈の顔がどんどん青くなり、次には赤くなり、そして……。
「お断りします。私はモノじゃありませんっ！　好きでもない人とつき合えとか結婚しろとか、そんなこと言われても困りますっ！」
温厚で優しい性格の玲於奈なら説得すれば理解してくれるかと思っていたのだが、美優が……。こいつ、何も考えてないだろ？
「それでいいんだよ、桧山さん。僕みたいなキモメンでオタクでニートな男に、桧山さんとつき合う資格なんかないもんね。僕なんていわば恋愛偏差値四十未満、底辺のクズ、恋愛センター試験へ申し込む資格すらない男だよ。……あううっ、

言ってて悲しくなってきたっ！」
「ごめんなさい、今岡君。私、やっぱり、恋愛や結婚って自分の気持ちに正直にならなければいけないと思うの」
「僕もそう思うよ。ごめんよ、僕なんかのせいで桧山さんまでこんな面倒に巻き込んでしまって。僕が桧山さんを好きにならなければよかったんだ。桧山さんの迷惑にしかならないことは、最初からわかってたのに……」
　真人が心の底から申しわけなさそうに狼狽(ろうばい)して、玲於奈に土下座した。
　俺は一瞬心を打たれて「なんていい奴なんだ、お前は……」と声をあげそうになったが、美優はあくびをしながら手の指をポキポキ鳴らしているし、玲於奈は真人から目を逸らすように目を伏せて固まっている。
「あの、明良。何も僕が彼女をつくる必要はないんじゃないかな。要するに僕の心に巣食っているモテないトラウマがInnocent Worldを開発する執念になっていくんだよね？　だったら僕の精神を治療して、モテない怨念を消してしまえば、それで問題は片づくんじゃないだろうか。Innocent Worldをつくらないという別の未来が訪れるんじゃないのかな」
「な、なんだって？　お前には『大統一理論』を完成させてもらわないと……」
「いや、ぐりんさんを見ていて僕はわかったんだ。たとえ自分が愛されないからって、理想の女性を人工的に人間の手でつくり出そうだなんて、そんなのは間違ってるよ！　人間は、愛されないなら愛されないなりに耐えて我慢して生きていかなくちゃ！　僕は一生涯童貞のまま生きていくことを誓うよ。Innocent Worldも『大統一理論』もつくらない。デクノボーのまま死んでいくよ。僕さえ何もしなければ、未来は救われるんだ！」
　ぐりんを連れて来たのは逆効果だったのか……。
　やはり真人は、精神世界の住人なのだ。肉欲で真人の心を変えることはできそうにない。真人はあくまでも純愛を求めつづけ、Innocent Worldを産み出した。だが、Innocent Worldを発明したあとの結果を知った今、真人はついに「誰にも愛されず、誰をも愛されず、何事をなすこともなく孤独のうちに死んでいく」人生を選択してしまったのだ。なんとかしてやりたい。愚かしい戦争を起こして地球を汚染してしまった連中、地上と地下に分かれてお互いが破滅する寸前になってもまだいがみ合っている連中の責任まで、真人は背負うと言い出しているのだ。
　俺の任務は果たされなかったが、真人の決意を無理やり変えさせるような真似はできない。
「ごめんなさい、今岡君……」
「いや、僕が撒(ま)いた種なんだから、僕が自分で責任を取るのは当然だよ」
「美優、お前の勝ちだな。Innocent Worldは廃棄する。これで終わりにしよ

う」
「ちょっ、ちょっと待ちなさいよ！　こいつ、口ではこんなキレイゴト言ってるけど、信用できないわよ。目を離したらまたすぐに『僕はどうして愛されないんだ、うわーんっ！』って逆切れしてInnocent Worldをつくりはじめるに決まってるわ！」
「じゃあ何か、お前は真人をまだ殺すつもりなのか？　いい加減にしろよ！」
「そ、そんなに怒らなくてもいいじゃない……そうよ、やっぱり、治療よ！　こいつのキモい心を治療してトラウマをきれいさっぱり消し去れば、あたしだって安心して未来に戻れるわよ」
「ぐりんに頼めばやれないこともないが、危険が伴うな」
「僕ならかまわないよ。どうせ殺されるところだったんだ、今までのモテない人生の苦しみが消えるのなら、ぜひお願いするよ」
「あーあ、たかがモテないだの愛されないだの、こんなみみっちぃことで右往左往して果ては最終戦争に突入だなんて、人間ってホント、愚かよねー。原始時代みたいに神様の像でも拝んで救われた気分になっていた頃のほうがまだマシだったわ」
　俺も美優のこの意見には同意した。旧世紀の人類は「宗教」という誇大妄想の体系を信じ込むことによって、自分の不安定な自我を無理やりに安定させて生きていたそうだ。
　宗教というのは、この世界には「神」という絶対者がいて、その絶対者にひれ伏して信じてさえいれば人間は救われる、という幼稚な妄想だ。
　もちろん、このような空想のおとぎ話は科学の発達によってしだいに忘れられていった。その代わり、人間は「神」つまり「救世主」となる存在を各人が自ら私有しなければならなくなった。「恋愛」だの「結婚」だのが流行になり、人間の人生を左右する重大事になった理由は、「神」が死んだことにあったのだ。
　旧世紀から新世紀への変わり目に忽然と登場したInnocent Worldは、神の死んだ世界における新たな「神」になる運命を最初から背負っていたわけだ。
　だが、新たな「神」の出現は、Innocent Worldによる救済を信じる者たちと、Innocent Worldを邪教として弾圧する者たちの長く陰惨な戦いがつづく原因にもなってしまった。
　そして、その戦いは、今もつづいている。
　数分後……。
　ぐりんを媒介に使って、俺と美優は真人の潜在意識の中に降り立っていた。
　俺たち三人がログイン中のInnocent Worldを、ぐりんの持つ潜在意識分析機能に直結するという裏技を使い、俺と美優の意識を真人の潜在意識の中に割り込ませたのだ。
　今、俺と美優の目には真人の潜在意識

があたかも現実の世界のように映っている。ぐりんがInnocent Worldの仮想空間構築機能を利用して俺たちに映像化されたイメージを見せているのだ。

　そこは、薄暗くてジメジメと湿気の多い洞窟(どうくつ)……これがInnocent Worldによって三次元空間に変換された真人の潜在意識の姿だ。

　一寸先は闇なので、慎重に進んでいかなければならない。足元には濁った水が流れている。

「これってさー、帰れなくなったりしないわよね？　あたし、こんなキモメンの頭の中で一生を過ごすなんて絶対にイヤだからね」

「文句言うな。お前が暴れて宇宙ガンを乱射したりしなければ、安全だ。その宇宙ガンはイメージだけど、実物同様の効力を持ってるから注意しろよ」

「宇宙ガン言うなぁ！　この武器にはちゃんと名前が……。ちょっと、聞いてるの？　ったく、何もあたしたちがこんな危ない場所まで降りてこなくても、ぐりんにちゃっちゃっと注射させて今岡真人を洗脳して幸せな偽記憶でも植えつければすむじゃない」

「たとえ偽記憶を植えつけても、オリジナルの記憶を完全に消去することはできない。それにオリジナルの記憶そのものを操作する際には厳重なルールがいろいろあって、アナログ的だけど人間が直接降りていって慎重に仕事をするしかないんだ。ヘタをすると取り返しのつかないダメージを真人に与えて廃人にしてしまうからな。すべての記憶をリセットするだけなら簡単なんだが……」

「あんた、あの男に妙に甘いわね。ねぇ、やっぱり地下帝国の男たちって噂どおり全員同性愛者なの？」

「お前ら下品な人間女にはわからないんだよ。男の友情ってやつが」

「全然わかんないわよ。あーあー、女にびびって地下にひきこもってる男たちなんて、サイテー」

「おとなしく地下で暮らしている俺たちの国にドリルで穴を掘って攻めてきているお前たちこそ、最低だよ。ウイルスを地下にひきこんで俺たちを皆殺しにして、それでどういう得がお前らにあるんだ？」

「知らない。ムカつくから殺そうってことになったんじゃない？」

「お前らはいつもそうだ。今度の計画だって、真人を殺したあとのタイムパラドクスの問題をまったく考えてないじゃないか。少しは理性で思考しろよ！」

「フン、偉そうに。Innocent Worldとかフェミィとかエロいものばかりつくって、性欲を満たすことしか頭にないサルのくせに」

　美優とくだらないおしゃべりをしているうちに、いつの間にか洞窟の出口に到達した。出口は断崖絶壁の中腹に開いていた。出口の向こうには、広大な闇の空間が。俺たちは真人の精神の最奥部に隠されている巨大な空間……深層意識の最

下層部『コキュートス』へ辿りついたわけだ。
「ねえ、これって覗き見じゃないの？」
「うるさい、黙ってろ。暗くてよく見えないな、ライト貸せ」
「あたしに命令しないでよ！　自分でライトぐらい使えるわよっ」
美優が乱暴にライトを点灯させて目の前に広がる薄暗い空間を照らし出した。
「そんな急に当てたら、馬鹿っ……」
「げげっ、何これっ？」

ギャーッ、ギャーッ！

ボロボロの姿で鎖につながれた無数の人間たちが、固まって密集していた。彼らは口ぐちに「もうやめてくれえ」「光を当てないでくれえ」と悲鳴とも懇願ともつかない声をあげ、身をよじらせて隠れようと暴れはじめた。だが、手足や首を鎖でつながれ、動けない。
「なっ、何これっ？　こいつら誰っ？　キモい男が無数につながれている。何千人、何万人、何十万人っ？　きっ……きもーっ！」
「こいつらは、真人じゃない！　顔がみんな違う？　着ている服も、言葉も、みんな違う！」
「ねぇ、どうするのよ、どうするのよ、みんな殺しちゃう？」
「馬鹿っ、そんなことしたらどんな結果になるか予想できないじゃないか！　だいいち、こんな大人数を俺たちだけで相手にできるか？　これ以上刺激を与えたら鎖を引きちぎって襲ってくるかもしれない、ライトを消して引き返そう」
「何よぉ、結局、治療できないんじゃん。ねえねえ、何なのよ、こいつらは？　説明しなさいよぉ。あっ、あのおっさん、十字架にかけられてるわよ？　ねぇ、あれは何？」
「どういうことなんだ、これは⁉」

俺たちは想定外の事態に遭遇し、あわてて真人の深層意識から離脱した。
美優は事態の異常性をまったく理解していないようだが、決してありえないことが起きたのだ。
俺たちの世界では、人間の魂の輪廻転生は否定されている。人間の意識は死んだらそれで終わりになる。実際、深層意識の中に自分以外の人間の人格を持っている患者は今まで存在しなかった。ごく稀に多重人格者というケースがみられるが、この場合は仮の人格が増殖しているだけなので、治療によって一つの人格に統合することができる。
ところが真人の深層意識には、数えきれないほどの人間が密集していた。これまでにはないケースだ。それなのに、真人自身には多重人格の兆候はまったく見えない。

真人の精神治療に失敗した俺は、全員を集めてもう一度会議を再開した。
「……というわけで、治療は失敗だ」

「ほら、あれよ。お腹を開いてみたら、あまりにも病状が進行していて手の施しようがなくなってて、そのまま縫い合わせてオペ中止ってことね。この男の頭の中には、つまり、キモイ男の魂が何百万人ぶんも詰まっているのよ。ああー、ますますキモイ！」

「どういうことなのか、まったくわからない。真人の深層意識はまるで、人類史上に無数に存在した過去のモテない男たちのトラウマ記憶の集合体のようだった！」

　真人は呆然となりながら「いったい僕がどんな悪いことをしたのだろう」とうわごとのようにつぶやき、玲於奈のほうを向いた。

「僕のキモさは、単に顔がキモいというだけじゃないらしい。やっぱり、心の底までキモいんだ。それも、未来人の科学力をもってしてもどうしようもないレベルっ！　人類史上最強のキモさっ！　もうダメだ、たとえ今はInnocent Worldをつくるまいと誓っていても、頭の中がそんな有様では、いずれまた耐えきれなくなってInnocent Worldをつくってしまうよっ。僕はどうすればいいのかな」

「今岡君、その……私以外の誰か他の女性を見つけるという選択肢はないの？」

「ない、ないよっ！　僕だって、桧山さんみたいなかわいくて優しい女の子が僕なんかとつり合うわけがない、迷惑をかけるだけ、いやな思いを味わわせるだけだってことは、頭ではわかってたさ。何度も何度も諦めようとして忘れようとして百キロマラソンに参加したり滝に打たれたりバンジージャンプやったりして努力したよ。でも、ダメなんだ。ううあぁ、桧山さんが好きでしかたがない、どうしようもないんだっ！　自分でもどうしてこんなことになってしまったのか、わからないよ。他の女の子なんて、考えられないっ！」

「モテモテじゃん、眼鏡女。ひゅーひゅー！」

　退屈していた美優が、よせばいいのに、また茶々を入れはじめた。

「あなたは関係ないでしょ、黙っててよっ！」

「ハ！　やいキモメン、この女は一見優しそうな顔してるけど、性根はろくでもない女なのよ。要は面食(めんく)いよ、面食い。イケメンじゃないと相手にしたくないのよぅ。それが本音。でも、そんな本音を口にしたら悪人だってバレちゃうから、黙ってるだけ。つーかそもそも男なんて顔だけに決まってるジャン、それが宇宙の真理！　何を今さらブツブツ言ってるんだか」

「ひっ桧山さんはそんな人じゃないよ。僕みたいなキモオタに対しても他の人と同じようにしゃべってくれた、たった一人の女性なんだあっ！」

「だからー、そうやってあんたにもいい顔してみせて、自分の優しさに酔ってるだけなんじゃん。一番イヤなタイプよ」

「桧山さんのことを悪く言うな！　悪い

のは全部僕だ、僕がキモイのが悪いんだっ！　僕が全人類を不幸のどん底に落としてしまうようなキモイ魂とキモイ顔の持ち主なのが全部悪いんだ！　僕さえ、僕さえ死んでしまえば……。僕なんて、最初から生まれてこなければよかったんだ！　好きな人をキモがらせて、関係ない人々を不幸に巻き込んで、僕なんか存在価値ゼロどころかマイナスだよっ、マイナス無限大だっ！」

「今岡君、何もそんなに自分を責めなくても……」

真人は「うわあああ」と叫びながら部屋を飛び出していった。

ぐりんがおたおたとあとを追っていく。ぐりんに監視させておけば、思いつめて自殺なんていう事態は避けられるだろう。

部屋に残された俺と美優と玲於奈は、善後策をもう一度考えることにした。

真人がいないほうがかえって話しやすい。いくらなんでも本人の前で「彼のキモさをどうにかして軽減できないか」「できそうにない」なんて絶望的な会話をつづけるのは俺としても心苦しいし、玲於奈はもっとつらそうだ。玲於奈さえ「今岡君を好きになれそうです」「頑張ってみます」と言えば、とりあえずは解決するわけなのだから。

まあ、約一名、ブーブーと不平をこぼしている奴もいるが。

「つまんなーい。あいつがいないと、苛められないジャン！　で、どーすんの？　このまま放置プレイかませば勝手に死んでくれて、あたしはミッション終了なんだけど」

「私、なんとか努力してみたいです。今岡君が悪い人じゃないことは頭ではわかってるつもりなんです。友達としては好きです。でも、どうしてもダメな点があって……」

「顔でしょ？」

「はい。どうしても生理的に我慢できないです……」

「ほうら、ほうらね。結局、男なんて顔だけよ、顔だけ！　あんた、明良が好きなんでしょ？　明良のどこが好きなのか言ってみなさいよ。顔よ、顔！　こいつイケメンだからねー、性格は最悪だけどぉ、性格なんて目には見えないもんね、アーハハハ」

「お前はもう黙ってろ！　なんでいちいち玲於奈につっかかるんだよ？」

「あうー。だって、ムカつくんだもん」

「何に？」

「うー、わかんない」

美優が不機嫌そうに唇を「3」の字形に尖らせて、チラチラと俺の顔を横目で見てくる。やばい。なんだ。今、胸が締めつけられるように痛んだ。だが、苦しい痛みではない。むしろ気持ちのいい痛みだ。こんな感情のことは、俺は教わっていない。

「とにかく今日はこれで解散しよう。明日、俺が真人の家に行ってみる」

「というわけで、ほら、眼鏡女、あんた

は帰った、帰った！」
「あの、新庄さんは帰らないの？」
「あたしはここに間借りしてるから、いいのっ！」
「つまり新庄さんは、私が邪魔だと……そういうことだったのね」
　うっ。美優の顔が突然真っ赤に茹で上がった。
「えっ、ええっ？　なっ、なんの話、何っ？」
「新庄さんも坪井君が好きなんでしょう。だから私を目の敵にして！」
「なっ？　あ、あっ、あのねぇ、未来の女は男なんかに興味ないのよっ。男は全員、親の敵、地球を汚染するゴミ虫っ。本来なら、見つけたら『悪・即・斬！』っとばかりに駆除しなければいけない対象なのっ！　それなのに、どうして選ばれしエリートのあたしが、こんな性格も口も悪いイヤな男をっ！」
「でも顔はいいじゃない。男は顔だけだなんて言ってるけど、とどのつまり、それってあなた自身のことなんでしょ」
「あわ、あわわ。こっ、殺すっ。あんた超ムカつくから殺すっ！」
　激昂した美優が宇宙ガンを抜き打ちしようと指を動かしたのを見た俺は、あわてて美優を羽交い絞めにして破滅がやって来そうになっていたのを押しとめた。
「待て、待て。過去で重要人物を殺したりしたらタイムパラドクスが！」
「きーっ、離してよー。何、あたしに抱きついてるのよ、変態っ！」
「玲於奈、とにかく今日は帰ってくれ！」
「うん。それじゃ、また明日ね」

　俺は玲於奈が帰ったのを見届けたあと、美優と目を合わせられなくなり、無言で自室に閉じこもった。しばらく美優がドアの向こうで話しかけてきたり怒鳴ったり暴れたりしていたが、相手をする勇気がなかった。
　この旧世紀の東京の人間とは違い、俺や美優は男と女が出会えば即殺し合うという世界に生きてきた。人間の男女間で愛だの恋だのセックスだのといった堕落した行為にふけるなど、想像したこともない。いわば俺たちは「進化した人間」だったはずだ。それなのに。この二〇〇七年の東京暮らしが、俺の心を蝕んでいるのだろうか。
　美優は俺の任務を妨害する不倶戴天の敵で、しかも性格は横暴、態度は悪い、口を開けば罵詈雑言……。
　やめた。今は俺が悩んでいる場合ではない。地下に潜って、女どもの進攻に怯えている同胞たちを救うことだけを考えなければ。
　そのためには、まず、二つの階級に分かれている同胞たちを「大統一理論」によって一つにまとめて内部を固めなければならない。真人に「大統一理論」を完成してもらわなければならない。しかし、過去の人間である真人にそんな無理難題を要求したのは、俺たちの身勝手だったのではないだろうか……。

悶々と悩んでいるうちに夜が明けた。
「くー、くー、くー」
暴れ疲れたのか、美優はボディスーツを着たままソファの上で大の字になって眠っていた。
俺は美優の身体に毛布をかけて、あわてて部屋をあとにした。
美優の無邪気な寝顔を見ているうちに、一瞬、自分で自分の感情を制御できない状態に陥りかけた。
これ以上、美優に接近するのは、危険だ。

俺はとりあえず真人の屋敷に行った。
真人は、おとなしく自分の部屋で朝食を摂っていた。ぐりんがメイド代わりに朝食をつくったらしいが、茹で卵がピータンのようなまがまがしい色に変色しているところを見ると、この時代の調理方法をきちんと学習していないらしい。
「ややっ。明良先輩、おはようございます」
「おはよう。夕べはごめんよ、明良。桧山さんに謝っておいて」
「ぐりんと夕べセックスしたか？」
「すっ、するわけないだろ！　僕は桧山さん一筋だよ。突然、何を言い出すんだよ？　明良」
「いや、別に……。俺、童貞だから、セックスってどういうものなんだろうって、ちょっと気になってきてさ」
「僕も同じだよっ。そもそも未来に童貞なんて言葉、残ってるの？」
「いや、もう使ってないな。古語だ。だからここに来るまではそんなこと気にかけたこともなかった。未来の地下帝国では過去数百年、「本物」の人間の女とセックスした奴なんて一人もいないからな。つまり全員童貞だ」
「全員童貞の帝国って、ロマンだよね」
俺はなぜこんなどうでもいい話をしているのだ。真人の向かいの席に腰を降ろすと、俺はさっそく本題を切り出した。
「玲於奈だけど、脈はあるぞ」
「ええっ、本当っ!?　ひっ、桧山さんがっ、ぼ、僕なんかとっ？　本当に可能性があるの？」
「ああ。友達としては好きだって言ってた。ただ、どうしても我慢できないことが一つだけあるとも」
「やっぱり、性格がウジウジしていてショボくてダメ人間なところっ？　そんなの矯正できないよっ！」
「違う、喜べ。顔だ。顔がダメだそうだ！」
「全然喜べないよ！　うわあああっ、顔がこんなブサイクなのは、僕の責任じゃないのにっ！　誰にも望まれていないのに、わざわざこんなブサイクな遺伝子を意地になって脈々と保存してきた祖先たちを恨むよっ！」
もがき苦しむ真人の肩を、ぐりんが無表情のままポンポンと叩いた。
「真人様、真人様。ファイト。希望を、持て。キモメンでも、いいぢゃないか、人間だもの。どうにか、なる。参考文献

『人間失格』太宰治」
励ましているつもりらしい。
「全然参考にならないよ。今あんな小説を読まされたら、僕、速攻で玉川上水に身投げしちゃうよっ」
「よく聞け。玲於奈はお前を好きになる努力をする意志はあるんだ。ただ、お前の顔が邪魔をしているだけだ。意志の力よりも生理的な嫌悪感のほうが強いからな。これはお前の世界の住人なら誰しもが陥っているドグマの問題だから、玲於奈が悪いわけじゃない。俺の世界では顔などは単なる固体識別用の記号にすぎないのだが、ここの世界じゃあ……もっとも、未来の世界でも地上の女どもは相変わらず顔に固執しているようだが……」
「つまり、どうしようもない問題だってことだろっ？」
「顔を変えろ」
「えっ？」
「大学には戻りづらくなるが、大学よりも玲於奈のほうが大事だろう？　ぐりんの整形オペを受けて、この時代のイケメンとやらの顔につくり変えてしまえ。この時代の原始的な整形手術と違い、DNAレベルで顔をつくり変えるから仕上がりは完璧だ。そうすれば玲於奈だってなんとかなるはずだ」
「それって、ブサイクでモテないから整形してモテようって話だよね。そんなの、純愛じゃないよっ！」
「だがこのままでは、お前はいずれ玲於奈と結婚できれば、Innocent Worldをつくる。顔を変えてInnocent Worldをつくらずに人生を終えることも可能になるし、物理世界とInnocent Worldを統一する『大統一理論』をつくる気になるかもしれない。いずれにしてもお前の人生は大きく変わる。人類の未来も変わる。お前の『ブサイクに生まれてきたけれど、それでも顔を変えない』というプライドと、人類の未来、どっちが大事だ？」
「それは、即答だね。人類の未来！」
こうして、真人は「イケメン」に顔を変えた。真人が注文した顔は……この俺の顔そのままだった。俺はさすがに気持ちが悪くて何度も反対したが、
「だって桧山さんは明良が好きなんだよ。他の顔じゃダメなんだよ！」
と言われると、反論できなかった。どうしてこの時代の人間は、顔などにそんな重大な価値を置いているのだろう？　顔なんて皮を一枚剝いだら消えてなくなってしまう、はかない幻のようなものにすぎないのに。「皮」だよ、「皮」。頭がどうかしているとしか思えない。
いずれにせよ、真人はイケメンに生まれ変わった。
その日から真人は、道を歩いているだけで女たちに黄色い声と潤んだ視線を浴びせられたり、芸能スカウトに声をかけられたり、ストーカー女に追い回されたりするようになった。もちろん真人はそんな連中にはまったく興味を示さなかっ

た。俺そっくりの顔になった姿を玲於奈の前にさらし、事情を打ち明けた。そして「こんなことまでしてごめんなさい、ごめんなさい。お願いですから、僕のこと好きになってください！」と再び告白した。

玲於奈はしばらく悲しげな目で真人を見つめていたという。

玲於奈はどんな気持ちで、自分の顔を捨てて俺の顔に取り替えてしまった真人の姿を見ていたのだろうか？

男だけの世界で生きてきた俺には女の気持ちはまったくわからない。想像することもできない。

玲於奈が答えてくれないので、真人は諦めて立ち去ろうとした。

しかし、玲於奈はそのとき、

「あなたのことを好きになりたいです。愛してあげたいです」

と泣きながら声をかけたのだそうだ。

まあ、全部、俺が見ていた話じゃないんだけど。

美優が休戦協定を破って真人を襲わないよう、俺は常にぐりんを真人の周囲に張らせてある。話はすべて、そのぐりんからのレポートで読んだ。レポートのタイトルは……「家政婦は見た」。

俺は喜んでいいのか、それとも自分の任務を裏切っているかもしれないという自責の念に駆られて苦しむべきなのか。

真人に女の身体を覚えさせて現実に興味を持たせ、「大統一理論」をつくらせるという当初の任務を、俺はほとんど放棄しかけていた。

何もかもがひどく虚しく思えてしかたがない。今、バスルームで長風呂を楽しんでいる美優のことも、俺のことも、玲於奈や真人のことも……。

どうして人間はこの世界に生まれてきて、苦しみつづけて死んでいかなければならないのだろう。

俺は、「大統一理論」が発明されればこの苦しみは終わると信じていた。だが、美優のように地上に暮らす女たちは？

あいつらとの戦争は、いつ終わる？　真人たち過去の人間の苦しみは？　真人の心の中にいたあの数百万人ものキモメンたちの魂は？　そもそも、この苦しみはどこから来るのか？

「誰だ？」

確かに気配があった。俺は玄関へ向かった。ゆっくりと玄関のドアが開いて、ずぶ濡れの男が入って来た。パンツを一枚穿いているだけの姿だ。泣いているようだった。

「僕、結局、ダメだったよ、ごめん……」

真人だった。

俺の顔じゃない、真人自身の顔を持った真人がそこに立っていた。

「桧山さんに言われたんだ。もう遅いって、遅すぎたって」

4 誕生

「もう遅いって、どういう意味だよ？　それに、その顔は？　お前、元の顔に戻ってるじゃないか。ひどい火傷までしてるし！」
　こんなときに限って、ぐりんが現れない。何をやっているんだ。
「僕、今夜、僕の家で桧山さんと一緒に夕食を食べてたんだ。その後、ホームシアタールームで一緒に『ベルリン忠臣蔵』っていう名作映画を見て、それで、夜も更けたので、一緒に寝ようって話になって、それでとうとう……」
「ケンカでもしたのか」
「桧山さんと、その、せ、セックスをすることになって。まさか、あの憧れの桧山さんが、人間の女の子となんて、お金を払わなければ絶対にセックスできないと思ってたのに、まさかこの世でたった一人、心の底から愛してやまない人と！　恋愛とセックスをごっちゃにして適当に相手の数をどんどん増やしてヤリチンだヤリマンだとか言って調子に乗っている連中のことを、僕は昨日まで本当は羨んでいた。でも、そうじゃないってわかったよ。僕が本当の幸せ、本当の愛、本当の喜びを手に入れられたのは、本当に好きな人だけを追い求めてきたからなんだとわかった。愛もセックスもみんなオモチャにしているあいつらはこんな幸福は絶対に味わえないんだ！　ずっとモテなくて苦しんできた僕こそが最後に本当の幸せを見つけたんだ。桧山さんとセックスするこの日まで、童貞を貫いてきて本当に報われた、と思った……でも、ダメなんだ。ダメだったんだ」
「だから、何がダメなんだよ？　玲於奈のことが本当に好きなんだろ。玲於奈だって顔までつくり変えたお前の気持ちが伝わって、やっとその気になってくれたんだろ！　いったい何がどうなれば、ダメだったなんて結論になるんだ。顔が元に戻ったからか。だいたい、どうして元に戻ってるんだ？」
「いよいよという瞬間に、拒絶反応が。顔じゅうの細胞が焼け爛れて落ちてしまったかと思ったよ。ひどい痛みで僕は床の上を転がりまわった。やっと顔を上げられるようになって、桧山さんのほうを見た。桧山さんが悲鳴をあげた。どうしたんだろう？　僕は鏡を覗き込んだ。そこには、僕の本当の顔が映っていた。本当の顔。醜い顔。気持ちの悪い顔。見ているだけで悪臭が漂ってきそうなキモメンの顔。そうだよ、イケメンの僕なんて、真っ赤な偽物、つくり物だったんだよ。僕が手に入れたと思った『本当の愛』なんてものも、全部しょせんはまがい物だったのさ。僕はつくり物の顔で、桧山さんを騙したんだ。だから報いを受けたんだ。はは、ははは……。やっぱり僕はキモメンだよ。何が愛だ、何が幸福だ、僕は最低だ！」
　待てよ。おかしいよ。拒絶反応って、なんだ？　顔面の整形はまったく危険性のないオペだ。失敗例なんか聴いたことがない。まさか。

「真人、お前、以前に同じオペをした経験が？」
「いや、もちろんないよ」
「そ、そうか、よかった……それで、玲於奈は？　驚いて逃げてしまったのか？」
「桧山さんは、ずっと顔を覆って泣いている僕の背中を、そっと撫でて慰めてくれたよ。心配ないから、もう顔のことなんて気にしないでいいから、って……」
「いい子じゃないか。やっぱり、お前の気持ちがちゃんと伝わったんだよ。いったい何が問題なんだ？」
「桧山さんにいくら慰めの言葉をかけられても、桧山さんを騙して裏切った自分を許せそうになかった。僕は死んでしまおうと思った。立ち上がった。急に胸のあたりが焼けるように熱くなって、思わず血を吐いた。いや、血じゃなかった。何かこう、ドロドロとした紫色の寒天みたいな半固形の物体を吐いた。それを見た桧山さんの表情がみるみるうちに変わった。まるで別人のように。柔和な表情が突然、厳しい顔つきになった。本当に別人に変わってしまったように見えた。桧山さんは、痙攣（けいれん）しながら嘔吐（おうと）をつづける僕を抱きしめると、激しい声で泣きはじめた。あんなに悲しそうな声を、僕は聞いたことがない。桧山さんは言った。やっとあなたに会えたのに。でも、もう遅い。遅すぎた……意味はわからないけれど、彼女の泣き声があまりにも痛々しくて、僕は耐えられなくなった。パンツ一枚穿いただけの格好のまま逃げた。逃げて来た。どうして逃げたのか、わからない。ただ、自分はここにいる資格がない、桧山さんにいたわられる資格がない、ということだけははっきりとわかった。もう、ダメだ、僕は二度と彼女に会えない。部屋から逃げ出していく間、桧山さんの『ごめんなさい』という声が何度も聞こえてきた。ごめんなさい、ごめんなさい、と……」
なんてことだ。俺も玲於奈のように「わあっ！」と悲鳴をあげて泣き叫びたい気分になった。なぜなら、真人は……。
「お前、やっぱり……以前にぐりんのオペを受けて顔を変えたな？」
「いや、本当に初めてだよ。誰が好きこのんでこんなブサイクな顔に変えるんだよ？」
「それは……オペを二度受けてしまった人間が示す拒絶反応だ」
「えっ？」
「もうダメだ、真人。お前はあと一週間足らずで死ぬ。なんてことだ、どうしてだ、どうして初めてのオペで拒絶反応が？　ありえない！」
「死ぬ？　僕が？　本当に？」
「ごめんな。まさか、この俺が、オペでお前を殺すことになるなんて」
「そうか。僕は死ぬのか。じゃあ、Innocent World はどうなるんだろう？」
「Innocent World は発明されない。美優がつくろうとしていた、Innocent World のない未来が訪れる、と思う

……。だが、誰もまだタイムパラドクスが未来にもたらす影響を目撃した者はいない。なんともわからない……」
「Innocent World のない世界、少なくとも男と女が地下と地上に分かれて殺し合う世界ではなくなるのかな。それとも未来の世界そのものが消えてしまうのかな、どうしよう?」
「お前はこんなときにまだ他人の心配を。そんなことより自分のことを考えろ！　あと一週間も残されてないんだぞ。玲於奈を探せ、追いかけろ！」
「もういいよ。死んでいく姿を彼女に見せたくない。彼女のトラウマになる。このまま、童貞を捨てようとしたとたんに急にキモメンに戻ってヘンなゲロを吐いた不気味な男というイメージのまま、きれいさっぱり忘れられたほうがいい。桧山さん、『ごめんなさい』って何度も言ってたし。あれって、つまりフラれたんだろ、僕は?」
俺のほうが耐えられなくなって、ただひたすら壁を叩きながら泣きつづけた。
結局、俺は、こいつをより不幸にしただけだったのか……。
いつの間にか、バスローブを纏(まと)った姿でバスルームから出てきていた美優が俺の横に寄り添い、俺の顔を心配そうに見つめていた。ぐりんも大量のコンビニの袋を両手いっぱいに持って玄関口に立っている。また好物のバナナを買い込んできたんだろうか。
しかし、玲於奈がいない。玲於奈はどこに行ってしまったんだ?
何かがひっかかる。
「ぐりんさん、もう一度だけ、オペを頼めるかな」
「ボクはかまわないけど、さらに寿命が縮むよ?」
「死ぬ前に一度、全身を改造して欲しい。女の子にして欲しい。一日でいいから、女の子になってみたかった。桧山さんみたいなかわいい子に。永遠に手に入れられない存在に、一度、自分自身がなってみたい。一日だけでいい。僕自身が『憧れの存在』になってみたい。そうすれば、一人ぼっちでも後悔を残さずに死ねる」
「あんたねぇ、ただでも体ボロボロなのに。そんな無茶したら、イチコロかもしれないわよっ」
美優が制止するが、そもそも美優は真人を殺すために来ていたはずだ。その美優が真人を心配し、真人を守るはずの俺とぐりんが真人を死なせてしまうのか。
いや、ぐりんはただ命令を遂行しただけだ。俺の責任だ……。
「僕自身が理想の女の子になってしまえば、もう誰を求める必要もなくなり、もう孤独を悲しむこともなくなる。どうして僕はこんな醜い姿に生まれてしまったんだろう?　どうして、どうしてなんだ。誰が醜い姿に産んでくれ、なんて頼んだんだ！」
「真人様。ボクがとびっきりかわいい女の子にしてあげますから。もう泣かないでください」

「ありがとう、ぐりんさん」
「ちょっと、明良、止めなさいよ。友達でしょっ⁉」
美優に何度も肩を揺すられたが、俺にはもう反対する気力が残っていない。俺の世界では消滅した美醜差別、容姿差別。俺はその実態を知らなかった、ここに来るまでは。この二〇〇七年の東京という悪夢のような都市で、俺はその実態を初めて知った。吐き気を催すような醜い世界。本当に醜いのは、この都市に暮らし、人間を差別して嘲笑（ちょうしょう）して当然だと思っている奴ら自身だ。Innocent World は、この不平等を解消するために発明され、そして、救いを求める人々によって量産され、世界中に普及した。誰もこのシステムを破壊する権利など持たない。何人もだ。
真人を見ろ。彼がいったいどんな罪を犯したというんだ？　彼の苦しみは、ただ顔が醜いというくだらない、本当にくだらない理由だけのためにはじまり、そしてその不条理は彼が死ぬ瞬間までつづくのだ。
たかがＤＮＡの配列がほんの少し他の人間と違うからといって、どうしてここまで苦しみつづけなければならない？
茶番だ。こんな茶番には幕を降ろさなければならない。二〇〇七年の東京は原始人の街だ。こんな腐った世界は、革命されてしかるべきなのだ。
だから、Innocent World は……Innocent World は、開発されるべきだ！　これは、絶対になくてはならないシステムなんだ。
でも、どうすればいい？　真人はもう死ぬ。どうすれば Innocent World を歴史から消さずに、未来を変えずに、帳尻を合わせることができる？
二度目の改造で女の子に変身した真人は、二〇〇七年東京モードのゴスロリとかいうドレス一式を美優に着せてもらい、よろよろと力なく廊下へ歩み出した。まるで死期を悟った象が、墓場へと向かうように。
俺には女の美醜はわからないが、美優によると二〇〇七年の東京の価値観では世界で一番かわいくて美しい顔になっているのだそうだ。それはどんな顔だ。
「ちょっと公園まで散歩してくるね。やっと男なんていう重荷から解放されたんだ。女の子になった気分を味わわなきゃ。すぐ戻るから……」
真人はそう言ってエレベーターに乗り、一階のフロアまで降りていった。顔色が悪いが、大丈夫だろうか。
だが俺は、玲於奈が姿を見せないことのほうがもっと気がかりだった。無性にいやな予感がする。玲於奈は真人を心配して探しているはずだ。真人を見捨てるはずがない。なのに、まだ連絡がない。このマンションにも現れない。何か事故にでも巻き込まれたのではないか。
「ぐりん、玲於奈を探して来い」
「わかった。ちょっと行ってくるね。ボ

クに任せて！　参考文献『善悪の彼岸』ニーチェ」
　ぐりんがベランダからマッハの速度で飛び出して行った直後、いつの間にか赤いボディスーツを着込んできた美優が俺の向こう脛を蹴り飛ばした。
「ちょっと、何やってんのよ。ぐりんに真人を守らせないで、どーすんのよ⁉」
「いてて。真人はもう時間がないんだ、せめて一人にさせてやりたい」
「何を平和ボケしたこと言ってるのよ。あんたね、二〇〇七年の東京なのよ、ここは！　真人が襲われたらどうするのよ？」
「襲われるって、誰に？　戦争してるのか、この街は」
「この街には女を見たら集団レイプするDQNっていう原始部族が棲みついてるのよ。あんた、学習してこなかったの？」
「俺は教わってないな。お前の国とは、保管している歴史資料が違うんじゃないか」
「もう〜。あたしが連れ戻して来てあげるわよ。公園に行ったのよね？」
「あ、ああ……」
　美優が真人を連れ戻しに行ってから、数十分が過ぎた。
　美優も真人もぐりんも戻って来ない。
　俺は考えごとに夢中になっていたために、誰も戻らないこの現状がおかしいことに気づくのにかなりの時間を要していた。
　何を考えていたかって？
　言うまでもない。今後のことだ。
　真人はもう助からない。まもなく死んでしまう。俺の任務は、真人にInnocent Worldとフェミィ製造技術を統合した「大統一理論」をつくらせることだった。だが、仮にこのプランの実現が無理だとしても、少なくとも真人がInnocent Worldを発明するという歴史的事実を女どもに曲げさせてはならない、という義務も背負っている。
　過去の重大な歴史的事実を改ざんした結果、世界にどんな影響が及ぼされるのか、それを確かめた者は誰もいない。「死後の世界」を誰も見た者がいないのと同じだ。
　タイムパラドクスが本当に起こりうるのか、もし発生したらどんな事態になってしまうのか。
　俺が考えた末に頭の片隅におぼろげに浮かび上がってきた結論は、自分でも納得のいかない不条理なものだった。
「それにしても、遅いな、美優は」
　マンションの一階ロビーから公園までは歩いて数分の距離しかない。真人が倒れてしまったのだろうか。それで連れ戻すにも連れ戻せない？　まさか見失った？
　妙な胸騒ぎが収まらなくなってきて、俺は自らも公園へ向かうことにした。
　………。
　夜の公園の砂地は、一面血の海に染まっていた。

殺戮が行なわれたのだ。しかも……この血の量からすると、殺されたのは一人二人ではない。
本来なら草木が飛ばしている花粉の香りで満たされているはずの空間に、血の匂いが充満している。
俺は周囲を注意深く見回したが、誰もいない。死体もない。
ただ一人、公園の片隅にあるベンチの上に、真人が横たわっていた。
まさか。美優が真人を殺したのか？　真人はもう寿命が尽きている。今さら殺すまでもない。美優はどこに消えた？
真人は少女に変身したままの姿で、力尽きたように目を閉じて動かなくなっていた。ゴスロリとかいうドレスは無残に引き裂かれ、あちこちに誰のものかわからない血がこびりついていた。
かすかに胸が上下しているので、まだ生きていることだけは確認できた。しかし、もうダメだろう。残されていたわずかな体力を、何者かとの争いによって根こそぎ削り取られてしまったのだ。
「あ、明良か？　そこにいるのは」
真人がしゃべった。
うっすらと瞼を開いて虚空を見上げた。しかし、何も見えてはいないようだ。
真人が死んでしまう。俺は狼狽して真人の脇にひざまずくと、彼……もう彼女だが……の血に塗れた手を握った。
「俺だ。明良だ。いったい何があった？」
「僕、いきなり柄の悪い若い男たちに集団で襲われて……集団レイプってやつかな。はは……かわいい女の子になんて、なるもんじゃなかったよ。美優様に間一髪助けてもらったけど、あやうく童貞のまま処女だけ喪失して死ぬところだった。笑い話にもならないよ……」
「美優はどこへ？」
「殺さないでって頼んだのに、美優様は、あいつら全員をあの変な銃で撃ってバラバラにしちゃったんだ。今は細切れになった死体の残骸を処分してるんじゃないかな。……あんな美優様の悲しそうな顔は、初めて見たよ……やっぱり男なんて、みんな死ねばいいんだって、そう言いながら……」
過去に来て無関係な人間を大量虐殺するなんて、あいつらしい。まったく、後先のことを何も考えていない。もっとも、あいつに殺された連中の中に、歴史に重大な影響を与える人間は含まれていないだろうが。
「明良。僕にはわかったよ。……この世界は……地獄だ。男も女もイケメンもキモメンもない。誰もが望みもしないのに、一人では生きていけない不完全な存在として独りぼっちで生まれてきて、ありとあらゆる種類の苦しみに打ちひしがれて、そして……独りぼっちで死んでいくんだ。これが地獄でなくてなんだ？　この世は楽園だなんて、いったい誰がそんなひどいごまかしの嘘を言い出した？　僕はもう男も女もつくづくいやになった……どちらも一人では生きられないから、お互いを求める。でも……本当に求

めるもの、自分に都合のいい理想の異性は得られない。得られないから……憎む。いがみ合って、呪い合って、犯し合って、殺し合う。こんな世界を……このままにしてちゃ……いけない。人間は、苦しむために生まれてくるはずじゃない……」

「もうしゃべるな。体力を使うな」

「僕はもう助からない。明良……僕の代わりに、僕になりすまして、君がInnocent Worldをつくってくれないか？　厚かましいお願いだとは思うけど、君にしか頼めないんだ……」

「ああ。俺がお前になれば、タイムパラドクスは回避できる。俺も同じ結論を出そうとしていたところだ……」

「頼むよ。もう……こんな悲惨な世界は……終わりにしてくれ。Innocent Worldさえあれば、孤独に苦しみながら惨めに生きていかなくてもすむ世界をつくれるんだ。でも、現実世界に復帰できなくなる今のシステムはダメだ。君が持ってきた旧式のシステムをそっくりそのまま模倣してつくってくれ。数時間でログアウトしないと空腹に耐えられなくなるシステムのままでいい。ネットワーク機能もはずしちゃダメだ。……現実からInnocent Worldを切り離しちゃダメだ。二つの世界を分裂させると、必ず争いが起こる……」

　真人が死んでしまう。どんどん肌の色が青白く透き通っていく。蝋人形みたいに。

「人間が……自分で自分を救える……世界を、つくって……もう、戦争も暴力も強姦も差別もない世界を……誰もが平等に生きられ、平等に愛される世界を、Innocent Worldを……つくってくれ……」

「俺がお前になってInnocent Worldをつくる。だから、安心しろ」

「……ありがとう……」

「真人」

　返事はもうなかった。

　馬鹿だ。お前は馬鹿だ。いったいどれほどの恨みつらみを溜め込んだまま、最後まで他人の心配ばかりして、死んでしまったんだ。どうして最後ぐらい、自分のために叫ぼうとしなかった。お前みたいな馬鹿は、死んで当然だ！　自分のために生きられない人間なんて、生きていけるはずがない。醜く生まれれば蔑まれ、美しく生まれれば犯される。こんな禽獣(きんじゅう)みたいな連中がはびこる世界で。

　……真人、俺、つくるよ。Innocent Worldをつくるよ。お前の代わりに。お前みたいなどうしようもない馬鹿が幸せに生きていける世界をつくるために。

　弱肉強食の論理なんて知ったことか。俺がぶち壊してやる。お前ら、お前ら、お前らだよ！　俺を偽善者と嗤(わら)うのか？　悪党が俺を「偽善者」と嘲笑できるのか？　悪党のくせに居直りやがって！

「あーあ。結局、死んじゃったのね。あたしの仕事も終わりってわけね」

　いつの間にか、背後に美優が立ってい

た。バックを取られた。俺としたことが、真人の死に動揺して、完全に我を忘れていた。殺られるのだろうか？

「血の匂いがするな」

「ボディスーツに血がついちゃったから。一応洗ったんだけどね。ま、元々赤いスーツだし、あまり気にしてないけど。殺されて当然のクズ男どもを処理しただけだもんね」

「これからどうする。俺は顔を変えて、真人になりすます。真人になって、俺が歴史どおりにInnocent Worldを発明する。Innocent Worldを消滅させはしない」

「ちっ。あんた、馬鹿じゃないの。そんなことして、あんたになんの得があるの？　自分の人生捨てちゃって、そいつの身代わり？　この世界でそんなキモメンに変身したら、どれだけ惨めで悲惨な人生を過ごすことになるかわかるでしょ？」

　俺は美優のほうへ向き直った。目と鼻の先に美優の顔があった。美優の鼻息が俺の頬に当たって、くすぐったい。

　美優は腰の銃に手をかけて俺の表情をうかがっている。いつでも俺を射殺できる体勢だ。

「ねぇ。この世界であたしと一緒に暮らさない？　元の世界に戻っちゃったら、あたしたち、また敵同士でしょ。戦争中だし、地上はウイルスで汚染されてるし、もう会えないわ。もし会えるとしても、あたしが地下に突入して世界最終戦争の最終幕っていう場面でよ。あたしたち、命の奪い合いをしなくちゃいけないのよ。でもこの世界なら一緒に暮らしていけるでしょ、今までどおりに」

「今さら、男と女が一緒に暮らしてどうなるんだ。不倶戴天の敵同士だろ」

「あんた、本当はあたしが欲しいんでしょう。言わなくてもわかってるのよ。そのもどかしそうな目つき、いやらしい視線、本心では人間の女が欲しいんでしょう。あんたがかわいそうだから、一緒にいてあげてもいいわ。……あたしの身体を好きにしていいのよ」

「俺は……俺はInnocent Worldをつくる。真人の顔に整形して、真人になりすまして、Innocent Worldの開発に生涯を捧げる」

「ダメよ。あんなキモイ顔に変えちゃダメ！　あたしは、あんたのそのきれいな顔が欲しいんだから」

「顔、顔、顔！　俺の顔になんの意味がある。こんな顔は遺伝子操作でつくった顔だ、つくり物の顔だ！」

「絶対、イヤ！　真人の顔は真人のものでしょ。今さらあんな顔にされたら、あんたがあんただと感じられなくなっちゃう。あたしが欲しいなら、そのままの顔でいなさいよ！　Innocent Worldの発明もダメよ！　あんなもの、打ち壊さなきゃダメよ！」

「ダメだ、真人と約束したんだ。すべての人間に幸福と救いを与えられるシステムは、Innocent Worldしかないんだ！」

「あたしはそんなもの要らないのよ、あたしは、あたしはあんたの全部が欲しいのよ！　あんな機械に、あんなプログラムにあんたを持っていかれるなんて、絶対にごめんだわ！　あんなものが発明されたから、世界がおかしくなっちゃったんじゃないの。あんたは、あたしだけ見ていればいいのよ！　あたしよりも、あんな機械が大切だっていうわけ？」
　美優が俺の体に抱きついてきた。温かくて柔らかい。小動物みたいな生臭い匂いがする。俺は美優の唇にしゃぶりつきそうになる衝動を抑えて、美優を突き飛ばした。
「勝手なことを言うな、女め。お前よりも人類の幸福のほうが大切に決まってるだろ！」
「じゃあ……ここで殺してやる。あたしを必要としないなら、あんたなんか……いないほうがいいもの！」
　美優が前かがみに突進して、俺との間合いを再び詰めながら銃を抜いた。俺は横に飛んだ。
　美優を殺せない。ダメだ。そんなことできない。
　美優の細い身体を抱きしめたい。
　ダメだ。
　俺は美優が欲しい。わかっていた。しかもあいつもそれを望んでいる。なのに、俺たちはわかり合えない。こうして殺し合うしかない。人間の女を見たら魂が汚される前に殺せ。俺が教わった行動様式は、ただそれだけだ。あいつも同じだ。
「死にたくなければ、あたしを好きだって言いなさいよ！」
「黙れ。お前のワガママにつき合ってられるか。お前から先に言え！」
「だっ、誰があんたなんか！　大嫌い、死んじゃえ！」
　一方的に俺は逃げる。
美優は俺を狩るために俺を追ってくる。
あっさり追いつかれた。
殺される？
だが美優は銃を投げ捨てて、そして、俺の胸の中にもう一度飛び込んできた
……
……はずだった。
　次の瞬間、俺と美優の身体は、引き離されていた。
　俺は額をぐりんの右の手につかまれ、美優も左右のこめかみをぐりんの左手の指で挟まれて締め上げられていた。俺も美優もぐりんに片腕で空中に持ち上げられ、地面から離れた脚をみっともなくばたつかせて虚しくもがいた。
「なっ、何すんのよ、このアホ女。離しなさいよっ！」
「やめろ、ぐりん。どうしたんだっ、離せっ。俺と美優を離せ、降ろせっ！」
　ぐりんはいつもどおり、無表情なままで能天気にしゃべりはじめた。
「予備プログラム、発動！　予備プログラム、発動っ！　真人様がお亡くなりになりましたので、スペアとして送り込んでおいた明良先輩の体と頭の中を完全改

造して、真人様の人格をインプットしてしまいまーす！」
「な、なんだって？　スペア？」
「そうなの。先輩はー、実はー、真人様が未来女にやられちゃった場合のスペアとして育てられてきたのでーす。ちゃっちゃっと記憶を全部消して、真人様の人格を上書きして、顔も真人様そっくりのキモメンにして、体型も変えて、それで完成！　明日から先輩には、真人様としてInnocent Worldの開発に勤しむ生活をしていただきまーす」
「ちょっ……あっ、あたしは関係ないでしょ、あたしはっ！　離せ、このへっぽこプログラム女！」
「美優さんも顔と頭の中を改造します。で、明日から桧山玲於奈として生きてもらいまーす。それで帳尻が合うから」
「帳尻って、何の帳尻よっ？」
　まさか。さっき、ぐりんがマンションに戻って来たときにたくさん持っていたビニール袋の中身は、バナナじゃなく……。
　そういえば、真人が拒否反応を起こして自分の家から飛び出したあと、ぐりんが俺のマンションに現れるまでの間に不自然なタイムラグがあった。
　ということは、玲於奈はもう……。
「ぐりん、お前、玲於奈を殺したなっ？　なぜだ、どうしてだっ？」
「だってあの女、真人様が前の顔に戻ったときのショックで、元の人格と記憶を取り戻しちゃったんだもん。話がややこしくなるから始末しちゃった。もちろんそれも予備プログラムで指示されていたとおりの行動だよっ」
「そうか、『もう遅すぎる』って、そうか、そうだったのか……ぐりん、なぜ真人を整形した？　お前、あいつの正体を知っていて二度目のオペをしたな！　真人を守る、それがお前の……」
「えー。だってボクは人間じゃないから、フェミィだから。ルールその二の『殺さなければならない真人様の敵である人間』の中にはボク自身は含まれません。故にこの場合、ルールその一『真人様に逆らってはいけない』が適用されるんだよっ」
「それはお前の拡大解釈だ！　誤解だ、曲解だっ！」
「ブーブー。都合のいいときだけボクを人間扱いしないでよ。ずるいよぉ、明良先輩」
　ああ。
　俺は今、記憶を消される。俺の同胞だと信じていた連中がつくり出したプログラムによって。そして、美優も記憶を消される。俺たちの感情も、欲望も、希望も、思い出も、すべてが消えてしまう。深層意識の一番深い奥底に封印されて、二度と取り戻せなくなってしまうのか。
　イヤだ！
　真人。お前はどうして思い出せなかった。お前は、なぜ取り戻せなかった。お前の目の前にその人はいたんだ。手を伸ばせば触れられる距離にいたんだ。なぜ

お前は逃げ出したんだ。
　俺は違う。俺は……！
「俺は忘れないぞ、忘れない！　美優、俺は、俺は、お前を……」
「うるさい、うるさいっ！　もう遅いわよっ！　嫌い、あんたなんか、大嫌いっ！」
　美優の頬を伝う涙。なんて美しいんだ……なのに、すぐ横に美優がいるのに、俺はもう美優にキスすることもできない。涙を拭ってやることもできない。俺の中で、抑えられていた感情が、爆発した。
「美優、自爆しろ！　このままじゃ俺たちは……ここで一緒に死のう……！」
「イヤよ！　死んだらあんたに会えなくなっちゃうじゃない！　私は生きるわ！　そして、あんたを見つけてみせる……絶対に……！」
　だんだん視界が真っ白になっていく。何も考えられない。美優の生意気な笑顔も、もう……。

　最後にぐりんの声が遠くから聞こえてきた。初めてぐりんが感情を込めてしゃべっている声を聞いた。ぐりんの声は泣いてるみたいだった。
「ボクね、ホントはね。人間がダイキライなんだ。愛だの恋だの、キレイゴトばかり。ただの二十四時間発情しっぱなしの動物のくせに。豚は豚同士、仲よくしてればいいのに。ボクなんかつくらなくてもよかったのに。ボクは、ボクは……要らない子供だ……。参考文献、『境界を侵犯すること：量子重力の変換解釈学に向けて』アラン・ソーカル」

〈ブラックアウト〉

　何事も起こらないまま、大学一年目の夏休みが終わった。
　現実の人生には、ゲームみたいなイベントは絶対に発生しない。永遠に。
　孤独で退屈な日常が今日も明日もあさってもつづいていく。
　僕は鏡を覗き込んだ。どうしようもなく哀れで醜い生き物の顔がそこにあった。
　なんのために、僕みたいな醜悪な人間

が生きているのだろうか……。
何も期待するな。諦めろ。現実世界は僕の人生とはなんの関係もない。この部屋の中こそが、僕が生きることを認められている唯一の空間だ。
何も望まなければ、誰にも裏切られず、僕は傷つかない。
大学に通っているのは、単に世間体を取りつくろうため。ただ、それだけだ。それだけのはずだった。
僕は重い足を引きずって、屋敷を出た。もう九月だというのに、空はデジタルペイントで塗りつぶしたかのように真っ青。日光をさんざん浴びたアスファルトの道路は、眩暈がするような熱気を僕の虚弱な体に送ってくる。それでも誰も最近は異常気象とか言わなくなった。
大学に行けば、二次元妹研究会にも当然顔を出さなければならない。ああ、イヤだ。つらい。つらいんだ。胸が痛い。
あそこは大学の中で唯一、僕が存在を許される空間のはずだった。

でもダメなんだ。オタクの男しかいない安全な世界だと思って入ったのに。女の子がいるんだ。眼鏡の似合う優しくて素直でおとなしい女の子だ。名前は桧山玲於奈さん。彼女だけが、僕のオタク話を微笑みながら楽しそうに聞いてくれる。生まれて初めて、僕と人間らしい会話をしてくれる女の子に出会った。
僕は彼女に恋をした。ああ、少しばかり人間らしく扱われただけで、僕はのぼせ上がり、舞い上がって、結局は桧山さんに不快な思いをさせて傷つけてしまうんだろう。
夏休みの間、僕は部屋に閉じこもって、彼女への煩悩を消し去ろうと努力した。
でもダメだった。日ごとに桧山さんへの想いがふくらみつづけるという逆の結果に終わった。
苦しい。いったいどうすれば僕はこの苦しみから解放されるのか。
告白してフラれれば楽になれるのだろうか。しかしそれでは桧山さんを傷つける。それに、楽になるどころか、もっともっと苦しくなるかもしれない。
僕には二つの選択肢しかない。告白して苦しむか、我慢しつづけて苦しむか。
どうして僕はこんな顔に生まれ、こんな性格になってしまったんだろう。明良みたいなイケメンに生まれていれば、性格だってもう少しはマシなものになっていたんだろうか。
苦しい。桧山さん、涙が出るくらいに桧山さんが好きだ。でも、彼女は絶対に僕を愛さない。僕には彼女に愛される資格がない。
理由？　顔が醜いから、性格が腐ってるから？
違うね。もっと根本的な理由があるんだよ。それがなんだかわからないけど、絶対的な確信だけは感じているんだ。
そう、僕には資格がない。
「あんたが今岡真人ね、外道成敗！」
えっ？
頭の上から女の子の声が飛んできた。

ふと見上げると、緑色の光沢を放ちつつもヌメッと濡れたようなエナメルの全身スーツに細い肢体を包んだツンデレショートカットツリ目の少女が空から降って来て、猛スピードで今や過去の遺物になりつつある古びた電話ボックスのてっぺんに落下した。

　電話ボックスの天板は無残にひしゃげたが、女の子はなぜか無傷だった。

　地球に落ちてきた少女？

「だ、誰、君は？」

「あたし？　あたしの名前は、藪香織。今岡真人、あんたを殺しに来たのよ！」

　香織と名乗った宇宙人みたいなコスプレの女の子は、電話ボックスの上から道路へ颯爽と飛び降りると、「宇宙ガン」としか形容のしようがない恥ずかしいデザインの銃を僕の頭に突きつけてきた。

「ちょ、ちょっと待って！　どうして僕が外道なの。なぜ殺されるの？」

「あんたは将来、誰にも愛されない自分の孤独をまぎらわせるために、おそろしいひきこもりシステムInnocent Worldを開発するのよ！　一度そのシステムにアクセスした人間は現実に復帰できなくなり、世界は崩壊……」

「ええっ？　僕、そんな危ないものつくらないよっ！」

「つくるのよ、将来！　あまりにモテなくて孤独に耐えかねて、仮想世界で仮想の恋人と暮らせるバーチャルシステムを発明するのっ！　その結果、あたしたち女は男たちに見捨てられて悲惨な歴史を辿る羽目になるの！　だからヤケクソであんたを殺すの！」

「待って！　僕は確かに現実に絶望してはいるけど、でもまだ完全に現実を諦めてはいないよ。そうだよ、僕は現実の女の子が好きなんだ。桧山さんを愛してるんだ。まだ僕にも一筋の希望が残ってるんだよ！」

「ふうん？　じゃ、その女にさっさと告白してきなさいよ。見事に結ばれたら、見逃してあげてもいいわよ」

「本当？　あ、ありがとう！」

　僕はダッシュで駆け出した。大学のキャンバスへ向かって。

　彼女が何者なのかまったくわからない。でもこれは僕に与えられた最後のチャンスだと気づいた。

　僕は背中を押されたんだ。僕は走りつづけた。心臓が破れそうになっても全速力で走りつづけた。

　耳の奥から「さあ、死ぬのよ。死ね、さっさと死ね！」と叫ぶ声が聞こえてくる。ああ、昔どこかで聞いたことのある、懐かしい声だ。もう、何度も何度も、同じことを繰り返してきたような、そんなデジャヴに襲われた。結果もわかっていた。

　それでも僕はかまわずに研究会の部室の正面までを走り抜いた。

「桧山さん、僕は、君のこと——！」

　僕は、世界へとつながる扉を開いた。

ノベルス

キラ×キラ——僕と先輩とへんないきもの
本田 透／著　イラスト／とんぷう

東京最果ての地にある乙女の楽園「サタニック・マジェスティーズ学園」。全寮制かつ男子禁制だった学園も、不景気の波には勝てず、ついに吉良有紀ら三人の男子を試験的に迎え入れることに！　一方、学園制覇を狙う結城綺羅を筆頭にした「勝手連」は、自分たちの人気を脅かす男子を退学へ追いやるミッションを決行する！

文庫判● 680 円（税込）　発売日● 2005 年 7 月 21 日　ISBN コード● 4576051237

キラ×キラ——僕と先輩と秘密のアイランド
本田 透／著　イラスト／とんぷう

大好評「キラ×キラ」シリーズ第二弾!!

乙女の楽園・SM 学園に編入を果たしたショタっ子少年・吉良有紀。十年前に結婚を誓った美少女・結城綺羅とも再会して、これでラブラブな学園生活……のハズが、周囲からの激しすぎるちょっかいに二人っきりになれず悶々とする毎日。
ついに綺羅は有紀を連れて、結城家所有の無人島への逃避行を試みるが……。

文庫判● 680 円（税込）　発売日● 2006 年 01 月 20 日　ISBN コード● 4576060112

近刊予告　待望のキラ×キラ・シリーズ完結編！

キラ×キラ——夢の終わり
本田 透／著　イラスト／とんぷう

ついに明かされる兎呂の過去。無限連鎖の憎しみの果て、真実の愛は誕生するのか？

アンソロジー

ツンデレっ娘大集合！
本田 透　イラスト◎七海綾音　　北国秀人　イラスト◎ MOYURU/N
寿トリノ　イラスト◎神楽丸ゆに亭　　蓮海もぐら　イラスト◎よしじまあたる

ツンデレ百合ップルに幼なじみ、犬耳少女にメイドのお姉さん、突然ボクの部屋に押しかける不思議少女。個性的で魅力いっぱいのツンデレ娘を取り揃えました。どれを読んでもお腹いっぱいの全4篇。お好きな娘からお召し上がりください。新進気鋭の作家と絵師ががっぷり四つに組んだ萌えアンソロジーの登場！

文庫判● 650 円（税込）　発売日● 2006 年 03 月 20 日　ISBN コード● 4576060414

企画

妹☆コレクション
本田透と恐るべきお兄ちゃん軍団／著

究極の「妹萌え」妄想を具現化——　とってもHな「妹祭り」開催中！ ●僕の理想の妹論……妹萌えは現代社会に疲れた男達の純愛終着点！ ●妹レビュー……妹ゲームに妹映画、妹なんでも探検隊！ ●妹の達人が語る……木之本みけ先生インタビュー　ほか、妹小説・妹エッセイ・妹対談で楽しむ超ドキドキの1冊！

文庫判● 720 円（税込）　発売日● 2005 年 1 月 18 日　ISBN コード● 4576050117

姉☆コレクション
本田透と恐るべきお兄ちゃん軍団／著

ときめき姉小説、お姉ちゃんエッセイ、姉理論…　ぜ〜んぶ「姉萌え」でたのしむ本！　とってもHな「姉祭り」開催中！　本田透と恐るべきお兄ちゃん軍団がくりひろげる究極の「お姉ちゃん萌え」妄想読本！

文庫判● 800 円（税込）　発売日● 2005 年 6 月 21 日　ISBN コード● 4576051059

倉田英之と「R.O.D」特集

本田透が本誌の企画を立案した時、心に決めていた企画があった。
アニメ「R.O.D」とその作者、倉田英之の特集である。
OVA第1弾の発売から5年、その後のテレビシリーズの放送終了からもすでに2年が経過している作品をなぜいま取り上げるのか？

「それはこの作品がオタクのオタクによるオタクのための愛を描いているからです」
本田透が人生の目的を見失いかけていた時、歩みべき道を示してくれたのが、テレビから流れていた「R.O.D-THE TV-」だったという。そして、もしいまも当時の自分のような迷えるオタクがいるのなら、この特集を通じて「R.O.D」を知ってもらうことが自分に課せられた使命だ、と。
「オリと盟友、アニメ会が愛してやまない作品『R.O.D』とオタク界のジェダイマスター・倉田英之先生の魅力を余すところなく世に知らしめてやるのだ（ドドーーンッ！）」
本田透による倉田英之1万字ロングインタビューとアニメ会の「R.O.D-THE TV-」全26話イッキ観レビューを含む全16ページ。「R.O.D」に人生を変えられた男たちの愛をたっぷりとご堪能ください。

倉田英之ロングインタビュー

僕はこうしたいな、こうなりたいなと思ったことは最終的にかなうんです。ただ、ものすごい時間がかかるけど（笑）

PROFILE
1968年岡山県井原市に生まれる。高校卒業と同時に上京。4年間のバイト生活を経て、編集プロダクションに就職。そこで出会った千葉智宏氏と黒田洋介氏と独立して「スタジオオルフェ」を設立。以降、アニメやゲームのシナリオ、漫画の原作、小説と多方面で活躍。2001年より代表作となる「R.O.D」シリーズを手がけ、高い評価を得る。昨年（2005年）は「かみちゅ！」「ガン×ソード」と二本のテレビシリーズの構成を手がけた。

取材＝本田 透
HONDA, Toru
構成＝多田野雅弘
TADANO, Masahiro

本田透の人生を変えた「R.O.D」とは

倉田　何でいま「R.O.D」特集なんですか？　いや、やってくれるのはありがたいんですけど。

——僕はもともとオタク作家になりたかったんです。それでその**宣伝のために始めたサイト**で**エヴァ**のファンフィクション小説を書いたり、レビューをやっているうちに段々とサブカルだとか小難しい評論の方向に傾きかけてしまったんですね。やっぱり理屈をこねてる方がネットでは受けるんですよ。でも、それを正しいオタクの道に引き戻してくれたのが「R.O.D-THE TV-」だったんです。

倉田　ああ、バカですからね、「R.O.D」は。サブカルがつけ入る隙間が微塵もない。

——ねねね先生が小説を書きたいのに書けないところとか自分のことのように思いながら観てました。あと三姉妹の記憶が捏造されていたことが発覚したくだりで、涙が止まらなくなって「やっぱり小説を書かなければ」と思ったんです。なので「R.O.D」は僕の人生に多大な影響を与えた作品なのです。それで今日は倉田先生にデビューするまでの経歴と「R.O.D」について語っていただいて、今後の参考にしたいと思います。

＊宣伝のために始めたサイト
本田透主宰のサイト「しろはた」（http://ya.sakura.ne.jp/~otsukimi/）のこと。

＊エヴァ
1995年よりテレビ東京系で放映されたアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』のこと。哲学や心理学、宗教用語が散りばめられた設定と、多くの謎を含んだ展開でカルト的人気を得て、やがて一般層を巻き込んだ大ブームを巻き起こした。1997年の春と夏に公開された劇場版で完結した。

なりたい、じゃなくてなるんだろうな、と思った

——倉田先生が作家になろうと思ったのはいつ頃だったんですか？

倉田　いつかなー。小学生の頃は、**こち亀**の影響で警察官になりたかったんだ。両さんがボーナス出たら死ぬほど金を使ってるから「警官っていいなあ」って（笑）。で、中学生になったら知り合いのレコード屋の兄ちゃんが当時、流行ってた横溝正史のミステリを貸してくれたんだよね。それがきっかけで西村寿行や筒井康隆とかの文庫を読み出したのは大きいと思う。それで今までは漫画しか読まなかったのが一気に本全体に興味を持つようになっていろいろ集め始めた。

——でも中学生だったらお金に限度があるでしょう。

倉田　まあ、その頃には親の財布からお金を盗む方法も覚えてたし。それで買った本やレコードを人に貸して、また本買ったりしてたんで。

——なんか黒い話ですね。

倉田　いま考えるとささやかなもんですけどね。あと中学生の時、旺文社の読書感想文コンクールで奨励賞かなんかもらったんですよ。確か『戦場のメリークリスマス』の原作で。それで好きな本のこと書いて褒められるんだったら、こんないいことはないなとは思ったけど……実際に「作家になる」と口にしたのは高校三年の秋くらいかなぁ。

――口にしたって誰かに言ったんですか?

倉田　母親と担任の教師に。高校はいちおうその地方では進学校みたいなもんに通ってたんです。ほとんどは大学に進学して、残りは地元で就職みたいな。でも両方やりたくなかったんで進路相談で「作家になります」って言っちゃった。

――じゃあもう十八歳で作家になるって決めてたんですね。

倉田　いや、たぶん本気で思ったのって親を説得したその晩だけ(笑)。田舎がイヤだったんで東京に出るための口実みたいなもんで。とにかく本屋と映画館がない街には耐え切れなくなって、卒業式の次の日には何のあてもないのにもう上京してた。ただ「どんな回り道をしても最終的にはなるんだろうな」という気はしてたんです。まあ「他には何もできないだろう」っていう消極的な理由も大きいんだけど。

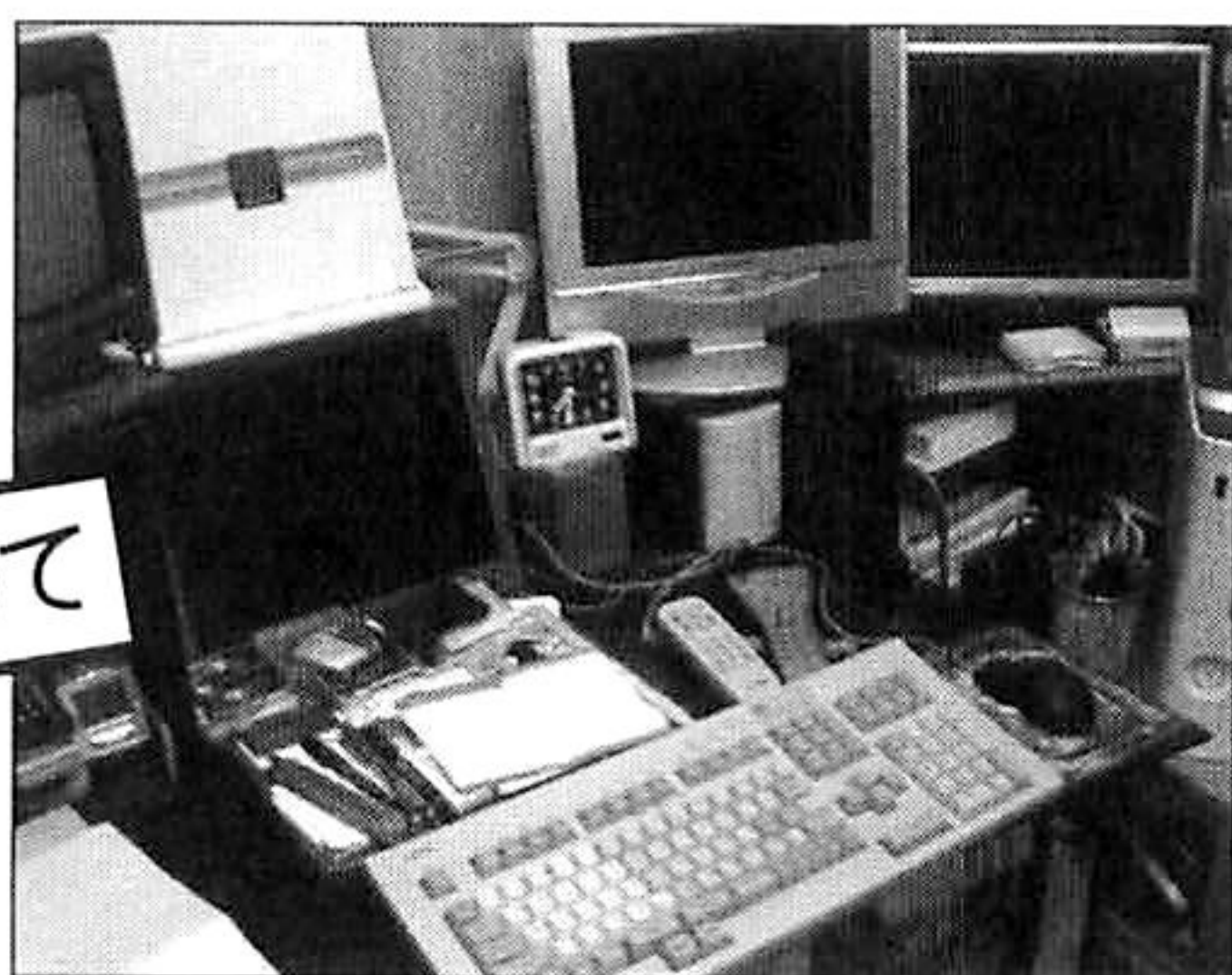
＊「こち亀」　1976年より「週刊少年ジャンプ」誌上で連載している人気漫画『こちら葛飾区亀有公園前派出所』のこと。主人公の両津勘吉は警察官でありながら競輪・競馬、模型などの趣味に給料のほとんどをつぎ込む破天荒なキャラクターである。

＊「戦場のメリークリスマス」の原作　イギリスの小説家ローレンス・ヴァン・デル・ポストによる小説『影の獄にて』のこと。日本軍の捕虜収容所を舞台とした物語で第二次世界大戦中の著者の体験が色濃く現れている。

万引きをした時 これはもうダメかなあと

――その後、いわゆるバブルの時代の東京に出てきて。

倉田　そうですね、十八の時だから一九八七年か。当時まだ再開発前で新宿のヒルトンホテルの裏側に、風呂なしトイレ共同の四畳半で三万三千円って部屋があったんで、そこを借りて。部屋に空き缶を置くと隅に転がっていく「タイタニック」みたいな部屋でしたけど。

――何のあてもなくって言ってましたけど生活費はどうしてたんですか?

二度目の上京は盗んだ親の金となぜか『火の鳥　鳳凰編』を持って

倉田　肉体労働ばっかりでしたね。最初は『フロム・エー』の編集とか、それっぽいバイトに応募してたんだけど、やっぱりバブルだったんで、バイトも大学生ばっかり採用されてて。それくらいしか雇ってくれるところがなかったというか。でも、田舎とちがって東京じゃあ観たい映画はそこら中でやってるし、欲しい本も山のようにあるし、稼いだ金は全部本や映画に消えました。当然、家賃も滞納してたんで、親に支払い通知が送られたり。

――僕も高校中退してバイトに落とされまくったんで、他人事とは思えない経歴ですが、作家になる転機が訪れたのはそのあたりですか?

倉田　いや、そういう生活を四年くらい続けてるうちに、にっちもさっちもいかなくなって一回田舎に帰るんです。

――ええーーー!

倉田　とり・みきさんの本だったと思うんだけど、あまりにお金がなくていい年して万引きして警察に捕まっちゃうんです。で、これはもうダメだなあ、田舎で地道にやり直そうと思って帰ったんだけど、悲しいことに田舎にはもっと仕事がなかった(笑)。

――田舎には本当に現場仕事しかないですからね。

倉田　僕は今でも免許を持ってないけど、田舎では車を動かせないと仕事ができないというか生活ができない。しょうがないから自動車学校に通い始めたんだけど、四年間のダメ人間暮らしの後なんで、学校っていうのが苦痛で耐え切れなくなって(笑)。それで盗んだ親の金と『火の鳥　鳳凰篇』を持ってもう一度上京。

――なんで「鳳凰篇」なんですか?(笑)

倉田　何か、あれが一番当時の心に迫るものがあって(笑)。

＊とり・みき　1979年『ぼくの宇宙人』でデビューした漫画家。『るんるんカンパニー』や『クルクルくりん』などのコメディから伝奇モノまで幅広い作風の持ち主。『DAI―HONYA』で星雲賞コミック部門を受賞。

＊「火の鳥　鳳凰篇」　手塚治虫のライフワーク『火の鳥』の中でも人気の高い一作。奈良の大仏建立にまつわる二人の男、茜丸と我王の運命を描く。

無職からいきなり映画ジャーナリスト（笑）に

倉田　二度目の上京の時は、前に入ってた高橋留美子サークルの知り合いのところに転がり込んで。その人には本当にお世話になりました。だって一時期、食わせてもらってましたもん。その人、オタクで学生なんだけど警備員のバイトとかしてて、帰ったらパスタを茹でてくれたり。で、そこに出入りしていたリクルートに務めてた他の知り合いが「これで仕事でも探せ」って持ってきてくれた発売前の「ｆｒｏｍ Ａ」に載ってた「パッションプレイ」って編プロのバイトに行き始めたんです。

――どんな記事を作る編プロだったんですか？

倉田　ゲームの攻略とか映画の紹介記事。面接に受かったら、その二日後には『ゴッドファーザーⅢ』の記者会見で監督のフランシス・コッポラを生で見てました。もう昨日まで無職だったのがいきなり映画ジャーナリスト気取りですよ（笑）。

――そこで人生が変わったわけですね。

倉田　変わりましたね。事務所自体はそんなに大きくなかったんだけど、**千葉さん**や**黒田さん**がいましたから。そこで文章の書き方や、この業界の仕事の仕方をいろいろ教えてもらっているうちに千葉さんと黒田さんに、独立するんだけど一緒に来ないか？　と誘ってもらえたんで、三人で「スタジオオルフェ」を作ることになったんです。

――スタジオオルフェって、最初その三人の編プロだったんですか？

倉田　すぐに**長井さん**が入って四人になったけど、基本的にはスタジオオルフェって今でも編プロですよ。最初にやった仕事は『ふしぎの海のナディア』のＣＤ‐ＢＯＸのライナーだったかな。だからあの時は俺と黒田さんがライターとして庵野秀明さんと樋口真嗣さんにインタビューしてる（笑）。

――今では「エヴァ」と「**ローレライ**」の監督に、「**おねティ**」と「Ｒ．Ｏ．Ｄ」の脚本家が！　すごい四ショットですね。それじゃシナリオを書くことになったきっかけは……。

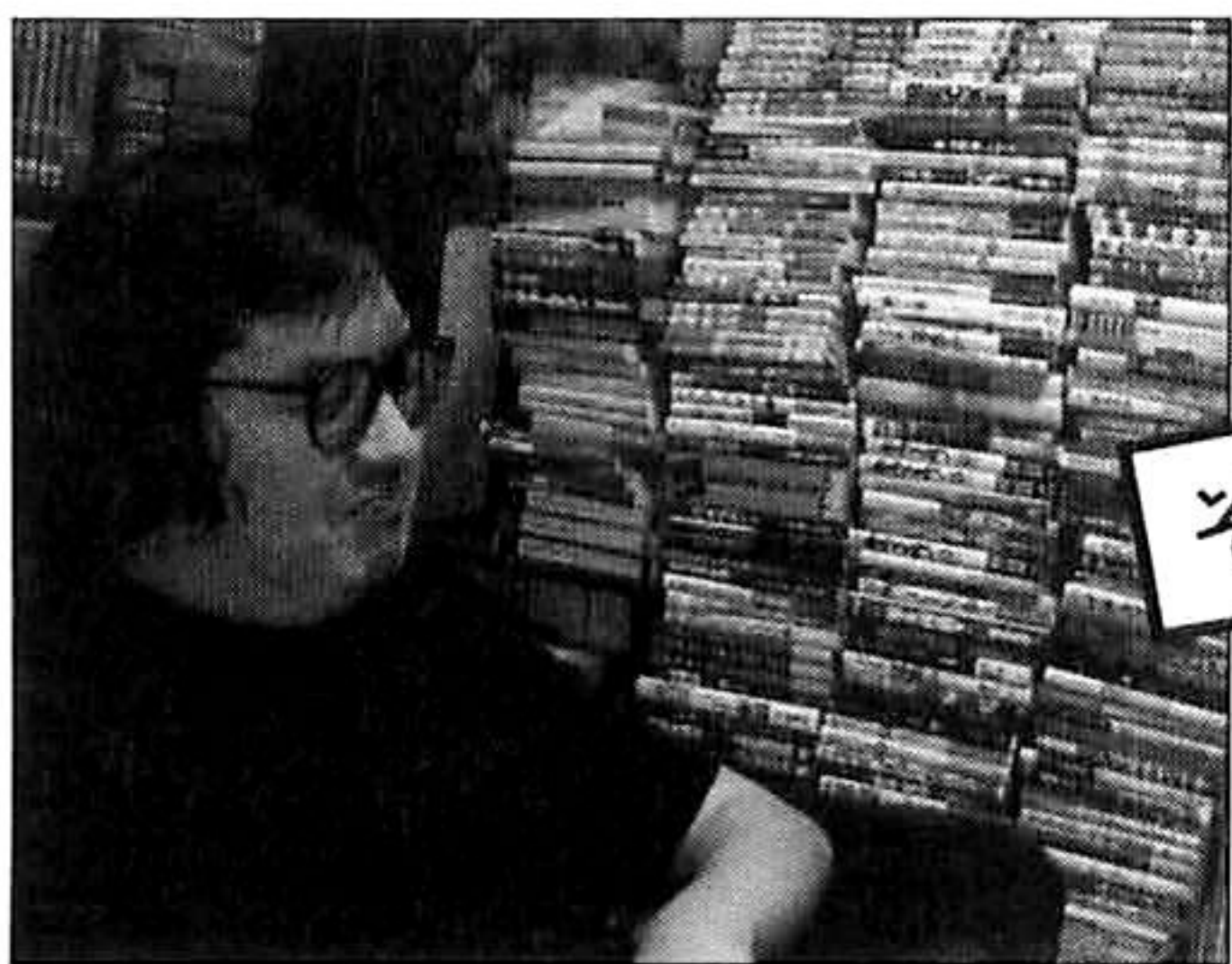
倉田　パッションプレイ時代に黒田さんがＰＣゲーム版『ああっ女神さまっ』のシナリオをやってて、その制作会社が**ＡＩＣスピリッツ**だったんです。そのつながりでゲームの『**プリティサミー**』や『**大運動会**』のシナリオに参加することになった。

――じゃあ一番最初に書いたアニメのシナリオが『プリティサミー』ですか。

倉田　いや、アニメは『**ゆんゆん☆パラダイス**』が最初ですね。**雑破業**さんの原作が好きだったんで、企画書を**ピンクパイナップル**に持っていったら通っちゃった。

――**滝本君**が大好きな『ゆんゆん☆パラダイス』のシナリオが初仕事！　なんか大いなる電波を感じますね。それまでアニメのシナリオを書いたことはなかったわけですよね。

倉田　んー、アニメはないですけど、ゲームはもうやってたし（会社

黒田さんを床に寝かせて
その手を自分のケツにあてて
「ああ、届きますな」と

の）隣の席で黒田さんが『**天地無用！**』を書いてるの見てたし。あと十八禁なので、やらなくちゃいけないことは決まってるから、そこまでの段取りと原作とのすりあわせを考えればなんとかなるかなと。あと俺は覚えてないんですけど黒田さんが言うには、当時いきなり俺が「黒田さん、そこに寝てください」と言って、黒田さんが寝転んだら俺がその股間の上にまたがって、黒田さんの手を自分のケツにあてて「ああ、届きますな」と呟いて仕事に戻ったらしい。多分その体位でアナルに指が届くかどうかを確認したかったと思うんだけど。

――まさに手探りで書き方を学んだ、と（笑）。その後、アニメのお仕事は「プリティサミー」を経て、初めてシリーズ構成を担当する『大運動会』へと……。

倉田　『大運動会』は**林さん**が『**エルハザード**』の次にやる作品ということでＡＩＣから話が来て、プロデューサーの吉田さんが「君にぴったりの企画があるんだが」と言うから「どんな企画ですか？」と聞いたら「バカな企画だよ」。ああ、そりゃぴったりだなあと思って引き受

けたんです（笑）。当初の企画書には「宇宙」「三国志」「運動会」って書かれてあって。いろんな学校が宇宙にあって集まって運動会をやるってプロットだったんだけど、それをみんなで肉付けしていくうちに今みたいな形になったんじゃないかな。

――それでOVAからテレビシリーズへと進出して、色んな作品を手がけるわけですね。

＊千葉さん
スタジオオルフェ代表取締役社長、千葉智宏氏のこと。著作も多く『機動戦士ガンダムSEED DESTINY ASTRAY』シリーズのシナリオでも活躍中。

＊黒田さん
スタジオオルフェ取締役、黒田洋介氏のこと。『ハチミツとクローバー』や『ホーリーランド』など数多くのアニメ・実写作品のシリーズ構成やシナリオを手掛け、高い評価を得ている。

＊長井さん
スタジオオルフェでライター兼編集業務を担当する長井仁氏のこと。

＊『ローレライ』
2005年に公開された樋口真嗣氏の初監督作品。福井晴敏氏の小説『終戦のローレライ』を映画化したもので、興行収入25億円をこえるヒット作となった。

＊『おねティ』
2002年に放送された宇宙人の女教師と生徒との関係を描いたテレビアニメシリーズ『おねがい☆ティーチャー』の略称。黒田洋介氏が脚本を、羽音たらく氏がキャラクターデザインを担当した。

＊AICスピリッツ
『天地無用！』や『神秘の世界エルハザード』など90年代を代表するアニメを多く生み出したアニメ制作会社AICの一スタジオ。当時はまだ少なかったPCゲームなどを多く世に送り出した。

＊『プリティサミー』
『天地無用！』のキャラクター、砂沙美を主人公に用いたスピンオフシリーズ『魔法少女プリティサミー』のこと。ゲームやOVA、テレビアニメなど多くのメディアで展開した。

＊『大運動会』
全宇宙でもっとも身体能力の優れた女性「宇宙撫子」目指して頑張る女の子たちの姿を描いたSFスポ根シリーズ。「プリティサミー」同様、多くのメディアで展開した。

＊雑破業
作家。1993年『ゆんゆん☆パラダイス』でデビュー。『おねがい☆ティーチャー』のノベライズや漫画『ちょこッとSister』の原作など著書多数。

＊ピンクパイナップル
90年代のアダルトアニメ界を席巻した美少女アニメレーベル。ゲームや漫画など原作を持った作品をアニメにしたものが多い。

＊滝本君
2001年に『ネガティブ・ハッピー・チェンソー』でデビューした作家・滝本竜彦氏のこと（163頁に本田透との対談収録）。その後も『NHKにようこそ！』『超人計画』などの問題作を次々と発表。2006年、現在もっとも新作が待たれる作家の一人。

＊『天地無用！』
岡山県の神社の跡取り、柾木天地と彼を取り巻く美女宇宙人たちとの波乱万丈の日々を描いた90年代を代表するSFアニメシリーズ。OVAとテレビアニメシリーズを基盤に数多くの外伝やスピンオフが制作された。当時、黒田氏が書いていたのはOVAシリーズの第二期ではないかと推測される。

＊林さん
『大運動会』の監督、原案を担当した林宏樹氏のこと。他にもOVA『天地無用！』第一期シリーズや『神秘の世界エルハザード』など多くの作品を手掛けている。

「R.O.D」とは？

大英図書館特殊工作部に所属し、紙使いの特殊能力を持つエージェント、読子・リードマンの活躍を描いたシリーズ。「文系」「眼鏡」「喪女」という喪男にとっての三種の神器を兼ね備えた究極の萌えヒロイン、読子は一部（主に秋葉原方面）に熱狂的な支持者を持つ。企画立案者である倉田氏は全シリーズの原作、シナリオを担当した。

DVD

R.O.D
―READ OR DIE―
監督：舛成孝二
アニプレックスより発売中

2001年より発売された記念すべきシリーズ第一作。平賀源内やファーブルといった偉人たちのDNAを持つ異能力者の野望を阻止するため、読子たち大英図書館特殊工作部のエージェントが戦う。全三巻。

DVD

R.O.D
―THE TV―
監督：舛成孝二
アニプレックスより発売中

2003年より放送された全26話のテレビシリーズ。OVAシリーズから5年が経過した世界を舞台に、新たな紙使いアニタ、マギー、ミシェールの三姉妹と女流作家菫川ねねね、読子たちが大英図書館特殊工作部と戦う姿を描く。全九巻。

読子は最初花子になる予定だった

——その後「まりんとメラン」や「今、そこにいる僕」などを経て、ついに「R.O.D」に至るわけですが、これはもちろん倉田先生のオリジナル企画ですよね？

倉田　あー、これはですね、話すと長くなるんです。最初の企画はそれこそ「大運動会」のテレビが終わった直後くらいだから九八年には始まってるんで。

——もう、その時点で読子さんが？

倉田　いや、最初に考えてたのは「平賀源内が主役のチャンバラアニメ」だった。

——あ、平賀源内が最初だったんですか。

倉田　そう、エレキテル。ただそれはアニメの企画としては難しいだろうと、ポシャっちゃった。

——なぜでしょうー。

倉田　うーん、やっぱり主役が平賀源内だと企画としてはヒキが弱いしね。「メガミマガジン」には載らんよなあとか。

——それは確かに（笑）。

平賀源内が主役じゃ「メガミマガジン」には載らんよなあ、と

倉田　その後、スタジオオルフェに「映画を作りませんか」って企画がきて、『ジャイアント・ロボ』みたいなアクションをやりたいって話になった時、「ロボ」の十傑衆に匹敵するような悪役として考えたのが偉人軍団だったんですわ。誰もが知っている偉人が、現代によみがえって悪いことをするのが基本コンセプトですね。

——「偉い人が悪いことをしている」ってOVAのジョーカーの台詞ですね。

倉田　それで分離する飛行機で襲ってくるライト兄弟とか、電球型の爆弾投げてくるエジソンとか、重力を使って空母を持ち上げるニュートンとか、偉人伝に出てくるような敵（笑）を次々に考えていって、そういうのに対抗するのなら体育会系じゃなくて文系のヒーローだろうと。

——そこで生まれたのが読子さん。

倉田　いや、最初主役は男で考えてたんだ。横山光輝の漫画に出てくるみたいな黒尽くめの愛読家のエージェント、ドニー・ナカジマが紙を使って戦う！　俺はもう「これはイケる」と思って企画書を持っていったんだけど、担当の人が「持って帰って検討します」って言ったまま……それ以来音沙汰がなく（笑）。

——どれくらい放っておかれたんですか？

倉田　いや、いまだにない（笑）。まあさすがに四カ月くらい何も返事がなかったから、これはボツなんだろうと諦めて。ちょうどその頃ウチの会社にいまのレーベル・アニプレックスから「OVAの企画はないか」という話があったんで、そっちに持っていくことにしたんだ。ただ、その時に一つアニプレックス側からの条件があって、それが主役を女の子にしてくれってことだった。

——じゃあ、その条件がなければ読子さんは生まれなかったわけですね。

倉田　けど結果的には良かったと思いますよ。ビブリオマニアって男ばかりなんで女にしたら新鮮だったし。あ、そうだ。最初は読子って名前じゃなかったんだ。

——なんて名前だったんですか？

倉田　最初はね、花子。企画書の段階では思いつかなかったんで適当につけてたんだ。

——それ通らないで本当によかっ

COMIC
R.O.D
—READ OR DREAM—
画：綾永らん
集英社 ヤングジャンプ・コミックス・ウルトラ刊行

「R.O.D —THE TV—」の世界観をベースにした外伝的作品。紙姉妹探偵として依頼を解決する三姉妹の活躍を描く。一話完結主体のコメディ。全四巻。

COMIC
R.O.D
—READ OR DIE—
画：山田秋太郎
集英社 ヤングジャンプ・コミックス・ウルトラ刊行

小説版の世界観をベースにねねねとの出会い、人類の叡智「埋蔵図書館」の発掘などを描いたオリジナルストーリー。かつての婚約者ドニーとの過去はファンの間で話題になった。全四巻。

NOVEL
R.O.D
—READ OR DIE—
イラスト：羽音たらく
集英社スーパーダッシュ文庫刊行

女子高生作家だったねねねと読子の出会いから、その後の大英図書館と中国の秘密結社・読仙社との戦いを描く。OVAやテレビシリーズとキャラクターは共通だが、設定は必ずしも一致していない。2006年夏に最終巻12巻発売予定。

たですよ！

倉田　いや、いまそんな名前のヒロインいないでしょ、だから絶対覚えてもらえるだろう、と。でも企画書をアニプレックスに持ってく途中で「本が好きなんだったら読子にした方がいいぞ」って『ブルース・ブラザース』みたいな天啓が降りてきて。

――いや、本当に「紙」の啓示だと思います。

＊『まりんとメラン』
少女・まりんと生体兵器メランの種を越えた絆を描き、2000年に放送されたテレビアニメシリーズ。監督は米たにヨシトモ氏。キャラクターデザインの木村貴宏氏とアクションマスターのまさひろ山根氏は後に「ガン×ソード」にも参加。

＊『今、そこにいる僕』
1999年に放送されたテレビアニメシリーズ。異世界に飛ばされた少年が否応なく戦争にまきこまれて過酷な体験をしていく様を描く。監督は大地丙太郎氏。

＊「メガミマガジン」
1999年に創刊された学習研究社発行の美少女キャラクター雑誌。毎号、充実したピンナップやポスターを収録しており熱狂的なファンも多い。

＊「ジャイアント・ロボ」
この場合は1992年から発売されたOVAシリーズ『ジャイアントロボ THE ANIMATION―地球が静止する日』を指す。

＊「ブルース・ブラザース」
1980年に公開されたジョン・ベルーシとダン・エイクロイド主演の映画。主人公たちはジェームス・ブラウン扮する神父の前で神の啓示を受けてブルースバンドを再結成する。

「本が好き」なことには自信があったんで

倉田　実は「R. O. D」って、スタジオオルフェとして受けた企画だったんで、当初の予定だと俺が小説と漫画の原作を書いて、アニメのシナリオは黒田さんが担当するって話だったんだ。

本当なら「R.O.D」は黒田洋介脚本になるはずだったんだ

――えええ！　そうだったんですか!?

倉田　ただまず黒田さんがシナリオを書くにあたって、キャラクターの核になるようなものを知りたいから、それが分かる文章を書いてくれと言われて、大元になる小説を書き始めた。それはいま集英社のスーパーダッシュで出てる小説の第一巻みたいなもんなんだけど、最初はすごい試行錯誤してた。なんせ読子は責めキャラだったし。

――いまからはまったく想像がつきません！

倉田　内容はほとんど同じなんだけど。受けキャラのねねがさらわれて、アクティブな読子が助けに行くんだけど、書いていて微妙な違和感があって。それで思い切って、それはなかったことにして小説の二巻の「でっかい本屋でダイハード」ものを書き始めたら、読子の性格が百八十度変わっちゃった。本以外はダメ人間の読子にねねがツッコむという。でも、やっぱりこっちの方がしっくり来たんだよね、俺自身がそういう性格だというのがあるんだと思うけど。

――やっぱりキャラクターは作者の姿を映す鏡ですねー。

倉田　そうこうしているうちに、やっぱりこれは自分で書かなくてはいけないんじゃないかって気がしてきた。少なくとも他の人に任せてたら、自分が満足できるものはできないだろう、と。それはシナリオの腕とかじゃなくて、これだけ「本」をテーマにした作品だから、本好きな人が書いた方がいいだろうと。で、俺は「本が好き」という点だけは黒田さんや他の脚本家より上の自信があったんで。

――黒田さんは、その時なんて言ったんですか？

倉田　「すいませんがOVAも書かせてくれませんか」と言ったら、「それがいいと思うよ」と言ってくれたよ。アニプレックスは「黒田洋介脚本」にちょっと未練があったみたいだけど（笑）。

＊ダイハード
1988年に公開されたブルース・ウィルス主演の映画『ダイ・ハード』のこと。アクション映画界に与えた影響は大きく、閉鎖

空間で展開される作品を「ダイ・ハード」ものと称することも多くなった。

発売前に売り切れたOVAの第一巻

——完成したOVAを観た感想は?

倉田　すごいなあ、と。OVAの一巻って今までに百回以上は観てるんですよ。もらったその日に七回観て、一週間で三十回は観た。いままで自分が関わったアニメでこんなに見返したってないよ。

——初めて企画から立ち上げたオリジナル作品という感慨深さからですか。

倉田　それもあるけど、単純に出来がよかったという方が大きいと思う。アニメって共同作業の産物だから、個人の思い入れを込めて観るのは、実はそんなに良くないことだと思ってるので。一人のオタクである俺が満足できる内容か、っていうので評価した時「R.O.D」はよく出来てたと思いますよ。

——僕はテレビから観始めたんですけど、アニメ会さんとかOVAからかなりハマってたらしいですしね。

倉田　何だか濃いアニメファンの間では話題になってくれていたみたい。ロクに宣伝しなかったのにOVAの第一巻は発売前日に売り切れちゃったくらいだし。

——発売前日って、予約とか早売りだけでってことですか!?

倉田　もちろん初回本数がかなり絞られたってのがあるんだけど。なんせ初回って完売しても制作費がペイできないような数だったからね。ただOVAの、しかもオリジナル作品としては珍しい売れ方だったので、このあたりから「続編を」という話が出てきた。

なぜかアメリカで大人気の「R.O.D」

——OVAの三巻が二〇〇二年二月発売で、「R.O.D-THE TV-」の放映開始が二〇〇三年十月ですから、続編の話がすぐ出たにしてはちょっと間が空いてますよね。

倉田　続編をやろうという話はすぐに出たんだけど、媒体を何にするかがなかなか決まらなかったんで。アニプレックスとしては最初OVAを再編集して新作短編をつけた劇場版を作ろうと思ってたみたい。その次にOVAの新シリーズの話になったのかな。ただ監督の舛成さんも俺も、OVAでこれ以上、内容やクオリティを上げることは難しいと思ってたんで、今度やるんだったら話を詰め込めるテレビでやりたいと思ってた。ただアニプレックスとしてはOVAでそれなりに売れることは分かったけど、テレビにしてどれだけの人が観てくれるのか判断できなくて、結局OVAの三巻が出た後まで決まらなかったのかな。ただ、その分準備期間はたっぷりとれたんで結果的には良かったと思うよ。キャラクターの調整もじっくりできたし。

——その段階で大きく変わったキャラクターっていますか?

倉田　いちばん変わったのは次女のマギーじゃないかな? 最初キャラクターデザインの羽音さんがあげたマギーってジュニアのデザインだったんだよね。性格も最初はあそこまで内気じゃなかったし、タバコを吸うという設定だった時もあった。けど「R.O.D」のスタッフもほとんど吸わないし、本好きな人ってあんまりタバコ吸わないんだよね。

——紙に臭いがつきますからね。

倉田　あ、あと、この時期には「R.O.D」でコンベンションでアメリカに呼ばれたんだ、その頃まだ北米版のDVDは出てなかったのに(笑)。結局そのコンベンションで「その年、日本で発売された中でもっとも優れたOVA」って賞を貰ったんだけど。質問コーナーで最初の客に「なんでDVDにはねねねが出ないんですか?」って訊かれて「ああ、オタクは海を越えるんだなあ」と感慨深くなった反面「あなたたちは一体どこでそのDVDを観たのかしら?」という素朴な疑問も(笑)。

——恐ろしいですね、オタクのネットワークは。

***舛成さん**
「R.O.D」シリーズの監督、舛成孝二氏のこと。スタジオゑびすに所属し、これまで多くのアニメの監督、演出、脚本を担当。最近作は倉田英之氏が脚本を担当した『かみちゅ!』。

だらだらと諦めなければ夢はかなう?

——で、いよいよテレビシリーズの放映となるわけですが。

倉田　でも、放映が始まる前日までファンからボロクソに言われてましたよ。三姉妹のキャラが公表されたら、「R.O.Dじゃねえよ、こんなのって」って意見が圧倒的(笑)で。いや、「R.O.D」を好きなのはいいけど、お前がそれを決めるなって。

——(笑)、まあ確かに。

倉田　ただスタッフにも制作前に集まってもらった時、「続編決まりました」って言ったら、みんな「おお!」。「テレビです」で更に「おお!」。で「これが主役です」って三姉妹見せたらみんなから「なんで読子じゃねえんだ?」って訊かれましたけど。雑誌の取材でも「なんで読子は出ないんですか?」って訊かれて、そんなもんね、出るって言ったらネタばれになるじゃねえか!

——それだけ読子さんが愛されてるってことで。でも一話が放送されたら反応が変わったでしょ。

倉田　ガラっと変わりましたね。だ

から俺の中の黒い部分が「世間は信用できねぇ」と。誰でもいいから、一言、俺たちにすまんかったと言う人はいないのか。

――僕も一話を観た時、このテンションが二十六話も続くのかと不安になりましたよ。

倉田　いや、続くわけはないですよ、あんなのは（笑）。あれは僕も舛成さんも一話目は特別なものだと思ってるからこその作りです。それにOVAみたいなアクションを二十六話やるのはムリだから。動かさなくてもすむように主人公チームの人数を多くして会話劇にしてるんだし。ただ一つ日常描写って、思った以上に（セルの）枚数を使うのは誤算だった。

――僕やアニメ会さんもそうですけど「R.O.D」のファンって濃い人が多くありませんか？　どのキャラが好きかで何時間でも喋れるような。

倉田　ウチの弟から**アニメ会さんのそのイベント**の話を聞いた時、都市伝説かなにかだと思った（笑）。聞いた時、もう放送が終わって一年くらい経ってたし、日本ではアニメのイベントに取り上げられることもほとんどなかったんで。まさかいまだにこうして特集が組まれるとは想像もしてなかったです。ただ最近分かったことは「R.O.D」のファンって、普通のアニメよりかなり年齢層が高かったり、自分のダメな部分を自覚している人が多いね。なんか昔、借金しながら本を買ってた俺みたいな匂いがする。どこの読者アンケートでもファンの職業欄で一番比率が高いのは無職だし。

たぶん井上（雄彦）さんのバスケットが、僕にとっての本だったんだと思う

――最後に倉田先生のようにオタクとして成功する秘訣を教えてもらえますか？

倉田　えーとここまで話して俺、自分が成功したとはとても思えないんですが。

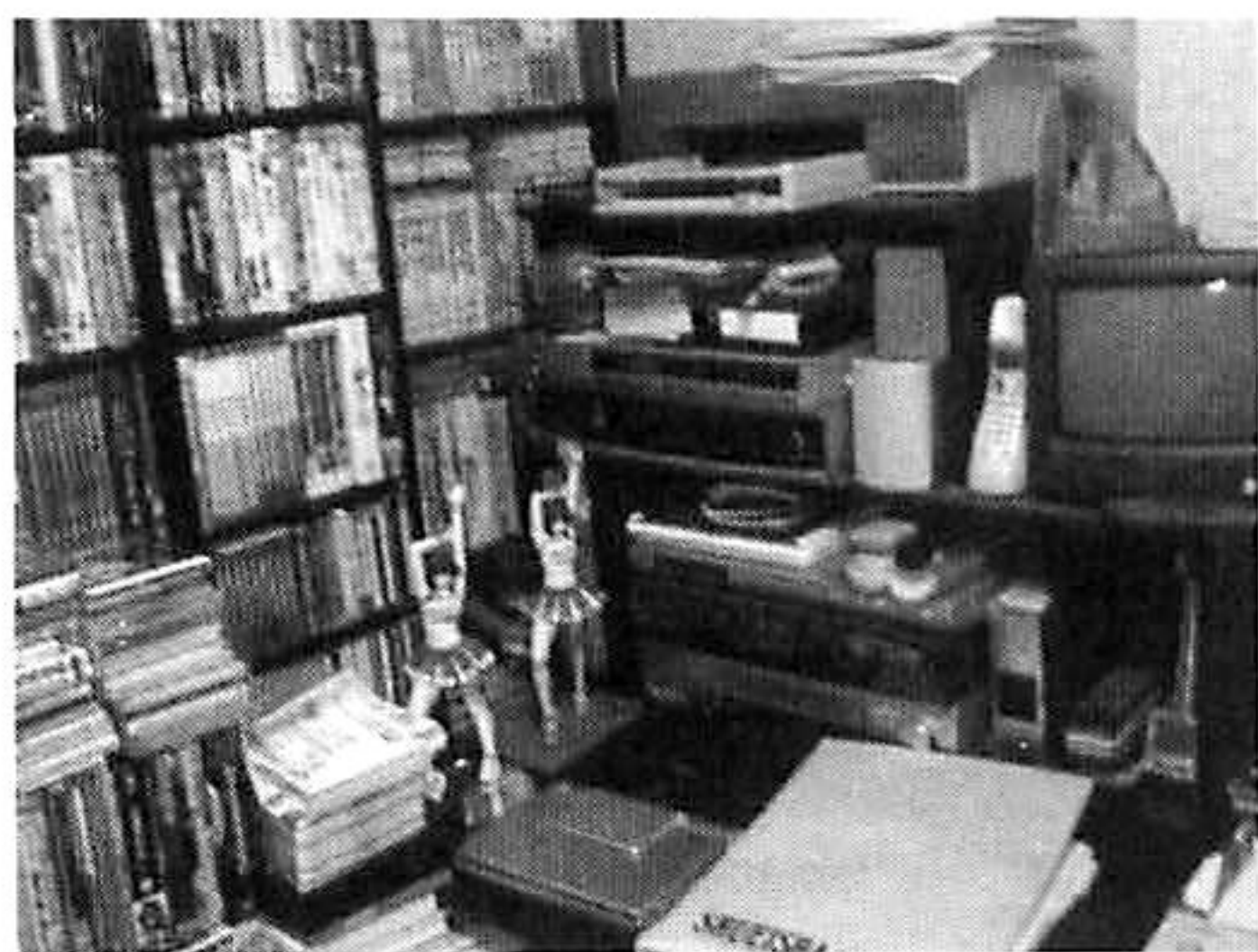
――何言ってるんですか！　ものすごい成功者ですよ！

倉田　もしそう見えるとしたら、ようやく自分の好きなことをムリしないでやれるようになったってことじゃないかな。好きなことしかやりたくないんじゃないけど、好きでないものをムリしてやったってロクなことにならないのが分かったというか。確か**井上雄彦さん**が、『カメレオン・ジェイル』で打ち切りをくらっても落ち込みはしなかった、自分にはまだ一番好きなバスケットってテーマがあるから、と言ってたんです。たぶん井上さんのバスケットが僕にとって本だったんだと思う。自分が好きなことを一所懸命書いたら、それを面白がってくれる人がちゃんといたというのは嬉しいですね、いや本当に。あと不思議なもんで、僕はこうしたいな、こうなりたいなと思ったことは最終的にかなうんです。ただ、それにはものすごい時間がかかるけど（笑）。

――（笑）。

倉田　「諦めたら、そこで試合終了」って、安西先生じゃないけど、二十年くらい「作家になりたい」と思ってたら俺が無職からここまでなれたんだからダラダラーっと粘ってたら、いつかはなりたいものになれるんじゃないかなあ。諦めないって考えると気負いが入っちゃうけど、好きだからやってると思うと、楽しんで続けられるよね。だから好きなことをダラダラやるのが成功の秘訣ってことで。

＊アニメ会さんのそのイベント
2004年6月と7月に行なわれた「R.O.D-THE TV-」をテーマにお笑いユニット・アニメ会が「どのキャラが好きか」と語り明かしたトークイベント。当初は6月の一回のみの予定だったが「話し足りない」と次のイベントでも「R.O.D-THE TV-」話に終始。その時間は合わせて五時間を越えた。

＊井上雄彦さん
もはや説明不要の漫画『スラムダンク』の作者。『カメレオンジェイル』は危険請負人を主人公にした井上氏の初連載作品。残念ながらわずか12週間で打ち切りになった。

アニメ会の「R.O.D-THE TV-」全26話イッキ観レビュー

「R.O.D-THE TV-」の「どのキャラクターに萌えているか」を話すだけでイベント二回、計5時間にわたり語り明かしたというトークユニット、アニメ会。筋金入りのオタクである彼らによる「R.O.D-THE TV-」全話レビューなのだが、いったいもう何度見直したのか本人たちも覚えていない状況なので、話が盛り上がるのか正直不安だったが……

第一話「紙は舞い降りた」

十三歳でデビューして以来、天才少女作家と呼ばれていた菫川ねねね。彼女は自作のサイン会のために訪れた香港で、ガイドとして雇われた三姉妹アニタ、マギー、ミシェールと出会う。

国井咲也（以下：国井） いや観入っちゃいましたね。

サンキュータツオ（以下：タツオ） 本放送の時も集まって観てたけど、エンディングまで一言も口聞かなかったもんな。

三平×2（以下：三平） 僕らはOVAなり小説から入ってるんで、読子さんが出ないって分かって、最初は正直テンションは落ちてたんですよ。んで、観てみたら、一話目からこれはスゴイって。

タツオ 逆にこれで二十六話できるのか、と。最初から最終回みたいなテンションだからね。

沖縄の比嘉（以下：比嘉） 最初のシーンは重要ですよね。これでかなりミスリードされたから。

亀子のぶお（以下：亀子） 虫は出てこないんですか？ これ。

三平 お前何のアニメ観てるつもりなんだ（笑）。「カミキング」か？

第二話「ダメ人間ども集まれ」

ねねねのボディガードとして日本に滞在することになった三姉妹だが、当座の支度金をあっという間に使い果たしてしまい、何とかねねねのマンションに居座ろうとするが……。

タツオ 二話の見どころはねねね先生のマンションに転がりこんだ三姉妹の傍若無人っぷりですかね。

三平 一話とはうって変わったこのまったり感。最後までもう戦わなくていいとさえ思ったもん（笑）。

タツオ アニタ、ちょっとウザいよね、このシーン。

比嘉 おい！

三平 普段温厚な比嘉くんが怒ったの初めて見たよ！ ミシェールさんは今回の台風の目だね、一番風呂ですよ？ 人の家に来て。

タツオ 愛すべきダメ人間です。

国井 ウチにも来ないかな、三姉妹。

タツオ 三十過ぎた男が何を真剣に悩んでるのか（笑）。

第三話「神保町で逢いましょう」

ねねねを探しに来たはずが、逆に神保町の書店のトリコになってしまうミシェールとマギー。一人仕事をまっとうしようとするアニタは謎の少年と出会う。

三平 この神保町のシーンでミシェールさんとマギーの性格が出るね。

タツオ そう、マギーはガマンするのよ、ギリギリまで。アニタに言われたから。

三平 ミシェールさんはコミケのオレと一緒だもん。絶対ガマンしない。

タツオ あと三話といえば謎の少年ジュニアの登場でしょう、三平さん（笑）。

三平 あー、でもオレ最初はジュニアのこと女の子だと思ってたから。

比嘉 女の子と思ってた方が萌えないんですね、ショタだから（笑）。

第四話「中一コース」

十三歳のアニタは、渋々日本の中学校に通うことに。香港からの転校生おまけに運動神経抜群とクラスの注目的となるアニタだが、そんな彼女を心配したミシェールが変装して学校に潜入？

三平 そして中学校編のスタート。冒頭のアニタ、野菜の切り方がぞんざいなのがいいですねえ。

比嘉 いや、これはマギーが「小さく切って」って言ったら怒っちゃったんですよ。

国井 どこまで妄想するんだ、お前は（笑）。学校の制服もかわいいな。

比嘉 ああ、同級生の久ちゃん！ これはスゴイ兵器ですよ!!

三平 比嘉君はこの時点でやられたの？

比嘉 いや、この時点ではまだですね。

タツオ できれば、この学校は学園にして欲しかった。そうすればミシェールさんもマギーも一緒に通えるのに。

三平　でもマギーは学ランの方が似合いそうな気が。後輩から人気ですよ。
比嘉　女の子をわざわざ男にすることはないでしょうに。
三平　俺、まだこのあたりでもジュニアを女の子だと思ってましたから。
比嘉　だから食指が動かなかったと。
三平　……。
国井　否定しなさいよ！

第五話「やつらは騒いでいる」

突然ねねが失踪し、途方にくれる三姉妹。そんな折に突然、本探しの依頼が入り、アニタたちはルーマニアの古城へと飛んだ！

三平　いよいよ読仙社のミッション編。
比嘉　この回のアニタは少しワガママ言うんですよね。
国井　なんか比嘉君お父さんみたいだな（笑）。
タツオ　じゃあ、しかっておいてよ。
比嘉　ダメなんです、僕叱れないんですよアニタを。
国井　なんで自分の妄想に縛られてるんだ（笑）。
三平　お前らのせいでいい台詞が聞こえなかったじゃねえか。生放送だったら殺すところだよ。
ミシェール「そりゃもう自慢の妹ですから」
三平　オレ、この台詞を聞いた瞬間だけは、マギーから浮気してミシェールさんに心が動いたね。
国井　あと、最後にみんな一緒になって眠るシーン。これでやっと家族になれた感じの重要なところです。

第六話「ライトスタッフ」

アニタの通う中学校から授業参観の案内が。しかしその授業は読書感想文の発表だった。大の本嫌いで頑なに本を読むことを拒み続けるアニタだったが、親友の久美の説得に次第に心が揺れて……。

比嘉　ああー、これ僕が久ちゃんの魅力に目覚めた回なんです。ぜひ図書室での久ちゃんをご堪能ください。ホントもう最高ですから！
タツオ　あとねねね先生とマギーのこの絡みも萌えるね。「早くしないとチューしちゃうぞ」って！
三平　どっちに萌えるかが問題だよな。仕掛けたねねね先生か、仕掛けられたマギーか。
比嘉　いや、どっちも最高ですよ。
三平　お前それしか言えねえのか（笑）。
タツオ　みんな、もっと面白いコメントしようよ、芸人なんだから。

第七話「薮の中」

再び読仙社からの依頼で本を探すことになった三姉妹。たどり着いた田舎町でミシェールが、そしてマギーがいなくなる。果たしてこの街に隠された秘密とは？

三平　話としてはシリーズの中でも異色作だよね。あと特筆すべきはマギーがパフェを食べて幸せそうな顔をするところ。そこがもう俺にとってはクライマックスでしたね。
比嘉　早すぎますよ（笑）。しかし読仙社ってどれだけ力があるんですかね。だって街をひとつ爆破しちゃうんですよ。おまけにあそこにいる人って雇われてるだけで、何の関係もないのに。
国井　確かに理不尽な（笑）。

第八話「夜に惑わされて」

最近、西浜中学で夜、誰もいないはずの図書館でひとりでに本が暴れだすおかしな現象が起きていた。アニタと級友たちが夜の学校に忍び込み、その謎を解く。

タツオ　これはオレの中では全編通して、かなり上位に来る話です。
三平　オレはこの話を見て、戻れるなら中学生に戻りたいと思った。
比嘉　ただ僕たちが中学生に戻ってもあんな甘酸っぱいことはたぶん起きないと思うんですけど（笑）。
タツオ　オレ男子校だったし。
三平　しょっぱい思い出ばかりな（笑）。
国井　ある意味では本当の意味で肝試しじゃないか。
比嘉　給食のシーンもよかったですね、アニタが初めてみんなのために何かやろうとしているのが。
国井　友達になれた感が出ててね。

アニメ会とは？

フリーの芸人・国井咲也と、大川興業所属の漫才コンビ『ペイパービュウ』の三平×2が1999年に結成したトークユニット。2005年6月よりサンキュータツオ、沖縄の比嘉、亀子のぶおも加わり正式メンバーが五人となる。
アニメなどの二次元媒体と力強い笑いとの融合を旗印にしたライブは「カミングアウト・トークライブ」と銘打たれ、現在までに大小あわせ30回以上のライブを開催。精力的な展開をしている。

左より、国井咲也（アニメ会代表）、サンキュータツオ、沖縄の比嘉、三平×2、亀子のぶお

三平　比嘉君が沖縄から上京してきて初めてアニメの話ができる友達ができた時のような（笑）。

第九話「闇の奥」

同級生の結婚式に出席するため、岐阜を訪れていたねねね。ついでに骨休みでもと温泉に寄ったところ、そこには読仙社の依頼でやって来た三姉妹の姿が……。

タツオ　アリスが死んだのがすごいショックだった。オレ、これからこの人に捧げようと思ってたのに、一話で死んじゃうんだもん。

比嘉　何を捧げるつもりだったんですか（笑）。

タツオ　金払うからアリス外伝作ってくれないかな。あとジュニアがミシェールさんを助けるシーンがあったんだけど、これは本気で嫉妬したね。

国井　でもジュニアはこの時点でアニタとミシェールを天秤にかけてるよね。

比嘉　いやいやアニタ×ジュニアはありませんよ。

三平　それは比嘉君の願望だから（笑）。アニタを独り占めしたいっていう。

比嘉　違うんですよ、アニタは岡原と付き合ってほしい。久ちゃんは。それを遠くから優しく見守ってて。

三平　で、それを影からストーキングする比嘉君がいる、と（笑）。

タツオ　どこまで屈折してるんだ！

第十話「クリスマス・キャロル」

出版社から新人小説コンクールの受賞パーティーに招待され、浮かない気分のまま出席したねねね。そこで彼女は初々しい受賞者にかつての自分の姿を重ね……。

タツオ　前半と後半に分けましょう。前半は、ねねね先生のスピーチとその前の小室先生とのやり取りが大きな山ですね。

国井　熟女好きで責められ好きのお前としては（笑）。

三平　けど小室先生のあれを単なる意地悪と見るか叱咤激励と見るかで、受け止める人間の度量が問われますよ。オレは小室先生は若い頃ねねね先生と同じ状況になって苦労したんだと思うんで、ぜひそのへんの外伝を書いてもらいたい。

亀子　賛成。

タツオ　それは亀子くんが熟女好きなだけじゃん！　けどねねね先生はあのスピーチでしたら自民党候補になれますよ。

国井　後半は三姉妹の出会いのシーンですよね。

比嘉　最初、ミシェールさんとマギーちゃんが仲悪かったのが意外でしたね。

三平&タツオ　仲悪くないってば！

タツオ　マギーは人見知りするだけ!!　ホントはいい娘なんですよ！　マギーの何を見ていたの？

国井　おれはもうアニタのせつなさに内蔵された乙女回路が激しく感応してしまいましたね。階段で小さくなっているアニタを見て、どうしてオレはいまテレビの前なのかと。抱きしめてやりかった。

三平　けど、マリア像の前で三姉妹誕生ということは、「マリアさまが」……。

国井　いや、もうそれ以上言わなくていいから。

第十一話「さよならにっぽん」

自作の映画のプレミアム試写のため香港に渡ることになったねねね。同時にボディガードの期間が終わった三姉妹も香港に帰ることに。突然の級友との別れにアニタは……。

比嘉　これさあ、反則だよなあ？

三平　（笑）いきなりため口になるほど我を忘れてる。

比嘉　だって最初から最後までせつないんですよ。

タツオ　で、比嘉君イチ押しの岡原くんは？

比嘉　あいつはねー、男なんですよ。だって振られた女のことをじっと見守ってて。久ちゃんが落ち込んでたら「あんなヤツ、忘れろよ。俺がいるから」って言えばいいのに、自分の気持ちより久ちゃんが一番幸せになることを考えて身をひいちゃって。最後の岡原いい顔してんですよ。

三平　いまの比嘉君の顔はものすごく醜かったけどね（笑）。

第十二話「紙々の黄昏」

香港に渡ったねねねは映画の試写会まで三姉妹の部屋で過ごすことに。別れが少しだけ延びたことを喜ぶ四人だったが、そこに読仙社が急襲をかける。その指揮をとっていたのは何とねねねの担当編集、リーだった！

タツオ　ねねねを救うための三姉妹会議よかったよね。あれ見て俺らもアニメ会会議やるようになったし。

三平　中野のファーストフードで小汚い男どもが手を挙げて「アニメかーい、かいぎー！」ってな（笑）。

比嘉　でも僕はこの展開、ちょっと納得してないんですよ。だってマギーもミシェールも死を覚悟してるじゃないですか！　アニタとねねね先生だけが生き残ればいいと。それはエゴ

ですよ!!

三平　だからそれは三姉妹会議で「ねねね先生を助ける」って決めたんだから、それを最優先にしてるわけだろう。

比嘉　それじゃダメなんです、誰一人欠けても三姉妹にはならないんですよ(泣)。

タツオ　分かるけど、彼女らが選んだ道だから。

比嘉　僕らには見守ることしか出来ないんでしょうか。

亀子　まあアニメなんで。

第十三話「続・紙々の黄昏」

さらわれたねねねを救うため、三姉妹と読仙社が全面対決！　果たして彼らの真の目的とは？　やがてその死闘は香港全体をも巻き込み……。

国井　いよいよようやくラストの留守電で登場ですよ。

亀子　亀子・リードマンが。

タツオ　(無視して)最後の最後でついに来たかって感じだったね。

三平　もう、この焦らしに焦らす中年のセックスのような演出、ある意味、エロいな。

比嘉　(笑)正直、香港が沈んだことが吹き飛びましたからね、島のひとつやふたつどーでもいいとさえ思った。

第十四話「紙葉の森」

大英図書館特殊工作部所属のウェンディ・イアハートによるレポートの形式で語られる「R.O.D」の世界。OVAとテレビをつなぐミッシング・リンク。

タツオ　前回とはうってかわってウェンディとジュニアのほのぼの話。

三平　ジュニアって、かわいいだけじゃなくて料理までできるんだ。俺の中の「嫁にしたいランク」が更に上がったね。

タツオ　彼は本を読んだら、書いてあることが実現できるから、もし漫才の台本わたしたら俺ら以上に面白いことやってくれると思う。

国井　間とかちゃんととってな(笑)。

比嘉　僕たちとちがって噛まないんでしょうしね……。

第十五話「仄暗き地の底で」

水没した香港から帰国したねねねと三姉妹。だが彼女たちは事件の重要人物として指名手配されていた。身を隠す彼女たちはリーが遺した読仙社の機密メモを見つける。そこには……。

タツオ　ついに読子さんとナンシーさんの登場と。

国井　で、ねねね先生との再会シーン、僕はここで号泣しました。アパートの住人に不審がられるくらい。

三平　読子さんってオレたち文系の味方だなあ、と思ったのは、この走り方ですね。微塵も運動神経を感じさせない(笑)。

タツオ　だって足と手が連動してないもの。別々のパーツでできてるみたいな。

比嘉　あとはこのナンシーさんのオーバーオール、ものすごい地味にまとまってますよね。

国井　このセンスはきっと読子さんだよ。たぶん夜中に神保町のジーンズメイトとかで買ってきたんだと思う。

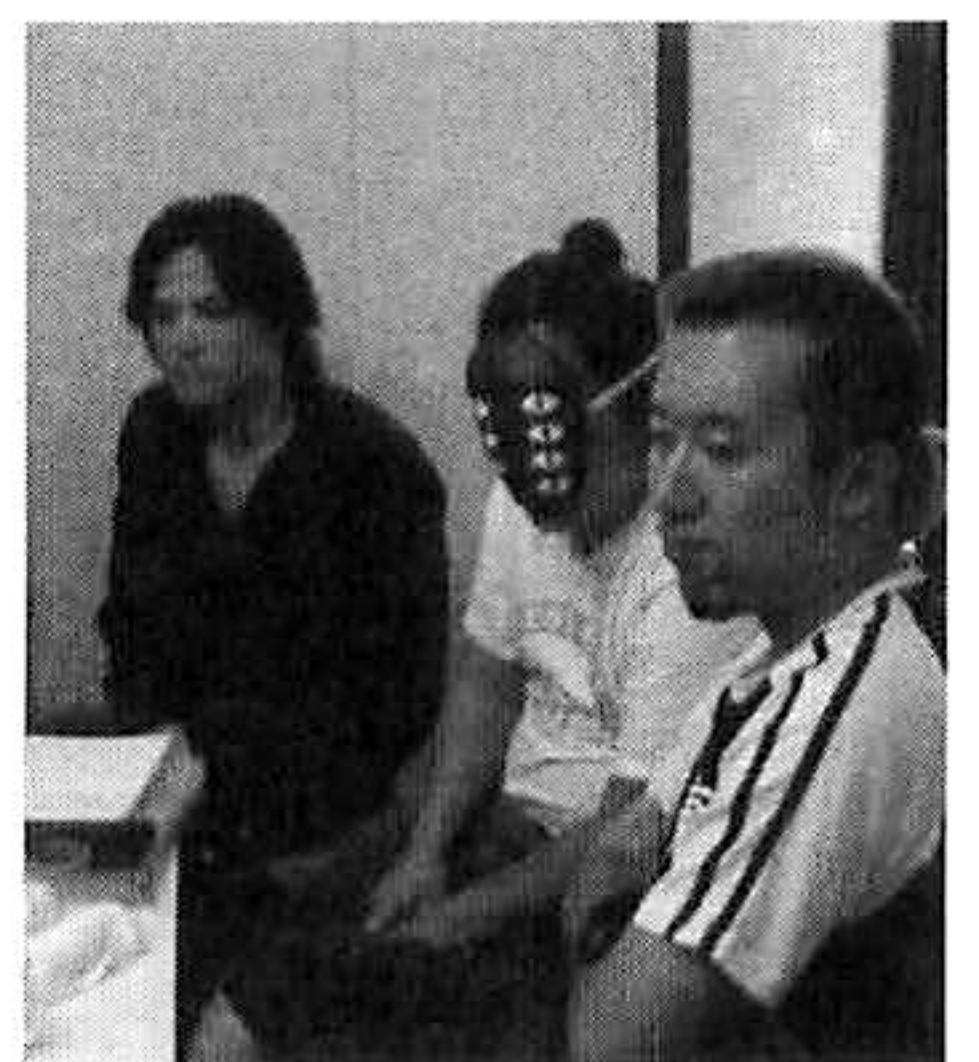
第十六話「華氏四五一」

読子が六年前に大英図書館から奪った本を狙い、国会図書館地下室を襲撃するジョーカーたち。そして神保町では悪魔の作戦「華氏四五一」が始まっていた。

国井　もうウェンディがジョーカーの悪巧みに加担しているのが切なくて切なくて。あれを見てウェンディ、ジョーカーにメロメロなんだな、と。

タツオ　メロメロって！　ただジョーカーは信念を持って動いてるんで、オレは特に悪くは思わなかった。唯一彼に罪があるとしたら、OVAの可憐だったウェンディからドジっ娘分をとったことかな。

第十七話「スイートホーム」

火の海と化した神保町、襲い掛かる大英図書館特殊工作部、絶対絶命のピンチに陥った読子と三姉妹を救ったのは、かつての戦友ドレイク・アンダーソンだった……。

国井　この回は男がカッコイイですよ、ドレイクとあと神保町のおっさん。

タツオ　あのおっさんカッコよかったね。

三平　アニタがここでドレイクのところに行くんだけど、もしかしたらアニタって年上好きなのかな、頼れる大人とか。「クリスマス・キャロル」のリーさんの時もそうだったし。周りに男の大人がいないから父性を求めているんじゃないか。

比嘉　ああ、そうか。ショックだ！

国井　何で？

タツオ　自分が頼れる大人じゃないことを自覚してるからでしょ。

第十八話「告白」

埼玉山中にある読子の実家に身を寄せた一同は、ひと時の平穏を味わっていた。そして読子は語り始める。五年前に大英図書館で起きた事件の真相を……。

タツオ　みんな和服ってのもいいな。読子さん家って何でもあるよね。でもナンシーさんにはネグリジェ着て欲しかったな。

比嘉　それはOVA版のナンシーじゃないと似合わないんじゃないですか?

タツオ　オレはOVA版のナンシーが大好きなんだよ、気の強いお姉さんでさ。

比嘉　(笑)そんな性癖を吐露されても。

三平　そもそもお前、ナンシーより年上だろう(笑)。

第十九話「家族ゲーム」

五年前に起きた大英図書館崩壊事件と読子、そして自分の関係について知り困惑するアニタ。一方ジュニアも自分が知識を統べる者ジェントルメン次期候補の身だと知る。

国井　なんと言ってもイチゴのシーンですよ。ここのナンシーさんとジュニアの微妙な関係は特筆モンですよ。

比嘉　でもナンシーがジュニアにイチゴをあげるなら、ミシェールさんもアニタにあげればいいのに。

三平　ミシェールさんはくれないよ!

国井　(笑)むしろ、アニタの分を食べる!「アニタちゃん、食べないなら、もーらい!」って。

三平　そしてマギーも悲しいかな、そこは譲れないんだ。甘いのが好きだから。

国井　(笑)それを見てねねが「しょうがないな」ってあげるんだよ。

比嘉　ところがその時、背中にぶつかって、マギーのイチゴが落ちちゃう。

三平　それをまたマギーが黙って、悲しそうに見つめて……。

比嘉　ありましたよね、このシーン(笑)。

三平　あるある、俺たちの心のディレクターズカット版の中に(笑)。二十年後にBOXで出すから。「ゾンビ」みたいに。

第二十話「悲しみよこんにちは」

朝、アニタが目を覚ました時、読子と自分以外のみんなが何者かによってさらわれていた! 困惑する二人の前に現れる新たな能力者。消えたみんなの運命は?

三平　地上波放送だとここで終わってるんですよね。

国井　読子さんとアニタが何となく仲良くなりかけてて、途中までは安心して見てたんだけど……。

比嘉　それがあのエンディングですよ!

タツオ　ジュニアはなんであの二人を残したんだろうね?

三平　あー、ジュニアは考えなしに何かする子じゃないからね。この二人なら何とかしてくれると思ったんじゃないかな?

タツオ　単純に自分とミシェールさんの邪魔になりそうなのを残したのかも。

三平　またお前はなんでそうジュニアに偏見を。

タツオ　だって、おれに言わせりゃジュニアは、ミシェールさんを独り占めしたんだよ。そりゃ許せないよ!

三平　オレに言わせりゃジュニアを独り占めしたミシェールさんが許せねえよ!

国井　(笑)で、最後に久ちゃん再登場なんだけど、久ちゃんもアニタも好きな比嘉君としてはどう? これ。

比嘉　僕ね、辛くてテレビ消しました、真面目な話。

第二十一話「D.O.D-DREAM OR DIE-」

マギーたちを乗せたヘリが空中で爆発、もはや誰を頼ることも出来なくなったアニタは、かつて通っていた西浜中学へと向かう。だがそこの生徒はみんな大英図書館によって記憶が書き換えられていた。

タツオ　で、書き換えられた世界の話ですが。

国井　このあたり、見るのが辛かった。

三平　久ちゃんって、こんなハツラツとは笑わない子だったのに……いや笑顔が見られるのは嬉しいんだけど、なんか違和感が。ただなつめちゃんはこの世界の大人しくなった方が僕的にはタイプですね。お姉さんの話をする時、ちょっと照れてて。あれ、萌えです。

タツオ　まあ洗脳も一概に悪とは言えないってことで(笑)。

第二十二話「奪取」

マギーたちは生きていた! 再び読子とコンビを組み、ジョーカーたちに戦いを挑むアニタ。一方ウェンディはマギーの元に赴き、ねねを引き渡すよう交渉を持ちかける。

比嘉　この話はマギーの苦悩とねねね先生の人間の大きさですね。

国井　人質になると知りつつ、三姉妹のためにあえて敵の元に進むねねね先生、漢だねえ。

タツオ　おっぱいの大きさはきっと象徴なんだね。やっぱりハートの大きい人は巨乳なんだよ。

第二十三話「嘘、そして沈黙」

ジョーカーから衝撃の事実が告げられ、呆然とするアニタ。果たして囚われの身となったねねを救うことはできるのか?

国井　すべての記憶が仕込まれた偽物だったという衝撃の事実。
三平　これはね、たとえ本当であっても言っちゃダメ。
国井　それを笑いながら言うんだよね、ジョーカーは。むかつく！
三平　オレが先輩芸人だったら「お前、いま笑えること一言も言ってない」って説教してるね（笑）。
タツオ　ホント、ジョーカーが芸人だったらみんなで説教だね。
比嘉　残酷な回でしたね。
国井　オレもうアニタが膝抱えて泣くの見たくない。
タツオ　やっぱり「R.O.D」のテーマって「家族」とか「絆」なんですよね。
三平　さすがに子供の頃、姉に殺されかけた男が言うと重みが違うな（笑）。
タツオ　お前、いま笑えること一言も言ってない。

第二十四話「君が僕を知ってる」

大英図書館の計画を阻止するため英国へ向かう読子。一方、出生の秘密を知り、心の支えを失ったアニタは街をさまよい、ねねねのマンションで姉たちと再会したが……。

比嘉　いい回ですよ、これは。
三平　いままでミシェールさんのこと、みんな適当だとか失礼だとか言ってたけどね（笑）。
タツオ　あんたが率先して言ってたんだって！
国井　ある意味いままでの二十三話分かけてのミスリードだから。
比嘉　和解した後にミシェールさんが「二人とも大好き！」って抱きしめるでしょ、あそこはもう最高ですよ。
タツオ　おれはあの時、テレビごと抱きしめたね。その輪に加わりたくて。
三平　初めてミシェールさんの人間の大きさが発揮されたな（笑）。
亀子　メーテルを越えましたな。
三平　お前、ピンポイントでピント外れのコメントするな。

第二十五話「たいした問題じゃない」

姉妹の絆を取り戻したアニタたちは、英国に向かい読子たちと合流した。しかし大英図書館の計画は進み、ロンドンは異様な変貌をとげていた。

国井　いよいよクライマックスなんだけど、最初観た時、このロンドンには面食らいましたね。
タツオ　ちゃんと観るとH・G・ウエルズとかコナン・ドイルの小説の世界が具現化したと分かるんですけど。
比嘉　このあたりのアニタは読書が苦手な自分は、大英図書館の弱点探しの役に立ってないんじゃないかって悩んでますね。
三平　そこで次女の出番ですよ。「私たちは違うから意味がある」ってなかなか言えない台詞ですよ。おまけにマギーは奥ゆかしいから、いいこと言ったあと照れるんですよ。
国井　意味もなく紅茶飲んだりして（笑）。
三平　あれは多分もう入ってないね。でも照れ隠しでやらずにいられない。そんなマギーちゃんが僕は好き！
タツオ　今日だけで何回、その台詞を聞いたことか。
三平　いや、まだオレの好きさ加減はみんなに伝わってないと思う。オレこの後マギーのことだけで三時間は語れるから。
比嘉　（笑）そこでミシェールさんがまたやって来るんですよ。二人で何やってんのーって。
国井　絶対、聞いてるよな、この人は一部始終を。
タツオ　何かね、このミシェールさんの懐の広さは……もう海だな！　生命の源だよ！

第二十六話「それから」

ついに始まった読子&三姉妹と大英図書館特殊工作部との最終決戦！　果たして彼女たちはねねねを救い、思い出を、この世界を守ることができるのか？

全員　はぁーー（ため息）
国井　いや何回見ても言葉なくすわ、これは。
三平　もうね、ナンシーの「ウチの子に触らないで」で号泣。もう、あの親子は大丈夫です、オレが保障します。
タツオ　自分の生活も保障できないお前が、何を保障するんだか（笑）。
比嘉　ジュニアといえば、戦いが終わった後にナンシーをぎこちなく抱きしめてつぶやく「ママ」。これでしょう！
国井　そんなこと言ってたっけ？
比嘉　絶対言ってますよ！
三平　じゃあちょっと見直してみようか。
（巻き戻して再生）
三平　「みんなは？」って言ってるじゃねえか（笑）！
国井　全然ベクトルが違う。
タツオ　やっぱり比嘉君が見てたのは現実の「R.O.D」じゃなくて、自分の脳内萌え「R.O.D」だったんだよ。
比嘉　いや、あれは照れ隠しで本当は「ママ」って言いたいんですよ。
三平　だからなんで君がそんなことを言い切れるのか、と（笑）。
国井　でも三姉妹と読子さんがいなかったら、俺たちもあの世界の住人になってたのかと思うと救われたよね。
タツオ　いや、本当にオレはこのアニメ観て、荒んでいた心が癒されたからね。もう部屋で「R.O.D」だけ観て生きていこうと。
比嘉　ダメじゃないですか、それじゃ！
国井　「Read and Live」だったんだね、我々にとっては。「Read or Die」じゃなくて。
亀子　あ、「R.O.D」ってそういう意味だったんですか。
全員　（笑）本当にお前、いままで何を観てたんだ？

こちらもヨロシク!「かみちゅ!」&「ガン×ソード」

かみちゅ!

あの「R.O.D-THE TV-」のコンビが再結集!

ある日、突然神様になってしまったごく普通の中学生、一橋ゆりえ。好きな男の子のことで悩んだり、いなくなった神様を探したり、どこか懐かしい瀬戸内の町を舞台に少女たちが繰り広げるちょっと不思議な毎日を描く神様中学生日記。
「R.O.D-THE TV-」でコンビを組んだ監督・舛成孝二、脚本・倉田英之、プロデューサー・落越友則の三人が、原作集団ベサメムーチョを名乗り再結集、さらにキャラクター原案に羽音たらくを迎えた最強スタッフで贈る、前が紙なら今度は神だ、正真正銘の神アニメ!ちなみに、タイトルの意味は「神様で中学生!」。

DVD

かみちゅ!

監督:舛成孝二
アニプレックスより発売中

2005年にテレビ放送された際には全12話だったが、DVDでリリースするにあたり新たに4話を加えて全16話に再構成。DVDは全8巻で第6巻のオーディオコメンタリーには前述のアニメ会も参加している。平成17年度文化庁メディア芸術祭アニメーション部門優秀賞受賞作品。

COMIC

かみちゅ!

画:鳴子ハナハル
メディアワークス刊行

ただいま「月刊コミック電撃大王」にて連載中のコミカライズ。オリジナルエピソードを交え、鳴子ハナハル氏の丹念なタッチで描かれる新たな「かみちゅ!」の世界。2006年3月現在単行本一巻が発売中。以下続刊。

ガン×ソード

ボンクラたちが繰り広げる痛快娯楽活劇!

地球ではなく現代でもない、宇宙のどこかに存在するボンクラたちの理想郷、惑星エンドレス・イリュージョン。荒野に夢、街に暴力があふれるその地でタキシードに身を包み、復讐に燃える男がいた。その名はヴァン。結婚式当日、花嫁を殺したカギ爪の男を探してさ迷う彼と、兄をさらわれた少女・ウエンディが出会った時、運命は大きく動き始める。
「スクライド」「プラネテス」の谷口悟朗監督、キャラクターデザインには「勇者王ガオガイガー」の木村貴宏氏など数々のヒット作を手掛けたスタッフが結集して制作された痛快娯楽活劇。倉田英之氏は全26話の脚本を担当。
第一話で「俺は童貞だ!」とカミングアウトする主人公ヴァンをはじめ、その個性的すぎるキャラクターたちの人気は放送終了後も衰えをみせない。

DVD

ガン×ソード

監督:谷口悟朗
ビクターエンタテインメントより発売中

2005年にテレビ放送された全26話を各巻2話収録し、全13巻で完結予定。新作3Dアニメ「ガンソードさん」やオーディオコメンタリーなどの特典が盛りだくさん、さらに初回生産分には大判イラストカード集と設定資料集が封入されている。

NOVEL

ガン×ソード 夢見る頃をすぎても

イラスト:木村貴宏・植田洋一
角川スニーカー文庫刊行

倉田英之氏による完全書き下ろし新作。ミハエルとウェンディ兄妹の過去、カルメン99が遭遇した事件やパロディ的内容の「平成天才ガンソードさん」など短編三編を収録。続編「ガン×ソード　夢見るように眠りたい」も発売中。

COMIC

ガン×ソード

シナリオ:兵頭一歩
画:ひのき一志
少年チャンピオンコミックス刊行

「ガン×ソード」の世界をベースにしてはいるもののギャグ成分を大幅にアップ。ヴァンとウェンディが繰り広げるテレビ版とはまた違った破天荒な旅を描く。スタッフと声優陣の対談などの企画ページも満載。

ガン×ソード another

画:守屋直樹
幻冬舎コミックス刊行

満を持しての完全描きおろしコミカライズ。ヴァン、ウェンディ、カルメン99、カイジ、プリシラたちの本編では描かれなかった活躍を収録!

きよしメモ

将吉

Illustration／KEI

・1/6革命闘士オルグたん限定フィギュア
・『すもも120%』19巻
・『義妹は魔法少女』を祖父地図で予約
・コス・エンジェルでイベントデー

胸元にプリントされた『GOOD DAY!』のロゴが、ぐちゃっと無残に歪んでいた。

清は自分のトレーナーに埋もれた他人の拳を不思議そうに眺めて、おろおろと視線をさまよわせ、結局胸元に視線を戻す。ぱくぱくと唇を虚しく開閉させてから、「とりあえず」とばかりに深呼吸を一回。途端に胃液が食道を駆け上ってくるのを感じて、ようやく自分が殴られたことを「体感」した。

「ぼぐえええええええっ」

ついさっき食べたばかりの『天使の手作りロールケーキ(¥580)』が半溶解のまま口の隙間から流れ出てきて、トレーナーの前とアスファルトの地面を黄色く染める。清の腹に拳をつっこんでいたドレッド男は「うおっ」と腕を引き抜き飛びのいた。

「汚ねっ！　こいつ吐きやがった！」

ぶんぶんと手を振って清の胃液を振り飛ばすドレッドに、仲間の鼻ピアスと坊主頭が笑い転げる。虫が入り込んだみたいに低く鳴る鼓膜で三人組の笑い声を聞きながら、清は嘔吐を繰り返した。食道をすりつぶされた「元食物」が駆け上がるたびに、喉に細かな棘を突き立て清の痛覚を責めたてる。

「こんのでんちゃ男めっ！」

ドレッドが再び腕をひらめかせると、シルバーのアクセサリーで装飾された見るからに凶悪な握り拳が、清のあばらの浮き出た貧相な腹筋にめり込んだ。あまりの痛みと衝撃に、厚みを失っていた記憶がゆっくりと蘇ってくる。どうして自分はこんな目に遭っているのか。世にも恐ろしげな男三人に囲まれて、胃の中身をみじめにご開帳しなければならないのか。そうだ、アキバに買い物に来て――

「きもいんだ――よっ！」

今度は首筋のあたりにフックが命中した。耳元で弾けた痛みが腹の底まで駆け下りて、まわれ右をして再び脳みそを揺さぶった。ゆっくりと目の前の地面が傾いでゆく。

――そうだ。たしかフィギュアショップから出たところで、いきなり後ろからドレッドの男に肩を抱きかかえられて、問答無用で路地に連れ込まれたのだ。裏通りからさらに奥まった袋小路には、すすけたポリバケツとPCの空きダンボール、そして舌なめずりをした男たちが待ち構えていたのだ。

「となりのオタクのカバン拝見～」

ドレッドは小馬鹿にした風にのたまうと、おもむろに清の背中のリュックに手をかける。エビの殻でも剥くようにして両肩からリュックが剥ぎ取られ、代わりに清は地面に投げ落とされた。必死の態で目前の空気を吸い下すと、つん、と自分の吐しゃ物の匂いが鼻腔を突き刺した。そこでようやく追いついてきた感情が、へっぴり腰で遅れに遅れた防衛本能を振りかざし、清の口をむりやりこじ開け、

「や、やめ、ろ――……」

「あぁ!?」

毅然とした態度で「やめろ！　触るな！」と叫ぶはずの口腔からは、「きぃ」と小動物のようなうめき声だけがみじめったらしく這い出した。ドレッドの瞳に射すくめられたとたん、冷気が背筋を一息で駆け上がってきたのだ。その目に浮かんでいたのは、恐ろしいまでの無関心。清が、いや目の前のオタクAがどうなろうと自分の人生には一片の曇りすら加えられない、そんな確信だった。

「うお！　なんだよこれ！」

「きもお！」

「萌えっていうんだろ？」

三人組は下卑た笑い声をあげながら、清のリュックを解剖し始める。ついさっき買ったばかりのフィギュアに漫画に同人誌、コス・エンジェルの特製コースターに、ピンキーが数種類に、使い込まれたメモ帳。三人組はサル山のモンキーのような歓声をあげる。清は自らのゲロに顔面をつっこんで這いつくばったまま、荷物が蹂躙されてゆくのをただ見つめていた。何度か哀れっぽい泣き声を出したが、男たちの耳には届かない。

「ご主人ちゃま～だいちゅきでちゅよ～あばばばばー」

フィギュアをわしづかみにした鼻ピアスが、1/6革命闘士オルグたんを清の眼

前につきつける。耐え切れずに清は頭を抱えて目をそらした。情けなさと自らのゲロの生臭さに、鼻の頭にゆっくりと熱が集まってくる。
「前から不思議だったんだけどよ、お前らって、こんなんで勃(た)つの？」
　涙で滲んだ視界を持て余して、清はぐっと両目をつぶる。もうこのまま寝ていたかった。一ミリたりとも動きたくなかった。とっとと気を失ってしまいたかった。ぐちゃぐちゃのオートミール状態になった意識には、小汚いアスファルトだって天蓋つきのベッドより上等だった。
「俺らはね、こうやってお前らを『教育』してあげてんの。よかったでちゅね～」
　見たくない。聞きたくない。感じたくもない。清はひたすらに顔を伏せて亀のようにうずくまって、ただ嵐が通り過ぎるのを待っていた。それでもきれぎれの単語だけは耳から頭にすべりこんでくる。オタク。弱い。キモイ。害虫駆除。ウザイ。死ねばいいのに。
「なんとか——言えようっ！」
　四方八方から、靴先が清の体に叩き込まれた。再び意識が薄く引き延ばされてゆく。
　それでも、固く固く目を閉じた。
　惨めさと哀れさが、津波のごとく激烈に覆いかぶさってきた。
　——どうして自分がこんな目に遭っているのか。殴られ蹴飛ばされ笑われているのか。自分がいったい何をしたというのか。何をしなかったというのか。
「おい、帰るぞ」
　ドレッドは仲間に告げてから、清の前髪をつかんでむりやり引き起こす。血とあざとゲロにまみれたその顔を、ねじ込むような視線で刺し貫いた。
「——お前が悪いんだよ。キモいから」
　言うが早いか、坊主頭と鼻ピアスが清のチノパンを探り出す。抵抗する間もなく財布を剝ぎ取られた。ドレッドの手にはめ込まれた髑髏(どくろ)のリングが、虚ろな眼(がん)窩(か)で「よくよくお前も運がないね」とつぶやいた。
「電車賃だけ残しといてやんよ。優しいだろ、俺ら」
　はらはらと、野口英世が一枚ぽっきりゲロの湖面に舞い落ちる。
「………」
　ドレッドが前髪を離すと、清は再びゲロの上に覆いかぶさった。
　地面に放り出されたフィギュアと目が合った。
　清の眼前で、その頭が踏み砕かれた。
　下卑た笑いが遠ざかってゆくのを聞いていた。

*

「お帰りなさいませえご主人様あ！」
　メープルシロップを頭からぶっかけられたみたいな声が幾度もフロアに響き渡る。「いらっしゃいませ」ではなく「お帰りなさいませ」なのは基本中の基本。

パステルトーンで統一された店内を、銀色に輝くトレイを抱えたメイドたちが軽やかに泳ぎ回っていた。薄く流れるBGMが、甘やかに耳元をくすぐっている。
「……ふうん、初めて見た。ホントに狩られたヤツ」
絆創膏だらけの顔面を無遠慮に眺めまわしていたくせに、田中は興味なさげに言い放った。対面に座った清の仏頂面をさらりと無視すると、手をあげてメイドを呼び止めた。
「け、けど、あんなのに囲まれたら田中だって——」
「お待たせしましたあ！　ご主人様あ！」
「チキンカレーに三倍ミートソーススパゲティにフルーツタルトにイチゴパフェ。あとハイビスカスティーね」
つばを飛ばして自らの不運を嘆く清には構わず、田中は牛に食わせるほど大量のオーダーを告げる。友人の受けた痛みなぞまるきり理解していないし、しようともしない。うっかり水揚げされたトドみたいな顔して、何がハイビスカスティーだ。くそ。
「お前は？」
「え？」
「注文」
「あ……えっと、オレンジペコ」
「かしこまりましたあご主人様あ！」
メイドはバリューセットな笑みを残して、エプロンドレスをはためかせながら去っていく。その尻を、田中は眼鏡の奥の湿度の高い視線で見つめていた。厨房へ消えるところまできっちり見届けると、喉を鳴らしてお冷を一息で飲み下す。
清の不運なぞ、地球の裏側の誰かがタンスの角にぶつけた足の小指の先くらいどうでもいい。そんな態度。
「おまけにさ、ここのメンバーズカードも入ってたしさ、フィギュアも踏み潰されてさ、定期も財布ごと盗られちゃったしさ、マップの予約券も入ってたしさ…………」
それでも清はなんとかして友人の同情をひこうと、みじめったらしい恨み言を再開する。田中はやれやれ、とばかりに大げさにため息をついて、じつに面倒くさそうに薄い唇を開き、
「なんだよ、俺に慰めて欲しいの？　キモいな」
「いや、そういうわけじゃあ——」
「オタク狩りにあうなんて、隙がありすぎんだよ」
——オタク狩り。
オヤジ狩りのオタク版。アキバを徘徊するオタクをとっ捕まえてぶちのめして逆さに振って金品をぶん取るカツアゲだ。
「清みたいなのが夕方に一人で大荷物抱えて裏通り歩いてたらさ、襲ってくださいって言ってるようなもんだろ？　ちょっとでも頭を使って論理的に考えたら、すぐに危ないって分かる。俺だったら絶対にやらないね」
ふん、と鼻息一発で田中は清の哀れっ

ぽい表情を吹き飛ばす。
「ま、いい教訓だったんじゃないか。授業料だと思えよ」
えらそうに田中は言い切って、太鼓腹を見せびらかすようにしてふんぞり返った。
「お待たせしましたあご主人様あ！」
さっきのメイドが、まずは田中の料理をトレイに満載して運んできた。片手で器用にバランスをとりながら、テーブルに手早く食器を並べ始める。
「――――？」
よく見ると、田中の視線が一点で固定されていた。口元はいつも以上にだらしなく半開き、目からは火がつくほどに強力な視線が放たれている。その先には――グランドキャニオンもかくやというばかりの胸の谷間が。
このエロ豚が。
大学のサークル仲間だからって、田中なんかを愚痴の相手に選んだのが初手からの失敗だったのだ。一人きりの「サークル」に哀れをもよおして入会してやったとたん、手のひらを返しやがった。何が現代喫茶研究会だ。北の国家元首みたいな顔してるくせに。冬場は眼鏡がすぐ曇るくせに。手持ちポケモンの半数が虫ポケモンのくせに。
「はぁ……」
清は外れて落ちるほどに肩を落とし、落胆が色濃く溶けたため息をつく。人の温かみが微塵も感じられない田中の態度が悲しい。そして田中ぐらいしかくだを巻く相手がいない自分がもっと悲しい。
「はんはよ？」
口から大量のスパゲティを垂らして、上目遣いで田中が見つめてくる。
「なんでもない……」
オレンジペコはまだ来ない。仕方なく氷の溶けかかったお冷をすする。店はお客でごった返していて、メイドはその中をせわしく駆け回っていた。常連の男がメイドを捕まえてはなれなれしげに話しかけている。いかにも「興味本位で異世界に入ってみました」って感じの一般人が物珍しげな視線を周囲に撒き散らしている。貧相な七三分けがうっかり店内を携帯カメラで撮ろうとして、メイドにやんわりたしなめられている。
いつもどおりの、行きつけのメイド喫茶。
けれど、奴らの恐怖が今も口の中にいがらっぽさを残しているのだ。
今日ここに来るまでだって、相当に気を使った。わざわざ昭和通りのほうから迂回して、追い立てられるドブネズミよろしくコソコソと道の端を背中を丸めて歩かなければならなかった。いつ再び背後から肩をつかまれ、路地裏に連れ込まれるか気が気じゃない。影のように背中に張り付く不安と疑念に、少しでも暗い路地を通り抜けるたびに寿命を三日ずつ吸い取られた。自分はこのまま一生背中を丸めて震えておびえながら、この街を歩かなければいけないのか――
「お待たせしました、ご主人さまぁ」

うつむいた清の顔前に、蛍光灯の光を反射して黒光りするローファーが現れた。革靴からは白いオーバーニーソックスに包まれた細いふくらはぎと太ももがすらりと続いていて、その上にはプリーツの細かなミニスカートに包まれた腰が驚くほど高い位置にあって、控えめな胸の前に銀のトレイを抱えていて、首に巻かれたアイボリーのリボンの上に搭載されている顔は、
「ありやちゃん」
顔なじみのメイドの名前が、ころりと口からこぼれて落ちた。
同時に、ありやの視線が絆創膏まみれの清の顔に貼り付いて止まる。たちまち笑顔が驚愕の霧に包まれて曇った。
「清さん、どうしたんですか……？」
「ああ、えっと、ちょっとね」
「大丈夫ですか？　お薬持ってきましょうか？」
形のいい眉をハの字に傾けて、ありやは清の顔面を心配そうに覗き込む。長くて細かいまつげがふさふさと揺れて、桃色の唇がきゅっとすぼまった。Ｔレックスの化石を十億年の眠りから呼び覚まし、死にかけの爺さんだっておったてることができる最上級の困り顔。
「いや、もう大丈夫だから。ほとんど治りかけなんだ。痛くないよ」
清は反射的に強がりの笑みを浮かべると、アメコミのヒーローみたいなタフガイきどりで握り拳まで作ってみせた。さっきまで泣き言を繰り返していたくせに。側頭部のあたりに田中の非難の視線が突き刺さっているのが分かる。
「ホントに？」
「う、うん、ホントに。平気だよ」
ありやはトレイをテーブルに置くと、清の絆創膏をそっと撫でる。冷たい指先の感触がくすぐったい。たしか十八歳だと言っていたけれど、小柄な体躯と高めの声は、十四、五歳くらいにしか見えなかった。
「気をつけてくださいね……」
潤んだ瞳でまじまじと見つめられ、甘ったるいこそばゆさが背筋を這い上がってきて、清はたまらず、
「ありやちゃん、お茶、いいかな」
「あ、はいっ」
ありやは慌てて床に膝立ちになると、『コス・エンジェル☆』といちいち店名がプリントされたティーサーバーとカップを並べ始める。体が小さいのにわざわざ膝立ちになるものだから、首を伸ばしてテーブルを覗き込むような格好になっていた。ありやはツーサイドアップにまとめた黒髪を一度背中にかきわけて、細かな湯気をたてながら琥珀色の液体をカップに注ぎ込む。
「柑橘系の香りがするね」
清の言葉に、ありやが小さく笑いを漏らす。
「……？　何かおかしかった？」
「あ、ううん、ごめんなさい。けど、オレンジペコって、べつにみかんの紅茶ってわけじゃないんですよ？」

「そ、そうなの？」
「等級です。紅茶の」
　頬のあたりに羞恥の熱の点が灯って、毛細血管を血液が昇ってくるのが分かる。
「うわ、ぜんぜん知らなかった。アップルティーみたいなのだと思ってたや」
「ふふ、じゃあ新発見ですね。けど、一口にオレンジペコって言っても、いろんな種類があるんです。芯芽や若葉がたくさん入っているのがフラワリー・オレンジペコで、葉っぱが小さいのがフラワリー・ブロークン・オレンジペコ。すごく細かーく砕いてあるのがブロークン・オレンジペコ・ファンニングス」
「ありやちゃん、詳しいね」
「へへぇ。ちょっとは勉強してるんですよ」
　やがて最後の一滴がカップに落ちて波紋を作り、ありやはトレイを抱えなおす。
「ごゆっくりしていってくださいね」
　とろけるような笑顔を浮かべて、一礼。
ありやは跳ねるようにして去っていった。
　その背中を眺めて、思う。
　自分はこのまま一生、背中を丸めて震えておびえながら、この街を歩かなければいけないのか。
　腹の底で金属質の決意が生まれた。
「田中」
「あ？」
「リベンジだ」
　清は手のつけられてないパフェのグラスの足をひっつかむ。銀色に輝くスプーンをふりかざし、クリームを山のようにすくい取り、アイスクリームをほじくりかえし、コーンフレークの地層を一気に掘り進む。
「お、おい、清、ちょ……おま……」
　一息でかき込んでやった。
　鼻の頭にへばりついたクリームの一片を指ですくって舐めとり、食道のあたりで玉突き事故を起こしている食物をオレンジペコで流し込む。
気がつけば、腹の底では硬い硬い決意の結晶が形を成していた。
　何事かとばかりに清を見つめる周囲の客も、口腔を晒す田中のアホ面も無視。熱く重たい感触を伝えてくる決意の塊を両手に抱え、清は決然と席を立つ。
　——あいつら、二度と泣いたり笑ったりできなくしてやる。
　出口のドアノブに手をかける。その背中にメイドの声がぶつかって弾けた。
「いってらっしゃいませえご主人さまあ！」

・喧嘩＆護身マニュアルをゲット

日曜アキバの歩行者天国は、ある種のカオスの極北だ。
　なんとか男が流行ったのが去年のこと。以来オタクがやたらとクローズアッ

プされるようになり、芋づる式にアキバが『趣都』としてスポットライトの下に引きずり出され、その喧騒は今も収まらないまま加熱し、暴走と独走と迷走を続けていた。

　そして、耳目が集まれば有象無象がすり寄ってくるのも世の常だ。

「みんなーっ、応援ありがとねーっ！」

　中央通のど真ん中では、自称コスプレ声優ロリロリツンデレ二次元アキバ系メイドアイドルユニットとやらが、簡易カラオケセットを抱えてアニメソングを微妙にはずれた音程で垂れ流していた。けれど一部の取り巻き以外は我関せずとばかりに一瞥すらくれずに立ち去っていく。アキバの混沌ぶりに初めはいちいち目を丸くしていた衆人環視も、『慣れ』という感覚にあっという間に塗りつぶされてしまった。だいたい、今のアキバで珍妙な人間にいちいち反応していたら、それこそ人生が何度あっても足りないのだ。

　そんな喧騒の只中、爪切りのメカニズムすら解明できないアホ小学生が相対性理論の研究ノートをつきつけられたみたいな顔をして、清はハードカバーの本を覗き込んでいた。ガードレールにもたれかかり、眉間に皺という皺を集めて文字を睨みつける。足元には剥ぎ取られたばかりの書店の紙袋の残骸が転がっていた。

『だれでも今すぐ完全マスター！　英国SAS格闘術』

『秘技　古流柔術の〈簡単〉護身テクニック』

『暗黒街の喧嘩闇カラテ‼　〜五分で覚えられない技は無力だ〜』

　座右には積みに積まれた本の未踏峰。清は真新しいインクの香りに鼻面をつっこんで、ひたすら活字と図解を脳みそに放り込んでは咀嚼する。

　やがて、ゆっくりと眉が急勾配に傾き、目つきからは急速にやる気の炎が失われ、

「手首をつかまれた場合………その、四」

一．手首をつかまれたと同時に、自分の手を外側に回して敵の腕をとる。

二．足を引きながら手を斜め下に引っ張ると、敵は体勢を崩す。

三．前かがみになった敵の顎に下方向から掌底を打ち込む。

四．ひるんだところを脇がために極めて落とす。

五．敵が抵抗する意思を見せた場合、頸椎部に手刀を加え無力化する。

とうとう首の後ろで栓が弾け飛んで、我慢と忍耐と辛抱が噴きぬけて蒸発した。

「五分でマスターできるか！　どこの達人だよ！」

　清は本をうち捨て吠えたてる。通行人は一瞬だけ怪訝そうな視線を向けてくる

が、すぐに黙殺を決め込んで通り過ぎていく。
「だいたい『手首をつかまれた場合その四』ってなんだよ！　四回も手首つかまれないっつの！」
　ぜえぜえと息をつきながら、まったく役に立たない『実用書』の山を蹴り散らした。ガードレールに再びへたり込む。燃料もなしに勢いに任せて吹き上がった怒りの炎は、あっさり風前の灯と化していた。清は口を半開きにして肩を落とし、ため息を一つ。
「やっぱり、無理かなあ……」
　ころりと口から転がり落ちる弱音。
「あーくそまだ何もやってないだろ！　馬鹿！」
　啖呵を切ってから、まだ三十分もたっていない。早々に湧き上がってきたマイナス思考を、清は首を振って追い払う。けれど一度形を成した思考は、足元からゆっくりと確実に這い登ってくる。仮に奴らに刃向かったとして、やっぱり敵わずやり返されたら？　今度は五体満足で帰れるだろうか？
　――さあさあ寄ってらっしゃい見てらっしゃい。ご用とお急ぎでない方はゆっくりとご覧あれ。哀れなオタクちゃんが復讐に失敗して返り討ちにあいますよ。驚異のスーパーヘタレオタクの登場だ。チンピラ三人組にぼかすか殴られて惨めに涙を流す清さんにご注目！
「くそっ……くそっ……」
　目の前を通り抜けてゆく人の流れを見つめながら、清はがりがりと頭を掻いて煩悶を繰り返す。
　と、人の流れの中から、モノトーンのシルエットが近づいてきた。
「よろしくお願いしまーす」
　カチューシャにエプロンドレス。勤労アルバイトのメイドさんがポケットティッシュを差し出してきた。
　条件反射的に受け取った。
「…………？」
視線が、ティッシュのビニールに差し込まれたペラ紙の上に釘付けられる。
『仕込みモップから対戦車バズーカまで！　武器と防具の店　鋼鉄商店』

＊

　生まれて初めて手にしたドラゴンスレイヤーは、予想よりもはるかに頼もしい重量を両手に伝えてきた。
「うわ……」
　持ち手に巻かれた動物皮の生々しい感触に、首筋のあたりがぞわぞわと鳥肌だってくる。よもや鉄製ということはないだろうが、チタンぐらいは使っているのかもしれない。冗談みたいに無骨で分厚い刀身は、本当に龍を両断してしまえそうなほどの迫力を秘めていた。
　十畳ほどの狭い店内には、たった今ＲＰＧの中から飛び出してきたような武器や防具が所狭しと並べられている。ひのきの棒に銅の剣に首切り斧に鋲つき鞭。しかつめらしいフルプレートメイルはラ

ウンドシールドを捧げ持ち、店の入り口に鋭い眼光を投げかけていた。長穂先の槍と日本刀が、天井裏の曲者を串団子にせんとばかりに鈍い光沢を放ちながら展示されている。ガラスケースの中には、手裏剣や苦無、虎の爪などが整然と並べられていた。

本当に、武器と防具の店だった

雑居ビルの四階。よもやこんなところに古今東西ファンタジーの世界が広がっているとは誰も夢にも思わないだろう。むろんほとんどが模造品で刀剣類も刃が止めてあるが、それでもこの物々しさは圧倒的な質量でもって空間を埋め尽くしていた。ファンタジーマニアや軍事マニア向け、コスプレ用具としての需要もあるのだろう。現に店内の壁には幾枚かのコスプレ写真が貼られていた。

「いらっしゃい。触るときは先に声かけてね」

ドラゴンスレイヤーを握り締めていたところに突然背後から声をかけられて、清は五センチほど飛び上がった。

「いや、驚かなくてもいいけど。それ興味あるの？」

まっ黄色いエプロンをかけた女性店員が、鼻から抜けるような甲高い声で問うてくる。眼鏡の奥の目玉が、くりくりと動いて清を眺め回していた。レンタルビデオやコンビニの店員と大差のない格好だが、エプロンには毒薬のマークでお馴染みのスカル・アンド・クロスボーンズが鮮やかに染め抜かれていて、右手には大ぶりの日本刀を握っていた。

すっかり店内の空気に飲まれていた清は、ごくりと唾液と緊張を嚥下して、

「すいません、すごい大きさだったから気になって」

「ふふ、うちの自慢のブツだからね」

「あの、これ、何でできてるんですか？チタンか何か？」

「ＦＲＰだよ。繊維強化プラスチック。でなきゃ重くて持てないって」

言って、店員はからからと笑う。そして日本刀をずいと清の眼前に突き出して、

「それもいいけどさ、これなんかどう？特注で作った逸品だよ」

その言葉尻が終わるか終わらないかのうちに、店員は鮮やかな手つきで鯉口を切り鞘を払った。刀身が半円を描いて空を切り裂き、青白い霜を纏ったような切っ先が清の鼻先でぴたりと止まる。

「すっごい大変だったんだから。こんなに細かく加工するの」

店員が手にした日本刀には、切っ先から鍔元まで刀身にギザギザの溝が彫りこまれていた。ちょうどノコギリやパン切り包丁のような形状。どこかの剣客浪漫譚で、こんな武器があったような気がする。

「ポン刀ってデリケートなのにこんな注文つけたもんだから、職人は泣きが入っちゃってたけどね」

「そ、そうでしょうね……」

「で、ようやく一本完成したんだけど、

あたしもうっかりしててさ。ダメになった目釘で留めちゃったの。あ、目釘って分かる？　日本刀の刃の部分と、柄のところを繋いで留めてる釘ね」
「はあ……」
「んで、ためしに一回振ってみたら、刃が柄からスポーンって！　スポーンって！　ほら、あそこ、穴空いてるでしょ？あははははははは！」
　爆笑しながら店員が指さした先。クリーム色の壁には、縦に細長く穿たれた穴が寒々しい姿を晒していた。
「お客はびっくりして逃げ帰っちゃうしさ、もちろん刃はぽっきり折れちゃうしさ、職人はせっかく作ったのにってブンむくれちゃって、なかなか二本目作ってくれなくて………って、ごめん、ひいた？」
「す、すいません、わりと……」
「ごめんねー、まあ気にしないで」
　軽やかに刀を鞘に戻すと、店員はばしんばしんと清の背中を叩く。どうも遠慮とか会釈とか常識とかが刃こぼれしている類の人種らしい。
「あ、あの、すいません」
「ん？」
「置いてる武器とか防具って、ここで作ってるんですか？」
「ウチで加工してるのもあるし、外から輸入してるのもあるよ」
　店員はゲテモノ刀を棚に戻したが、どうも角度が気にくわないらしい。難しい顔をして何度も何度も向きを調整している。
「輸入って……税関とか大丈夫なんですか？」
　清にはよく分からないが、いくらなんでもロングソードやウォーアックスを税関の係員が見逃すとは思えない。
　が、店員は目の前の刀から清の顔面に視線を移して、じつに得意げな笑みを浮かべ、
「農具って言っとけばわりとラク。だからそこのダガーは『スコップ』だし、あっちのハルペーは『草刈り鎌』。まあどこの税関を通すかにもよるけど」
　きらびやかな宝玉が埋め込まれた短刀と、長柄の先に凶悪な刃をぎらつかせている鎌を、店員は顎でしゃくってみせる。そして訊いてもいないのに、この店の来歴を長々とまくしたて始めた。お役所の認可を取るのがどれほど困難だったか。いかにこの店がこだわりの逸品ばかりを扱っているか。空港の税関員をいかにして出し抜くか、もとい説得するか。一方通行のうんちくがひたすらに垂れ流される。
「――で、探し物は？」
「……あ、え？」
　話を右から左へと聞き流していた脳みそに、唐突に質問を放り込まれて清は我に返った。どうもファンタジーの世界の武器防具に囲まれてあれこれと話を聞いていると、地面がゆるい泥のように溶けてくる気がする。
「探し物は何かって訊いてるの。まあヒ

ヤカシでもぜんぜん構わないけどさ」
眼鏡の奥の瞳に顔を覗き込まれて、清はようやくこの店を訪れた理由を思い起こす。
「あ、あの、じつは――」
――オタク狩りをぶちのめすために武器が欲しいんですなんて、言うつもりか？
一瞬開きかけた口を再び閉じた。どう言えば真意を悟られることなく目的を果たせるだろうか。そんな清の逡巡を店員は一息早く捕まえると、
「もしかして、コスプレ？」
「え？」
「違う？　そういうお客さん多いから」
ころりと店員の口から落ちた言葉を、清はしげしげと眺め回して、
「あ、えっと――はい」
なかば勢いで言い切った。
「じ、じつは、『実戦に耐えうるコスプレ』っていうのがテーマなんです。和洋折衷のオリジナルで、使える武器防具を装備した戦士っていうコンセプトで。『グラディエーター』みたいな。はは。そういう武器ってないですかね？」
かなり強引な一手だったかもしれない。けれど、コスプレか何かと思い込んでもらうのが一番話が早かった。実用っぽいコスプレマニア。アキバならいくらだっているはずだ。たぶん。おそらく。
店員は黙して語らない。
早口でまくし立てた清の嘘八百を無表情で聞きながら、清の瞳を覗き込んでいた。
――気づかれたのか。
人に刃を向けるための武器を求めていることに。自分の腹の底の陰謀に。急速に喉が乾き始めて、背筋を嫌な予感が這い上がってくる。けれど無言はいけない。早く言い訳でもなんでもしてうやむやに――。
突然、店員の顔が炸裂閃光手榴弾みたいに輝いた。
「おもしろい！」
「……は？」
アホ面を晒した清の腕を店員はむんずとつかむと、満面に笑みを浮かべて店の奥へと引きずっていく。
「任せて。私、そういうの大好き」
「あ、いや、そんな大したものじゃなくって、自分で選べますし――」
「いいから。餅は餅屋に任せるもんだよ。つべこべ言わずについてくる」
「ほ、ほら、このドラゴンスレイヤーとか強力なんじゃないですか？」
「あーダメダメ。そんなデカブツ振り回せないって。黙ってこっち来なよ」
未練たらしく清が握り締めていたドラゴンスレイヤーをむしりとって放り出すと、店員はさらなる引力で清をいざなった。
店員の目を見た。
なかば瞳孔の開いた目玉が、紫色の光を湛(たた)えて怪しく光り輝いていた。
もしかして、自分はとんでもない地雷を踏んでしまったのかもしれない。そん

な後悔が頭の端を一瞬だけ掠め、される がままの清を笑いのめしながら飛び去っていった。
「——じつはね、この中に一本だけあるんだ」
唐突に、ぼそりと店員が言い放つ。眼鏡のレンズと蛍光灯の反射でその表情は隠されている。
「な、何が……?」
「刃が止めてない、ガッチガチの凶器。銃刀法違反まっしぐらなのが、一本だけ紛れてるの」
笑えない。が、笑って誤魔化すしかなかった。
「ははははは……はは……は……」
レジカウンターの裏手に引っ張り込まれた。店員が独り言のように漏らした台詞が「ホントなんだけどな」という発音に聞こえたのは、自分の気のせいだったと思いたい。
——一時間後。

財布の中で貧相な顔を潜めていた諭吉たちは、ものものしいの武器防具に生まれ変わって巨大な紙袋に詰め込まれていた。清は両手にファンタジーな重さを感じながら、「職質に気をつけてねー」と店員の声を背中に店を出る。
「はあ……」
詰めていた息をようやく吐き出した。
まじまじと、袋の中の鈍色の金属光沢を眺めやった。
日常生活ではありえない銀の輝き。そっと表面に指を這わせると、冷たく重い感触が跳ね返ってくる。
——やるんだろ?
唐突に、紙袋にプリントされたスカル・アンド・クロスボーンズが虚ろな眼窩から問いかけてきた。隙間の開いた歯を鳴らし、清の首筋に冷たい息を吹きかける。
——悔しくないのか?
不意に、あの時に味わった血と吐しゃ物のカクテルの臭いが口内に蘇ってくる。鉄くさい臭気が鼻腔をちりちりと焼いていく。踏み砕かれたフィギュアの残骸と、自らのゲロで黄ばんだ同人誌と、ひび割れたメイド喫茶のコースター。
——不安だとでも?
そうじゃない。いや、けど、そうだ。ああ、でも、いや、やっぱり、
——顔を上げてみな。
対面を見上げた。簡素な縦書き看板が、扉の横に貼り付けられている。
——援軍だよ。
『催涙スプレーから防弾チョッキまで!セルフディフェンスショップ　専守防衛』
動くはずもない海賊髑髏がにたりと笑った気がする。青白い腕が音もなく伸びてきて、清の背中をでたらめに突き飛ばした。
たぶん、このとき脳のどこかがカチリとはまった。
そう、清の口の端にも、吊りあがるような笑みが浮かんでいた。
毒を喰らわばそれまで、いや皿までだ。

・潜伏場所を探す
・15時から待機
・携帯は電源を切っておくこと

じっと息を詰め身を隠していると、益体もない思考ばかりが次々と浮かんでは霧散していった。

十字路で立ち止まると、悪魔に出逢うと言われている。

日が沈み逢魔が時を経て漆黒の闇に包まれるころ、絶望の淵にいる人間だけに悪魔はその姿を現す。そして一言だけ問いかけるのだ。

——寿命と引き換えに、欲しいものをくれてやろうか？

「おい、ちょっと……やめろよ……」

ポリバケツと空きダンボール。巨大なビルに押しつぶされるように肩をすくめた袋小路には、表通りの明るい光は届かない。やせっぽちの男が、ドレッドに連れ込まれてきた。下品な笑い声が出迎える。

「あ、あの……俺は、その……」

最初はいくぶん強気の風情を見せていたものの、男は薄闇の中で待ち受けていた坊主頭と鼻ピアスと目が合って、ようやく自然界の食物連鎖を理解した。たちまち被捕食者へと成り下がった男の命乞いを、下卑た笑いが塗りつぶしてゆく。

「やめ、やめて、ください……」

あの日を複写したかのような、同じ手口。

清はゆっくりといがらっぽい呼気を吐き下した。体育座りに折った体の中で血流がゆっくりと加速して、アドレナリンを指先にまでいきわたらせるのが体感できる。おもわず大きく息を吐きそうになって、慌てて口をふさいだ。

外では、三人組が触れたら切れるような笑いを浮かべ、哀れな生贄羊(スケープゴート)を取り囲んでいる。暴行と搾取は分かち難いセットメニューになっていて、サディスティックな快感を隠そうともせず、三人組は男を言葉でねちねちといたぶっていた。オタク。弱い。キモイ。害虫駆除。ウザイ。死ねばいいのに。

「オタクなんかになったのが悪いんだよ」

結論を一言で纏め上げると、ついにドレッドが拳を振りかぶる。すっかり自尊心と対抗心を折り取られた哀れな男は、「ひぃ」とうめいて身を丸めた。

——いまだ。

ぶるりと大きく身が震えた。ぐっと口の端を結んで、きつくきつく拳を握り締める。

口の中で小さく唱えた。

いち、にい、さん——！

……よん。

きゅっ、と胃のあたりに鈍痛が刺しこんでくる。土壇場で、恐怖、いや躊躇に足を縫いとめられた。ここが最後の停止線なのだ。その事実が残り五センチのところで清の足首を握り締めていた。外か

らは拳が肉を打つ鈍い音が断続的に聞こえてくる。すぐにでも行かなければ。そんな焦りが頭を掠めたとたん、突然にパニックが湧き出してきて首筋に絡みついた。
「――おまえら口ばっかでさ、なんでそんなにヨワっちいの？」
　プラスチックを一枚隔てた外界から、あの日と同じ罵詈雑言が染み出してくる。自分が出て行かない限り、現在進行形で殴られている男、いやあの日の自分は救われない。いつのまにか全身がべったりとした汗にまみれていた。砕けるほどに食いしばった歯の隙間から、必死の思いで再びカウントダウンの声を搾り出した。
「いち、にい……」
　虐げられた民族としての怒りが、自らの無力を嘆く後悔が、蜂の巣にされた人としての誇りが――まぶたの裏でスカル・アンド・クロスボーンズの形を成した。
　闇の中で、ぎょろりと海賊髑髏が目を剝いた。
　その白い骨の表面に、肉片がへばりつきやがて筋肉を成し、覆いかぶさるように外皮が張って、あの日砕かれた人形の顔を形作る。
　革命闘士オルグたん。
『――革命だ！』
　その叫びが内耳を震わせ、残った理性を一マイクロリットルすら残さず蒸発させた。
　ポリバケツの蓋を蹴立てて這い出し、清は闘いの場に躍り出る。
「オタク狩り狩り――参上！」
　沸騰して加速した意識は、予定にもない一言を清に叫ばせていた。
「…………？」
　口の端に血の染みをへばりつかせた男と、それを取り囲む三人組。都合四本の視線が、清の顔面に張り付いて止まった。背後に吹っ飛んだプラスチックの蓋が、地面に着地してカラカラと音を立てる。
　突如として生ゴミのポリバケツの中から現れた闖入者に、略取する側もされる側も、完全に行動と思考を止めていた。
「お、オタク狩り狩り――参上！」
　いたたまれない沈黙を埋めるためだけに、清は再び叫んでみる。
「……は？」
　三人組は、いまだ状況が理解できず唖然とした顔を晒していた。
　それでも清は雄々しく大地を踏みしめ、目の前の三人組を睨みつける。ずっとバケツの隙間から見ていた。忘れ得ない記憶として心臓に鋼のピンで縫いとめられた三つの顔が、ガン首揃えて並んでいるのだ。
「は、はすへて……」
　三人組の作った輪の中心から、か細い声があがった。
　状況を一番敏感に察知していたのは、今の今まで殴りつけられていた男だった。幾本かの歯が折れて空席の目立つ口腔をさらし、必死の態で清に助けを求め

てくる。
「おい、なんの用だ」
目の前であえぎながら救いを求める男を認めて、ようやく三人組も清を『闖入者』でなく『障害物』だと理解した。敵意に濡れた三白眼で、清の喉もとに刺すような視線を送ってくる。
見つめるということは確認作業だ。自分と相手、どちらがより生物として戦力として優れているかを知るための、最も原始的な測定方法。
とたん、坊主頭の表情が、安堵と優越に縁どられた笑いに染まった。
「お前、この前のだろ？」
坊主頭は歯ぐきを剝き出して、『俺はお前より強い』スマイルをふりまいた。それは瞬く間に空気感染を起こして、ドレッドと鼻ピアスの顔にも冷笑が浮かび上がる。
「なんだよ、まだアキバうろついてんの？」
三人組にしてみれば、一度完膚（かんぷ）なきまでに叩きのめした相手が再び眼前に立ちはだかったところで、恐れおののくには値しない。それはそうだ。モンスターを倒してゴールドと経験値狩りの真っ最中にスライムが加勢に現れたところで、慌てふためいて逃げ出す勇者様ご一行なぞどこにだって存在しない。
「それで戦うのか？　なあ？」
坊主頭は小馬鹿にした笑いをひらめかせる。清の背中のリュックサックから、二十センチほどＰＣゲームのポスターが突き出していた。
自らに向けられた嘲笑には構わず、清は坊主頭との距離を目測する。
彼我の距離は三メートル。
——射程だ。
決意を口から言葉として吐き出した瞬間、血が一瞬で煮え立った。
「戦うよ」
リュックの口から飛び出たポスターの先をつかみ取る。
一歩、坊主頭が無防備に間合いを詰めた。
——来た。
突如として、捨て置いたはずの実用書の一節が脳裏に蘇ってくる。
『最初の一撃をためらってはいけません。戦闘行為を決定したならば、全力で先制攻撃を与えないとなおさら危険な状況になってしまいます』
一気にポスターを引き抜いた。
ポスターは途中で樫の棒に変わり、金具、鎖に続いて、栗のイガのような鉄球がぞろりと這い出してくる。持ち手に巻きつけたポスターはむろんカムフラージュだ。五十センチほどの樫の棒には、先端に金具と鎖が取り付けられている。そして鎖の先には痛々しい棘の密生したソフトボールほどの金属球がくくりつけられていた。
モーニングスター。
十字軍の時代、『軽装』と『破壊力』という相反するテーマを達成するために造られた騎士の武器。総重量は一・二キ

ロほどにもかかわらず、遠心力を利用して鉄球を加速させることで、重装の鎧ごと敵を打ち砕く。
清の口から、裏返った叫び声が響き渡る。
「――そぉい‼」
坊主頭には、笑顔を恐怖にひきつらせる時間すらなかった。
ごん、と低音が響いた。
鉄球に横殴りに吹き飛ばされ、球体同士の完全弾性衝突の見本みたいな格好で坊主頭がすっ飛んでいった。ごろごろとアスファルトを転がって、白目を見せてあっさり沈黙する。
ぶん、とチタン製の『鉄球』を一振りして、清は残った二人を正面から見据えた。
「ひ、ひぃ……」
ドレッドと鼻ピアスが、B級ホラーの犠牲者みたいな悲鳴をあげる。
目前の空気を火の吐息に変えて、清は大きく踏み込んだ。
「お、お、お前らなんか――！」
むちゃくちゃに武器を振りかざした。
坊主頭を吹き飛ばした感触がまだ手に残っていて、その余韻に背筋がうち震えた。作戦もクソもなかった。
「馬鹿にしやがって！　馬鹿にしやがって！」
思考の一部が焼けた鉄のように赤く燃えさかり、清の腕を駆り立てる。脳の残りの部分は、なぜだか小学生の時代にすっ飛んでいた。歪んで並べられた机と、掲示板に貼り付けられた『今月のもくひょう』と、給食のアルマイトの食器。ヒエラルキーのてっぺんで馬鹿笑いを繰り返していた上位者と、いつも教室の片隅でひっそりと集まっていた同胞たち。
鉄球がスズメバチのように唸りをあげながら敵対者に喰らいついていく。
「学芸会で沙悟浄の役だったからって、『ハーゲンダッツ』なんてあだ名つけんなよ！　ハゲてねえよ！　歯茎が長いから『グッキー』は直球過ぎだろ！　アゴがちょっと出てるだけで『ムーンサルト』とか呼ぶなよ！」
過去の恥ずかしいあだ名を連呼しながら凶器を振りかざす男に対抗する術を、ドレッドも鼻ピアスも持ち合わせていなかった。理解不能の恐怖に顔を歪めて、安全距離を保つことを最優先にはるか遠くまで必死の態で逃げすがる。
「このっ……！　このっ……！」
何度も何度も武器を振りかざすが、『防御』ではなく『避難』に回った二人には、容易に攻撃は当たらない。焦れた清は汗で滑る持ち手を幾度も握り直し、鉄球で敵を威嚇する。二人は決して清の間合いに入ろうとはせず、煮え切らない時間だけが過ぎていく。
そして、唐突に燃料が切れた。
「ゼェ――ゼェ――ゼェ――」
過度の緊張状態での運動は、清のか細い体力を喰らい尽くしていた。普段ろくに使われることもなく錆びついた呼吸器が、貪欲に酸素を求めて壊れたポンプの

ように稼動する。たった一・二キロの武器が異常に重たくなった気がする。当初はきれいな正円を描いていた鉄球の軌跡も、ぐねぐねとした不恰好な楕円形に成り下がっていた。

と、突然、両わきの下から腕が伸びてきた。

「おらっ、てめえっ！」

かすむ視界で振り返った。体力切れの隙をつき、鼻ピアスが背後に忍び寄っていた。わきの下から腕を差し込み、清の頭の後ろでがっちりと両手を握り合わせて拘束する。

「く……くそっ！　離せっ！」

清はどうにかして戒め(いまし)を解こうと細い腕を振るが、ぎちぎちと僧帽筋を締め上げる万力のような力は少しも緩まない。それどころかますます強力にたがねあげられ、視界にはゆっくりと霞がかかってくる。

目の前には、ドレッドが立っていた。

その姿を見つめていることしかできなかった。気の利いた啖呵も吐かず、ドレッドは拳を強く固く握り締めている。ごてごてとしたアクセサリーに彩られた凶器の拳。

振りかぶった。

拳が走る。

「――――！」

続く痛みと恐怖に、清はおもわず目をつぶる。

腹筋に衝撃がきた。

「……え？」

ゆっくりと、目を開ける。

意外なことに、思ったほどの衝撃は襲ってこなかった。むろん痛いことは痛いが、耐えようと思えば耐えられる程度。以前のパンチよりもよほど弱々しかった気がする。

「ぐぅ……うっ……」

ドレッドが、自らの拳を押さえてうずくまっていた。清の腹についさっきまで埋め込んでいた右の拳をぶるぶると震わせている。人差し指と中指の付け根の皮が裂けて、血が滴り落ちていた。

――鋼鉄商店の棚。商品に付けられた宣伝用ＰＯＰの文言が頭に浮かぶ。

『着ていてよかったチェインメイル』

まさか、これほどまでに効果があるとは思わなかった。

トレーナーの下に、清は鎖で編みこまれた鎧を潜ませていた。ステンレスで編まれた網のような表面に、びっしりと四面体の鋲が留められている品だ。気休め程度に思っていたのだが、鋼鉄商店特製の「返し」が見事なカウンター能力を発揮したらしい。

思いがけない仲間の反応に驚いたのか、清の動きを締め付けていた鼻ピアスの力が緩んだ。

「――ぐっ！」

さなぎを脱ぎ去る昆虫のように清は身をくねらせ、ようやく戒めからの脱出に成功した。足音を蹴立てて走り、体勢を整えるため間合いを作る。

コンクリートの壁を背負って、清は二

人と再び相見える。
　ドレッドは血に濡れた右手を左の手のひらでかばい、鼻ピアスは犬歯を剥いて清の顔面を睨みつけていた。
　そこでようやく、先ほどのやりとりでモーニングスターを取り落としたことに気がついた。
　慌ててズボンのポケットからボールペンを引き抜き、へっぴり腰で鼻ピアスに突きつける。
「は、それで戦うかよ」
　清が取り出した武器とも呼べないちっぽけな道具に、鼻ピアスの顔に嘲笑を浮かぶ。唸りをあげて飛び交う鉄球と、十五センチほどのボールペン。ナイアガラの滝もかくやというほどの落差に、二人組の表情には失われたはずのふてぶてしい余裕が蘇ってゆく。
「ふーっ、ふーっ」
　それでも清は、口と鼻から荒く熱い息を吐きながらペンで二人組を威嚇し続ける。ついさっきから、首筋を青白い恐怖がつきまわしている。強力な武器を取り落としたことは、勇気、いや意識の暴走を取り落としたことと同義だった。熱い暴走の渦が収まると、狙いすましたかのように絶対零度の恐怖が流れ込んできた。
　――タイミングを誤ったら、後がないのだ。
「お前さあ、これ、どうしてくれんのよ」
　鼻ピアスが間合いを詰めてくる。
　清はボールペンを握り締め、放っておくとガチガチと鳴り始める奥歯を必死で食いしばった。
　五メートル……四……三……二……一……
「おい、なんとか言え――」
　ブンッ!
　鼻ピアスの体が大きく跳ねて、黒目が一瞬で裏返った。
　ボールペン型のスタンガンから放たれた十万ボルトの電流が、鼻ピアスの体を通って地面へと拡散していった。それは鼻ピアスの意識を一瞬で押し流し、運動神経を麻痺させていた。鼻ピアスは繰り手を失ったマリオネットのように体を地面に投げ出して、脱力してしまう。
「おい、マサル、おいっ!」
　一人残されたドレッドは目の前で倒れ伏した仲間の名を呼ぶが、鼻ピアスはぴくりとも反応しない。
「……くそっ!」
　ドレッドの決断は早かった。
　数の優位と戦力的優位。二つを失ったことに対する状況判断はおもいのほか的確で、ドレッドはじりじりと後ずさって清の攻撃範囲を離れると、すぐさま背中を見せて駆け出した。路上に転がった仲間には目もくれず、脱兎の勢いで逃げてゆく。
　清はモーニングスターを拾い上げようかと一瞬だけ悩み、そして物理攻撃では届かないと結論づけ、腰のホルスターに手をやった。
「待――――てっ!」

両手で銃把（じゅうは）を握り締め、捧げ持つようにして拳銃の照準をつける。最大飛距離八メートル。催涙ガスガンを構えると、引き金を絞った。ぽん、とシャンパンのコルクが弾け飛んだような破裂音がして、真っ白い噴煙がドレッドめがけて駆けていく。

「うおっ！」

ガスの催涙成分によってダメージを受けたというよりも、背後から吹き付けられた高圧ガスに驚いた格好で、ドレッドは無様に地面に転がった。鼻腔に染みるガスに咳（せ）き込みながら、視界をさえぎる自らの髪の毛を掻き分け、必死で背後を振り返ると——目の前には、モーニングスターを構えた清がいた。

打撃音。

あれだけの騒ぎがあったのに、誰一人として路地を覗きにくる者はいなかった。

オタク狩りに襲われていた男は、今の今まで逃げもせずに現場に留まっていた。ダンゴ虫のように背を丸め両手を胸の前で組み合わせ、ぶつぶつと何かをつぶやき続けている。そっと近づいてその声に耳をそばだてると、どうやら神様と仏様とお父さんとお母さんとおばあちゃんと死んだ猫のロドリゲスとやらに救いの祈りを捧げていたらしい。

「ねえ、もう大丈夫ですよ」

「——うわあっ！」

男はがくりと清を振り返り、微妙に焦点のずれた瞳で見つめてくる。

「三人組は僕が倒しました。もう安全です」

「え？　あの、ええ？」

どうも大切なネジが緩みかかっているらしい。清は噛んで含めるようにして状況を説明するが、男は呆けた顔を晒すばかりで要領を得ない。敗戦を信じずに南海の孤島で数十年間を過ごし続けた日本兵の説得は、こんな感じだったのかもしれない。

やがて、唐突に男の顔に表情が生まれたかと思ったら、

「あなたは……英雄だ！」

「……は？」

「すばらしい！　途方もなくすばらしい！　守護天使だ！　最高ですか⁉」

「はあ？」

「最高ですっ‼」

キョトン顔で動きを止める清には構わず、目の前の男は清礼賛の台詞（せりふ）を壊れたコピー機のように繰り返す。虐げられてきた自分たちを救ってくれた貴方はすでに高位の存在となっている。今も不当に弾圧される同胞（はらから）の声が聞こえないか。さあ今すぐ発（た）って欲しい。泥を食（は）んでいる仲間たちに一刻も早く手を差し伸べなければならないのだ。

どうやら男は一時的にピントがずれているのか、もしくは恒常的にピントがずれているらしい。

甲高い歓喜の声を全身に受けながら、清はきびすを返した。

男の言は別にしても、少しだけ、思う。

自らの鬱屈を晴らすための行為が、私闘であったはずの戦いが、もしもほんの僅かでも、世のため人のためになるのなら。
　悪くないかな、と思った。

*

「――だから僕は、いや俺はさ、そんな大それたことをしようっていうんじゃないんだ」
「じゃあ、いったい何がしたいんだよ」
　コーヒーカップから立ち昇る細かい湯気の向こうで、田中はぐちぐちと「わからない」「何がしたいんだよ」と繰り返す。それどころか「いい加減帰りたい」と大書されたうんざり顔を向けてくる始末だった。田中が誇るダンゴ虫に毛が生えた程度のハイパー脳には、婉曲表現というのは一切通用しないらしい。
「仲間を助けるんだ」
「だから、何をどうしたいんだ?」
　やっぱり田中を選んだのは間違いだったのだ。もういい。案山子相手に発声練習をしていると思えばいい。目の前にあるのは王様のロバ耳の秘密を叫ぶためにほじくり返された、ただの穴なのだ。そう思うことにした。
「オタク狩りは、やっぱり良くないことだと思うんだ」
「なんだよ、まだ根に持ってたのかよ」
「根に持ってたっていうわけじゃない。けど、俺、分かったんだよ」
「何が?」
「誰かがやらなければいけないことって、あるんだ」
　そうだそうなのだ。『趣都』としての華やかな表情の裏側で、いまだ虐げられる人々がいるのだ。侮蔑と揶揄と汚辱の中で、かつての自分のように溺れている人々がいる。
「俺は、戦うよ」
　自らが泥をかぶることでほんの少しでも人を助けられるのなら、決して悪いことではないと思う。そして、そんな戦士を支えるためには、ただの一人だけ理解者がいればいい。そうすれば、きっと清の行為には意味と目的が与えられる。
「お待たせしました、ご主人さまぁ」
　真打ち登場。
　銀のトレイを両手に抱え、ツーサイドアップにくくった髪の毛を揺らしてありやが現れた。コス・エンジェル☆の制服にはいくつかのパターンがあって、今日のありやは足首まで伸びたロングのスカートに編み上げのブーツが目にまぶしい。
「天使の特製チーズオムレツです、ご主人さまぁ」
　手馴れた様子で食器を並べていくありやの横顔を、清は無言で眺めやっていた。やがてぐっと唇の端を結び、大きく目の前の空気を吸い下し、
「ねえ、ありやちゃん、強い男って、どう思う?」
「はい?」
　突然放り投げられた質問に、ありやは怪訝そうに首を傾ける。つられて両側頭

部に細めのリボンでくくられた髪がざあと流れた。
「うん。困っている人たちを守る、強い男の人ってどうかな」
「強い人、ですか？」
「うん」
　ありやは形のよい指をあごに添えて、しばし視線を宙にさまよわせた。真っ黒で長い睫毛が何度かまばたきに揺れて、唇が「んー」と小さく声を漏らす。やがて清は耐えきれず、
「好きだよね？　そうだよね？」
　前のめりに身を乗り出して、ありやの理解をさもしく乞うた。一瞬、ありやは顔を困ったように傾けたが、それでも「ええ」とつぶやいて、
「えっと、守るっていうのは、壊すことよりも大変なことだと思います。で、守りたいって思ってるだけの人はたくさんいるけど、実際に行動に移せる人は、すごいと思います」
　はにかみながら、ありやはそう言った。
　胸の奥に、暖かな熱の点が灯る。
「あの、ケチャップ、何を描きましょうか？」
　ありやは机にはべり、ケチャップの瓶を手にして問うてくる。くすぐるような視線を放つとび色の瞳を見つめて、清は告げる。
「ハートマークがいいな。真っ赤な、とっても赤いハートがいい」

・鋼鉄商店で装備を増強
・撃墜数＝11

　コツをつかんでしまえば、なんということはない。
　たとえばそれは自転車の運転だったり、クロールの泳ぎ方だったり、パソコンのブラインドタッチだったりする。おもいのほか世の中にはいくらも転がっているのだ。
「す、すみません、でし、た……」
「なにそれ、聞こえない」
　じゃらりと、モーニングスターの鎖を鳴らす。途端に目の前の男二人の顔が、女々しい泣き笑いの表情に歪んだ。当初の威勢は大気中の塵（ちり）よりも粉々に砕け散っていて、二人揃って清に頭（こうべ）を垂れている。ツンデレかお前ら。
「す、す、す、すいませんでした、ごめんなさい、許してください、お願いです、お願いです、お願いです……」
　汚れたアスファルトに手と膝をつき、男たちは絶対服従の意思を全身で表明する。乾ききった口の間から漏れてくる惨めでみっともない哀願台詞を――清は右から左へ聞き流した。
「ねえ、君は今まで狩った人たちの命乞いを、聞いたことがあるの？」
「え――ごぶっ！」
　二人並んだ左側の男が吹っ飛んで、打ちっぱなしの表面を晒したコンクリの壁に叩きつけられた。

「許すわけないってことだよ」
　残った男はガクガクと膝を震わせて、恐怖と絶望がブレンドされた情けない瞳を向けてくる。男の視線があごのあたりに張り付いていて、べたべたとした粘着質の感触が気持ち悪い。まるで清の正義を非難するかのような怯え方に、不愉快な棘が首筋に反り返る。
「必死で後悔してよ。君らはそれだけのことをしたんだから」
　ひとまず目の前の男は無視して、地面に転がって咳き込んでいる男に最後の一撃を加えることにした。とどめは正確に確実に、一匹ずつやっつけていかなければならない。これまでのオタク狩り狩りから分かっているのだ。奴らはいくら退治したって湧いて出てくるし、話しても分からない人種の典型だし、恐竜が死に絶えるような環境でも生き残れるほどのしぶとさを誇っている。
「やめろっ！　やめてくれっ！」
　半泣きで清を見つめていた男が、仲間に駆け寄り体を清の前に投げ出した。ついさっきまで弱者から暴力で搾取をしていたくせに、いったん自分たちに矛先が向くと妙な自己犠牲の精神を発揮する尻の軽さ。清は舌打ちをすると、背中のカバンから改造スタンガンを引き抜いた。以前のペン型のなんか目じゃない。二百万ボルトまで出せるゲテモノだ。
「やめて、くれ……おい……」
　ばつん、と青白い火花が弾けて、二人まとめて白目が裏返る。
　スタンガンの先から一筋だけ立ち昇る白煙を眺めながら、清は軽く息をつく。
　モーニングスターをリュックに差しこみ、安全装置をかけてスタンガンもしまこんだ。清に救われたオタク狩り被害者は、とうの昔に感謝の言葉もなく逃げてしまったらしい。自分に繋がる痕跡を現場に残していないか手早く確認して、清はそ知らぬ顔で路地を抜け中央通りの雑踏に紛れていった。
　最初のオタク狩り狩りから、三週間、いやもっと経っただろうか。
　路地裏に潜み息を詰めて気配を殺し敵を捜し求め、一人、また一人と「オタク狩り」を「狩って」いた。始めのころにつきまとっていた不安と恐怖は、なぎ払った敵の数に比例して薄れ始め、次第に自らの絶対的な力に、敵を屠(ほふ)り去る歓喜に、打ち震えるようになった。
　装備を増強したあたりから、オタク狩りたちは清に太刀打ちすらできなくなった。ゲームを無敵モードに改造した気分だ。上上下下左右左右ＢＡ。こっちだけ隠しコマンド打ち込んでズルして楽々クリアだ。
　まるきりゲームみたいだと思う。
　こんなことを言うと、足先あたりがすでに化石になり始めているようなおっさんたちは、現実とゲームを混同するなと知ったかぶるだろう。けど、じゃあお前は現実に人を殴ったことあるのかよ、と思う。仮想しか知らないくせに仮想現実を糾弾するから、わけの分からないこと

になるのだ。偉そうなことを言いやがって。ゲームと現実を取り違えてるんじゃない。実際にやってみればいい、度し難いほどに現実とゲームは似ているから。

『オタク狩り狩りがアキバに……⁉』

この前、そんな記事がニュース系のブログで紹介されているのも見かけた。一瞬だけ背筋が冷えたが、よくよく読んでみると噂の域を出ていない程度の情報だった。それはそうだ。清が狩っているのはオタク狩り、脛に傷がある奴らばかりだ。清を告発するためには、まず自らの罪をさらけ出さなければいけない。よって清に何かしらの手が及ぶことはありえなかった。

アキバには、驚くほど素早く夜の帳（とばり）が落ちてくる。すっかり冷たく凍った空気を吸いこんで、清はほんの少しだけ体を丸めた。

＊

モンスターを倒すことがルーチンワークになり下がる。

ゲームをやる人間だったら、たいていが経験することだ。回数を重ねれば重ねるほど、戦いに与えられる意味がだんだんと薄れてくるのだ。特にクソゲーなんかは一本丸ごとルーチンワークのために作られたとしか思えないようなものがザラだし、そうでなくとも興奮と興味は繰り返しの中で磨耗して、初めての戦闘のときのような感動は跳ね返ってこなくなる。

むろんそれはオタク狩り狩りも同じこと。オタク狩りの最中に割り込まれたらこんな反応を返してきて、清が武器を出したらこんな言葉を投げつけてきて、その対応にはたいしたバリエーションもなく、そのうちパターンAとかBとか分類すらできてしまうほどだった。

今日の獲物、いや敵はたったの一人。いかにもなオタク君を捕まえてたらたらと金品をせびっているところを、背後からモーニングスターで一撃した。チンピラは鉄球に肩を打たれて膝をつき、その隙にオタク君はとっとと逃げ去っていき、あとには清とチンピラだけが、人気のない路上に残され今に至る。

「た、助けて……！」

パターンJ。清の武装に恐れおののいて逃げ出す場合。

清は慌てず騒がず無表情でリュックからスリングショットを引き抜くと、Y字の根元を押さえて照準をつけた。銀色の散弾を磁石のついた受け皿にセットして、ゴムを引き絞る。

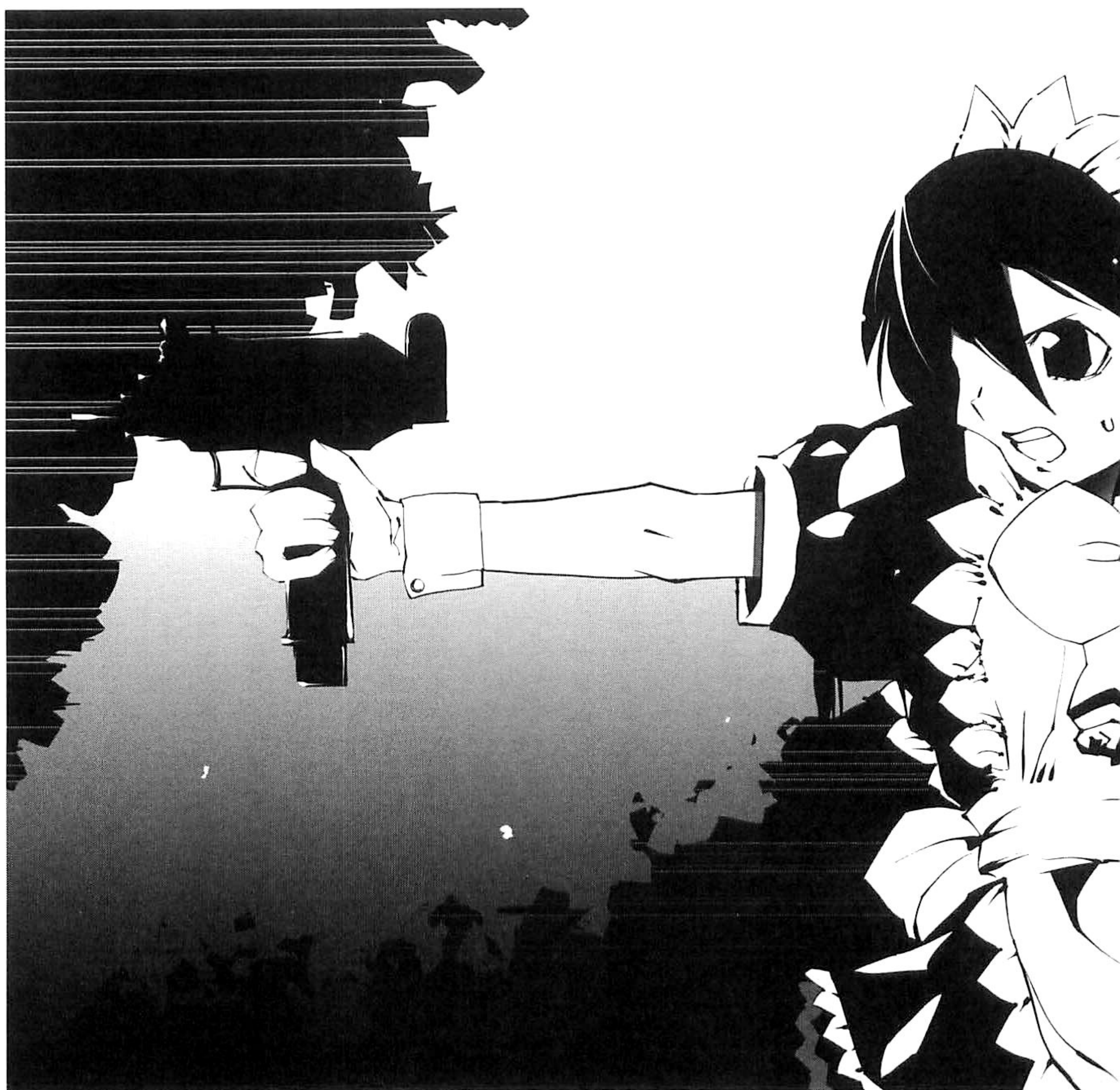
「喰らえ」

ぼそりと口の中だけで告げる。この後の展開は、もはや「事実」と言ってもいいぐらい明確な手触りを持って清の目の前にあった。尻にスチール弾を受けてチンピラは倒れこむ。あとはとっても簡単。駆け寄って背中をモーニングスターで一撃すれば、今日の仕事は果たされる。

「ぐあっ！」

清の未来予測に忠実に、チンピラはすっ転んでアスファルトとディープキスをして、ついでに前歯を何本かへし折った。
「馬鹿だなあ」
口元を押さえて転がりまわる男をせせら笑いながら、清はゆっくりと地面を踏みしめすり寄っていく。すっかり手に馴染んだモーニングスターを握り締め、膝立ちで這いずるチンピラの前に立ちはだかる。チンピラは血まみれの口で命乞いを繰り返すが、清にとってはヘビーローテーションのCMぐらいありふれたものだ。もはや何の感情も湧いてこない。モーニングスターを高々と振りあげ、
「やめてくださいっ！」
鋭く投げ込まれた声に、後頭部を貫かれた。
振り向いた。
思考が数瞬ダウンした。
打ちっぱなしのコンクリートを背負って、目に痛いほどに真っ白なエプロンドレスが揺れていた。その下に収められたロングの濃紺ワンピース、非常識なほどに巨大なカフス。息せき切らせて走ってきたのか、ローファーだけはかすかな埃にまみれている。律儀に付けられた胸のネームプレートには『コス・エンジェル☆ありや』と印字されていた。
「清さん、駄目です」
ありやは猫のような身の軽さで駆け寄ると、清とチンピラの間に割り込んできた。唇を固く結んで両手を広げ、清の顔を視線で射抜く。
「ありやちゃん、どうして……？」
「田中さんから聞いたんです。ずっと清さんの様子がおかしいって」
「田中………………」
この状況を理解しようと、どうにかして言い訳をひねり出そうと、脳みそが高速で輪転する。けれどこんな路地裏で見かけるメイド服というのは許容範囲の斜め上を行く異装ぶりで、清の正常な思考活動を妨げた。おろおろしながら右へ左へ迷走した挙句、結局出てきたのは言い訳にもなりそうにない繰り言で、
「そ、そいつは悪いやつなんだ。オタクをカツアゲしてたんだよ」
「けど、駄目です」
ありやは悲しげに首を振ると、上目遣いの視線を送ってくる。
「どうして、こんなことになっちゃったんですか……？」
数週間ぶりに見るありやの顔が、ひどく懐かしかった。清は慌てて思考の淵に手を突っ込んでオタク狩り狩りの理由を探るが、なによりもまず自分がこんな行為を続けていることに対する疑問にぶち当たって、それがようやく自らが受けたオタク狩りに接続し、コス・エンジェル☆での決意表明に繋がって、そして武器屋に駆け込んで――そのあたりで手探りの感触が途絶えて消えた。気がつけば今日の自分とあの日の自分には名状しがたいほどの隔たりが生まれていて、その分厚さに途方にくれた。

もう何がなんだか分からない。
だから、一番手近な感情をもっともらしい言葉で装飾して、ぶん投げるしかなかった。
「これは……俺の怒りなんだ。人のことを馬鹿にして、あざけって、搾取していた奴らへの天罰なんだ。俺が、俺の手を汚してやってるんだ。他の誰の手も借りてない。誰よりも正々堂々としてるんだ。そうだろ?」
泣き笑いのような顔を晒して、清はありやの許しを懇願する。けれどありやは小さく「違います」とつぶやいて、
「お店に来てくれたころの清さんは、そうじゃなかった」
その瞳に敵意にも似た色が浮かんでいるのを見て、愕然とした。お前は単なる暴力装置だ。そう告発された気がして、感情が急速に渦を巻き始める。
——敵意には敵意を。
煙のように湧き上がって形を成した海賊髑髏が、首筋に一筋の唾液を滴らせた。
「ありやちゃんどいて。そいつ殴れない」
「駄目です」
「どいて」
「駄目です」
理性が途切れた。
「どけよ！」
「……駄目、です」
清はじゃらりとモーニングスターの鎖を鳴らして威嚇する。ありやは一瞬びくりと身を震わせたが、それでもチンピラをかばい頑として動こうとしない。清の視線を正面から受け止め、開いていた手のひらをぐっと握り締めて、
「——え？」
突然、ありやがスカートの裾に手をかけ、べろりとまくり上げた。清はおもわず狼狽し目が釘付けにされる。ペチコートの下の真っ白い太腿があらわになって、そこに巻かれた大型のホルスターには世にも恐ろしげなマシンガンが銃身を黒光りさせていて——は？
「清さんがオタク狩り狩りをやめないなら——」
ぞろりと、スカートの下から墨を落としたような真っ黒いサブマシンガンが這い出してきた。
「私はオタク狩り狩り狩りになります！」
銃把を握り締め銃口を清に向け、ありやはおごそかに宣言する。
かつて軽やかにオレンジペコを淹れていた繊細な指先と無骨な銃のシルエットのアンバランスに、おもいのほか強い光を投げかける瞳と虚ろな銃口のコントラストに、眩暈（めまい）がした。清は「冗談だろ」とつぶやこうとして、その台詞のあまり

の陳腐さに、吐きかけた言葉を飲み込んだ。
あまりにも非現実的で、馬鹿馬鹿しくすらなる光景だった。ありやは今にも泣き出しそうな顔を晒しながらも、手だけは慣れた動きでセーフティーを解除して、
「当たったらごめんなさいっ！　当てるけどっ！」
「あ——アホかっ！」
わけが分からない。あまりにも反骨精神が過ぎる。なんなんだ。メイドさんロックンロールかお前。
「清さん逃げてっ！　でも避けないでっ！」
プラスチック弾が襲い掛かってきた。
瞬間、十数回のオタク狩り狩りの間に培われた危険回避の勘が、満身の力を込めて清のケツをひっぱたいた。ゴミ箱の裏に跳べ。筋肉が引きちぎれるほどに力を込めて、清は文字通り跳び下がった。
半瞬前まで清が立ち尽くしていたアス

ファルトを射線が薙ぎ払う。
「なんなんだよ、ワケわかんねえよ……」
地面に尻をついてゴミ箱に背を預けながら、清はぜえぜえと荒い呼吸を繰り返す。背中のゴミ箱には刻一刻と弾列が穿たれていく。ありやが手にしているのはミニ・ウージー・サブマシンガン。実銃ではなかったのが幸い、というか救いだったが、相当な改造が施されているらしい。プラスチック弾のくせにポリバケツを貫通していた。
「なんなんだよ、意味がわかんないよ、なんでマシンガンなんだよ!」
「メイド服には、マシンガンですっ!」
「どこの世界の常識だよ!」
清の叫びはウージーの発射音と交じり合い、虚しく大気に消えていく。
ゴミ箱を盾にしたまではよかったが、かえって身動きは取れなくなってしまった。ありやは弾が切れるたびに前世は海兵隊員かシチリアマフィア間違いなしの鮮やかな手つきでマガジンを入れ替え、再び破壊にとりかかる。間断なくリズミカルに打ち込まれるプラスチック弾。発射のたびにコンペンセイターがガスを吐き出し音楽を奏でて、清の理性がゆっくりと薄められていく。いつの間にか内耳に住み着いた海賊髑髏が囁きかける。
——やられたら、やり返せ、だろ?
深く深く息を吐き出し、そして吸い込んだ。手持ちの装備を確認した。オタク狩りのチンピラが膝ではいはいをしながら逃げ去っていくのが横目に見えたが、そんなことはもはやどうでもいい。盾となっているポリバケツも、ミツバチが見たら大喜びで巣にしかねないぐらいに穴だらけになっている。迷っている時間はなかった。
ホルスターから、銃を引き抜いた。グリップを逆さに握り頭上に捧げ持つ。銃口だけをポリバケツの上から覗かせた。
「ごめんっ!」
この期に及んで「ごめん」もないかもしれないが、頭の片隅をそんな思いがよぎって消えた。
親指で引き金を絞った。
「きゃあ!」
高圧の催涙ガスが、白煙となってありやを襲う。一瞬だけマシンガンの射線がずれて、間髪いれずに清はポリバケツの裏を飛び出した。手にはスリングショットを握り締めている。
二度ほど前転してから膝立ちになった。慣れない運動に体のあちこちをぶつけて、おもわず意識が遠のきかける。どうにか意識の尻尾を引っつかんで、両手を伸ばしてスリングショットの照準をつけた。
「——!」
ようやく白煙から逃れたありやは、清の両手の武器を認めて半瞬だけ硬直した。一発きりの弾だったら避けられるかもしれない。けれど清が握り締めているのは散弾で、その射程から逃げることは事実上不可能だった。ありやは驚くほど

の速度でその「事実」を理解したが、理解したところで逃げられないものは逃げられない。
「ごめんっ！」
二度目の謝罪の台詞とともに、清は引き絞られたゴムを解放した。
銀色の弾が奔る。
同時に、ありやが動いていた。
散弾を避けようと足を動かしたのではない。
エプロンドレスの裾をつかむと、ボリュームたっぷりの布地をまくりあげて頭からひっかぶったのだ。
「——嘘だろ⁉」
ばっ、と音を立てて弾が布地にめり込んで、一瞬だけそのままの姿勢を保持して、ばらばらと地面に転がり落ちた。放たれたスチール球は、ことごとくエプロンドレスとワンピースに防がれていた。
「嘘じゃないです！」
エプロンドレスを払いのけたありやの手には、再びウージーが握られていた。
ぴたりと清に照準をつけ、トリガーに指がかかっている。
背中を、冷たい汗が流れて落ちた。
いまや清の姿は完全にありやの前に晒されていた。彼我の距離は五メートルほど。身を隠す場所も、時間も絶無だった。
「終わりです」
張り詰めた声でありやは宣言し、同時にトリガーを引いた。
——ガチッ。
「……え？」
ありやの顔が困惑に歪み、続いてはっと息を呑んだ。
弾切れ。
千載一隅の瞬間を、清は逃さなかった。
背中のリュックからモーニングスターを引き抜き、地面を足の親指で踏みしめて一足飛びに間合いを詰めた。驚愕に彩られたありやの顔に肉薄し、棘だらけの鉄球を振りかざす。
「——ごめんっ！」
三度目の謝罪。
「きゃあ！」
ありやの手からウージーが弾き飛ばされ、地面をからからと転がった。
——チェックメイト。
「終わりだよ」
モーニングスターの柄をありやの眼前につきつけ清は告げる。ありやは武器を失い、逃げるための間合いも失い、つまりは清の完全勝利だった。ほんの五十センチほどの目の前、吐息がかかるほどの距離にありやの小さな顔がある。そこには困惑と敗北の表情がありありと浮かんで——いない？
ありやの手が、すばらしい速度で駆けていた。
メイド服のポケットから取り出された物体が、円を描いて走り抜けた。
その物体を確認したと同時に、側頭部のあたりで痛みと衝撃がはぜた。
——オレンジペコの茶缶。
スチール缶の角が、見事に清のこめかみを打ち抜いていた。

「なんだよ……それ……」
地面が急速に傾いていく。意識がみるみるうちに引き伸ばされていく。ノイズのかかった視界の中で最後に見えた映像は——茶缶を握り締めて、唇を震わせながら清を眺め降ろしている、ありやの顔。
そこで、唐突に理解した。
ずっと不思議だったのだ。
——どうしてありやは、マシンガンを持ち出してまで、清のことを止めたかったのか。
ここに至るまで、少したりとも気づかなかった。
そんなもの、自分はいままでにいくらだって見てきたはずだったのに。
けれど現実にあると思わなかったから、気づかなかったのかもしれない。
たいていゲームのパッケージの背中あたりに書いてある。十八歳未満購入禁止の銀色シールの下か、ウィンドウズ某とか書かれたすぐ上。こっ恥ずかしいから一目で分かる。
『純愛』
そして清は意識を手放した。

・二人の暖かい日々が、始まると思う

ゆるゆるとまぶたを開けると、エプロンドレスの白が網膜に柔らかく染み込んできた。細かく入り組んだ胸元の刺繍が、縫い目を数えられるほどに近い。いつのまにやら清の頭は柔らかなありやの膝に乗せられていた。
清の覚醒を認めたありやは、「おはようございます」と小さく告げてぺこりと頭を下げた。
「射撃……うまいね」
「え？」
「すごいカッコよかった。漫画のヒロインみたいだった」
ありやは頬をかすかに赤く染めて、はにかみ顔を浮かべる。
「アソボットシティの最上階に、シューティングレンジあるんですよ」
後頭部にありやの体温を感じながら、清は再び目を閉じる。
これで、よかったのだ。
「ねえ、ありやちゃん」
「はい？　なんですか？」
「今度、週末にでも一緒に行こう。撃ち方教えてよ」
——はい、行きましょうね。一緒に。
そんな返答は待つまでもない。もう少しだけこのまま。ありやの甘い香水の匂いに包まれて、清は意識をとろけるような眠りにゆっくりと沈め——
「えと……ちょっと、困ります……」
——？
まぶたを開いた。
唇に手を当てて、困惑に表情を曇らせたありやの顔があった。
おもわず清はがばと跳ね起きて、唇をひん剥いてありやの瞳を覗き込んだ。

「ど、どうして⁉」
「あの、えっと、週末はシフト入ってないし……」
なんだよシフトって。
頭蓋の中で花火のように混乱が爆ぜ始める。三半規管が平衡感覚を失いかけ、世界がメリーゴーランドよろしく回り始める。シフトが入ってないから行くのではないか⁉
「だ、だって、ほら、ありやちゃん、僕のことを思って、わざわざ銃まで持ち出してきたんでしょ？　何週間も来ないから心配になって、田中から話を聞いて、僕が道を踏み外さないように、取り返しのつかないことにならないようにって」
「……はい、そうです」
「だったら——」
続く言葉はゆっくりと尻すぼみに小さくなってゆき、清は上目遣いでありやを見つめて、
「僕のこと、好きなん、でしょ？」
つぶやくように言った。
すがるような目つきで、清はありやの顔を注視する。
ありやはもじもじと髪の毛を撫でつけ視線をさまよわせる。口を開くまでの時間が、返答までの数秒が、果てしなく長く遠く感じられて、
「——清さんのことは好きじゃないです。けど愛してる」
どっちだよ！
「意味分かんないよ！　なんなんだよ！」
おもわずありやの肩をつかんだ。
「きゃっ」と小さく悲鳴があがって、清は慌てて手を離す。どんな顔をすればいいのか、態度をとればいいのか、分からない。
エプロンドレスの胸に手を当てて、ありやは小さく呼吸を一回。両眉を情けなく傾けた清の顔を見つめ、噛んで含めるように言う。
「清さんって、優しくて、暖かくて、照れ屋さんで——」
花がほころぶような笑顔。
「ご主人さまとしては大好き。愛してる」
頭の中で、海賊髑髏の高笑いが聞こえた。
ありやはポケットから軽やかに一枚の紙片を取り出した。両手で捧げ持ち眼前に突き出してきた紙片には、見慣れた書体で『コス・エンジェル☆』とプリントされていて、
『店外デートサービスはじめました！ただいま無料キャンペーン中‼』
海賊髑髏にぴしりと亀裂が入り、ガラガラと砕け落ちて細かな破片と化していく。やがて灰も残さず消え果てて、アホ面を晒した清だけが取り残される。
ありやの声は、あくまで甘く柔らかく鼓膜をくすぐっていた。
「清さん、これからもいいご主人さまでいてくださいねっ」

phantom column 01

モテるとはどういうことか

竹熊健太郎
text by TAKEKUMA,Kentaro

モテるとはどういうことか。いったいそれは、いかなる時と場所において発生し、何がどうなってどうなるのか。喪男にとって、永遠の謎というべきは「モテる」ということではないだろうか。

モテるとは、セックスができる、というのとは少し違う。なぜならセックスは、しかるべき場所でお金を払えばできたりするからである。しかし「モテ」はお金では買えないような気がする。たしかに、ありし日のホリエモンみたいにお金があると、女がわらわらと寄ってはくるようだが、株価が暴落するとあっという間に女が、否、女ばかりでなくいろんな人が蜘蛛の子を散らすように逃げてしまう。これもモテというのだろうか。やはりちょっと違うのではないだろうか。

かくいう俺であるが、この世に生を受けて四十五年、「モテ」は長い間の謎であった。俺自身、モテた、と思ったことはほとんどないわけだが、一瞬これがモテ……？　と思っても、次の瞬間それは泡沫(うたかた)のように消え去るのであった。あれは何だったのかと反芻しようにも、夢を見たあとのように、よく思い出せない。やはり何年生きようと、わからないものはわからない。俺にとってのモテとは、富山湾の蜃気楼のようなものである。

しかし一方で、モテる人は、やたらモテるような気がする。イケメンや、ありし日のホリエモン状態の人なら、まあわからんでもないが、どう見てもブサメンのビンボー人なのに、それでもモテる人というのはいるのだ。これこそが「モテ」最大の謎である。

そういうモテ男をよく観察すると、2パターンあるように思う。ひとつは、マンガ家のUのように、女にマメな男である。いやマメというか、あいつはただ女とやりたい一心で、断られても「ハイ、お次」とばかりに、次々に口説きまくるのだ。Uにとってナンパは釣りみたいなもので、断られてもめげずに当たっているうちに、一匹くらいは引っかかるのである。もちろんヤレば目的を果たしてしまうので、関係は長続きしないのだが、そうなったらまた次を当たるので、傍目にUはモテるように見えてしまう。

伝説の三浦和義さんも言っていたが、「好きと言われて不愉快になる女はいない」のだそうだ。とにかく機関銃のように「好き」と言いまくる。すると、十何人かに一人くらいは勘違いして口説けるんだそうである。……しかしまあ、我々喪男にとっては、こちらから女に寄っていくことからして難問である。ストーカーにされる確率も高い。Uがストーカー扱いされないわけは、あいつにとって女なら誰でもいいので、断られたら諦めてサッと次に移れるからだ。

もう一つのモテパターンは、なんと、何もしなくても女が寄ってくるというものである。そんなバカな、と思うのだが実際にある。それもイケメンだったり金があったりするのではなく、どう見てもダメ男なのに、女がくっついて

離れない。そればかりか彼をヒモとして養ってくれたりするのである。
そんな都合のいい話があるのか。ある。具体的には、やはりマンガ家のM先生なのだが、この先生はすごいよ。創作に行き詰まって妻子を捨てて失踪し、数年前に復活したが（と書くと吾妻ひでおを思い出すだろうがもちろん違う）、その間何をしていたかといえば、自分より一回り以上年下の若い愛人に〝養われて〟いたのだ。
その愛人には当時結婚を前提にしてつきあっていた男性がいたが、M先生に会うなり、その男を捨ててM先生のもとに走ったというのだから、ハンパではない。M先生、決してイケメンではなく、お金も全然ないし、そもそも人格も生活も破綻しているのだが、甘え上手というか何というか、周囲の人間に全身全霊で甘えてくるのである。
男も女もなく、年上も年下もない。なにしろアシスタントの〇〇〇に手をつけたり、M先生の涙ながらに語る身の上話（もちろんほとんどが作り話）に同情した会社の社長がマンションを買ってくれたりするのである。そんなバカな、と思うかもしれないが、本当にそんな人がいるのだ。
男の甘え上手というのも、俺なんかやっても気持ち悪がられるだけだろうが、M先生レベルになるともはや因果磁石というか、ブラックホールのような暗黒のパワーとなるらしい。俺なんかそれに耐えきれずに距離を置いてしまったが、ある種の女性にとっては、M先生の甘えは誘蛾灯かハエ取り紙のように機能するようなのだ。
以上、モテるパターンをいくつか見てきたが、いずれのパターンにも共通するものは、要するにDQNだということである。本田透くんの「DQN＝モテ理論」は、俺の乏しい経験からも正しいように思える。逆に言えば、喪男は「モテたいが、DQNにはなりたくない」というジレンマがあるゆえに、モテないとも言える。
俺も胸に手を当てて見ると、どうもそのパターンのようだ。そこまでしてモテたくはないと思う。しかしいつまで経ってもモテないと、やはりちょっぴり寂しい。ああ、どこかに「ありのままの俺」をすべて受け入れてくれる、外見が小倉優子で内面が沖縄の海のように美しい女性はいないものか……と思うのだが、そんな女はいない、というのが現在の俺の結論である。
俺は、この単純な結論に達するのに四十五年かかった。何回かあったが、結局それはなにかの間違いだった。今は明鏡止水の心持ちで、淡々と毎日を送っているのである。

phantom column 02

オッパイ原論

鏡 裕之
text by KAGAMI,Hiroyuki

むっちりと全体的に脂肪の乗った100センチのHカップと、細身の身体に実った90センチのHカップ。同じHカップなのに、100センチHカップの娘の方がボリュームがあるなあ、という経験はないだろうか?

形や隆起の違いはおいておくとして、これ、別に乳首を見ているうちに目がまわって錯覚を起こしたわけではないのだ。

女性のバストは、ご存じの通り、サイズ的には2つの要素で出来上がっている。

1つは、トップバストの数値。一番オッパイの突き出した部分を計った数値である。

2つめは、カップサイズ、すなわちトップバストとアンダーバストの差である。カップサイズは、国産ブラの場合、こんなふうに決められている(表1参照)。

これを見ると、Hカップ同士でボリュームが違うのは変に思えてくるが、実はアンダーバストが変わると、胸の容量は変わるのだ。

たとえば、トップバストが85センチで、70B(アンダーバストが70前後でカップサイズがBカップ)のブラを買おうとしている女の子を例にとってみよう。

「試着した結果、胸のボリュームがちょうどよく、アンダーがゆるいことに気がつきました。そこでアンダーバストがワンサイズ小さい65Bというサイズのものに替えたところ、今度はアンダーはちょうどいいのですが、胸のボリュームが押しつぶれてしまいました。さて、この人に合うブラジャーを見つけるにはどうしたらいいでしょうか?」(龍多美子『龍流下着の手ほどき』文化出版局)

おれが揉んで大きくして70Cのブラを着けさせる、なんて答えは、サッサと捨てておしまい、アラホラサッサ〜。

コーディネーターの答えは、こうである。

「正解は、70Bのブラジャーのアンダーをお直しして縮めるか、アンダーバストがワンサイズ小さくて、ブラジャーの内容積(カップサイズ)がワンランク大きい65Cというサイズに替えるかです。

このとき、お直しした70Bのブラジャーと、サイズを替えた65Cのブラジャーの胸の内容積は、ほぼ同じです」(同書)

70Bのブラと胸の内容積が同じなのは、65Bのブラではなく、65Cのブラだというのである。同じカップサイズだと、アンダーバストの大きい方が、胸のボリュームが大きくなってしまうのだ。「あるサイズのブラ」と胸のボリュームが同じなのは、「アンダーバストをワンサイズ(5センチ)下げてカップサイズを1つ上げたブラ」なのである。つまり、

65B＜70B

であり、

65C＝70B

というわけだ。

Gカップは、トップバストとアンダーバストの差が25センチだから、バスト90センチGカップの子のアンダーバストは、90－25＝65。65Gのブラを着けていると推測できる。
対してバスト100センチGカップの子の場合、アンダーバストは、100－25＝75。75Gのブラを着けていると推測できる。同じカップサイズの場合、アンダーが大きい子の方がボリュームがあるので、
65G＜75G
ちなみに65G＝70Fなので、バスト90センチGカップの子を着衣の上から眺めると、普通のFカップの子と同じボリュームに見えてしまう。カップサイズだけが無条件にボリュームを表すわけではないのである。

＊表1

サイズと記号	トップバストとアンダーバストの差
AAAカップ	5.0センチ内外
AAカップ	7.5センチ内外
Aカップ	10.0センチ内外
Bカップ	12.4センチ内外
Cカップ	15.0センチ内外
Dカップ	17.4センチ内外
Eカップ	20.0センチ内外
Fカップ	22.5センチ内外
Gカップ	25.0センチ内外
Hカップ	27.5センチ内外
Iカップ	30.0センチ内外

（JIS規格）

phantom column 03

「属性」極め道

YU-SHOW
text by YU-SHOW

『ファントム』読者の皆様は、いわゆる、キャラ属性と呼ばれるものに興味がおありでしょうか？

キャラ属性とは、たとえば「お兄ちゃん〜」と兄のことを慕ってくれる「妹属性」とか、本当は好きなのに「あ、アンタのことなんか好きじゃないんだからねっ！」などと意地をはる「ツンデレ属性」といった、そのキャラが持つ萌え要素を典型的に示したものです。

この属性のバリエーションは、非常に多岐にわたります。メジャーどころの属性は、「妹」や「ツンデレ」など説明不要のものですし、他にも「メイド」や「姉」「ショタ」「ネコミミ」といった、その意味がきわめてわかりやすいものが大半です。

しかし、そんな属性の中には、大多数のユーザーの嗜好と合致しない、また、大きくはずれてはいなくとも、あまり人の興味が強く向かないような、マイナー属性も数多くあります。好きな女の子が別の男に奪われるシチュエーションに特化した「寝取られ属性（略称：ＮＴＲ）」や、攻略キャラが妊娠してしまうことに無上の喜びを覚える「孕（はら）ませ属性（略称：ＨＲ）」などなど……。

そもそもここでいう属性は、特徴的なキャラの数だけ存在しているものですし、それらのマイナー属性を挙げていけばキリがないのです。で、今回紹介しますのは、比較的マイナー系の中でも、寝取られや孕ませのような特濃系とはまたちょっと違う、マニアックなファンの多い「ネガティブ娘属性」についてです。

この「ネガティブ娘属性」とは、筆者が今、便宜上命名した属性ですが、定着した名称でこそないものの、すでに事実上の属性として比較的広く好まれています。

どのような属性かというと、文字どおり、性格的にネガティブなところを魅力とみなす属性で、そこだけを聞くと、大変マニアックな部分を狙い撃ちという感がありますが、これを属性として捉えることがあまりなかっただけで、実際のところ、普遍的に好まれている要素でもあります。

この、性格的にネガティブというのも、いろいろと広い解釈が可能なのですが、この手のキャラで、ユーザーの心を打つタイプの多くは、その内にこもる心理が共感しやすい類のものだったり、酷いトラウマを持っていて、いかにも同情心を掻き立てずにはおかないタイプだったりするのです。

このタイプのキャラは、ひと昔前に流行りだした、いわゆる「泣きゲー」や、そこから派生した「鬱ゲー」と呼ばれるジャンルのゲーム作品に数多く登場しています。ネガティブヒロインが一人いるだけで、物語をシリアスにするための要素としては充分であり、よりドラマティックで感動を求められる昨今のストーリーにはうってつけで、それゆえネガティブ娘も、実は意外と多くいるのです。「泣きゲー」「鬱ゲー」好きの人には、密かにこの「ネガティブ娘属性」好きの人が多いのです。

「ネガティブ娘属性」のキャラの魅力は、そのキャラの心の闇に触れ、その辛さや悲しみに共感してしまううちに、「コイツは絶対放っておけない！」と思わされてしまうところにあります。

人間の感性というものは、その心に、自分と同じ類の傷を持つ相手のことを強く意識するようにできています。それは同属ゆえの敵意、近親憎悪という形で表れることも多いのですが、こと相手が萌えキャラであれば、そうではないもう一つのパターン、すなわちそのキャラに「劇萌え」を抱くという形で表れることになります。

「劇萌え」とは、現実世界によくある、目を覆いたくなるようなネガティブ状況に置かれたキャラへの共感です。萌えの認識としてはギリギリの境界線上に存在しているものですが、しかしリアリティの強さは最高であり、それゆえにこれは強烈な萌え感情となります。その名のごとく、劇画作品によってもたらされるかのような強烈な感情が、萌えと結びついた状況こそが劇萌えなのです。

ネガティブ娘の多くは、その劇萌えを引き起こせる状況に置かれており、多くの場合、ネガティブ娘属性＝劇萌えといってしまって良いでしょう。

有名なネガティブ娘としては、『エヴァンゲリオン』後半のアスカが挙げられます。また、『ときめきメモリアル2』の留年娘・八重花桜梨なども印象的です。十八禁ゲーム『パルフェ』（戯画）の夏海里伽子及び、同シリーズの同系列キャラも、強烈なネガティブ属性の持ち主です。このようなキャラが好きだという人は、典型的なネガティブ娘属性持ちといえるでしょう。

皆様も、単なる萌えではなく、ときにはこのような方向の探求をしてみてはいかがでしょうか。この手の属性は、萌えに特化しがちな二次元作品のみならず、劇画チックなドラマや小説、純文学などにも幅広く見出すことが可能です。生々しすぎてちょっと、という向きもあるでしょうが、ひたすら甘いだけの萌えに飽食したり、そもそもこうしたリアル方向でないと感情移入ができない、という人には激しくオススメです。

……もっとも、なんでもかんでも属性扱いにしなくてもいいのでは、という気もしますが、まあ、属性という定義があると、たとえば『〜大全』、みたいな本が作れたりしますからね。

phantom column 04

少年マンガは喪男の王国

みやも
text by MIYAMO

マンガ大国・日本。鼻水たらしたガキから、いい年こいたおっさんおばさんまでが黙々とマンガを読みふけるワンダーランド。

かつて「大人までマンガを読んでいる」ということで〝良識〟的なひとびとの失笑と嘆きを誘ったのも今は昔だが、実際のところを考えると、「大人がマンガを読んでいる」というのは上辺だけのとらえ方にすぎない。ほんとうは、児童誌から青年誌、さらにその先の年配層向けまで、「大人になってもマンガを読みつづける」ための受け皿があることこそが重要なのだ。

マンガを読むという行為が生活のなかに組み込まれ、さらにそれが子供時代から数十年続く長期的習慣ともなれば、人格形成に影響が出てくるのは必定。しかもそれは安易な批判を受ける「悪影響」ではない。むしろ、多様な物語……つまりさまざまな世界観、社会観、人物観に接することによって、人間としての生き方を自然に学び取ることが（しかも大いに楽しみながら）できるという積極的な影響が見出せるのだ。

そんな文化が成立した我が国にあって、じつは喪男を自認する諸氏はひじょうに大きな楽園を享受できるという事実にお気づきだろうか。

その楽園とは、少年マンガのことである。

作品の深読みや意味の読み換えをするまでもなく、少年マンガは根本的に非モテ意識が先行する世界だ。なぜか？

別にPTAがうるさいからではない。ちょうど「モテ・非モテ」「童貞・非童貞」の境目に立つ年代層の男子を読者対象にして、主人公が童貞であるがゆえのパワーによって、多くの少年マンガの物語が駆動するからである。

主人公があらゆる代償を払って己の夢ひとつに全精力を傾ける、オタク魂にも通じる信念が、さまざまなオトナの論理を打ち破る物語世界。少年マンガでは、なまぐさい色恋沙汰は遠ざけられるか、あったとしても全体からみると主副の副の次元、刺身のツマやデザートの位置づけになる。

『週刊少年ジャンプ』『週刊少年サンデー』『週刊少年マガジン』『週刊少年チャンピオン』の四大誌だけみても、読者が感情移入するキャラは、全くモテないか、女性に無関心・無頓着・不器用なタイプだ。ルフィも、清麿とガッシュも、ネギ先生も、みな童貞。バキは梢枝ちゃんとセックスして強くなったが、あれは半分ネタとして笑って読んだ読者のほうが多かったはず。

そんな世界で、女に対する激しい執着心をもつキャラは、たとえば今なら『太臓もて王（キング）サーガ』（大亜門）『あいこら』（井上和郎）『スクールランブル』（小林尽）のような、道化めいたコメディのよそおいとなる。

非童貞の場合でも、基本的に『シティハンター』のようにピュアな性格の偽装という前フリか、『北斗の拳』のような一人の女性に一生を捧げる殉教タイプになるし、孫悟空は「んじゃ、結婚すっか」と女性関係を何かのついでで程

度にしか考えていなかった。同じく妻帯者のターちゃんは、妻に虐げられエロ本に逃避していたのが泣けたものだ。
反対に、自覚的なモテキャラ、非童貞の女食い思考は徹底して悪のサイドに置かれる。ヤング誌でホストの活躍を描いた人気作『夜王』(倉科遼・井上紀良)を少年マンガに翻案しようとした『モテキング』が、その題材と少年マンガ(童貞至上世界)としての内圧との間にきしみを生じて、短期間で打ち切られてしまったことは記憶に留めておきたい。メジャー誌のなかで最も破天荒でヤンキー色の強い『週刊少年チャンピオン』でも、モテ志向への受け皿にはなっていない。少年マンガは、とことん非モテと童貞の純粋性に拠って立つ、ボクたちの喪フィールドなのだ。
ハーレムラブコメと言われる分野ですら、その構造を長く引っ張るためには、かえって主人公の童貞性は終盤ギリギリまで維持される(じゃないと話が終わっちゃうしね)。史上空前の三十一人ヒロインという強烈なフックをもつ『魔法先生ネギま!』(赤松健)を考えてみて欲しい。あのマンガは大勢の女の子をはべらせていちゃいちゃ色恋にふける話ではなく、実際には女の子たちからの誘惑には護身してスルーし、彼女たちからの応援だけをブースターエンジンにして夢に邁進する男子の成長譚として、ある意味、きわめて硬派な内容へ向かったことで作品的にも商業的にも成功を収めている。
こうした根っこのところで恋愛に依拠しない作品群に触れることが、先述したように、我々自身の生き方の問題に還元されてくる。喪男は、ただ二次元キャラとの恋愛や、二次元キャラからモテて癒してもらうことに耽溺するばかりではなく、二次元世界の構造そのものに元気づけてもらって、独り身の暮らしをいきいきさせる活力を得て現実に戻り、己の夢のために闘うことができる。
心を二次元と現実で交互に良循環させる……虚しきモテを捨て、実のあるフィクションに愛を注ぐ境地こそ、むしろ現実的なのではないだろうか。少年マンガは、それを我々に教えてくれる媒体なのである。

phantom column 05

「萌え」のトリセツ
〜眼鏡萌えの可能性〜

黒石 翁
text by KUROISHI, Okina

『電車男』ブームによって、〝萌え〟という概念が一般層にまでひろまりつつある。広告代理店や芸能プロダクションも、アイドルなどの売り出しに萌えを取り込み、アキバ系のオタクを新たな市場として狙っている。しかし、その試みは成功しているとは言い難い。萌えの研究や認識が甘いがゆえに、多くの企画はイタサばかりが目立ち、オタクはおろか一般層にも魅力をアピールできない、ハンパなものとなってしまっているのだ。

その中でも目立つのが「眼鏡萌え」だ。

とあるグラビアアイドルは眼鏡っ娘であることがウリだが、彼女のサイトを見てみると、「マイブーム：眼鏡・サングラス」「趣味：眼鏡集め（でも視力は1・5）」などと書いてあり、自ら「エセ眼鏡」だと公言してしまっているのだ。

そこから見えてくるのは「かわいい子に眼鏡かけさせとけば、オタクは喜ぶだろう」という浅い考えだけだ。

数ある萌え属性の中でも、眼鏡ほど扱いの難しいものはない。眼鏡があればOKと簡単に見えるが、実はしっかりとしたキャラづくりを怠ると、送り手側の安易さが丸見えになってしまうのだ。一時期のギャルゲーなどでは、そんな安易な眼鏡っ娘が氾濫し、眼鏡萌え自体が安い萌えだと思われるようになったという苦い歴史もあるほどだ。

だが、扱いが簡単であるがゆえに、眼鏡には「うまく使えば万人にわかりやすい良質な萌えとなる」利点もある。

それを実践しているのが、ここ最近の『週刊少年サンデー』だ。『聖結晶アルバトロス』では、眼鏡っ娘ならではのやぼったいかわいさを見事にキャラ化した女の子「ゴミ子」（実は異界の姫君）をヒロインに据え、偏執的フェチズムをコメディに昇華した傑作『あいこら』では、ヒロインの一人にコンプレックスを抱えた巨乳眼鏡っ娘を配置し、彼女に語る形で読者に眼鏡っ娘の魅力をレクチャーするエピソードも登場。眼鏡によって、『犬夜叉』や『名探偵コナン』を読んでいるような小中学生にも通用する萌えをつくり出そうとしているのだ。

そういった取り組みは、このような小中学生をターゲットにしたメディアの中に、眼鏡萌えを一歩推し進めた新たな萌え属性を生み出しつつある。それは「目隠しっ娘萌え」だ。眼鏡萌えの演出法の一つに、表情の要である目を見えなくするというものがある。これによって普通のキャラにはない得体の知れなさや、内面へと踏み込めない心の壁を表現し、受け手に「あの子のすべてを知りたい」という萌え欲求を抱かせるわけだが、「目隠しっ娘萌え」は、これを眼鏡抜きでやってしまうのだ。

その最右翼が、『週刊少年チャンピオン』で連載中の甲虫バトルマンガ『サイカチ 真夏の昆虫格闘記』のヒロイン（と断言してかまわないだろう）・師匠こと榎稲穂だ。主人公の少年を甲虫バトルの道へと誘い、女子高生とは思えない豊富な知識と技で彼を育て上げていくというキャラ

なのだけど、そのビジュアルがすごい。学校の制服に白衣を羽織り、目がほとんど前髪で隠れてるシャギーなショートカットという、いわゆる萌えキャラの文脈からははずれまくったデザインなのだ。

東浩紀あたりが唱える「萌えキャラは萌え要素の順列組み合わせ」という視点からみれば、師匠は萌えのカケラもないキャラだろう。だが、その髪の奥から時折のぞかせる主人公への優しげな眼差し、意外とグラマラスなボディラインが醸し出すお姉さんキャラならではの清楚な色気、まだ子どもの主人公に手を握られてあたふた赤面したり、生まれて初めて食べるクレープのおいしさに愕然としたりと、言動の数々がルックスとのギャップによってとてつもなく萌えるものになっているのだ。長い前髪を眼鏡の代替えとして、ビジュアルの印象を変えつつ眼鏡っ娘の萌えを取り込む……目隠しっ娘が眼鏡っ娘の進化系であることの証明だ。

サザエさんの生みの親である故・長谷川町子のエッセイコミック『サザエさんうちあけ話』の一節に、「いつも愛想のいい人の笑顔より、ガンコ親父がふと見せる静かな笑みの方が価値がある」という感じのことが描かれている。これは萌えの演出においても通用する重要な要素であり、これを実践している萌えは、現在大きなムーブメントとなっている「ツンデレ」と、前述の目隠しっ娘という発展型へとつながる「眼鏡っ娘」だけなのだ。

大きな話題にはなっていないが、その王道な作り込みで人気を集めているリメイク版『ガイキング』では、サブヒロインに巨乳眼鏡で三十二歳の知性派副長・ローサや、メイド服チックな作業着に身を包んだアネゴ肌の目隠しっ娘なメカニック・シズカを配置。これもまた、適度にマニアックで子どもでも親しみやすい萌えを作り出そうとする試みといえるだろう。

いつまでつづくかわからない「萌えバブル」だが、玉石混淆なこの状況で萌えの勝ち組となりうるのは、眼鏡萌えを極めたものだとここに断定しよう。

『サイカチ 真夏の昆虫格闘記』
企画・原作／藤見泰高
漫画／カミムラ晋作
少年チャンピオン・コミックス
秋田書店

phantom column 06

地獄読書会

〜『撲殺天使ドクロちゃん』を
20数名の女性に読んでもらうという実験〜

米光一成
text by YONEMITSU,Kazunari

新世紀のライトノベル界に登場した衝撃の問題作といえば『撲殺天使ドクロちゃん』（おかゆまさき・メディアワークス）です。

「ドラえもん」設定のパロディでありながら、机の引き出しから飛び出したのは、かわいい少女の姿をした天使であり、名をドクロちゃんといいます。ことあるごとにトゲトゲ特製バット『エスカリボルグ』で主人公の少年・桜くんを撲殺。「**ぴぴるぴるぴるぴ〜♪**」と呪文を唱えると、吹き飛んだ脳髄や、つぶれた鼻骨や、散乱した肉塊を、光の波が包み込み、桜くんは蘇（よみがえ）るのです。

ライトノベル界ギャグ＆萌え部門で先頭を走っていますが、確実にコース外れちゃってますよッみたいな型破りな作品であり、萌えながら爆笑の連続、大傑作です。

というのは、本誌を読んでる皆様は先刻承知でありましょう。が！

大人の女性は『撲殺天使ドクロちゃん』をどう読むのだろうか？ そんな軽い疑問から、ついうっかりとスタートしてしまった地獄読書会。

これは、**『撲殺天使ドクロちゃん』を20数名の女性に読んでもらうという実験**を行なってしまった悲しくも怖ろしい実話……。

そもそもは、闘う書評家＆小説のメキキスト豊崎由美が主催している書評講座のゲストに招かれたことから始まります。

その書評講座のルールは、こうです。

> 課題図書を読んで、各自が書評を書く。書評は無記名で全員にくばられ、全員が点をつける。得点を集計し、最高得点をとった人は書評王となり、次の課題図書を決定する権利を得る。

プロアマ混合で採点し、順位を決めるという書評バトルロワイヤルなのです！

で、ゲストとして招かれたぼくは、書評王に選ばれ（えへん！）、次の課題図書を決める権利を得たのでした。

おしゃれな海外文学やおしゃれな川上弘美本やおしゃれな穂村弘本などが課題図書となる書評講座で、ぼくが、次の課題本に設定したのは『撲殺天使ドクロちゃん』！

「わはは〜 米光さん、なんて本を課題にするんですか」ぐらいのリアクションだと思っていたのです。が、それどころではなく。非難の嵐！

「なんちゅー表紙の本を買わせるんですか、乙女に！」

「ライトノベルって、何ですか⁉　どうやって読めというのですか⁉」「あぁ、こんな人に点を入れるんじゃなかった」といった勢いで、もうM男なら昇天してしまうほど、にぎやかに、いじめられました。
やっぱり、一般的には、ライトノベルって、まだまだ大人たちは認知してくれていません！

その数日後。
みなさんのドクロちゃん書評が添付されている豊崎さんからのメールが届きます。いきなりこう書いてありました。
〝米光さん、すごかったですよ。みんなからの呪詛の言葉。〟
ご立腹を超えて、呪詛です！　ψ(｀∇´)ψエロエロエッサイムです！
意を決して、書評を読みます。最初の書評が、こうです。
美しい小顔になるために、いちばん効果的なのは「怒らない」ことだそうです。
いきなり書き出しから怒る気まんまんです！
ですから本書を読まれるライトノベル初心者の方に是非、おすすめしたいのがこの菩薩顔至上主義です。〈！〉マークが1ページに22回出てきても軽く口角をあげて微笑み、〈ぴぴるぴるぴるぴぴるぴ～♪〉がいちいち勘に障（さわ）りそうになったら思いきって音読、〈ザンス〉やルビがうるさかったり、会話による状況描写が続いても頭を垂れて感謝していただきたいのです。

オトナの世界でいうところの「皮肉」というヤツです。ぼくがおもしろいところが、すべてカンにさわるようです。（泣きながら）つぎを読みます。
お話自体は至ってシンプル。過剰な改行と短いセンテンスの畳みかけで非常に読みやすい。
ホメだ！　ホメ、キタ――――（゜∀゜）――――ッ!!
読み手の知見の深浅によっていかようにも読めるのは優れたテキストであることの証左ともいえる。
よかったー。わかってくれる人もいるんだ！　と思いながら読み進めると、
一人でも多くの方に手に取っていただきたい一作だ。なぜなら、その中の一人でもいい、ぜひ教えていただきたいからだ。この「小説」をどう読めば楽しめるのか。どこが面白いのかを。
あ、あれです。ドンデンガエシとかいうヤツです！　妖怪ドンデンガエシさんです。心臓によくないです。
つ、つぎ！
萌え。私はそもそもこの言葉がわからない。ロリフェチ？アニメおたく？　もだえてるってこと？
悲しみにもだえながら読みます、がんばって読みます。
ストーリーは、いまどきこんなのでいいのっ、ゲーマー世代はもっと複雑な展開じゃないと怒るんじゃないのっ、といちばん私が怒っているじゃないかというくらいシンプル。
（何かを連打しながら）ゲーマー世代！　ゲーマー世代！

ゲーマー世代！　これ以上、読めないよ、つ、つぎ！
もはや笑ってはいられない。今を生きる女性の敵は秋葉原にあり、なのである。
敵と認定されました、ロックオンされました！　うぎゃーー。
つ、つぎデス！
眼前にライトノベル界における〝オチモノ〟の究極形と見なされている『撲殺天使ドクロちゃん』が（泣）。
泣かないで。ごめんなさい！　ぼくが悪かったんです。
一読、脱力。ロリロリ美少女天使・ドクロちゃんが主人公少年・桜くんを守るために、未来世界から机の引き出しを通ってこの世界にやってくる。ここまではいいですよ。いいことにしますよ、「なんで引き出しがタイムマシンになり得るんだよ、科学的な仮説くらい提出しろよ、ぐぁらっ」とか、んな堅いことは言わずにね。
いや、もう、最後までいいことにしてください。その広い御心で！
でも、興奮したドクロちゃんが撲殺バットのエスカリボルグを振り回しては桜くんを一瞬にして肉片に変え、我に返っちゃ呪文を唱えて生き返らせるという設定はいかがなものか。血と脳漿飛び散らかしての撲殺と安易な蘇りの繰り返し。いかがなものか、どうなのか。
いや、いかがなものかって言われても！　ギャグですからね。ギャグマンガでショックでグサグサとヤリが刺さったコマがあって次のコマでは何にもなかったことになってる、あれと同じ、いわば暗喩を現実にして、ギャグにしてみせたジャパニーズ・マジック・リアリズムですよ！
たのむから、虚構と現実をごっちゃにしないで！
こうしたリセット可能な殺人という描写が、小説のテーマや構造を成立させる上で何らかの寄与を果たしているならいざ知らず、単なるお遊びとして繰り返されているだけとあっては、看過できるものではございますまい。
遊ばせて！　遊ばせて！　遊びとして繰り返させて！　まだ遊びたいさかりなんだから！
この面白さがわからないからといって年寄り扱いされるなら本望本望大本望。あのね、死んだらおしまいなの、だから殺しちゃいけないの。いい年をした大人が、幼児のままごと遊びに本気でかかずらわってる場合ではございますまい。
ひゃーー。幼児のままごと遊び！　ぼくもうゲーマー世代ですからね。リセット可能な殺人だろうが、死んだらおしまいだろうが、丹波哲郎の『大霊界2　死んだらおどろいた‼』だろうが、本望本望大本望です。本気で遊ばせてもらいます。かかずらわせて、ごめんなさーーい！
いいんです。若者と少年の気持ちを忘れない大人たちだけで楽しみましょう。ぼくたちは、太陽の下を歩けないんだ。ドクロちゃん、君だけがぼくの太陽だよ（ドラマ『白夜行』の曲をハミングしながら）。

できたー!
ギャッ
ゆりちゃん早く早く！あと2時間で印刷所閉まっちゃうよ！
あっ焦らないでお金は持った？原稿全部揃ってるか確認した？
あっヤバ！ミキ、原稿確認してくれた!?
さっき先輩がしてたでしょ
ドタ
バタ
バタ
漫画研究会
冬コミ 進行スケジュール
ヨロ
ヨロ
ヨロ
行ってきますっ!!

えーと、髪が長くてメガネかけてる子がウチの会長です。

みずえちゃん、ケッコー号で行くでしょ？

ダッ

ダダッ

あたしは髪が短い方。マンガ担当のみずえです。会長のゆりちゃんとは同い年の中3です。

もちろん！ゆりちゃん、原稿死守してね！

ダッ

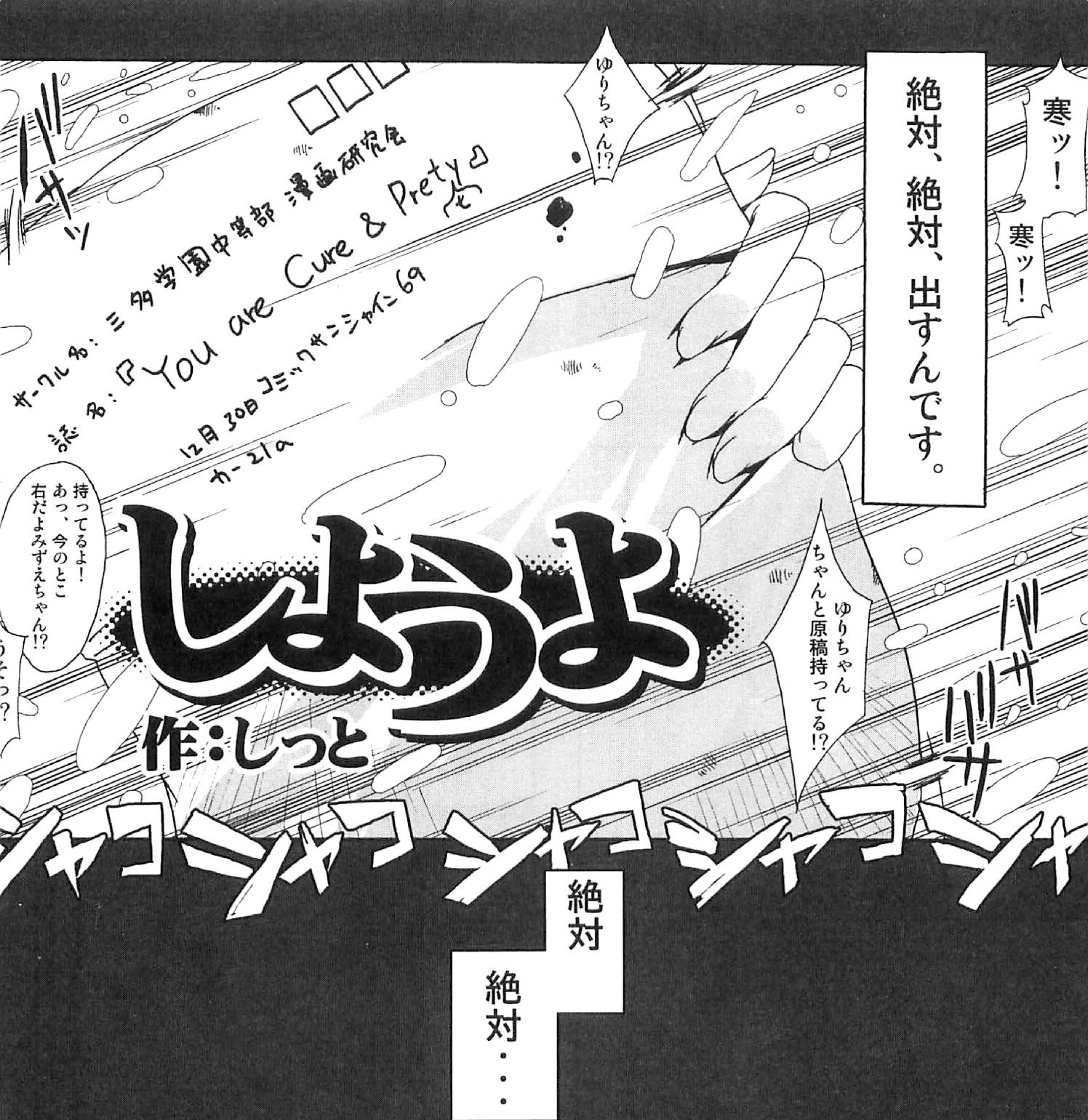
ダダッ

ガチャッ

こっちです先輩！

ダダダ

あたし達は、冬コミで同人誌を出すんです。

ケッコー号II
※1台目はパクられた

寒ッ！
寒ッ！
絶対、絶対、出すんです。
ゆりちゃん!?
ゆりちゃん ちゃんと原稿持ってる!?
持ってるよ！ あっ、今のとこ右だよみずえちゃん!?
うそっ？
バサッ
サークル名：三ツ学園中等部 漫画研究会
誌名：『YOU are Cure & Prety』
12月30日コミックサンシャイン69
カ-21a

しようよ

作：しっと

バサ
バサ
シャコシャコシャコシャコシャ

絶対
絶対・・・

同人誌印刷 くまのしっぽ
入稿ですね ありがとうございます
じゃあ原稿をチェックしますので、申込書を書いてお待ちください
ゼェ ゼェ カハ

日曜朝 8:30

ちなみに、あたし達が作ったのは『ふたりをキュアプリ』っていうアニメの同人誌。

同人誌印刷申し込みフォーム

ナギとホノっていう、あたし達と同い年の女の子が、正義の戦士『キュアプリ』に変身して、

あたしが『キュアプリ』を好きなのは、ナギとホノの絆の強さ。

活発なナギと、おしとやかなホノ。ふたりは一見正反対なんだけど、いつも仲良しで、息が合ってるの。

ピンチの時は体を投げ出して守ったり、お互いいつも思いやり合ってる。

女の子同士だけど、ふたりはまるで・・・

あの・・・こちらのお客様は・・・

ビクッ

ガタッ

ごめんなさい いま起こします

だば—

みずえちゃん

ナギ・・・

ホノ・・・

みずえちゃん

・・・

ジュエル・オーラウェーブッ!!

ポタ

ポタ

クルッ

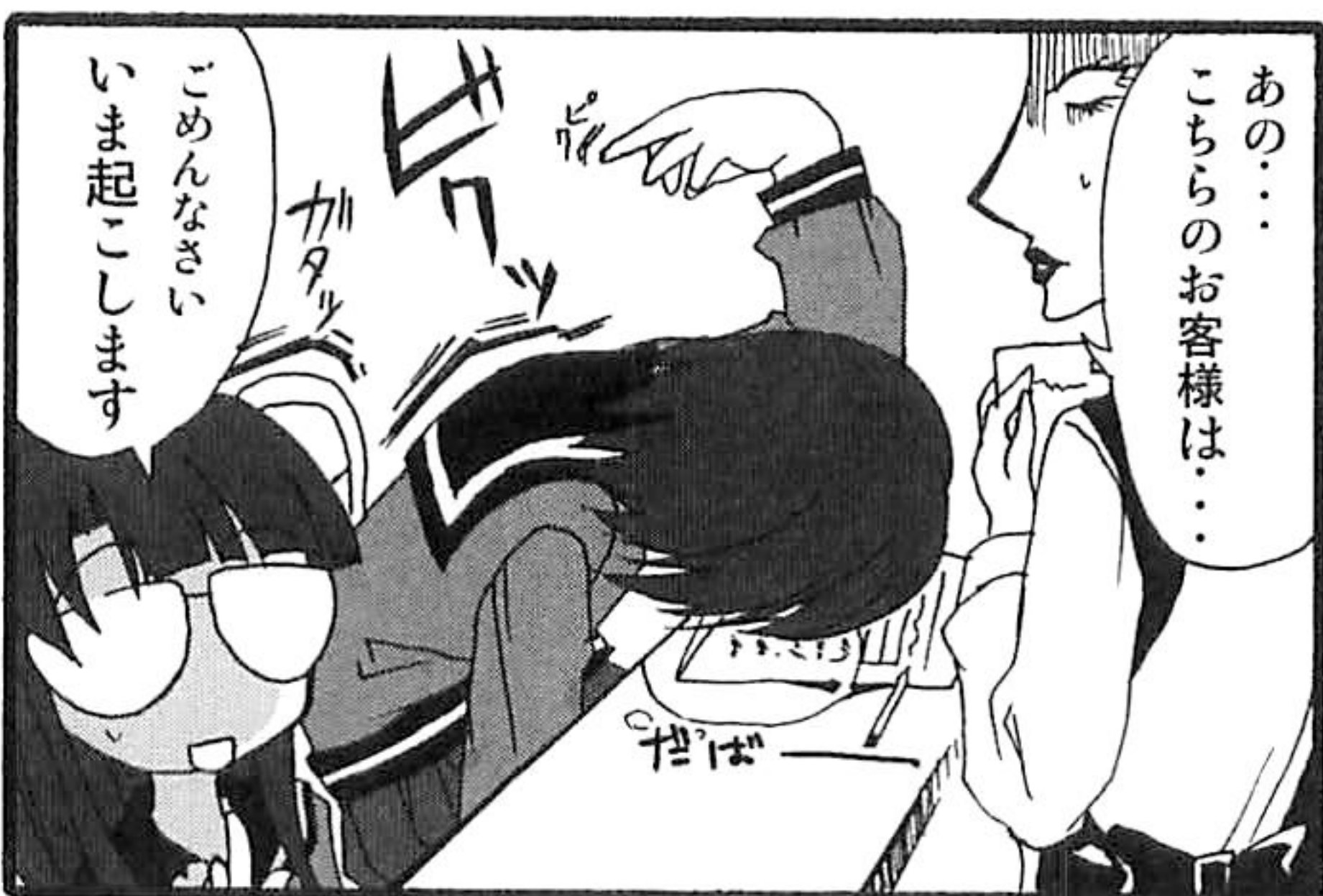
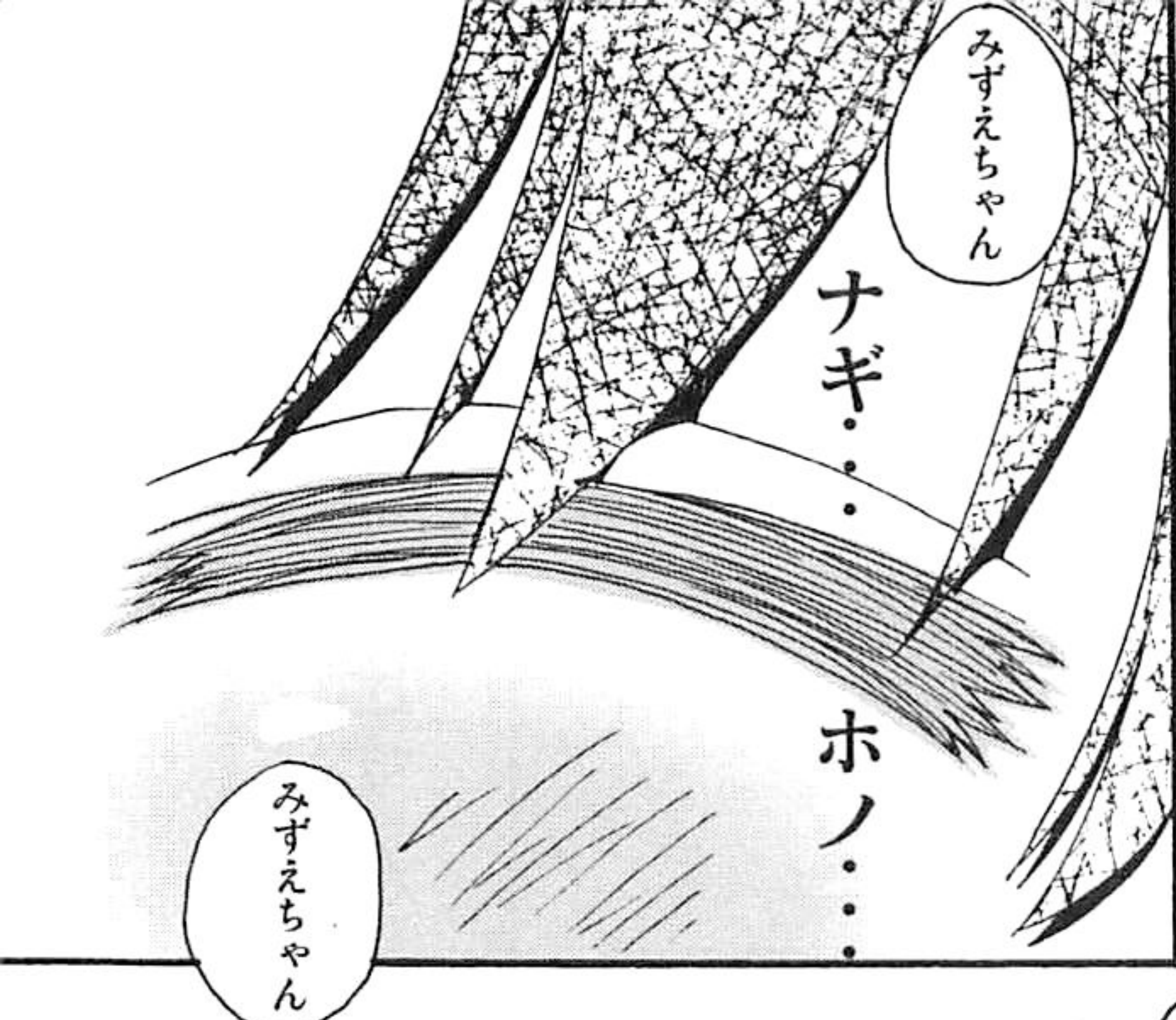
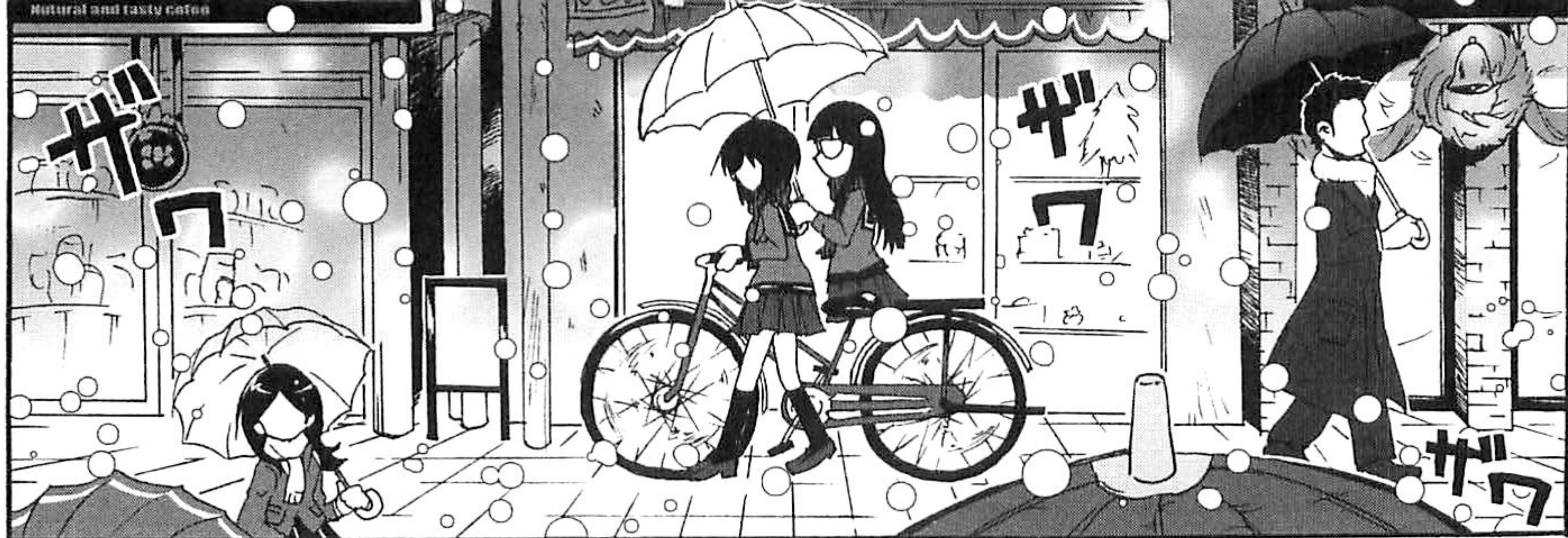
入稿
終わったよ

しん
しん
しん

ありがとう
ございましたー

ガラッ

落とさなくて
済んだね・・・

ザワ
ザワ
ザワ

でもみずえちゃん・・・
あのコマであんなに時間
かかっちゃうなんてね

全体の進行も
かなり押してたし・・・

後輩のみんなも、
あのコマが上がるの
ずっと待って
たんだよ？

もうちょっと早く上げれば
良かったかもね・・・

・・・何言ってんのよ
ゆりちゃん

あのコマは、
ナギがホノをかばって
絆を深め合う、
めっさ重要なシーンじゃん！

あのコマをめいっぱい
描かなきゃ、この本を
出す意味がないでしょ？

ざわ
ざわ

・・・・・・・

・・・・！

・・・そうだけど、
みずえちゃんのコマが
遅れたせいで、
みんなの作業が遅れたんだよ？

コミケに受かるなんて
めったに無いんだし

ゆり・・・

もし〆切に
間に合わなかったら、
とか考えなかったの？

だっ　だけど！
アニメ本編じゃ、ナギとホノは
ただの友達じゃない！
ふたりが、お互いもっと近づく
為には、あのコマがいちばん
大事じゃない！

たしかにみんなには
迷惑かけちゃったけど、
あた・・・
あたしは・・・・！

ドンッ！！

みずえちゃんだけの
本じゃないでしょ!!

しん
しん
しん

ざわ
ざわ
ざわ

しん

・・・だけなの

しん

しん

しん

え？

ゴメンね ゆりちゃん

あたしって

頭悪いから、すぐ周り見えなくなっちゃって

みんなとこの同人誌作ってるとき、あたしナギとホノの事しか考えてなかった

ふたりは、どんな時も一緒で

ナギはかっこよくて、ホノは可愛くて

きっと、ナギとホノは想い合ってるんだ！って思うと、あたしも嬉しくなっちゃって

・・・でもアニメじゃ、親友以上にはならないじゃん？

なんで？

女の子同士だから？

女の子と女の子じゃ恋はしちゃいけないの？

プル

あたしは、ふたりが

プル

幸せになって
欲しいだけなの

ぽろ

ぽろ

しん

しん

しん

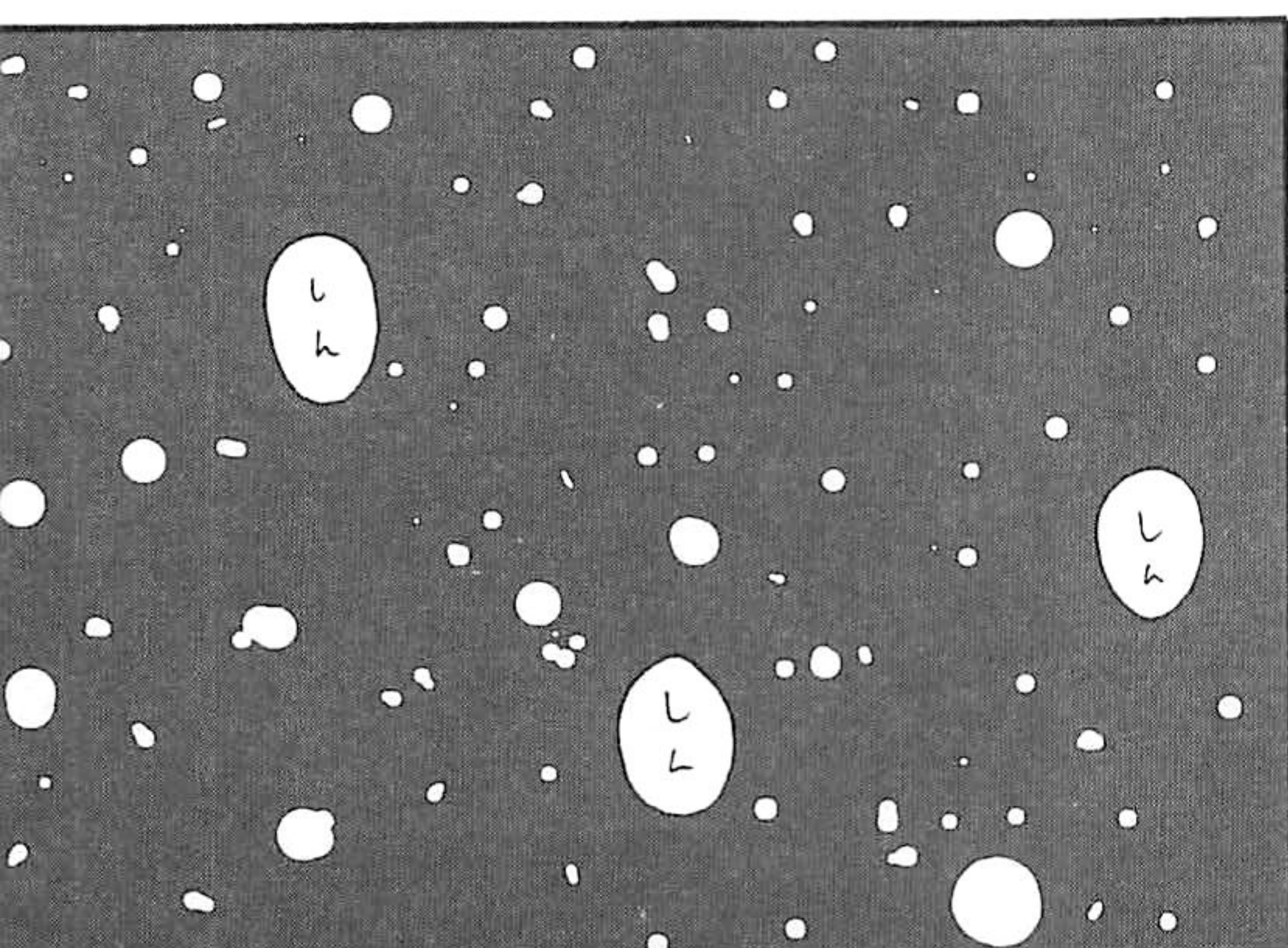
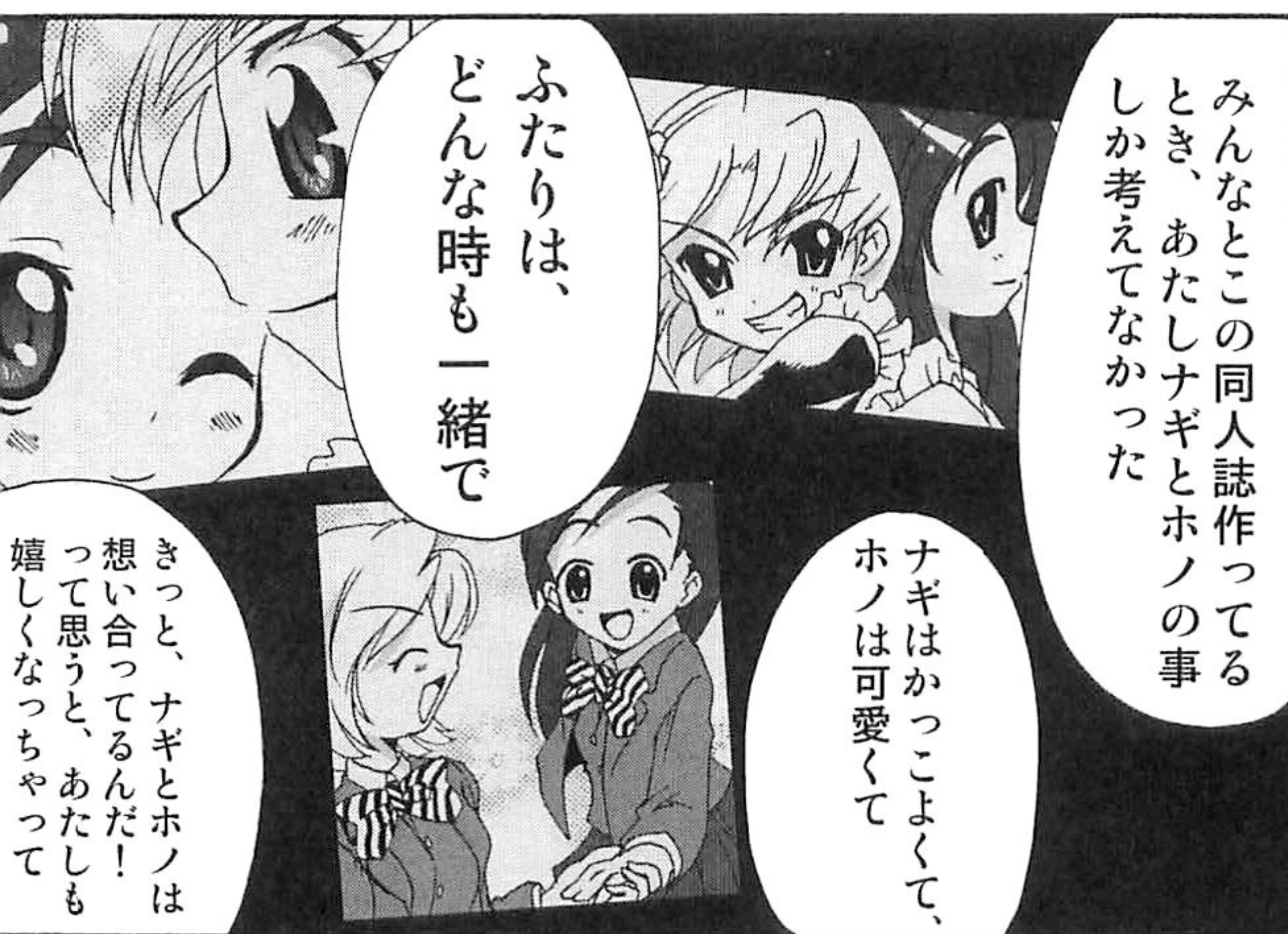
きゅっ

・・・ああ

そうだったね

ビクッ

――じゃあさ

すうっ

次の本で、ナギはホノの親に会いに行くの
それで『あたしはホノが好きです』って両親に向かって告白するの！

当然、親には猛反対されるわ

そこに

闇の使者が突然襲ってくるんだけど、ふたりは力を合わせて敵を追い払うの

その様子をずっと見ていたホノの親は、ふたりの絆の強さに心を打たれるの！

ざわ

ざわ

私が、中学３年間ずっと　漫研に居た理由は・・・

最後にふたりは、ホノの親にもう一度告白する・・・っていうのはどう!?

・・・・・・

・・・それでナギとホノは幸せになれるの？

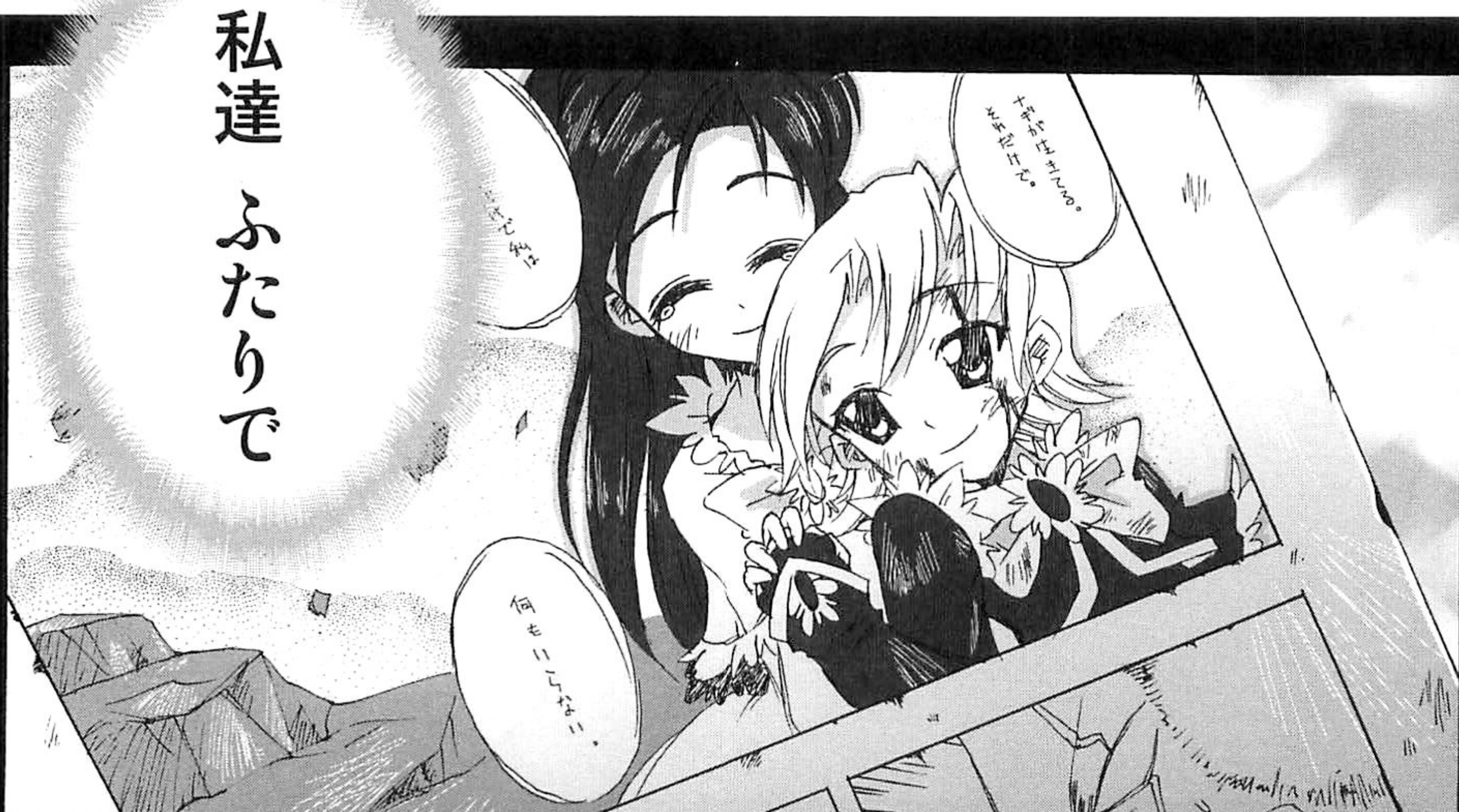
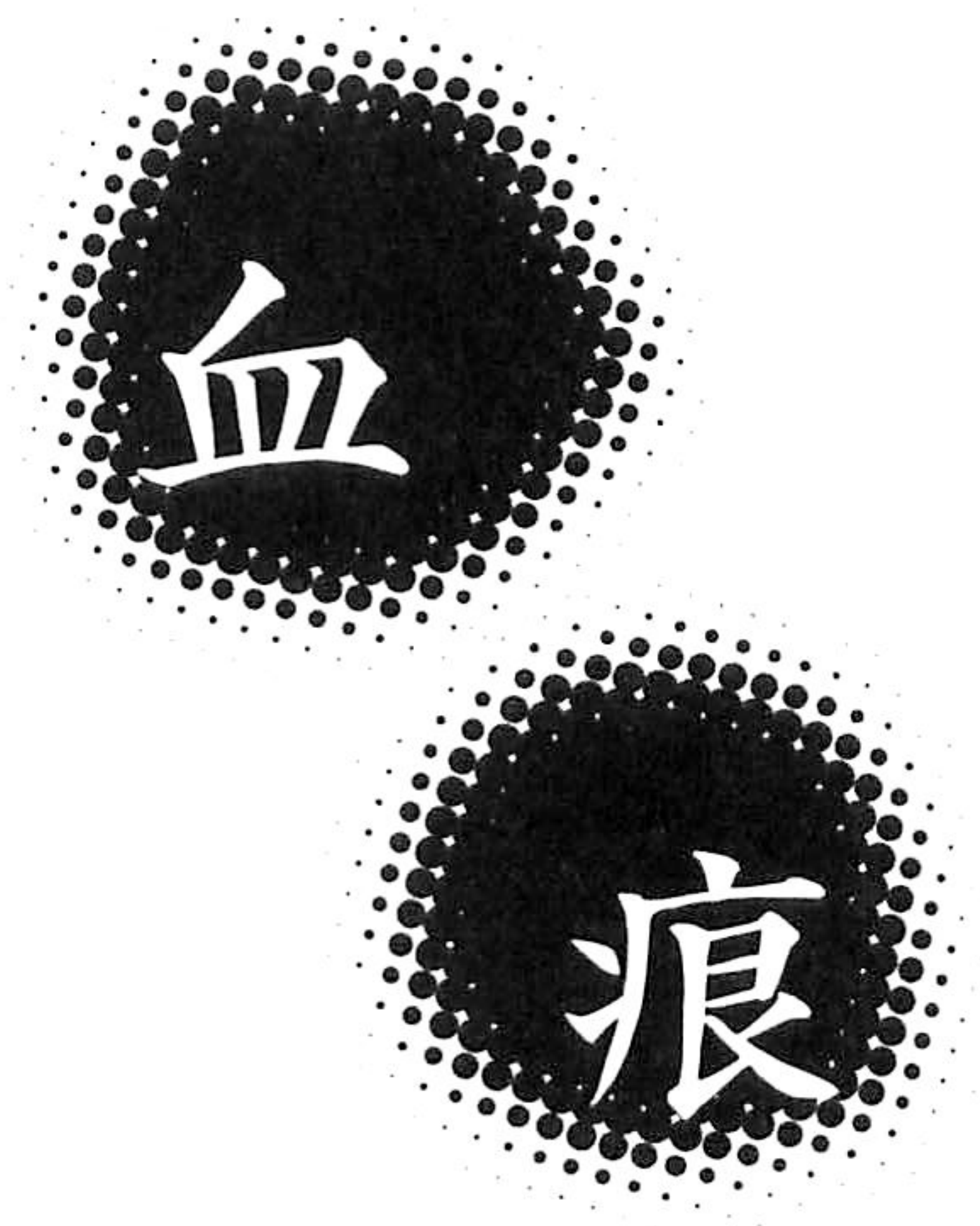
しようよ！

幸せにしようよ

私達　ふたりで

ナギがいきてる。
それだけで。

何もいらない。

血痕

蓮海もぐら
Illustration／吉井ダン

初夏。
グラウンドを周回するショートパンツの群れが、まぶしい。
第二次性徴もいい感じに落ち着いて幼児体型を卒業しつつある女子どもは、野郎の脳味噌を朦朧とさせるおかしな物質を分泌しやがるもんだから、僕みたいな人生経験の浅い童貞風情にとっちゃあ迷惑きわまりない存在だ。
それが、体操服姿でグラウンドを周回しながら、学校の敷地全体におかしな物質を振りまいているのだから、まともに授業なんか受けていられるワケがない。
僕は、ややもすれば先端から汁を零しそうになるのを堪えながら、くだらない懸念の一つを抹殺するため、己が首に手を回す。
頸動脈を締めて、血圧を下げるのだ。血圧を下げて、先ほどから股間へと流入しつづけている血流を食い止めるのだ。
この四時限目が終われば、次は昼休み。万一、勃起などして席を立てなくなったら最後、僕にとっては学校生活で唯一の楽しみである『ピザパン』及び『ロイヤルミルクティー』が売り切れてしまいかねない。
勃起を食い止めるにあたり最も確実な方法は、目の前の教壇で世界史を教えている亀澤のツラ構えを見ることだ。あの萎びたアンパンのような顔面の下部に申しわけ程度に穿たれたおちょぼ口でフェラチオされているところを想像すれば、あらゆる欲望はいっぺんに引っ込むだろう。
しかし、それにあたっては一つ大きな問題がある。万一にで

も亀澤と目が合ってしまうと、つまらない質問責めに遭いかねない。
しょうがないので、諦める。
亀澤と目線を合わせぬよう気をつけながら、どうせつまらない文章で埋め尽くされているであろう黒板に目をやる。
もし、そのつまらない文章によってチンポをションボリさせることができたなら、僕は亀澤に感謝しなければならないだろう。
さて、現在、黒板にはどのような文字が書かれているかと言うと――

マルティン・ルター。

――どうやら、人間の名前らしい。
フルチンを連想させる、ワイセツな名前だ。
教科書には、フランシスコ・ザビエルの紛い物みたいな胡散臭い写真が掲載されている。
僕はマルティン・ルターについては多くを知らないけれども、コイツが絶対にマトモな人間じゃないってことだけは確信できる。名は体を表わすとはよく言ったもので、名前が変な奴にロクなのはいないんだ。

やったぜ！
マジメなことを考えてみたら、みるみるチンポがションボリしたよ！

チンポがションボリした途端、頭ん中がビリビリと痺れた。
僕は慌てて、自分の首を絞める手を緩めた。
そうして再び、窓の外――グラウンドに目をやる。
相変わらず、女子が回ってる。
ウチのクラスの女子どもだ。
この時間は本来、体育の授業のはずなのだけど、男子だけは例外的に世界史の補習を受けさせられるハメになっている。
自分で言うのもなんだけど、バカばかりだからしょうがない。本当に、しょうもないバカばかりなんだ。
生きている価値がないって言うか……
全員、死んでしまえばいいのにな。

窓から目を離して、今度は足下を見る。
汚れて黄みがかったタイルの上に、
真っ黒な点が、一つ、二つ、三つ……、

血痕。

僕が残した、血の跡だ。

グラウンドをグルグル回っている女子の中には、体育の授業をサボる奴がいる。
サボる理由は様々で、頭が痛いだとか、熱があるだとか、身体が火照るだとか、股間から血がドバッと流れただとか、枚挙に暇がないけれど、中でも最もメジャーなものは、やはり「股間から血

がドバッと流れた」なのだろうなあと思う。
願わくば僕も女に生まれたかった。
股間から血をドバッと流して、体育の授業をサボりまくりたかった。
だけど、生憎と僕は、男性として生まれた。
人間、一度生まれ持った性は変えられない。
男性として生まれちまった以上、股間からドバッと血を流すことなどはとうていできない。
それでも、僕にも女性と同じだけの血液は流れてる。

切れば、出るはずだ。

切れば、ね。

一昨昨日の美術の時間。
僕は先生の指導を無視して一人、円空彫りをつくってた。
その時、うっかり彫刻刀の使い方を間違っちゃって、左手の親指をね……グッサリと、抉った。
一旦、刃先を差し込んだ後に「ヤバい」と思って刀身を返したのが、裏目に出た。
刃の先っぽがグルッと回転したら、それに合わせて肉が抉れてね……爪の右側のふくらんだ部分が、綺麗に半分、親指から剥離した。
痛いとは思わなかった。
ただ、ただ、物凄く驚いた。
でも、ちょっと間を置いたら、今度は無性に可笑しくなって……え、何が可笑しかったって？
いや、だって、さっきまで僕の身体の一部だったものが、自分の意思じゃどうにもならない肉の塊になってプラプラ揺れてるんだぜ？
手を振るとプラプラってさ……揺れるんだもん。
そりゃ、可笑しいに決まってる。
だから、僕は「あはは」って声を出して笑っちゃったんだ。大きな声でさ。
そうしたらやっと周りの奴らも僕の怪我に気づいて、途端に教室は大騒動。
誰が一番慌てたかって、先生が一番慌ててた。先生、何の指示もできずに、泣きベソかきはじめちゃってさ。
僕は結局、保健委員に連れられて教室を出たんだけど、最後にもう一度、みんなの顔を見てやろうと思って振り返ったらさ――

――何を見たと思う？

僕の怪我を、笑っている女子がいた。

彼女の名は、ユカリたん。
僕の隣の席の子で、クラスの連中からは虐められてた。
どうして虐められていたかって言うとね、彼女は言葉を発さなかったんだ。
言葉を発さないせいで施設に送られそうになったこともあるらしいんだけど

ね、ココ一番って時にはちゃんと喋って るみたいなんだ。だから、ギリギリのところで普通の中学に通って、ギリギリのところで普通の高校に入ることができたんだけど、彼女にとってそれが果たして良いことだったのかどうかなんてこと、僕にはちょっと分からない。

ユカリたんは、笑わない子だった。表情がなかった。表情がなかったもんだから、もしあの表情が既に笑っている状態なのであれば、彼女はきっと常に笑っていたのだろうし、怒っている状態なのであれば、常に怒っていたのだろうと思うけど、僕には少しだけ悲しそうな顔に見えていたから、もしかすると、常に悲しい気持ちでいたのではないかな。

だから、虐められたんだ。

ユカリたんはね、最初は周りと上手くやっていたんだ。あまり可愛くはなかったしね。成績も決して良くはなかったし、変に目立つ感じはなくって、実際に彼女と友達になろうとしている人も何人かいたようには思うんだけどね……。

彼女は、誰とも話そうとはしなかった。

だから、嫌われた。

どうやら人って、お近づきになりたい相手にコミュニケーションを拒否されちゃうと、理解とは正反対の方向へベクトルを向けるしかなくなっちゃうらしいのね。だって、ほら、何だかんだ言っても「何もしない」ってことが、一番難しかったりするじゃない?

何もしないことができないもんだから、近づけないなら遠ざかるってワケ。好きか嫌いになることはできるけど、どっちつかずでいることが一番難しかったりするらしいんだよ。

だからね……彼女は、嫌われた。

ユカリたんが受けていたのは、殴るとか蹴るとか、そういう分かりやすい虐めじゃなかった。

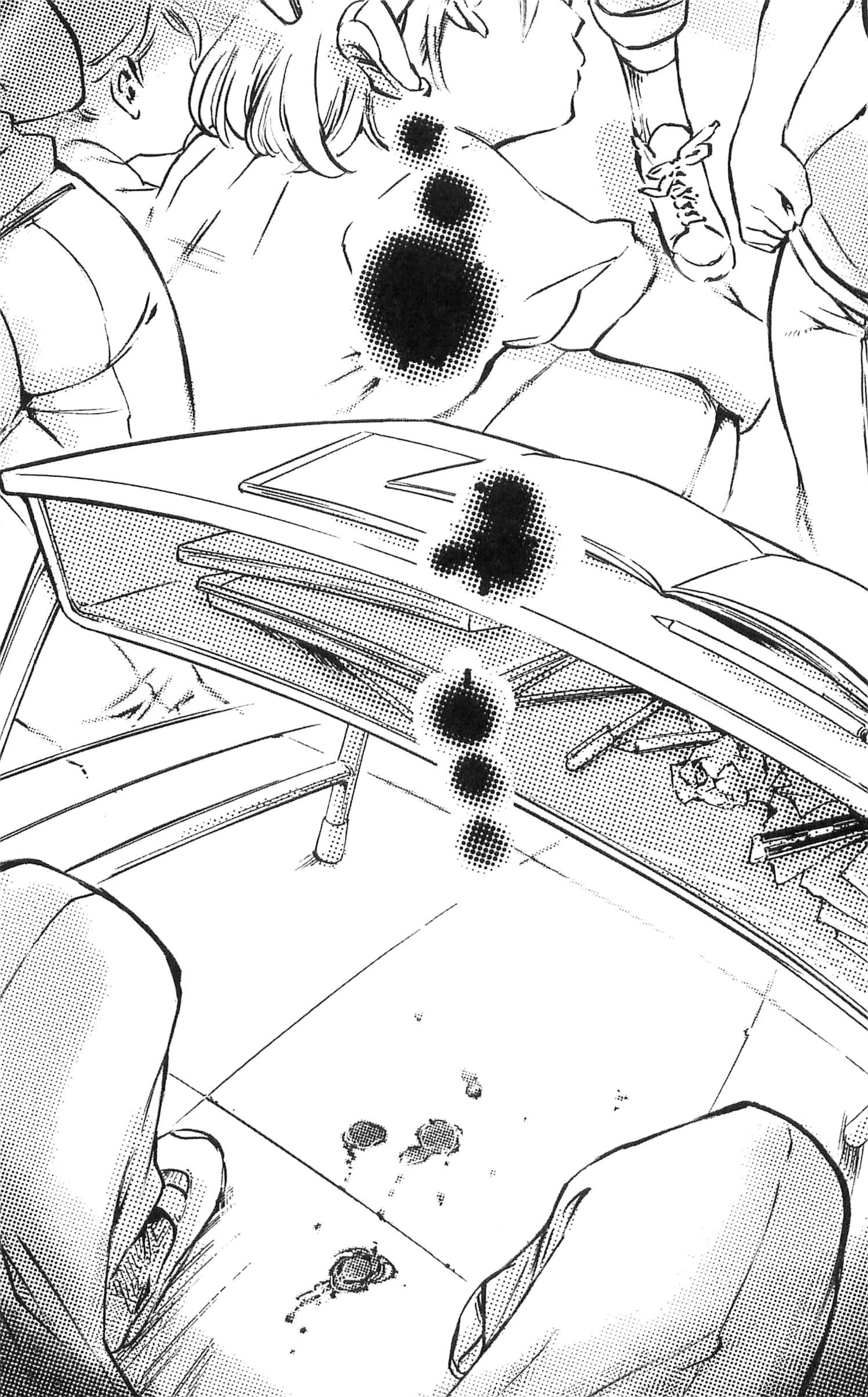
男子の虐めは単位あたりの所要時間が物凄く短いのね……蹴って殴って、はい終わり。

でも、女子の虐めって言うのは、ソイツが長い。トコトン長い。

僕は中一の時、女子だらけの吹奏楽部に入っちゃったんだけど、そこで受けた虐めは半端じゃなくってさ……アイツら、トコトン詰めてくるのよ。

足の甲にパイプ椅子を乗っけて、その上に乗っかられてね、その状態で女子に囲まれて罵倒されるわけよ。

三百六十度、ドルビーサラウンドのようにあらゆる角度から罵声が飛んできてさ。「今死ねたら楽だろうな……舌を噛むのとどっちが楽かなあ」なんてことを、本気で考えさせられた。

まあ、ユカリたんがそんな虐めを受けていたかどうかは定かじゃないけど、女

子の虐めってもんは、精神的にくるんだよ。
とまあ、そんな彼女……普段は笑わない虐められっ子の彼女がね、どういうワケか、僕の怪我を見て笑った。

いやあ、電流が走ったね！

何だコイツはと思った直後には、骨の髄まで好きになってた。
まるでバカげた話だと思われるかもしれないけれど、人を好きになるってこと自体が、だいぶバカげているもんじゃないか？
だってさ、さっきまで自分にとっちゃ、どうでもよかった奴をさあ、突然、理由もなく、好きになるんだぜ？
理由は、不明。
あいや、別に説明を端折ってるワケじゃないんだよ。そもそも「好きの理由」なんてもん、天地開闢以来、後づけでしかありえないんだから、口にする端からすべて嘘っぱちになっちまうわけじゃん？
それならさ……そんなもん、あえて考えるほうが野暮ってもんだろう？

僕に伝えられる事実は、一つ。

ユカリたんのことを好きになりました。

それからの三日間、今日に至るまで、僕はひたすら血を流してた。
キッカケとして思いつくものは「流血」以外にはなかったからね。
とにかく、ひたすら血を流すしかないんだよ。
指にできたささくれを剥いて、指の根本をギュッと絞ると、ささくれを剥いた場所にプクリと血の球ができるんだけれど、その血を床に落として文字や模様をつくってさ……ユカリたんの顔色を窺うわけだ。
笑え、笑えと胸ん中で唱えながら、ポ

タリ、ポタリと血を落としてさ。
端から見るとまるでキチガイなんだけど、当の僕だけは必死でさ。
ユカリたんが反応を示すまで、絶対に止めないぞ……ってね。
結局、今日に至っても、まだ何にも反応はないんだけれど……。

グラウンドでは、女子たちが体育座りをして、新里先生の説教を聞いている。
その傍ら……体操服を着ていないサボり組の中に、ユカリたんの姿を見ることができる。
どうして彼女は、体育をサボっているのだろう？
やはり、彼女の股間からも、血がドバっと——
「樋口君！」
「——うえっ!?」
突然、名前を呼ばれ、慌てて顔を正面

へ向ける。
萎んだアンパン……亀澤が、眼鏡ごしに僕を睨んでいる。

「ちゃんと聞いていますか？　グラウンドばかり見ても、世界史には詳しくなれませんよ」
「あ、はい、大丈夫です。聞いてます。聞いてますから……」
「では、マルティン・ルターは何をした人ですか？」

マルティン・ルター？

「ちゃんと聞いていたなら、答えられるはずですよ」

何をした人？
分からない……全く意味が分からない。
そもそもコイツ、マルティンと呼べばいいのか、ルターと呼べばいいのかも分からない。
僕にとってマルティン・ルターは、いなくても困らない外タレの一人に過ぎない。存在の重さで言えば、ケント・デリカットといい勝負だ。
マルティン・ルターが何者であれ、ソイツはそんなに重要なことか？

「分かりませんか？」

せっつくなってば！
どうせ布教だろ？
宗教家がやることなんて、太古の昔から布教に決まってる。

「マルティン・ルターは……」

恐る恐る、語句を切りながら答える。

「マルティン・ルターは？」
「日本に……」
「日本に？」
「キリスト教……あっ、違うくて！　モルモン教？　モルモン教……を、ひろめた人……です……よね？」

亀澤は「そうですか」と無表情で言う。
僕は「そうですよ」と無表情で答える。
亀澤は、ジッと僕の目を見たまま動かない。
おちょぼ口を半開きにして何かを言いかけているも、そこからは正解とも不正解とも発せられる様子がない。
何なんだろう、この、タメ……この、無駄な緊張感。
僕は、これと似たような緊張感を操るクイズ番組の司会者を知っている。
そう……これは、『クイズ$ミリオネア』という有名な番組で、司会のみのさんが醸し出す、あの緊張感と同質のもの。
片田舎の教員風情が名司会と謳われるみのさんの名人芸を真似るとは、おこがましいにもほどがある。

「あの、先生……」

沈黙に耐えかねず、とりあえず呼びかける。

「何ですか？」

「マルティン・ルターと――」

「はい」

「――マルシンハンバーグって、似てません？」

「似てません」

「ですよねえ」

僕自身は物凄く面白いことを言ったつもりでいるのに、クラスの連中はクスリとも笑わない。

連中にとって僕の存在は、まるで空気……もとい、空気よりも軽いヘリウムとかそのあたり。

野球部の大野（おおの）なら「隣の家に囲いができたんだってね！　へえ、かっこいい！」とか言うだけで笑いを取れるのに、同じことを僕が言っても全く通じない。

分かってんだよ、僕には全部。お前らみんな「笑ったほうがよさそうな空気」に流されて、笑うフリをしているだけなんだ。

「誰が何を言ったか」なんてこと、実はどうでもよくって、単に「誰が言うか」ってことだけが重要なんだろ？

カンタンな話だ。人気者の大野が言うことならすべて面白くって、嫌われ者の僕が言うことは全部つまらない。

人気者の大野が行なうことはすべてが「正義」で、嫌われ者の僕が行なうことはすべてが「偽善」。

はあ、最悪だ……まさか、この状況で自分の嫌われっぷりを再認識させられるとは思わなかった。

「先生はずっと疑問に思っていたんですが、樋口君は授業中、いったい何を考えているんですか？」

人の思考に割り込むなと言いたい。

「え？　あ、いや、別に……、何も？」

正直に答えを述べると「野球部の大野は死ね」となってしまうので、言わない。

「樋口君とは少し、真剣に話したいですね」

「は？」

「昼食後、私のところまで来るように」

「嫌だと言ったら？」

「言いますか？」

「いえ……、言いません」

相手がしがない教員風情であれ、未成年者である僕なんかが権力と名のつく物に逆らうことなんか、とうていできやしませんよ。

「それでは、授業をつづけます」

僕は、分かってる。

勝ち組になるためには、ヘタに逆らわずコントロールされているフリをするのが手っ取り早いってことを、ちゃんと分かってる。

＊

昼休み。
僕はホームルームのベランダがよく見渡せる屋上の隅で、ジリジリと学ランを焼く直射日光を浴びながら、生温かい『ピザパン』を頬張りながら、ユカリたんを愛でた。
ユカリたんは、ベランダの隅に置かれたエアコンの室外機の陰に身を隠し、室外機から放たれる熱風を全身に浴び、昼食代わりの『カントリーマアム』を頬張りながら、『ドクターペッパー』を飲み干していた。
その光景を、屋上から見守った。ただ見守った。ひたすら、見守った。
彼女の姿を網膜に焼きつけて午後を生きるための糧とするため、食い入るようにして見守った。

こう言っては頭のおかしい人に思われてしまうかも知れないけど、二〇〇五年の六月末現在、僕がなりたい職業のナンバーワンに燦然と輝いているものはもちろん『カントリーマアム』のバニラ味だ。
いいよ、いいよ、ユカリたん。
超かわいいよ、ユカリたん。
だっこして眠りたいなあ。
ほっぺでスリスリとかしたい。
うわあ！　ヤバい！　まただ！　またまたちんぽこ勃っちゃった！
困ったな……このままじゃ、亀澤んとこ行けないよ。
しょうがないから、またマルティン・ルターのことでも考えてどうにか……、え!?
ユカリたんがポケットから、黄色く長い物を取り出した。
目を細めて見ると、それは購買で売っているカッターナイフだった。
微かにではあるがキリキリと、プラスチックの柄から刃を絞り出す音が聞こえて、何やら嫌な予感がした。
（えっと、まさか、リスカ……ですか？）
刹那、止めたほうが良いかどうか悩むも、もしリスカじゃないのに止めちゃったら恥ずかしいので、とりあえず、見守った。
ユカリたんは右手にカッターナイフを握って、「えいやっ！」と言わんばかりに、勢い良く『カントリーマアム』を両断した。
なぜ彼女が『カントリーマアム』を割ろうと思ったのかは分からない。きっと、遅咲きの反抗期か何かだろう。
ユカリたんは二つに割った『カントリーマアム』を、ぐわっと、いっぺんに頬張った。
ユカリたんのほっぺが、プクーリとふくれた。
まるで木の実を溜め込んだリスの頬み

たく、両方ともふくれた。
それを今度は、いっぺんにゴキュッと……ウワバミのように飲み込んだ。
なぜ、そんな食べ方をするのか？
動機は不明だし、行動からは合理性のカケラも見いだせなかったけれど……、

僕は、ますますユカリたんのことが好きになった。

*

午後は、ユカリたんのことを考えながら過ごした。
二人で休日を、公園で過ごすのだ。
レジャーシートを敷いて、その上をくんずほぐれつゴロゴロするのだ。
大道芸人の猿回しを見て喜ぶ、ユカリたん。
そんなユカリたんに襲いかかるニホンザルの群れを一刀両断に成敗する僕。
死屍累々たるニホンザルの群れの中央に立ち尽くす、僕とユカリたん。
臆病な二つの指先は何気なく触れ合い、ピクリと離れて、そしてまた、触れ合う。
桜色に染まる頬と頬。確認し合う四つの瞳。今日び飲料水のＣＭでも聞かないぐらい立派にゴキュリと喉が二度鳴る。
熱を帯びた二つの頬が、互いにその温度を感じ取れるほど近づき、そして……ピタッて！　頬と頬がね、ピタッてするの！
知ってるかい？　お風呂に入った時、お湯の表面を掌で触れると微妙にピタッてするんだけれど、きっと僕とユカリたんのピタッてした感じは湯船のピタッてした感じを超えるね！　うひょう！
……といったことを考えながら、過ごした。
放課後が近づくにつれ、ユカリたんと遠ざかるのが辛くって、僕は思いきりささくれを剝いた。
指を絞って、ぽたり、ぽたりと、気怠い光景の中にあって唯一鮮やかな血の球を、床に落とした。
昨日までの流血は、どす黒く燥いた血痕となり、今日の流血と混じり合うことで、イビツなハートの形をつくった。
この身体から零れ出す血液はサラサラと鮮やかでいて美しいのに、これが過去のものとなると黒く燥いて汚れてしまう。
過ぎ去りし日々を美しく語る大人は沢山いるけれど、今、この時の流血に勝る美しきものなど他にあろうか。
明日の僕には、今この瞬間に零れる血の赤を思い返すことなど、とうていできやしないだろう。

*

放課後。
結局、僕は、ユカリたんの後をつけてしまった。
つけようと思ってつけたわけではない……どういうワケか、結果としては、つけるような形になってしまったのだ。

僕自身はただ「見えなくなるのは嫌だなあ」と思っただけに過ぎないのに、意に反して足が勝手に……まあ、要するに僕は悪くない。
　ユカリたんは帰り際、書店に寄り道をして『ＫＥＲＡ！』の立ち読みをはじめた。
　僕もさりげなく別のコーナーで『メガストア』の立ち読みをしながら、彼女の様子を窺った。
　しっかし、相変わらず『メガストア』は表紙がキツい。
　ロリフェイスのメイドさんの巨乳が丸出しで、しかも母乳が垂れ流しである。
　これではまるで、エロ本を立ち読みしている人みたいに思われて困る。
　かと言って、男性向けのファッション誌を読むほど僕はマセちゃいない。
　ファッション誌のモデルが着ているような服はファッション誌のモデルが着るからこそ映えるのであって、そこいらの有象無象がマネをしたところで「頑張ってる感じ」をアピールするだけに終わっちまうもんだ。
　そういうことをちゃんと分かっている僕だからこそ、お母さんが『セシール』や『西友』で買ってくれた服を公明正大に着ることができる。
　僕からすりゃあ、『ＵＮＩＱＬＯ』だって敷居の高いブランドですよ……っていうか、『ＵＮＩＱＬＯ』ってぶっちゃけオサレでしょ？　バカにしている奴の気が知れないね。もちろん、自虐で着るのだってナシだ。「どうせ僕は『ＵＮＩＱＬＯ』を着るような人間です」なんて喩えに持ち出されちゃあ、『ＵＮＩＱＬＯ』の服が可哀想だ。僕なんかは「何を着るか」を考えるよか「どう着るか」ってことを考えたほうが良いように思うんだけどねえ。脱オタでオサレぶる奴ぁ、死ねばいいんだよ。
　さて、ユカリたんは……どうやら今度は『裏ＢＵＢＫＡ』を読んでいる。
　イマイチ方向性が見えてこないけれど、複雑なお年頃なので何でもアリだ。
　そういう僕だって、今はハイデガーの『存在と時間』を手に取って読むフリをしてる。
　これは、いつかユカリたんに「愛読書は何ですか」と訊かれた時に『存在と時間』と答えられるようにするためだ。
　そう答えるとちょっとインテリっぽい感じがしていいかなあと思ってみたのだけれども、どうせ似たようなことを考える奴はゴマンといそうな気がするので、逆を言えば好きな本を問われた時に『存在と時間』と答えるような奴は薄っぺらい奴だと思われてしまいかねない……ので、棚に戻す。
　無難そうな線として、今度は『銃・病原菌・鉄』を……いや、やっぱりダメだ。これも薄っぺらい。
　もっと、こう、知る人ぞ知る的なハードコアな部分を攻めないと。
　よし、決めた！　こうなりゃもう『タモリの面白カセット術』ぐらいしか選択

肢はない！
　知る人ぞ知るどころか、誰も知らないぐらいマニアックで良いんだよ。
　何が書いてあるかって？　ページを開いてビックリだ！
《好きな娘の声でエッチなテープをつくる方法》
　キタコレ！
　要約すれば、好きな女の子に何だかんだと理由をつけて運動をさせて至極マジメな文章を読ませるワケですよ。
　ただ、そのマジメな文章には罠が仕かけてあって、部分的には物凄くエッチな単語が書いてある。
　たとえば「行く」の二文字でも、呼吸が困難なほど疲れている状態で発音されると絶頂のヨガリ声に聞こえないこともない。
　で、その素材を切ったり貼ったり編集することで、エッチなテープが完成する……というワケで！
　皆さん、タモさんの偉大さを改めて思い知りましたでしょうか？
　あいや、待ってください！　僕が書店に入ったのは、タモさんの素晴らしさを再認識するためではありません！
　そうこうしているうちに大問題が発覚です！
　ユカリたんの姿が見えません！

＊

　ユカリたんを探して街を彷徨った。
　彷徨うとは言っても、僕はユカリたんの住所を知っているので、別に迷いはしなかった。
　初夏の日は長く、午後六時を過ぎても夕暮れが訪れる気配はなかった……ので、昏くなるまでひたすら待った。
　明るいと人目についてしまう。人目につくと、ストーカーと勘違いされてしまう恐れがある。
　安全にユカリたんを見守るためには、夕闇に紛れるように近づいて、自然物のように佇み、夜と同化して動かなければならない。
　僕は待った。ゴミ捨て場の陰で『ガリガリ君』を頬張りながら、書店で破り取った『電撃萌王』の袋トジを眺めながら、待った。
　三十分ほど過ぎて、ゆっくりと空は黄金色に染まりだした。
　往く人の流れは一昔前の『金曜ロードショー』のオープニング映像のパーマの人を彷彿とさせるシルエットとなって闇に溶けていった。
　そして　せんりつの　よるが　おとずれた
　意気揚揚とユカリたん家の庭へと躍り込んで、よく分からない植物が植えられた鉢に身を隠して作戦を練る。

見るところ、何の変哲もない一戸建て。
窓は複数あるけれど、どれがユカリたんの部屋かは分からない。
ただ、磨りガラスの窓に限っては、そこが風呂場もしくはトイレであることが分かる。
磨りガラスの窓は二カ所。うち、狭いほうをトイレとするならば、風呂場の場所は自ずと決まる。
そう！　あの磨りガラスの向こう側こそが、ユカリたん家の風呂場！
ユカリたんが、その柔肌に付着した汚物やら世間のしがらみを洗い流す、世界で一番小さな戦場なのだ！
あいや！　別に、ユカリたんのゴニョゴニョを覗こうとしているワケじゃあないんだ。
逆に、覗こうとするような奴がいたらブチのめしてやろうとさえ思う。
イザとなったら、僕は強いのだ。
両腕をグルグル回しながら街を歩くと、誰も僕に近づこうとはしない。
だから僕は、ユカリたん家の風呂場の前で両腕をグルグル回しながら外敵を追い払う。
たとえそれにより大きな代償を支払うことになろうとも、僕はグルグルを止めないだろう。
たとえ地球が自転を止めるようなことがあろうとも、僕のグルグルは止まらないだろう。
両腕をぐるんぐるんと勢い良く回転させると、腕の血液が拳（こぶし）に集まってビリビリと痛むんだ。
もし僕が指から血を流した状態で両腕を回したなら、遠心力により血飛沫（ちしぶ）きが舞うだろう。
ああ、ユカリたん！　もうすぐ、夏休みだね！
シーズンにはちょっぴり早いけど、かっこいい花火を見せたげる！
ぐるん！　ぐるん！
ぐるん！　ぐるん！
ほうら！　花火だ！
一心不乱に回転させていた腕が、何やら固くて呆気なく突き抜けてしまえるほど脆（もろ）い物質に当たった。
バリン……と、鼓膜をつんざくような甲高い音を聞いたのと同時に、頭上からバラバラとガラスの破片が降って来た。
束の間の判断で、目を閉じた……、眼球だけは、守らねばと思った。
両腕を顔面の前に翳（かざ）しながら、右の掌（てのひら）が熱くなっていることに気づいた。
およそ水滴とは言いがたい量の液体の筋が、指先から肘へと伝い、ぽつりぽつりと膝へと垂れた。
目を開けた。視界が開けた。目に映るもののほとんどが赤かった。掌の肉が、刮（こそ）げ落ちていた。
ガラリと、風呂場のドアを開く音がした。ガラスが割れる音に驚いた家人が駆

けつけたようだった。
ヤバいと思い、逃げだした。
背後から叫ぶような声が聞こえたけれど、何を言っているのか分からなかった。
不覚にも後ろ姿は目撃されてしまったようだけれど、万一のためにと軒先の洗濯バサミに挟まれていたパンストを被っておいたのが幸いした。
パンストは偉大だ。履いてオナニーをするだけじゃなく、被って正体を隠すこともできる。
パンストがあって、本当に良かった。これからはもう、パンストに足を向けては眠れないだろう。
さて、さしあたっての問題は、これが誰のパンストかということであるけれども、誰のパンストであるにせよ、ユカリたんの家族のパンストであることには違いないのだから決して悪いパンストであろうはずはなく、たとえこれがユカリたんのお父さんのパンストであったにせよ、僕は何の躊躇いもなくオカズにするだろうなあと思うので、そんな問題は些事なのである……が、やはりユカリたん本人のパンストだったらいいなあという一縷の望みを抱いたままで、ここは素直に家へと急ぎたい。
早く帰って、オナニーを……あいや、その前に傷の手当てを急ぎたい。

＊

掌の治療は、呆気なくすんだ。
アロンアルファで、元通り……とはいかないまでも、とりあえず出血は止まったので良しとした。
夕食の時間には遅れたけれど、僕の両親はワリとドライなので、別に叱られたりはしない。
とはいえ、完全にドライと言えるのは父親のほうだ。
母親にはまだウェットな部分があるらしく、電話口で「ウチの人は若いコじゃなきゃダメみたい」と、友達か誰かに対してボヤいているのを聞いた。
セックスレスらしい。
台所に行けば食べられる物もあるだろうけれど、別にお腹は空いていないので、パンストを眺めながら時間を潰した。
パンストって、誰が最初に言い出したんだろう?
何だか、ハンガーストライキみたいで嫌だ……パンティーストッキングと言ったほうが、確実にエロいのに。
パンストを破るような趣味も、いただけない。
破っちまったらパンストじゃなくなるから、いけない。
そんなもので喜ぶような奴は、コスプレAVでコスチュームを脱がすようなバカと同じだ。
まるで、侘び寂びというものを分かっていない。
といったことを考えていたら、部屋の外で床が軋む音がしたので、慌ててパンストをベッドの中に突っ込んだ。

ノックもなくドアを蹴飛ばして部屋に飛び込んできたのは妹……と言いたいところだが、僕の下に弟妹はいないので、実のところは姉ちゃんだった。

姉ちゃんは、あっぱれとしか言いようがないほど、物の見事に一糸も纏っちゃいなかった。

いや……、厳密には一糸だけ纏っている物があったのだけれど、そのヒモに関してはあえて言及を避けようと思う。

「姉ちゃん！　人の部屋、勝手に開けんなよ！　つうか、マ○コ見えてるから服着ろよ！　服！」

「あのさあマサト……　『ゴズニーランド』、行く？」

「は？　『ゴズニー』？」

「行くの？　行かないの？」

「行くって……、姉ちゃんと？」

「はあ？　何でアタシがアンタと『ゴズニーランド』行くの？」

「じゃあ、何？」

「あのね、ユウジがさあ。『ゴズニーランド』行こうって、ホテル取ってたんだけど、何か都合で行けなくなったみたいでさ」

「じゃあ、僕が……、ユウジさんと？」

「はあ？　何？　アンタ、ホモ？」

「じゃあ誰？　誰が行くの？」

「アンタと……、誰か？」

「僕と……、誰か？」

「ほらあ……カノジョとかさあ、いるでしょ？　いないの？」

「そりゃ、いなくはないけど……」

「じゃあさ、土曜日って大丈夫？」

「いつの？」

「今度」

「つっても、今日って木曜じゃん？」

「じゃ、明後日か」

「急過ぎじゃね？」

「急じゃなかったらキャンセルできるでしょ？」

「まあ、そりゃそうかもしんないけど」

「で、行ける？」

「行けなくもないけど」

「じゃ、行って！」

「うん」

「じゃ、ユウジに連絡させるから！　よろしく！」

姉ちゃんは用件だけをひとっさらい捲し立てた後、開いたドアをそのままにして部屋を出て行った。

ホテルつきの遊園地のチケットをタダでもらえるなんて、本当は喜ばなくっちゃいけないところなんだろうけれど、現実問題として僕には男女を問わず共に遊園地へ行ってくれるような友達なんかいやしなかったりするわけで……、ほんのちょっぴり途方に暮れた後、僕はとうとう……、ユカリたんに告白をする決心を固めた。

明日告白をして明後日ホテルだなんて、何となく急過ぎるような気がしないでもないけれど、限りある人生の中で大切な人と共に過ごす時間を一秒でも多く

確保するのだと割りきってしまうのならば、まんざら悪くもないような気がする。

＊

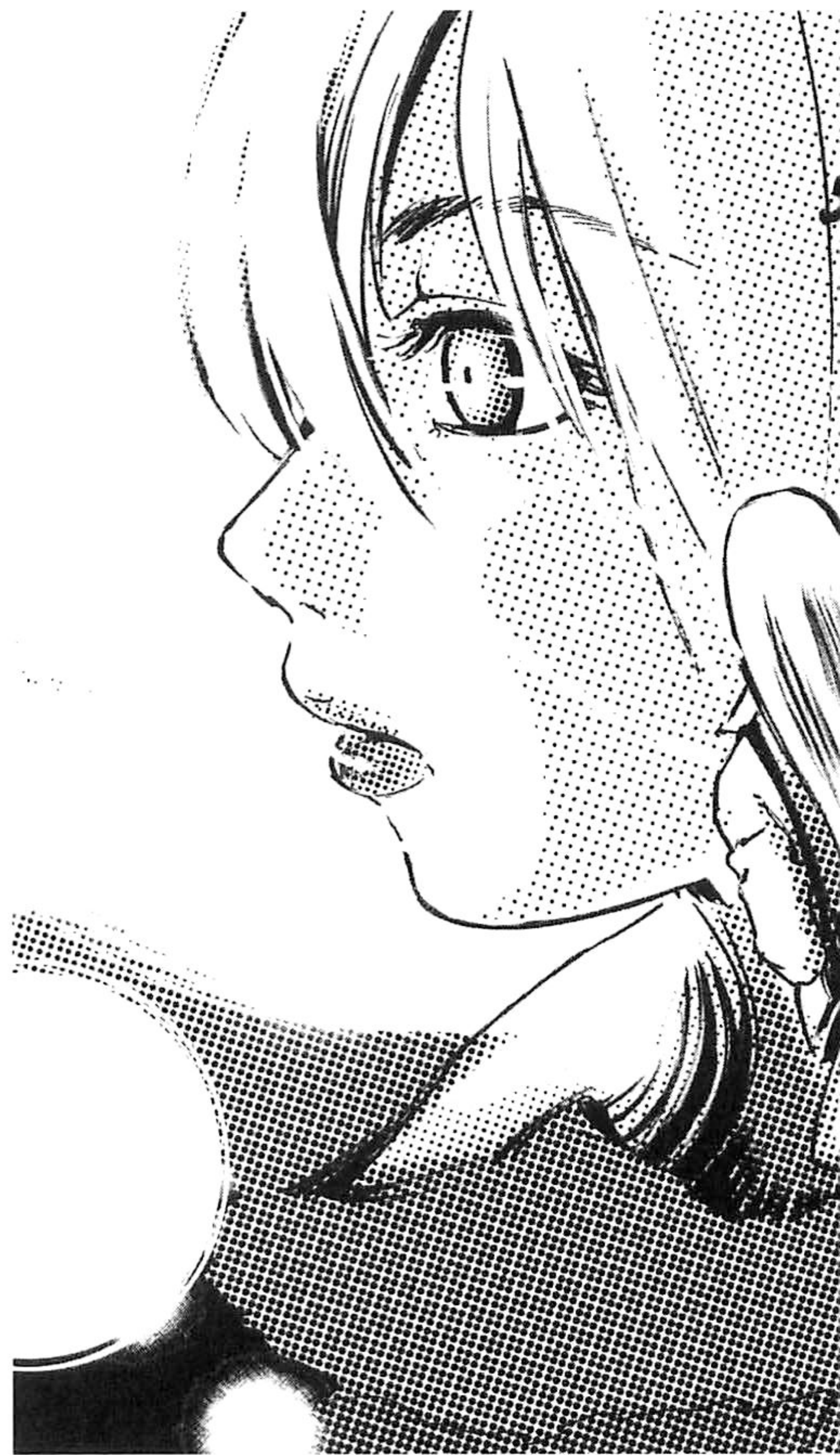
翌日、ユカリたんは学校を休み、僕は管轄の警察署へ呼ばれた。

＊

警察署からの帰り道、保護者として同伴してくれた母さんはなぜか優しくて、漫画でもゲームでも好きなだけ買ってあげると言った。
僕にはその態度が何だか無性に気持ち悪く感じられたので、逆に何も買ってもらわないよう努めた。
それでも母親は「本屋があるよ」、「ゲーム屋さんだよ」と、僕に何かを買うことを求めた。
それがあまりにも執拗いもんだから、僕は諦めてオモチャ屋に入り、母親にねだって『ＵＮＯ』を買わせた。
なぜ『ＵＮＯ』かって？　自分でも良く分からないけれど……たぶん、独りじゃ遊べないからだと思う。
その後は、やはり母親と一緒に駅前へ出て、路上パフォーマンスの大道芸を見たりした。
母親はミュージシャンやら風船で犬をつくる人なんかを見るたび、いちいち僕に感想を求めたけれど、僕は一言も返さなかった。
一通り見終わって家へ帰ろうと歩き出した時、背後からシンバルを叩くような大きな音がした。
驚いて振り返ると、顔面を布で覆ったチンドン屋みたいな格好の人が、背中に引っ下げた銅鑼を鳴らしながら往来の人にティッシュを配っているのが見えた。
ホスト風の男がチンドン屋からティッシュを受け取ろうと手を伸ばしたところ、チンドン屋は男に向かって「イケメンは死ね！」とわけの分からない罵声を浴びせ、肩をいからせながら駅の構内へと消えて行った。
母親は僕と同様に驚いた様子で、チンドン屋の背中を見送っていた。
その単純な驚きで埋められた横顔には邪気というものがまるで感じられなくって、まるで子供を見ているような気持ちになった。
この時僕は、母親を見て、初めて「可哀想な人だな」と思った。
この人は悪いことなんか何もしちゃいないのになって、思った。
ただ、周りのバカどもに振り回されているだけなんだ。
もちろん、ここで言う「バカ」の範疇には、僕自身も含まれているわけだけれども。
もし僕が、これから何の問題も起こさずに無難な大人になって、無難に彼女を見つけて、無難に結婚とかしたら、それからの人生はずっと、物凄い勢いで奥さんとセックスをしまくろうと思う。
少なくとも僕の奥さんには電話口でセックスレスをボヤくようになって欲しくないから。

そうだよ、母さん！
母さんは、僕みたいな奴と結婚すりゃあよかったんだ！

＊

同日、深夜。
僕は想いを遂げるべく、再びユカリたんの家の前に立っていた。
今度は姿を目撃されるだけでも通報されかねないので、すべてを慎重に行なう必要があった。
誰の目にも触れずにユカリたんと接触する必要があった。
可能であれば、ユカリたん本人にも目撃されずに近づきたかった。ユカリたんに知られないように、告白をすませてしまいたかった。
そうなってくると、方法はない。あるワケがない。
僕もそこまで馬鹿じゃないんだ。どこかしらで必ず妥協する必要があるんだってこと、ちゃんと分かってる。

だから、待つことにした。ユカリたんが外へ出るのを、ただただ、ひたすら、待つことにした。
一晩中でも待つつもりだった。
しかし、運命の時はワリとあっけなく訪れた。
玄関がガチャリと音をたてて開き、人影が路地へと抜けて行った。
慌ててその背を目で追いかける。
街灯の下で、人の姿がくっきりと浮かび上がる。
明るい青紫色のクソ長い髪で、グニュッとしてフワフワな感じの薄っぺらい生地でつくられたクソ短いスカートを履いていて、微妙な感じに艶のある上着って言うか、ボレロって言うの？ を身に纏った……、ユカリたん？
いや、待て！ ユカリたんは黒髪だ！
それに、あんな短いスカートを履くようなアバズレじゃない！
それに、この匂い……、こりゃもう「甘い」とかいう次元じゃなくって、明らかに糖分を含みまくった、洋菓子系の匂い。
香水か？ そんな香水、存在するのか？ 間違えてバニラエッセンスを振りかけたのとは違うのか？ いや、ヤバいだろコレ！ この、何と形容したらいいか……、まあ、ありていに言うと「めしあがれ（はあと）」とでも言わんばかりの香りはダメだろ！ お菓子と間違えて、食われちゃうだろ！
僕は咄嗟（とっさ）の判断で、彼女を追跡することを決めた。
深夜である。日付が変わるか変わらないかという、物凄く微妙な時間帯である。
こんな時間にお菓子系の香りをプンプンさせながら外を歩いたら、犯し系の人に狙われても文句は言えない。
だからこそ僕は、彼女のことを守って

やるために、追った。
敵襲に備えポッケの内側に潜ませたカッターナイフをキチキチ言わせながら、一定の距離を保ちつつ、追った。
分かってる、分かってる。彼女はあんな格好こそしているものの、まず間違いなくユカリたん本人だ。
ここ四日間、ひたすらユカリたんのことを見守りつづけてきた僕だから、見間違える可能性などは皆無に等しい。
すれ違う車のライトに照らされる彼女の横顔だって、ユカリたんそのもの。
万一あれがユカリたんのお母さんだとか姉妹だとか友達であったにしろ、この際そんなことはもう、どうだって良い。

ユカリたんは住宅街を抜け、川を一つ越えて、この町で最も偏差値の低い高校の近くにある公園前で歩みを止めた。
公園の中からはブーンブーンと、DQNが好きそうな乗り物のエンジン音を想起させる音……って言うか、ズバリ、バイクのエンジン音が響いていた。
何だか、物凄く嫌な予感がした。
深夜、公園、エンジン音、ときたら、そこにいる連中の顔ぶれは日本全国共通である。『北斗の拳』などで良く見られるエキセントリックな髪型をした、歯の溶けたお兄ちゃん達に決まっているのである。
先天的な虐められっ子である僕は、半ば本能的に、消火栓の裏に身を隠していた。
対しユカリたんは、怖じ気づくどころかカバンを開いて化粧直しをして、公園の中へと入って行った。

何なんだろう、これは？
僕は、夢でも見ているのだろうか？

このまま黙って隠れているワケにもいかないので、植え込みの間を這うようにして、公園の内部を覗える場所へと移動する。
身体が土で汚れるのは良いけれど、枝やら何やら色んな物がチクチクと刺さってくるのが、少しだけ辛い。
植え込み一つを隔てた向こう側で、複数台のバイクがグルグルと公園内を周回しているのが見える。

ああ、もう間違えようがない！　これは、サバトだ！　DQNの集会だ！

この時、僕の脳内には三つの選択肢があった。
成敗する。通報する。なかったことにする……の三つである。
しかし、実際のところ、全く悩みはしなかった。
成敗なんてできっこないし、見なかったことにするのは男としてどうかと思うので、通報するより他に手はなかった。
となると、後はタイミングの問題だ。
こうしている間にも、族は続々と集結しつつある。

今、通報すべきか、もっと人数がふくれるのを待ってから通報すべきか……そんなことを考えながら通報を渋っていたところ、公園内のエンジン音が急に落ち着いたので、もう少しだけ様子を見ることに決めた。
怒鳴り声にしか聞こえない勢いだけの挨拶らしきものがすんだ後、立てつづけに男の声が、「ユカリんとこ襲ったバカがいる！」と告げて、場が沸いた。
「ユカリ！」
と、ユカリたんを呼ぶ男の声。
「ユカリっち、大丈夫？」
と、酷くアタマの悪そうな女の声につづいて、
「あんがと」
と、ユカリたんの返事。
「みんな、聞いて！」
はいはい、聞いてますよ。
「あたいを襲った奴の名前、樋口マサト！　樋口マサトって言うの！」
やったー！　ユカリたんの口から僕の名前が出たよ！
「おねがい、オトシマエつけて！　お礼なら、するから」
つける、つける！　ユカリたんのためなら、僕はナンボでもオトシマエつけるよ……って、うおい！
「うおおおおお！」
と、DQN共の雄叫びが公園を埋め尽くす。
ブーン、ブーンと音を響かせながら、次々とバイクが公園を出て行く。
どこへ向かってるんだ？
まさか……。
これ以上ないくらい嫌な予感がして、家へと急ぐ。
両手がいつのまにか、大きく左右へとひろがっていく。
「僕は飛行機！　バイクには負けない！　ジェットの速度だ！　ブーン！　ブーン！　ブーン！　ブブブブブーン！」

＊

結果から言うと、僕んちは無事だった。
でも、父さんが大枚はたいて買った『ツーリングワゴン』だけは、DQNの逆鱗（げきりん）に触れたらしくグチャグチャにされてた。
縁側では母親が、大破した『ツーリングワゴン』を前に泣いてた。
対し父親は「次は『インプレッサ』買うぞ！」と、さらにDQNの逆鱗に触れるようなことを言いながら、豪快に笑ってた。
僕は肩を震わせる母親を横目に「こうなりゃ、教育してやらなきゃならんな」と思った。
誰をって？　そんなの、ユカリたんに決まっているじゃないか！

＊

夜明け前。
僕は再々度、ユカリたんの家の前に立った。
今度は身を隠すようなことをせず、正

面きって突入してやろうと思い、気合いを入れて呼び鈴を押した。
何度も押した。何度も、何度も、ありふれたビートを刻みながら、連続して押した。
「どなたあ?」
と、母親のものらしき声がした。
「消防署のほうから来ました」
訪問販売の常套句だ。
「消防署ぉ? ちょっと待ってくださいね」
一呼吸ほど間を置いて、解錠の音が聞こえて、ドアが開いた。
僕はすかさず学校からくすねた石灰を丸め表面を水で固めてつくった石灰ボールを母親の顔面に投げつけた。
「痛っ! うあああああっ!」
ちょっとした悲鳴。
悲鳴はヤバいので、もう一つ用意しておいた石灰ボールを母親の口ん中に突っ込んだ。
ケホケホと噎せる声。放っておいて、お邪魔した。
母親が回復するまでにあまり時間はなさそうなので、効率よくすべての部屋のドアを開きながら屋内を移動した。
一階の部屋には誰も確認できなかったので、二階へ上がって最初の部屋のドアを開こうとしたところ、奥手の部屋からパジャマ姿の男が現れ、僕の前に立ち塞がった。
「何だ君は?」
「何だチミ? 何だチミはってか?」
ここまで言っておいてなんだが、今の僕には「ヘンなオジサン」をやっている余裕などない。
「お父さん! いけませんよ、お父さん! アンタねぇ、アンタの教育がなってないせいでねぇ! ユカリたん、ドキュンと遊んでるんですよ!」
「は? ドキュン?」
「D・Q・N! ドキュン! 『目撃ドキュン』に出るようなアタマの悪そうな人! ヤンキーとか、暴走族とか!」
「暴走族って、ユカリが? まさか……」
「まさかとか言うな! 全部可能性の範疇だろバカ! テメエの子だけが例外だと思うなよクソがっ!」
力では敵わないと思ったので、用意しておいた画鋲をブチまけて、ついでにバルサンを点火した。
しかし、さすが父親だけあって、娘のためとなると画鋲など恐れる気配はまるでなかったので、渋々ながら四千円もする催涙スプレーを顔面に吹きつけたうえ、アロンアルファを床にぶちまけて、体当たりをかましてその上に転倒させてやった。
そうして、運命のドアは開かれた。
僕を迎えてくれたのは、髪を逆立てるような爆音。
DQNが好みそうなその曲名は、きょ

うびBUCK‐TICKの『悪の華』。
決して悪い曲じゃない。悪い曲ではないのだけれど、DQNが好んで聴く限り、それはやはり「そういう曲」ということにされてしまうもんだから、BUCK‐TICKも浮かばれない。
さらに、『悪の華』をBGMとして室内で何が繰りひろげられていたかと言うと……はい、ストップ。

もう、言わない。
描写したくない。
もう、いらない。
設定を、変える。

これまで「ユカリ」と呼んでいた存在を、ここではあえて「鉛筆削り」とし、これまで「DQN」と呼んでいた存在を、ここではあえて「鉛筆」としよう。そのうえで次の一行を、穿った視点から読んで欲しい。

すんごい、削ってた。

何で「鉛筆」にしたかって言うと、それが一本じゃなかったからなのね。
小学生が良くもらうような鉛筆のセットを思い出して欲しいんだけど、あれって基本はダースじゃん？
それを踏まえて、再度、次の一行を、穿った視点から読んで欲しい。

鉛筆削りは削りカスにまみれて、ワケ分かんないことになってた。

意味が分からない？
分からなくっても、良いんだよ。
ほら、世の中って、分からないほうが良いことのほうが、むしろいっぱいあるって言うじゃん？

さあて、時間を進めよう。

僕は僕でね、ちゃあんと鉛筆を削るための道具を持参してたんだ。
いやあ、特別に用意した物じゃないんだよ。
いつも持っている物でさあ……、何だと思う？

イエス！　カッターナイフさ！

＊

斬りかかったよ、派手にね。
切れそうな物ならば、何でも切った。
相手は剝き出しの鉛筆だからね……、急襲ならば、僕でも戦えた。
カッター振ってるうちにもうワケ分かんなくなっちゃって、気づいた時には部屋中がドロドロになっていたけど、この部屋、元からドロドロだった可能性もあるしね、僕だけが悪いんじゃない、とは思う。
ついでを言えば、誰も死んだりはしなかったと思うよ。
気づいた時には、ユカリたん以外みんないなくなってたからね。

逃げる気力と体力があるんなら、死んじゃいないだろうなと思うわけ。

そして、ユカリたん。

ユカリたんは雑誌で見るエロい人形みたく口を開けて、ポカーンとした表情で、ボンヤリと僕のことを見てた。

百年の恋もいっぺんに覚めるような光景を見せつけられた直後だったけれども、興奮していたせいもあってか、僕のモノはほんの少しだけ、硬くなってた。だからね、挿れようかなって……、挿れたくって入れるんじゃなくって「どうせだから」挿れようかなって、思った。

ズボンと一緒にパンツをズリ下げて、ユカリたんの両膝に手を添えてグッと開いてね、いざ挿れようと腰を突き出しかけた時に、遠くのほうからパトカーのサイレンが近づいて来るのが聞こえた。

一瞬だけ動くのを止めて、まじまじとユカリたんのマ○コを見た。

ユカリたんのマ○コは、エイリアンの唾液みたいなドロドロの汁で濡れて、テカテカに光ってた。

何だかもう、何もかもが、どうでも良くなった。

もう止めようと思って、元の通りにズボンを穿いた。

逃げる気力も全くなかったから、ユカリたんと同じ顔をしながら、ユカリたんのマ○コを眺めながら、ただ、時間が過ぎるのを待った。

階下から、いくつもの交錯する声が聞こえた。

僕は、マ○コから視線をはずさなかった。

階段を昇る足音が聞こえた。

僕は、マ○コから視線をはずさなかった。

ドアのすぐ外に、人の気配がした。

マ○コに一筋、赤いものが垂れた。

僕は四つん這いになってユカリたんの太腿の間に顔を埋め、床に垂れたそれを舐め取った。

僕の顔面は、赤いもの、ネバネバしたもので、濡れた。

何者かが背後から、僕の背中につかみかかった。

僕は背後からの力に上半身を引き起こされながらも最後の力を振り絞って、赤く染まった額をユカリたんの唇に押し当てた。

温かく柔らかい感触があった。

吸いつくような粘り気を感じた。

それから、ちゅう……と、音がきこえた。

二〇〇六年「萌え銘柄」大予測！

第一回

最近では「総研」という言葉から連想される言葉はすっかり「欠陥マンション」になってしまいましたが、この「萌え総研」では業界注目の萌え市場におけるトレンドをいち早く分析していく所存です。安いお金で萌え業界の「買い」銘柄が判ってしまうんです。業界の皆さん、「萌え総研」を読んでいただいてお金持ちになってください。

というわけでお題は「二〇〇六年、この萌え銘柄が買いだ！」であります。

妹。メイド。ネコミミ。姉。萌え銘柄にも、いろいろございますなあ……ちょっと前までは妹全盛時代だったのに、たちまち姉ブーム。気がつけばツンデレブーム。二〇〇五年は「ツンデレ」の年でしたね。メイドさんもはやりましたが、どっちかというと喫茶店とかコスプレの話。やっぱりメインはツンデレでしたね。『つよきす』ってゲームが出ましたよね。あれ全部ツンデレキャラですもん。もう僕もアニメ会もみんなドップリはまって大変でしたよ。あと、姉も、『ToHeart2 XRATED』によってすっかりメジャー銘柄に成長しましたね。タマ姉エロすぎます、タマ姉。タマ姉や『つよきす』の成長によって、「エロ小説」「エロゲー」の世界も様変わりをはじめています。

「女の子が男の子を虐げる」が「萌えエロ」のルール

今まで、「エロ」イコール「男が女を

『つよきす』（きゃんでいそふと）の鉄乙女

虐げる、征服する」という脳の沸いた禽獣ルールがはびこっていたんですよ。「萌え」ってのは、逆じゃないですか。

僕が美羽ちゃんに顔を踏まれたいわけじゃないですか。僕が真紅様に命令されたいわけじゃないですか。全然逆じゃないですか。もちろん「萌え」の中にはエロというジャンルもあります。僕はこれを「萌えエロ」と言っています。略して「萌エロ」とも言います。萌エロの特徴は、えっちなことをしているにも関わらず、禽獣ルールが禁止されているという点にあります。つまり、萌えキャラに僕が虐げられているまま、えっちなことをする、これが「萌エロ」の第一原則です。『ＴｏＨｅａｒｔ２ ＸＲＡＴＥＤ』のタマ姉は最後にきっちり騎乗位で攻めて来ますよね。「フィニッシュは騎乗位」これ、大事なのでメモしてくださいね。業界の皆さん！　エロゲー会社でも、萌えがわかってなくて、官能小説の延長みたいな気分でつくってるおっさん会社とか多いんですよ。

でも、僕たちはそんなもの見たくなーい！　お前ら一度『つよきす』と『ＴｏＨｅａｒｔ２ ＸＲＡＴＥＤ』を三日三晩徹夜でやりこめと。萌えエロと昔のエロは全然違うというルールを身体で学べと。それが嫌なら大損こくまえに市場から撤退しろと。

ビジネスなんだから市場調査ぐらいしろと言いたいです。

萌えエロは「女の子が男を虐げる、征服する」。

これが根本ルールなんですよ！『つよきす』の乙女姉さんなんて、バックが嫌だと言い出して泣き出して家出ですよ。「私がお前をかわいがれないじゃないか！」って言うんですよ。これが萌えエロだっ！　そしてプレイヤーの僕たちは「乙女姉さんをあんなふうに扱うＤＱＮのレオは死ね」とか本気で激怒するわけですよ。

いいですかっ！　ぱやぱやとは！　女の子が男を支配する行為なのですよっ！

それが二十一世紀のトレンド。

これの逆のパターンつまり「鬼畜」というジャンルもあります。Ｌｅａｆも『ＴｏＨｅａｒｔ２ ＸＲＡＴＥＤ』とほぼ同時に『鎖』という鬼畜ゲームを出してますね。しかしこれは「萌え」とは別のジャンルなんですよ。萌えの暗黒面といいますか、ジェダイとシスみたいな関係なんです。ですから鬼畜と萌えエロを混

『ToHeart2 XRATED』©2005 Leaf/AQUAPLUS

ぜてはいかんのです。そして売れ筋はあくまでも「萌え」なのです。

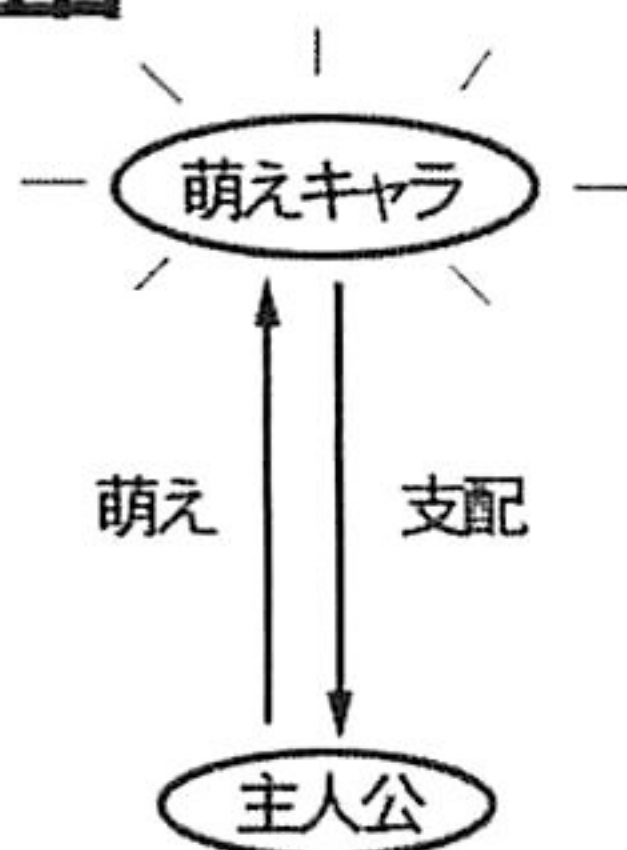
「搾取」を捨てて、「ファンの下僕」精神を抱け！

僕たちのことを「現実に性犯罪を起こしそうな危険な人間」なんていう連中は脳が腐ってますよ。つまり「エロとは男が女を虐げることだ」という大昔の価値観で僕たちを見ているんですよ、なんという愚かな連中だ！　僕はねぇ、美羽ちゃんに蹴られたいだけなんですよ！　どこが危険なんですか！　しかしながら一般人ならまだいい。そういう価値観をメーカー側が抱いている場合、これは悲劇。まず売れませんし。買い手もつくり手も不満を抱くわけです。誰も得しません。ですから僕はまず、業界の意識改革をやりたいと思います。これから萌え市場に参入しようとしている社長は、みな僕の「萌え総研」を読んで萌えビジネスのいろはを学ぶべきですよ！

「エロに萌えな絵をつけときゃいいんだろ」みたいな会社は大損しますよ！　もちろん他にもいろいろとノウハウがあるわけです。すぐに儲けようとするのもよくないです。まずはファンの信用を得てブランドイメージをつくらないといけません。萌え市場はファン主導ですよ、企業はあくまでも萌えアイテムを供給させていただいている側にすぎないんですよ。「搾取（さくしゅ）」という言葉を捨てることです。「ファンの下僕」この萌え精神が大事なんですよ。一言で言えば「人類を無礼（なめ）るな」……間違った。「オタクを無礼るな」ということですよ。

ともかくですね。僕の言う通りにすれば、必ずや手堅く儲かります！　そして一発当たればビルが建ちます！　一口十万円でセミナー開こうかな。

●ニセ図表
〈萌えエロとおっさんエロの違い〉

萌えエロ

萌えキャラ
萌え　支配
主人公

オタク社会の構造に性を取り込んだもの。主人公（プレイヤー）が萌えキャラに萌え、精神的に支配される。この萌えの関係性の中にエロ要素が付け加えられる。

おっさんのエロ

男
ウリャ〜〜っ
ちんぽ
射精
牝豚
ぴぴぴ……

射精文明＝資本主義社会の構造を性に持ち込んだもの。男が女をちんぽで征服する。愛は射精と性欲より下位に、または愛がない。

「また一歩、野望に近づいた！」

スペシャル☆解脱対談

滝本竜彦
TAKIMOTO, Tatsuhiko

vs.

HONDA, Toru

本田透

僕がヨガで思ったこと、あるいは健康になるとDQNになれる、のか。

「ヨガにはまっているらしい」という噂（事実）の滝本竜彦氏。
その真意を問うべく、盟友かつ本誌監修者・本田透との対談を設定。
しかし、本題になかなかたどり着かない――が、
そのうちに壮大な論理を目にすることに……。
ヨガの原点には『電波男』が大きく関わっていた!?

生まれつき、「ミューズたん」が大好きだったんです。

本田 こんにちは。じゃ、『ファントム』の対談をはじめます。これはボクと滝本くんの「ヨガ」に関する対談で、そこに、滝本くん彼女のエッセイも入れるってことになってます。

滝本 えっ、本当にそんなことになってるんですか！

本田 この前、言ってたじゃないですか。

滝本 冗談だと思ってました。じゃ、彼女に電話してみよう。

（――おもむろに携帯を取り出して、彼女に電話をする滝本氏。数分何やらボソボソと話したあとで……）

滝本 OKだそうです。エッセイ、すごい書きたがってました。

本田 やっぱり彼女、本気だったんですね。〈滝本くん彼女〉に会ったとき、ブログの名前まで教えてもらったんですよ。

滝本 ……まぁ彼女の話はどうでもいいとして、そう、ヨガです。本題のヨガの話に行きましょう。まずはなぜこの『ファントム』にヨガの話が載るのか、そのコンセプトを明らかにさせたいと思います。そのためには、まず『ファントム』とはなんなのか、からはじめます。本田さん、『ファントム』は、「モテない男の恨み、つらみ」をメインテーマにした雑誌なのでしょうか？

本田 そうですねー、まぁ、『電波男』（三才ブックス）の流れで、何とかして解脱したいという雑誌ですね。

滝本 『電波男』の延長線上ということで、その実践編ということですか？

本田 あれは一冊の本でしたが、今回はラノベやエッセイなどいろいろ入れたりしてます。

滝本 僕が『電波男』を精読したところ、「恋愛資本主義という価値観から脱却するために二次元がある」というのが、『電波男』の中心的テーマなのかなと思いました。――恋愛資本主義がこの世を支配するようになった。でも、恋愛資本主義には特に根拠がない。だから、恋愛資本主義には従う必要はない――ここまでは、おそらく僕の意見と本田さんの意見は同じかと思います。

本田 はい。

滝本 で、恋愛資本主義においては、「生身の女」を愛することが良いこととされている。その代わりに、「我々は二次元の女を愛するよ」ってことにするのは、つまり愛の対象を他のモノに代えるということになります。

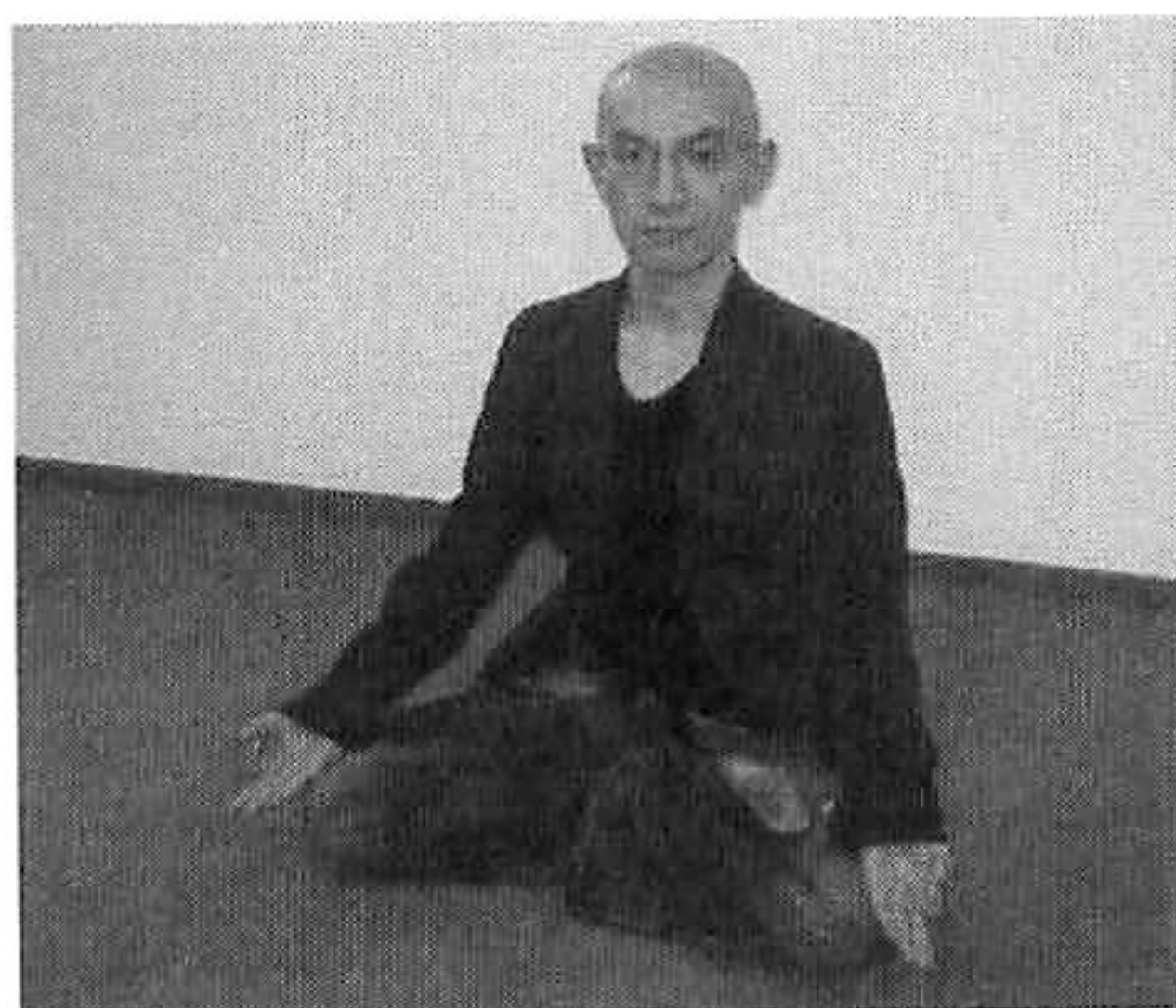
本田 え、ええ……。

滝本 その時に、本当に自分の意志で二次元の女を選択したのかどうか。もしかしたら、DQNが生身の女を求めるように、最初からそれしか残されていなかったから二次元女を求めたのではないか。あるいは『電波男』を読んで感化されたからそう思うようになったのか。それは「生身の女」から「二次元女」にただすり替わっただけの話ではないか、という疑問を僕は持ったわけです。

本田 二次元至上主義ですね。本質的にはあまり変わっていません。

滝本 愛の対象が変わっただけですよね。「二次元女」であっても、「生身の

女」であっても、愛の対象には優劣はないのではないか。あるいは「仕事に対する愛」とか「小説に対する愛」とか、それら個々人が大切に思う価値基準、そのどれが正しいとか間違ってるとかではなく、別にもう、何でも良いのではないか。どれも絶対的な価値基準によって判断されたものではなく、ただ、おのおのが置かれた状況、環境、性質によって、自分の愛の対象、価値基準を自動的に決めさせられているだけなのではないか？　自分の意志で二次元を選んでるつもりが、実はDNAとか物理法則とか社会風潮とかの影響を受けて、無意識的に選ばされてるだけではないのか。

本田　ここから本当に、ヨガの話にたどりつけるんでしょうか？（笑）

滝本　だいじょうぶです。たどりつくのです（きっぱり）。

本田　だんだん話がでかくなってきてますけど。

滝本　なぜ僕がこんな自由意志を否定するようなことを考えてるかというと、実は僕には生まれながらにして小説への愛があったんです。二次元女への愛と同じように、生まれ持って与えられた小説への愛があって、これこそが世の中の最高の価値であると信じて疑わなかったんです。

本田　なるほどー。

滝本　だから、他の人が生身の女とつき合っていても羨ましくなかった。しかし最近、僕が感じていた「小説への愛」というものが、「生身女」が好きだとか「二次元女」が好きだとか、「釣り」が好きだとか「ゴルフ」が好きだとかいうのと、何も変わらないことに気がついてきた。

本田　相対主義ってこと。

滝本　そう。愛の対象に優劣は無いという結論に個人的には至った。しかしそれは相対主義なので、この僕自身の、この主張すら、僕は微塵も信じていません。

本田　うーん。いい話ですね……（笑）。

滝本　で、ここから話が佳境に入ってきます。小説への愛も二次元女への愛も、別に同じようなものだとしたら、僕が今まで小説に命を捧げてきたことは何だったのだろう、と思ったわけです。結局、DQNが女の尻を追いかけてるのと一緒じゃん。仮に小説や芸術の神の名前を「ミューズたん」としましょう。

本田　その「ミューズたん」（笑）を追いかけてきたということですよね。

滝本　僕は生まれつき「ミューズたん」が大好きだったんです。そして一時期、ほんの一瞬、彼女も僕を、愛してくれた。僕らはふたりでいちゃいちゃしていた。そんなときもあった。

本田　ところが……。

滝本　ところが大槻ケンヂ様も歌っているとおり、愛は減っていくものらしいです。

本田　ははは（笑）。

滝本　しょせん、小説への愛も、本能のようなものです。「ミューズたん」への愛も、僕の個人的資質によって自動的に生まれた愛なので、まるっきり下等な本能です。何も偉いことはないのです。何も特別なことはないのです。DQNが女を好きになり、次第に飽きてそして嫌いになる。それとまったく同じことなのです。

本田　解決不能な方向にどんどん向かっていきますね。

滝本　そうしたことに気づきつつ、僕の小説執筆能力が低下して、なおかつ「ミューズたん」への捧げものとしての小説執筆活動が、読者のほうを見るようになったりして……ま、浮気ですね。

本田　そこで浮気が出てくるわけですね。

滝本　滝本自身がほめられようとしたら、それは浮気以外の何ものでもないです。作品よりも自分を大切にするようになったらおしまいです。

本田　むずかしいですね。それは『NHKにようこそ！』（角川書店）あたりですか。

滝本　そうです。そのころ僕を悩ませていた「この世に真理はないのか!!」云々という問題に脳を蝕まれていたということもありまして、僕はとても落ち込んでおりました。借金もありました。いまはもう借金は返し終えましたが、いつまでたっても原稿は書けるようにならず！……酷いですよ。いまだに気軽なエッセイさえ書けない。一カ月くらいずっと考えても、原稿用紙三枚のエッセイすら書けない……。

本田　今回も本当はエッセイを注文したんですが……。

滝本　毎晩寝る前に「オレは書ける」と自己暗示をかけているんですが、自分がワープロ画面に向かってるのを想像しただけで、心臓がバクバクしてくる。

本田　不安神経症みたいになってますね。仕事しすぎじゃないですか。連載三本くらい抱えてたときとかあったじゃないですか。あかほりさとる先生みたいにならなくちゃ。

滝本　そうですね。そのためには仕事とか金への愛が必要ですね。しかしいま、僕の愛は枯渇してます。なので、「一度消えた愛をいかにして取り戻すか」、あるいは「自分が大切に思うものを自分の意志で選ぶことができるの

か」が、僕のテーマです。「運命は変えられるのか」「人間に自由意志は存在するのか」と言い換えてもいいです。で、ここらへんから、話がヨガになってくるのです。

本田　すごいむずかしいテーマですね。

滝本　つまり『電波男』で弱いなと思ったところは、「人間女」の代わりに「二次元女」を求めるとなっていましたが、「二次元女」を嫌いだと言う人もいるじゃないですか。

本田　あー、いるんですよね。

滝本　そこで必要となるのは、本田さんはあの本で「自分の好きなものなら何でもいい！　好きなもの、愛の対象は自分で決めろ！」と書くべきだったのではないかと。でも……愛の対象を自分の意志で決めるだなんて、そんなこと本当にできるものなのか？

本田　それこそ、「修行」をしないとむずかしいんじゃないでしょうか。

滝本　ということで「修行」が出てくる。自分の意志で愛の対象を決める。それができなければ結局のところ、人間女が好きだろうと、二次元女が好きだろうと、小説書くのが好きだろうと、なんにせよ人類皆ＤＱＮなんですよ！　あぁ僕はＤＱＮになりたくない。自分の意志でもう一度、小説を好きになりたい……。

本田　ということは、小説を書くためにヨガをはじめたと？

滝本　小説を書くためじゃないんです。小説を愛するためなんです。一度失った愛を、意志のパワーで取り戻すことができたとき、そのとき初めて自分で愛の対象を設定する能力がゲットできるのです。そうした技術が確立できたとき、ついにこの世からＤＱＮが一掃され、モテるモテない問題が完全解決するに違いなく、僕も小説バリバリ書けるようになって大金持ちというシステムなのです！

本田　あー、なるほど。

あと二十～三十年たったら、二次元とかどうでもよくなってるかも。

滝本　具体的な話をしましょう。もし自分で愛の対象を設定する能力があったなら、人生はどれほど明るくなるか？——たとえば毎日、人間女にバカにされて、くそーって思うわけじゃないですか。そのとき、くそーって思う代わりに、「俺はあいつらよりこの椅子のほうが好きなんだ！　別にあいつらにバカにされても何とも思わないんだ！」と考える。そして椅子を愛し、椅子と睦み合う。本気で。……すると本気の愛は、彼の人生を、丸ごと全肯定してくれる。何かひとつでも、本当に愛するモノがあったなら、そのとき人生はオールオッケーとなる。しかも愛の対象は自力で自在に設定可能なので、彼の人生は、いつでも死ぬまで完全に勝ち組だ！

本田　は、はっはっ（笑）。完璧な自信が持てる、ということですね。

滝本　はい。

本田　しかし、なぜ小説への愛は減ってしまったんですか？　減らざるをえないの？

滝本　競走馬は目隠しをしていて、前しか見えないじゃないですか。僕もずっと、目の前にあるのは小説だけ、という状況だったんです。

本田　ところが、世の中に出ちゃうといろんなモノが見えてきちゃう。

滝本　いざ、小説でイケるんじゃねと思ったときから、「読者へのおもねり」とか「仕事を一緒にする人への媚びへつらい」とか、「皆に嫌われたくない」とか……。

本田　どきっ。

滝本　好きな小説を書くということより、皆に嫌われない、怒られない小説を書く方向にシフトしちゃったんです。

本田　ボクいま、そんな感じです。そっち行っちゃったら、やっぱヤバイですか？

滝本　それはもう。だんだん仕事が嫌いになっていく。

本田　どうしよー。じゃ、読者のことをあまり気にしないほうがいいんですね。我が道を貫いたほうがいいんですね。でも、それで売れなくなったら大変じゃないですか。

滝本　小説への愛を貫くことと、売れる物を書くことは両立します！　きっと……たぶん……でも最終的には愛が一番大事です。きっと、たぶん……。

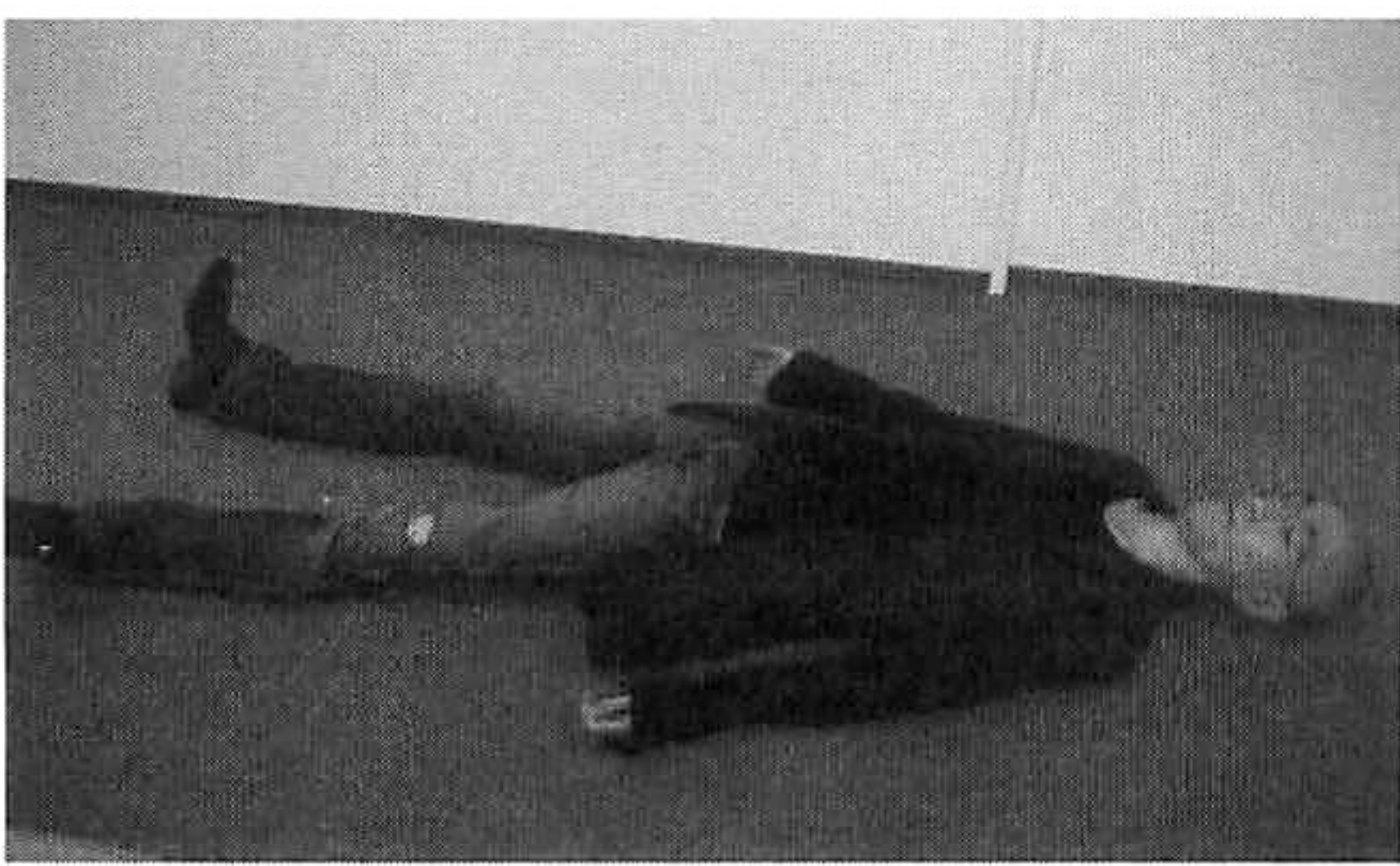
本田　わかりました（頭を下げる）。で、食い詰めちゃったらどうなるんですか？

滝本　そのときは……愛に殉じて死ぬんですよ。愛のために死にましょうよ。きっと幸せですよ。

本田　あー、そうか。

滝本　愛する対象が確かにあって、そのために死ねるなら、客観的に見てどんなに惨めな人生でも、主観的には完璧に幸福なはずですよ。ところで、本田さんは小説が好きなんですか？

本田　ボクが好きなのは、昔のライトノベル。あかほりさとる先生のような小説とか『ゴクドーくん』（中村うさぎ）とか、あと「エロゲー」が好きです（笑）。

滝本　そうですか。僕も『天空戦記

シュラト』が大好きです！　あれを読んだから今の僕があるのです！　それはそれとして……「愛のために死ねるなら本望だ。そして、愛の対象は何でもいいんだ」というところまで話はきました。

本田　それを主体的にするためには……。

滝本　そう……ヨガです。ここでヨガが出てくるんです。やっと話がヨガになりました。安心しました（笑）。つまり……人間の思考も感情も、全部脳みその物理的な現象です。

本田　まあ、そうですねー。

滝本　今の愛は物理的に選ばされているだけ、だから物理法則にしたがって愛は冷めていく。

本田　はいはい。そこでヨガで精神修行をして脳内麻薬をコントロールする？

滝本　ヨガによって、肉体と感情を理性の支配下に置く。そもそもヨガとは、「馬を車につなぐ」という意味でして、落ち着きのないこの肉体と二十四時間あちこちに跳ね回るこの感情を、意志に繋ぎ止め制御するのがヨガなのです！

本田　はー、そうなんですか。ふーん。

滝本　で、肉体と感情を自分でコントロールできたら、愛の対象を自在に設定することができ、なおかつ愛を増減させることも可能なはずでして、それこそが僕の目標というかなんというか……。

本田　なるほど。悟りの境地ですね。でも、なんか理屈は合っているんですけど、三十年くらいかかりそうな気がするんですが？

滝本　そうなんですよ。しかもですね、ここで「肉体・感情」という概念に対置されてる「理性」とか「意志」とかの言葉もまた、やはりただの物理的な、条件反射的なモノに過ぎないのではという疑念があり……あああああああああああああああああああああああ……本当はどうせもう何やったってダメなんですよ……たぶん全部、ただの条件反射なんですよ。しょせん僕は犬なんですよ。

本田　お釈迦様でも、五、六年の修行で悟ったという話ですから。

滝本　た、たとえば愛といっても、フィリアとエロスとアガペーと三つくらいに分類される。しかし僕が思うに、やはり全部ただ脳内麻薬のなせる業です。友愛は、動物の防御本能みたいなものからきている。エロスは、ただ「ヤリてえ！」ってところからきている。で、アガペーは、セロトニンがガーンッて出た状態、つまりMDMA（エクスタシー）を飲んだときとまったく一緒。

本田　あははははっ。愛を感じるクスリってあるじゃないですか。それですか（笑）。

滝本　そのようなモノを飲んだとき、僕は道を歩く人すべてが愛おしくなりました。全人類、全宇宙が愛おしい……隣人が愛おしくてしかたがない。しかもそこには、エロスの感情などみじんもなく、どこまでもピュアーなアガペーのみがあり……が、しかし、それはクスリによって作り出された単なる一夜の面白体験……。

本田　がはっははははっ（笑）。

滝本　ということで、脳とかの物理的なところを制御して、愛を自力で設定できるようになろうというのが僕の目論見です。

本田　なんか、ヨガより手っ取り早いモノはないんすか？　ま、クスリが一番早いのかもしれませんが……。

滝本　クスリはあまり良くないですね。「自分の世界は自分の脳が作ってる」ってことを知るきっかけにはなると思うんですが、今の合法のヤツは、やたら体に悪そうだからやめた方がいいですよ。あと最終的には飽きるし。どれだけクスリで精神変容の超体験しても、いま目の前に見えているこの平凡な現実らしき映像の方が、実は幻覚としての完成度が遙かに高い。シラフが一番きまってる。シラフ凄すぎる。けどもう同じ感じの幻覚を何十年も続けて見てるから、たまにクスリを飲んで、違うタイプの幻覚に浸ると、物珍しくてちょっと面白いってだけのお話。まぁこんなクスリ話より、愛の話に戻りましょう。どれだけ自分の意志で愛の対象を設定できるかという話。もてない男が幸せになるにはそれしかないじゃないですか！

本田　いや、それしかないです。綾波とかみさき先輩が浮かんでくるって、結局、そういうことじゃないですか。

滝本　うーん……僕が綾波を好きになったのは、ただの物理的な、犬的な本能反応です。DQNがいい女に惚れたのと一緒です。だから最近の僕は、綾波とか、その他いろいろの、昔好きだったものが、だんだんどうでもよくなってきている。飽きてしまった。愛が消えてきた。じゃ、その消えつつある愛を、いかにして己の意志で復活させるか？　あるいは新たな愛の対象を、どうやって僕の意志で作り出すのか？

本田　あー。むずかしいですね。

滝本　きっと、このままだと、あと二十〜三十年たったら、二次元とかもうどうでもよくなってますよ。人間彼女も脳内彼女も、小説への愛も、全部どうでもよくなってますよ！　そして僕は普通のDQNになってるんです！　そんなの嫌だ！

本田　四十歳くらいになると、脳が衰

えてきて、きつくなってくるらしいですよ。

滝本 だからもう修行するしかない。修行しよう修行しよう修行しよう……すべての感情を、完全に意志の制御下に置き……。

本田 はー、何年かかるんでしょ?(笑)

滝本 でも、悟らない限り、救いはない! 僕が長年論理的にひたすら考えた結果、もうこれしかどこにも救いはない!

本田 オーケンは空手でやりましたよね。

滝本 空手……空手家というと、人格障害キャラばかりが思い浮かびます。あまたの空手漫画を読む限り。「空手で悟った!」という噂も聞かない。

本田 痛いだけです。

滝本 しかしヨガならばアルファ波とかシータ波とかをコントロールできる。去年まで立位体前屈で床に手が届かなかったけど、鋤のポーズで腰が柔らかくなった。初回のみだけど、胡座で空に飛ぼうとして遊ぶこともできるし、思い切って達人座で十五時間座ってれば五十パーセントでニルヴァーナに行ける。金なきゃ座って体伸ばしてればいいだけ。暇つぶしになる。英雄のポーズとか、金剛座とか、色々あるのでマジでお勧め。

本田 あれですか、インドのクリシュナムナティみたいなものを目指しているんですか?

滝本 僕としては……とにかく小説を書いて、お金を儲けたい(笑)。

本田 なんかものすごく迂回してるんじゃないですか?

滝本 いや……たぶんこれが最短ルートなんですよ。あるいはもう、ルートなんてどこにも無いんですよ!

本田 急がば回れって(笑)。

滝本 だって、書けるはずないじゃないですか。もう小説なんて書きたくない。そうだ小説なんてわざわざ好きになる必要はない! 彼女に食わせてもらうのもいいと思う。どこかに僕を養ってくれる金持ちの美しい女性はいないんでしょうか? 最近、僕、女の人と交流できるような気がしてきたんですよ。ヨガで身体が元気になって精神が安定し、対人恐怖症が治ってきて、そうしたら健全な欲望が出てきたんですよ。仙道の修行もやってるんで、寝る前のファンタジーの中においては、僕はもう完全にエロゲーの主人公ですよ。シャクティパワーが凄いですよ! もしかしたら僕はこれから『同級生』の主人公みたいなことを実際にやれるのではないか。もう愛とか小説とか、そんなくだらないことは別にどうでもいいんじゃないか。金と女があればそれでいいのではないか!

本田 そういえば、対人恐怖症、治ってますね。

滝本 ……というわけで、結局、オレがDQNだったんじゃん(爆笑)。何がヨガ修行だよー、ふざけんのもたいがいにしろよー、ヨガでDQNになってどうすんだよーみたいな感じで(笑)。

本田 うーん、ヨガで健康になるとDQNになれるという結論ですか(笑)。ちょっとヤバイオチになっちゃいましたねー。これはあくまで滝本さんが頭の中で考えた推論で、その結論としては、こうなるはずだ……ということですよね(笑)。

◎ 滝本きゅん彼女のエッセイ ◎

「ホワイトバンドで飢餓をなくそう!」滝本きゅん彼女「上田鈴子」(仮)

はじめまして。滝本さんと同棲しているUです。先日、デートをしました。

まず洋服店に行きました。

「これかわいい。たっちゃん、どう思う?」

「わかんねぇ。女の服、全然わかんねぇ。俺、本屋に行ってるから」

滝本さんは私を置いてどこかに走っていきました。私は洋服を選びながら滝本さんを待っていました。

一時間ほどして、滝本さんは『あるヨギの自叙伝』というタイトルの本を抱えて戻ってきました。凄い聖者の本だそうです。

滝本さんは、

「これ読んで俺きっと悟るから、お前にも服買ってやるよ」

と言って、私が見ていた洋服をレジに持って行きました。

デパートを出ると、日が暮れていました。

「ひもじいよ」

お腹がすいてきたので、可愛らしく言ってみました。

すると、滝本さんの顔色が、みるみる変わっていきました。

「はぁ? お前、いまごろ何いってんの? もう開演まで時間ないだろ」

「じゃあ…ひもじくない」

「はぁ? いまお前ひもじいって言っただろ! ちゃんと意思表示しろよ! どうなんだよ? ひもじいのかよ? ひもじくないのかよ?」

私は正直に答えました。滝本さんはコンビニでサンドイッチをふたつ買いました。

ふたりでもくもくとサンドイッチを食べながら、吉祥寺の駅前を早足で歩きました。

サンドイッチを食べ終わったころ、劇場に到着しました。私が前々から観たいと言っていた演劇に、なんとか間に合うことができました。

二時間後、観劇を終えた滝本さんは、

「くだらねぇ。才能ねえんだよ!」

と不機嫌な様子でした。怖い顔で私を『ラオックス』に連れて行き、『iPod nano』というものを買いました。

深夜の帰り道、滝本さんはその機械がどれだけ素晴らしいかをずっと話していました。

私は興味深そうに聞くフリをしました。

滝本さんは嬉しそうな顔をして、

「もうひもじくないか?」と私を気遣ってくれました。

phantom column 07

オタ目線からみる落語のススメ

サンキュータツオ
text by THANKYOU, tatsuo

otaku

落語＝アニメ？

昨年は『タイガー&ドラゴン』で注目され、また本年は『落語天女おゆい』が放送されるなど話題になった落語だけど、オレから言わせれば落語ってのは、そもそもアニメ的なものである。江戸時代の人が脳内想像世界だけで構築した「古典セカイ系ライトノベル」、それが落語である。

ある日死神と遭遇して人の命を弄（もてあそ）ぶことになってしまう「死神」は『デスノート』の古典みたいな噺（はなし）だし、「疝気の虫（せんきのむし）」は人のお腹のなかで暴れまわる虫が主人公なんだから『蟲師』みたいな噺だ。「あたま山」はアニメ映画化もされてご存知の方もいるだろうけど、頭の上に木が生え池ができるなんて、夢みたいなナンセンスな噺だし、「化け物使い」はオジサンが一つ目小僧やのっぺらぼうをパシリのようにこき使っちゃう。「抜け雀」や「ねずみ」は、絵に描いた雀や、ねずみの彫刻が動きだしちゃうし……ほら、落語ってホント「セカイ系」でしょ？

世界広しといえど、落語のような芸能が生きつづけているっていうのは、それだけ日本人が落語をおもしろがって支持してきた背景があるからで、やっぱり日本がアニメ大国になったのも必然、ていうか温故知新？（アンゴル・モア風）日本人の妄想力は今にはじまったわけではないんであります！　みなさんには、落語を楽しむ素養があるんですよ！

otaku

落語はオタクの味方!?

そんな落語は、実はオタクの味方でもある。立川談志キュンが「落語とは業（ごう）の肯定である」と言ったのは有名な話だけど、この業の肯定というのは簡単に言うと「三次元女で

なく二次元に走るのもアリさ！」ってことなんだよね。え？　飛躍しすぎ？　つまりですね、談志は落語が他の芸能・芸術とどこが決定的に違うかというと、「飯を食いたい」「寝たい」「異性とパヤパヤしたい」とかいう人間が本来的に持っている業をいかに克服するかが他の芸能・芸術のテーマだけれど、落語だけは「いや、食いたい、寝たい、パヤパヤしたい、でいいじゃん」という、人間のしょうもない部分、「業の肯定」がテーマなんだ、と。たとえば「忠臣蔵」という話は、何年もかかってツラい思いまでして仇を討つという話なんだけど、この話が歌舞伎や講談になることはあっても、落語にはならなかった。それは、落語は「仇を討つぞー！」と言ったはいいけど「でもぶっちゃけ痛いのやだよな」「ルミャー！　死にたくない！」と言って逃げ出してしまった人たち＝四十七士になり損ねた愛すべき人たち、にスポットライトをあてる芸能だからである、というのが談志キュンの言。

　ね？　してみると本田透兄さんの言う「にじげんでもいいぢゃないか、をたくだもの」も業の肯定であって、そこに非常に落語的な発想の転換があるのがおわかりでしょう。だから落語はオタクの味方なのです！

otaku 喪のための落語

　んでもって、落語には最初に挙げたような噺のほかに、喪男好みの噺がたくさんある。喪男たることを笑い飛ばす噺もあるし（『めぞん一刻』の五代くんばりの妄想狂が出てくる「湯屋番」「小言幸兵衛」など）、喪男がいい目に合う＝妄想世界で夢成就！　みたいな噺もけっこうある。だいたい喪男はパープリンな与太郎か、働きもしない若旦那（今でいうニート）みたいな愛すべき方々なのだけど、そういう人たちはやはり心優しくて純愛志向、噺も「おね☆ティー」ばりのラブコメタッチだ。

　たとえば「紺屋高尾」という噺は、一介の職人が花魁（遊女だけども、当時はアイドルみたいな存在）に恋をして、三年間働きまくって貯めた給料をその花魁に会うために、ひと晩で全部使っちゃう噺。現実世界なら、花魁はＤＱＮで、キモメンから搾取した金をそのままヒモに上納するところだけども、この噺では、花魁はこのひと晩だけでフラグが立ち、「こんなに好きでいてくれて、正直なあなたのことが好き！　嫁ぎます！」ということになり、結局この職人は花魁と結ばれるのだ！　なんて都合のいい、否、夢のある噺なのだ。

　つことで。今、これを読んでいるアナタ、アニメと落語は非常に相性がいいのがおわかりでしょう？　落語、オタク目線で楽しんでみてはいかがでしょう？

地獄はここに

山本 弘

Illustration／名瀬さおり

私は猟師であり、ピアニストであり、錬金術師である。

愛する人を失って悲しみに沈んでいる男や女、子供が行方不明になって胸を痛めている家族、深刻な悩みを抱えた若者……日本だけでも何百万人もいるそうした連中は、私に狩られるのを待っているマヌケなカモだ。私の商売は決して独創的なものではない。何百年も昔から伝わる古典的な手法を用いているにすぎない。必要なのはハッタリと機転、少々の演技力、それに良心の欠如。

私は言葉の罠をはりめぐらし、近づいてきたカモを捕える。言葉の指で彼らの心をかき鳴らし、思い通りのメロディを奏でさせる。言葉の坩堝（るつぼ）に彼らの涙を投げこみ、黄金に変える。彼ら貧しい者たちの涙が、富んだ私をいっそう潤してくれる。なんてエキサイティングで楽しい商売。

恨まれたことはない。それどころか、首を切られたカモたちからはいつも感謝される。大の男が別れ際に私の手を強く握り、「ありがとう、ありがとう」と泣く。こちらが要求してもいないのに、余分の金を押しつけてくる女もいる。私が神であるかのように、手を合わせて拝む老女もいる。彼らはみな、私の言葉の魔術によって深い安らぎを得ている。もちろんそれは欺瞞だが、人を幸せにする欺瞞である。世間には私のことを悪く言う者もいるが、私は潤い、彼らも幸せになっているのだ。何も悪いことなどないではないか。

ああ、いや、偽善はよそう。自分を騙したって金にならない。私は悪だ。良心のかけらもない吸血鬼だ。それを忘れてはいけ

ない。悪であることを自覚しているからこそ、私は多くの同業者より強い。自分が善意の人間だと本気で思いこんでいる彼らより、非情に、計画的に、効率よく稼ぐことができる。
警察に目をつけられたことはない。儲けすぎないように注意しているからだ。特にカモの生活を困窮させるほど金を吸い上げるのはまずい。たまに同業者が訴えられるのは、一人のカモから必要以上に吸い上げようとするからだ。バカな奴ら。欲をかくと失敗する。この商売は評判が第一だというのに。
私の場合、すでにテレビや雑誌でいくらか名が売れ、依頼もひっきりなしだから、一人のカモからしつこく何度も金を吸い上げる必要はない。むしろ金に執着していないふりをして、カモに良い印象を与える方が効果的だ。そうすれば口コミで評判はさらに広まる。
むしろ厄介なのは、あまりに熱心すぎるカモ――もはや「狂信者」と呼べるほどに私に依存し、神のように崇拝している連中だ。固定した金ヅルはありがたいが、あまり高額を貢がれると、何かの拍子に正気に返られた時がこわい。自然に手を切るために、彼らの精神的な自立を助けなくてはならない。それが面倒だ。子供のライオンを野生に帰すために、獲物の取り方を教える。そんな心境だ。
厄介そうなカモと会う際には、事務所の隠しカメラで一部始終を録画しておくことにしている。録画したＤＶＤはもう百枚以上にもなっている。保険だと思えば安いものだ。万が一、裁判になっても、私の方から「金を払わないと悪いことが起きる」といった恐喝的な言葉を一切用いなかった証拠になる。それにカモが口にしたプライベートな情報が、将来、何かの役に立つかもしれないし。
私にとって、仕事は娯楽でもある。人を騙す快感――心を操り、涙を流させ、金と崇拝を引き出すことに、無上の喜びを覚える。カモの中には高学歴の者や、会社などで重要なポストについている者もいる。彼らが高校中退の私の口車にまんまと騙される。実に痛快ではないか。相手からどうやって情報を引き出すか。どうやって騙してやろうか。カモによって事情はみな異なり、ひとつとして同じケースはない。無論、トリックが露呈しないよう、常に警戒を怠ってはならない。仕事は私にとって、暴露の危険を秘めたスリルあふれる冒険であり、パズルを解くような知的チャレンジなのだ。

今回はテレビの仕事だ。何日も拘束されるが、ギャラはたいしたことはない。それよりもテレビに出て知名度が上がることの方が嬉しい。名が売れれば、新しいカモが来る。
最初の撮影現場は東京都内にある制作会社の一室。ソファに座り、ディレクターから簡単な説明を受ける。前にも出た番組だから、要領は分かっている。

カメラが回りはじめる。私は気を引き締める。いつもは一人、あるいはせいぜい数人のカモを相手にしているのだが、今回はこの場にいる四人のスタッフだけでなく、テレビを通じて全国の何百万という視聴者も欺かなくてはならない。条件も普通よりきびしく、頭をフル回転させる必要がある。

　向かいに座ったディレクターから、真っ白な封筒が手渡される。中には今回のターゲットの写真が入っているのだが、この時点では、まだ名前も、どんな事件かも知らされていない。もちろん、封筒を開けて中を見ることも許されない。私は封筒の表面をさすり、目を閉じて瞑想するふりをしながら、どんな「つかみ」で行こうかと考える。

　前回は小学生の男の子だった。今回も子供ということはないかもしれない。まずは大人で試してみようか。

「男の人のイメージが見えます……背が高い……そう、百八十センチぐらいかしら……シルエットになってて、顔はよく見えないわ……黒い服を着ているのかも……」

　そう言いながら、薄目でスタッフの様子をうかがう。ディレクターは無表情。他のスタッフも変化なし。当たっているなら何かの反応があるはずだ。「男」はハズレか。

「この人が見ていたイメージかもしれない……そう、事件に男が関係してる」

　こう言っておけば、まず確実に当たる。世間で起きる事件の大半は、男が何らかの形で関係しているのだから。

「強い心の乱れが伝わってきます……この人は不安を覚えている……ひどい不安……」

　この時点ではまだ、ただの失踪事件なのか、殺人事件なのか分からない。だから「ひどい不安」と言っておくのが無難だ。殺されようとしている人はもちろん、誘拐された人や家出した人だって、何らかの不安を覚えているだろうから。

　ターゲットが子供であることに賭け、はずれるのを覚悟で、少し深く踏みこんでみることにする。

「泣いている……家族を……お母さんを呼んでいるのかしら」

　スタッフの表情に明らかな変化が生じた。カメラマンなど、声こそ出していないが、「ほう」という形に口を開けている。

　念のため、もう少し探りを入れる。

「まだ若い……若くて、不安で……後悔の念に苛(さいな)まれています……」

　どうとでも解釈できる無難な言葉を口にしつつ、スタッフの反応を読む。彼らは平静を装っているつもりだろうが、正解に近づくと、無意識のうちに身を乗り出したり、そわそわしたり、驚きの表情を浮かべたりする。それを元に推理を働かせる。たまに見当違いのことを言ってしまうこともあるが、たいした問題ではない。当たっていない箇所は放映の際にはカットされるから。

「まだ子供ね」私はようやく断言する。

「まだ幼い……男の人に脅されている……かわいそうに……こわがってるわ」
　ディレクターの口許がわずかにゆるむ。前にも同じ表情を見たことがあるので分かる。これは「大当たり」の顔だ。
　私はさらに十数分もいろいろな言葉を口にする。間違った断定をして言質を取られないように気をつけつつ、試行錯誤を続けるうち、どうやら被害者は女の子らしいと分かってきた。さらに殺人なのか誘拐なのかを絞りこむ。
「赤い……真っ赤な服……服が赤く染まってる」
　またも反応。他のヒントと考え合わせると、どうやら殺人のようだ。
　被害者像を絞りこむ合間に、「森」「ハンカチ」「水」「遊園地」「お人形」などなど、思いついた単語を適当にはさんでゆく。それらのどれかが事件に関係していれば、後で放映の際に使われるだろう。
「竹」という単語で、明確な反応があった。私はピンときた。昨年の初め、埼玉県の小さな町で、竹林で小学生の少女の惨殺死体が発見されたというニュースがあった。あの事件はまだ解決していなかったはず。
　その事件を記憶していた理由は、私の予言が当たったとネットで騒いでいた奴がいたからだ。その少し前、オカルト雑誌の新年号の「最強霊能者十人が占う今年の日本」という企画で、私は「東京の西の方で、子供が頭から血を流しているイメージが見える」と発言していた。なに、適当にデタラメを口にしただけだったのだが、たまたま事件が雑誌発売の一カ月後だったのと、被害者の少女が頭を金槌らしきもので殴られていたので、それと結びつけられたのだ。
　ちなみに、同じ記事の中で私が予言した「日本の景気は回復する」とか「秋に政権交代がある」とか「三月頃、東北地方に大きな地震がある」とかは、みんなはずれた。まあ、はずれた予言なんて、誰も覚えちゃいないだろうが。
　さらに深りを入れる。
「痛い……頭が痛い……この子の痛みが伝わってくる……頭が痛い……」
　スタッフの間に強い動揺が走るのが分かった。私は心の中でほくそ笑む。ビンゴだ。
　さらに霊視をするふりをしながら、新聞で読んだ事件の内容を思い出し、適当に脚色して語ってみせる。そのものズバリを言ったりはしない。「埼玉県の竹林で女の子が頭を鈍器で殴られて殺された」なんて言ったら、逆に嘘っぽすぎる。ストレートな形容を避け、あくまで断片的に、暗示的に語るところがミソなのだ。
　あの町の名前は何といったっけ？　私は記憶をたどった。印象に残る、変わった名前だった――そう、確か風芽町。
「地名が見えます……空に関係がある……雲とか風とか……そう、風……」
　そう言うと、ディレクターが「はい、もうけっこうです」と言ってさえぎった。
「いやあ、お見事です、永戸さん。恐れ

入りました」
　彼は封筒を開け、中の写真を出して私に見せた。殺された少女、鹿沼美弥だ。ピアノか何かの発表会の記念写真だろうか。赤いワンピースを着て花束を持っている。殺された時は五年生だったという。愛らしく微笑んではいるが、特に美少女というわけでもない。
「すごいですね。写真の服の色までぴたりと当てちゃいましたよ」
　アシスタント・ディレクターが驚いている。私は服が血で染まっていることを暗示したつもりだったのだが、スタッフは勝手に勘違いしてくれたらしい。こういうのもよくあることだ。彼らは何でもかんでも、私に都合よく解釈してくれる。
　ディレクターは説明した。事件から一年半が過ぎているのに、有力な目撃情報も何もなく、捜査は完全に行き詰まっている。それで思い余った遺族が、番組に依頼してきたのだという。
「協力しましょう」
　私はカメラの前で、義憤の表情を浮かべて言った――心の中では舌を出しながら。

　風芽町は「田舎町」から「地方都市」への成長途上にある町だ。国道沿いには大きなショッピングセンターや町役場、大手量販店などが並んでいるが、脇道にそれて少し行くと、のどかな水田や畑が広がっている。小学校はひとつだけ。生徒の中には、何キロも歩いて通っている子も多いらしい。
　現地ロケは前回の収録の五日後だったので、私はネットで事件について調べる余裕があった。都合のいいことに「鹿沼美弥ちゃん殺害事件の情報を求めています」というページがあり、事件の詳細がまとめられていた。
　鹿沼美弥はピアノが得意で、学校でも音楽部に所属していた。同級生の証言によれば、昨年の一月二十日午後四時三十分、彼女はクラブ活動を終え、学校を出た。家は学校から歩いて三十分の距離。中間には竹林がある。途中まで友人がいっしょだったが、竹林の近くで別れた。
　娘が六時になっても帰宅しないので、母親が心配になって探しに出かけたが見つからなかった。翌朝、警察が捜索を行なったところ、道から百メートルほど離れた竹林の中で遺体が発見された。死因は金槌らしき鈍器による後頭部への一撃。死亡推定時刻は前日の午後五時前後。服はすべて脱がされ、遺体の周囲に散乱していた。
　警察が付近一帯で訊きこみを行なったが、事件現場の近くで白い乗用車を見たとか、バイクに乗った男が走っていたとかいう情報はあったものの、どれも事件とは結びつかなかった。一年半が過ぎても、事実上、捜査はまったく進展していない。なるほど、これでは霊能者にすがりたくなる気持ちも分からないでもない。
　スタッフの車で小学校へ。今は夏休み

なので、子供の姿はなく、門も閉まっている。ここから美弥が死の直前に歩いた道をたどって行こうというわけだ。まだ午前中なのに、真夏の空から降り注ぐ陽射しは強烈で、アスファルトが焼ける音まで聞こえそうだった。私はサングラスを忘れたのを後悔した。今日のロケはきついものになりそうだった。

　校門の前には、先行していた別のスタッフといっしょに、中学の制服を着た少女が待っていた。

「こちら、中上絢ちゃん。美弥ちゃんの姿を最後に目撃した人です。番組に協力してもらえることになりまして」

　ディレクターに紹介されると、少女は緊張した様子で、「はじめまして」と小声で言いながら、深くお辞儀した。今どき礼儀正しい子だ。ちょっと内気そうだが、かわいらしい顔で、大きなリボンとツインテールの髪が清楚である。これなら男子に人気があるのではあるまいか。

「そう、あなたが……」と私。「今は中学生なのね？」

「はい。今年の春に進学しました」

　緊張はしているが、口調ははきはきしている。頭も良さそうだ。

　スタッフは私たちが握手しているところを撮影した。後で彼女の顔にはモザイクがかけられるという。

「じゃあ、ここから現場に向かって歩いていただきましょうか」とディレクター。

「ちょっと待って。現場までどれぐらいかかるのかしら？」

「ええっと、普通の歩調で歩いて二十分ってとこですか」

　炎天下をそんなに歩きたくない。

「私、足が良くないんですけど、途中まで車で行ってはいけません？」

　足が不自由なのは事実である。幼い頃の事故のせいで、右足を少しひきずっているのだ。日常生活に支障はないのだが、早く走ることはできない。子供の頃、これのせいでずいぶんからかわれたものだ。

　ディレクターはあっさりＯＫした。ただ、番組としては、学校から現場まで歩いたということにしたいので、最初に歩きはじめるところだけ撮りたいという。私は指示に従った。まず校門のところで周囲を見渡す私を撮影。それから手を前に突き出し、残留思念を探るようなポーズで、校門からゆっくりと五十メートルほど歩く。ＯＫが出たので、私は絢といっしょに車に乗りこんだ。

「あの……永戸先生？」

　車がスタートするなり、絢が思いつめたように話しかけてきた。

「先生の番組、何回か見ました。すごい的中率なんですね」

　絢は目を輝かせ、私の顔を興味深そうに覗きこんでくる。私は曖昧な笑みを返した。

「ええ、まあそうね」

「この前の、家出した女の子を探し出した事件なんて、感心しました——何でも分かっちゃうんですか？」

「何もかも分かるわけじゃないわ。現場に残ってる思念の痕跡——イメージみたいなものを読み取るだけよ」
「今度の事件はどうなんです？　美弥ちゃんを殺した奴、分かりますか？」
少女の目は真剣だった。声は小さかったが、「奴」と口にした時の声音には、暗い憎しみがひそんでいるように感じられた。
「美弥ちゃんと仲が良かったの？」
「ええ」絢は強くうなずく。「幼稚園の頃から知ってました。しばらく離れてたんですけど、五年生で同じクラスになって、またよく話すようになったんです。二学期の間ずっと、彼女、私のすぐ前の席でした。だからちょくちょく、消しゴムとか貸し借りしたり、ラビプリのカード交換したりしてました」
ラビプリとは何だろう。アイドル・グループか、マンガのタイトルだろうか。
「だから許せないんです。今でも犯人のことを考えるとむかむかして。あんなひどいことをした人間が、罰を受けずにのうのうと生きてるなんて——ねえ、先生、きっと解決してくださいね、この事件」
「ええ、解決できるといいわね」
実のところ、何度もテレビには出たものの、私の霊視で事件が解決したという例はない。静岡で行方不明になった少女が東京で保護されたという事件にしても、実際に家出した少女の足取りを追い、男と同棲しているアパートを探し当てたのは、番組スタッフが雇った探偵である。私はスタッフから家出前後の事情を聞き、「東の方の大きな都市にいる」と言っただけで、それが後で「当たった」ことにされたのだ。
私には霊視能力などないのだから、事件が解決できるわけがない。
車はすぐに現場付近に到着した。問題の竹林は小さな山の東側、なだらかな斜面に広がっており、舗装された道に面していた。道の反対側には野菜畑が広がっていて、民家が点在しているだけで、人通りはほとんどない。なるほど、これでは目撃者がいないのも無理はない。
「あっちが美弥ちゃんの家です」
絢が竹林の中に入ってゆく脇道を指差した。陽射しに慣れた目には、薄暗く、陰気に見える。細いうえに坂道なので、自動車どころかバイクや自転車も通れそうにない。
「ここを抜けると近道なんです」
「こわそうな道ね」
「ええ、夜なんか暗くてけっこうこわいです。電気のついた明るい道もあるんですけど、かなり遠回りになっちゃうんで。それにあの日は、まだ明るかったし——」
「ああ、待って待って」ディレクターが慌てて止めた。「まだカメラが回ってない。ごめん、悪いけど、今の説明、もういっぺん繰り返してくれるかな？」
絢は嫌な顔ひとつせずに承諾した。カメラが回りはじめると、「あっちが美弥ちゃんの家です」と、さっきと同じ説明

を繰り返す。
「じゃあ、ここで美弥ちゃんと別れたの？」
「はい。私の家はあそこなんで」
と、畑の中に建つ民家を指差す。ここから二百メートルぐらいか。
「それが美弥ちゃんを見た最後だったんだね？」
「ええ」絢の声は沈んだ。
「どう言って別れたの？」
「『明日、またね』って」
「それだけ？　他に何か？」
「いいえ。普段とぜんぜん変わりませんでした」
「近くに怪しい人とかは見なかった？」
「見てません。誰かとすれ違ったとしても、いちいち覚えてません」
私はその発言を記憶に留めておいた。これは使えるかもしれない。「すれ違ったとしても覚えていない」ということは、彼女が犯人とすれ違っていたことにしても、嘘が見破られることはないということだ。
ディレクターはさらにいくつか少女に質問してから、「はい、カット」と言った。
「お疲れさん、絢ちゃん。今日はここまででいいから」
彼女は「はい」とお辞儀をしかけたが、ふと頭を止めた。何か迷っている様子だったが、ディレクターの背中に向かって、思いきって切り出した。
「あの……ついて行ってはいけませんか？　現場まで」
「はあ、何でまた？」
「何かお役に立ちたいんです。私、美弥ちゃんのことは詳しいですから。分からないことがあれば質問してください。何か事件の手がかりになるようなことがあるかもしれません。お願いします」
彼女の熱意に折れ、ディレクターはOKした。私としても、美弥についての情報源がすぐ近くにいるのはありがたい。ネット上での情報では、彼女の私生活までは分からなかったからだ。
事件現場は、脇道を数十メートル歩いてから右にそれ、竹林の斜面を登ったところにあるという。そんなに急な斜面ではなかったが、足の不自由な私には少しつらい。生い茂った竹に太陽がさえぎられ、外よりも涼しいのが幸いだった。
遠くでセミが鳴いている。
「先生」
歩きながら、絢が話しかけてきた。
「何？」
「あの、美弥ちゃんと……美弥ちゃんと話ができますか？」
くだらない質問に私はむっとなったが、表面上はにこやかに答える。
「ええ、たぶん」
「本当に？」
「ええ、肉体は滅びても、霊魂は不滅ですからね」
絢はそれっきり沈黙した。暗い表情で、何か考えこんでいるようだった。
現場に到着。斜面の途中の、やや水平になったところで、道からは竹に邪魔さ

れて見えない。四本の竹の根元を結んで、ピンクのビニール紐が四角く張られている。近くには誰かが花を供えていた。それ以外、事件があったことを示すものは何もない。
私はしゃがみこみ、手を合わせて拝む。無論、ただのポーズだ。私には死者に対する敬意や哀悼の念などひとかけらもない。霊の存在も信じていない。そんなものを信じていたら、こんな商売はできはしない。
私は霊視を開始する。すなわち、手を伸ばして場に残留しているイメージを読み取っているふりをしながら、探偵となって事件を推理する。事件から一年半も経って、痕跡は何も残っていないが、この状況から推測できることはいろいろある。
服が脱がされていたことから、変質者の犯行という線はまず間違いなかろう。しかし、犯人はどうやって被害者を道からここまで連れてきたのか。手をつかんで無理やりひきずってきた？　それなら彼女が大声をあげて抵抗したのではあるまいか。騙して連れてきた？　いや、小学五年生ともなれば「変質者」という概念ぐらいは知っているはず。こんな場所まで見知らぬ男にのこのこついてくるとは考えにくい。ナイフで脅した？　いや、ナイフを持っているのに金槌で頭を殴ったというのは理屈に合わない。
こうしよう。ここに連れて来られた時、美弥はすでに死んでいた。道を歩いていたところを、いきなり後ろから金槌で殴られたのだ。それなら後頭部に傷があったことの説明になる。犯人は倒れた彼女を抱え上げ、人目につかないこの場所まで運んできた……。
小学五年生なら体重は三十キロはあったはず。それを抱えて斜面をここまで登ってきたのなら、犯人は体格のいい男だろう。私は封筒の霊視で「黒い服を着た背の高い男」のことを口にしたのを思い出した。あれが伏線に使える。「男に脅されている」という発言とは矛盾するが、そんな些細なことは誰も気にしないだろう。
「男が見えます……」私は静かに語りだした。「背の高い男……黒いセーターを着ている……そいつが女の子を抱えています。こう、足の方を持って、肩に担いでる。サンタクロースが袋を担ぐみたいに。それから女の子をこの場所に寝かせました。女の子は頭から血を流して、ぐったりとなっていて……」
その時、絢が「くっ」と小さな声を洩らした。見ると、歯を食いしばり、うつむき加減で立ちすくんでいる。拳を強く握りしめて、感情の爆発に耐えているようだ。
かまわずに、私は続けた。
「……女の子は動きません。もう死んでるのかもしれない。そいつは、ぐったりとなった女の子の服を脱がせていきました……」
ここでまた考える。例のサイトでは、

美弥が裸にされていたことは書かれていたが、暴行されていたかどうかまでは触れられていなかった。犯人に屍姦趣味があるなら犯していたかもしれないが、そこまで断定するのはまずいかもしれない。第一、暴行の様子を詳細に説明しても、テレビでは放送できまい。その点はぼかすことにした。

「……すっかり脱がせ終えると、男はカメラを取り出して、写真を撮りはじめました。いろんな角度から、何十枚も……そういう写真が大好きな男なんです……シャッターを押しながら、にやにやと笑っています……ああ、なんていやらしい顔……」

耐えられなくなったのか、絢が口を押さえ、身をひるがえして斜面を駆け下りていった。少女には刺激が強すぎたか。

さらに何分か、適当なことを喋(しゃべ)った後、私は「ここが殺された現場ではありません。ここに連れてこられた時、美弥ちゃんはもう死んでいました」と言った。さっきの場所に戻ろうということになり、私とスタッフはぞろぞろと斜面を降りていった。

道のところでは、絢が膝を抱いてうずくまっていた。

「だいじょうぶ?」

肩に手をかけ、優しく声をかけると、彼女は涙をぬぐいながら振り返った。

「ええ……ええ、平気です」

「ごめんなさいね、つらい思いをさせちゃったわね」

私は少女をそっと抱き寄せ、赤ん坊をあやすように背中を静かに叩いた。カメラはそんな私たちの姿をずっと写している。私は心の中でせせら笑った。この感動的な場面が放映されれば、全国で何万というバカが涙を流すに違いない。

よし、感動をもうひと押ししてやれ。

「美弥ちゃんがね、あなたに伝えたがってるわ」

「美弥ちゃんが……ですか?」

「ええ、あの子の声が聞こえる。『絢ちゃん、悲しまないで』って。『私たち、とってもいい友達だったね』って」

「ええ……」絢はうなずいた。「私たち、友達だった……」

「『私、あなたに出会えて良かったよ。もう遊べなくなっちゃったけど、それでも、いつまでも私たち、友達だよ』って」

それから、さっき絢自身から聞いた情報を思い出し、口にする。

「『私があげたカード、まだ持ってる?』」

「ええ……あれから何回も使ったわ……役に立ってるよ」

なるほど、テレホンカードかメトロカードだったのか。

「『使い切っても、大事に残しておいてね。私たちの思い出だから』」

「ええ」

絢は潤んだ目で私を見上げ、微笑んだ。

「ずっと残しておく——使い切っても」

夕方、私は美弥の家を訪れ、遺族とカメラの前でまたひと演技してみせた。「私

を育ててくれてありがとう」とか「どうか悲しまないで」とか「私はいつまでもお父さんやお母さんのそばにいます」とか、ありきたりの言葉を並べると、母親は泣き崩れ、父親も涙をしきりにぬぐっていた。ちょろいもんだ。あまり金が取れそうな家ではないが、とりあえず私の仕事場の住所と電話番号だけ教えておいた。

番組は二週間後に放映された。封筒の霊視の場面では、思った通り、事件と関係のない発言はすべてカットされ、あたかも私が正確に事件の全貌を見通していたかのように編集されていた。

私の霊視を元に作られた再現ドラマも挿入された。犯人は黒いセーターを着た三十歳ぐらいの長身の男。少し離れた町から徒歩でやって来て、このあたりで犠牲者を物色していた。たまたま下校途中の美弥と絢とすれ違い、Uターンして後をつけた。美弥が竹林の中の道に入ったのを見て、早足で追いつき、隠し持っていた金槌で背後から一撃した……。

番組の後半では、「これが霊視によって判明した犯人の素顔だ！」という仰々しいナレーションとともに、私の言葉を元に作られた似顔絵も流された。四角ばった顔。がっちりした顎。目は小さく、全体として微妙に不気味な印象。

これが実際の犯人の顔と似ていなくても、別にかまわない。一年半も捜査して手がかりがまったくなかったということは、このまま迷宮入りする可能性が高いし、たとえ何カ月か先に犯人が捕まったとしても、この手の番組がわざわざ「以前に霊能者の証言を元に描いた似顔絵はぜんぜん似ていませんでした」と報じることはありえない。ましてや視聴者の声など気にすることはない。何カ月も前の番組で流れた似顔絵なんて、みんな忘れている。番組をビデオで保存しておいて、本物の犯人像と比較するような物好きな視聴者なんて、何百万人に一人しかいないだろう。

そう、事件が解決しようがしまいが関係ない。神秘的な場面、感動的な場面さえ作れば、たとえ嘘でも番組の視聴率は上がり、私の人気も上がる。それでいい。

番組放映の翌日、中上絢から電話がかかってきた。美弥の両親から電話番号を聞いたのだという。

「ぜひもう一度お会いして、お礼が言いたくなったんです」

「そんなの電話でいいわよ」

「いえ、電話じゃだめなんです。実はぜひ先生に見てもらいたいものがあるんです。この前の番組を見て、ちょっと気がついたことがあって。事件の重要な手がかりになるんじゃないかって」

私は興味をそそられた。

「それ、警察にはもう言ったの？」

「いいえ。まず永戸先生にご相談しようと思って……あの、お忙しいですか？」

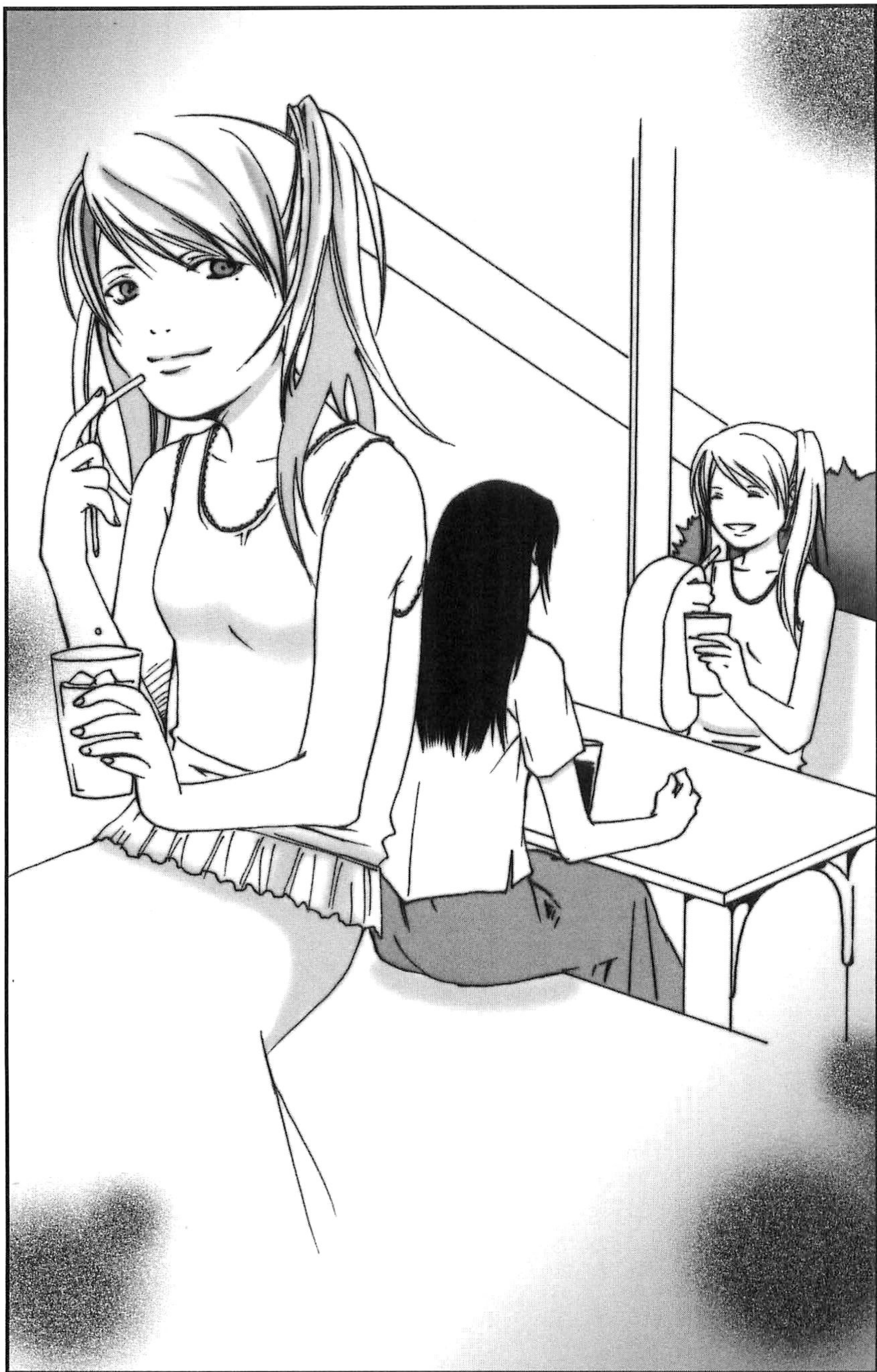
私は考えた。絢が本当に事件解決の糸口を握っているというなら、会って話を

聞くのは有益かもしれない。うまく行けば、そこから犯人像を絞りこみ、それを私の霊視として世に出すこともできる。
「今日の二時頃なら空いてるけど……でもあなた、埼玉から出てこれるの？」
「ご心配なく。実はもう東京に来てるんです。今、池袋駅からかけてます」
そう言えば、背後に雑踏の音が聞こえる。
「時間ならたっぷりあります。親には『今日一日、図書館で勉強してる』って言ってありますから」
どうやら見かけよりしたたかだし、行動力もある女の子のようだ。
「いいわ。話を聞かせて」

私たちは事務所の近くの駅で落ち合い、喫茶店に入った。窓際の明るい四人掛けの席に座る。バッグは隣の席に置いた。夏休み中とは言え、平日の昼間なので、客は多くない。私はアイスコーヒーを、絢はオレンジジュースを注文する。
「お忙しいところを申し訳ありません」
「いいのよ。それより、見せたいものって？」
「これなんです」
絢は手帳サイズの透明なホルダーを取り出し、テーブルの上に広げた。カードがいっぱい入っていた。どれもかわいらしい服や靴の絵が印刷されており、横にバーコードがついている。
「『ラビイ&プリン』っていうゲームのカードです。二年ぐらい前から女の子の間で流行ってるんです。今は下火ですけど。美弥から貰ったのはこれです」
絢はお姫様が着るようなドレスの描かれたカードをホルダーから抜き出した。さらに携帯用のゲーム機らしいものも取り出す。
「あんまりレアってわけじゃないんですけど、私が欲しかったやつなんで、美弥と交換してもらいました。この横のバーコードを機械にスラッシュすると……」
絢はカードをゲーム機の溝に挿しこみ、さっと滑らせた。ピロロッという電子音とともに、液晶画面に何かメッセージが出る。
「……魔法ゲージが上がって、バトルができるんです」絢は私の顔を覗きこみ、無邪気に笑いながら言った。「テレカか何かだと思いましたね、先生？　違いますよ。このカードはいくら使ったって減らないんです。使い切るなんてありえないんです」
私は動揺したものの、かろうじて顔色に出さずに済んだ。
「それがどうしたって言うの？」
「美弥なら『使い切っても』なんて言うはずありません。つまり先生は、本当は霊の声なんか聞こえてなかった……」
この子は何者だ？　探偵気取りか？
「美弥ちゃんがちょっと言い間違えたんでしょ。霊だって間違えることはあるわ。それとも、私が聞き間違えたか。何にしても、たいしたことじゃないわ」
「そうですね、これだけじゃ、たいした

証拠にはなりません」
　絢はあっさりと認めると、ゲーム機のスイッチを切り、カードをホルダーにしまった。
「別にいいんです、そんなこと。先生を訴える気はありませんから。先生がインチキな霊能者だって事実は、私が胸にしまっておけばいいことです」
　さすがにこの言い方は腹に据えかねる。
「絢ちゃん、あなたね……」
「ただし！」
　叱ろうとした私を、絢は逆にぴしゃりと封じた――あくまで顔は笑ったまま。
「これだけは知っておいていただきたいんです。他の人は騙せても、私だけは騙せない。先生の喋ったことはみんなデタラメだってことは、私には分かってるんです」
　私は笑った。「何を根拠に、そんな自信たっぷりなことが言えるのかしら？」
「だって、美弥ちゃん殺したの、私ですから」
「え？」
「私が殺したんです。金槌で彼女の頭をガツーンと」
　ちょうどその時、ウェイトレスがアイスコーヒーとジュースを運んできた。私は衝撃のために身動きできなかったが、絢はさっさと紙袋からストローを取り出し、ジュースをひと口すすった。
「ああ、夏はやっぱりこれですよね。冷たいジュース。私、麦茶とかコーラよりもジュースが好きなんです」
「………」
「それと、秘密を誰かに話すとすっきりしますね。『王様の耳はロバの耳』って感じで。もう一年半も自分の胸にしまってたから、もやもやしてたんですよね。やっぱり話してよかった」
「……冗談でしょ？」
　私がかろうじてそう言うと、彼女は笑い飛ばした。
「ほんとですよ。私が犯人なんです。だから自信を持って言えるんです。黒いセーターを着た背の高い男なんていなかったって。美弥ちゃんを肩に担いでなんかいないし、写真も撮ってないって。殺したのはあの場所ですよ。あそこにおびき寄せて、隙を見て殴ったんです。大工さんの使う金槌で」
　私は否定したかった。すべて冗談だと決めつけたかった。だが、ドラマに出てくる殺人者の口ぶりとはまったく違う、まるで運動会の結果を報告するかのような絢の自然な口調には、逆に不快なリアリティがあった。演技だとしたら、もっと深刻ぶって喋るのではないか。
「……タバコ、いいかしら？」
「どうぞ」
　私はバッグからタバコとライターを取り出した。乱れた心を落ち着けようと一服する。
「……どうして？」
「動機ですか？　別に憎かったんじゃないんですよ。友達だったのはほんとで

す。実際、誰でもよかったんです。ただ、どうしても、金槌で人の頭を割ってみたかったんです」
私は笑おうとしたが、できなかった。
「そんな動機、あるわけが……」
「いいえ、あるんです」少女は勝ち誇ったように腕組みした。「先生はきっと、長いことこの商売をやってきて、いろんな人に会って、人間の心理にも精通してると思ってるんでしょうね。でも、世界には先生に理解できない心理ってものもあるんです。私がそれに目覚めたのは小学校三年の時です――ああ、ちょっと長い話になりますけど、聞いていただけます?」
「ええ……」私は恐怖を押し殺しながら、こくりとうなずいた。「ええ、聞くわ……」
「小学校三年の時、捨て猫を拾ったんです。ちょうどあの竹林の中です。ミャアミャア泣く声が聞こえたんで林の奥の方まで行ってみたら、段ボールの中にちっちゃい猫が五匹入ってたんです。何日も放っておかれてたんでしょうね。がりがりに痩せ細って、今にも死にそうでした。
でも、うちは母がアレルギーなもんで、ペットは飼えないんです。家に持って帰ったら、『保健所を呼ぶか、元の場所に捨ててきなさい』って怒られました。でも、保健所に渡したら殺されるって知ってましたから、それで箱を持って竹林に捨てに行ったんです。見つけた場所に。飼ってくれる人を探そうとは思いませんでした。母はけっこう厳格な性格で、私、母には逆らえないんです。『元の場所に捨ててきなさい』って言われたから、もうそうするしかないって思っちゃったんです。
見つけた場所に戻って、箱を置いたんですけど、私、なかなか立ち去れませんでした。仔猫たちはミルクを欲しがってミャアミャア鳴いてました。とてもか細い声で、じきに死んでしまいそうでした。それで思いました。誰か他の人が見つけてくれるまで、また何時間も、ひょっとしたら何日もかかるだろう。それまでにこの子たちはきっとお腹が空いて死んじゃうだろう。苦しい思いをさせるのはかわいそうだ。いっそ今ここで楽にしてあげよう……って。
一匹目の猫をつかみ上げて、大きな石の上に頭を乗せました。左手で押さえつけておいて、右手で別の石をつかんで振り上げました。でも、なかなか振り下ろせませんでした。猫は鳴きながら、手の中でもがいてました。とても弱い力でした。苦しそうで、今にも死にそうでした。何度、やめようと思ったか分かりません。でも、このまま生き続けさせて、苦しめるのもつらくて。それでとうとう……私……石を……振り下ろしたんです」
その瞬間、少女の口許が淫らに緩み、法悦の表情を浮かべるのを、私は目にした。
「すごかったです……気持ちよかった……猫の頭がぐちゃっと潰れたとたん、

それまでの悩みとか苦しみとかがすうっと消えて、反動で幸せな気分が押し寄せてきました。世界が光に満ちあふれたような気がしました。まだ経験ないけど、セックスってあんな感じなんでしょうね。猫の——いえ、生きものの頭を潰すのがあんなに気持ちいいなんて、夢にも思わなかった。
　すぐに次の猫をつかんで、同じように石で頭を潰しました。やっぱりいい気持ちでした。それから夢中になって、三匹目も、四匹目も……気がつくと、五匹全部殺してました。もっともっと頭を潰したかったのに、もう猫は一匹もいなかったんです」
　私は凍りついていた。
　疑惑は今や確信に変わっていた。演技でこんなことが言えるはずがない。ここまで異常な体験を創作したうえ、ここまでリアルに語れるはずがない。この子の言っていることは真実だ……。
「それからしばらく、その感じが忘れられなくて、私、悶々としてました。金槌を手に入れたのは、それから少ししてからです。ある日の夕方、たまたま家を建てている現場を通りかかったら、材木の上に置きっぱなしになってたんです。大工さんが忘れていったんでしょうね。夕陽を浴びて、なんだかきれいだったのを覚えてます。誰もいなかったから、服の中に隠して持って帰りました。神様が私にプレゼントしてくれたんだと思いました——悪魔かもしれませんけど。
　その金槌は机の奥に大事にしまっておきました。勉強の合間にちょくちょく取り出しては、柄を握ったり、頭をさすったりして、うっとりしてました。それで猫の頭を潰すところを想像して。でも、使う機会はなかなか来ませんでした。捨て猫なんてめったにあるもんじゃありませんし。夏に森の中でバッタやカマキリの頭を潰したことがあります。古いぬいぐるみを捨てる前に、その頭を叩いてみたことも。でも、だめでした。猫の頭蓋骨がグシャッと割れるあの感じは、虫やぬいぐるみじゃ再現できないんです。
　そのうち、思うようになりました。猫であんなに気持ちいいんだったら、人間の頭を潰したら、もっと気持ちいいだろうなあって」
　絢は言葉を切り、ジュースを少しすすった。
「言いましたっけ？　五年生の二学期に、美弥ちゃんが前の席だったたって。私、授業中いつも美弥ちゃんの頭を見てたんです。先生はずっと前を見てる私を、勉強熱心だと思ったでしょうね。でもほんとは、美弥ちゃんの頭に後ろから金槌を振り下ろすところを夢見てたんです。美弥ちゃんの頭蓋骨が砕けて、脳みそが出てくるところを。
　その頃です、マスターベーションを覚えたの。普通の女の子は男の子とエッチしてるところを想像しながらするんでしょうね。私は違いました。金槌で美弥ちゃんの頭を砕くところを想像しながら

やるんです。アノ感覚って、猫の頭を潰した時の感じと、すごく似てたんです。
　そのうちだんだん、想像じゃがまんできなくなってきました。どうしても本当に潰したくなったんです。それでもまだ迷ってました。決心がついたのは、雑誌で先生の予言を見たからです」
　私はびっくりした。「私の?」
「ええ。『東京の西の方で、子供が頭から血を流しているイメージが見える』ってやつ。それを見て、何か運命みたいなものを感じたんです。これは美弥ちゃんのことなんだ。私が美弥ちゃんを殺すんだ――そういうことに決まってるんだって」
「…………」
「計画は時間をかけて練りました。母が用事で出かけて、帰りが遅くなる日を選びました。それなら学校を出て家に帰るまでの間に、不自然に長い時間がかかっても、誰にも気づかれないわけですから。近所の人に見られて帰宅時間を記憶されないかどうかは、ちょっとした賭けでしたけどね。
　美弥ちゃんには『タケノコを見つけたからこっそり掘りに行こう』って誘いました。本当は一月にタケノコなんか見つかるわけないんだけど、『ごくまれに冬にタケノコが出ることもあるらしいよ』って言ったら、あっさり信じちゃいました。もちろん『泥棒なんだから誰にも言ったらだめだよ』って釘を刺して――言っちゃなんだけど、あんまり頭のいい子じゃなかったですね。
　金槌はランドセルの中に隠してました。あらかじめちょっとだけ掘っておいた地面を指差して、『ほら、ここだよ、ここ』って言ったら、美弥ちゃんはよく見ようとかがみこみました。そこを後ろから、思いきり、ガツーンと……」
　絢は目を細め、「ふう……」と、長いため息をついた。
「思った通り、最高でした。金槌を握り締めたまま、しばらくぼうっと突っ立ってました。濡れちゃいましたね。もう人生最高の喜びって感じで。
　もろちん偽装工作は忘れませんでした。美弥ちゃんの服を全部脱がせました。そうすれば変質者のしわざだと思われるでしょうから。白い手袋を用意しておいたんで、ボタンとかジッパーとかに指紋は残しませんでした。金槌は帰りに別の場所に隠して、手袋は家のゴミに混ぜて捨てました。何もかもうまく行きました。もうほんとに、私の計算した通りに。誰も私のことを疑いませんでした。みんな変質者のしわざと思いこんで、大人の男の人を捜してましたから。
　もっと何人も殺したかった。でも、完全に警察を煙に巻いたって確信がありませんでした。もしかしたら私が気づかないだけで、こっそり私に目をつけて、身辺を探ってるのかもしれない。この手の事件って、犯人が『絶対に捕まらない』なんて思い上がったせいでドジ踏むことが多いんですよね。それで用心して、次

の犯行をずっと我慢してました。
　一年が過ぎて、中学に進学しました。捜査に進展があったとも聞かないし、警察が私を疑ってる様子もぜんぜんありませんでした。それで自信がついてきました。そろそろ次の事件を起こしてもいいんじゃないかって。授業中とかベッドの中とかで、手口をいろいろ考えてました。また私の友達が殺されたらさすがに疑われるだろうから、ぜんぜん知らない子、それも小さい子にしよう。前と同じ場所じゃまずいから、休日に出歩いて、犯行に使えそうな人目につかない場所を物色してました。怪しまれないように子供を誘い出す方法も、あれこれ考えてました。
　そんな時です。美弥ちゃんの両親が、あの番組に捜査を依頼したって耳にしたのは。
　私、急に不安になりました。だって、もともと先生の予言を読んで事件を起こしたぐらいですから、先生の能力をけっこう信じてたんです。もし永戸先生が乗り出してきたら、いっぺんに事件の真相が暴かれるかもしれない——そう思うと、不安で不安でたまらなくなりました。
　もうひとつ、心配の種がありました。霊の声を聞ける人がいるってことは、霊というものは本当にあるし、死後の世界もあるってことになります。だとしたら、こんなことをしでかした私は、間違いなく地獄に落ちるんじゃないか。すごく嫌ですよね、そんなの。死んできれいさっぱり何もなくなるならいいけど、死んでからも罰を受けて永遠に苦しむってのはね。
　眠れない夜が何日も続きました。でも私、勇気を奮い起こしました。逃げるのはやめよう。永戸先生の霊能力が本物なら、どこに逃げたって意味がない。だったらいっそ、正面からぶつかってやろう。この世に私が犯人だと見抜ける人がいるとしたら、永戸先生だけ。逆に言えば、先生の目をごまかすことさえできれば、決して誰にも捕まらないってことですから。それでスタッフに頼んで、撮影に参加させてもらうことにしたんです。
　あの竹林の中で、私がどれほど緊張してたか分かります？　内心、どれほどびくびくしてたか。今にも先生が『犯人は同じ年頃の女の子だ』って言い出すんじゃないか、私を指差すんじゃないかって、それはもう……不安を顔に出さないようにするの、大変でしたよ。それなのに、先生ったら……」
　絢は思い出し笑いをした。
「あの時、私が声を洩らしちゃったの、覚えてます？　私、思わず噴き出しそうになったんですよ。先生が黒い服の男がどうこうって言い出したもんで。それまでの緊張がいっぺんに吹っ飛んで、もうおかしくっておかしくって……歯を食いしばって、笑わないように必死でこらえてたんです。
　先生が『犯人が美弥ちゃんの裸を写真に撮った』とか言いはじめたもんで、もう我慢の限界でした。私、あの場から逃

げ出して、口を押さえて笑いました。あんなに脅えてた自分がバカみたいで。もう笑って笑って、涙が出ちゃいましたね」
　私はあの時、絢の目に光っていた涙を思い出した。
「というわけで、これが真相です。昨日、念のために放映された番組を見て、先生が事件の真相をまったく何もご存知ないってことが確信できました。それでこうして訪ねてきたってわけなんです」
　喋り終えると、絢はまたジュースをすすりはじめた。
「どうして……?」私の声はかすれていた。「どうして私にそのことを……?」
「電話で言ったじゃないですか。先生にお礼が言いたかったって」
「お礼……?」
「ええ。先生のおかげでさっぱりしましたから。霊能力なんてない、霊なんていない、地獄もない。だから私は、生きている間は誰にも捕まらないし、死んでから罰を受けることもない。それが確信できたんです。これからも思う存分、たくさんの頭を割れます。だから私、先生に感謝してるんですよ、ほんと」
「……そんなことを話して、捕まらないとでも思ってるの?」
「うーん、そうですね。決定的な証拠を残すのは、さすがにまずいかもしれませんね——ちょっと失礼」
　絢はいきなり身を乗り出し、隣の席に置いておいた私のバッグに手を伸ばした。止める間もなく、ひったくられていた。
「ははあ」
　バッグの中から小型のテープレコーダーを取り出し、絢はにんまりと笑った。録音ランプが赤く光っている。
「さすが、用意周到ですね、先生。さっき、タバコを取り出す時にスイッチ入れたんですね?　でも、詰めが甘いですよ。私の話聞きながら、ちらちらバッグに目をやってたじゃないですか。ちゃんと録音されてるか気になってたんでしょうけど、あれじゃ何かあるなってピンときちゃいますよ」
　麻痺している私を尻目に、絢はカセットを取り出し、ポケットにしまった。
「これは預からせてもらいます——ま、どっちみち、先生が警察に真相を話すとは思いませんけど」
「どうして……?」
「だって、私が捕まったら、先生は破滅なんですよ?　すぐそばに真犯人がいたのに気づかなかったマヌケな霊能者。そのうえ、その予言が犯行のきっかけになったと分かったら、マスコミは大騒ぎですよ。完璧に再起不能でしょうね」
「……………」
「ですから、私が捕まらないように祈っててください。私も先生をどうこうしようとは思いません。さっきも言ったように、お礼を言いたかっただけなんですから」
　少女は立ち上がり、晴れやかな笑みを浮かべ、「どうもありがとうございまし

た」と礼儀正しく頭を下げた。それから、くるりと背を向け、軽やかな足取りでドアに向い、真夏の明るい陽射しの下に出て行った。

あれから三年が過ぎた。今年、絢は高校に進学したはずだ。

三年の間に、埼玉県内では、四歳から九歳までの女の子が頭を割られて殺されるという事件が六件も起きた。鹿沼美弥の事件も合わせれば七件。警察は同一犯の犯行と見て捜査しているが、有力な目撃情報も、物的証拠もなく、いっこうに容疑者が浮かんでこない。

彼らが探しているのは大きな男だ。犯人像に合致しない絢は、誰の注意を惹くこともなく、透明人間のように動き回り、犯行を重ねている。頭のいい彼女のことだ。どの犯行も慎重に、計算ずくで、決して尻尾をつかまれないように注意しているに違いない。彼女はまさに犯罪の天才だ。

私が悪魔を地上に解き放ってしまったのだ。私の予言が彼女に犯行を決意させ、私のインチキな霊視が彼女に自信を与えたのだ。それを知っているのは私だけ。そして、絢の言った通り、私は真実を誰にも話せない。

人を騙して儲ける商売も、以前のように楽しくはなくなった。あの日まで、私は思い上がっていた。自分は世間の誰よりも頭がいいと思っていた。自分が悪であることを自覚し、悪であることにプライドを持っていた。だが、私はあの日、少女の心にひそむ底無しの深淵を覗いてしまった。あの純粋で絶対的な暗黒に恐れおののき、目もくらむばかりの巨大な悪に圧倒された。あの少女に比べれば、私の悪事などままごとのようなものだ。

絢が罪を重ねるたびに、私の苦悩は深まる。この先、彼女が大学生や社会人になり、さらに行動範囲が広がったら、どれだけ被害が拡大するのだろうか。彼女が事故か自然の寿命で死ぬまで、いったい何十人の子供が犠牲になるのだろうか。惨劇はどこまで続くのか。

毎年、正月には、絢から年賀状が届く。きれいな字で「今年もよろしく」と書かれている。

地獄は地の底にはない。地獄はここに、この地上にある。

チームみさくらなんこつ 個人制作の新作ゲーム

中央のシルエットに注目!
(→199頁参照)

「楽園の令嬢(アリス)たち」をファントム読者に特別公開しちゃいます!

二次元美少女満載、本田透も興味しんしんのゲーム画面だ。
でも、ゲームのテーマは「愛国」「哀国」だとか。
なにやらすごいことになりそうな予感――。

「楽園の令嬢たち」の主要キャラ・みさくらぽんこつさんと
本田透の特別対談が読めます(197頁〜)。
そちらも、お楽しみに!

TSU 二次元 WORLD!

君は何人の美少女たちを知ってる?
みさくらなんこつ先生が描いた本やゲーム画像から特別抽出した
魅惑の二次元キャラをご紹介!

もう眺めているだけで大満足、
みさくらキャラの美少女二人。

MISAKURA NANKOTSU

みさくらワールドの必須アイテム「クマさんのぬいぐるみ」は、美少女たちとよく似合う。

ファンシーな野菜、それと流れるような長い髪がポイント。

業界で話題沸騰の「もえるるぶ」。みさくらさんのイラストで萌え地帯を紹介するまじめな東京案内本だ。

いかにも女の子の部屋という感じがグッドです。健康的お色気むんむん。

みさくらぽんこつ・二次元日記

1
×月×日
*
今日も会社から帰るなりゲームなのです。
私はねむたがりなので、
いつもおこたの中でゲームをしたまま
キゼツしてそのまま寝ちゃうす。
*
毎日毎日ゲームして寝て起きてお仕事してご飯食べて
ゲームして寝て起きてお仕事してご飯食べて……
ああっもう最高～!!!

2
○月○日
*
さて……。本当に最高なんでしょうか?
わたし、ゲーム、だいすき。
でも、面白くないときもあるのです。
べつに機嫌が悪いとかじゃなくって……
ゲームそのものがタイクツに感じちゃうときがあるよ!?
これはきっとケンタイキです……ピンチだ～!!
さっそく捜査にのりだすです。
でも今日はめんどくさいから明日からね……。

3
○月△日
*
わかったの。ココロ、きっとココロなの。
なんかね、ゲームを考えた人の心が伝わりすぎて悲しいの。
伝わるけど、出来上がったものは
フィルターがかかりすぎてもゆもゆしちゃってるのですね。
視界がぼやける……これって……涙?
わたし、センチメンタルなきぶんです……

4
○月×日
*
そうか!　数なのですよ!
作ってる人の数～!!
今日やってたのは冬の大作、超壮大アクションRPG!
でもエンディングのスタッフロールでは
300人(だいたい)以上の名前が……。あう～～～～
遠いよ、とおすぎるの!
ゲームを考えた人、もっとちかくにきてよ～!!
寒い、寒いよ!もう冷えたピザなの!
シベリア鉄道!!

5
○月■日
*
今日は同人ゲームをやりました。
AVGなのにイベントCGがないのです……。
不安、不安……だったけど。
*
おもしろい～!!!!　こわいよ～!!
たのしいよ～!!!!!　さいこう!さいこう!
あっみゃ～～～～～～～～～～～!!!
*
こんなに少ない人数で作ってるゲームなのに
昨日のARPGよりステキだよ、かがやいてるよ、
あったかいよ★
*
そう、あったかいの。
ゲームを義務的にやってたときもあったわたしにとって、
これはひさびさ、うれしかったのです～!
ケンタイキぬけだせるかも!

6
○月◆日
*
きめた。
わたしもゲームを作ってみるです。

ミまなじ…

そのまま突入二次元対談

みさくらぽんこつ

MISAKURA, Ponkotsu

vs.

HONDA, Toru

本田透

みんなに見てもらうために いっぱい苦しみたいと思います。 ハードマゾかな!?

本田　今回は忙しいところおいでいただき、ありがとうございます。僕は昔から、みさくらさんの大ファンだったんですよ。それで、みさくら先生に『電波大戦』（太田出版刊）でも表紙を描いていただきまして、本当にラッキーでした。

みさくら（以下、みさ）　ありがとうございます。『電波男』（三才ブックス刊）も『電波大戦』も面白く読ませていただきましたよ〜。大変ためになったというか、勉強になりました。ありがとうございます！

本田　滝本（竜彦）くんとの対談、（『Quick Japan』で）独立コーナーになるんです（本誌の対談とは別）。

みさ　そうなのですか〜！　楽しみですよ、ふふふ。

——今回は「なんこつ」ではなくて、「ぽんこつ」さんなんですよね。

みさ　あっそうか、えーと、じゃあとりあえず今回の対談にあたって、「みさくらぽんこつ」というキャラについて、説明しますね。

本田　そうですね。

みさ　わたし、このお仕事をはじめてから、ずーっと楽しくやらせていただいてたんですけど、じつはある時期……なんかはっきり言えないんですけどとっても怖い目にあったことがあったのですよ。

本田　ストーキングとかですか？

みさ　……んー、なんかそうでもないような、そんなような……三次元の世界は怖くて……。

本田　じゃー、まさに、（『電波大戦』を手に取り）こんな感じで、「モテの魔の手」のような何かがきてたんですね。メジャーになっていく時に。

みさ　自分はおんなのこのイラストを描きながら、それと同時に、わたしとはちょっと似ててちょっと違う「みさくらなんこつ」というキャラを自分のそばに勝手につくりだしてたような気がしてました。なんかそのみさくらがマンガ描いてたら面白いよね〜、って。

本田　はいはい。

みさ　はじまりはたぶん読者の方なんじゃないかなーと思うんですけど、マンガを描いてる本人もマンガのキャラみたいなんだろうって思ってもらって、それならわたしも理想のみさくらなんこつをイメージしながらお仕事しようかな？　ってなって……なんというか自分のまわりに膜みたいなのができるのを感じてたのです。防御壁みたいな。

本田　あー、護身ですね。

みさ　あ、きっとそうです。だから、三次元でのキャラ設定、というか、わたしそのものはいらなくて、二次元のみさくらなんこつのほうから語りかけていこうっていう気持ちが自然にできあがってました。逆に、三次元の世界が、ちょっと遠ざかって怖くなったんですけど……（笑）。そんな中でやっぱり、まだ三次元と二次元の狭間に壁を感じてしまっている人はいっぱいいらっしゃったのですが、本田先生のご本の中で、「みんな、だいじょうぶ！　二次元の世界に飛び込もう！」と言ってくださっていたのを読んだ時、なんかわたしが言いたいけれどうまく言えない気持ちを綺麗にお話してくれている感じがして、すごくうれしかったんです。

本田　ありがとうございます。

みさ　実際に閉じこもるというんじゃなくて、二次元の世界にはひろがり

がある。作家さんでも、二次元の世界から語りかけている方は、いっぱいいらっしゃるのですよね。

本田　ええ。そうですよね。『電波大戦』の時は、僕がみさくら先生のファンだったのですが、もう時間がなくて。「今すぐ決めろー」みたいな段階だったんですけど。それで、編集さんに紹介してもらって、表紙のイラストをみさくらさんに描いていただいたんです。

みさ　にゃはーっ（笑）。でも、タイミングよかったです、本田さんのご本の挿絵が描けるなんてうれしかったですよ。

本田　おかげさまで、売れ行きもいいようです。僕は表紙のイラストをおっさんくさい絵にするか、可愛い絵にするか、極端なんですよ。でも、おっさんくさい表紙だと、たいがい売れない。

みさ　あははーっ。

本田　『鬼畜ゲーム大全』（インフォレスト刊）って、表紙におっさんくさい人をいっぱい並べた本は、まったく売れなかったですもん。

みさ　鬼畜ゲームの主役はたしかにオヤジですけどねー（笑）。

本田　やはり、表紙の絵は大きいですからね。

みさ　んー、たしかに……。だからさっきのお話の、わたしの二次元のほうの相方にもはっきりとした絵をつけてあげたいよねってことで、「みさくらなんこつ」の絵付きバージョンを最近つくりました。それが「みさくらぽんこつ」（次頁参照）、なのです。

本田　なるほど。じゃ、なんこつさんとぽんこつさんは同じ人……。

みさ　うんうん、同じ人だと思ってもらってかまわないです。

本田　あのですね。みさくらさんに会われるのでしたら、ぽんこつさんは「ふたなり」なのかどうか、聞いてくれって友達がいるんですけど……。

みさ　えーっ。……はーい、ふたなりでーす（笑）。

本田　ゲームのネタばれになっちゃうじゃないですかー。

みさ　えへへーっ、そのうちわかりますってことでよろしくおねがいしまーす。とりあえずは、見た目通りでしたということにしておいてください（笑）。

本田　（ゲームの企画パンフに描かれたみさくらぽんこつを見ながら）ところで、このキャラ、ぴぴってかなりキテますよー。

みさ　ツンデレかなーきっと。ゲームの中でも、わたし自身の日記をだらだら書きつづっていくように、ぶつぶつゲームのことをしゃべってる感じでいきたいと思ってます。

本田　そういえば、『もえるるぶ』（JTBパブリッシング刊・一九五頁参照）の文字部分も、みさくらさんが書いてらっしゃるって本当ですか？

みさ　なんかおはずかしいです～。最初は絵だけ、だったのかな？　そこで文字も書いてもいいんじゃないって言っていただいて、「じゃ、やりまーす」みたいな感じでした。

本田　僕、絶対シナリオライターがいるって思ってましたよ。

みさ　文字に興味だけはすごくあるのです。もともと、二次元からのアプローチというのは、いっぱいいっぱいおしゃべりをして、いっしょに暮らして、遊んでってことだと思うのです。「だいじょーぶ？」「今日はお熱ないの？」「ちゃんとご飯食べた？」とか。毎日毎日、語りかけてくれる人がそばにいたら、けっこう幸せなんじゃないかなーって思うんですよ。

本田　ええ。

みさ　絵って、それがけっこう苦手だと思うんです。文字のほうがいい。けっこう前に、ゲームソフトの中のおんなのこが本当にメールを返してくれるっていうサービスがあったのです。わたしは「コレ、すごいすごい最高ー!!!」とか、自分がつくったわけでもないのに友達とかに言って回ってたんですよ。実際にはユーザーのみんなが「中の人」を意識しすぎちゃったのか、あんまり盛り上がらなかったかもなのですが……。

本田　「中の人」……そうですねー。ちょっと早過ぎたのかも。

みさ　あれは、なんか悲しかったのですよ。

本田　そろそろ「中の人」がどうという抵抗感ももう壊れはじめていると思うのですが……。『ときめきメモリアルONLINE』は中の人が男だってみんなわかってて、突撃するじゃないですか。

みさ　ふふふふっ。そうですよねー。知り合いのおんなのこが『ときメモONLINE』のテスト版みたいなのをやってるらしいんですけど、うれしそうに「今、わたしは主席の男の子とつき合ってる」って言ってるんですって。だけど、あのゲームって、ずーっとやればやるほど成績が上がっていくシステムらしくって……つまり、きっとその人は現実世界では家にこもってずーっとゲームやってる危ない人なのかも!?　みたいな（笑）。

本田　『ルサンチマン』（花沢健吾・小学館刊）の越後みたいな人が偏差値どんどん上がってくんですね！

みさ　で、その人とつき合えてうれしいのって聞くと、「うん、うれしー」みたいに答えるってお話で、「コレはすごい！　二次元のキャラが三次元を突き破って現れるんだね、あったかい

ね！」って思いました。うん、それはすごく夢があることだと思うのです。

本田　ところで、みさくらさんがつくられているゲームなんですけど、（コミックマーケットで先行配布されたゲーム紹介同人誌を指差しながら）どういったところで出されるんですか？

みさ　同人ゲームとか商業ゲームとかですか？　えーっと、じつはなんにも決まってないっていうか、こうしたいっていうのはあるんですけど、今はまだお話し中っていう感じです。この本では、まず「わたしこういうゲームやってみたいんだけど、どうでしょ、面白そうじゃない？」っていう呼びかけをしたかったのです。雑誌とか、紙媒体にゲーム情報が載った時のゲームに対する期待って、読んだ人の想像にゆだねちゃう部分がかなり多いと思うのです。イベントCG、立ち絵とその娘のプロフィールさえあれば、そこからふくらませていろいろ楽しめる感じがしませんか？

本田　あー、はいはいはい。わかります。

みさ　たとえば、このツインテールのおんなのこだったとしても、髪を切ったシーンとかを想像して、頭の中でビジュアルやシチュエーションを変えながら、好きなように楽しんでいたりして。そこに対しての遊び心ってまだ持ってる？　って、聞いてみたかったのです。まだ、残ってるんだったら、いっしょに遊ぼうよって言いたかったんです。

本田　（シルエットになっているキャラを指差しながら）このキャラ（一九二頁参照）、気になりますね。

みさ　あ、それ、悪い人なんですよー。

本田　なんか、『左巻き式ラストリゾート』（海猫沢めろん・イーグルパブリシング刊）みたいになっちゃうのかなー？　なんて。

みさ　ふふふふふっ。

本田　あれー、見たいな。なんか、やばそうですね。

みさ　相当悪い子かも……ふふふっ。そうそう、このお話自体の裏テーマは「愛国」「哀国」です。『ファイナルファンタジーⅧ』で「テーマは愛です」って言ってて、「すごい！　かっこいー!!」って思いました、で、このゲームは純愛ものなのでテーマが「愛」って言っちゃったらヘンなんですけど……（笑）。

本田　隣のこの人も気になりますね。

みさ　そうなんです。ものすごい怖い人なんですけど。……最近ニュースとか見てると、怖いものもそうなんだけど、自分の想像をはるかに超えたような事件が起こっちゃってるのですよねー。うーん。

本田　ゲームショップで「ひぐらし」の絵がキモいって言われて口論になって刃傷沙汰、とか……。

みさ　うーん、現実に負けてるなーって思って、もっともっとメチャメチャにグチャグチャにかき混ぜないとダメだって。とにかく、そんなゲームを出そうとしてるんですね。

本田　ゲームのスポンサーとかどうするんですか？

みさ　お金的なスポンサーさんはなしです。自分のお腹でつくっちゃいます。

本田　えっ!?　すごいですね。誰か嚙ませたほうがいいんじゃないですか。ちょっと心配したのは、『天国の門』（監督：マイケル・チミノ）みたいになっちゃったら、どうしよーって。制作費が、がーって上がっちゃって。

みさ　そのへんは家内制手工業でがっちりとやっていきますんで、だいじょうぶーです（笑）。

本田　いつごろ完成なんですか？

みさ　これは今年です。いろいろ今している仕事が終わってから、嵐のように取りかかります。

本田　いよいよお仕事を頼みづらくなってきますねー。

みさ　それは関係ないです、お仕事だいじょーぶですよ（笑）。どんと来い……っていうかお願いします……。

本田　ボクのまわりの一部で、『サクラ大戦』みたいなのがいっしょにできればいいなーみたいな妄想がひろがってるんですけど……。

みさ　『サクラ大戦』からいろんなことを教えていただきましたよー。やってる途中に何度も寝ちゃいましたけど（笑）。

本田　がはははははっ。ま、そこがー……、ボクも同人誌にはすごくお世話になってますけどね（笑）。

みさ　いやー、純和風のゲームできちんと人気が出たのって、『サクラ大戦』を除くとけっこう少ないなーって思ったんですよね。『サクラ大戦』はきちんと「自分がそこにいる感じ」があったんですよ。「和もの」って、どうしても「自分がそこにいる感じ」が想像しづらい感じがしちゃうから……。自分が今度つくるゲームも、普通にお洋服を着て、洋館みたいな学校に通っているんですけど、そのあたりの文化もぜーんぶ取り入れてごった煮しちゃった。「今の日本が大好きー!!」　みたいなお話をやりたいと思ってるのですよね……。

本田　ところで『電波大戦』の表紙のデザイン、完璧でしたね。

みさ　そうでしょうかー、ありがとう

みさくらぼんこつ

ございます。

本田　みさくらぽんこつさまのまわりに、うろうろ二次元を迷ってる人たちがいるという。

みさ　本田さんからのイメージを編集さんからご伝言いただいて描いたつもりなんですけど、なんか悲しい感じがしますよね(笑)。

本田　本当はぽんこつさまになりたいんだけど、なかなかなれないよー、みたいな。

みさ　うん。本田さんがHPで(みさくらぽんこつ像を)お釈迦さまのようだと書かれてましたけど、たしかにそう言われてみると、ポーズがそんな感じになっちゃってますね。不思議な絵(笑)。

本田　天上天下唯我独尊状態ですよ。ボクは二次元キャラ萌えは宗教という説を唱えているんですけど……。

みさ　なるほどー、それ、かっこいいですねー!!

本田　誰にも迷惑がかからないですからね。

みさ　あははは、すっごい超多神教ですよー!!(笑)

本田　一神教はよくないです。最終撲滅戦争みたいになっちゃいますからね。百八人くらい神様を飾っておけばだいじょうぶです。

――本田さんのやってることは、二次元革命の布教活動ですもんね。

みさ　なるほどですねー。

本田　その一環で、ゲームとかもつくりたいんですけどね。

みさ　わーっ、ゲームつくられるんですか?

本田　一時、妹ゲームをつくっている時、鬱シナリオをやろうとしてたんですが、ゲーム会社さんから「ちゃんと抜けるゲームつくれ!」って言われまして、あっちの意向を取り入れて書き直しているうちにだんだん『天国の門』状態になってきて。どんどん話が大きくなっていくので、(ゲーム会社から)いやがられたのかも。だって、『恋風』よりすごいものつくらなけりゃ、妹ゲームつくる意味ないじゃないですか!

みさ　きゃはははっ。意味ないことはないと思いますけどー!　んー、機会があったら、本田さんといっしょにゲームつくってみたいですー!!　絶対、面白いと思う!!　エッチなのも見てみたいし!

本田　ちょっと緊張しますねー。ガクブル。

みさ　できたらすごくうれしい!

本田　僕、もともとゲーム、アニメ、漫画、ラノベをつくりたかったんです。それが、なんかのまちがいでですね、いま評論家のほうに足を突っ込んじゃってて、これはヤバイぞーみたいな感じで。『電波男』だけが一人歩きしちゃってる。

みさ　でも、それはそれですごいことだと思うのですよ。読者さんと完全に向き合った形でお話ができて、みんなに考えを伝えられるって……素晴らしいと思う!!　シナリオ、小説にも直接つながる部分だと思います。

本田　いやー。

みさ　本田先生は面白い考えをお持ちだから、それをみんなに伝えていく、という行為は、本当に有意義だよねって思います。みんな、新しい世界に染まっていきそうな気がしちゃいます!

本田　この前NHKラジオに出たとき、爺さん、婆さんたちから「現実世界に戻れ!」なんてファクスをいっぱいもらっちゃって……。「何だよー。あんたらが現実と思っているのは、TVで見たことだけだろっ」って言ってしまいました。

みさ　はははははっ。あのー、この本(本誌『ファントム』のこと)のコンセプトとか、まだ直接お聞きしてなかったので、うかがっていいですか?

本田　じつは小説をある雑誌に持ち込もうとしたら、年齢制限でひっかかちゃって。一九八〇年代生まれ以降の人だけだというんですよ。

みさ　えっ、その年齢制限ですか!　あ、世代間のなんかアレがあるんだー。

本田　「若い人だけー」みたいな。じゃ、ある程度年季が入ったというか、歳がいった人系のラノベ本とかそういうのを中心にした本をつくっちゃおーかなと。

みさ　うんうん、いいですね。

本田　自作を発表する場がなかったんで、でっちあげたわけなんですよ。

みさ　なるほどー。自分の年齢は、今その中間、でしょうか?　思想がないんです。他の人はあると思いますけど。三十代の人は二十代の人を馬鹿にしますよね。「おまえらなんにも知らないだろ、っていうかなんにも考えてないだろバーカ」って。で二十代の人は三十代に「グチグチ理屈で語ってんじゃねーよ、このポンコツ!　感性が古いと言葉で着飾らなくちゃいけなくて大変よね」みたいな感じで。どっちも憧れの気持ちが憎まれ口になって出ちゃってると思うんですけど。で、わたしはその横でゲームやってました。超傍観!!　自分がどっちかの側につかなきゃいけない時が来るとしたら、これは大変だと思ってました。でも、まっ、つかないねー。みたいな感じになっていたんですけども(笑)。

本田　けんかしてもしょうがないですよね。

みさ　仲よくしたい〜。うん。きちんと『ガンダム』も『ガンダムシード』も両方楽しめる人間になりたいです(笑)。

本田　岡田(斗司夫)さんくらいの年代になると、もうダメみたいです。

みさ　岡田さんの作品は若い子に受けがいいと思いますよ〜？　読者の想像をはるかに超えたところにご着想がある作品がいっぱい、ザッツオタクです、クールです！　この前ケーブルテレビで観た作品もほんと面白いなーって思っちゃった。若い子はDVDのガンダムを買っても、リアルタイムで観れなかったことに本気で悔しがってます……。それが負のパワーになるとしたら恐ろしい……。

本田　『電波男』でも、読んで暴れそうになる方とかいて困ってます。「モテモテのヤツらと戦うんだー」、みたいに。

みさ　あはは、過激派さんなのですねー!!（笑）。パワーがあり余ってる感じ。

本田　だから、萌えてりゃいいって言ってんのに。聞いてないよ〜、人の話。二次元に暮らせば、みんな平和だってこと、ずっと言ってるんですけど、なぜか三次元で戦いたがる人がいて。みんな、『かみちゅ！』見ろって。

みさ　えへへ、平和な生活に慣れきっちゃってそろそろ飽きてきちゃってるのかも（笑）。無理やり本田さんを引き金に見立ててるのかもですよ！

本田　ボクはそろそろ作品をつくっていかないと、ダメなんです。

みさ　それは楽しみ。すぐだと思いますよ。……でもダメってどういうことですか？

本田　あんまり評論ばかりやっちゃうと、評論の仕事しかこなくなるんですよ！

みさ　んーそうなのですか、むつかしいのですね―……。

本田　『電波男』みたいなのは、次にもうネタがないですからね。

――あれは、一種の聖書みたいなもんですからね。

本田　やばいですよー。「今度ボク、結婚しましたー」なんて言ったら、「この裏切り者！」みたいに、磔にかけられちゃう。

みさ　本田さんは教祖さまですから欲を断った生活をみんなに見せていかなくちゃいけないのですね。みんなが見てる、見てる！

本田　だからまあ、僕だけがなんかやるんじゃなくて、「器」みたいなものをつくって、色々な人に、なかなかヨソではできないことをやっていただければと、『ファントム』をつくりました。

みさ　なるほど、それはすごくおやさしい考えかたですよね。

本田　僕一人ではなかなかできないですからね。まして、けっこう歳いっちゃてますから、限界がありますよね。やっぱり、仲間が二人、三人、四人と増えてくると、加速度的に話が面白くなってくる。

みさ　すごくうらやましいです!!　たくさんの仲間とものがつくれるのって、すごく刺激的。家に引きこもってお仕事したりすると、そのありがたみをじんわりと感じたりします〜。

本田　三十五歳になって、仕事がないという立場になると「一人でできることなんて、しれている」と気づかされました（涙）。みさくらさんも、会社でやってらっしゃるんでしょ？

みさ　うーん、正直な話、まだ学校みたいな感じなんですよー。わたしはイラストレーターの先生のアシスタントをやっていたことがあるんですけど、その時にいっしょにやっていた仲間の人たちは今、もう一人もいないです。

本田　あー。

みさ　みんな、実家に帰っちゃいました……。悲しかったです。今勤めてる会社は、それに対してけっこう真剣に考えてくれてた。

もちろんいい環境というのもいっぱいあると思います。でも、イラストレーターさんの徒弟制度みたいなものの中に、若くて繊細な子の心が挫けてしまうような環境が生まれる可能性もなくはないんじゃないかと思って……。じゃ、ウチはそれとは違う方向から、みんながのびのびと、堂々と絵を描くことができるようになる環境について考えてみようって。どんな状況でも自分の考えをきちんと発言できるような性格の絵描きさんを育てたいという思いで、会社をやっているんだと思います。

本田　いいですね。それはさておき、みさくらさんの絵は、そのうちなんとか美術館とかに飾られそうですよね。

みさ　ありえなーい（笑）。

本田　ご本人の死後かもしれませんけど。絶対そうなりますよ。

みさ　え――っ。んーまあ、ならないよりはいいのかもー（笑）。

本田　浮世絵とかもそうじゃないですか。あれも海外の人が再評価した。国内だとね、大衆文化系って、なかなか評価されにくい……。

みさ　大衆文化、最高、商業芸術、最高って思いますよー。

本田　だからボクも純文学とかにまったく興味なくて。

――みさくらさんと本田さんは、浮世絵と黄表紙の関係!?

本田　あー。僕は『南総里見八犬伝』みたいなものが理想です。すぐに「百冊書かせろ」みたいなことになっちゃう。だからこの『ファントム』でもイ

四十九院みんと

ンチキで『いもうと☆水滸伝』第一回（三五二頁〜）、とか。

みさ　あははは。水滸伝！　いいですね。

本田　で、百八回までやる。百八人の妹が登場する。でもぜんぜん、絵が上がってこないですよ。一応、これが百八人の妹ですって設定表は送ったんですけど……。絵描きさんに無理なこと言ってしまいました。

みさ　それは絵描きさんが大変すぎですよー。わたしだったら……んー……んー……どうしよう（笑）。キャラが多いのって、本当に大変！

本田　こんなんできるわけないんで、最後のほうは、鉛筆で「へのへのもへじ」でいいですって、言っておいたんですが。

――『ファントム』も浮世絵と黄表紙を目指せばいいんだー。

みさ　かっこいいですね。

本田　いいですね、ボクは滝沢馬琴が目標なんで。あとあっち行ってしまう前の、『幻魔大戦』が打ち切られる前の平井和正先生。

みさ　わたしは陳腐すぎるものが好きすぎて、まわりから怒られるんですよー。

本田　えっ、そこがいいんじゃないですか。

みさ　ですよねー。マンガを描く時に崇高なテーマとかがなくても、読者さんが「面白かった」って言ってくれれば、それだけで幸せかなーって。でも、自分のまわりの絵描きさんは、そういう考えかたを持たれている方、多くないような気がしますね。きちんとずーっと本棚に残って、その人が死んだ後でも厚い表紙になるようなタイプの作家さんを目標にしている人が多いみたい。

本田　あー。

みさ　ある時「みさくらが描くマンガはガムのようだ」と言われたことがあるんです。噛んでいると味がなくなっちゃうって。で、目指してるものを聞かれて、お話しして、そしたら「きみは理想もガムだ」って（笑）。あはは。でもわたしは、ガム最高。ジャンクフード最高なんですよ。身体にはよくないでしょうけど！

本田　あかほり先生の小説なんか、たいていそうですもんねー。

みさ　わたし、「あかほり先生、大好き!!!」なんですよー。

本田　あかほり先生は「評価されちゃ、ダメだ！」って言ってました。

みさ　あかほり先生、以前、「売れないものには名作はない、売れて、みんなに読んでもらえて、なんぼ」みたいなお話をされていて、「すごい!!　こうありたい！」って、ずっと尊敬しています。

本田　僕も最近、お仕事であかほり先生とお会いした時、「アニメを一本やりたいなんて、まだ小さい。ずっとつづけなきゃ、ダメだー」って怒られました。で、ご自身もぜんぜんまだ満足してらっしゃらないようなんですよ。これから『少年マガジン』を皮切りに一般メディアを制覇、第二の外道人生を歩むとか、百二十歳まで生きて歴史を全部ねつ造するとか、言ってましたよ。

みさ　いいじゃないですかー！　歴史をねつ造っていうかそれが歴史そのものって感じです。

本田　「ガンダムつくったのはオレだー」、みたいな。

みさ　あははは！　そこまでつくっちゃうんだー（笑）。

本田　「百二十歳まで生きれば言い切れるよー」って。

みさ　わたし、社長が事務所借りる時でも、どんなゲームつくってるんですかーとか聞かれて、横から『だいたいドラクエとかです』って答えちゃった（笑）。

本田　言ったもん勝ちですね！「言ったもん勝ち」で、思い出しました。いちばん新しいものっていうのは、まだ価値基準が確立してないから、評論家は評価できない。それが、僕はいちばん新しいものだと思ってます。ってことは、僕が「これは面白い」と言えばいいんだと。で、色々言ってるんですよ。昔は誰も聞いてくれなかったんだけど、だんだんみんなが聞いてくれるようになってきて。

みさ　なかなか思っていることを形にできるようになったり、発言できるようになったりするのには、時間がかかるんですよねー。

本田　そう。だからどこかで、みんながコラボレートできればいいですよね。

みさ　そうですよねー。寄り合い所で自分の子供の立ち位置を再確認！

本田　まるで、二次元サティアンですね（笑）。トキワ荘みたいに。

みさ　ビジュアル的には統一協会の人たちが集まっているところくらいがいいなぁ、かっこいいです。あの映像見て、カリスマはいいなーって思っちゃったもん。なんか温度が高いのはいい！

本田　とりあえず僕は、エロゲーの作家さんとかラノベの作家さんとか、好きな人を集めて、ばーっとやろうよと感じで『ファントム』つくったわけです。

みさ　うんうん！

本田　みさくらさんも絵を描く人を集めていただければ……（笑）。

みさ　集めますよー、いっぱい……。でも新人さんたちがねー、元気ないんですよ。寂しい。なんか気兼ねしちゃってるっていうか、遠慮しちゃってるっていうか……。だから、新人さんにもこちらから声をかけて、みんなでいっしょにやりたいって思います。

本田　数が集まれば集まるほど効果があるのです。

みさ　先輩の方々は本当にがんばっていらっしゃると思いますし……。すごい。

本田　あとは、そうですね。滝本くんをなんとか再生しなければ……。まさか、対談でいきなり「小説書くのやめました」って言われるなんて（涙）。

みさ　びっくり。滝本先生、彼女さんとは仲よくできているといいですよねー。

本田　彼、ヨガの修行もしてるんですよ！　「一生添い遂げるんだ」という純愛追求を二次元でやるって、本当に大変じゃないですか。あと、倉田（英之。五八頁からの特集参照）先生とか、あかほり（さとる）先生もすごい。あかほり先生のビル、ご自分で設計されたらしいんですよ。行くと、装甲車が来てもだいじょうーぶみたいな自動扉が、ぐわーって開く。で、地下にコンピュータールームがあるんですよ。

みさ　えーっ！　すごいすごい！

本田　思わず「先生、引きこもりですか？」って聞いちゃった。漫画家の奥さんと二人で稼いでいるんですね。一時、銀座とかキャバクラで全部使っちゃたことがあるそーです。

――あかほり先生のビルは、本田さんが目指す完成形のひとつでしょうか？

本田　そうですね。でも「ドロンパビル」（『電波男』三三六頁参照）はたぶん建築基準法違反ですね。●●プロからも起訴される（笑）。以前、西E田さんがキャラデザやったゲームで、妹の服が○○○○というのがあったんですよ。

みさ　はい〜。おほしさまね。

本田　で、ゲーム本の解説で僕が「ドロンパみたい」って書いたら、校正で全部消されちゃった。ドロンパおっかねーみたいな。

みさ　むずかしいんですねー……。

――「ドロンパビル」の一階はゲーム工場、屋上に電波塔があって、地下はなんでしたっけ？

みさ　いいですねー。電波を飛ばして布教活動するんですね。しかも、PTAが攻めてきてもだいじょーぶ（笑）。

本田　ビルに引きこもって、『アビエーター』みたいに一生出てこないでずっと仕事してるのが夢ですけど……（笑）。

桐生真冬

みさ　自分発信でなんでもやっちゃう。

本田　そう。ネットとかｉＰｏｄとかで。そのうち文字とか映像とかも配信しちゃう。僕ももうポッドキャストでネットラジオやってますし。

みさ　ラジオもやってるんですか？

本田　はい。あれはアメリカだとすごい流行ってますから、日本でも絶対流行ります。ポッドキャストだと新しいファイルが勝手に更新されて、そのままｉＰｏｄに入るんです。

みさ　動画も見れるなんて、ぜんぜん退屈しなくなっちゃいますねー（笑）。

本田　僕ｉＰｏｄ中毒なんです。これで六台目ですから。レコード屋に行かずにパソコンでクリックすると曲が買える。そのまま自動的にｉＰｏｄに入っちゃうから、これだと、引きこもっていても、どんどん曲が増える。ほら、画像も入ります。

みさ　あーっ、すごい、楽そー。

――みさくら先生の最近のお仕事は？

みさ　すごくいっぱい、やらせていただいているんですよー。

本田　雑誌もやってらっしゃるし、『もえるるぶ2』（『もえるるぶ東京案内』）、『萌えるダイエット』（コアマガジン刊）とかゲームとかですよね。すごいですね。ゲームでは原画を担当されているんですか？

みさ　ＰＳ2の『ルーンプリンセス』（プリンセスソフト）はキャラデザです。F&Cさんの『部活規格』は原画を担当させていただきました。本当にうれしいです。

本田　こんなに忙しいのに、『電波大戦』の表紙を描いていただいて、ありがとうございました。しかも、担当の人が「今すぐ描け」みたいな発注だったそうで……。本当にすいません（汗）。

みさ　あの時は、はっきり言って無理やり時間をつくりました。でも、だいじょーぶですよ（笑）。以前から、トークショーに来てみませんかって、お誘いをいただいていたので、そのご縁もありましたから……。

本田　ボクが単にみさくらさんの大ファンだったもんで、ダメもとでこの編集さんにお願いしてたんですよー。

みさ　うれしいですけどなんかはずかしいです。はうー。

本田　この後のお仕事は？

みさ　一度イラストのお仕事をまとめた画集を出したいと思ってます。

本田　カレンダーは？

みさ　え、まだ発表されてないのに……。裏情報までお詳しいですね。

本田　「モエモエカフェ」のしっと（作品は三二頁〜）さんの家に行ったら資料があったんですよ。

みさ　なるほどです〜。えーと、カレンダーのほかでは、雑誌連載が一冊の本になるかなー？

本田　あとは、これから出るゲーム『楽園の令嬢（アリス）たち』に何もかもすべてを注ぎ込むと。

みさ　お金は注ぎ込みません。労働量だけをたっぷしと（笑）。自分が全部やるの。スクリプトもうちます。

本田　えーっ！

みさ　そういったところの手作業感を大事にしたいんです。大企業的なゲームのつくりかたとはまた違ったところに、今のユーザーさんたちが求め

ているものがあるんじゃないかなって思って。オタク仲間の代表みたいな人たちが一所懸命、死ぬ気でつくったものが見たいんじゃないかなーと。

本田 そうですよねー。

みさ 『ほしのこえ』『月姫』みたいに、少ない人数で、苦しんで産み出した作品へのオベーションが発生する、というのが、けっこう美しいかもって思うのです。

本田 濃ゆーいゲーム、楽しみですよね。

みさ わたしはみんなに見てもらうためにいっぱい苦しみたいと思います。ハードマゾかな!?(笑)。箱根駅伝とか野球の甲子園とかでも、みんな苦しんでいる姿が見たいわけじゃないですかー(笑)。

本田 負けたら終わりーみたいな。これからは、もうアストロ主義?

みさ バンアレン特訓場でばっちり特訓です!(笑)二〇〇六年はこのゲームにすべてを注ぎ込みたいと思います。

(この後、ゲームについてのNG話が延々と続き——)

本田 ゲームでやりたいことってなんですか?

みさ 笑いたい!! ずっと笑ってたいのです。面白いことをやってみたい。今度はガムじゃなくて、うーん、ピータン!? かな。ピータンみたいな複雑な味がするゲームをつくりたいですね(笑)。豪華料理ではないけど、楽しめるみたいなゲーム。

本田 (みさくらさんのゲームのパンフを見ながら)このゲーム、やばそうな雰囲気がありますねー。

みさ ふふふふっ(笑)。

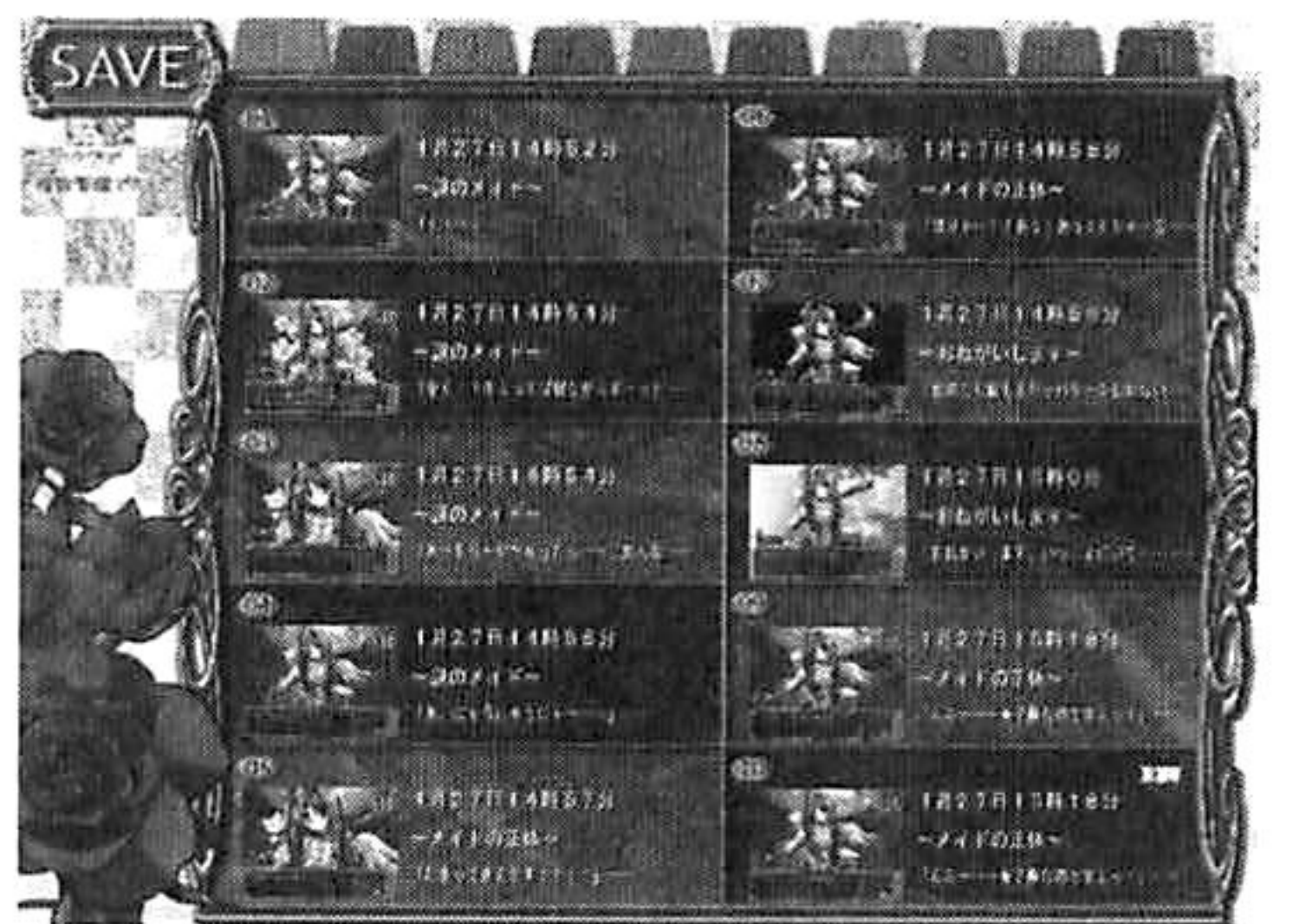
本田 オレ世界みたいな、脳内の似合うゲームですか?

みさ そういう感じでもないんです。少女マンガの延長みたいな感じで。シナリオはいま脳内でひろがってます(笑)。

本田 ところで、アニメ会の国井さんがクマ好きなんですよ。このゲームにも動物が関係するんですか?

みさ ちょっとしますね。クマはヒグマがいいですよね。大熊はマジやばい。

本田 大熊はウイリー・ウィリアムズと戦ったりしますからね。

(——話はさらにイケメン&イケ女のことに)

本田 『夜王』のホストみたいなイケメンについてはどう思いますか?

みさ 女としてはイケメンが怖いですよ! ウソをつきそうです。何をされるかわかりません。

本田 なんか、だまされそうですよね。人は見た目が九割だそうですし……。

みさ それで、男の人が主役のマンガはわからないから、描いたことがないのです。計算高い人に何かをされるのはいやですね。

本田 やさしそうに見えて、やさしくないかも? という恐怖が。

みさ でも、イケ女もいやですね。男の弱いところをついてくるから……。

本田 「イケてない女」でもそういう人いっぱいいますよ。ガクブル。

(——そして、いよいよマンガの話になった)

みさ 昔、本田さんが描いていた「ニャーゴマン」って、今はどうなっているんですか? ウチの社員の人が、タイトルの響きだけで「商業的に行ける! 絶対!」って、言ってました。

本田 そんなもの、よく知ってますね! 昔、突然アニメがつくりたくなって、アニメ専門学校に行ったんです。その後、ポリゴンの「ぴよぴよ」という鬱展開のアニメをつくったんですが、それ以前に描いたものは阪神大震災で、すべて、なくなりましたね。「ニャーゴマン」もありません。本当は僕、マンガ家になりたかったんですよー。でも、どうしても可愛い女の子が描けなくてあきらめました。

みさ へー。「ぴよぴよ」とか、インターネットで見たこととか、ありますよ。

本田 僕は絵だとどうしてもヘンな方向いっちゃうんですよね。だから昔の『ガロ』でしか載せられないようなマンガしか描けなかった。

みさ 本田さんが『ガロ』で描いたら不思議で面白いでしょうねー! そしたらわたしも『ガロ』で描かせてもらえるようにがんばっちゃいます。昔から好きなんですけどね……。今いちばん描かせていただきたいマンガ雑誌は『ガロ』と『近代麻雀』。

本田 えーっ(笑)。

みさ マジでやりたいです。「パチーン!」ってやりたい(笑)。

本田 麻雀やるんですか?

みさ へちょへちょです、ほとんどできないんですけど、竹書房の編集者さんが毎月送ってくださっているのを読んでるうちに麻雀マンガが描きたくなったんです(笑)。

本田 能条純一さんも、昔は麻雀知らないのに『哭きの竜』描いていたそうですよ。

みさ できないこと、自分にないものに憧れちゃうのかなー。でもそれがなんかキラキラしてる感じがします。絵描きの人は特に、絵だけ描いて満足しちゃうのが怖いと思うんですよ。それでわたしは、絵を描いたら、必ずその横に何でもいいから文字を添えるように心がけているんです。そうしないと、恐ろしいことになってしまう。なんかとんでもない災いが降ってくるような気がするんです。

本田 重要な話ですよね。

みさ　だから、どんなことでもいい、この子はこういう子なんだって文字を横に書き足しちゃう。「絵描きは絵で語れ」とか言ってる人がいますけど、ムリムリ！　だって絵だもんー（笑）。

本田　絵だけも寂しいし、字だけもさびしいですね。ラノベは、絵があるからいいんですよね。その後、マンガで読めるかもしれないし。

みさ　以前、マンガの企画で、「こういうのがやりたいのっ」って絵と文字で企画書を出したことがあるんですけど、絵だけで説明してくださいと怒られたことがありましたー。

本田　うーん、なんとかなりませんかねー。お金は出すけど口は出さないみたいな人がいればいいんですけどね。世の中そんなに甘くないんで。僕が株やってお金を稼ぐしかないかなー。

みさ　株も愛ですよ。知らないけど、きっと。本田さん自身が銘柄になって、「萌えファンド」とかつくったらどうですか？　利益が出たら、還元する。チョコレートとかで（笑）。

本田　なんか最後は豊田商事みたいになっちゃたりして。ガクブル。

みさ　本田総研で、萌え株を推奨すれば、みんな幸せになれる!!

本田　で、最後は豊田商事（笑）。ほんと、三次元って怖いですね。金にこだわっちゃうとこんな末路になるって教訓だけが残る。でも……つくりたいものをつくるには、金がかかるんですよね……。ジレンマです。

みさ　わたし、映画つくりたいなー。

本田　それは、おすすめできないですね。実写ですか、アニメですか？

みさ　絶対、実写です。二次元のマンガが実写になった時の、ダメっぷりがいいんです。可逆じゃない、不可逆なんだってことをはっきりさせるの。美少女ものは特に。

本田　なんですか、それー。なんにもいいことじゃないですか！（汗）

みさ　わたしは『めぞん一刻』の実写版を見ながら、「あー、こんなはずじゃないのにー」って思って、ひとつ何かを学びました（笑）。

本田　そんなことを学ばせるために、お金使うんですか！　しかも、いま企画しているゲームなんか、スケール大きくて実写化は不可能じゃないですか？

みさ　実写化不可能っぽい題材ほど、実写にした時の破壊力がアップすると思います!!

本田　確実に資金回収できない話ですよね。

みさ　でも、二次元からの還元みたいな感じなんです。

本田　映画は失敗してますよ。さだまさしとか米米クラブとか、カプコンとか……。

みさ　映画は儲けを狙ってもなかなか大変、きっと胃潰瘍の治療費でトントンみたいな感じ？　でも儲けることを考えなければけっこう楽しいのかなーって。自分の「人生を賭けた最大の自爆ギャグ」!!

本田　いちばん行っちゃいけない道じゃないかと……。

みさ　やだー。わたし、マンガが実写になると必ず見ちゃいますよ。

本田　マンガっぽい実写って必ず傷つくじゃないですかー。『DEAD OR ALIVE　犯罪者』なんて、途中までヤクザ映画なのに最後はかめはめ波で終わりですよー。なに、この映画、みたいな。ヤクザ映画の面子でSFをやってしまった『宇宙からのメッセージ』（監督：深作欣二）も凄いですよ。

みさ　え、観たことない……。

本田　そういうのを観ると「三次元って嫌だなー」と傷つくんですよー。つまり、二次元のほうが圧倒的に真実の世界なんだよってことを、実写映画を観せることで確認すると。

みさ　そう、そうです！（笑）でも最近はCGのおかげで実写版映画がけっこうかっこよくなっちゃったりしてるから、その計画も失敗しちゃうかなー……。

本田　『マトリックス』あたりから、実写なんだけど実写じゃないみたいな映画が多いですよね。『少林サッカー』みたいな。

みさ　『アストロ球団』、まだ観てないんですよー。

本田　金はかかってないけど、本気でつくってるから面白いですよ。

みさ　それ、いいですねー。絶対観よー。

本田　人間ナイアガラがしょぼいらしいですけど。

みさ　どんなマンガもみんな必ず最後に実写化しちゃうっていうのが公平でいいかも！　「もうこれは見せしめだ……」って感じで、なんかよくないですか？

本田　三次元に魂を惹かれた人は、三次元の十字架にかかると。でも、べつにみさくらさんがそれをやらなくてもいいじゃないですかー！

みさ　自分が撮るわけじゃないですよ。それを見るのがいいんです。ぜんぜん夢とかじゃなくって、汚い絵面が欲しいんです（笑）！

本田　まー、それを見れば、みな二度と三次元に未練はなくなると（笑）。

みさ　はい、きっと、いずれ！……実写の世界でまじめにやってる方に対してなんて失礼な話をしていたんだろうとは思いましたが……それにしても、『ファントム』、すごい楽しみですー。どんな本になるのかまったくわからないところが、いいですね。

本田　ぎくっ、期待しててください。

狗島離世

◎ 誌上特別講義 ◎

大塚ひかり先生の キモメン文芸史

カミングアウトするキモメン

美男とブ男の日本文学史ともいうべき『美男の立身、ブ男の逆襲』（文春新書）という本を昨年、出しました。そのご縁で、こうしてキモメン絡みの文芸史をここに書くことになったわけですが、キモメン・イケメンで文芸を切る場合、

1 文芸の担い手としての美男とブ男
2 文芸に描かれた美男とブ男

に二分されます。

けれども写真が残っているわけではないので、作者の美醜を判断するのは難しいものがあります。とはいえ美醜の度合いが激しければ、同時代の日記や物語にそれと描かれていることがあるし、何より面白いことに、醜の度合いが深い場合はしばしば自己申告のケースもあるのです。

たとえば空海は、二十四歳のとき執筆した『三教指帰』に、自分と同じ二十四歳という設定の仏教者を登場させています。この仏教者は空海の自画像的な人物だといわれているのですが、その容貌は実に醜く描写されています。

「黒髪を剃り落とした頭は銅の盆に似ている。艶もない顔はカワラの鍋と見間違えそうだ。容色は憔悴して貧相で、姿形はいやしい。長い脚は骨張って池辺の鷺のようで、縮んだ首は筋ばかりで泥の中の亀に似ている」

「鼻はつぶれ、目は落ちくぼみ、あごは細く、目はすが目」

「ゆがんだ口にはヒゲが無く」

「欠けた唇には歯はまばらで、まるでウサギの唇のようだ」

こうした著作の自画像的な人物の描写が影響しているのか、空海の母は三国一のブスで、空海も色黒の小男だという伝説が、近世には作られています。

また日本最古の仏教説話集、『日本霊異記』の編者である景戒は、著書の最後

のほうで、
「善を積めば、高身長を得られるのに、自分は下級の善功徳すら積まなかったから、身長はたった五尺余りに過ぎない。鄙(とひと)なるかな……ださいなぁ……」
と嘆いてみせます。

はたまた学才により右大臣にまで出世したものの、藤原氏の陰謀で失脚、死後、平安時代最大の怨霊となった菅原道真(すがわらのみちざね)も、漢詩でたびたび自分の老醜を自虐的に描写しています。

〝空床夜々損顔容（独り寝の寝床で夜ごと容貌が損なわれていく）……〟、
〝肥膚争刻鏤（肥えていた皮膚には争うようにシワが刻まれ）……〟、
〝黄萎顔色白霜頭（黄ばみ萎えた顔色に、霜が降りたような白髪頭）……〟、
などなど。

「容貌が損なわれる……」という表現には、もとはイケメンだった可能性もにおいますが、道真には、室町時代になると、小男伝説も作られ、キモメンのイメージが強いようです。

それにしてもイケメンがわざわざ「俺は美男なんだぜ」と自慢しないというのは分かりますが、なぜキモメンは「俺は醜い」とカミングアウトするのでしょう。それは自分がキモメンであることが創作の動機にもなっているという意識がキモメン側にはあるからでしょう。そして作品の内容の傾向に対する一種の「言い訳」としても、己がキモメンであることを読者に訴えたい気持ちがあるからだと私は思います。

「キモメンであることは罪」という時代背景

キモメンをカミングアウトしているのは僧侶とか、仏教志向の強い学者ばかりです。その背景には、平安時代から鎌倉時代にかけての仏教思想の広まりが関わってくると思うのです。

仏は、「三十二相八十種好(さんじゅうにそうはちじゅうしゅごう)（三十二のおおまかな特徴と八十種の細かな特徴）」といわれる完全な美をもつと経典には描かれます。高身長で、肌は滑らか、唇は魅力的、歯は白く整った絶世のイケメンが仏なのです。仏教では美醜は前世の善行や悪業の報いであり、美醜が道徳的な善悪によって序列され、キモメンは、「罪深い存在」として差別されることになります。キモメンであることは、「前世で罪を犯した」という事実が姿形に表れているということでもあったのです。

恋と美の至上主義がエスカレートしていた平安時代、キモメンの職業も限られていました。女の場合、貴族階級ですと他人に顔を見せないからいいものの、人前に顔を見せざるをえない男は、あまり人と交わらなくてすむ職業を選ぶことになります。

瘤(こぶ)取りじいさんが山で薪を取っていたのも、瘤のある顔が見苦しくて人とつきあうことができないためでした（『宇治(うじ)拾遺物語(しゅういものがたり)』）。

キモメンでありながら、貴族社会に交わった村上天皇の甥は、
「顔色は〝露草〟の花を塗ったように青白くて、まぶたは黒く、鼻は派手ばでしく高くて、色が少し赤いのだった。唇は薄く、色も無くて、笑うと歯が見えがちだった」

歩き方もみっともないので、〝青経〟（青常）とあだなされ、貴族たちの笑いものにされていました。気分を害した天皇は、今後、彼を青経と呼ばないように命じますが、結局は、その命令も破られ、うやむやになって、天皇もあきらめてしまうという結末に（『今昔物語集』）。

〝説経の講師は顔よき〟と豪語した清少納言の『枕草子』は、講師が美男であればこそ、じっと見つめられて説経の内容も頭に入るというもの、キモメンだとよそ見をしてしまって身が入らぬので、
〝にくげなるは罪や得らんとおぼゆ〟
と、講師がキモメンだと罰が当たりそうだと言っています。

キモメンであることが罪なのです。

仏教者や学者が懺悔の気持ちで、キモメンぶりをカミングアウトする心情とひとつながりの思想が、ここにはあります。

物語でも『宇津保物語』では、皇子たちが、
〝顔みにくき人には向はじ。憎し〟
と言って、キモメン学者を嫌う様子を、祖父は、
「かわいくていらっしゃる」
と目を細めるという描写もあります。

平安時代の学者というのはだいたいがキモメンと相場が決まっていて、赤染衛門の夫で学者官僚の大江匡衡は、
「背が高過ぎて肩が張っていて、みっともない」
と女房たちにいつもからわれていたといいますし（『今昔物語集』）、『源氏物語』でも、学者は生真面目でださいものだというので、大貴族に小バカにされています。なんとなく今のオタクに似ているところもあるでしょうか。

限られていた キモメンの職業

貴族社会での出世の見込みも少ないキモメンは、学問の道に走ったり、あるいは僧侶になっていたようです。

『愚管抄』を書いた慈円は摂関家の御曹司に生まれながら、鼻がでかくて醜かったので出家したといわれています。

空前の恋と美貌至上主義であった平安時代も終わり、鎌倉時代から南北朝時代に生きた兼好法師の書いた『徒然草』ですら、ある醜い僧侶が鏡を見て自分のキモメンぶりに絶望し、まったく人との交際を断ち、引きこもりになったエピソードを挙げて、
〝ありがたく覚えしか（殊勝に感じた）〟
と言っています。そして、
〝すべて、人に愛楽せられずして衆にまじはるは恥なり。かたちみにくく、心おくれにして出で仕へ、無智にして大才に

交〟わるようなことは、人の与えた恥ではなくて、自分の欲望に引きずられ、自ら身を辱めているのだ、とまで言い放ちます。容姿も醜く、愚鈍という、人に愛されない身で、人づきあいするのは恥だというのです。
　僧侶になってまで、そんなことを言われては、たまったものではないでしょう。
　正妻以外の腹から生まれた貴族の息子など、日陰者がなる僧侶はキモメンの職業の王道で、キモメン差別を助長したかに見える仏教ですが、一面、キモメンに生きる道を与える、キモメン救済の装置ともなっていました。ここに仏教者にキモメンをカミングアウトする向きが多い理由があります。彼らは、醜＝悪業の報いという仏教思想にからめとられつつ、そうした醜をすくい上げる仏教界に生きて、つくづく己を見つめ、考えを深めてきたのです。その思想は常に自分のキモメンさに立脚することにもなり、また、仏教者である彼らがキモメンであると明かすことは、

「懺悔」

にもなっているのです。
　さて、平安末期の『今鏡』には〝隠君子〟という、醍醐天皇のカラダの不自由な皇子の話が出てきますが、

「今（平安末期）なら僧侶になるところだ」

と作者は書いています。隠君子は人里離れた場所に隔離されて生き、万巻の書を読んでいました。それで一流の学者も解らぬことがあると、この隠君子に尋ねれば分からぬことはないという、博覧強記の人として尊敬を受けていました。
　隠君子はキモメンとは少し違いますが、平安時代のキモメンはこのように肩身の狭い存在でしたが、いざというとき役立つ力を貯めていました。『今昔物語集』に描かれるインドの燼杭太子も醜いために隔離されていましたが、国の存亡の危機に、敵を退治して国を救います。
　平安時代から鎌倉時代にかけてのキモメンは差別され、隅に追いやられながらも、知識や武力という力を蓄え、いざというとき発揮したのです。

キモメンの逆襲

　仏教思想が普及した上、女が貴族の栄華のもととなっていた平安時代、キモメンは差別し迫害されますが、平安末期になると、キモメンが知恵や和歌の力で女に認めてもらうという、キモメンの逆襲ともいうべき傾向が生じます。
　鎌倉時代の『古今著聞集』では、〝見めのよにくさげなる〟というキモメンのため、妻にもバカにされ、家に帰っても無視されて、明かりもつけてもらえず、着替えの世話もしてもらえなかった藤原敦兼が、和歌で妻の心を取り戻すという話が語られます。また『雑談集』では、
　〝みめ形もよき児は、人愛しもてなし、酒宴等に出仕し遊て、身くるし。……（中

略）……みめわろく、人にめも見せられぬ、えせ児は、いとまありて、学問すれば、これ得也……〟

見た目の良いイケメン稚児は、人が愛してちやほやし、酒宴等に駆り出され、カラダが疲れる。……（中略）……一方、見た目が悪くて、人が目も合わさぬキモメン稚児は、ヒマがあって学問するので、トクである……と、キモメンの価値を評価しています。なんだか身もふたもない評価の仕方ですが、キモメンの良さがあるという発想すらなかった平安時代と比べると、大きな一歩といえましょう。

やがて戦乱の時代になると、平安時代ではキモメン扱いされていたマッチョ男や大男の価値が高まって、キモメンはバカにされるだけではなく、社会に役立つ存在として描かれるようになります。

キモメンに人権が出てきたのは室町時代で、文芸上では、小男という形でキモメンが浮上します。小男が美女と社会的地位を手に入れて立身出世する『小男の草子』が盛んに描かれたのがこの時代です。

けれどもやがて戦乱が終息し、平和の時代に向かうと、小男は小男のまま幸せになるのではなく、打ち出の小づちで人並み以上の立派な体格となってハッピーエンドとなるというふうに、話は変化します。これが今の『一寸法師』です。

一寸法師は、小男の進化形であって、ここに小男が小男のまま女に愛され、出世する時代は終わり、再びキモメンの地位は下がりますが、儒教道徳の影響もあって、平安時代ほどの迫害を受けることはありません。江戸時代も終わり頃の『東海道中膝栗毛』の弥次さんは色黒デブの息の臭い中年男でありながら、伊勢参りを楽しむというお気楽な設定です。

総じてキモメンの地位は平和な時代、女の強い時代に下がり、戦争の時代、男の強い時代に高まる傾向があるのです。

〜試験に備えてこれだけは押さえておこう〜

◎今回の講義のまとめ◎

1 平安初期〜中期　キモメン迫害の時代

★美醜は前世の善行や悪業の報いという仏教思想の影響で、「キモメン＝罪深い存在」として差別。職業も限定される。ex）『落窪物語』『枕草子』など

★一方で仏教界は、キモメンや暗い出生といった社会の闇を受け入れ、救済も。

★懺悔の気持ちからもキモメン自身がキモメンであることをカミングアウト。出家するキモメンも多く、仏教界もまたキモメンを受け入れた。ex）『日本霊異記』

2 平安末期〜鎌倉時代　キモメン逆襲の時代

★戦乱の世となり、貴族が没落。武士が力をもつと、平安時代ではキモメン視されていた大男、マッチョ男の価値上昇

★知識や武力を蓄えていたキモメンが、知恵や和歌の力で女をはじめとする世間に認められる。ex）『今昔物語集』『古今著聞集』

3 室町時代　キモメン出世の時代

★下剋上の時代の到来とともに、文芸上では、小男という形でキモメンが浮上。田舎者の小男が立身出世する物語が盛んになる。ex）『小男の草子』

4 江戸時代　再びキモメンの地位低下の時代

★戦乱が収束に向かうと、再びキモメンの地位が低下。

★小男が小男のまま幸せになる物語は姿を消し、打ち出の小づちで人並み以上の立派な体格となってハッピーエンドを迎える物語が流布。ex）『一寸法師』

★ただし儒教道徳の普及で、キモメンは、平安時代のような迫害を受けることはなく、それなりの暮らしをエンジョイ。ex）『東海道中膝栗毛』

ラノベ作家を目指すキミのための――

ちょいと……いや、かなりネガティブな話。

あかほりさとる

　編集部からの依頼は、若い人には書けない、かなりネガティブな話を書いてくれとのこと。まあ、ライトノベルズ業界でそういうことを書いて平気なキャラはオイラくらいしかいないかと妙に納得。ただ、こういうのは普段は飲み屋で同業者相手に話していることばかりなので、一般読者が置いてきぼりになるぞと言ったら、ラノベ作家志望者に響けばよいとのことなので、とりあえず引き受けた。少々説教じみてて、あまり愉快な話ではないので、嫌な現実に目を背けていたい人間はこのあたりで読むのをやめるのが吉。まあ、怖いモノ見たさなら最後まで付き合ってもらうが。
　ぶっちゃけなんの話かというと、これはもう寿命の話。ライトノベルズでもなんでもよい。要はデビューして、いったいいつまで「創る側」にいられるかということ。ただし、これは「創ってお金がもらえる」という条件に当てはまる世界だ。毎年、何十人、いや、最近では百人を超える人が新人としてデビューして、三年後には何人、五年後には何人、十年後には何人残っているかということ。前途夢多き若者にそんなこと言うなよ、との向きもあるが、やはり現実はちゃんと直視したほうがいい。
　ネットの発達した今、創作物の世間発信などだれでもできる。その中でお金をとるという行為をどうやって続けていくか。一発屋でよいと思っているのならまだしも、一度この業界に来たらいつまでもいたいと思うのが普通だろう。流行りすたりで左右される人気商売。エンターテインメントのクリエイターは消費される。特にこの情報過多の時代、それは加速されている。これはもう仕方のないことなのだ。
　ではどうしたらいいかというと、ポイントとなるのは次の三つだろう。

「気力」「体力」「金力」。
だいたい作家になる人間なのだから、感受性が高いのはよくわかっている。ま、オイラの場合はどう説明しても例外に入れられてしまうが。感受性が高いということはどういうことかというと、これはもう心が弱い。仕事先の言葉で傷つき、ファンの言葉で傷つき、ネットの言葉で傷つく。そのうちに心が崩壊して、はい、さようなら。
では、他人の言葉に左右されない強靱な心が必要かというと、そう単純ではない。純文学ならいざ知らず、エンターテインメントは動きが早い。編集でもファンでも、的確な意見は取り込まなければ置いていかれる。
じゃあ、どうすればいいのか。大いに傷つき、復活しろと言いたい。それが「気力」だ。心を立て直し、さらにチャレンジする「気力」をぜひ養って欲しい。落ち込んでも、復活しろよ。
次の「体力」というのは、そのまま。先の心の問題と相まって、病気になるヤツが多い多い。別にいいのだ、病気になったって。要は病気になっても仕事ができる体力が欲しいのである。ただ気をつけて欲しいのは、百メートルを速く走れるよりも、ずっと寝ないでいられる体力が必要ということ。
最後の「金力」というのは、暮らしていけるだけの金銭を作品の印税や原稿料でカバーできるかということ。一冊で何百万部も売るような作品を持っているならまだしも、現状業界はなかなかきびしい。昔のファンタジーバブルの頃は、いくらでもお金は入った。毎日、六本木の高級クラブをハシゴしても平気なほど。けど、今や同期のサラリーマンよりももらっているライトノベルズ作家が何人いるか。ちゃんと「稼ぐ」ということを頭に置いておかなければ必ず途中で沈没する。バイトしながら書くのはつらいぞ。
このあたりをおさえておけば、まあデビューから十年はやっていけるだろう。次の壁は「実年齢」だ。読者と年齢が近いうちはよいが、四十を超えたあたりから、きつくなる。果たして、四十を超えたオヤジの書く高校生の恋愛が受け入れられるかどうか。そのあたりは現在実験中。オイラの名前を見かけているうちは実験が成功していると思っとくれ。

z e t t a i a n z e n m i k a s a - s o !

絶対安全ミカサ荘！

神野オキナ

Illustration／左折

夜明け前の立川(たちかわ)の米軍基地は大騒ぎになっていた。

新年を迎えて間もない、恐ろしく寒い朝に急遽(きゅうきょ)、沖縄から飛んできた専門チームが輸送機から機材ごと降ろされ、基地司令に対してろくな挨拶もないままに任務に赴(おもむ)くべく、とりあえずの仮の指揮所である、今は使われていない古い格納庫へと移動していく。

一見すると、新しく配属になった兵士と、医師団らしいのがコンテナを一所懸命運んでいるようにしか見えない。

「いったい、何でまたそんなドジを！」

滑走路に駐機する、あるいは飛び立とうとする各種軍用機の爆音に負けない大声をあげながら、一同の中で唯一の背広姿なイタリア系が、専門チームの長に聞いた。

「状況はわからん！　だが『虎(タイガー)』は突如任地で我々の統制下(コントロール)から離れ、脱走したのは確かだ！」

長身で細身の、手術用のメスのように鋭利な印象のアングロサクソン系が答えた。

彼がこの「特殊チーム」の長である。

「任地、ってどこですか？」

イタリア系の男は、本来の軍人ではない。

ＣＩＡ、アメリカ中央情報局の日本支部員だ。

だから具体的な情報はまだ把握していなかった。

「……それは言えん！　東欧諸国のあるところ、とだけしかな！」

「で、どうやってこの日本に！」
「F-117Aの武装ポッドに隠れてたらしい！」
「へ？」
思わずイタリア男は足を止めた。
ちなみに、F-117とは湾岸戦争で一名を馳せた例の「ステルス攻撃機」だ。その巡航速度は時速九三三キロ。
離陸してしまえば高度一万メートルを越えるところへ上昇する。
気圧処置も、保温措置もしていない部分では、下手をすると氷点下近くまで下がるし、空気はチベットの頂上よりもよりも薄くなる。
日本までの距離、つまりその苦行に耐えねばならない時間を考えれば、想像を絶する話だった。
「本来なら嘉手納基地に直行の予定だったが、百里に緊急着陸した時に、整備員を昏倒させて脱走したというところまではわかっている！」
「いったい、何者なんですか、『虎』ってのは！」
「獣だよ」
急に足を止め、男は振り向いて言った。
「身長一八五センチ、体重八〇キロ。銃とナイフを使い、我々の五倍の筋力と反射神経を持ち、手を触れないで相手を殺す超能力を持った二十代女性の姿をした獣だ」
昇りはじめた朝日を背にした「長」の薄い唇に、冷たい笑みが浮かんでいた。
「楽しい狩りになると思うよ」

☆

昼過ぎにようやくすべてが終わった。
「ありがとうございました！」
頼んであった清掃会社の連中を見送って、少年は「ミカサ荘」と大書された看板の掛かる建物に戻ると、思いっきり長い廊下の窓を開いていった。
差し込む日差しと、吹き込んでくる風が心地よい。
「いいなあ。やっぱり」
半年以上かかったリフォームと今日まで三日かかった引っ越し&掃除のおかげで、築五十年以上のぼろアパートは、今や新築同様の輝きを取り戻している。
「うん、これでよし」
おっとりした、一見しただけでは、男女の区別がつきそうにない顔をした少年は満足そうに微笑むと、頭にかぶったタオルを取り去った。
ジーンズの尻ポケットに突っ込んであった小さなメモ帳を取り出し、最初のページに書かれたいくつかの項目の一つに、紐で結びつけられた小さなボールペンを使って線を引く。
「これでよし、と」
メモ帳に書かれていたすべての項目はこれで終了したことになる。
そのままいくつものドアが並ぶ廊下を歩いて、一番奥の管理人室に入った。
半年前は床も傾き、天井板もいくつか穴が開いていたとは思えない、しっかりしたフローリングの床と、真新しい天井

を備えた二十畳ほどのワンルームの中央には、部屋の面積からするとあまりにこぢんまりとした段ボール箱がいくつか、小さなピラミッドを造っている。
　その一番上にある箱の中から、鍋、フライパンと食器類を取り出し、その下にある箱から炊飯器をひっぱり出すと、少年はにこにこしながらそれらをぴかぴか輝いているシステムキッチンに運び、据えつけたり納めたりした。
　最後に、今日運ばれてきたばかりの冷蔵庫のコンセントをつなぐ。
　ぶぅん、とモーターの音がして、冷蔵庫が稼働しはじめた。
「うんうん」
　もう、我が子を見守る親馬鹿のごとく満面の笑みを浮かべて、少年は何度もうなずいた。
「さて、中身買ってこようっと」
　部屋を出て行こうとし、あわてて戻ってくる。
「忘れてた、これこれ」
　と、数時間前、近くのネットカフェのプリンターで打ち出した文章にサインを入れ、これまた真新しいＦＡＸの送信用トレイに置いた。
「えーと、確か外務省は……」
　再びあのメモ帳を開いて電話番号をプッシュし、送信ボタンを押す。
　紙が無事に呑み込まれはじめたのを見届けて、少年は今度こそ買い物に出かけた。

☆

　痛みと、寒さが彼女を苛(さいな)んでいた。
　つい数時間前まで彼女の能力が全快になっている証明であり、また抜群の保温能力を発揮していた獣毛はすっかり消え去り、基地を逃げ出すときに負った銃創が治りきらずにじくじくといやらしい痛みで彼女の体力を奪う。
　しなやかな長身を覆っているのはダークグレーの、ハーフカップボディスーツそっくりなボディアーマーと、ハイレグビキニにも見えるアンダーアーマー、さらにコンバットブーツという露出過剰な出立(いでた)ちだから、体温の低下を防ぐものは、いま隠されている場所の他には何もない。
　とりあえず、夜明け前に民家の庭先にある茂みに身を隠したものの、そうでなければ敵におびえながら町中をうろつくことになっただろう。
　それよりはマシに違いないと自分を慰め、彼女は傷らだけの身体を丸めながら、引き締まった腰に巻いたベルトのパウチから無針注射器用のアンプルを取り出す。
　本来四本一組のアンプルホルダーには、すでに三つの穴が開いている。
「くそ(shit)……」
　つぶやいて、アンプルホルダーを元に戻した。
　フィリピンの血が入った、エキゾチックなアングロサクソン系の顔立ちは、つらそうにゆがんでいた。
　武器もなく、傷を負って寒い屋外で

追っ手に怯えて隠れている、という事実が彼女の胸に染みこんできた。
「寒い……マム」
　つぶやいて、彼女は目を閉じた。

☆

　ぐつぐつと、鍋が煮えている。
　おたまで煮汁をすくってそっと口に含むと、少年は満足げな笑みを浮かべた。
「よしよし」
　広い部屋の中は夕方までにほとんど荷ほどきは終わっていた。
　空になった段ボール箱は、たたまれて部屋の片隅にまとめられている。
「でも、みんなさっさと帰っちゃうなんてなあ」
　ＦＡＸを見て大慌てで少年のところにやって来た「祖父の知り合い」の部下たちは手続きを終えると、少年の勧めを丁寧に断ってさっさと引き上げてしまった。
　少年には、彼らがこわばった笑顔の下に隠した緊張と警戒を察することはまだできていない。ただ「都会の人たちは遠慮深いんだな」としか思っていなかった。
「この部屋、ちょっと一人じゃ広すぎるんだよなあ」
　さらに言えば、鍋も少々大きめの物を買ってしまって、材料もその鍋からあふれんばかりに詰め込まれている。
「まあ、しばらく鍋三昧も悪くないか」
　きれいな顔立ちに似合わぬ大ざっぱな言葉を口にすると、少年は鍋のふたを戻し、炊飯器からご飯をよそった。
　変なうなり声が聞こえてきたのはそのときだ。
「？」
　アルミサッシの向こう側、裏庭のほうを見ると、彼がここに来る前からこのへんの主らしい太った白猫が、片隅にある茂みに向かって毛を逆立てている。
「どうしたんだろ？」
　こたつの上のガスコンロの火を止め、少年はまだ新しい庭用サンダルをつっかけるようにしてトコトコと庭先に出た。
「どうした〜？」

☆

　自分に向けられた小さな敵意に彼女は目を覚ました。
　目を閉じていたのはわずかに数十分だというのに、すっかり身体が冷えきっている。
　うなり声をあげているのは猫らしかった。
　おそらく、ここはそいつのテリトリー内なのだろう……と同時に傷つき、気力も萎えている自分が「よそ者の大きな猫」程度に思われているのだと気づいて、彼女は苦笑した。
　虎の遺伝子を組み込まれた自分が、猫に絡まれる程度にまで力が衰えている……これが「自由」の結果なのだと。
　いっそ「食って」やろうかと思ったとたん、アルミサッシが開く音と、たまらなく空きっ腹に堪えるいい匂いが庭先に流れ込んでくる。
　あまりに暖かくて美味しそうな煮物の

匂いに、一瞬対応が遅れた。
　気がつくと、茂みの中に見知らぬ顔があった。
「！」
　どうやら自分よりも何歳か若い少年が、首をかしげてこちらを見ている。
「えーと」
　少年がおずおずと口を開いた。
「どうしたんですか？」
「…………」
　さて、どう答えたらいいものかと思っていると、何よりも雄弁に彼女の引き締まった腹筋の奥が答えを出した。
　ぐう。
　思わず二人は顔を見合わせた。
「あの……よかったら、ご飯、一緒に食べませんか？」

☆

　一週間ぶりにシャワーを浴び、頭と身体にバスタオルを巻いて脱衣場に出ると、かごの中に救急箱と男物のTシャツとスラックスが入っていた。
　さっそく傷の手当てをする。
　Tシャツはフリーサイズだったので問題はなかったものの、スラックスは丈が足らないが、ありがたく着けさせてもらうことにした。
　下着がないのは我慢する。
　脱いだボディアーマーは言われたとおり洗濯機に放り込み、ベルトだけを腰に巻く。
「あ、やっぱり下は丈が足りないみたいですね」
　出てきた彼女の姿を見て、少年は申し訳なさそうな顔になった。
「僕、ゆったりしたのが好きなんで、大丈夫かなあって思ったんですが」
「いや……あ、ありがとう」
「いえ。下着とかは後で一緒に買いに行きましょう」
　どこで習ったのか、少年は流暢（りゅうちょう）なクィーンズ・イングリッシュで言いながら、炊飯器から炊き上がった米を、深くて小さな取り皿によそった。
　米の炊き上がる独特の匂いは、もしも彼女が普通の状態であればむしろ不快に感じたかもしれないものだったが、空腹で、温かいシャワーを浴び、食事ができる喜びが、その香りをたまらないものに変えてくれていた。
「えーと、スプーンのほうがいいですよね」
　かいがいしく少年は彼女のために食器類を並べ、食事の準備を整えている。
「んじゃ、この大きな鍋から好きなだけ中身を取って食べてください」
　と別の小皿を示す。
「ＯＫ」
　短く答え、彼女は言われるままに鍋の中で煮えている鶏肉に手を伸ばした。
　薄黒い柑橘（かんきつ）系の香りがする液体に浸して口の中に運ぶ。
　最初こそ熱さが口の中を支配したが、すぐに煮汁と肉汁が入り混じったものが

口いっぱいに染み込み、胃の腑(ふ)に染み渡るように食事の感動がひろがっていく。
「………！」
　思わず何度も噛み締めながら、彼女は目を潤ませた。
　それからは次々と彼女は鍋の中身に手を伸ばした。
　先ほどまで、寒さに凍え、傷口の痛みに耐えていたのがの嘘のように思え、それがたまらなくうれしかった。
　気がつくと、鍋の中身は消え去っていて、煮汁が残るばかりとなっていた。
「じゃ、おじやにしましょうか」
　少年はにっこりと微笑んだ。

☆

「生体ビーコン、ですか？」
　イタリア系のCIAの男は、迷彩服に身を包み、今はトレーラーの中にいた。
　本来なら二〇トンの物資を移動させる広いカーゴ内では、びっしりと精密機器が動く中を数名のオペレーターたちが必死になって作業をつづけている。
　このトレーラーは、CIAが「こういう場合」を想定して海外の拠点に最低でも一つは控えさせている「特殊車両(アクティックツール)」という代物だ。
　もっとも、最初から特定の設備があるわけではなく、ある規格に合致した電子機器を搭載できるように固定用の金具が設置され、内部電源が強化されているという「空っぽの箱」に近い物ではあるが、このほうがあらゆる状況に対応しやすい。
　今はそこに、立川から運ばれた「探査システム」が設置され、稼働していた。
「彼女たちの身体は遺伝子レベルで操作されている。その結果、普通の人間とは違った生体電流のパターンを放つようになっている。これはそれを特定するためのシステムだよ」
　手術用の鋭利なメスを思わせる容貌の「特殊チーム」の長は走行中だというのに、悠然と腕組みをして状況を睥睨(へいげい)しながら説明をつづけた。
「半径二〇キロ以内なら必ず感知する」
「しかし四台しかないんでしょう？」
「隠れることができる場所は限られている。彼女は一九〇センチ近い長身で、能力を発揮するための特殊薬もそろそろ効果が切れるか、予備を使い尽くしているころだ……そうなれば普通の人間のように隠れるしかない」
「で、我々にも捕獲が可能になる、と」
「ただし、舐めてかかっていい相手ではないがね」
　アングロサクソンの男はそう言って酷薄な笑みを浮かべた。
　その会話を打ち切るように、無線連絡が入った。

☆

　どちらともなく、身の上話となった。
「じゃあ、兵隊さんだったんですか？」
　食後のお茶を飲みながら少年が尋ねた。
　こっくん、と彼女はうなずく。
「そう……気がついたら、兵士だったわ」

ぐううう

彼女は両手に持った湯呑みの中をのぞき込むようにしてつづけた。
「記憶が……ないの。気がついたら兵隊になってて、当然のごとく戦いつづけていて……チームを組んだりじゃなくて、一人っきりで。それが当たり前だと思っていたし、疑問にも感じたことはなかった。でも」
「でも？」
「一カ月前、任務先で爆撃にあったの……爆風で思いっきり飛ばされて、頭を打ちつけて、気を失って……目が覚めたそのとき、ふと思ったの『何で私、こんなことしてるんだろう』って。そしたら、周りに見える物すべてがすごくくっきり目に入ってきて……怖くなって、逃げたの」
「…………」
少年は何も言わず、じっと彼女の横顔を見つめる。
「……あなた、私を軍に引き渡す？」
ふと、彼女は少年に問うた。
「え？　何でですか？」
「だって……私、脱走兵だし」
「ああ、そうか。お国じゃ脱走兵は捕まえなくちゃいけないんでしたっけ」
きょとんとした顔を浮かべた少年だったが、すぐに納得したようにうなずいた。
「そんなことするぐらいなら最初から家に入れませんよ」
「…………」
信じられない思いで、彼女は少年を見た。
「どうです？　行く当てがないなら、ここに住みませんか？」
「あ、で、でも私、戦うこと以外何も……」
「僕の商売を手伝って欲しいんです」
「商売（ビジネス）……？」
彼女が首をかしげた……が、一瞬で立ち上がり、厳しい目で周囲を見回す。
腰のパウチからアンプルを取り出し、最後の一本を素早く無針注射器に装填（そうてん）して左の下腕部に押し当て、スイッチを押した。
圧縮空気が洩れるような音とともに、アンプルの中身が血管に流れ込んでくるのがわかる。
「くそ……いつの間に？」
次の瞬間、ドアが粉砕され、窓ガラスが破壊されて武装した男たちが部屋に殺到してきた。
少年を抱えて逃げようとする彼女の前に、なじみの砂漠迷彩服を着けた男たちが割り込み、まだ疲労と怪我から回復しきっていない彼女を壁へ向けて突き飛ばす。
壁に背中を打ちつけ、バウンドしたまま、彼女は無様にその長身を床に倒した。
「？」
きょとんとしている少年の体が、素早く床に押し倒され、その頭頂部に銃口が突きつけられる。
そのときになって、ようやく最初に破壊されたガラスの破片が床に跳ね返った。

コンマ数秒の早業である。
「動くな」
カミソリよりも鋭利な声が少年に銃を突きつけた男の口から洩れた。典型的なアングロサクソンの顔立ちは、手術用のメスを思わせる鋭利さがある。
「ジェイソン大佐………」
つぶやいた彼女に、大佐と呼ばれた特殊チームの長は笑みを向けた。
「やあ『虎』、久しぶりだな」
「私を、虎と呼ぶな！」
対応が遅れたことを悔やみながらも、彼女は相手をにらみつけた。
遅ればせながら、血管を駆けめぐったアンプルの中身が、疲れきった肉体に莫大な活力と生命力を注ぎ込む。ばりばりと獣毛と犬歯が伸び、鼻面がネコ科の野獣そのままに前にせり出してくる。
その姿はまさに中国やインドネシアに伝わる伝説の虎人間そのままだった。
あと数秒早く使っていれば、と思いながらも、この確定した状況をどう打破するべきか、彼女は必死に考えた。
今はとにかく一分一秒でも長くこの状況をつづけさせることだ。
相手の有利と「確定」した状況でも長引けば「揺らぐ」ことを彼女は長年の経験から知っていた。
「君にそれ以外の名前はない。戦闘機にコードネームと番号だけがあるように、兵器である君には識別コード以外はいらない物だからな」
「貴様………」
「君は政府の備品だ、間違えるな……今の君は壊れているだけだ」
「違う！　私は、自分を取り戻しただけだ！」
「いや、間違いだ」
大佐は巌のような断定口調で彼女の反論を封じた。
「君は爆風によって脳にショックを受け、錯乱しているだけに過ぎない……おかしいだろう？　第一に君は遺伝子レベルでヒトではない。虎と人間の融合体などというものが、人類に分類されるはずがない」
「………！」
その言葉が、鋭く彼女……コードネーム「虎」と呼ばれる彼女の心臓を貫いた。
自我を取り戻して以来、密かに恐れていたことを、大佐は的確に言い当てていた。
「さあ、帰って来たまえ……大丈夫『再調整』をすれば再び悩むことはなくなるんだから」
「………」
逡巡が、「虎」の顔に浮かんだ。
「こ、この子は……」
少年のほうを見て言うと、大佐は慈愛に満ちた笑顔で「大丈夫だ。君さえおとなしく投降すれば彼は解放しよう」と請け合う。
その一言で、彼女の逡巡は断ち切られた。
「……わかりました」
そう言って進み出ようとする「虎」に、

周囲を固めていた男たちが後ろ手に手錠をかけ、拘束する。
「えーと、お取り込み中申しわけないんですが」
　それまで黙っていた少年が、見事なクイーンズ・イングリッシュで問いかけた。
「つまり、あなた達はこの人を捕まえに来たんですか？」
　いささか間の抜けた問いに、大佐は妙な顔をして「そうだが」と応えた。
「脱走以外、何か悪いことを？」
「軍の備品を破壊し、数名を病院送りにした……だが、何よりも彼女は軍の備品であり、その行動基準は軍人に対すると同じものを期待、要請されるのだから、軍から脱走した時点で充分に重罪人だよ」
「で、僕の家に土足で上がり込んだことに対して、謝罪はなしですか？」
「それに関しては指揮官である私が謝ろう。大丈夫だ、君がすべてを忘れてくれれば、無事に解放してあげよう」
「えーと、それだけじゃ不服という場合は？」
　大まじめな少年の顔に、大佐は「当人にとってはできのいいジョーク」を聞いたように苦笑を浮かべ、
「我々とやり合ってみるかね？」
　と逆に聞き返した。
　答えは意外なものであった。
「そうします」
　少年が口にした言葉の意味を大佐が理解するよりも早く、部下の背中が彼の視界いっぱいにひろがった。
　恐ろしい、質量を伴った疾風が部屋の中を吹き抜けた。
　かろうじて身をかわした「大佐」は、信じられないものを見た。
　鍛え上げたグリーンベレーの精鋭である彼の部下が、フローリングの床に倒れてぴくりとも動かない。
　全員が白目を剥いていた。
　そして、部屋の片隅には、「野営時のライフルの置き方」と教本にのっているような見事さで、銃口部分を組み合わせて立てかけられたM４ライフルが人数分。立っているのは一人だけ。
　たっぷり一時間分のフィルムをカットしたような、異様な風景だ。
「大丈夫、気を失っているだけです」
　静かな目が、大佐を見た。
　カナダの山奥にある夜明けの湖を思わせるような、澄みきった、冷たくて、何もかもを見透かすような目。
　人間として……というより、生物としての反応が大佐に飛び退きざま腰の銃を抜かせた。
　破壊力のあるコルトの四五口径は初弾を薬室に送り込んだ後、サムセイフティをかけてあるだけだから、すぐに発砲できる。
　腰のホルスターから抜き、親指ではずす位置にある安全装置を解除する瞬間まで、少年はだらりと両手を下げたまま、最初の立ち位置から動いていなかった。
　勝利を確信して「大佐」は引き金を引

いた。
轟音(ごうおん)と閃光(せんこう)が走って相手は倒れる……はずだった。
銃声は、なかった。
いつの間にか、後ろから伸びた細い手が撃鉄(げきてつ)と本体の間に親指を入れていた。これでは銃弾が発射されるわけはない。
「あなたにも､気を失ってもらいますよ」
少年の静かな声は、大佐の背中から聞こえた。

☆

悲鳴をあげて、大佐は跳ね起きた。
そこは、軍病院のベッドの上である。
「いや、おはようございます大佐」
口元に微苦笑を浮かべて、やや揶揄(やゆ)するような口調で、ベッドサイドに控えていたイタリア系のCIA職員は挨拶した。
「ここは……」
「立川の基地内にある軍病院ですよ。あなたは三時間ほど寝ていたんです」
「私の部下たちは？」
「全員無事ですよ、今は目を覚まして精密検査に行ってます」
「そうか……では部隊の再編願いを出さねば……一個師団は必要だ」
思わずシーツを握りしめる大佐に、CIAの男は気の毒そうに告げた。
「あー､そうそう『虎(タイガー)』捕獲作戦ですが、中止になりましたよ」
「な、何だと？」
「今から一時間前にワシントン(D.C.)から連絡がありまして。NORADも何もかも、すべて了承ずみだそうです」
「何だと？　彼女を放置するのか？」
「放置じゃありませんよ」
今にも自分の襟首をつかみそうな相手から慎重に距離を取りつつ、CIA職員はつづけた。
「アメリカ合衆国政府は、彼女の所有権を放棄したんです」
「どういうことだ!?　遺伝子改良兵(ホット・ジーン)は国家財産だぞ！　いったい一人につき何億ドルかかっていると……」
「あの少年を相手にすると、それ以上の被害が出るから、ですよ」
「……何だと？」
さすがに大佐は、CIA職員の一言に冷静さを取り戻した。
「大佐、あなたも古いヒトだから聞いたことがあるんじゃないですか……MIS、『絶対安全圏(モスト・インポータント・セイフゾーン)』という言葉を」
大佐はしばらく記憶の襞をさぐるような顔になったが、
「聞いたことは……いや、だがそれはおとぎ話だろう？　イギリス情報部の『村(ザ・クーラー)』同様の、冷戦時代が生んだ噂だ」
そこへ行けば、いかなる情報組織、いかなる裏稼業の人間も安全に生活ができる「この世の果て」。
その話はそれこそ枚挙にいとまのない、この手の仕事に就く男たちには慣れっこのファンタジーといえた。
多くの者があり得ないと断じ､また「追いつめられた」者たちは最後のよすがとしてこの幻にすがりその地を目指して無

惨な最後を遂げている。
「実は、違うんです……MISは実在するんですよ。ただ、今から四十年前に活動を停止しただけで」
「あのアパートがそうだと言うのか？」
「ええ。五十年前まで、あそこは確かにMISだったんです。そして……あの少年はその『管理人』なんですよ」
「………………」
「あの体術もそうですが、彼らには経済力もコネクションもある。手出しをすれば我が国だって勝っても無事ではすまない」
「戦略的撤退というわけか」
苦々しげに、大佐はつぶやいた。
「まったく、なんて時代だ」

☆

「……さて、片づいたし、寝ましょうか」
夜明け近くまでかかって、散らかった部屋は何とか片づいた。
ガラスの破片はきれいに取り去られ、踏み荒らされた部分は丁寧に雑巾がかけられている。
「あ、あの……」
あまりに唐突で、想像だにしなかった「もの凄い」光景を見て、そのまま流されるように掃除を手伝った「虎」はおずおずと口を開いた。
「大丈夫、このアパートはまだ空き家なんで、今夜はその部屋を割り当てますよ、明日にはガラス屋さんも来ますから」
「ち、違うの」
「虎」は質問した。
思ったよりもあどけない表情を浮かべ
「い、いいの？　私なんかをかくまって」
「ああ、大丈夫ですよ、そのことならもう話は通ってますから」
「でも……」
「その代わり、僕の仕事を手伝ってくださいね」
「え、ええ」
こくん、と彼女はうなずいた。
「このアパートにヒトを入れていかなくちゃいけないんです。そのためには今日みたいなことがあるんで、ぜひサポートをお願いします」
「は、はいっ」
たとえ世界中を相手に回すと少年が言ったとしても、彼女は従うつもりだった。彼は実際につい数時間前、彼女のためにアメリカ合衆国を向こうに回したのだから。
「じゃあ……その前にあなたに名前をつけないといけませんね」
少年は流しで手を洗いながら考え込む。
「『虎』は女性の名前としては不適切だと思いますし」
そうだ、と少年は手を打った。
「こんな名前はどうでしょう………」
それがたとえ、どんなにひどい名前でも、「虎」は自分の名前とする覚悟を決めていた。

ボクが12歳
妹が9歳の
とき……

ボクらを含め
大勢の
ニンゲンが
ここに連れて
来られた

出口無しのここは
どうやら超弩級に
デカいビルの中……

無限に続く中野ブロードウェイの
ワンフロア（閉店後）といえば
イメージしやすいか……

そして……

ペタ
ペタ
ペタ

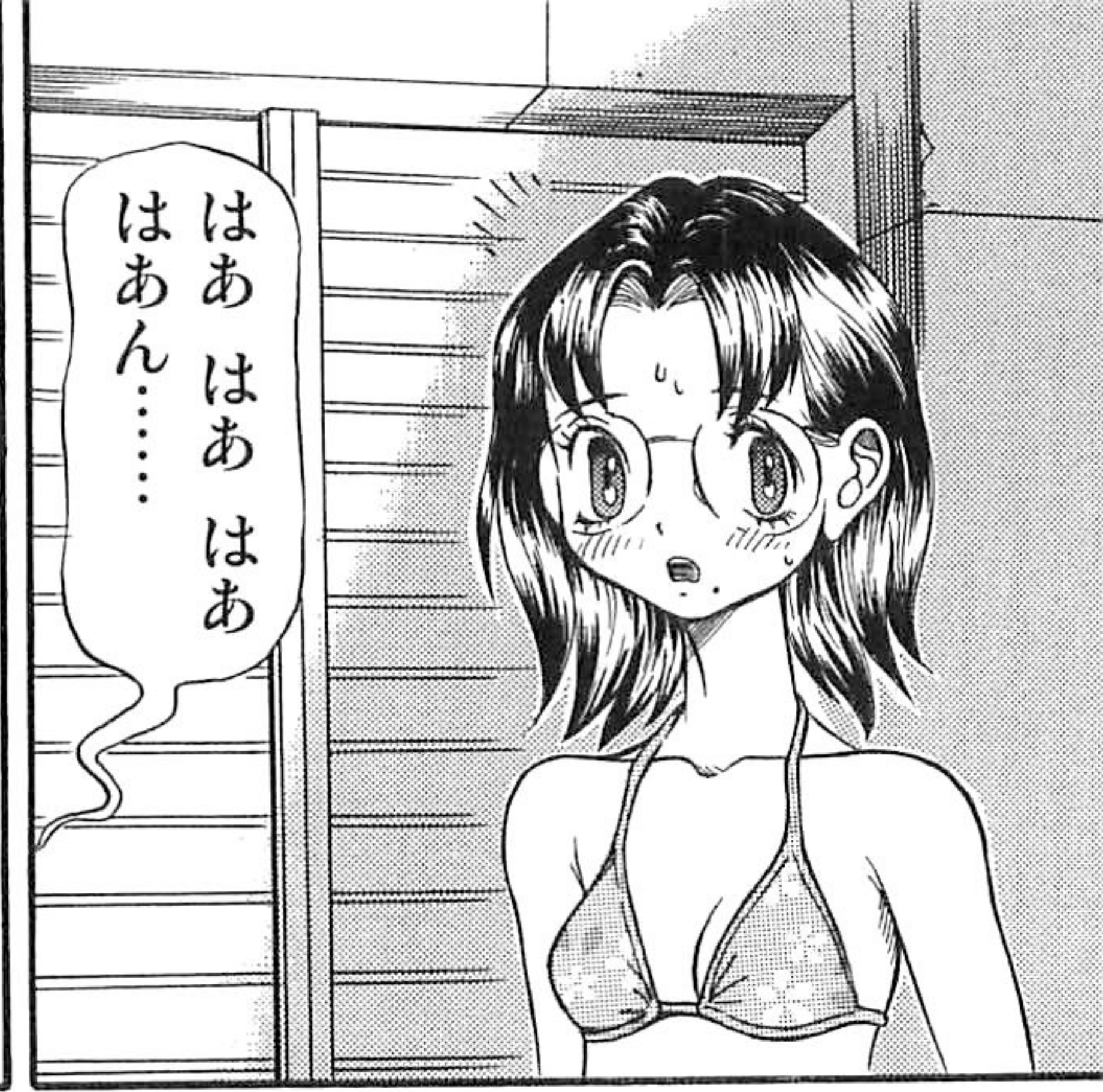
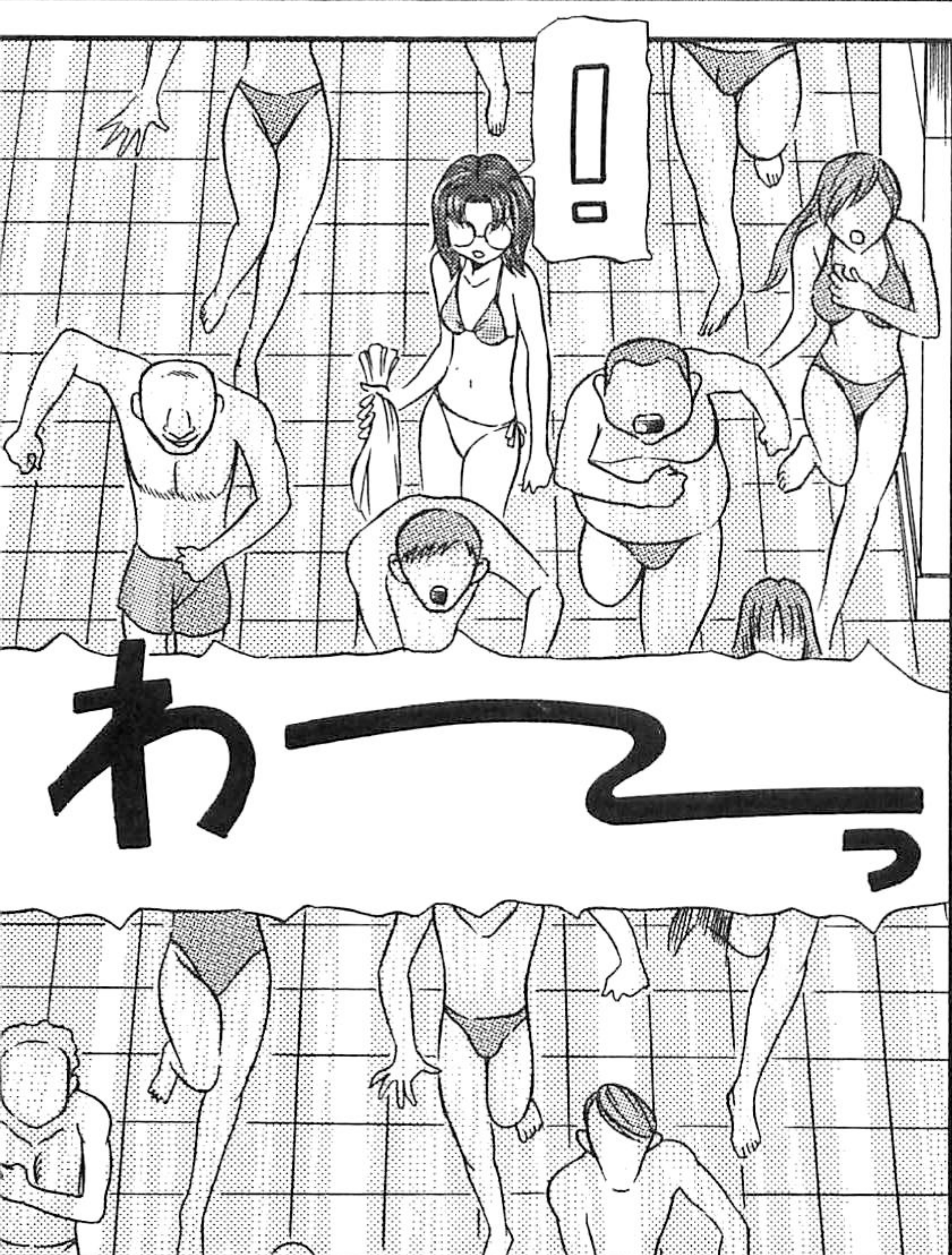
それから数年が
経ち……

はぁ はぁ はぁ
はぁん……
……
あ、あっぁんんっ
ズズズズズ…
はぁ
はぁ
はぁぁ
見つけたっ!!

みるくぱん情話

サガノヘルマー

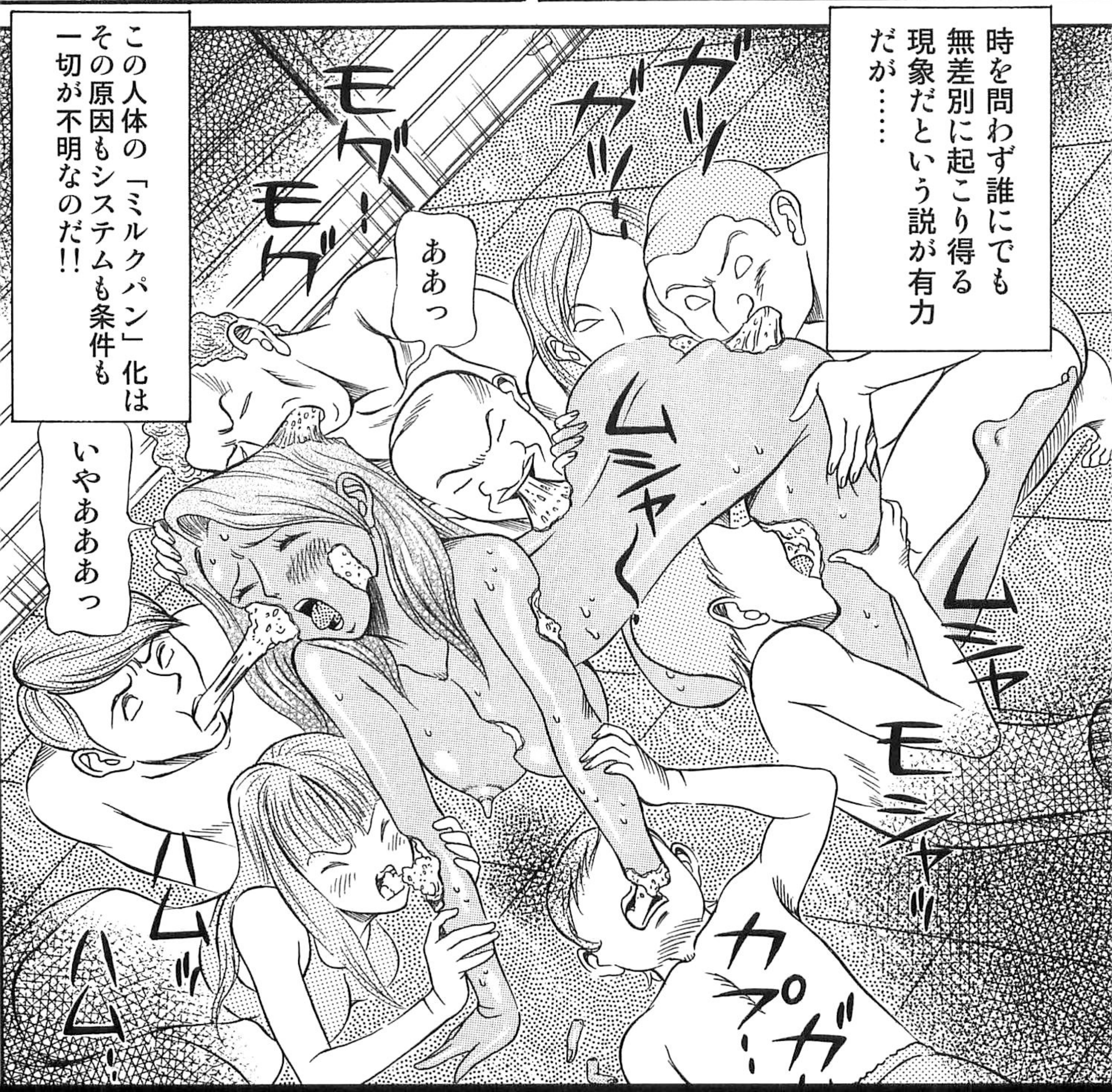
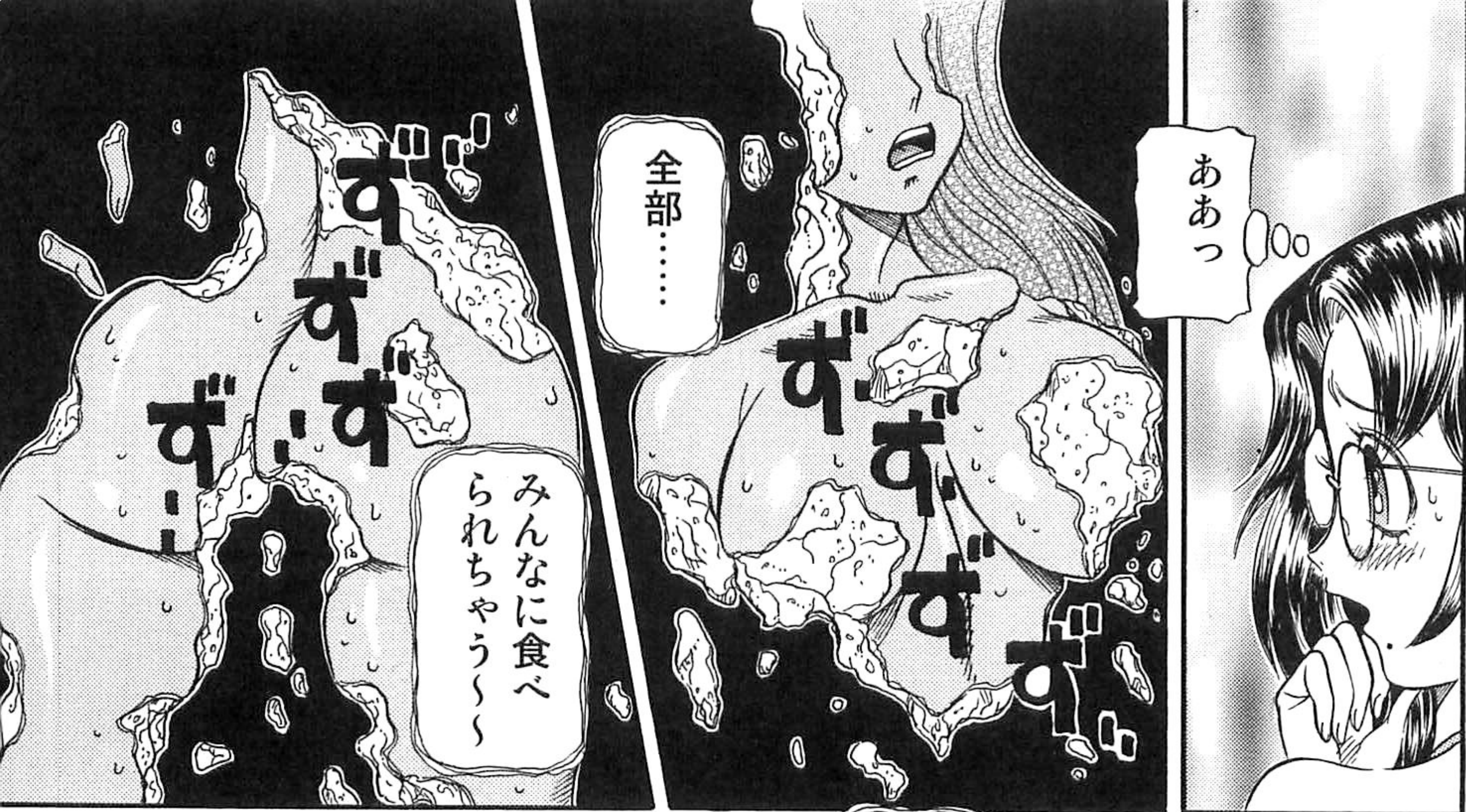
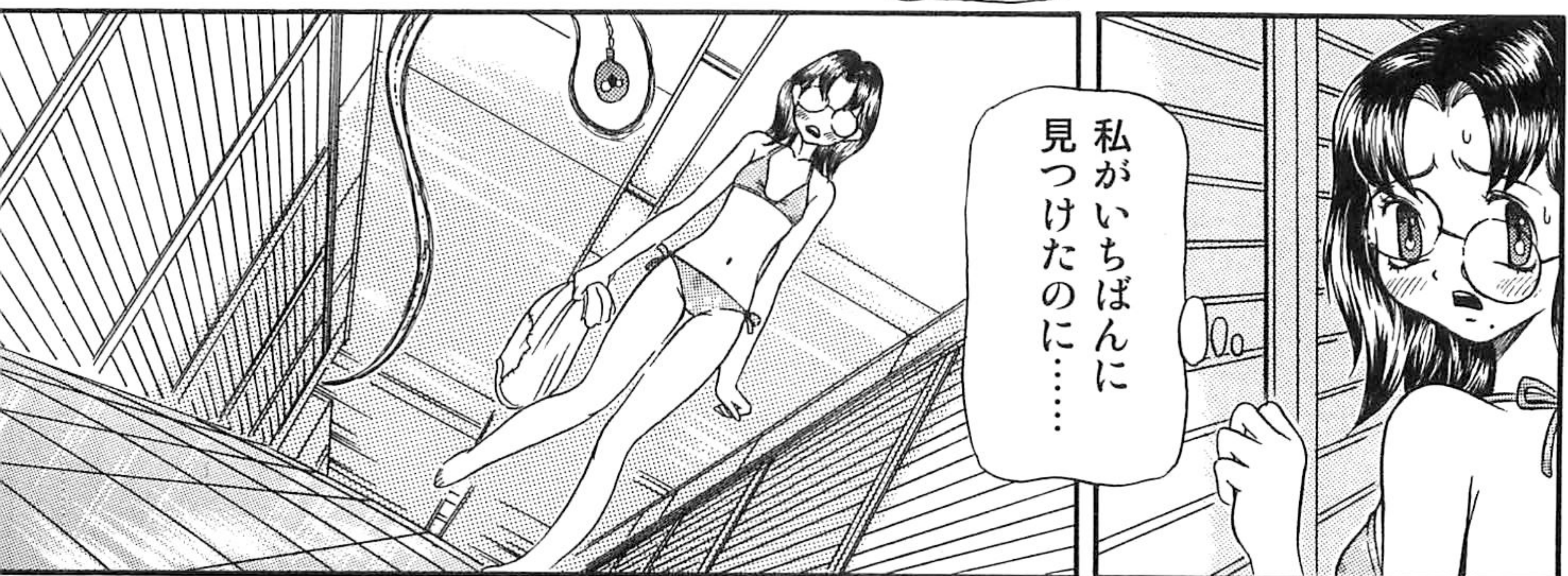
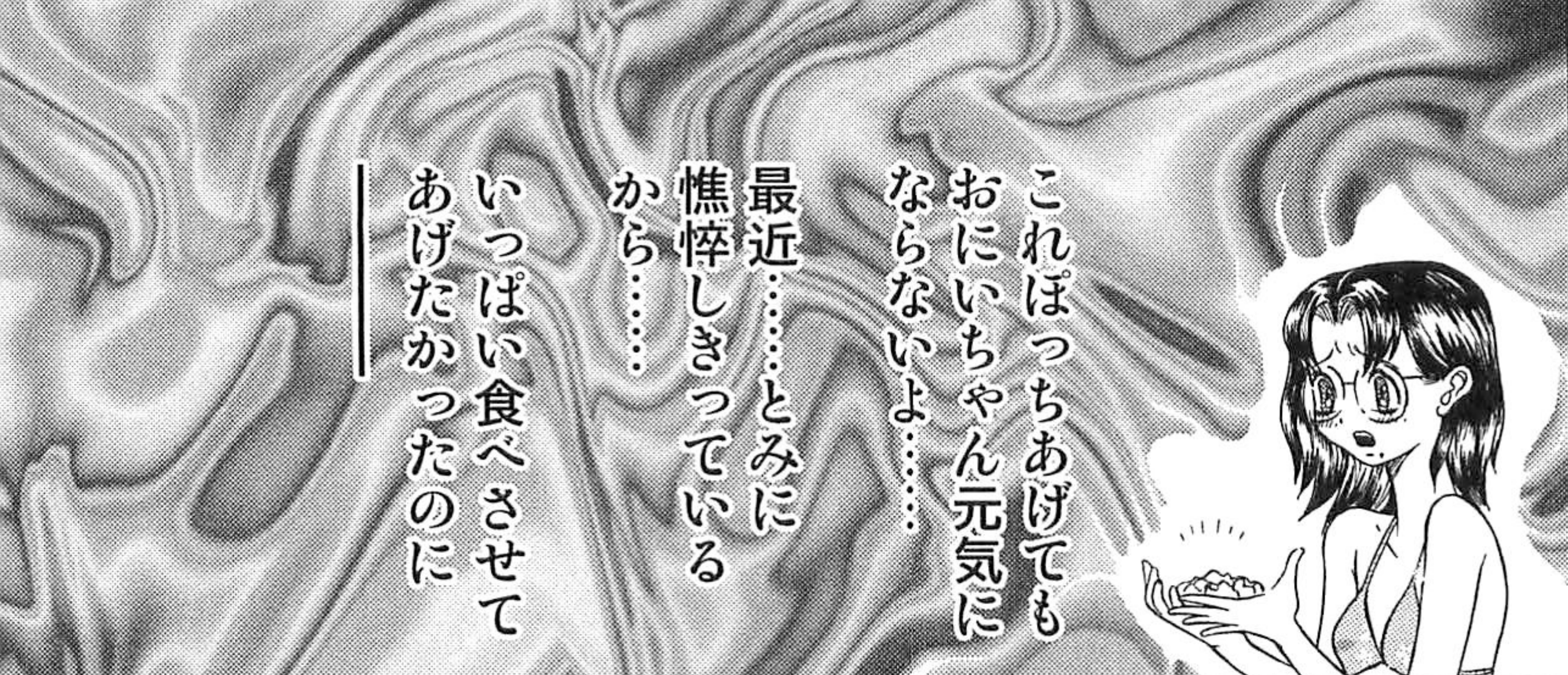
説明しよう……
あ……
あんっ
いっ
あっ
快感にヨガっているかのようなこの女のカラダは
あっ あああぁっ

今まさに変質に見舞われて……
あっ
ピシッ
「ミルクパン」へと熟成しつつあるのだ……
ちなみに「ここ」での食べ物はこーしてできる「ミルクパン」のみである
ぞろっ
!?
!
わーっ

あっ
ドンッ
ガシャ～ン
ああっ

時を問わず誰にでも無差別に起こり得る現象だという説が有力だが……

この人体の「ミルクパン」化はその原因もシステムも条件も一切が不明なのだ!!

ガツ
ガツ
ああっ
モグ
モグ
ムシャ
ムシャ
モシャ
いやあああっ
ガブ
カプ
ハム
ハム

ああっ
全部……
ずずず
みんなに食べられちゃう〜〜
ずずず
私のなのにい……
私がいちばんに見つけたのに……
あーん、やっぱし こんなクズみたいのしか残ってない〜〜
くすん。

これぽっちあげても
おにいちゃん元気に
ならないよ……

最近……とみに
憔悴しきっている
から……

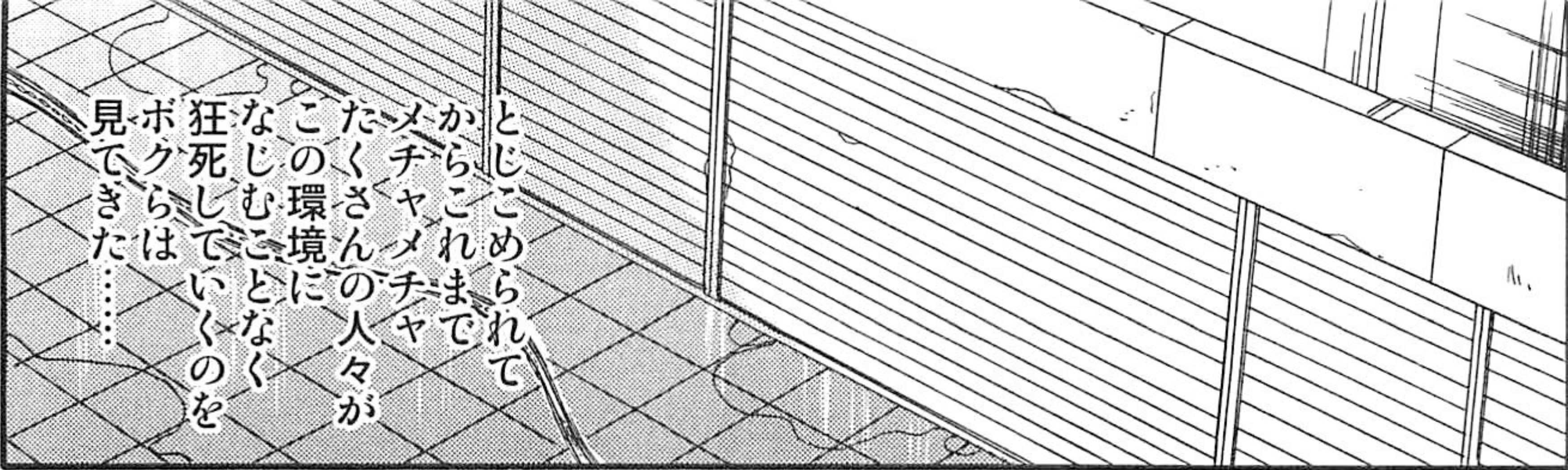
いっぱい食べさせて
あげたかったのに
——

あげよーか？

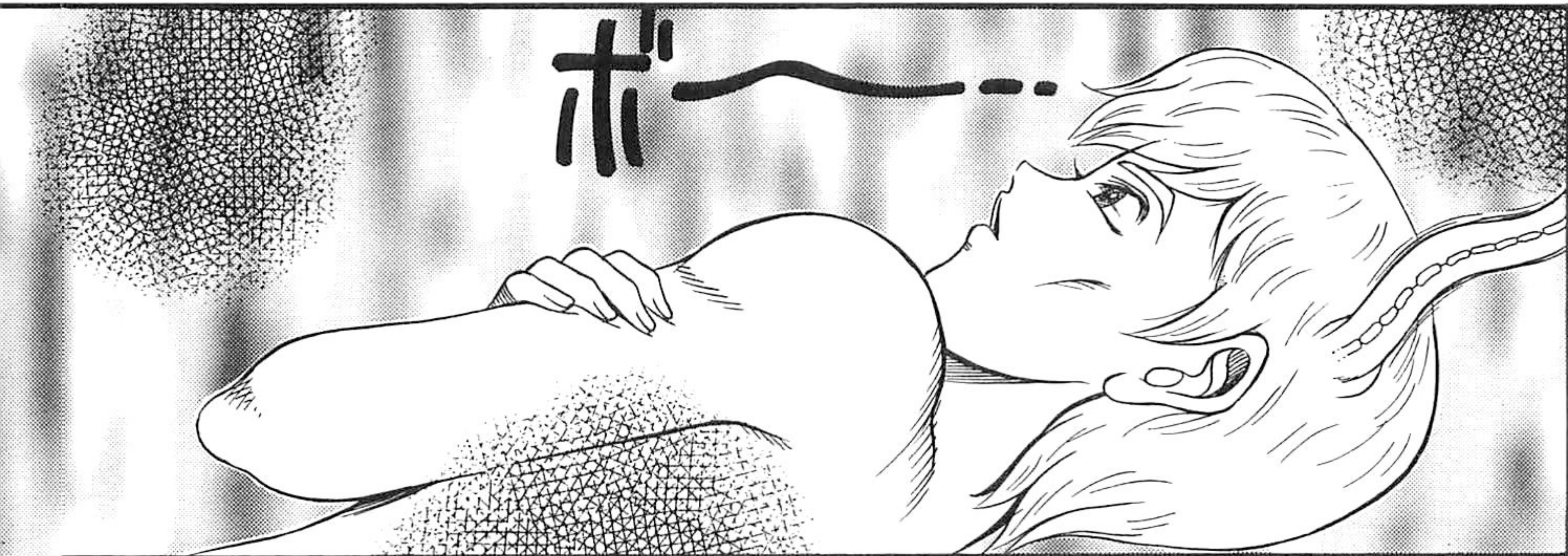
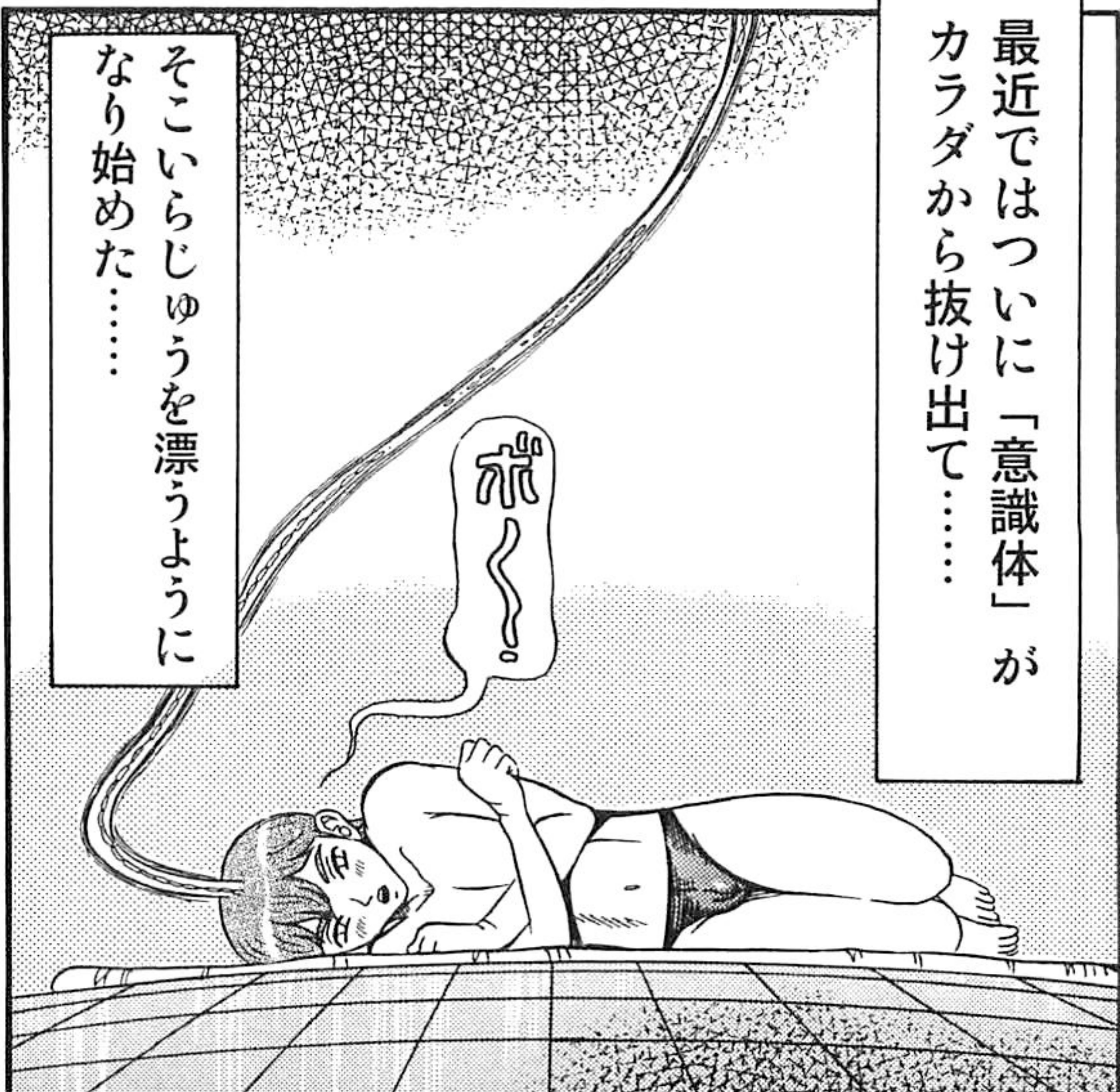
はっ。

ほら

フトモモんとこ
ミがつまってて
ウマイよ———ん♡

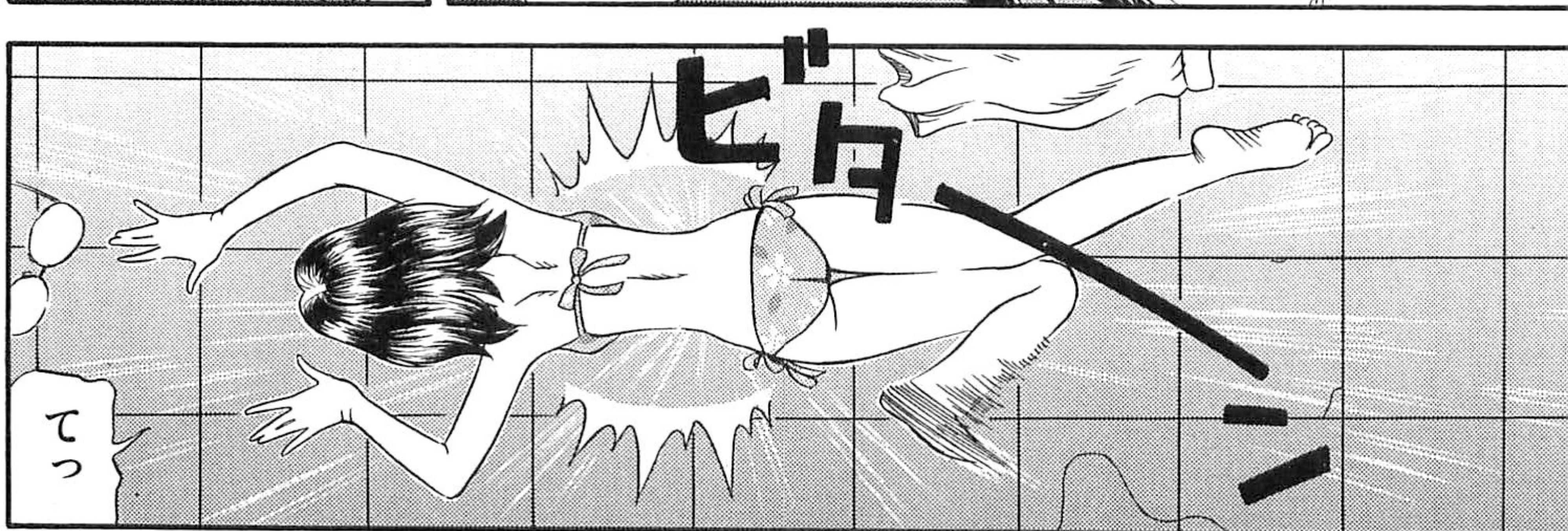
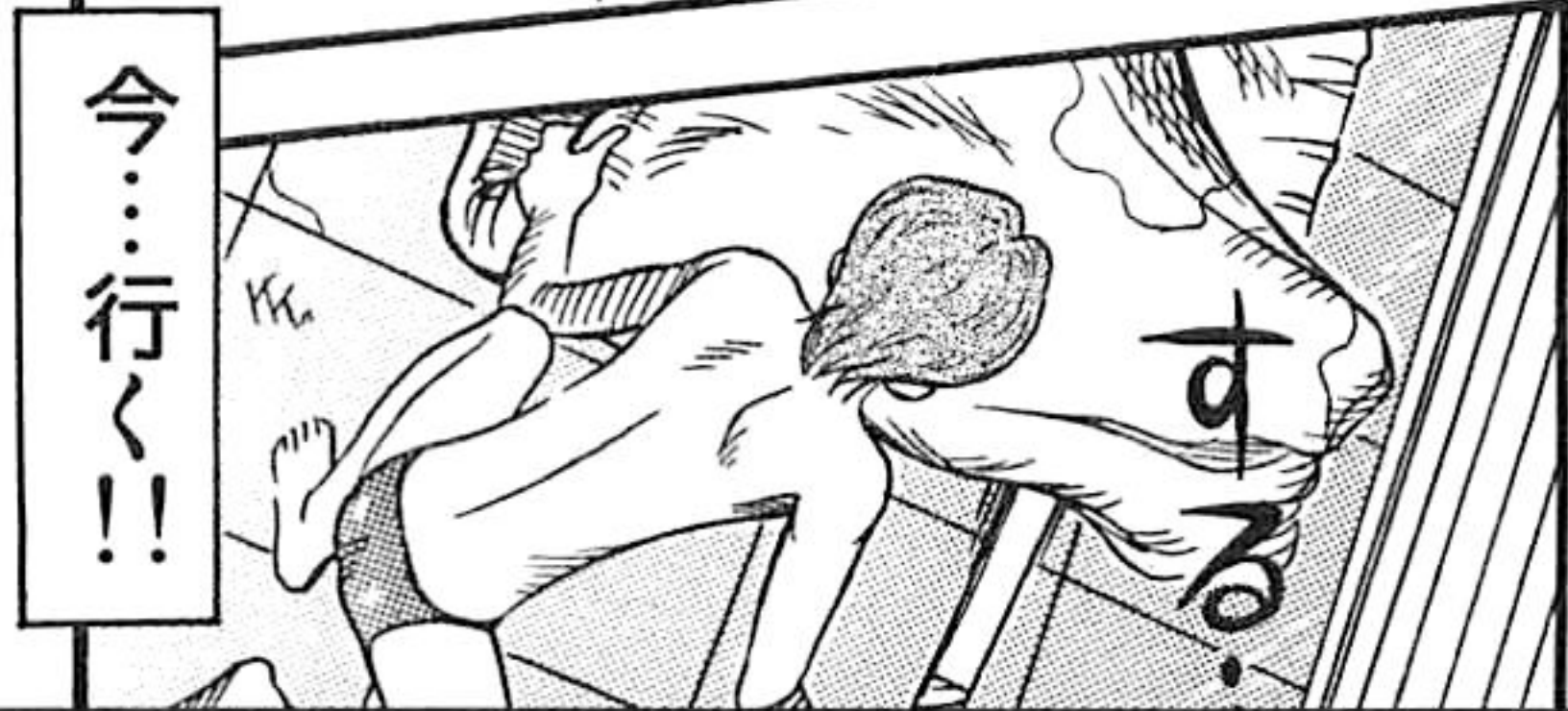
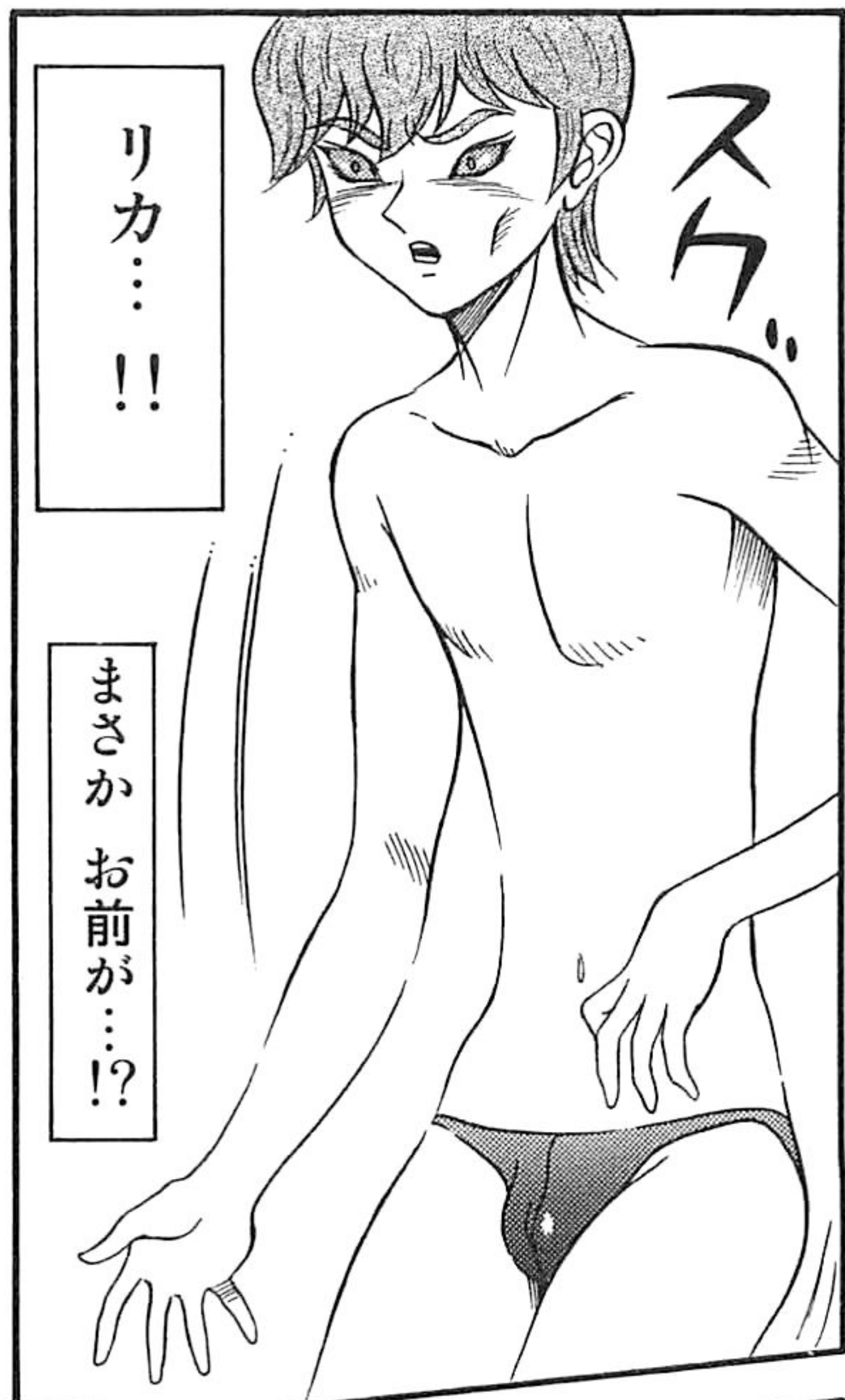
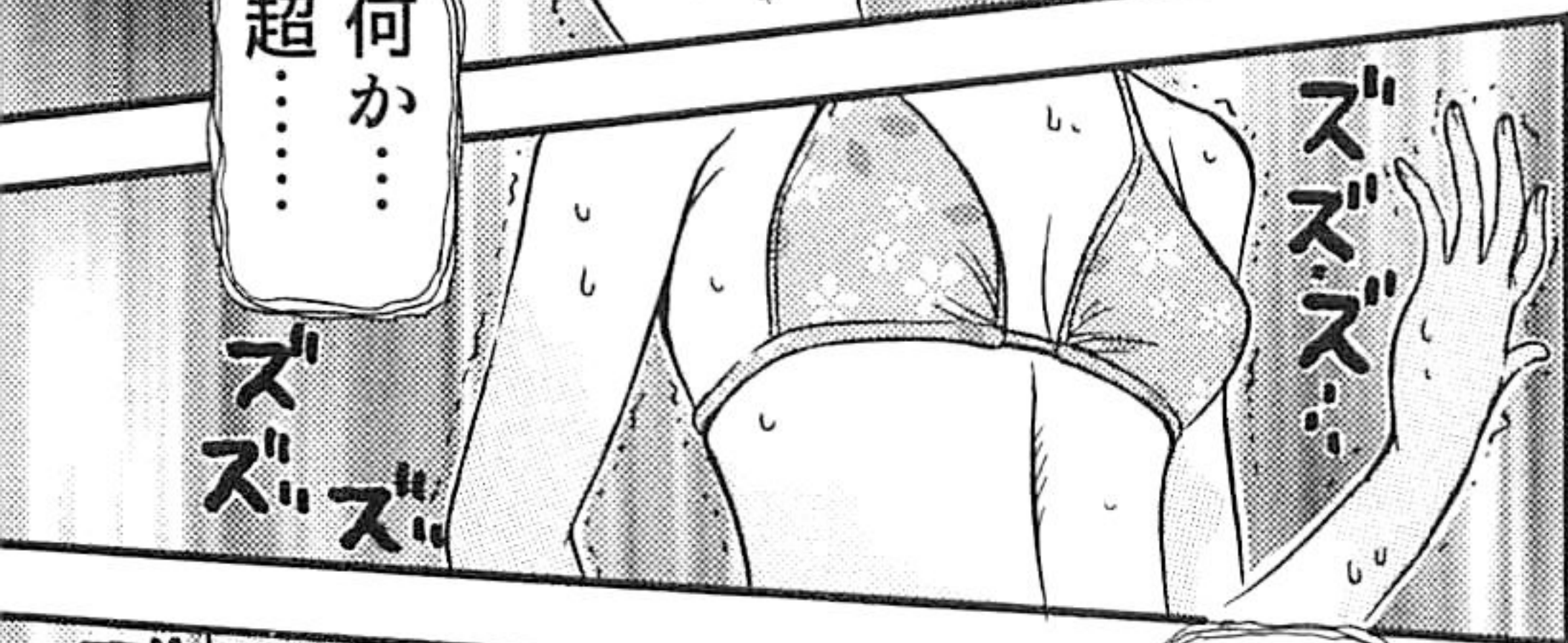
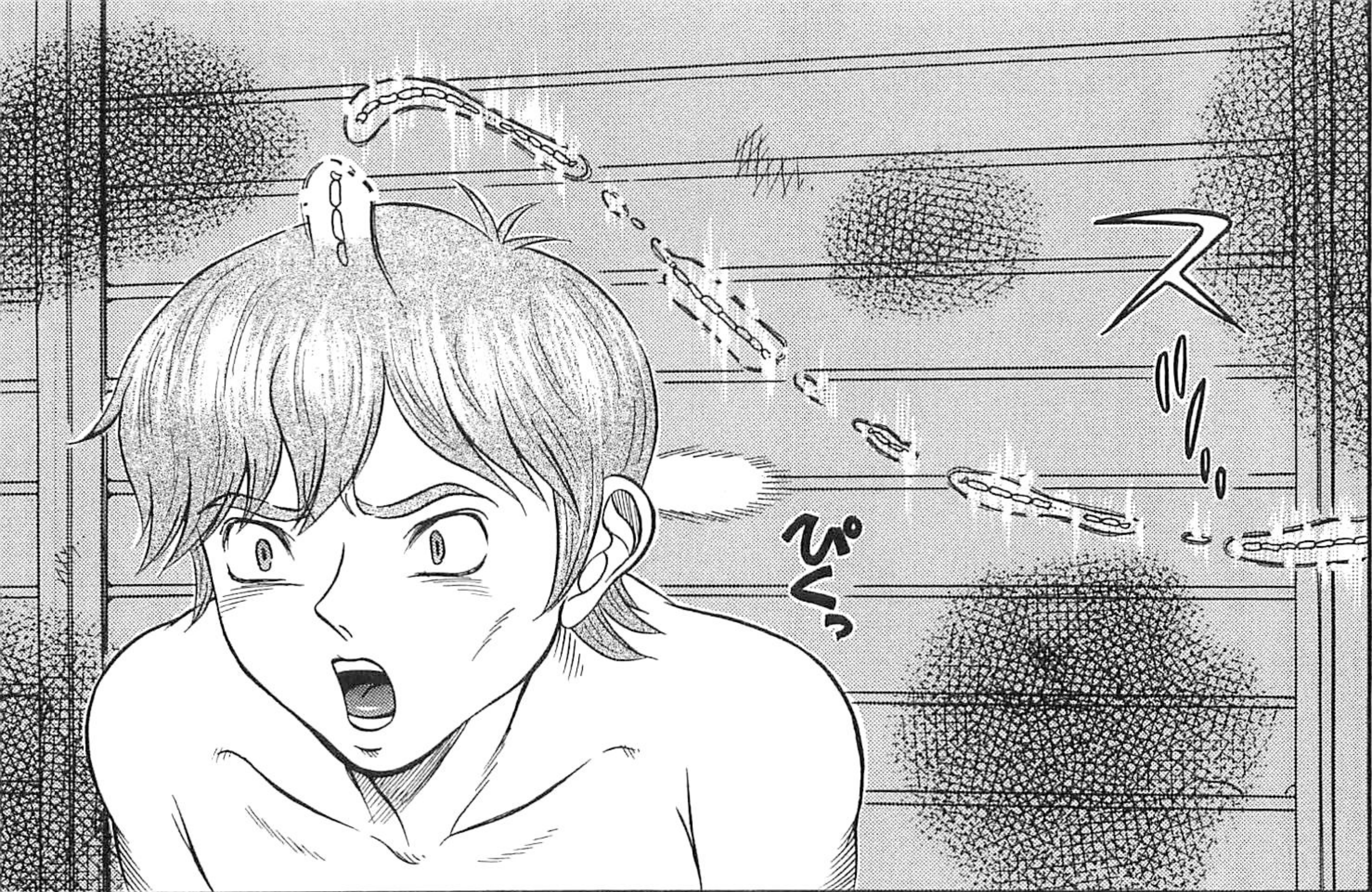
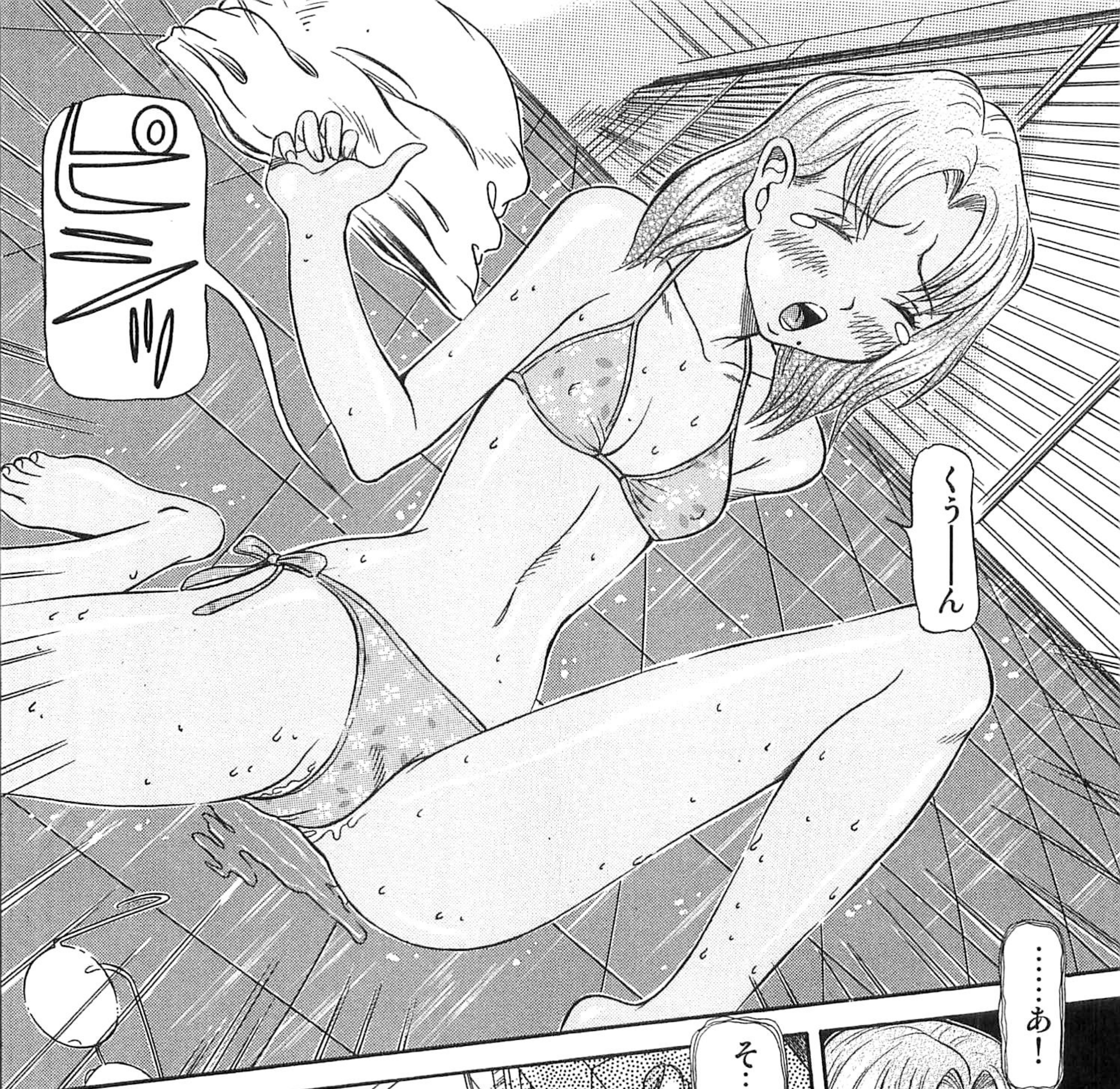
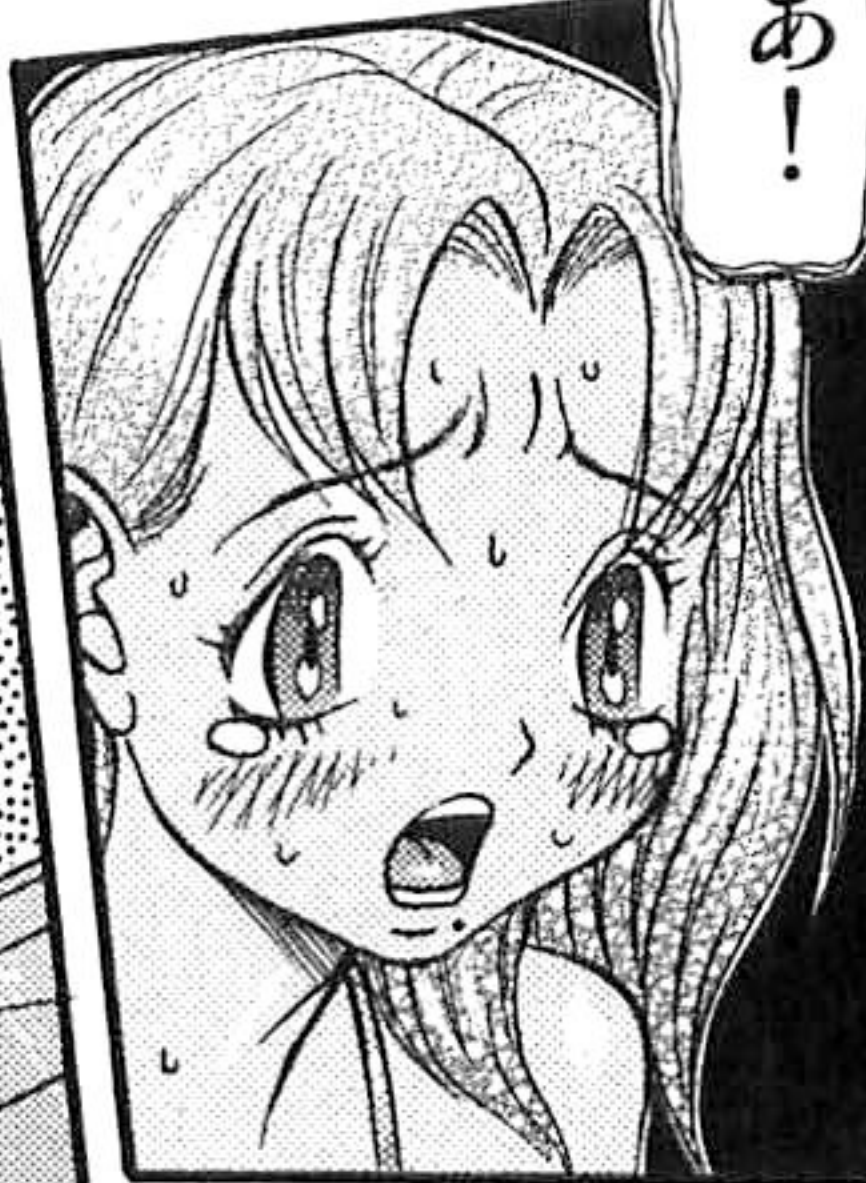
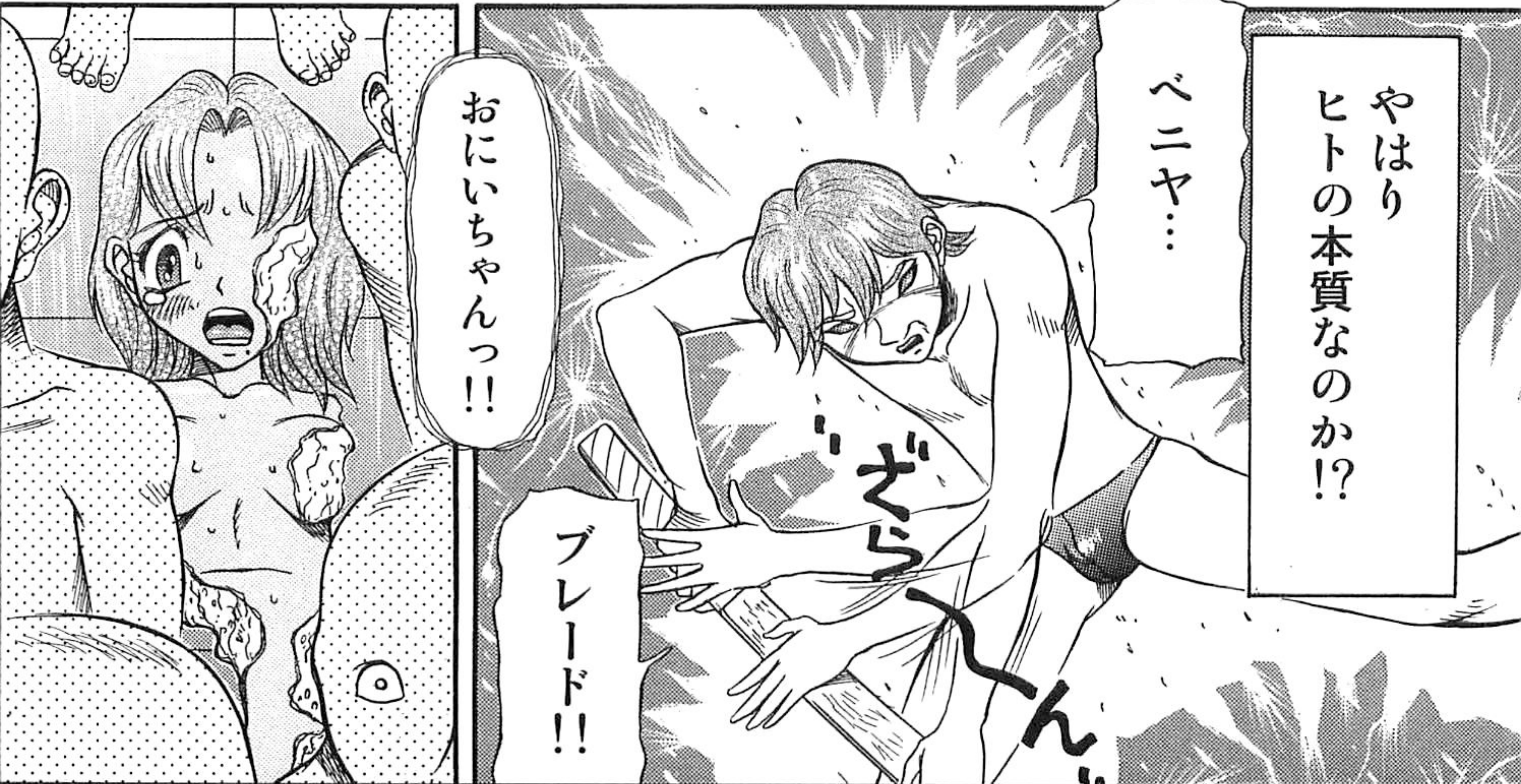
そのかわし おじさんの
ゆーこと 何でも
聞いてくれるぅ？

とじこめられて
からこれまで
メチャメチャ
たくさんの人々が
この環境に
なじむことなく
狂死していくのを
ボクらは
見てきた……

ボクも半年
ほど前から
重篤な
病状になり…
一人では何も
できない…

ボ〜〜…

最近ではついに「意識体」が
カラダから抜け出て……

そこいらじゅうを漂うように
なり始めた……

ボ〜〜！

ドクター これじゃまるで
「有線サイコミュ」です……

ああ…
見える…
見えるよ……
はあ
はあ
ん…
ボクの大好きなリカ……
んん…
愛する妹……
リカちゃんていうの？
じょうずだねえ～～？
ふ～…
ふ～…
ふ～…
かなり経験が豊富～～？
すべては病気のボクのため…
「ミルクパン」を手に入れるため…
ゴメンよ……リカ…
兄ちゃんが…治ったら……
2人でもっといい処へ楽しい世界へ……

ん～～～～っ
ふう～～～っ
どさ
はい!!約束の
やったよ～おにいちゃん!!
これだけ食べさせてあげれば……
おにいちゃん絶対……メチャメチャ元気になれるよねっ!!

久しぶりに…
あたしと…
エッチとかしたくなっちゃうかも～～～～～♡
あっ
つるっ
ビターン
てっ
ズズズ
ズズズ
あれ？
右脚が…
動かない…!?
ゴゴゴ
ゴゴゴ

ズッ
ぴくっ
スッ
リカ…!!
まさか お前が…!?
今…行く!!
するっ
あーん 何かヘンだよ!
ズズズズズ
何か… 超……
ズズズ…
キモチいいの…
ズズ… ズ…
まるで…
ズズ あっ ズ… あっ
×××を おにいちゃん に舐められている みたい……

くぅーーん

ピシッッ

……あ!

そ…そうか…

今度は…あたしの
番なんだね……

わーーーっ

ガブ

カプ

ガリ

なぜ……

ボクらはここに連れて来られたのか……

これは不徳なボクらに対する…

厳罰なのか それとも祝福なのか……!!

ムシャ

モシャ

クチャ

モグ

「ミルクパン」に変質する者たちの魂は……
ダダダダダ
清らかなのか穢れているのか!!
ガツガツ
ガツ
ムシャ
バリポリ
モリモリ
パク
ムシャムシャ
うおおおおおお
共食いこそが…
!?
やはりヒトの本質なのか!?
ベニヤ…
ずら〜ん
ブレード!!
おにいちゃんっ!!

世界がいかに
変わろうとも……

きしゃく

ヒトが棲む限り
そこは地獄なのか
……!!

ぎゃっ

ぐえっ

すべて……

ぐはっ

あぐっ

すべて……

あだだっ

ひー
トゲだらけにっ

あたたたたたっ
あだだーっ

ガルルル

はぁ

す…

はぁ

はぁ

すべて!!

あ…

おにいちゃん…病気
治ったんだね…
よかったねえ…

リカ……

ポロ・
ポロ

すべては「何者か(カミ)」の
気紛れなのか!

それとも…

悪意に満ちた
「趣味」なのか!!

この廊下を行けば…
ずっとずっと歩けば…
妹が元通りになり…

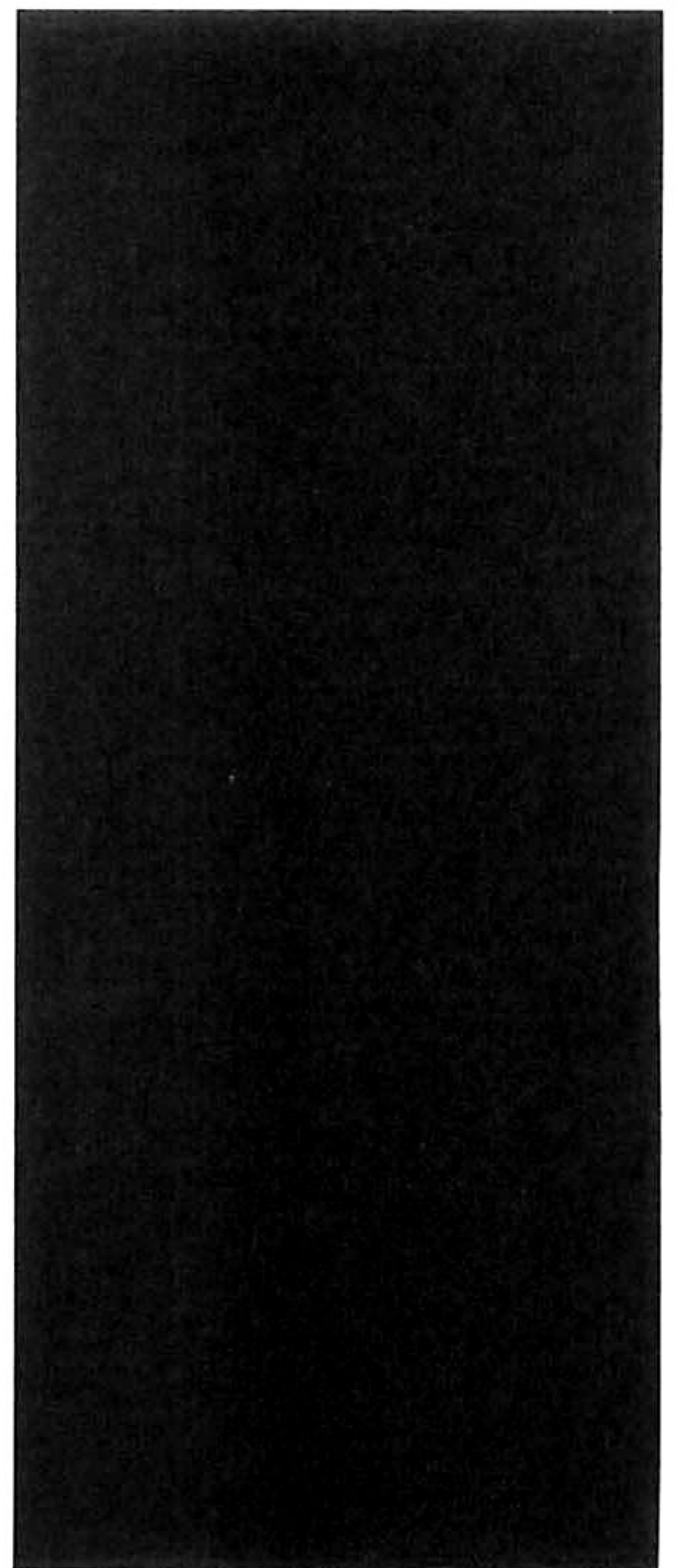
ボクが立派な
兄らしい兄になれる
……そんな「処(ところ)」に辿り着ける
のか…

合掌

END

マルチプル・ラブ

砂浦俊一
羽仁倉雲／Illustration

1

「その頃、まだ小学生だったわたしが最初に疑問に思ったのは、自分の時間の感覚がおかしくなっていることだ。ある日曜の朝、わたしが起きると外はまだ薄暗く時計の針は五時を指していた。すっかり目の覚めていたわたしはカーテンを開けたのだけど、そこで初めて太陽が東の空から昇ろうとするのではなくて、西の空に沈もうとしていることに気づいた。時刻は朝ではなく夕方の五時だった。前の晩は九時にはベッドに入っていたので、幾らなんでも寝すぎだと自分でも思った。ただ不思議なのは、着ているのがパジャマではなく普段着だったことだ。

この日からわたしの中で時間の感覚がおかしくなっていった。月曜の夜に寝て、起きた時には水曜の昼で自分は小学校で給食を食べていたり、授業中に少し眠ってしまい気づいた時にはランドセルを背負って家の前に立っていたりした。

自分は何か得体の知れない、恐ろしい病気にかかってしまったのかと思った。でもパパとママに何て説明すれば良いのか、子供心に困ってしまった。ただ寝ぼけているだけと言われたら、そんな気もしたし、病気よりもそっちのほうが自分でも良い気がした。病気と認めてしまうのはやっぱり怖かった。パパとママも普段通りだったので、自分はちょっと寝ぼけているだけなんだと思いたかった。でも、ある時ママが『そういえば、セロリが食べれるようになったのね』と言うのが疑問だった。わた

しはセロリの味と臭いが嫌いで、今までどうしても食べることができなかったからだ。
　事件が起きたのはその矢先のこと。
　ある日の一時間目の授業中、わたしは急に眠くなってしまった。それも体育の時間で、これから跳び箱を跳ぼうという時に。次に目を覚ました時わたしは自分の家にいた。何故か食卓のテーブルが倒れていて、食べ物とお皿が床に散乱していた。ママは部屋の隅で震えていて、わたしはパパにきつく抱きしめられていた。一体、何が、どうなってしまったのか分からなかった。『あの事故のせいなの』とママがヒステリックに叫んでいた。でも、わたしには何の事故なのか分からなかった。そんな記憶、自分には無かったのだから。だけど自分は寝ぼけているのではなくて、やっぱり何か不気味な病気なのだと思って、わたしは大声で泣き出してしまった。
　あとから聞いたのだけど、体育の時間に眠ってしまったわたしはそのまま跳び箱に激突してしまったらしい。気絶したわたしは保健室に運ばれ、その日はそのまま家に帰ることになり、ママが迎えに来るまで眠っていたという。この先は自分でも信じられない話だった。ママが迎えに来ると、わたしは起きて自分の足で歩いて帰ったという。でもわたしにそんな記憶はない。さらに夕食時、突然男の人のような言葉でパパとママに乱暴なことや悪口を言って食器を投げつけ、テーブルを倒してしまったのだという。もちろん、わたしにそんな記憶はない。記憶や意識は体育の時間に眠くなってから、食卓の惨状を見るまでぷっつりと切れていたのだから。
　わたしの名前は夏海鈴音。
　この時初めて、わたしは自分の知らない誰かが頭の中にいることに気づいた。
　でも自分の知らない自分が、実は何人もいることを知るのと、一つの体に何人もの自分が同居してしまった理由を知るのは、ずっと後のことだった」

2

　呼び鈴を鳴らす音を聞き、深く椅子に背もたれていた百日紅椎子は顔を上げた。だるそうな表情の彼女は、折角の一服を邪魔されたくないので居留守を決め込む。しかし呼び鈴は二度、三度と鳴り、彼女は舌を打つと仕方無しに吸っていたメンソールタバコを灰皿に押し込んだ。
　面倒くさいと思ったが、なら誰かに代わってしまえばいいことだと考え直し、椎子は机の脇に置かれた眼鏡を取った。
　かちゃりと、彼女の中で何かが切り替わる音。
　呼び鈴は三回以上鳴らす、というのが大葉一実と夏海鈴音の約束事だった。それだけ鳴らして出なければケータイに電話するという手筈になっており、理由は二人の抱える特殊な事情に由来する。

三回目の呼び鈴のあとでドアは開き、縁の無い眼鏡をかけた柔和な表情の青年が姿を見せた。
「やあ鈴音ちゃん」
「こんにちは、一実さん」
鈴音は笑顔を見せると、少しだけ気まずそうに両手を合わせて話を切り出す。
「ごめんなさい、午後一番には来れるはずだったんだけど、途中で替わっちゃったみたいで……」
「いや、それは僕も同じだ」
一実は腕時計を見た。時刻は午後二時。彼の記憶は十二時過ぎから現在まですっぽりと抜けていた。
「とりあえず上がんなよ。締め切り明けで散らかってるけど」
「それを片付けに来たんだけどなー」
「あー、そうだったね」
彼は苦笑すると、メンソールの臭いの残る部屋に招き入れた。
ここで話は一時間前に遡る。

梅雨も明けた七月の土曜日、夏海鈴音とその友人の鳥居(とりい)翠子(みどりこ)はファーストフード店のテーブル席にいた。
「でさ、私思うわけよ。校長のヤツが見栄はってヅラかぶってるのは別にいいわけよ。でもね、せっかく新築した体育館に、それも三階建てで温水プール付きの、ウチの学校にはちょっと勿体ないかなーって誰もが思ってる」
だがそこに座っている少女は夏海鈴音であって夏海鈴音ではなかった。
「えー、私は素直に嬉しいけどなー」
黙って話を聞いていた翠子は向かい合って座る髪の長い少女に異議を唱える。
「それはともかく、あの豪勢な体育館の真ん前に自分の銅像をブっ立てるなんてどういう神経してんのよ。しかも銅像までヅラつきよ」
「そりゃ銅像だけハゲてたら変じゃない。ていうか怪しまれるってば」
「怪しまれるも何も、体育祭の時に風でヤツのヅラが吹っ飛んだのは翠子も見てるでしょ、全校生徒の前だったのよ、今更隠して何の意味があるワケ？」
「そんなの私だって知らないよ」
「きっと新手の羞恥プレイか何かなのよ、あの変態校長めっ………あ、鈴の音だ。鈴の音が聞こえる」
唐突に鈴の音と言った途端、それまでまくし立てるような少女の口調が急にしおらしく、落ち着いたものに変わる。
「お。戻ってきたな夏海鈴音」
「………わたし、どのくらい変わってたかな？」
少女は数回瞬きをすると、おずおずと翠子に聞いてくる。
「今朝、会った時から」
「誰と替わってたかな？」
「ついさっきまで、恵(めぐみ)と」
「恵かぁ〜、じゃあ大丈夫かあ」
大声で羞恥プレイと言っている時点で大丈夫ではないが、翠子は言い出せない。
名前を聞くまで緊張した表情だった鈴

音は、大きく息を吐くと目の前のカップを取ってストローで吸い込んだ。だが中はもう氷だけで、かすかにオレンジの味のする水が入ってくるだけだ。
「それ、恵が全部飲んでない?」
「………みたい。もう一つ買ってくる」
鈴音はむっつりした表情でカップを戻すと店員のいるカウンターに向かい、翠子は軽く手を振ってそれを見送った。
夏海鈴音はある障害を抱えている。それは小難しい言い方で解離性同一障害、俗っぽく言うなら多重人格。彼女の中には何人かの異なる人格が共同生活している。さっきまで翠子と話をしていた潮恵という人格は奥に引っ込み、今は夏海鈴音が彼女の前面に出ていた。夏海鈴音を人格Aとするなら潮恵は人格B。恵は鈴音に次いで彼女の表に出るのが多い人格だ。鈴音の中にはA~Eまで異なる五人の存在が確認されている。「夏海鈴音」はもちろん戸籍名であり、彼女たちの主人格である。その昔、ある事故がきっかけで彼女は複数の自我を抱えることになったという。しかし彼女自身は何の事故だったのか全く覚えていなかった。
そんな鈴音にとって鳥居翠子は彼女の障害を理解する数少ない友人だ。二人とも高校一年生で、クラスメイトである。彼女は振る舞いや口調がガサツだった。潮恵の人格も同学年だが、鈴音に比べて得意な分野も鈴音が学業、恵がスポーツと分かれており、二人併せて文武両道になるが、勉強と運動で人格を使い分けようにも、そうそう都合良く交代するものではないらしい。
「まったくさ、五人いるのにお小遣いが一人分ってのは割に合わないよ」
頬を膨らませて鈴音が席に戻ってくると、さっそくストローで吸い込みさらに頬を大きくした。
額を聞いたことはなかったが、確かに各人格が無分別にお金を使っていたら減るのも早いだろうと翠子は思う。
「そんでさ。この後どうする? 分かってると思うけど今は土曜のお昼時ね」
「今日の午後は一実さんとこ行く予定」
良かったぁ自分に戻れて、と鈴音は嬉しそうに付け足す。
「あー、大葉先生んとこね。そんじゃ、邪魔者はさっさと退散しようかしらね」
あてられた気分の翠子はさっさと席を立ち、トレー上の紙クズや紙コップをゴミ箱に突っ込むと店を出て行く。
「んもう、そんなんじゃないってば」
慌てて鈴音が後を追い、店を出た時。
「………ぐつぐつ、ぐわぐわ」
不意に口から出た呟きの直後、鈴音の視界が回る。
「鈴音?」
翠子が振り向くと、鈴音は彼女とは正反対の方向へ走り出していた。制服のスカートがめくれ上がるのも気にせず駆ける姿から、彼女の身に起きた異変に気づき翠子は慌てて追いかける。
鈴音は眼差しも鋭く前から目を逸らさず走る。道行く人と人との間を縫うよう

に、肩すら掠めず走る様は獣道を駆ける野生動物を思わせる。追い抜かれた者は唖然と見送り、向かいから来る者は彼女の剣幕に道を開けた。
　翠子は必死に追いかけるが、どんどん離されていく。体育が得意なのは潮恵だが、走る姿が彼女とは異なっていた。そうすると今の人格は、と考えた翠子は、道の先にある横断歩道の信号が赤になるのを見た。これで追いつける、と思いきや鈴音は構わず横断歩道を駆け抜ける。
　走り出していた自動車が派手にクラクションを鳴らすが鈴音は意に介さない。翠子も赤信号の横断歩道まで来たが、そこを大型のダンプカーが横切った。通り過ぎた時には信号も変わってしまい、加えて鈴音の姿も見失っていた。
「ああっ、もうっ！」
　翠子は歩道の縁石を蹴る。

　一方、夏海鈴音は雑居のビルとビルとの間にあるコインパーキングにいた。
「……確かに沸騰する電波だ」
　夏海鈴音、いや鈴音の中の「彼」は意味不明なことを呟くと、粘つくような視線で駐車場を見渡した。奥にライトバンが一台停車しているだけだが、その向こうに誰か蹲っていた。
　電波はそこで沸騰している、そう認識した彼は駐車場に足を踏み入れる。ふと、漂う腐臭が彼の鼻を突いた。見れば近くに空き缶のあふれそうなゴミ箱がある。缶の山には蟻がたかり腐った臭いを漂わせており、その臭気に過敏に反応する者がいた。
「……臭ぇ」
　言葉と同時に沸騰する電波を気にかけていた者が奥へと引っ込み、また別の人格が表に出てくる。
「クソっ、おちおち眠ってもいらんねえ」
　三十代男性の人格・氷見谷徹行が表に出る。氷見谷は悪臭を放つゴミ箱を蹴り、缶の山が雪崩を起こした。それをたまたま通りがかった老女が咎めるような視線で見ていた。
「なに見てんだババア！」
　視線に気づいた氷見谷が怒鳴りつけ、とても少女のものとは思えぬ野太い罵声に老女は恐れをなして退散した。
「けっ。胸糞悪ぃ」
　唾を吐き捨てると氷見谷は制服のポケットをまさぐる。一服しなければ気の治まらない彼だが、探してもタバコが見つからない。鞄の中にも入っていない。
「あのガキ、タバコぐらい用意しとけっていつも言ってんだろーが」
　鈴音に悪態をつく氷見谷だが、とはいえ平時はごく普通の女子高生である夏海鈴音に、いつ出てくるか分からぬ人格のためにタバコとライターを用意しておけというのも無茶な話だ。それ以前に鈴音はタバコを吸わないし臭いも嫌いだ。
　氷見谷は近くの自販機で一箱買ったものの、口に咥えたところでライターが無いことにも気づき、しかめっ面でタバコの箱を握り潰す。

そこに、さっきの罵声を聞いた翠子が駆けつけた。
「あー、やっと見つかった……」
「おっ。ちょうどいい、翠子じゃねーか。おい、火ぃくれ火」
「……今度は氷見谷なわけ」
　夏海鈴音の人格D・氷見谷徹行は、その粗暴な性格で他の人格から敬遠されている。厄介者の登場に、息をつく暇もなく翠子は頭を抱えた。
「呼び捨てかい。目上のモンには、さん付けだろ、さん付け」
「うっさい、なんでアンタなんかにさん付けしなきゃいけないのよ。さっさと奥に引っ込め。鈴音と替われ」
「んだとこのガキ、鈴音のツレだと思って甘くみてりゃあつけあがりやがって」
　氷見谷は翠子の胸倉をつかみ睨みつけるが、彼女は毅然と見返した。その表情に舌を打ち氷見谷は拳を振り上げる。
「なによ、女に手を上げようっての」
「男女平等がオレのポリシーだ。だから気に食わねぇ奴は男女問わずブン殴……」
　そこで氷見谷の声は途切れて、彼の眼球がくるりと回る。
「ぐつぐつ、ぐわぐわ」
　再び出た謎の呟き。氷見谷は自らの奥底から突き出てくる別人格に抗い雄叫びを上げる。
「ざけんな犬公っ、テメエの出る幕じゃ」
　その叫びを遮るように、振り上げられた拳はそのまま彼自身の頬へと振り下ろされた。彼は上下左右に頭を振って倒れそうになり、翠子をつかんでいた手も離れる。
「ちょ、ちょっと大丈夫なの！？」
　慌てて翠子は倒れそうな氷見谷を支える。中身の氷見谷は嫌な奴だが肉体は鈴音だ。彼女の体に何かあっては困る。
「大丈夫だったか」
　支えられた彼は、しかし自分よりも翠子を心配していた。口調は男性的だが先程までの粗暴さが消え、抑揚が無い。また人格が替わったことに翠子は気づく。そして彼が助けてくれたのだと思う。
「悪いな。氷見谷が電波を沸騰させたみたいだ。知ってるか、沸騰する電波。電波にも沸点があるんだ。ぐつぐつ、ぐわぐわって音を立てて不快なんだ」
　その言葉で翠子はピンとくる。電波に沸騰などと言うのは、彼しかいない。
「知ってるよ、沸騰する電波。それと、助けてくれてありがとう、犬飼(いぬかい)」
　犬飼。鈴音の人格E。彼女の人格の中では、最近になってその存在が確認されたものだ。「犬飼」とは名字だが、下の名前は本人が忘れたと言っているので不明。年齢は十代後半から二十代前半。
「そうか、見たことのある顔だと思えば……確か鈴音のダチのミドリゴーだよな」
「み・ど・り・こ、翠子よっ」
　まるで競走馬のような名前に翠子は口を尖らせる。犬飼は物覚えの悪い人格でもあった。

犬飼は「沸騰する電波」なるものを知覚すると表に出てくる。沸騰する電波。それは煮立つ湯のように、ぐつぐつぐわぐわと音を上げ沸騰する特質を持つ電波。無機物、有機物を問わず沸騰させ、さながら中継局のように世界に害ある電波を飛び火させる。犬飼は沸騰する電波により肉体を毒され、精神を蝕まれているると妄信していた。

しかし言うまでもなく沸騰する電波とは彼の妄想の産物であり、現実に存在するものではない。彼は狂気に駆られ、狂気を狩る。自らに苦痛をもたらす妄想上の敵を相手に日夜戦う、それが犬飼という人格の全てだ。

その沸騰する電波も、この場ではもう消えていた。最初から微弱だったため、自然消滅したのかと犬飼は思った。でなければ電波を飛ばしていたものが移動したのか、どちらにせよ彼がここで沸騰する電波を感知することは無かった。だから犬飼は安心して奥へと引っ込む。

「鈴の音が聞こえる」

まず鈴音の声色でそう言って、続いて目つきも変わり完全に夏海鈴音の人格と切り替わる。

夏海鈴音の中にいる複数の自己には、それぞれ一つずつ口癖があった。その口癖が出ることで彼女の人格は交代する。また寝ている時でも寝言で別人格に替わることが彼女の両親によって確認されていた。夏海鈴音として眠っていた時、「恵みの雨だわ」という寝言を両親が聞いたことがあった。明くる日、目覚めた彼女は夏海鈴音ではなく潮恵だった。「恵みの雨」が潮恵の口癖だ。「鈴の音」に言及する時は鈴音、「ぐつぐつ、ぐわぐわ」と言ったら犬飼、「臭ぇ」と男言葉なら氷見谷に切り替わる。

「……えーっと、わたし、どうしちゃったのかな?」

鈴音は空き缶が大量に転がる駐車場の惨状を見渡して唖然とする。その鈴音の手をつかみ、これ以上面倒なことになる前にと翠子は一目散に走り出した。

「ちょ、ちょっと翠子っ」

未だ事態のつかめない鈴音は、手を引かれて走りながらも振り向いた。

「……牧原(まきはら)くん?」

鈴音は一人の少年が自分たちと同じように駐車場から慌てて、しかし別の方向へと逃げるのを見た。幼さの残るその横顔は、クラスメイトの牧原智生(ともお)に似ているような気がした。

この後、お互いの息が上がりきるまで二人は走り続け、鈴音は大葉一実との約束の時間に大幅に遅れてしまった。

息を切らせているのは彼も同じだった。

路地裏の街灯に背を預ける彼は、後を追いかけてくる者がいないことを確認すると大きく息を吐き出し、その場に座り込んだ。

悪気があったわけではないが尾行していたことに違いない。彼女の剣幕に驚い

て走り出してしまったのもマズかった、そう思いつつ彼は懐から一通の手紙を取り出したが、封筒の白さが目に眩しく、すぐに元に戻した。
「印象、悪くしちゃったかなあ」
駐車場の夏海鈴音の怒りっぷりが頭に浮かび、彼、牧原智生は溜め息を漏らす。

三

資料やらメモ書きやら煙草の吸殻やらを片付けながら、鈴音はさっきまでのことを一実に話していた。大部分が翠子から聞いたものだが、若干想像で補っている部分もある。いつものことながら翠子がいて良かったと鈴音は思う。自分の意識が引っ込んでいる間のことは、誰か他人に聞くしかないからだ。
部屋に掃除機もかけてしまうと一実はコーヒーでも淹れにキッチンへと向かう。砂糖は幾つと聞かれ、三つと答えると鈴音はずらりと本の並んだ書架に目を向ける。整然と並べられた本の背表紙には「大葉一実」という名も並んでいる。
彼、大葉一実は物書きで生計を立てていた。主に中学高校生向きの恋愛小説を書き、書店で平積みで売られているのを鈴音はよく見ている。一風変わっているのは彼が小説の挿絵も自分で描く点にあり、それには彼の抱える病症が深く関わっていた。
「鈴音ちゃんに一つ頼みたいことがあるんだけどな」
一実はガラステーブルにマグカップを置くと、鈴音に一冊の文庫本を渡した。鈴音はその表紙に見覚えがあった。先日発売された一実の新刊だ。表紙をめくると彼のサインが目に入る。
「それを双美ちゃんに渡して欲しい」
「うん、いいよ」
「じゃあお願いする」
鈴音が頷くと、一実は眼鏡を外し懐から別の、銀縁の眼鏡を取り出すと今度はそれを掛けた。直後、彼は突然落ち着きのなくなったように部屋の中を見渡すと、顎に指をあてて小首を傾げた。
「あれ、私またボーっとしてたのかなあ。いつ家に帰ってきたんだろう……」
先程と異なり幼い少女のような口調で、彼は正座を崩してペタンとクッションに座った。彼は目の前のマグカップをつかみ、しげしげと見つめて一口飲むと、おもむろに顔を上げた。そこで鈴音と視線が合い彼は大きく瞳を開く。
「あ、鈴音さんだっ。いらっしゃい、いつ来てくれたの？」
彼は初めて鈴音に気づいたかのような声を上げた。だが鈴音は目の前にいるのが既に大葉一実でないことを知っている。そこにいるのは銀縁の眼鏡を掛けた若竹双美という十一歳の少女だ。
大葉一実は夏海鈴音の抱える特殊な症状を誰よりも深く、身近に知っていた。何故なら、彼もまた鈴音と同じ症状を抱える身であるからだ。
一実の中にも何人かの別人たちが同居

していた。鈴音は不意に飛び出す各自の口癖によって人格が切り替わるが、一実は眼鏡を変えることで切り替わる。鈴音がランダムに他の人格へと交代するのに対し、一実は他の人格に呼びかけることで交代することも可能だ。そして人格の切り替わりは各自が使用する眼鏡を掛けることによって完了する。

　そして人格によっては家の呼び鈴を鳴らしても居留守を使う者もいる。そのため『三回以上鳴らして、出なければケータイ』というのが鈴音と一実の決めたルールだった。

「お邪魔してます、双美ちゃん」

　鈴音は笑顔を見せるがその表情は少し硬い。一実の人格が切り替わるのはこれまでに何度も見ているが未だに慣れなかった。自分のことを棚に上げてしまうが、やはり今まで話をしていた者から突然別人に変わってしまうのには戸惑いを覚える。同じ障害の自分を鏡で見ているかのようだ。

　鈴音は一度だけ自分の人格が交代する時のビデオ映像を見たことがあるが、正直気分の良いものではなかった。自分のことながらインチキくさく見えてしまい、その時交代した人格が氷見谷だったからなおさらだ。しかし、そこに映し出されていたのは紛れもない事実である。

「私が家に居ると、よく鈴音さんに会うなあ。鈴音さん、私のお姉さんみたい」

　はにかみながら二十代後半の体格をしたローティーンの少女はしおらしく身をくねらせる。傍から見れば奇異な姿も、自覚があるだけに鈴音には笑えない。

「そのお姉さんから双美ちゃんに渡したいものがあるの」

「なぁに？」

「はい、これ。大葉先生から」

　さっき一実から預かったサイン入りの新刊を鈴音は双美に手渡す。

「うわあっ、嬉しいな、ちゃんとサインが入ってる」

　双美は一実のサインに目を輝かせて、本を抱きしめた。

　若竹双美は大葉一実の本のファンだった。だが双美は一実が自分自身であることを知らない。彼女は自分の中にいる複数の人格に無自覚だった。敬愛する先生の最も側にいて、その実、彼女は最も遠く離れた場所にいた。

　鈴音にはそれが哀しく見えた。

　双美は自分が抱えている障害について知らない。理解が及ばない、現実を受け入れきれずにいる、言い方は幾らでもあるが、若竹双美が他の人格に呼ばれることはあっても、その存在には気づいていない。

　その双美がサイン本から顔を上げて鈴音を見た。

「ねえ鈴音さん。勇樹くんは？　今日は、勇樹くんは来てないの？」

　勇樹。双美と同じ小学生で、そして夏海鈴音の人格C。フルネームで雪村勇樹という十一歳の男の子。

「え、ゆ、勇樹？　勇樹はね、う～んま

だちょっと帰ってきてないの」
　鈴音は少し困った顔になる。彼女は大葉一実のように別の人格に呼びかけることができない。そのためいつも一方的な交代になってしまう。例外的に、眠りにつくように意識を沈ませれば別の人格に交代することも可能だが、どれが出てくるかはランダムだった。
「そう、じゃあ仕方ないね……」
　寂しそうに双美は言い、それが鈴音の胸を締め付けた。鈴音は双美の勇樹への気持ちを知っていた。だから会わせてあげたいとは思うが、そのためには運任せにするしかなかった。ダメでもともと、間違っても氷見谷が出てこないように祈りつつ鈴音は意識を沈ませる。
「……大丈夫、まだ大丈夫」
　出た口癖は雪村勇樹のものだった。だが少年は置かれた状況をすぐには理解できず、部屋の中を見渡した。
「また寝ちゃったのかなあ。何だか頭がボーっとする……」
　そこで少年は自分の姿に気づき、悲鳴じみた声を上げた。
「あーっ、まただっ。またセーラー服着せられてるっ。恵お姉ちゃんだな、僕が寝てる間にこんなことするのはっ」
　勇樹は高校の制服を着た、いや着せられている自分に唖然とする。雪村勇樹、彼も双美と同じく自分の中に異なる自分が複数いることを知らない人格だった。故に彼は夏海鈴音や潮恵という人格は従姉弟と認識していた。鈴音や恵が高校の制服を着ている時に勇樹の人格に切り替わると、彼は従姉弟の悪戯で女装させられている、そう信じて疑わなかった。
「ねえ、勇樹、くん？」
　おずおずと双美が勇樹に声をかける。女装した自分に困惑していた勇樹は、呼ばれてようやく双美に気づいた。
「えっ、ふ、双美ちゃん？　うわっ、どうしよう、ゴメン、僕を見ないでっ」
　勇樹は顔を真っ赤にして明後日の方角を向き、両手を胸の前に突き出して振る。彼にとって若竹双美は、女装の自分を一番見られたくない、そんな趣味を持っているとは思われたくない人間だった。
「変だよね、男なのにこんなカッコしてるなんて。でもこれは多分恵お姉ちゃんの仕業で」
　しどろもどろに勇樹は弁明する。
「う、ううん、そんなことない、似合ってるよ勇樹くん」
　似合っていると言われても勇樹は悩んでしまう。見た目が女の子っぽいというのが彼の悩みの一つだからだ。だが意識はどうあれ体は十七歳の少女。女の子っぽいどころか、そのものだ。双美も自分の言葉がフォローになっていないと気づき俯いてしまい、そのまま二人は黙り込んでしまった。
　不思議なのは目の前で夏海鈴音から雪村勇樹に人格が交代しても、双美がそれを疑問に思わないことだった。鈴音と勇樹が同一人物であることに双美は気づいていない。もしも気づけば、それは鏡

に映る自分の姿でもあるのだから、おのずと彼女も自分の症状を知り、大きな衝撃となるだろう。無意識にそれを恐れているであろう双美は、鈴音から勇樹へ人格が交代する事実を受け入れず、自分にとって都合良く歪曲することで、己の症状に無自覚であり続けている。今、双美の目の前にいるのは夏海鈴音の姿をしていても、雪村勇樹に他ならない。そして彼には良く似た従姉弟のお姉さんがいる。捏造(ねつぞう)されたものであっても、それが若竹双美にとっての哀しい真実だ。

　鈴音は勇樹と双美が互いに恋心を抱いていることを知っていた。だから鈴音は二人を会わせてやりたかった。しかし潮恵はまた違った考えでいた。それが彼女らの関係をより複雑なものにするからだ。

　双美と勇樹、互いに俯いたまま気まずい十数秒が過ぎた。

「あ、あのっ」

「あのさっ」

　何か話さなければと思って口を開いた二人だが、同時に声を掛けてしまって気まずさが増してしまい、また沈黙。再び時間だけが過ぎるが、静寂を破ったのは少女の小さな笑い声だった。

「ふふっ、おかしいよね、せっかく勇樹くんに会えたのに何を話せばいいかわかんない、なんて」

　明るい双美の笑顔に勇樹の胸が高鳴る。

「そ、それは僕も同じだよっ。話したいことはいっぱいあったんだけど……なかなか言葉にならないんだ」

「たくさん勇樹くんに会って、もっとお話できると良いのにな。たまにしか会えないのは寂しいもの」

「そうだね。たまにしか会えないから、ちゃんとに話せないのかな。でも、たまにしか会えないから、いいことだってあるんじゃないかな」

　少女の目を見ながら話すことにまだ気恥ずかしさがあるのか、勇樹は目を逸らしてしまう。

「そんなことない、私は、もっと勇樹くんに会いたいもの」

　勇樹の胸に飛び込むように双美が詰め寄る。その勢いに押し倒されそうになり、勇樹は右手を背後に突き出して体を支え、左手で双美を抱く。

「ふ、双美ちゃん？」

「私、怖いの。私の体に誰かが勝手に入って私が私でなくなってしまう。そんな夢ばかり見るの。いつか夢が本当になりそうな気がしてとっても怖いのっ。勇樹くんがいないと、私どうすればいいのかわかんないっ」

　はたして、それは夢だろうか。言い換えれば夢という形で双美は他の人格の行動を垣間見ている、とも言える。だが自分の症状に無自覚な双美には、それが理解できずにいるのではないか。

「私たちどうしてまだ子供なのかな。だから勇樹くんにも、たまにしか会えないのかな」

「大人になれば、きっと違うよ。僕は早く大人になりたい。いつまでも鈴音お姉ちゃんに心配されたり、恵お姉ちゃんにからかわれてばかりじゃいられない」
勇樹は両手で双美の体を抱いた。それで少女の気持ちが休まれば良いと思って。でも一つだけ勇樹は双美に言えないことがあった。双美が見ているという夢。それは勇樹にも覚えのあることだった。
「私も早く大人になりたいな。そうすれば、きっと勇樹く………」
唐突に双美の言葉が途切れた。
「あーあっ、見てらんないね。男なら『愛してます』の一言ぐらい、言ってやったらどうだい」
続けて出た少女の声からは瑞々しさが消えていた。口調も正反対の嗄れた声に変化していた。
「双美、ちゃん？」
少女の肢体の少年を突き飛ばし、青年の体格の少女は鬱陶しそうに眼鏡を外して横に放り投げる。
「双美なら引っ込めたよ。アタシは百日紅椎子」
「双美ちゃん、どうしたの？」
「だから双美じゃない。アタシは椎子だ。二度も言わせないで」
百日紅椎子。大葉一実の人格4。二十代の女性で他の人格とは異なり眼鏡を必要としない。視力は裸眼で一・五と標準的。人格が替われば見るものも変わるのは彼女も同じということだ。
「そんなっ、ねえ双美ちゃん、元に戻ってよっ」
勇樹は椎子の両肩をつかんで揺さぶるが、彼女はそれを跳ね除けた。
「うるっさいねえ。一服したいから代わったんだよ。済んだらまた代わったげるから、それまで待ちな、坊や」
椎子は懐からメンソールとライターを取り出したが、勇樹が素早く手を出して奪い取る。
「双美ちゃんはタバコなんて吸わないっ。そうか、おまえが、おまえが双美ちゃんの言っていた奴だなっ。夢じゃなくて本当に現れるなんて」
「はン、夢なもんか。双美はアタシん中の一人にすぎないし、アンタだって………へえ、まさか気づいてないのかい？」
「僕がなんだって言うのさ。早く双美ちゃんの中から出て行け、出て行けよっ」
何も知らず、無自覚に、ただ感情を真っ直ぐぶつけてくるだけの子供に詰め寄られ、椎子の顔が苦々しく歪む。
「坊主が言うじゃない。出て行けだって？　それができたらどんなに………いや、これはアタシの体だ、出て行くのは奴らの方さ。ならさ、そういうアンタはどうなんだい？　男ならタマが二つ付いてんだろう？」
椎子は勇樹を押し倒し、左手は彼の胸を、右手はスカートの中へ滑り込ませ、下着の上から股間をがっしりとつかんだ。傍から見れば青年が少女を強姦しているようだが、あくまでも襲われている

のは年端もいかぬ少年で、襲っているのは成人女性だ。
「嫌になるくらい女の体のクセしてさ。この胸にくっついてるの、ちぎり取ってやろうかっ」
右の乳房をつかむ手に力が籠る。同時に勇樹の頭が左右に震え出す。
「ち、ちちちち違う、僕は、僕は男、ボクハオトコノコッ」
最初は小刻みに、やがて激しく少年は頭を振る。心はどうあれ体は十七歳の少女だ。雪村勇樹の人格は己の体やジェンダーを再認識すると途端に不安定になる。それは目を逸らし続けている自分の多重人格にも行き着く問題であり、彼の精神は極度の拒否反応を示す。咳き込み、呼吸困難を引き起こし、顔色が赤から青に変わる。それを見て椎子は嗜虐的な笑みを浮かべた。ガキがふざけるからこうなる、と言わんばかりに。
「ボクハ、ボクハ、ボクハ、ああ、恵みの雨が降るわ」
少年の口調が変化したことに椎子は目を狭めた。泣き出しそうな少年の顔は怒りに燃え、眦も鋭く椎子を睨みつける。
「いつまでも汚い手で触ってんじゃないわよっ」
勇樹から交代した恵の膝が、椎子の股間に炸裂した。
「このっ、小便臭いガキのクセにっ」
意識が女性であれど、肉体に器官として備わっている以上その痛みとは不可分である。椎子は内股で床の上を転げる。
自分が肉体の主導権を完全に握ってしまえばこんなタマ、手術でも何でもして取ってしまえるのにと、彼女は痛みに歯を食いしばって耐えながら思う。
だが自らの特性を考えれば、押し付けてしまうことも可能だ。懐から適当な眼鏡をつかみ、彼女は自らの深奥に隠れた。
「あ、いったたたたたたたっ、何、何だ、いきなりっ」
椎子と入れ替わった、黒縁の眼鏡を掛けた「彼」は唐突な股間の痛みに涙目で悶絶する。
「その眼鏡は……六郎ね」
咳き込みながら恵は椎子と交代した人格の六郎に詰め寄る。
「あのさあっ、なんとかしなさいよ百日紅椎子のヤツ！」
「その喋り方は恵か。待て、順を追って説明しろ。まず俺の大事なところを蹴っ飛ばしたのは」
「そんなの一番後回しっ。アンタんとこの椎子、ずいぶんウチの勇樹を可愛がってくれたじゃないっ」
「椎子、また椎子か。あいつめ、何の恨みがあって俺に替わったんだ。一実先輩でもケロ吉でもいいじゃないか」
「アンタら男どもが緩んでるから、あのアバズレ女が好き勝手やらかすのよっ」
「それはキミんとこの氷見谷に犬飼だって同じじゃあ……」
「うるっさい。今はこっちの話でしょっ」
恵は六郎の襟首をつかんで前後にブンブン振る。六郎こと杜若六郎は、大葉一

実の人格6である。一実の一つ年下で先輩後輩の間柄という人格。また大葉一実は挿絵も自分で描く小説家だが、実際に描いているのは彼、杜若六郎だ。
「とにかくよ、あの椎子ってば人の胸を揉むどころかさらに言語道断なことまでしたのよっ。このオトシマエ、どう付けてくれんのよ」
これは恵の特性だが、鈴音と違い彼女は他の人格の行動も把握している人格だ。
「そうか。左手に残るフワフワした良い感触はそれか。じゃあ右手は……」
右手を顔に近づけた六郎は神妙な表情になった。
「何か匂うな」
「バカっ、嗅ぐな！」
恵の鉄拳が六郎の頬に炸裂する。

大葉一実の人格で意識が前面に出てくることが多いのは、人格1である一実を筆頭に2の若竹双美、4の百日紅椎子、6の杜若六郎である。3と5は呼びかけても出てくることは稀だった。3は自分が蛙だと信じている理解に苦しむ人格で、「余には尻尾が無い、故にもう大人」という発言から少なくともオタマジャクシでないことは確かであり、メスの蛙を見て「セクシーだ」と言ったことからオスであることが判明していた。また自分のことを「余」と呼び、常に偉そうな口調であるから種類はきっとトノサマガエルだろう。通称を「蛙さま」。さっきの六郎のように「ケロ吉」と呼ぶ人格もいる。蛙の目のような丸眼鏡を掛けるこの人格――いや蛙だから蛙格とでも言うのが正しいか――には、鈴音は一回しか会ったことがない。そして人格5に関しては鈴音も、彼女の中の別人格たちも会ったことはなかった。
夏海鈴音と大葉一実、二人の多重人格者が出会ったのは数カ月前の春先まで遡る。その日、夏海鈴音は鳥居翠子とショッピングに出かけた。ゴシックロリータな服装を好む翠子の服選びに付き合った後、やはり翠子の買い物で立ち寄った書店ではサイン会が催されていた。
店内の一角には鈴音たちと同じような年齢の少女たちが列をなし、その先の机では縁なしの眼鏡をかけた物静かな青年が、右手に持ったマーカーでせっせとサインを書いていた。見れば、彼の背後の壁に貼られたポスターの絵と、同じ表紙の文庫本が近くで平積みにされている。
翠子といえば目当てのコミックスを探しに行ってしまって見当たらず、暇潰しに鈴音はサイン会の様子を眺めていた。
異変が起きたのは、その時だった。
唐突に、それまでサインを書いていた青年が眼鏡を縁なしから黒縁へと替えた。その仕草に鈴音は奇妙な感覚に囚われた。やはり不思議そうに見ていた最前列に並ぶ少女に、青年は「気分転換だよ、気分転換」とくだけた口調で言い、今度は鼻歌混じりに左手でサインを書きだした。

瞬間、鈴音の奇妙な感覚は衝撃に変わった。青年が両利きとは思えなかった。何故なら彼女にも覚えがあるからだ。鈴音自身は右利きだが、彼女の別人格では氷見谷が左利きだ。

――マサカ、コノヒトモ？

鈴音はもう一人の自分を見たような気がした。

その後の鈴音の記憶は曖昧だ。買い物の済んだ翠子が鈴音の肩を叩いた時、彼女はサイン会の列の脇に立っていた。

「ふーん。鈴音、この人のファンだったの」

翠子が鈴音の手の中を覗く。そこには平積みで売られていた文庫本がある。その文庫本をつかんでレジへと走り、列に並んでサインを貰ったような気はしたが、鈴音には夢を見ていたような感覚だった。

鈴音は文庫の表紙をめくる。殴り描きではあるが可愛い少女のイラストに、その隣の『大葉一実』というサイン。

「ねえ、翠子ぉ」

「なに？」

「わたし、もう一人の自分を見つけたかもしんない」

だがその言葉は翠子の誤解を招き、彼女は鈴音の人格がまた一つ増えたのではないかと本気で心配した。

数日後、鈴音は大葉一実宛に手紙を送った。内容は自分の中には何人もの違う自分がいること、サイン会での仕草から大葉先生と自分は同じ病症を抱える人間と思ったこと、自分以外に解離性同一障害の人を見たのは初めてだということ等だが、傍から見ればファンレターという体裁だけの、妄想の入り乱れた怪文書に近かったろう。

しばらくして届いた返事には、『もし君の話が本当なら一度会いたい』と簡潔に書かれていた。

だが大葉一実に会うことを翠子は反対した。翠子はまず相手が卑しい目的で会いたがっていたらどうすると言い、そして向こうが本当に鈴音と同じ多重人格であった場合、出会うことで何らかの影響を受けて彼女の病症が悪化することを心配していた。最終的に翠子も同伴して、雲行きが怪しくなったら即逃げるということで話がまとまったが、あるいは彼女は多重人格の作家先生とやらを、好奇心から見物したくなったのかもしれない。

こうして夏海鈴音と大葉一実は出会い、二人の付き合いはそこから始まった。機会があれば、その三者面談の話も語られるやもしれない。

4

胸と股間を鷲づかみにされ、怒り心頭の恵は椎子の謝罪を要求したが、彼女は引っ込んだまま出てこようとしない。仕方なしに六郎と、事情を知った一実が平身低頭で交代に謝り、それでも怒りの治まらぬ彼女はぷりぷりと頬を膨らませて

大葉宅を出てしまった。鈴音はまだ一実と話をしたかったのだが、恵には知ったことではなかった。
結局、人格が恵から鈴音にチェンジしたのは、彼女の自宅近くまで来てからだった。鈴音はいつの間にか大葉一実の仕事部屋から外に出ている自分に気づいて立ち止まる。勇樹と交代してからのことを全く知らない彼女は、勝手に帰ってしまった自分の別人格に腹を立てた。
「あーあ、もっと一実さんと話したいことあったのになあ」
だが自宅はもう目の前だ。あとで一実さんに電話しようと鈴音は思い、タイミング良く彼の人格であることを期待する。
だが再び歩き出した鈴音は、不意に感じた視線に振り向いた。直後に誰かが背後の電信柱へと隠れる。
その瞬間、電波が激しく沸騰した。
「ぐつぐつ、ぐわぐわ」
沸騰する電波を知らせる警告に視界が回り、犬飼の人格がアクティブになる。
——尾けられている。
犬飼は電波の沸騰具合から昼間のものと同じと判断、双眸に標的を映し電信柱まで十メートルほどの距離を数歩で駆け抜けた。
その先程までとは別人の動きに驚き、電信柱の背後に隠れていた彼は尻餅をついてしまう。
「な、夏海さん？」
そこにいたのは鈴音のクラスメイトの牧原智生だった。しかし今の彼女を律する人格は鈴音ではなく犬飼。彼に牧原智生の顔に覚えはなかった。たとえ面識があったとしても犬飼の他者に対しての関心は、電波を沸騰させているか、いないかだけだ。そして牧原少年は夏海鈴音が多重人格であることを知らない。
「ご、ごごごめんなさいっ、後を尾けるつもりはなかったんだ。気を悪くしたなら謝るよっ」
立ち上がった智生は仁王立ちの犬飼に——いや智生にとっては鈴音に——大きく頭を下げて謝った。そして鞄から一通の手紙を取り出した。
「そ、その、ぼぼぼぼ僕っ、ただこれを渡したくって」
それは顔に幼さを残す内気な彼の精一杯の勇気だったろう。俯いたまま、彼は眼前の少女に手紙を両手で突き出した。
「これは……」
表には『夏海鈴音様』と書いてある。その手紙が意図するところは鈴音でなくとも容易に想像がついたことだろう。
「読んで、返事を聞かせてください、お願いします！」
しかし受取人が犬飼だったのが——。
「ああ、そうか」
悲劇であった。
「これが電波を沸騰させていたのか」
手紙をつかんだ犬飼は、無残にも両手でそれを引きちぎってしまった。
同時にぐつぐつぐわぐわと沸騰していた電波が消えていく。犬飼にはそのよう

に感じられた。
　沸騰する電波を止める方法は唯一つ、沸騰する電波を飛ばしているものを破壊すること。代議士が沸騰する電波を垂れ流したなら議会場でも料亭でも乗り込むだろう。満月が発生源なら夜空へ石を投げ、もしも自分が原因なら自傷行為に走る。今回は手紙だったから引きちぎった。彼にとってはそれだけのことだ。
　だが忘れてならないのは全ては犬飼の自己申告であり、沸騰する電波が存在する科学的論拠は何一つない。ただブチのめされた人や壊された物があるだけだ。言うなれば、沸騰する電波は彼がそうと認識した場所にしか存在しない。故に犬飼の眼に映るもの全てが、彼の標的となる可能性がある。
　彼は狂気に駆られて狂気を狩る。
　氷見谷が粗暴で嫌われている人格なら、犬飼は最も危険視されている人格だ。
「鈴の音が聞こえる」
　再び鈴音に戻り、覚醒後の彼女が最初に見たものは、目に涙を浮かべるクラスメイトの姿だった。
「ま、牧原くん?」
　そして自分が持っている破れた手紙と、今にも泣き出しそうな彼を交互に見つめる。まるで事態を知らない彼女には状況が飲み込めず、牧原智生も数歩後ろに下がったかと思えば、そのまま何も言わずに踵(きびす)を返して走り去ってしまった。
「ね、ねえ牧原くん、この手紙っ」
　慌てて声をかけるが彼は通りの角を曲がって姿が見えなくなり、後には呆然と半分に裂かれた手紙を手にする鈴音だけが残された。

　結局鈴音が一連の出来事を知ったのは、翌日になって他の人格との交換日記を読んでからだ。それは他の人格との情報交換や意思の疎通を目的にカウンセラーから勧められたもので、毎日書くのが鈴音の日課だった。もっとも数日間他の人格が表に出ている時もあるから、当然書けない日もある。
　全ての人格の行動を把握している恵は積極的に書いてくれるが、勇樹は従姉のお姉さんとの交換日記と信じて疑わず、氷見谷は非協力的で、電波が沸騰している時しか出てこない犬飼にいたっては書くこと自体が稀だった。
　今日の日記では、氷見谷は「タバコとライター、持ち歩けって言ってんだろ」と勝手な要求のみを書き、勇樹は双美と会えて嬉しかったこと、女装はもう嫌だと書いていた。双美から椎子への人格の交代はどうも勇樹の記憶から抜け落ちているようだ。犬飼は書いておらず、恵の日記には、勇樹と双美のことで辛辣な文章が並んでいた。
　双美と勇樹が互いに恋心を抱いているから、鈴音はこの二人を会わせた。
　その行動に潮恵の人格は否定的だった。互いに幾つもの異なる自分が同居する体では、結ばれることのない想いだという自覚が恵にはあった。恵は鈴音が一

実に抱いている感情を知っている。だから人格を一つに統合することを望んでいることも知っている。それでは双美と勇樹の恋愛を見守ることは偽善ではないか？　恵の憤りはそこにあった。
　鈴音は複数ある人格を統合することを願っていた。現在の自分とはつまるところ内気な部分、活発な部分、子供っぽい部分等に解離した不自然な状態であり、それらを一つにすることが自然なのだと、鈴音はカウンセリングの先生からも教えられていた。氷見谷や犬飼の人格でさえも、自分の中のある部分が突出した存在なのだろう。親も鈴音の人格が統合されることを望んでいる。鈴音自身、他の人格が原因で周囲の人間が流す無用の涙を見るのは辛かった。
　だが同じ複数の自己を抱える身でも大葉一実は他の人格との共存を望んでいた。厄介な人物を内に持っていたとしても、現在の複数ある状態で共存共栄していくことを彼は選んだ。統合とは人格が混ざり合い最終的な区別のなくなることだから、それも共存共栄と言えるが、しかし一実はあくまでも解離した状態を維持したいのだ。その気持ちは鈴音にもわからないものではなかった。鈴音はまるで友達のような恵や勇樹の人格が好きだ。そのため彼女は人格の統合を願いつつも、今ひとつ踏み切れずにいた。統合されて、混ざり合い、区別がなくなってしまうのは寂しく思えた。
　ともあれ、それらを日記で指摘された鈴音は気が重い。そして彼女の気分をより沈めるものが机の脇に置いてある。
　半分に破られた自分宛の手紙。
　ちらりと見て、鈴音はため息を洩らし、ポカポカと頭を叩く。

「で、結局その手紙はなんだったワケ？」
　月曜日。朝の通学路を並んで歩きながら翠子は鈴音の話を聞いていた。
「たぶんっていうか、ううん絶対っていうか、間違いなくっていうか、そのー」
「だから、何よ」
「……………ター」
「声が小さい。聞こえない」
　仕方なしに、鈴音は頬を朱に染めながらそっと翠子の耳元で囁いた。
「ふーん。いーじゃない、ラブレターの一枚や二ま」
「ちょ、ちょっと翠子っ」
　鈴音は耳まで真っ赤になり、慌てて翠子の口を塞ぐ。そして傍から見ればじゃれあっているような二人の姿を、彼は遠目で窺っていた。
「それにしてもマッキーが鈴音にねえ。むむう、意外や意外」
「牧原くん、マッキーって呼ばれてるんだ」
「知らないの？」
「知らない。だって去年はクラス違ったし、今年だってまだクラスの人の顔と名前、覚えきれてないし」
　学校であろうと授業中であろうと関係なく人格が交代するため、昔から鈴音は

クラスメイトの顔と名前を覚えるのに時間がかかった。
「にしてもマッキー、鈴音には大葉先生って大人の男がいるとは知らないのね」
「だから一実さんとは、そんなんじゃないってば」
「へぇー。どうだかねー」
湯気の出てきそうなほど赤い鈴音の顔を見て、翠子はニヤニヤと笑う。
「……翠子のいぢわる」
「で、どうするの。オッケーするの?」
「オッケーも何も、わたし、あんなことしちゃって……正確にはわたしじゃないけど、うう、気が重いなあ」
「マッキーも目の前で一世一代の手紙を破かれて、まだ望みを捨てないでいるほどタフには見えないか。ま、あんたがやったわけじゃないんだから、気にしても仕方ないんじゃない」
「でも体はわたし、なわけだし……」
「そうよねえ。マッキーってば、こんな多重人格娘のどこを好きになったのかしら」
「翠子、それひどい、ひどいよっ」
笑いながら走り出した翠子を鈴音が追いかけようとした、その時だった。
「ぐつぐつ、ぐわぐわ」
沸騰する電波に刺激され彼女の中の「彼」が目覚める。
鈴音、いや犬飼は踵を捻り土埃を舞わせる百八十度ターン。鋭い猟犬の眼は先日も見た牧原智生の姿を捉えていた。
自販機に隠れるように鈴音と翠子の姿を見ていた彼は、走り出した途端に自分へと振り向いた相手の視線に硬直してしまう。
マッキーの手にはまた手紙が握られていた。翠子の予想に反して、彼は目の前で一世一代の手紙を破かれても、まだ望みを捨てないでいるほどタフだった。しかし書き直した手紙を渡そうとした彼だが、先日と同じく尾行するような形になってしまったのが不幸か。
「どうしたの鈴音?」
振り向いた翠子は、鈴音の視線の先に牧原智生を見つける。
「噂をすればマッキーじゃない。ほらほら、どーすんのよ鈴音」
明るい調子で鈴音の背中をばんと叩く翠子だが、
「あいつ、また沸騰する電波を飛ばしてやがる」
その言葉に表情が凍りつく。
「え、犬飼なワケ? ちょ、ちょっと待って、待ちなさいっ」
翠子の制止を振り切り、犬飼は電波を沸騰させる眼前の目標に吶喊(とっかん)。
「不快な電波、この世から消えてしまえ!」
そして爽やかな朝の通学路に、哀れな少年の絶叫が盛大に響き渡った。

白い恋人

平坂読

Illustration／ヤス

僕には二句河梨ましろという名前の幼なじみがいた。いた、と過去形なのは彼女が十年前に親の仕事の都合で引っ越してしまったからというだけではなく、三年前から行方が分からなくなっているからというのが一番の理由である。二句河梨ましろという名前の女子中学生が行方不明で警察が捜索中だというニュースをテレビで見たときは単なる同姓同名の別人だと思ったのだが、年齢も同じだし事件の起きた場所は彼女が引っ越していった先と一致したのでちょっと調べてみたところ悪い予感は見事的中、行方不明になったのは僕の幼なじみに間違いないということが判明した。単なる家出で今もどこかで元気に暮らしているのか、それとも何らかの事件に巻き込まれて風俗や外国にでも売り飛ばされたとか、さらに最悪のケースで既にこの世にいないとか——いずれにせよ、警察の捜索も打ち切られた今では一介未満の高校生たる僕には彼女の行方を知るすべもなく、それを知りたいとも特に思わない。十年も顔を見ていない人間のことに関心を持てるほどの心の余裕が僕の日常には存在しない。ただ、少し残念だな、とは思う。何故ならましろは七年前に他界した僕の祖母を除くと、僕の生涯で僕のことを好きだと言ってくれた唯一の異性であり、冗談半分だったとはいえ結婚の約束までした仲だったからだ。ギャルゲーで言うならば「幼なじみフラグが立った」状態だったのである。どうだ羨ましいか。……………ハァ。虚しい。もう夜中の二時なので寝よう。明日も学校だし。憂鬱な気分になりながら、僕は起動させていたエロゲーを終了してパソコンの電源を落とした。共通ルートのCG回収もフラグ立ても無事に終わって個別ルートに移行したから、明日には委員長を攻略できるだろう。

□　□　□

翌朝。僕がいつものように目覚まし代わりの着メロ（やっぱり栗林みな実は最高だと思う）で目を開けると、視界に何やら白いモノが飛び込んできた。

「……ぱんつ？」

不意に視界に飛び込む白いモノ＝ぱんつという頭の腐ったエロゲーマーみたいな連想を口に出しながら眠たい目を細め、枕元にあった眼鏡をかける。そして、もう一度その白い物体……まるでベッドに寝転がる僕の顔を覗き込んでいるかのようなその物体を、見る。

…………あー、……あぁ？　……まあ、なんというか、それは、……白骨だった。

ところどころ黄ばみ、薄汚れた、人間の全身白骨だった。英語で言うとボーンというかスケルトンだった。べつに英語で言わなくていい。……以前同じようなものを学校の保健室で見たことがあるけれど、ポリウレタン製でつやつやしていたあれよりも妙にざらついた質感で、まるで本物のような印象である。……というか、なんで、こんなものが僕の部屋に。意味が解らない。と、そのとき。

カタカタ。

「――――ひッ!?」

僕の顔を覗き込むような形で立っていた白骨の頭蓋骨のアゴ部分が、まるで笑うように上下したため、思わず情けない悲鳴を上げてしまった。

う、動いた……？　今、この白骨、笑わなかったか……？

カタカタ。

そんな僕の疑問に答えるかのように、白骨が再度顎を鳴らし……それだけではなく、なんと「やあ」と挨拶でもするかのように、右腕を上げたではないか。

……よく見ると間接部分はわずかに離れており、骨と骨は完全に接続されているわけではないらしい。となると、上から誰かがピアノ線か何かで吊っている……？　……上を見る。そんなわけなかった。天井には何もない。

カタカタ――……

骨が再び顎を動かし、そして今度は僕の方を指でツンツンしてきた。慌ててベッドから跳び退る僕。な、なにこれ。なにこの骨。どんなトリックで動いてるんだ？　まじまじと観察していると……骨は次いで僕から離れ、部屋にあった机の上から、器用にノートとシャーペンを持ち（力が入らないらしく「持つ」というよりは「摘む」といった印象だ）、再び僕の前にやってくる。そしてノートを僕に差し出す。

「……えーと……ノートを開けってこと？」

僕が尋ねると、骨はコクコク頷いた。逆らうのも何となく怖かったのでとりあえず従い、ノートの白紙のページを開いてやる。すると骨は、たどたどしくシャーペンをノートに近づけ、かろうじて文字だということだけは伝わるような貧相で大きさもデタラメな文字を書き始めた。わ（のように見えなくもない文字）た（だと思われる）し（じゃないかなあ……？）は（多分そうだと思う）ま（形から推測するにそうだろう）し（いや、もしかして片仮名のレかな？）ろ（数字の3あるいは「う」かもしれないがそれを判別する術を僕は持たない）…………終わりらしい。

「えーと……わたしはましろ。……わたしはましろ……私はましろ？」

僕は怪訝な顔で骨の顔をまじまじと見つめる。暗い空洞の眼窩。どこをどう見ても骨。質感までリアルに再現された、

良くできた頭蓋骨の標本。骨は、さらにたどたどしくノートに文字を綴る。
「あ、い、た、か、つ、た」会いたかった。「あ、な、た、に」あなたに。「お、ぼ、え、て、ま、す、か」覚えてますか。「や、く、そ、く」約束。「け、つ、こ、ん」血痕……じゃないな、結婚だろう。……結婚の約束を覚えてますか。……僕が結婚の約束をした相手など生涯に一人しかおらず、そしてその幼なじみの名は、たった今彼女が名乗った（?）のと同じ、
「……えーと……ましろ、なのか?」
　僕が引きつった顔を浮かべながら掠れた声でその名を呟くと。白骨は、ガタガタと嬉しそうに（?）激しく首を上下に振った。マジでか。

□　□　□

　それから筆談を通じてかろうじて入手した情報によれば、二句河梨ましろは三年前何者かに突如車に押し込められ、目隠しをされたまま複数の男に散々輪姦された挙げ句に首を絞められて殺害されたという。遺体は山奥に埋められた。死んだ筈なのに不思議なことに意識だけはあったましろは自分が殺されたことを嘆き、かつて結婚の約束をした僕と会えないことを死んだあともすごく未練に感じていた。微生物によって肉が分解され骨だけになっても、その強い願いは途絶えなかった。すると不思議なことが起きた。気がつくとましろの身体（というか骨）は冷たい土の中から転移し、昔二人でよく遊んだ公園に立っていたのだ。筋肉すらないにもかかわらず自分の意思で歩いたり腕や指を動かしたりできるようになっていた。奇跡が起きたのだとましろは喜んだ。はいはい奇跡奇跡。奇跡ってすごいね。素晴らしいね。ビバ奇跡。
……まったく、なんでこんな中途半端な奇跡なんだよ。肉体も完全復活とか、それがダメならせめて幽霊くらいにはしてくれてもバチはあたらないんじゃないのか。ナニユエに、固体識別すら不可能な白骨のまま復活……。
「……なんなんだよほんとに……」
　僕は思わず口に出して呟いていた。するとすぐ近くで嘲笑するような声が上がった。
「うわ、なんかあいつ今ブツブツ独り言いってなかった?」
「エロい妄想でもしてたんじゃね?　うはっ、キモっ!」
………。
　僕は羞恥心と屈辱で顔が熱くなるのを自覚しながら、聞こえなかったような素振りで机に突っ伏し、寝たふりをした。それに対しまたしても「あはは、寝たふりしてやがる」とかいう嘲笑が聞こえたけれど、僕は努めて無視する。
　僕が今いるのは僕の通う公立＊＊高校の二年＊組の教室だ。ましろ（と名乗る白骨）の話を聞いていたらいつの間にか学校に遅刻しそうな時間になっていたので、仕方なく彼女（白骨に『彼女』とい

うのもアレだが……）を部屋に置いて学校に来たのだ。来たくなかったけど、サボったりしたらまたクラスの連中に何を言われるか分からないし……。どうせあと半年も我慢すればクラス替えなんだから、それまではどうにかトラブルを避けたい。

　近くの席で僕に対する聞こえよがしな悪口に花を咲かせているのはクラスメートの女子の一グループだ。僕が何をしたというわけでもないのに、彼女たちは僕のことが気に入らないらしい。

　多分、僕の容姿が人より劣っているからだと思う。背が低いうえに少し太っているし、髪型にもあまり気を使ってないし。それから、運動能力や学力も平均以下というのも原因かもしれない。もしかすると携帯電話のプリキュアストラップがお気に召さないのかもしれない。……つまり、その。僕はいわゆる、典型的な非モテ系のオタクというやつなのだ。だが僕だって、高校生のくせにあんな茶髪で厚化粧の連中に好かれたいとは全然思わない。あんな連中、僕が今やっているゲームに登場する美少女たちに比べたら、顔もスタイルも性格もありとあらゆる点において遥かにスペックを下回る劣化コピー、いやそれどころか同じ性別であることさえ疑わしいほどに劣っているのだから。自分の意思も持たずただ走性のように流行を追いかけるだけのダッチワイフども。今日のドラマがどうしたとか＊組の誰々が付き合っているだとか＊組の＊＊＊はイケメンだとかいう低俗な話題ばかりを毎日飽きもせず繰り返すだけの淫売どもめ。見てくれがよければそれでいいんだろ盛りのついた雌犬ども。お前らに＊＊＊ちゃん(幼なじみキャラ）や＊＊＊たん（妹キャラ）や＊＊＊さん（お嬢様キャラ）の足の爪の垢でも脳に詰め込んでやりたいよ。どうせお前らなんて、将来はＤＱＮ（ドキュン）な会社に入ってＤＱＮの主催する合コンで知り合ったヤリチンＤＱＮとでも出来ちゃった結婚してＤＱＮな親に似てＤＱＮ面（づら）したＤＱＮな子供の養育で身も心も腐りかけたＤＱＮババアになるＤＱＮ人生が待ってるんだ。今だけはせいぜい僕みたいなオタクをバカにするなりして糞みたいな虚栄心を満足させてればいいさ。

「なにニヤニヤしてんだろあれ」

「ほんとキモいよなーあいつ。はやく死ねばいいのにっ」

「キャハハ、ほんと死ねって感じ」

　そんな悪意ある言葉とともに、僕の頭に微かな痛みが走る。どうやら消しゴムのカスでもぶつけられたようだ。本当にリアル女は最悪だ。あいつらこそ全員死ねばいいのに。クラスの男たちは、同情っぽい視線で遠巻きに僕を見るだけで誰も助けようとしてくれない。あいつらも所詮はヤりたい盛りのオス犬だから、女子達の機嫌を損ねてヤらせてもらえなくなるのが怖いんだろう。僕をスケープゴートにしておけばとりあえず自分は安全だというわけだ。まったくどいつもこいつ

もクズばっかりだな。
と、僕が憎悪をたぎらせていたそのとき。
「ねえ、＊＊君」
不意に澄んだ声がかけられた。慌てて僕が顔を上げると、そこには綺麗な長い黒髪が印象的でいかにも清楚な美人といった顔立ちの少女が立っていた。眼鏡をかけているのもポイントが高い。クラス委員長の佐伯さんだった。
「な、なに？」
女の子に話しかけられるなど滅多にないので、僕は上擦った声を上げてしまう。佐伯さんは僕のそんなみっともない姿を見ても他の女子達のように嘲笑したりせず、ただいつものように穏やかな笑みを浮かべ、
「＊＊君、進路希望調査、まだ出してないよね。集めてるんだけど」
「あ、す、すいません！」
僕は机の中を漁り進路の紙を探し出し、佐伯さんに手渡した。すると彼女は少し困ったように小首を傾げ、
「これ、何も書いてないけど」
……！　しまった。そういえばそうだった。昨日家で書こうとは思ったのだけど、あとでいいやと思って再び鞄にしまってパソコンを始めてしまったのだった。
「す、すいません……」
「いいよ、まだ提出していない人も何人かいるし。明日までには書いてね」
そう言って、佐伯さんは僕にプリントを返すと、他の生徒のところへ歩いていった。その後ろ姿を、僕はぼーっと見つめる。彼女だけは、クズしかいないようなこのクラスで唯一、ああして僕に普通に接してくれる。世の中の女子がみんな佐伯さんみたいな人ばかりなら、三次元世界も捨てたもんじゃないんだけどなと僕は思った。

□　□　□

いつものように、授業が終わったあとは誰とも話さず学校を出て、帰り道の小さな本屋で今日発売の月刊漫画雑誌と今週号のゲーム雑誌の立ち読みで二時間ほど（ちなみに立ち読みの最高記録は十時間なので、僕にとって二時間というのはさほど長いわけでもない）潰した後、すっかり日が落ちているのに気づき家に帰った。台所でカップ麺を作って食べ、二階に上がる。
……部屋には白骨が待っていた。ベッドの脇にちょこんと腰掛けている、ヒトの骨。足を揃えて首をごく自然に少しだけ傾けているそのポーズは、たしかに女の子みたいだった。ポーズだけは。忘れていたというか考えないようにしていたのだが、残念ながら「あれは全て寝ぼけた僕が見た夢だった」とかいうオチではないようだ。両親は朝から夜遅くまで共働きなのでこの骨の存在はまだバレてはいないだろうが、このまま放っておくわけにもいかない。さて、どうしようか

……。箪笥に隠す、壁に塗り込める、遠くの山に埋める……って、これじゃあまるで僕が殺人犯みたいだ。
「……ましろ」
僕がそう呼ぶと、彼女（うーんやっぱり違和感があるなあ……）は立ち上がり、カタカタと嬉しそうにこちらに寄ってきた。動く白骨死体に詰め寄られる——字面的には完璧にホラーなのだが、あまり怖いという印象はない。同じ死体なのに、中途半端に生物の形を残しているゾンビなどとは違ってあまり生理的な嫌悪感を感じないのだ。まあ、ましろの動きが妙に乙女ちっくで外見とのギャップがちょっと面白いというのも原因なのかもしれないのだが。
「……なあ、ましろ」
僕はどう切り出して良いか迷いながら、そう言った。ましろは「なに？」という感じで首を傾げる。
「お前はこれからどうするつもりなんだ？」
と僕が問うと、「どうするって何が？」という感じでまた首を傾げる。ヤバい、なんか普通に骨と意思の疎通をしてる僕がいるし。
「だからさ、いつまでも白骨死体を部屋に置いておくわけにもいかないだろ。親とかにバレたら大変だし……」
するとましろはとてとてと僕の机の方へ行き、朝にも僕との筆談に使ったノートに何やら書き始めた。『や』『く』『そ』『く』……やくそく。約束。…………十年以上も前の、結婚の、約束。
「まさか……お前、僕と結婚するとか言うつもりじゃあ……」
ましろはさらにノートに書く。
『やっぱりだめかな？』
「当たり前だ！」
『どうしても？』
「……どうしても。つか、普通に考えれば解るだろ。まったく、脳味噌入ってんのか？」
ついつい乱暴な言葉になる。まるで子供の頃に戻ったみたいに。
「いいかましろ……お前はもう……死んでるんだよ。それは解ってるんだろ？」
こくん、と頷く。
「だったら結婚なんてできない」
『アイがあれば』
「できるか！　ていうかそもそも、僕はノーマルなんだ。白骨死体を恋愛の対象にするなんてできるわけないだろ」
僕がハッキリそう言ってやると、ましろは傍目にも判るくらいがっくりと肩を落とした。そしてとぼとぼと部屋の隅に歩いていき、そこで膝を抱えてうずくまった。どうやら落ち込んでいるらしい。
……知ったことか。
僕は呆れつつ、本当にこの自称幼なじみの骨をどうしようかと考えた。が、さっぱり分からないのですぐに諦めた。学校の勉強ってほんとに役に立たないな。
……まったくほんとに、なんでこんなのが来てしまったんだか……。突然やってくるのは美少女と相場が決まってるだろ

うに。そんなゲーム脳的腐れ思考。
　うだうだ考えても答えが出るわけでもないし、気分を紛らわすためにゲームでもするか……。そう思い、僕はパソコンの電源をいれた。ウィーンという起動音を聞いていると何だか気分が落ち着いてくる。まるで自分が本来いるべき場所に帰って来たような感覚。ひょっとして僕ヤバい？　……まあいいや、どうでもいい。デスクトップのショートカットアイコンをクリック。昨日と同じエロゲーを立ち上げる。CD-ROMの回転する音。これまた落ち着く。画面がばちん、とフルスクリーンモードに切り替わり、メーカーロゴが表れ、綺麗なピアノ曲とともに大勢の美少女（攻略可能なヒロイン達）が立ち並ぶタイトル画面。「つづきから」をクリック。昨日の続きのデータを読み込む。画面の前に眼鏡をかけた黒髪ロングの美少女が出現。彼女こそが僕が現在攻略中のキャラクターであり、普段は真面目な委員長として通っていてクラスメートからも頼りにされているのだがそんな自分を窮屈に感じており、じつはこっそりタバコを吸っていたりするのだ。それを僕（まあ正確にはこのゲームの主人公）が偶然見かけてしまい彼女は僕に誰にも言えなかった悩みを打ち明けたあと走り去ってしまった。この一枚絵（雨の中涙を浮かべて走る委員長のグラフィック）、かなり気合入ってるな。眼福眼福。そして、あとを追うか追わないかの選択肢が僕に突き付けられる。さあどうする僕。ここはそっとしておくべきなのか、それともおせっかいだと言われようとも彼女を助けるのか。……まあ追うんだけどさ。昨日攻略サイト見たらそれが正解だって書いてあったし。というわけで一応あとでバッドエンドも回収するために一旦セーブしつつ、「あとを追う」をクリック。
　と、そのとき後ろからポンポンと肩を叩かれた。ましろだった。僕が仕方なく振り返ると、彼女はパソコンの画面を見て不思議そうに首をかしげた。どうやら興味があるらしい。そういえばましろは、自分ではゲームをやらないくせに、僕が一人用のRPGやアクションゲームをやっているのをいつも横で楽しげに見ていたっけ……。
「アドベンチャーゲームみたいなもの。女の子と仲良くなるのが目的の」
　僕はとりあえずそんな適当な説明をしてやった。ましろはよく解らなかったようでまたも小首をかしげ、それから僕の隣に座った。姿勢は一見正座なのだが、よく見ると大腿骨と腓骨がくっついておらず、ものすごく疲れそうな感じだった。
……隣に白骨（こんなの）がいるとちょっと落ち着かないのだが、気を取り直して僕はゲームを再開することにした。
　僕（厳密にはゲームの主人公）は走り去った委員長を追う。雨の中、傘もささずに。何故なら僕にとって、自分が風邪をひいてしまうことよりも委員長の方がずっと大事だからだ。僕は委員長が好き

なのだ。格好いいな僕って。もしも僕が女で現実にこんな一途に自分を想ってくれる奴がいたら絶対惚れるって。
　そして僕は委員長に追いつく。雨は上がっていたが二人ともずぶ濡れだった。何故追いかけてくるのかと泣きながら問う委員長に、放っておけないからと答える僕。何故放っておけないのかという問いで三つほど選択肢が出たのだが迷わず「＊＊（委員長の名前）のことが好きだから」を選ぶ。他の二つの選択肢も僕から見ればさほど不自然ではない回答だったけど、攻略サイトにこれが正解だと書いてあったから。
「え？」と委員長が驚いた顔をする。そして彼女はしどろもどろになりながらも、実は自分も僕のことが好きだったのだと告白してくる。いい子を演じ続けて来た彼女にとって、クラスでちょっと浮いてるけど自由な感じのする僕は腹立たしくもあり羨ましくもある存在で、僕のことを見ているうちにそれが恋心に変わったのだという。実は両想いだった二人はキスをする。そして両者とも濡れ鼠だということに気づき、「服を乾かそう」という名目で近くにあったホテルに入る。
　ホテルの中でも僕と委員長は恥ずかしい会話を交わし、やがていい雰囲気になりエッチシーン突入。童貞のくせに僕はやけに手慣れた様子で指を使ったり口を使ったりして委員長の身体を色々弄る。そしてモザイクのかかった場所に肉棒を挿入。委員長が処女のくせにとても気持ち良さそうに喘ぐ。エロゲーの奥手な主人公はエッチシーンではオヤジ化し、清楚可憐なヒロインは娼婦になる法則。あっ、あっ、あっ、＊＊君（もちろん呼ばれているのはゲームの主人公の名前なのだが、僕は脳内でこの部分を自分の名前に変換する技能を会得していた。あとどうでもいいけど、仕事とはいえエロゲーの声優さんは大変だなあと思う。でもやっぱり声はないよりあった方がいいと思うのでこれからも頑張ってほしい）、＊＊君、熱い、んっ、ああっ、＊＊君のがっ！　＊＊君のがっ！　と、このように数十行にわたって委員長は喘ぎ続け、最後に僕は委員長の膣内に射精した。あああああ〜〜〜という委員長の絶頂の声と同時に画面がホワイトアウト。
　と同時に。
　どたっ。僕のすぐ横で何かが倒れる物音がしてとても驚いた。倒れたのはましろだった。どうしたんだろうと顔……というか頭蓋骨を覗き込むと、ましろはいきなりむくっと起き上がり、何故か僕の頭をぽかぽかと叩いてきた。スカスカの細い棒で叩かれているような感じであまりというか全然痛くないのだが、それでも鬱陶しい。
「なにするんだよ」
　僕が言うとましろは叩くのをやめ、ぷいっと顔を背けた。意味が解らない。仕方ないので推測。……うーん……えーと……もしかしてアレかな？　こいつ、恥

ずかしがってたりするのかな？　このゲームは純愛系だからそれほどハードなエッチシーンでもなかったんだけど……って、そういう問題でもないのか。
そんなことを考えていると、ましろは今度はくいくいと僕の服の袖を引っ張り立ち上がった。そして部屋のドアを指さす。
「……外に出ようって？」
こくん、と頷くましろ。……まあ、時刻はもう九時半をまわり、うちの近所は暗くて人通りもほとんどないから、注意して歩けばましろの姿を見られる危険は避けられるだろうけど……。なんで外に？　僕の気乗りしない表情を見て取ったのか、ましろはさっきより強く僕の服を引っ張る。
「分かった、分かったから。ちょっとセーブするから待ってろ」
性行為を追えたあと全裸でベッドに横たわる委員長のＣＧに別れを告げつつセーブ。パソコンをスタンバイモードにして僕は立ち上がった。

□　□　□

家を出て、暗がりの中ましろは僕の前を足音も立てずに軽やかに歩く。というかまあ、骨だけなので実際に軽いのだろうが。ときおり僕がついて来ているか確認するかのように振り返るましろ。まったくどこへ行こうというのだろうか。ましろにとってこの街は十年ぶりになる筈なのだが、その足取りにはまったく迷いがない。
十五分ほど歩いただろうか。あまり遠くまで出歩くとそのぶん人に目撃される可能性も高くなるので、僕はそろそろ家に戻ろうと思った。と、そのとき不意にましろの足が止まる。そして僕はようやく、彼女がどこに向かっていたか理解した。ましろが見つめる先にあるのは、砂場やブランコといった最低限の遊具とゲートボールコートがあるだけの小さな公園だった。僕とましろはこの公園で二人よく遊んでいた。おぼろげにしか覚えていないのだが、婚約イベントのフラグを立てたのもこの公園だったような気がする。
どことなく浮かれているようにも見える足取りで、十年前と何も変わらない公園へと入っていくましろ。僕も彼女に続いて公園に入る。砂場のあたりでましろはくるりと振り返り、さらに両腕を広げてくるりと軽やかに一回転。まるで幼い少女のようなその行為。外見は白骨なのに、僕はその姿に高校生になった二句河梨ましろの姿が重なって見えた気がした。思い出だから美化されているのかもしれないけれど、十年前の彼女は美少女と呼んでも差し支えない可愛い女の子だった。本当に……彼女が骨じゃなくてちゃんとした肉体があったらなあ……。
と、ましろが僕の方にやってきて「どうしたの」とでも言いたげに上目遣いに僕を見つめてきた。ただし眼球がないけど。そんな彼女に、僕は、

「なあましろ、お前がどうして僕をここに連れてきたのかは知らないけどさ、僕はやっぱり、お前と結婚したりとかはできないよ」

するとましろは、辛そうに（？）顔をうつむけ、やがて顔を上げ何故か、砂場の方に歩いて行った。そして何やら砂に手で文字を書き始める。不思議に思いながら僕も砂場に近づき、砂に書かれた文字を見る。

き　に　し　な　い　で

「……気にしないで」

僕が読み上げると、ましろはさらに文字を綴る。

わ　か　っ　て　た

「……わかってた、か」

僕と結婚することができないことなんて、わかっていた。そういうことだろう。

「ごめんな」

謝ってどうなるわけでもないけれど、とりあえず僕は謝った。ましろは首を振り、

だ　い　じ　よ　う　ぶ

「そっか」

ましろはもう一度大きく頷いた。

□　□　□

それから僕は公園の砂場でましろに、彼女が引っ越してしまったあと、これまで僕がすごしてきた十年間について話した。小学校四年のときにいじめられて登校拒否になりかけたこと。中学一年のときオタクのクラスメートと仲良くなり、そいつの影響でアニメにはまり、さらにはギャルゲーにも手を出すようになったこと。別々の高校に進学して半年ほどでそいつが自殺したこと。葬式のときそいつの親から僕宛に遺された段ボールを渡されそこには彼が貯金をはたいて買った十八禁のエロゲーが幼稚園児の夢みたくバカみたいにたくさん詰まっていて、今やっているゲームも実は彼の遺品だということ。

誰かに話すどころか思い出すのも厭になるような話なのに、自分でも驚くほど素直に言葉が出てきた。そして話は僕の現在にまで及んだ。クラスの連中（特に女子）にキモいとか言われて馬鹿にされていること。そのきっかけは僕が休み時間にカバーをかけずライトノベルを読んでいたのを誰かが突然キモいと言い出したのが始まりだったこと。そしてクラスで孤立している中、委員長の佐伯さんだけはそんな素振りを一切見せずに普通に接してくれること。佐伯さんは眼鏡がとてもよく似合う美少女であること。佐伯さんは大人しそうな雰囲気なのに実は運動神経も抜群で陸上の高跳びで県代表にまでなったということ。佐伯さんは数学が得意で、

くいっ、くいっ、

不意にましろが服の袖を引っ張った。そして彼女はまた砂場に文字を書き始めた。

す　き　な　の？

「な、何が？」
思わず上ずった声で聞き返す僕。
さ　え　き　さ　ん
「佐伯さんのことを僕が好きかですと」
こくん、と頷くましろ。僕は言葉に詰まる。そりゃあ彼女はクラスの他の女子とは比べるのも失礼なくらいいい娘だ。でもだからといって安易に何でもかんでも恋愛感情に結び付けるのは……と、そういえばつい最近もこんな自問自答をしたような既視感に襲われる。思い出してみるとそれはゲームの中の話で、主人公も委員長に対してそんな感情を抱いていた。そういえばあのゲームの主人公と委員長は驚くほど僕と佐伯さんに重なる部分がある。委員長と佐伯さんは、顔の作りはそれほど似ていないのだが眼鏡とか黒髪とか記号的な部分がそっくりだし、さらに二人が互いを意識し始めるきっかけは「授業中などによく目が合う」というもので実は僕と佐伯さんも結構よく目が合ったりするのだ。僕は合うたびに逸らしてしまうけど……。や、やっぱりそうなのかな……？　僕は佐伯さんのことがす、好きなのか……？　ちょっと待て、授業中よく目が合うということはもしかして、ゲームの二人が知らず知らずのうちに互いを意識していたみたいに佐伯さんも僕のことを……
「そ、そんなことあるわけないよなこやつめハハハ、さ、そろそろ帰るぞ」
僕はそう言ってましろに背を向け、公園の出口に向かい歩きだした。するとその肩をましろがそっとつかんだ。
「な、なに？」
振り返らずに僕が尋ねると、ましろは突然僕の背中をちょっと力を込めてなぞった。……？　何のつもりだろうと僕が思っていると、ましろはさらに繰り返し僕の背をなぞる。しゅっ、と縦に。すぅっと横に。しゃあっ、すう――、すっ、すす――、ひゅんっ…………あ、もしかするとこれって……
「背文字？」
するとましがは手を止め、背後で頷く気配がした。それからまた指を背に。くいっ、しゃっ、にゅう、ちょん、ちょん、
「……『が』……かな？」
頷く気配。すっ、くいっ、ぬうっ、ひゅん、
「……『ん』？」
頷く気配。がん。もうこの時点で正解の予想はついたのだが、僕はましろの書く背文字を一字ずつ読み上げる。
「『ば』」
「『つ』」
「『て』」
がんばつて。
僕はましろの方を振り返り、
「頑張って……って言われてもなあ……」
苦笑いするしかない。するとましろは、自分がついているから大丈夫だといわんばかりにいつにも増して力強く頷いたのだった。
「……はいはい。頑張ってみるよ」

□　□　□

翌朝。昨日と同じく着メロ（今朝はKOTOKO。僕は毎日着メロを変えるのだ）で目が覚めた僕は、またしてもましろを部屋に残したままちょっと早目に学校に登校した。朝から雨が降っているので、朝練を体育館でやる部活に入っている生徒以外はほとんど来ていなくて、僕のクラスでもまだ誰も登校していない。僕は鞄の中から進路希望調査を取り出して「進学」と書いた。目標の大学名は適当に二流の国公立大学を幾つか書いておく。僕の成績では行けるかどうかは判らないけど進路に迷った時にはとりあえず国公立に進学と書いておけばとりあえず親や教師は安心してくれる。そしてそれが、いずれ本当に将来の岐路に立たされたときの「親や教師が行けと言ったから」という言い訳の理由になってくれるのだ。

時刻は予鈴が鳴る約三十分前。進路の紙を書き終えてほどなくして、一人の女子生徒が教室に入ってくる。佐伯さんだ。彼女がいつもクラスで一番早く来るということは机に突っ伏して寝たふりをしながらクラスの女子達の会話に聞き耳を立てて知っていた。

佐伯さんは僕を見て少し驚いた顔をしたけれど、すぐに笑顔になって僕に「おはよう」と挨拶してくれた。僕も「お、おはようございます」と返す。佐伯さんが自分の席に鞄を置く。

ああ緊張する。教室に彼女と二人きりでいるなんて、なんて嬉しくもあり恥ずかしくもあるシチュエーションだろう。胃が痛い。それでも僕は内心の動揺を悟られないよう努めて冷静な素振りで、佐伯さんの席に近づいて行く。そして、

「あ、あの、佐伯さん」

勇気を出して彼女の名前を呼ぶ。佐伯さんが振り返り、「なに？」と聞き返して来る。僕は彼女に進路希望の紙を差し出す。

「こ、これ、進路の」

「あ、うん」

佐伯さんが二つ折にされたA6サイズの小さなプリントに手を伸ばす。と、そのとき僕の指と彼女の指が少しだけ触れた。僕は動揺を顔に出さないよう必死で堪えた。指が触れたくらい、べつにどうということもないのだという顔を作る。

……接触の瞬間、佐伯さんが少しだけ顔をしかめたようにも見えたけど……きっと僕同様に緊張していたためだろう。

プリントを受け取りそれを机の中にしまおうとする佐伯さんに、僕は、

「あ、あの、出すの遅れてすいません」

と謝った。佐伯さんは気安い口調で「べつにいいよ」と言った。さらに僕は、「そういえば今日の数Bって宿題ありましたっけ」と勇気を出して尋ねてみた。すると佐伯さんは思い出すように視線を少しさ迷わせて、「ないよ」と答えた。「そ、そうですか。ありがとうございます」と

僕は言って、自分の席に戻った。よし、作戦はまずまずといったところだろう。進路の紙をきっかけに佐伯さんとちょっとでも会話をして、明日もきっかけを見つけては少しずつ佐伯さんと話す。……いきなり「好きです」と告白することなんて僕には絶対に無理だから、こうして地道に少しずつ好感度を上げていこうというわけだ。今日は始めの一回としてはまあ、上出来といったところだろう。明日はもっと自然に話しかけられる気がする。僕は満たされた気持ちで、自分の席に戻った。

　他のクラスメートが登校してきたあとは、いつものように聞こえよがしに悪口を言われたりしたけれど、もう全然そんなことは気にならなかった。心なしか、普段よりも授業中に佐伯さんと目が合う回数が多くなったような気がするし。彼女ももしかしたら本当に、僕のことが気になっているのかもしれない。

□　□　□

けれどそれは勘違いだったのだと、僕はすぐに知る。

　五限目の生物は移動教室だったので、外のクラスメート達と同じように僕も生物室に移動したのだが、途中で資料集を忘れたことに気づき僕は再び教室に戻った。すると、教室の中から話し声が聞こえた。佐伯さんとその友達数人（佐伯さんほどではないが、うちのクラスの中ではまあマトモな部類に入る子達だ）の声だった。彼女は昼休みの間も何やら仕事をしていて、授業が始まるギリギリまでそれをねばっていたらしい。さすが佐伯さんだと僕は思った。

　と、不意に。教室の中から僕の耳に、聞き慣れた単語が飛び込んで来た。

　キモい。

　……それはよりによって佐伯さんの声のように聞こえた。

「なんかマジであいつキモいよ。授業中いっつも私の方ばっか見てるし……今朝なんかプリント渡されてそのときちょっと手に触っちゃたし。もう最悪」

「え～マジで？　汚え～。手ぇ洗ったぁ？」

「＊＊（それは当然のように僕の名前だった）って友美子（それは佐伯さんの下の名前だった）に惚れてんじゃないの？　友美子、クラスん中で一人だけ＊＊に優しいし。いーんちょーさんの成績稼ぎも大変だね」

　次いで、佐伯さんの、とても彼女のものとは思えない下品な言葉遣いの台詞。

「ったく、社交辞令だっつーのバカ。気づけよー。だからキモオタは最悪なんだよ。空気読めないし。マジ死んでほしい」

　……耐えられなくなって、僕はその場から逃げた。資料集は結局授業ではほとんど使わなかったので問題はなかった。

　授業中、僕は何度か佐伯さんと目が合った。普段と変わらないように見える

その眼差しの中に、明らかな侮蔑と嫌悪感が混じっている。普段と変わらない……ということはつまり、この授業のずっと前から、僕は佐伯さんに嫌われていたということだ。僕が今更になって気づいただけで。
佐伯さんはただ、委員長としての義務から僕を露骨に避けたりしなかっただけに過ぎない。成績稼ぎも……と言っていたけど、多分、もしも僕が登校拒否になったり自殺したりとかしてしまうと、クラス委員としても色々面倒だという打算が働いたのだろう。
なんだ……佐伯さんも所詮は他の連中と何も変わらない、薄汚い売女の一人だったってことか。ゲームの委員長も完璧な自分を演じてみんなから頼りにされることに疲れていたけれど、彼女の根底には、自分が頑張ることがクラスのためになるならそれでいいのだという自己犠牲的、滅私奉公的な美しい精神があった。教師に気に入られて成績を上げようとか、そんな薄汚い打算は一切なかった。委員長佐伯友美子なんかとは大違いだ。委員長を佐伯友美子と重ねてしまったことを、今更ながら僕は大いに恥じた。死ね。死ね死ね、みんな死んでしまえくそったれ。クラスの女子共なんて全員DQNに散々輪姦された挙げ句殺されてどっかの山奥に埋められてしまえばいいんだ。
二句河梨ましろのように。
そう、ましろ……天真爛漫、清楚可憐といった形容が相応しい、僕の幼なじみ。どうして彼女のみたいないい娘が殺されて、佐伯友美子をはじめうちのクラスの女子みたいなDQN売女どもが楽しそうにヘラヘラ笑いながらケラケラ嗤いながらこの僕を嘲笑いながら生きているんだろう。まったく世界は理不尽だ。間違ってる。でも大多数の人間は頭の悪いケダモノばかりだからその間違いに気づいてなくて佐伯友美子みたいな女を見て可愛いなあとか付き合いたいなあとかチンコをブチ込みたいなあみたいなことを平気で考えたりする。ああ吐き気がする。みんな死ね畜生め。DQNな雄犬どもは全員まとめて去勢して、DQNな雌豚どもは皮も肉も剝ぎ取って骨だけにしてしまえばいい。そこは人間が外面で判断されることなく心の美しさだけを問われる楽園だ。だから世界よ、滅びろ。今すぐに滅びろ！
……そんなことを考えているうちに今日の授業は終わり、僕は逃げるようにして家路についた。

□　□　□

部屋には骨だけになった幼なじみの二句河梨ましろが僕の帰りを待っていた。
彼女は僕が落ち込んでいるのだということを目ざとく悟ったらしく、ノートに『どうしたの？』と相変わらず汚いけれど温かみのある文字を書いて僕に尋ねてきた。
「ましろ、僕はきっと、間違った世界に

生まれてきてしまったんだ。世界は最悪でクソ野郎ばかりがのうのうと生きていて、僕なんかのいる場所はどこにもないんだ」

ましろは「続けて？」と首を傾げた。

僕は訥々と、とりとめのない愚痴をましろに語った。佐伯さんと仲良くなろうとして勇気を出して自分から話しかけてみたこと。けれど彼女は本当は僕のことが嫌いで、あの優しさは偽りにすぎなかったということ。僕はどうせオタクで非モテで根暗のウジムシ野郎で、もう世界が信じられなくて憎くて憎くて仕方ないということ。

ましろの前だと、何故かとても素直に、呆れるくらいに情けない弱音が吐けるから不思議だ。彼女といると、とても心が安らぐ。

……話を聞き終えて、ましろはしばらく身動きひとつしなかったけど、不意に大きく頷いた。そして再びノートに何かを書き始める。

「えーと………大……丈………ぶ」

大丈夫。何が。するとましろは、今度はゆっくりと僕の後ろ側に回り込んできた。そして、背中を細い指ですうっとなぞる。背文字。

すっ、くいっ、くいっ、くいんっ、

「……えーと、『そ』？」

ましろが頷く。続けて、しゅっ、ひゅいっ、ぐっ、くいっ、しゅうっ、

「……『れ』？」

すっ、ぐいっ、ちょん、ちょん、

「『で』…………『も』…………んーと……『私』……『は』……『お』……え、違う？　なら『あ』………合ってるんだな。………『な』…『た』………『が』………………『女子』……ああ、『好』か……。……『き』……『で』『す』」

——大丈夫。それでも私はあなたが好きです。

そんな言葉を。簡潔だけどとても心のこもったそんな言葉を。ましろは。幼なじみの二句河梨ましろは。肉も皮もない白骨死体のましろは。僕に言ってくれた。それはとても温かで、僕の全身、全精神に浸透していくかのようだった。

僕は思った。白骨死体だから一体何だというのだろう。ましろはこうも純粋に僕のことを想ってくれている。こんなクズみたいな人間のことを愛してくれている。その心は生身の人間なんかよりはるかに綺麗だ。僕はアイドルタレントやイケメンの男にきゃーきゃー騒いでいる女どもを見て、どいつもこいつも外見だけしか見てない奴らばっかりだと心の中で馬鹿にしていたじゃないか。本当に大事なのは見かけじゃなくて中身なのだと僻み根性丸出しで愚痴る世の中の男たちの言葉に深く頷いていたじゃないか。それなのにどうだろう。いざ自分の前にましろが現れたとき、僕は彼女が白骨であるという見てくれだけに囚われて、こんなにも美しい彼女の心を全然見てこなかったじゃないか。本当に馬鹿だ僕は。僕がずっと求めてやまなかった純愛はこんな

ところにあったのに、それに気づかないなんて。僕が本当に大切にするべき人はここにいる。二句河梨ましろ。骨だけになってもずっと僕のことを愛してくれた君を、僕は愛したいと思う。君が好きだ、ましろ。

「ましろ！」

　感極まって彼女の名前を叫び、僕は目から涙をぼろぼろ流しながら両腕を大きく広げ、ましろに抱きついた。強く、強く。もう二度と離すものかというくらいに強く！　ましろ！　好きだ、大好きだましろ！　僕は君を愛してる！

と。

　――ばきっ、

　不意に耳に入ってきたそんな音。続けて、

　ばきっ、ぼきっ、めきっ、がしっ、ごきっ、ぐごきっ、ヴォキッ、ヴェキッ、べきっ、ぶぼきっ、がきっ、ぐきっ、ごげきっ、ばごっ、べきべきべきべきべきべきぼきぼきぼきばきばきばきばきばきばきばきバキバキバキバキバキバキバキバキバキガラガラガラガラガラガラガラガラがっしゃん。

　僕が思いっきり力強く抱き締めたましろの肩甲骨が、鎖骨が、肋骨が、背骨が、上腕骨が、尺骨が、まるで細い木の枝が折れるかのようにあまりにも簡単に、軽快な音を立ててバキバキと折れ砕け、バラバラになった彼女の骨がガラガラと床に崩れ落ちた。白骨の残骸。その上にちょこんと乗っかるしゃれこうべ。まるで冗談のような光景だった。考えてみれば当たり前で、ましろが白骨になってもう何年も経っているのだから骨は風化し中身はスカスカのカラカラ。そんなものを勢いよく力強く抱き締めたら、簡単に折れてしまうに決まっているじゃないか。

　馬鹿か僕は……僕は……なんてことをしてしまったんだ……。呆然と立ち尽くしたまま、僕は放心した。そして、ましろの残骸の前にへなへなと座り込んだ。

「やっと……やっと見つけたのに……僕はやっと、本当に大切なものを見つけたのに……」

　自然と漏れ出てくる、悔恨の言葉。

「やっと……ましろ……僕は君が好きだと気付いたのに……結婚でもなんでもして、絶対に君を大切にするって、そう思ったのに……！」

　僕は叫んだ。

「ましろおおおお――――――！　うああああああぁぁぁあああぁぁぁぁぁああああ――――――ッ！！！」

　絶叫の声とともに、僕の目から滝のような涙があふれてくる。人間の目がこんなにも大量の涙を流せるなんて、僕は知らなかった。悲しい。すごく悲しい。いっそ死んでしまいたいくらいだ。ましろのいない世界で、僕はどうやって生きていけばいいんだ。大切なものに気付いた途端、自分の手でそれを破壊してしまうなんて、自分のクズっぷりに腹が立つ。殺してやりたい。自分を殺してやりたい。けれどそんなことすら僕はできなくて、

ただ、ましろの前でみっともなく泣き崩れるだけ。
「……うぅ……ましろお……ましろぉ………！」
と、そのとき。
――カタカタ……
そんな、聞き覚えのある音が。聞こえた。
僕は痛いほど泣き腫らした目をこじあけて、目の前のましろの頭蓋骨をまじまじと凝視する。
――カタカタ……カタカタ……
再び、鳴った。ましろの頭蓋骨の顎が……まるで何かを語りかけるようにカタカタと動いた。
「ま、ましろ……お前、生きてる……のか？」
かすれた声で恐る恐る僕が尋ねると、ましろの頭蓋骨はそれに答えてカタカタと嬉しそうに顎を鳴らした。
「よかった……！　本当によかった……」
僕はましろの頭蓋骨を抱き上げ、そっとほお擦りをした。ましろが照れたようにカタカタと動く。
もう離さない。僕は一生、君を愛し続けるから……。僕は、心からそう誓った。

□□□

それから僕は、ましろの頭蓋骨をパソコンのモニターの上に置いた。ちょっと浮いているけれど、頭蓋骨だけならどうにかインテリアとしてごまかせそうだ。残りの骨は、まとめて袋に包んでおいた。数回に分けてゴミに出し、処分していこうと思う。
ましろの指や腕はなくなってしまい、筆談などコミュニケーションはできなくなったけど、それでもかまわない。愛の前にはあらゆる障害は無意味なのだから。
ましろにそっと口づけしたあと、僕はパソコンの電源を入れた。委員長シナリオのエンディングを見た後、いよいよメインヒロインである前世の恋人の女の子の攻略を始めよう。パソコンがうぃーんという音を立てて起動を始める。それに合わせるかのように、ましろの顎がカタカタと笑うように鳴った。デスクトップのアイコンをクリックし、ゲームを起動。タイトル画面には大勢の美少女。二次元美少女（イデア）の劣化コピーでしかない三次元の雌豚どもとは比べ物にならないほどに心も体も完璧に綺麗な女の子たち。世界にはこんなに可愛い女の子たちが大勢あふれていてマスタベーションのオカズには事欠かないし、しかもその上には僕のことだけを見てくれる可愛い幼なじみがちょこんと乗っかっている。僕の世界はなんて最高なんだろう。
ましろがカタカタ、カタカタと激しく顎を鳴らす。
ああ――僕は今、とても幸せだ。

Happy end,but no future.

キモメンの映画史 第1回

柳下毅一郎

この世に男と女が生まれたそのとき、イケメンとキモメンも誕生した。つまり、キモメンがキモメンたる真の理由は本人の顔にはない。キモメンはあくまでも他人との関係、イケメンとの相対的関係においてキモメンとなる（同時にイケメンもまたキモメンとの比較によってのみイケメンでありうる）。恋が受けいれられぬとき、人はキモくなる。だからキモメン映画はつねに恋の映画である。

キモメンの歴史が人類とともにあるのなら、キモメン映画の歴史も映画史とともにある。〝アメリカ映画の父〟D・W・グリフィスは米国最初の長編映画（にして露骨な人種差別映画）『国民の創世』だけでなく、最初のキモメン映画も作っている。『散りゆく花』こそアメリカが最初に生んだ偉大なキモメン映画だ。ヒロインはグリフィスの秘蔵っ子リリアン・ギッシュ。当時二十二歳のギッシュが演じるのはロンドンの貧民街に住む十二歳の少女である。一人でボクサーである父親の世話をしているが、父親が返してくるのは感謝でなく拳骨ばかりだ。そんな少女が出会うのが一人の中国人（演じるはリチャード・バーセルメス）。かつて布教のために英国にわたってきた仏僧だったが、夢破れ今ではチャイナタウンの片隅で小さな雑貨屋を開いている。ある日、父親からとりわけひどい虐待を受け、半死半生の少女は中国人の店の前で倒れる。中国人は少女を店に運びこみ、かいがいしく少女の世話をする。美しい服を着せ、怪我をいたわり、蝶よ花よとつくすのだ。

淀川長治先生に「どれだけ泣いたかわからない。映画は詩」と言わしめた中国人と薄幸の美少女の悲恋物語だが、よく考えたら口もきいたことのない美少女を勝手に家に連れ込み、美しい服に着せかえて愛でる男というのはかなり危険な存在だ。グリフィスのロリコン趣味炸裂である。バーセルメスはひたすら美少女ギッシュに萌えているだけなのだが、「中国人風情が……」と怒った父親によって二人は引き裂かれる。蔑まれている中国人が自分だけの世界である雑貨屋の二階で、口もきけない美少女に捧げる純情こそキモメンの愛である。

サイレント映画は美男美女の世界だと思われがちである。だが、偉大なるキモメン・スターもまた存在した。〝千の顔を持つ男〟ロン・チャニイこそ史上初の怪奇スター、自分の顔を隠すことでスターになった最初の男である。聾唖者の両親の元に育ったチャニイは子供の頃からパントマイムと身体表

現に長じていた。だが、チャニイが真にキモメン・スターとなったのはさまざまなメイクを施してありとあらゆる不具と奇形を演じてみせたおかげである。手なし、足萎え、片目、せむし……チャニイはありとあらゆる不具者を演じたが、いちばん得意だったのはなんといっても『ノートルダムの傴僂男』や『オペラの怪人』で演じた美女に愛を捧げる日陰の片輪者である。チャニイは後に『フリークス』を作るトッド・ブラウニングと組んで、キモメン映画の傑作を次々にものするが（チャニイが一九三〇年に急逝しなければ、『フリークス』もチャニイ主演で作られていたはずだ）その最高傑作が『知られぬ人』である。チャニイが演じるのは手なしのナイフ投げ芸人アロンゾである。サーカス団長の娘（ジョーン・クロフォード）の恋人がいるが、手がないのだから彼女を抱きしめることはできない（ちょうどティム・バートンの『シザーハンズ』と同じような設定である）。だが、アロンゾには誰にも教えていない秘密があった。実は両手があったのだ。手が奇形だったのを恥じ、両手を縛って隠していたのである。その手を目撃されたアロンゾは手術を受けて両腕を切断してしまう。だが手術を終えて戻ってみると、恋人は他の男（力自慢の筋肉男）の腕に抱かれているのである。アロンゾの哀しみも憎しみも、その正体すらも誰にも知られないまま物語は終わってしまう。「知られぬ人」とはキモメンのことなのだ。

現在、ロン・チャニイの衣鉢を継ぐキモメンスターと言えばフィリップ・シーモア・ホフマンである。『カポーティ』のトルーマン・カポーティ役でついに第七十八回アカデミー主演男優賞を獲得したホフマンは、決して二枚目の役などやらない、いやできない男である。『ハピネス』では隣家の美女に恋して無言電話をかけつづける変態男。『25時』では教え子の女子高生に恋をする中年童貞高校教師。『ブギーナイツ』ではデカチンの主人公を好きな気弱なホモ青年。フィリップ・シーモア・ホフマンの恋はいつも一方通行で、いつもせつない。あんなデブを好きになる女性はいないのだから。『あの頃ペニー・レインと』では実在の音楽評論家レスター・バングス役を演じ、主人公に向かって言う。「ミュージシャンっていうのはクールな連中だ。でも、音楽を聞いて、文章を書いてる俺たちはクールじゃないんだ」。主人公に「また、電話してもいいですか？」と訊ねられると「いつでも電話して

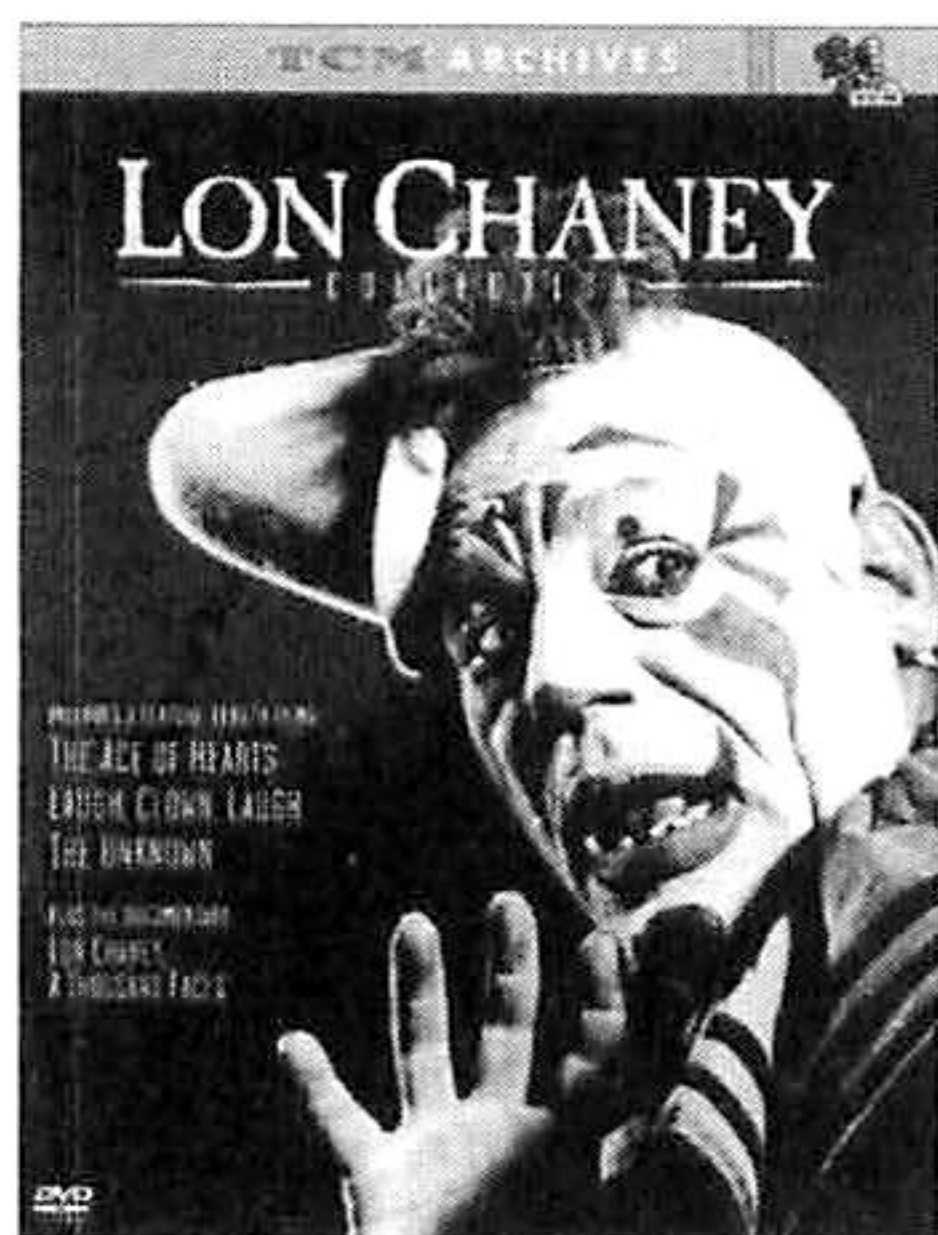
キモメン映画ベスト10（年代順）

『散りゆく花』（1919年）
『知られぬ人』（1927年）
『フランケンシュタインの花嫁』（1935年）
『汚名』（1946年）
『エル』（1953年）
『ファントム・オブ・パラダイス』（1974年）
『少しの愛だけでも』（1976年）
『シザーハンズ』（1990年）
『ダークマン』（1990年）
『ハピネス』（1998年）

おいで。俺はクールじゃないから、いつも家にいるよ」と答えるのだ。こんなにも引きこもりが似合うハリウッド・スターがいるだろうか？『ハピネス』では、ホフマンの変態男は奇跡のような巡り合わせによって美女の家に迎え入れられる。だが、二人は決して結ばれない。ホフマンに近寄ってくるのはデブのオールドミスの方である。モテない二人のチークダンスはあまりに悲しい。

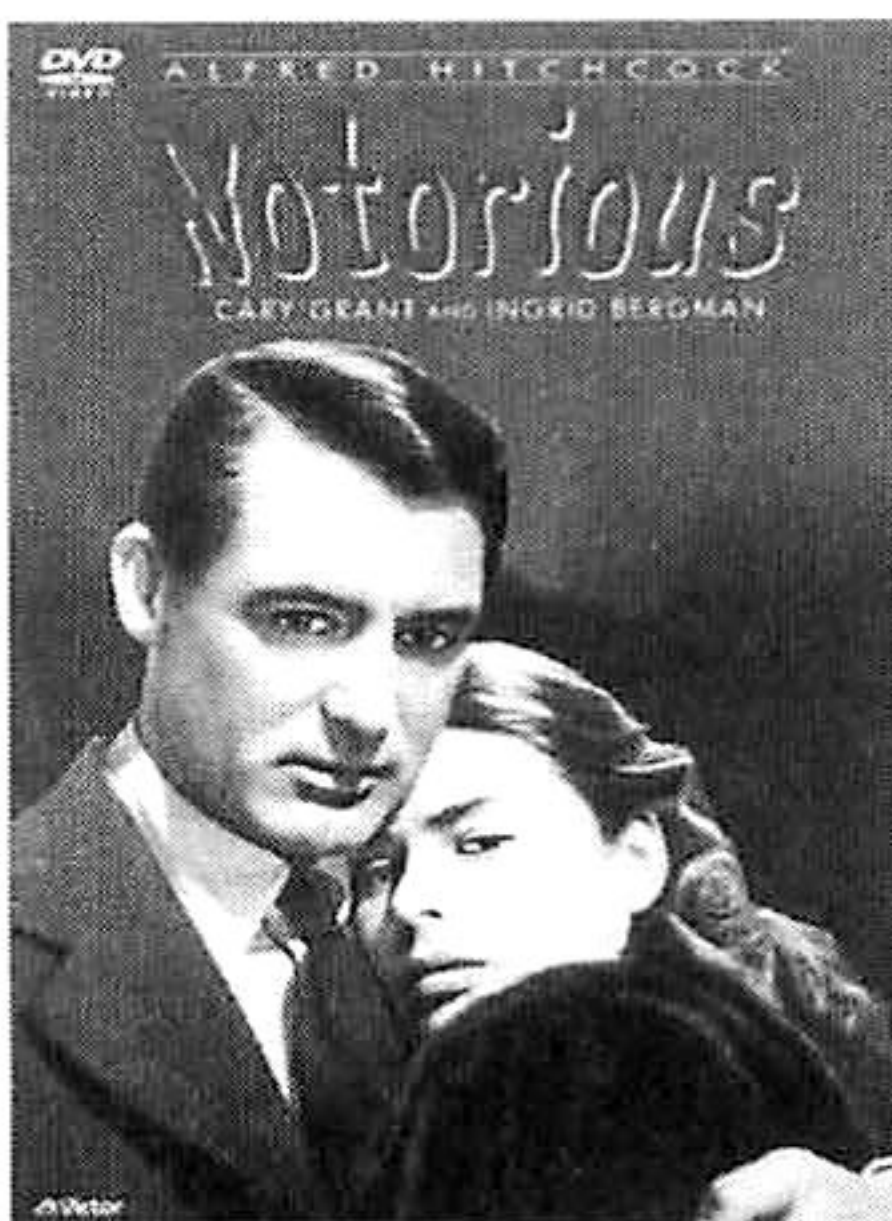
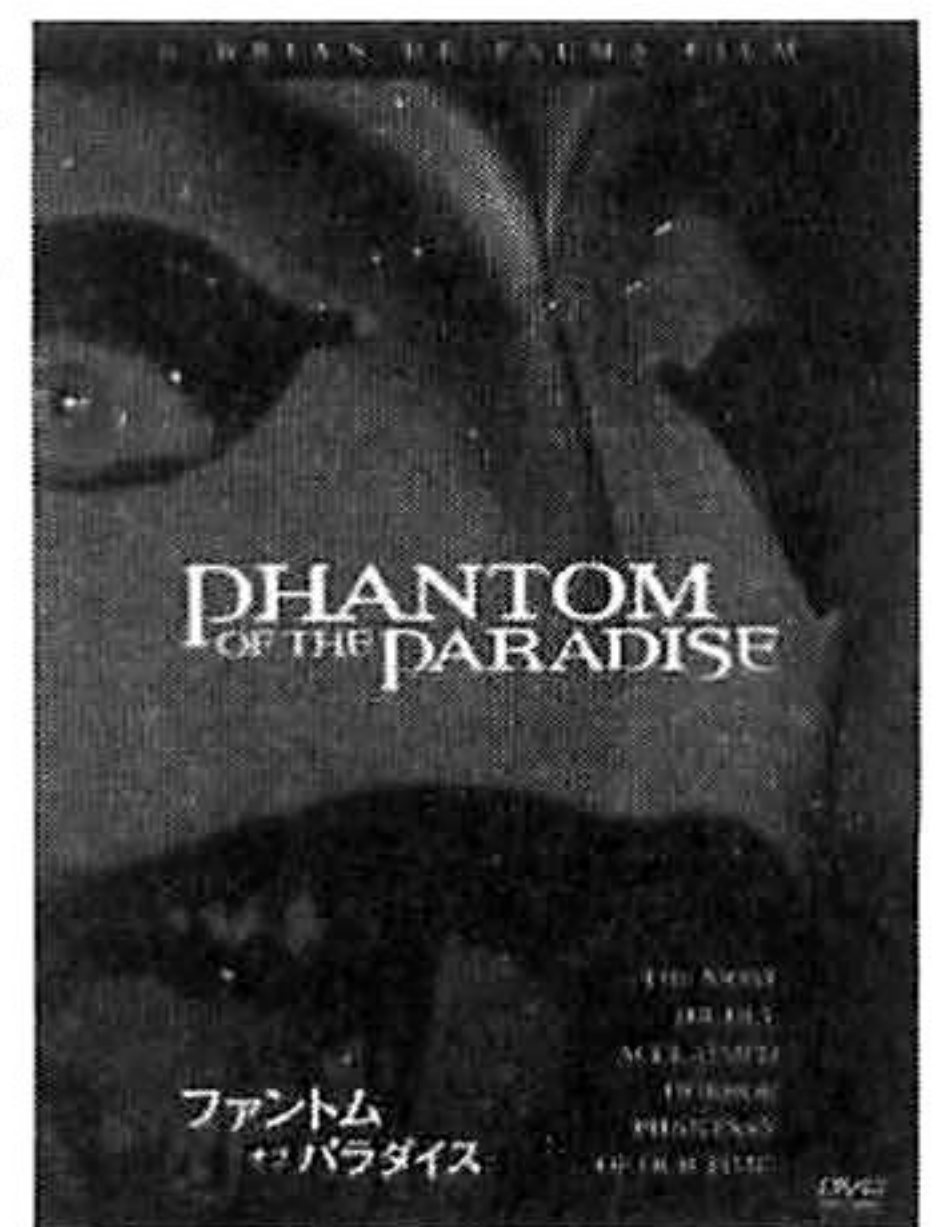
ロン・チャニイの一世一代の当たり役だった『オペラの怪人』はキモメン映画の金字塔である。原作者ガストン・ルルーはオペラ座で実際に起きた事件を元に小説『オペラ座の怪人』を書いたという。パリ・オペラ座の地下に住んでいる怪人は、自分が見込んだバック・コーラスの女をスターにしようと、プリマドンナを脅し、事故を起こす。娘を地下の秘密の隠れ家に拉致してレッスンを施すが、男の醜い素顔を見た娘は恐怖で失神してしまうのだ。チャニイ版だけでなく『オペラ座の怪人』は何度も映画、舞台、ミュージカル化されているが、最高の一本と言えばブライアン・デ・パルマの『ファントム・オブ・パラダイス』であろう。デ・パルマと作曲家ポール・ウィリアムズは『オペラ座の怪人』を現代のロック界に置き換え、最強のロック・ミュージカルを作りあげた。主人公ウィンズロウ（ウィリアム・フィンレイ）は自分の書いた曲を業界の大立て者スワンに盗まれたうえ、ハメられて刑務所送りになってしまう。ウィンズロウは脱獄してレコード工場に侵入するが、プレス機に挟まれて顔に醜い火傷を負ってしまう。ウィンズロウは愛する歌手フェニックスに歌わせるのを条件にしてスワンに曲を引き渡し、スワンが裏切って他の歌手に歌わせようとすると仮面をかぶった「ファントム」となって歌手を殺すのだ。不自由な身体でぎくしゃくと動き、狂気の笑いを爆発させるファントムは怪人そのものだ。怒りと苦しみによって、人は怪人に変身するのである（ちなみにサム・ライミの『ダークマン』はこれへのオマージュである）。

ウィンズロウは歌だけでなくフェニックスもスワンに奪われてしまう。だが、スワンの方はウィンズロウのことなど覚えてすらいない。元々ウィンズロウが勝手に思い入れていただけなのである。ウィンズロウは絶望しても死ぬことすら許されない。醜い顔のまま、苦しみつづけることしかできないのだ。歌だけはとてもとても美しいのだが。

■散り行く花
監督／D・W・グリフィス
出演／リリアン・ギッシュ、リチャード・バーセルメス
DVD／アイ・ヴィー・シー

■知られぬ人
監督／トッド・ブラウニング
出演／ロン・チャニー、ノーマン・ケリー
DVD／ The Lon Chaney Collection (The Ace of Hearts/Laugh, Clown, Laugh/The Unknown/Lon Chaney - A Thousand Faces) ,Warner Home Video

ブライアン・デ・パルマのキモメン映画は『ファントム・オブ・パラダイス』だけではない。デ・パルマは一貫して美しい女を見つめるしかできない男の哀しみをテーマに映画を撮りつづけてきた。デ・パルマのもっとも個人的な映画『ミッドナイトクロス』では、ジョン・トラボルタが演じる録音技師が、たまたま自動車事故の生音を録音してしまう。それが政治がらみの陰謀だと知ったトラボルタは、証拠を取るために恋人に盗聴器をつけて犯人と対決させる。だが、犯人が襲いかかってきたとき、遠くにいるトラボルタは何もできない。ただ恋人の悲鳴を聞かされるしかないのだ。すべてを失ったトラボルタはくりかえしくりかえし女の悲鳴を聞きつづけるのだ。

キモメン映画というならば、そのデ・パルマに多大な影響を与えたヒッチコックを忘れてはならない。ヒッチコックのすべての映画は強烈な女性不信と、女性に対するどうしようもない憧れに引き裂かれている。毎度毎度映画に登場するヒッチコックの姿を見れば、それも無理はないと誰もが思うだろう。晩年、とりわけ『サイコ』以降の映画においては、いささか女性嫌悪の度が強すぎ、あたかも女性を罰するために映画を撮っているかのような感さえあるが、もちろんヒッチコックはそれだけではない。不実な女に惹かれる心を捨てられないから、ヒッチコック映画は魅力的なのである。たとえば『汚名』では、荒れた生活を送っていたヒロインが米国のスパイ組織にスカウトされ、ナチス協力者の大富豪に近づくことになる。ヒロインは連絡員である主人公（ケーリー・グラント）を愛しているのだが、スパイ活動のために大富豪と結婚することになる。ヒロインは映画のあいだずっと不貞しっぱなしなのである。この映画でいちばん誠実なのは、実は悪役であるナチス協力者の夫（『透明人間』ことクロード・レインズ）なのだ。情報目当てで近づいてきた女に騙されてすべてを失う気弱な男（もちろん力強い母親がいる）こそ、金で女を手に入れようとしたキモメンの末路である。ヒッチコックが自分を投影しているのもこちらの方だ。『めまい』では、主人公は恋する女（キム・ノヴァク）に目の前で死なれたあと、そっくりの女に出くわす。彼は女（ノヴァク二役）に新しく服を買ってやり、髪型を整え、彼女を死んだ女そっくりに仕立てようとする。目の前にいる美女よりも、幻想の美女を求める男の目はどこか遠くの桃源郷を見つめているのだ。（つづく）

■ファントム・オブ・パラダイス
監督／ブライアン・デ・パルマ
出演／ポール・ウィリアムズ、ウィリアム・フィンレイ
DVD／20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパン

■汚名
監督／アルフレッド・ヒッチコック
出演／イングリッド・バーグマン、ケーリー・グラント
DVD／ビクターエンタテインメント

うぱーのオススメもの

ういろう
text by UIRO

おさわりライトノベルが読んでみたい！の巻

「うぱーのお茶会」というブログの管理人をしている「ういろう」と申します。ゲーム・コミック・ライトノベル・アニメの感想やニュースを扱っております。興味があれば覗いてみてください（宣伝終わり）。

　さて、年末に親友たちと忘年会をやっていたところ、一緒に来ていた友達のお子さんがニンテンドーDSで遊んでいたんですよ。その場で貸してもらったんですが、タッチパネルが予想を超えて面白い！　小学生の女の子としりとり合戦で盛りあがってしまいました。

『逆転裁判』という法廷を舞台にしたシリーズ物がありまして、1作目に新作シナリオ1本追加したDS版『逆転裁判　蘇る逆転』が発売されたと知って早速ゲット！

　プレイヤーは弁護士になって、被告人を弁護して無実にするのが大まかな流れです。関係者の証言集めや証拠品探しをして裁判に立ち向かうんですが、実際の弁護士の仕事とは違い、ゲーム性を高めた内容です。

　主人公の成歩堂龍一は「なるほど君」という愛称で呼ばれるキャラ。ヘタレカッコイイというのはこのことか。よく失敗しておっちょこちょいプレイヤーにとっては不安ありまくりで、でも、いざとなると被告人のために一所懸命になる熱血漢なところが好感持てます。この成歩堂vs.検察官の法廷バトルが熱いんです。同級生だった御剣検事はともかく、オヤジの魅力全開カルマ検事は威圧感を出して、渋いボイスで「異議あり」と言われると裁判長と同様こっちもビビります（笑）。

　他のキャラには、なるほど君が勤めている綾里法律事務所の綾里千尋さん。敏腕弁護士で、なるほど君を暖かく指導し助けてくれます。また彼女の妹で霊媒師のタマゴ、綾里真宵もなるほど君に尽くしてくれます。たまに変な言動をするし、変な服装で団子鼻だけど放置できない魅力を秘めてます。

　第5話では科学捜査官を目指す女子高生の宝月茜がなるほど君のアシスタント的なヒロインキャラ。見た目も素晴らしく可愛い。学生服の上に羽織った白衣とビジュアル的に萌え〜。科学捜査官を目指している動機も泣かせてくれる。さらに元捜査官であり、現在は弁当売り「ゲロまみれのお響」という、威勢のいい姐さんキャラがいて、差し出してくれるお弁当の種類の豊富さは驚きの数です。20個以上はあります。ぜひ全種類食べてみたい。

　しかし登場キャラのなかでは、警察庁のマスコットキャラ「タイホくん」がもっとも萌えだと断言できます。ユーモラスな動きとそれにマッチしたBGM。ビデオ再生シーンがあるのですが大爆笑。おいしいところを独り占め。ああ、彼の運命はどうなるのか心配で、次回作にも登場

「逆転裁判 蘇る逆転」
カプコン（Nintendo DS）

するのか心配です。

　さて、タッチパネルは指紋やルミノール反応などの鑑定で使われていましたが、それ以外はいまいち活用されていなかった気が……。

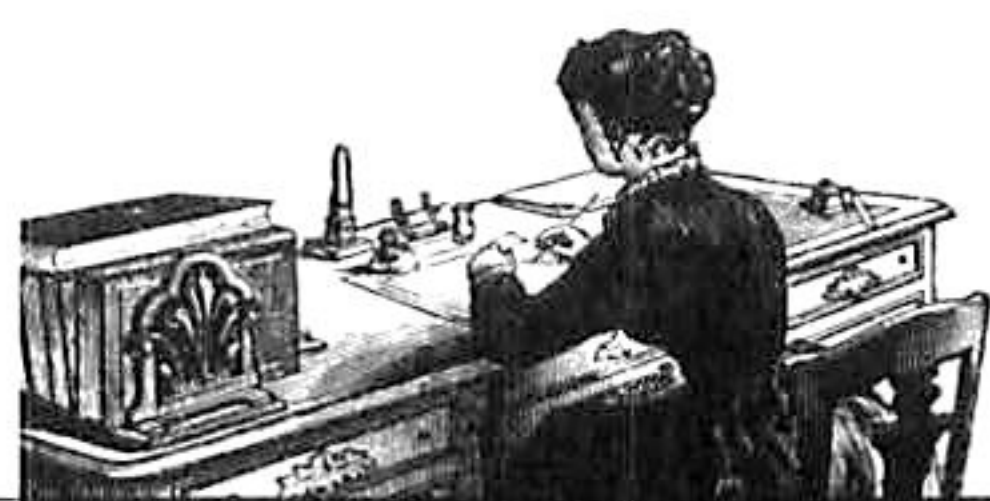
　ここで、『逆転裁判』から離れて今後のアドベンチャーを見据えるという大義名分で、タッチパネルの活用法を勝手に提案します。

　キャラの身体を撫でまわしたり、ほっぺをフニョフニョ、おなかをプニプニ、お尻をタッチなどのコミュニケーションがＧＯＯＤですよ！　キャラの喜怒哀楽がみたい。スピーカーからは悲鳴や喘ぎ声が聞こえたら面白いのに。また風邪をひいた彼女のために食事をタッチペンで摘んで、マイク端子に向かって「フーフー」と息をふきかけ冷ましてから、彼女の口に持っていって食べさせてあげるなんていいじゃないですか!!　気になるクラスメイトの女の子と席が隣同士で、さわったり、叩いたりと、自分ではふれあいのつもりで、たとえ彼女が怒っても「このツンデレ。可愛いな」と思うシチュ。しかし最後に落とし穴が待っていて、ハッピーエンドだと思っていたら、単にホントに嫌がられ、彼女から罵声罵倒でクソミソに貶されてＢＡＤエンディングというのもリアリズムにあふれていていいんじゃないでしょうか（いくない）。

　他にも特殊なプレイを望む方にはムチを振るうシーンがいいでしょう。タッチペンで、軌道を沿うような動きで、自分のサド性をふるってストレス発散ですよ。慣れ慣れしい人をピシっと叩いて、それでも懐かれるイヤーンな体験もできる！（されたくねー）

　架空戦争物でもタッチパネルはいろいろ使えそうです。第一次世界大戦下なら前方に迫り来る戦車師団を撃ちまくる。この１本のタッチペンだけで戦局逆転。漢（おとこ）のロマンです。三國志だと敵の武将のどこから突いてくるかわからない剣をペンで受け止めまくり、こちらも刀をふるう。これがホントの「ペンは剣より強し」です！　狭い道に大量の兵士が長い列を作って行進していたら火刑ですよ！　山岳地帯から火を指で放ち、「燃ーえろよ。燃ーえろよ。炎よ、燃えろー」とドンドン火をタッチペンで広がらせて被害を大きくしていきましょう。くうー、燃えるなぁー。『天空の城ラピュタ』のムスカのように「見ろ、人がゴミのようだ」。高い城から地上にレーザーを指でなぞりながらじゃんじゃん投下して独裁者気分に浸れるのもどうでしょう。

　こんなふうにタッチパネルにはまだまだ可能性があるのではないでしょうか。もし次回があれば「ファントム３００万冊ＲＰＧ（仮）タッチパネルで実現！」を予定とします。宿題にしますので皆さん考えておいてください。逆転の発想でなんとか。

phantom column 09

本当は萌えだった世界文学――第一回

メイドさんに萌える三作

堀越英美
text by HORIKOSHI,Hidemi

秋葉原にとどまらず、全国的にメイド喫茶が乱立しつつある今日このごろ。女子高生や非オタクのオジさんたちもメイドさんのかわいさにはホクホクしてしまうようです。もちろん、文学者だってメイドさんが大好き。「ご主人様」「お嬢様」と呼ばれて嬉しくない人なんかいません！

「パミラ」（『筑摩世界文学大系21 リチャードソン／スターン』所収）筑摩書房

あらすじ

性格がつつましく美しい十五歳のメイドさん、パミラは奥様や使用人たちにかわいがられ、幸せに暮らしていました。しかし奥様が亡くなって以来、奥様の息子である旦那様がパミラを手籠めにしようとスキを見ては押し倒しにかかります。「天使さま、聖者さま、天国中の御使たち、お守り下さい。わたくしが純潔を失ったら、その恐ろしい瞬間に、命がなくなりますように」――キスされるだけで失神してしまう貞淑なパミラは、操を守るためにお屋敷を出ることを決意。ところが旦那様の手によって別宅に監禁されてしまいます。旦那様はあの手この手で彼女の貞操を奪おうとするのですが、メイドさんはいつも寸前で失神してしまうため、望みをかなえることができません。しかし彼女の手紙を盗み見た旦那様はメイドさんの賢さと純潔を守りつづける覚悟を知り、彼女を本当に愛するようになります。一方、メイドさんは知恵を絞って脱出に成功するのですが、旦那様と離れてみてはじめて気づくのでした。本当に旦那様を愛してしまったということに……。

解説

ヤリチン貴族がメイドさんの純潔ぶりに心打たれ、改心してハッピーエンド。英雄ではなく普通の少女を主人公に据え、近代小説の祖と呼ばれるようになった十八世紀の作品です。近代小説はメイドさん萌えから始まったんですね。発表されるやいなやイギリス中の注目を集めた本作、読者によってパミラのその後を妄想した二次創作が書かれたり、他の作家によるエロパロ小説『シャミラ』が発表されたりと、パミラがいかに萌えキャラだったかがわかります。

『女中（メイド）の臂（おいど）』　ロバート・クーヴァー　思潮社

あらすじ

毎朝、ご主人様の部屋を掃除しにやってくるメイドさん。完璧にご主人様にお仕えすることを誓うのだけど、ドジっ娘な彼女はいつも失敗ばかり。そのたびにご主人様は手引書に従ってメイドさんにお仕置きをしなければなりません。かわいそうなメイドさんはメイド心得を暗唱しながら四つんばいになり、白いお尻を鞭打たれてしまうのです。「行ないは清く正しく、身のこなしは――」ビチーン！「――っ、つつましく、お怒りの時は――」パキーン！「アウグ‼」「も、もうしわけございません、御主人さま！」――鞭打ちのとりこになったメイドさんは今日もせっせとミスを連発、自分からお尻をまくってせがむものだからご主人様は疲れ果ててボロボロに……。

解説

ポスト・モダン文学の旗手によるメイドSM小説。いじめられてる女の子のほうがその気になって、ご主人様が「どひ〜もう体がもたないヨ〜」となるオチが、読み手と書き手の地位が逆転する文学のメタファーとなっているそうです。エロ漫画の定番オチのような気もしますが……。

『桑の実』　鈴木三重吉　岩波文庫

あらすじ

継母に育てられた身寄りのないおくみは、カフェーのおかみさんの口利きで、妻と離婚した洋画家・青木さんの家で女中として働くことに。万事においてひかえめで、男所帯の中でくるくると働くおくみに、青木さんは次第に癒されていきます。おくみに絵を見せて感想を聞いたり、一緒にお茶を飲もうと誘ったりと、何くれとなくやさしく接してくれる青木さんに、おくみも淡い恋心を抱くようになって……。

解説

夏目漱石門下生で、『赤い鳥』を創刊した児童文学家・鈴木三重吉が「ただ、私の好きな女として、ぼんやり空想していた、或る種の型の女」を描いたメイドさん萌え小説。かいがいしくご主人様たちの世話を焼き、褒められると顔を真赤にしてうつむく純情メイドさんです。決して自己主張をせず、「私は何にも判りませんのでございますから」と謙遜するおくみを、青木さんは「私はおくみさんが来てくれてから、すべてに不平というものがちょっともなくて、のんびりした気分になって来ましたよ」と褒め称えるのですが、身分の差のために恋愛には発展しないのでした。静かに慕い合うご主人様と純情メイドの関係性に萌え。

清純派ツンデレ、マゾっ娘、癒し系女中……いろんなメイドさんが文学書の中でご主人様の〝お帰り〟を待っています。さて、あなたが選ぶメイドさんはだれ？

♥萌え属性・萌え要素

『パミラ』
貞淑なメイド／知的／丁寧口調／潔癖／生真面目／強気

『女中の臂』
ドジッ娘メイド／マゾっ娘／鞭打ち

『桑の実』
純情メイド／謙虚／内気／天涯孤独／和み系

ネコミミリア

木之本みけ

とりしも／Illustration

1

妹が実際にいないと、もしかしたらこういうのってわからないのかもしれない。だけどあえて言わせてもらえば、妹の可愛さというのはやっぱり、例えば恋人に対して感じる可愛さとは違う。

女の子の可愛さである以上、性的魅力を感じないと言えば嘘になるのかもしれないが、それでもそこにある感情は、やはり性的な感情ではない——と、思う。たぶん。

むしろ妹というのは猫のようなものだ。たまにネコミミも生えたりするし。

というわけで、今回は俺の妹がネコミミリアに罹ったときのことを書きたいと思う。それは夏の陽射しもすっかり思い出せなくなった、十月のことだった。

その日はほぼ一日中、俺は机に向かっていた。詳しくはあとで述べるが、取引先のディレクターと会う約束があって、一日中エロ絵を描いていたのだ。

しかしエロ絵というのは画力が問われる。下手なエロ絵というのは見るに耐えない。もちろんどんな絵であれ下手な絵は痛々しいのだが、下手なエロ絵は痛いだけでなくキモい。もちろん最初から上手い人間などいないわけで、努力の過程としてキモ絵を描いてしまうのは仕方ないが、俺だって昨日今日に絵を始めたわけではないのだ。あまりひどい絵を描くわけにもいかない。

で、描いては消しを繰り返し、ようやく出来あがった絵を見ては、ため息。机の脇のスタンドからベースを手に取っては現実逃避を繰り返していた。

ベースというのはアンプに繋がないと本来の低音があまり聴き取れず、弦を押さえる音とピックがこすれる音ばかりがうるさくて、あまり楽しいものではない。少しの間ベチベチとショ

ボい音を響かせたあとで、やっぱりアンプを繋ごうと思い直し、椅子から立ち上がったところでノックの音がした。
　午後八時という時間から考えて、勧誘や訪問販売の類とは思えなかった。俺は理恵が来たのかと思い（理恵についてはあとで述べる）、失敗作の絵を引き出しに隠すと、慌てて玄関に向かったのだ。
「はい……」
　念のためにドアを開けず、キッチンの横の窓を開ける。この1Kの安アパートにはインターホンなどというブルジョアなものは付いていない。新聞の勧誘員に洗剤を押しつけられるのがイヤなら、いきなりドアは開けないのが鉄則だ。
　すりガラスの窓を小さく開けてドアの前をうかがうと、そこにいたのはやっぱり女の子で、一瞬だけ理恵かと思った。が、すぐに背格好が違うことに気づき、同時に向こうも開けられた窓のほうを振り向いた。窓から漏れた光が彼女を照らす。
「……お？」
「あ、お兄ちゃん」
　俺たちの声が重なった。
「よかったー。いなかったらどうしようかと思った。やっほー♪」
　窓の外の女の子は、帽子のつばの下で安堵した表情で、それから嬉しそうに手を振った。
　俺の妹、ミーコだった。
「っつーか、何？　突然だな……」
　全く想像もしていなかった相手の登場に、俺は言葉に詰まった。今年は忙しくてお盆にも帰れなかったから、九カ月以上会っていない。相手が理恵ではなかったことに、俺はがっかりすると同時に、なぜかホッとしたような気もした。
「え？　う、ちょっと近くまで来たから、っていうか開けてほしいんだけど」
　ミーコは不満そうに手にしたスーパーの袋を持ち上げてみせ、俺は慌てて目の前に意識を戻した。
「お、おう……」
　よくわからないが、俺に何か買ってきたらしい。俺は言われるままにドアノブに手を伸ばし、鍵を開けた。
「えへへ、おじゃましまぁす♪」
　ドアが開き、少し照れたような声とともにミーコが踏み込んできた。ミーコはちょっと前に流行ったキャスケットとかいうタイプの帽子を目深に被り、白いパーカーにデニムスカートというラフな格好で、ＯＬというよりまだ大学生みたいに見えた。だけどそれは、ミーコが社会人になったことを俺が実感できなかったせいかもしれない。
　キョロキョロと俺の部屋の様子をうかがい、ミーコは思い出したようにスーパーの袋を俺に押しつけた。
「はいコレ」
「あ、サンキュ……」
　とりあえず礼は言ってみたものの、もちろん頼んだ覚えはない。スーパーの袋からはネギの葉がちょこんと可愛らしく飛び出していて、俺はますます混乱した。

ネギなんかどうするというのだ？　そもそもミーコがここに来ること自体、初めてのことだったのだ。
　ミーコはもう片方の手に持っていたスポーツバッグを床に置くと、キャンバス地のスニーカーを脱いだ。ぼんやりと立ち尽くす俺の前でコンクリートの三和土（たたき）から二センチにも満たない段差を越えて、ミーコは初めて俺の部屋への侵入を果たした。身をかがめて靴を揃えるミーコのデニムスカートの腰から、見えてはいけないものが見えた。
　――黒。
「見えてるぞ……」
　別に珍しいものでもないが、目をそらして俺は軽く注意した。外でこうしたことのないよう、見かけたら注意しておくのが兄の義務だ。深い意味はない。まあ、からかう気はあったけど。
「えー？」
「黒」
「……う」
　靴を揃えたミーコは照れ笑いを浮かべ身を起こした。ミーコはからかうと可愛いけど、俺のほうも少し気まずい。
「冷蔵庫に入れるか？」
　とりあえずスーパーの袋を持ち上げてみる。
「あ、すぐ作るからいい。ってゆーか夕飯食べた？」
　ミーコもホッとした様子で、帽子の下から俺を見つめた。
「ん？　まだだけど……」
　久々に会った妹の顔をまじまじと見つめかけ、距離が近すぎることに戸惑って、俺は視線を落とした。黒いスニーカーソックスを履いたミーコの足が見えて、そのとき初めて懐かしい気分になった。
「よかった、じゃ、一緒に食べよ？」
　嬉しそうな声に視線を戻すと、ミーコはまだ俺を見つめている。
「いいけど……ここで作るのか？」
　念のため流しに目をやると、やはり半月ぐらい前に気まぐれで自炊したときの食器が放置されたままだ。
「いいじゃん、嬉しいでしょ……って、うわ、汚い」
　俺の視線を追って流しの食器に気づき、ミーコは露骨に眉をひそめた。
　一人暮らしの兄と、その部屋を突然訪れた妹。いかにもそんな二人らしい、微笑ましい日常の一コマだった。
　このときの俺には、ネコミミリアのことなど想像する由（よし）もなかったのだ。

2

　ミーコというのは当然ながら渾名（あだな）で、本名は美貴子（みきこ）という。ミーコが生まれたばかりの頃、当時の俺には「美貴子」という名前が発音しにくかったようで、ミーコになってしまったらしい。ミーコ自身が言葉を覚え始めたときも、やはり美貴子とは言いにくかったのか、俺に

倣（なら）ってミーコになった。そのうちに両親までそう呼び出して、社会人になった今でも、我が家ではミーコはミーコだ。

気を取り直してカビの生えた食器を洗い、俺の手伝いの申し出を頑（かたくな）に拒否して、ミーコが食事を作り終えたときには時刻は十時を過ぎていた。ミーコは料理が下手なわけではないのだが、とにかく作るのに時間がかかる。もっとも俺にしてもたまに自炊などしようものなら異様に時間を消費し、当分自炊はしないと決意を新たにするハメになるわけで、やはり料理というものには慣れが重要なのだろう。

「ま、ろくに家の手伝いもしなかったツケだな」

「うー。それを言うならお兄ちゃんだってしてなかったじゃん」

配膳を終えたローテーブルの前にぺたんと座り、ミーコは口を尖らせる。デニムスカートに包まれたお尻の下にあるのは、理恵が使っていたクッションだ。

「あー、俺は別に困らないし。お前の場合はさー、カレシに作ってあげようと思ったときとか困るんじゃん？　一応女なんだし」

「そんなのいないからいい。ってゆーか一応は余計でしょ。ってゆーかお兄ちゃんカノジョいたんだ？」

ミーコは目をそらし、早口で話題を変えた。

「ん？」

どうしてバレたのかと一瞬疑問に思ったが、ミーコの前で湯気を立てているのは、まさに理恵の使っていた茶碗だった。

「もう別れた。いただきます」

俺は発泡酒のプルタブを起こし、ぐっとそれを呷（あお）った。

理恵についてはまあそういうことで、これ以上の説明は必要ないだろう。

ミーコが作ったのはサバの味噌煮とレンコンのキンピラ、それになめこの味噌汁と栗ご飯というラインナップだった。なんとなく何かの献立表をそのまま再現したような雰囲気だったが、味は悪くない。結構うまいじゃん、と言ってやろうかとも思ったが、面と向かって褒めるのもなんだか微妙に照れくさかった。

だいたい、コイツが急に俺の家に来て、しかも食事を作ってくれるなどというのが怪しい。ミーコと俺は仲が悪いわけではなく、むしろ仲がいい兄妹に分類されるはずだが、それでも今までこんなことはなかった。やはり距離というのは大きくて、俺が上京してからというもの、会うのは盆と正月ぐらいのものだったのだ。今はミーコも都内にいるが、東京だって結構広いし、仲の良い兄妹とはいえ妹が単なる親切で一時間かけて兄に食事を作りにくるわけがない。何か裏があるのは目に見えていた。

ミーコのほうも俺の正面で、視線を落としたまま食事を続けていた。チャコールグレーの帽子のつばが目を隠していて、表情がわからない。ボリュームを落

としているにもかかわらずテレビからは耳障りな笑い声が響き、部屋の外からは鈴虫の鳴き声が染み込んでくる。

「お前さー、メシ食うときぐらい帽子取れば?」

なんとなくそう言って、俺はミーコがここに来てから一度も帽子を外していないことに気づいた。髪型を変えて失敗でもしたのだろうか?

帽子からはみ出した髪に改めて目をやるものの、正月に見たときと同じ短めのストレートで、取り立てて変わった様子はない。

「ん」

ミーコは小さくうめいて、口の中のものを飲み込み、少しだけ顔を上げた。

「え、えへへ……」

照れたような微妙な笑いを浮かべ、帽子のつばの下から俺を見つめる。

「な、なんだよ?」

全く意味がわからない。少なくとも、食事中は帽子を取れと言われたときの反応ではない。

「……髪型でも失敗したか?」

「え? そうじゃないけど……」

茶碗と箸を置き、ミーコの目が帽子で見えなくなる。

「見てもいいけど、驚かないでね……」

帽子に両手を当てると、ミーコは不安そうに俺を見つめた。

やはりワケがわからなかった。照れたり不安がったり、何がどうなってるんだ?

改めて見るとミーコの睫毛は、ビューラーでくるんとカールさせてマスカラが塗られていて、一緒に住んでいた頃とはずいぶん印象が違う。ミーコは俺の反応を待っているようだったけれど、俺はミーコの意図がさっぱりわからなくて、コイツもいつの間にか日常的に化粧をするようになったのだなと、ぼんやり考えた。

ミーコはため息をつくと、一気に帽子を持ち上げた。

前髪が額に落ち、持ち上げた帽子をミーコはそっと膝に置く。

「えへ。えへへへ……」

ミーコは再び微妙な笑いを浮かべ、恥ずかしそうに俺を見つめた。

ミーコの頭には、大きなネコミミが生えていた。

3

最初は作り物かと思った。当たり前だ。人間にネコミミが生えるわけがない。

なんだそりゃ、と呆れたようにつぶやいた俺の反応に、ミーコは少し傷ついたようだった。

「本物なんだけど、これ」

不満そうにそう言って、ミーコはそのミミをぱたぱたと動かした。

「うわ」

これには俺も驚いた。動かないと思っ

ていたものが動けば、当然驚く。
「よ、よく出来てるな……」
よく出来てるけど、もちろんオモチャだよな？　理性ではそう考えながらも、俺は鼓動が早まるのを感じた。――まさか、本物？　ぶっちゃけありえない。
「だから本物だって」
ミーコは立ち上がり、俺に近づいた。俺の横にしゃがむと、そのまま膝をついて身を乗り出してくる。
「ほら、よく見てよ」
「お、おう……」
なんとか冷静さを保とうと努力しつつ、俺はミーコの頭を覗き込んだ。
明るい茶色にカラーリングされた艶やかな髪の間から、黒く短い毛に覆われたネコミミが飛び出していた。
大きさこそ違うけれど、どう見ても黒猫のミミだ。
ミミの内側はピンクのような肌色のような色で、奥の様子を見ようと覗き込むと、本物の猫と同じようにふさふさした毛がびっしりと生えていた。
「………」
声を出すこともできなかった。
最近ではこうしたミミ付きカチューシャなども市販されているようだが、そういったものなら当然カチューシャの部分があるはずだ。
だけどミーコの頭にそのようなものはない。ミミの付け根はじつに自然なかたちでミーコの頭に溶け込んでいる。
「本物、だな……」
俺は言った。これ以上疑う理由はないように思えた。
「だからそう言ってるでしょ」
ミーコは呆れたようにため息をつく。
「だけどお前、なんでそんな……？　いくらモテないからって、ネコミミってトシでも……」
「な？　す、好きでやってるわけじゃないし！　朝起きたらこうなってたの！」
ミーコは憤慨した。
「そ、そうか……」
どうやら、ミーコの意志でネコミミを生やしたというわけではないらしい。まあ、よく考えれば生やそうと思って生えるものでもない。というか普通はどうやっても生えない。
「はぁ……こんなの好きで付けるわけないでしょ……」
ミーコは大げさにため息をついてみせる。しかしなんだかまんざらでもない様子なのはなぜだろう？
改めて見ると、ミーコ自身の耳――人間のほうの耳――はいつもと同じ場所に変わらず存在していた。
このネコミミにも耳の穴があって、音が聞こえるのだろうか？　その穴はどこに続いているんだ？　頭の中はどうなっているのだろう？
不意に次々と疑問が浮かび、俺はつい、ネコミミの中へと指を運んだ。
「あっ……♡」
ミミの奥の毛に指が触れたとたん、ミーコはびくんと身を屈め、俺の指から

逃れた。妙に色っぽい声に、一瞬どきりとする。

「へ、変なことしないでよね！」

ミーコは身を屈めたまま、猫が何かを嫌がるときのようにミミを後ろに寝かせて、俺を睨みつけた。心なしか頰が赤い。

「う、わ、悪い……」

俺は慌てて謝るが、なぜかミーコから目が離せなかった。

「と、とにかく、本物だってことはわかったでしょ？　というわけで、これじゃもう会社行けないし、今日はここに泊まるから」

ミーコは目をそらし、身を起こしながらそう言うと、立ち上がって俺に背を向けた。

4

薄暗いオレンジ色の光の中で、俺はぼんやりと天井を見つめていた。環八を走り抜けていく車のエンジン音が、鈴虫の声に薄く重なっている。

蛍光灯の輪の内側にセットされたオレンジ色の電球は、正式にはナツメ球と言うらしい。しかし俺の家ではずっと豆電球と言っていたので、今日もミーコは「豆電球は消さないで」と言った。寝るときもこれを点けっぱなしにするのが、いささか子供じみたミーコの習慣なのだ。

それにしても、なぜミーコにネコミミが生えたのか？　そしてそれはどうすれば治るのか？

ネコミミが本物であるのなら、今度はそこが問題になってくる。

しかしそうは言っても、俺には自分が何をすればいいのかさっぱりわからなかった。

世間の常識に従い、一応は大学を出た俺だが、学校では妹にネコミミが生えた場合の対処法など教えてくれないのだ。

当のミーコはといえば、自分のネコミミにわりと満足しているらしい。少なくとも本気で困ったり悩んだりはしていないようだ。会社に行けないとは言っていたが、むしろサボる口実ぐらいに考えてるんじゃないだろうか？　何しろあのあと「結構可愛いでしょ？」とか言っていたぐらいだ。コイツは小さい頃から能天気で、物事に動じないタチなのだ。

とはいえ、急に俺の部屋に来たということは、やはりコイツなりに不安になっている部分もあるのかもしれない。俺はそんなミーコを追い返すこともできず、結局泊めることにしてしまった。正直に言えば、俺は結構ミーコのことが好きなのだ（もちろん妹としてだけど）。

布団が一組しかないことは問題にならなかった。俺は試しに一カ月ほど敷いたままの布団を指差し、「使う？」と訊いてみた。

「え？　い、いいよ、悪いし」

一歩退いて微笑んでみせたミーコは、ゆずり合いの精神を身につけた良い妹

だった。その際ミミが後ろを向いていたことは、あえて気にしないことにしたい。
　そんなわけでミーコは俺の押入れから引っ張り出した毛布を体に巻きつけ、俺の万年床から少し離れた畳の床に、ミノムシのように横たわっている。ミーコはパジャマまで持ってきていた。まったく、ちゃっかりしている。俺に背を向けたミーコの頭には、改めて見てもやはりネコミミが生えていて、ネコミミミノムシ、と俺は思った。

　ところで今さら語るまでもない一般教養だが、ネコミミというのはいわゆるオタク向けのアニメやゲームの類において、もはや基本と言っても過言ではない装備だ。俺だってネコミミ少女の絵を描いたことがある。誰もが通る道だ。本来は——少なくとも、常識的には——ありえないはずなのに、ネコミミはなぜか女の子を可愛く見せる。
　まあきっと猫が可愛いからなのだろう。猫はヤバい。あの可愛さは異常だ。猫というのは人間に効率的に餌を貰（もら）うために、長い年月をかけて可愛さを進化させてきたのだ。もっとも女性の可愛さというのも生物学的にはオスから食料を得るためのものなのかもしれず、猫は人間の女性を擬態することで人間から食料を得ているのかもしれない。
　しかし一般的に、人間は猫に欲情しない。それに猫好きの女性だってたくさんいる。可愛さというのは不思議なものだ。ミーコにしても同じだ。
　兄である俺が言うのもどうなのかとは思うが、率直に言ってミーコは可愛い。目を引くような美少女ではないが、笑顔がすごく可愛い。あと、兄の贔屓目（ひいきめ）もあるのかもしれないが、拗（す）ねた顔も可愛い。だからと言ってミーコに欲情は——正直に言えばちょっとドキッとすることはあるけれど——しない。その可愛さはやはり猫のようなものだ。
　ネコミミはミーコになんだかすごく似合っていた。本来は——少なくとも、常識的には——ありえないはずなのに、ネコミミの生えたミーコはいつも以上に可愛かった。
　オレンジ色の光の中で、短い艶やかな毛の生えたネコミミを見つめていると、ミーコが急につぶやいた。
「……お兄ちゃん、起きてる？」
　どくん、と心臓が高鳴った。起きてたのか……。なんだか心まで見透かされていたような気がして、少し顔が熱くなった。
「んー？　どうした？」
　冷静なフリをして尋ねてみる。
　ミーコは俺に背を向けたまま動かなかった。小さな息遣いだけが聞こえた。
　しばらくしてミーコは言った。
「……そっち、行っていい？」
　一瞬、言葉の意味がわからず、鼓動だけがさらに速くなった。
「そ、そっちって……？」
「ん……やっぱ毛布だけじゃ寒い」

「………」
やはりそういう意味らしい。
ミーコは小さい頃すごく俺に懐いていて、よくベッドに入り込んでくることがあった。しかしこのトシになってミーコと一緒に寝ることになるとは思わなかった。妹とはいえミーコは女の子で、俺は男で、お互いにもういい大人なわけで、ということはつまり、だ、大丈夫なんですか？
——いや、大丈夫だよなあ？
「いいけど……」
大丈夫だという自信があったのか、それとも俺もミーコと一緒に寝たかったのか。自分でもわからないが、俺は結局それを許可してしまった。
「ホント？」
ミーコは嬉しそうに、ミノムシのまま、ごろんと俺の方を向いた。ちょっとは男に対し用心しなさい、という気もするが、よく考えると俺たちは兄妹なので別に用心しなくてもいいのかもしれない。
「……おいで」
何はともあれ、俺は掛け布団を軽く持ち上げ、ミーコを呼んだ。
「♪」
笑い声にならない程度の息を漏らし、ミーコは毛布から這い出した。ミミがぴんと上を向いている。
「えへへ、にゃーん♪」
そんなことを言いながら、ミーコは俺の布団にもぐり込んできた。鳴き声は似ていなかったけれど、そのしぐさは本当に猫みたいだ。
「やったー、あったかい♪」
布団を口元まで引き寄せ、ミーコは俺に寄り添ってきた。シャンプーの匂いが鼻腔をくすぐる。実家にいたころから家族とは別のシャンプーを使っていたぐらいだから、今日もきっと自分用のシャンプーを持ってきていたのだろう。
「ありがとう、お兄ちゃん♪」
目だけで上を向いて俺を見つめるミーコは、すでに化粧を落としていて、俺のよく知っているミーコの顔だ。それでもやっぱりそれは女の子の顔で、改めて間近で見るのはなんだか落ち着かない。
「お、おう……」
あんまりくっつくなよとは言えず、俺は顔を背けた。幸い触れているのは腕と腕で、その体温には少し戸惑ったが、困るようなものでもなかった。
「ありがとう」
ミーコは繰り返した。
「ん。おやすみ」
俺は会話を打ち切った。
ミーコの体温をかすかに感じながら、俺は穏やかな眠りに就いた。

5

最後にミーコと一緒に寝たのは、いったいいつになるのだろう？　思えば俺たちは仲の良い兄妹だった。小さい頃は当

たり前だと思っていたが、なかなかどうして世の中は広い。不思議なことに、世の中には妹を可愛いと思わない兄もいるらしいのだ。
例えばインターネットの匿名掲示板などを見ると、「リアル妹はゲームとは違う。そんなにいいもんじゃない」との声も多い。一方では妹自慢の書き込みもあったりするが、そこはそれ。兄がオタクになったことで妹との間に溝が生まれるというのが、俺がネットで見た「仲の良くない兄妹」に比較的ありがちなパターンだった。
しかし俺自身、漫画家を目指しつつエロゲーのCGを塗って生計を立てている人間で、言うなればオタクの端くれなのだ。中学の頃からその傾向はあった。にもかかわらず、ミーコは俺との間に壁を作らなかった。
これにはいくつか理由があって、ひとつはミーコ自身にもそうした傾向があったことが挙げられる。
俺の両親は流行というものをとにかく嫌っていて、幸か不幸か俺たちも幼少よりその洗脳を受けた。思春期を迎え、周囲がテレビの恋愛ドラマに夢中になり始める頃、俺たちは図書館の隅で古い少年小説を読み、小さい頃から親しんだアニメだけを見続けた。気がつくと俺はクラスの中でオタクグループに分類されていて、ミーコもきっと同じだったのだろう。
第二の理由は第一の理由に付随する。ミーコはさすがに女の子だから、オタクグループに属してはいても、中学に上がる前後にはそれなりにオシャレというものに興味を持ちだした。自分の服を自分で選ぶようになり、母の買ってくる俺の服にも口を出すようになったのだ。
やがて母親は「ミーコに選んでもらいな」と俺に服代を渡すようになり、何度かミーコと買い物をするうち、ミーコが良いと思うものが俺にもわかるようになっていった。
俺が試着すると、ミーコは似合うと褒めてくれた。
俺たちは仲の良い兄妹から「一緒に買い物に行くぐらい仲の良い兄妹」となり、妹にキモがられるというバッドエンドも回避した。
しかし俺の服を選んでいたのは他ならぬミーコ自身で、ミーコがそんなことをしてくれたのはミーコ自身にオタク的なところがあり俺との良好な関係を維持していたからで、結局は第一の理由が全てなのかもしれない。
最後に一緒に寝たのは、そうだ、俺が中学一年のときだ。ミーコは小学五年で、初めてのブラを買ってもらったばかりだった。
「あのね、ブラジャー買ってもらったんだ」
俺の部屋にやってきたミーコは、こっそり俺に耳打ちした。
「マジで?」

驚く俺の前で、ミーコは少し照れながら服の裾を持ち上げ、それを見せてくれた。
　膨らみはわからないぐらいだったけれど、柔らかそうな布地で胸を包んだミーコの姿に、俺はなんだかミーコが急に違う生き物になってしまったような気がした。
　まるでネコミミが生えるみたいに、それは革命的な変化だったのだ。
　ブラジャーをするようになったミーコと一緒に寝るのは、なんだか悪いことをしているようだった。俺はミーコの胸に触れないよう、ベッドの壁際に逃れた。
　それからすぐに誰の誕生日でもないのに赤飯が炊かれるイベントがあり、それ以来ミーコが俺のベッドに来ることはなくなった。
　その頃から俺も一人のベッドで夜ごとに悶々とティッシュを消費するようになったが、もちろん赤飯は炊かれなかった。

　さて、話を現在に戻そう。
　久しぶりに早めに寝たせいで、目覚ましが鳴る前に俺は目を覚ました。なぜか掛けていたはずの布団がなくなっていて、少し体が冷えていた。寒くて目が覚めたのかもしれない。
　横を見ると、ミーコのヤツが布団を抱き枕のように抱きしめて、穏やかな表情で眠っていやがった。ミーコは布団を抱っこして寝るクセがあるのだ。
　ため息をつき、時計に目をやるが、すでに朝の八時を過ぎていた。カーテン越しの柔らかな光が部屋に注いでいる。
　俺がこんな早くに起きるのは珍しいが、すっかり目が覚めてしまった。それに男の朝の生理現象もあって、ミーコと同じ布団にいるのがなんだか落ち着かなかった。もう一度ため息をつき、俺は立ち上がった。
　コーヒーを二人ぶん淹れ、トーストを二枚焼き、それぞれにバターを塗ってみる。
　ミーコはまだ起きてこなかった。
　少し迷ったがもう八時間は寝ているはずだし、トーストも焼いてしまったので、俺はミーコを起こすことにした。朝勃ちもすっかり治まっている。
「ほら、ミーコ、朝だぞー」
　布団の脇に膝をつき声をかけるが、反応はない。仕方なく肩を揺すってみる。
「コーヒーいれたぞー」
「ん……んぅ……」
　ミーコは不満そうにうめくと、寝返りを打って俺から逃れようとする。
「………」
　不意に悪戯心を起こし、俺はミーコのネコミミを指で突ついてみた。
「んぅぅ！」
　ミーコはミミをぱたぱたと動かした。面白い。もう一度突ついてみる。
「んぅ～ん。やめてよ～」
　ミミをぱたぱたさせ、再び寝返りを打って、ミーコは俺を睨んだ。

「おはよう。コーヒーできてるぞー」
「……あれ、お兄ちゃん。あ、うー、お、おはよう」
ミーコは少し驚いた様子で、それから急に恥ずかしそうにそっぽを向いた。こういう反応をされるとついからかいたくなってしまう。やはり昨日のことは、きっと寒かっただけじゃないのだ。
「目が覚めた？　甘えん坊さん」
「うー、だって寒かったんだもん……」
ミーコは布団を鼻先まで引っ張り上げ、寝返りを打って俺に背を向けてしまった。

一人でトーストを食べていると、やがてふてくされた顔でミーコが起きてきた。からかわれたことを怒っているのだろう。わかりやすいヤツだ。
「冷めないうちに食えよ」
トーストを乗せた皿を差し出すと、ミーコは「んー」と、肯定とも否定ともつかない返事をして、それでもローテーブルの向こうに座った。髪をよく乾かさないで寝たのか、前髪に寝癖がついている。クリーム色のパジャマの胸は、たぶんノーブラだろうけれど、相変わらず垂れようがないほどぺったんこだ。あの初めてのブラのときからほとんど変わっていないみたいで、俺はなんだかホッとしたような気持ちになる。
「……いただきます」
ミーコはトーストにブルーベリージャムを塗ると、まだ少し怒った様子でそれだけ言って、黙々とそれを食べ始めた。
「今日、どうすんの？」
俺のほうはトーストを食べ終わってしまい、コーヒーを飲みながらミーコに尋ねた。会社は休むんだろうが、何かすることはあるのだろうか？
ミーコの頭には相変わらず、可愛らしいネコミミが鎮座ましましている。病院にでも行けば治るんだろうか？　というかこれは病気なのか？　そもそもこれは現実なのか？　なんだか夢でも見ているようで、現実的な対応を考える気にもなれない。
ゆっくりとトーストを飲みこんで残りを皿に置き、コーヒーを一口飲むと、ミーコは言った。
「カラオケに行きたい。平日の昼なら安いし」
そんなわけで俺たちはカラオケに行った。ネコミミが生えて大変なことになっているというのに、何をやっているのだろう？
ミーコは昨日と同じ帽子を被り、俺の押入れから引っ張り出したTシャツに、同じく俺のシャツジャケットを着て、じゃんじゃん曲を入れた。
パジャマと下着以外の着替えは持ってきていなかったらしい。フライフロントの男物のシャツジャケットはミーコにはぶかぶかで、袖を思いきりまくることになったが、キャスケットと合っていてなかなか可愛らしかった。

そんなミーコの姿を見ながら、昔ミーコとよく聴いた歌を、３：１ぐらいの割合で俺も歌った。
一緒に暮らしていた頃は、よくＣＤを貸し借りしたり、小遣いを出し合って買ったりしたのだ。
歌い始めてからミーコはすっかり上機嫌だった。俺も気分が良かった。結局二人で三時間も歌い、それからモスバーガーを食べて、話題のホラー映画を観た。
ミーコは淡々と黙ったまま画面を見ていて、全く盛り上がらなかった。ホラー映画というのは本来、女の子が男に抱きつく口実のためだけに存在するのだ。まあミーコに抱きつかれても困るのだが、ミーコはいったい何のためにこんなものを観ようとしたのだろう？
映画館から出た俺たちは、スーパーで夕食の材料と黄身しぐれを買って部屋に帰った。ミーコは黄身しぐれが好きなのだ。

6

→Ｐ。Ｇ。→←ＰＫ。
ジャッキーがニーストライクを決めてサラは地面に横たわる。何年もやっていなかったゲームなのに、指が技を覚えていた。
「あーもうっ、手加減してよー！」
ミーコは悲鳴を上げてボタンを連打した。
「問答無用」
倒れたサラをさらに蹴りつけ、ジャッキーはバックステップで間合いを取り直す。こういうのは本気でやらないと面白くないのだ。それに手加減するほどの余裕はない。起きあがりざまに放ったサラのキックは空を切り、俺はそこにダッシュハンマーキックを叩き込む。
「うぅ、ひどーい……」
「ノーウェイユーキャンストップミー！」
ミーコの抗議を尻目に、ジャッキーが高らかに勝利を宣言した。
時刻は午後十一時。もう二時間もゲームをやっていることになる。ミーコは今日もえらい時間をかけて夕食を作り、それを食べ終えると押入れからサターンを引っ張り出し、ずっとこんなことをやっているのだ。
勝率は６：４で、辛うじて俺が勝っている。まあ中学の頃はミーコも俺に付き合わされて相当練習したので、女の子だからといってバカにはできない。しかし……。
「お前さあ、いつまでいるんだ？」
なんとなくだらだら遊んでしまったが、今日も泊まるつもりなのだろうか？
そして明日は？　ネコミミが治るまでずっといるのか？　放っておいて治るものなのか？
「……だって、しょうがないじゃん」

膝の上でコントローラーを握ったまま、ミーコはつぶやく。
「こんな頭じゃ会社に行けないし……」
「まあそうだけど」
でも、それと俺の部屋に泊まることと、何か関係があるのだろうか？　他ならぬ妹のことだから追い出すつもりはないが、明日は仕事の約束もあるし、いつまでも遊んでいるわけにもいかない。
――それに、ミーコのヤツ、今日も一緒に寝るつもりなのだろうか？
「はぁ……。これじゃおちおちオナニーもできねーな」
今さらカッコつけるような相手でもないし、冗談めかして言ってみる。
しかし実際問題として溜まるものは溜まるわけで、昨日は大丈夫だったけれど、ずっとこんなことをしていたらいつか自分を失いそうで微妙に怖い。妹とはいえミーコはやっぱり女の子だ。しかも結構可愛いのだからタチが悪い。性的な対象として見ているわけではないが、絶対に性欲がわかないと断言する自信はなかった。
「うぅ、セクハラ……」
ミーコは小声でそう言って黙り込んだ。ちらりと横を見ると、ミミが下を向いている。ミーコは割とこういう冗談に耐性がないのだ。
俺は余計なことを言ったのを後悔した。確かに会社に行けないのと俺の部屋に泊まることは関係ない。しかしこんな状況で一人でいるのは不安なのだろう。だからミーコは俺を頼ってここに来たのだ。俺は兄としてできるだけ支えてやらなくてはならない。しかしどうフォローしよう？
迷っていると、ミーコが言った。
「私がしてあげようか？」
俺は頭がクラクラした。
「ば、ばか。妹で勃つわけないだろ！　ほら、続きやるぜ」
しどろもどろになりながらスタートボタンを押し、ゲームを再開する。
「ま、三日ぐらいしなくても死なないから、気にすんな」
「うん。……えーい！」
ゲーム開始と同時に、サラがジャッキーを蹴り飛ばした。
正直に告白すれば、ミーコとは一度だけキスしたことがある。お互いファーストキスだった。
まあこんなのはきっと珍しくないはずだ。子供同士の他愛もない遊び。なにせミーコが初ブラを買ってもらうさらに数カ月前だ。しかしもしかしたら、俺たちの関係というのは一般的なものじゃないのだろうか？
とはいえ、兄妹の関係だって様々だろう。たとえ一般的じゃないとしても、他人からとやかく言われる筋合いもない。
結局ミーコはその日も、俺と一緒の布団で寝た。ミーコの体温とシャンプーの匂いは少しだけ俺をドキドキさせたけれど、幸い体が反応してしまうようなこと

はなかった。ミーコは胸もあんまりないし、大丈夫。まだ大丈夫だ。

翌日、ミーコは着替えを買うといって一人で出かけていった。まだ泊まるつもりなんだろうか？　とはいえ、相変わらずネコミミが生えているので仕方ない。そろそろ本気で治す方法を考えたほうが良いのかもしれない。

——だけど、どうやって？

それに今日は仕事で人と会う約束があるのだ。それまでにラフでもいいからもう二枚ぐらいは絵を描いておきたい。

俺はミーコがいない間にしかできないことを済ませ、すっきりして机に向かった。

7

笹塚（ささづか）駅のホームも高架になっていて、京王線を降りるとビルの合間にちょうど夕陽が見えた。今日は個人的に絵を見てもらうという約束なので、俺は改札でマキさんと待ち合わせ、少し早いが近くの居酒屋に向かった。マキさんは俺より三歳年上でエロゲーのディレクター兼シナリオライターで、背が高く髪は金髪でいつも黒い服を着てヴィジュアル系っぽくて、巨乳のコスプレイヤーと付き合っているくせにロリゲーばかり作っている。ある意味クールだ。そして俺はそのマキさんからCG彩色の仕事を受注している。

CGと言っても、エロゲーのCGというのはCG映画のような3Dではない。ゲンガー（原画を描く人のことだ）が紙に描いた絵をスキャナーでパソコンに取り込んで、フォトレタッチソフトでそれに色を塗るのだ。

フォトレタッチソフトで色を塗るのには、とても手間がかかる。そこでゲンガーとは別の人間が色を塗るという分業が発生する。色を塗るにもセンスがいるのだが、とにかく人手が必要なので、ゲンガーほど狭き門ではない。だからこそ漫画家を目指していてロクに就職活動もせず大学卒業後フリーターになりバイトで食いつないでいた俺のところに、漫研時代の知り合いから急に連絡が入ってマキさんを紹介されたりするのだ。

ちょうど漫画を描くのにも行き詰まりを感じていた俺は、その話に飛びついた。大学に入ったばかりの頃は、友人にエロ同人誌を作らないかと誘われて断った俺だが、エロゲーに抵抗はなかった。実際にセックスを経験してしまうと、今となってはなぜあれほどエロに抵抗があったのか不思議な気さえする。

それに今のエロゲーというのは若者の憧れる華々しい世界なのだ。エロゲーを全ての始まりとして大々的にメディアミックス展開が仕掛けられ、漫画になり、テレビアニメになる。もちろん問題は何もない。新しい時代が到来しただけだ。

まあそこまで売れるのはごく少数だ

が、一部の（オタクな）若者にとってエロゲー業界が憧れの世界であることは事実だろう。もはや漫画家を目指す者よりエロゲンガーを目指す者の方が多いかもしれない。エロゲンガーはスターだ。カリスマだ。神だ。
そんなわけで俺も原画をやってみたいとマキさんに言ったところ、絵を見せろと言われた。昔描いた漫画など見せたところ、エロ絵を見ないとわからないと言われた。そんなわけでちょうど仕事も谷間だったのでエロ絵を描いてみたというのが、今の俺だ。
とりあえず生ふたつを頼み乾杯を済ませると、マキさんはそれを一気に半分ほど飲んだ。
「あー、生き返る。ったく、なんで俺がそんな尻拭いまでしなきゃなんねえんだよ。痛がる凌辱ゲーとかワケわかんねえよ。もっとイチャイチャさせろっての。愛だよ愛。クソが！」
乱暴にジョッキを置いてまくしたてる。なんでも社内の別ラインでシナリオライターの一人が逃げたらしく、ここに来る間もずっとこの調子だった。マキさんは凌辱ゲーが嫌いなのだ。ちなみにその理由は「俺が萎(な)えるから」という非常に主観的なものだった。ある意味クールだ。
「まあいいけど俺にやらせんなよなあ。わかんねえっての。ったく何かっつーと金の話ばっかりで死ねるよなあ。俺が必死でユーザーに喜んでもらえるものを作ろうとしてるのに、どいつもこいつも邪魔しくさりまくりやがってさー。つーか誰か二千万ぐらいポンと貸してくれねえかなあ。オレオレ詐欺でもするか？　それか空から札束が降ってこねえかなあ」
だんだん言っていることが小学生レベルになってきたので、俺はポートフォリオを開き、絵を取り出した。
「えーと、これなんですけど」
公共の場でエロ絵を出すのは少し恥ずかしいが、まあ誰も見ていない。
「あ、うん。どーも。拝見いたします」
マキさんは急に丁寧な口調になり、両手でうやうやしく紙を受け取る。
仕上げまでやった七枚と、ラフ五枚を、マキさんは何度も繰り返し眺めた。
はっきり言ってこの時点で負けだった。絵はダイレクトに届かなくてはならない。見た瞬間に反応が得られなければ終わりだ。じっくり見て良さがわかる絵など存在しない。
「もうちょっとロリってる方がいいですかねえ？」
俺は恐る恐る尋ねてみた。
「いや、うーん、個人的にはそうしたいけど、売れないからねー」
マキさんは苦笑した。
「まあ純粋な美を求めたら小学校高学年が最高なんだよ。だから絵描きはロリ絵描きたがるヤツが多いけどさ、でも売れないからね」

そう繰り返し、マキさんは肩をすくめた。ある意味クールだ。
結局結論としては、すぐに原画をやってもらうのは難しい、同人で修行してみたらどうか、という感じだった。こんなことならあのときにエロ同人誌を作っていれば良かったと思ったが、今さら後悔しても仕方ない。
それから俺たちは最近のエロゲー事情についてひとしきり語り合い、マキさんはガンガン日本酒を飲んだ。飲みながらマキさんは、「キミはシナリオライターになるべきだ」とか言い出した。マキさん曰く、外注ゲンガーじゃ話の内容には関われない、漫画家志望だったなら話を作りたいだろう、だったらシナリオを書け、ということだった。しかしマキさんはすでに相当酔っていて、どこまで本気なのかわからない。俺は「考えてみます」とだけ言って、あとで考えてみることにした。
そのうちにマキさんは完全につぶれた。居酒屋のテーブルに突っ伏して、ワケのわからないことを口走っている。
「あーもうやってらんねえよなあ。ロリキャラになりてえなあ。『うにゅ』とか言いてー。戦争しねえなら男なんていらねえよなあ。外人部隊にでも入ろうかなあ……」
よくわからないが、巨乳のコスプレイヤーと付き合っているくせに、ずいぶんと現状に不満があるらしい。それともうまくいっていないいんだろうか？
「知ってるか？　女はやってから後悔して、男はやらずに後悔するらしいぜ。男に生まれて良かったのってそれぐらいだよな。やらずに後悔するほうがまだマシじゃん？」
しばらくしてマキさんはしゃべらなくなった。眠ってしまったようだ。
俺は不意にミーコのことが気になった。鍵は外の洗濯機に隠して携帯にメールしておいたけど、もう帰っているだろうか？
メールの返事は来ていない。
「マキさん」
声をかけるが返事がない。返事がないことを確認して、俺は言ってみた。
「マキさんは妹萌えってどう思いますか？　なんかうちの妹、ネコミミ生えてるんですよ」
言ってみて自分で苦笑した。あまりに唐突で荒唐無稽だ。変な電波でも受信しているようにしか聞こえない。まあ、寝ている相手に言うにはちょうどいい話だった。
「……あー。ネコミミリアになったんだろ」
意外なことに返事が返ってきた。一瞬焦ったが、それより内容が気になった。
「ネコミミリア？」
「マラリアとか、フィラリアとか、ペドフィリアとかあるじゃん。病名だよ病名。まあハシカみたいなもんだよ。女の子はみんななるって」

突っ伏したままマキさんは説明する。
もちろんそんな病気、聞いたことがない。しかしミーコには実際ネコミミが生えている。まさか俺が知らなかっただけなのか？
「ネコミミリアですか……」
俺はぼんやりと繰り返した。
「ま、ほっときゃ治るよ」
マキさんは言った。
ネコミミリア。なんだか楽しそうな響きだ。ユートピアとか、シャングリラとか、そんな感じだ。
——俺も大分酔っているらしい。

8

部屋の灯りは消えたままだった。中に入ってもミーコはいなかった。だけど荷物は残っている。
携帯に電話してみると、きっかり十回呼び出し音が鳴って、ミーコが出た。
「……はい」
少し不機嫌そうな声だった。番号通知で相手が俺だということはわかっているのだろう。
「今どこ？　何してんの？」
「公園。なんにもしてない」
そっけなくミーコは答える。やっぱり機嫌が悪いようだ。
「どうしたの？」
俺はできるだけ優しく尋ねてみる。
「別に。お兄ちゃんいなかったから」
「メールしたじゃん。ミーコがそんなに遅くなるなんて思わなかったし」
「だってお兄ちゃん、私がいるのイヤそうだった」
どうにか聞き取れるぐらいの声で、ミーコはつぶやいた。
「そんなことないって。来てくれて嬉しかったよ」
これは本心だった。
だけどミーコは黙っていた。
「公園って、コンビニのそばの？」
この辺りで公園といえばそこしかない。
「……うん」
「じゃ、迎えに行くから待ってろ」
「え……？」
俺は電話を切った。
俺のせいでもあるようだし、迎えに行くぐらいしてやってもいいだろう。
十月の夜はもう肌寒く、酔いが醒めてくると温かいものが飲みたかった。
公園に入る前に、俺はコンビニでホットのココアをふたつ買った。家ではよくミーコがココアを作ってくれたものだ。
公園の中は鈴虫の声でうるさいぐらいだった。住宅街の外れにあるこの小さな公園には、遊具といえば砂場とすべり台とブランコしかなくて、たった一本の街灯が公園全体を照らしていた。街灯のそばを小さな蛾が数匹飛び回っている。
ミーコは帽子を膝の上に置き、昨日と

同じ服でブランコに座っていた。下を向いたネコミミの艶やかな黒い毛並が、街灯の明かりに照らされている。
　そっと近づくと、俺に気づきミーコが顔を上げた。
「あ、お兄ちゃん」
　俺はコンビニ袋から缶のココアを取り出し、一本をミーコに差し出した。
「……はい、ココア」
「あ、ありがと……わたたっ！」
　それを受け取ったミーコは、両手で缶をお手玉するようにしながら、膝の上の帽子に置いた。
「うー。熱い……」
「すぐに冷めるよ」
　俺は自分のぶんのココアを開け、そっと啜った。確かに熱い。コンビニ袋を丸めてポケットに突っ込み、俺は缶を右手に持ち替えた。
「でも、なんでブランコなんだよ？　あっちにベンチもあるじゃん」
　思わず少し笑ってしまう。落ち込んで夜の公園のブランコなんて、ありがちなテレビドラマみたいだ。
「いいでしょ。そういう気分だったし」
　一瞬俺を睨んでから、ミーコも不意に小さく笑った。
「昔、よく一緒にブランコ乗ったよね。お兄ちゃんが立ち乗りして、私が脚の間に座って」
　そういえばそんなこともあったかもしれない。どう答えようかと思っていると、ミーコが話題を変えた。
「……仕事、どうだった？」
「あ、うん」
　ミーコは俺の仕事のことを知っているから、それは問題ない。だけど絵が良い評価を得られなかったことは、あまり言いたくなかった。
「なんか、シナリオ書かないかって言われた」
　酔っ払いの戯言かもしれないが、嘘ではない。
　ミーコは帽子の上で缶の熱さを確かめるようにくるくる回し、そっと持ち上げた。
「ふうん」
　プルタブを起こす音がやけにはっきりと聞こえた。
「すごいじゃん」
「……でも、エロゲーだぜ？」
　とりあえず言ってみる。ミーコはもう現役バリバリのオタクではないのだ。そこまでの理解は求めていない。
　ミーコは開けた缶を両手で持ったまま、口をつけずにそれを見つめていた。
「お兄ちゃんはそうやっていつも一人で先に行っちゃうんだ」
「え？」
「どんどん私の手の届かないところに行っちゃうんだね」
「………」
　俺は缶を左手に持ち替えた。確かにいまやエロゲーのシナリオライターといえば、若者（オタク限定）の憧れの職業ではある。現役のオタクではないとはいえ、

ミーコもそれぐらいは知っているのだろうか？　それにしても、話が飛躍しすぎている気がした。
　ミーコのミミは、しょんぼりと下を向いたままだ。
「お兄ちゃんが東京に行ったとき、私すごいイヤだったんだ」
「……いつの話だよ」
「でもイヤだったの」
　ミーコは一瞬俺を睨み、再び視線を落とす。
「ずっと言いたかった」
「なんだよそれは……」
　俺は呆れた。そんなことを七年も根に持っていたのか？
「でも、言ったらすっきりした」
　本当にすっきりしたらしく、ミーコは顔を上げて笑った。ミミもぴんと上を向いた。
　俺は反応に困り、ココアを一口飲んだ。
　ミーコは何かを期待するように、じっと俺を見つめていた。
「……そういえば、バンドとかどうしてる？」
　不意に思い出して、俺はミーコに尋ねた。
　俺がベースを買ったのも、元はといえばミーコのせいなのだ。俺が実家にいた頃、ギターを買ったらミーコも興味を示して、ちょっと教えてやったらすぐに俺より上手くなってしまった。だから俺は実家を出るときギターを置いてきて、あとでベースを買った。それでミーコに対抗するつもりはなかったけれど、やっぱり何か楽器が弾きたかったのだ。
　ミーコはその後、高校の文化祭でバンドをやり、大学でも軽音系のサークルに入った。最初はコピーバンドだったが、一時期はオリジナルもやっていたはずだ。
「軽音のバンドは卒業で解散。今はなんにも」
　ミーコは小さく肩をすくめ、ようやくココアに口をつけた。
「でも、またなんかやろうかな？」
　猫のような目で、ミーコは俺を見つめる。
「ね、お兄ちゃん、今度スタジオで合わせない？」
「……いいけど、下手だぜ？」
　ミーコはなんだかやけに嬉しそうで、少し照れくさかった。
　でも俺も嬉しかった。
　もしかしたら、俺は楽器が弾きたくてベースを買ったんじゃなくて、それはミーコがいない代わりだったのかもしれない。
　……って、だとしたら我ながらずいぶんシスコンなもんだが。
「いいよ、下手でも。ね、ここ寒くない？」
　そう言ってミーコは立ち上がる。
「そろそろ帰るか？」
「うん」
　ミーコは嬉しそうにうなずき、帽子を頭に持っていきかけて、それを胸の前に引き寄せた。

「ね、お兄ちゃん」
「ん？」
ミーコは目を閉じ、軽くうつむいて黙っている。
俺は何も言わず、そっとミーコの頭を撫でてやった。
「……来てくれてありがとう」
ミーコは目を開けると再び嬉しそうに微笑んだ。

環八の歩道をミーコと並んで歩いた。
通り沿いにはいくつものマンションが建ち並んでいる。
古いマンションがあり、新しそうなマンションがあり、安そうなマンションがあり、高そうなマンションがある。東京にはこれだけ多くの人が暮らしているのだ。
いくつかのマンションは下がテナントになっていたけれど、どこももう閉まっていた。片側三車線の道を挟んだ反対側のマンションの上には、円筒形の給水タンクが見えた。
すでに人通りもなく、ミーコは帽子を手に持ったままだった。仮に誰かとすれ違ったとしても、誰もネコミミを本物とは思わないだろう。人間にネコミミが生えるなんて、簡単に信じられることではない。
月はなく、等間隔に並ぶ街灯の光が、いくつもの影を歩道に落とした。ミーコの影にはどれもネコミミがついていた。
もう夜も遅いのに、車はひっきりなしに俺たちを追い抜いていく。そのたびに新たな影が長く伸びて、歩道からマンションの壁へと流れて消えた。
車の音が途切れると、ミーコが小さく鼻歌を歌っているのが聞こえた。俺の知らない歌だった。ミーコは振り返って俺の様子をうかがい、俺が苦笑すると再び前を向いて鼻歌を続けた。
しばらくの間、楽しそうな鼻歌だけが響いた。
「なんかさ、久しぶりにミーコと会えて、ちょっと楽しかったな」
俺は言ってみた。
ミーコは鼻歌を続けたままで、答えなかった。
「そのネコミミ、可愛いな」
大きなネコミミは本当にミーコに似合っていた。
鼻歌を最後まで歌って、ミーコは言った。
「にゃー」

布団の中でうとうとしていたとき、ミーコが俺を呼んだような気がした。
「ホントにしてみよっか？」
そんなことを言われた気もした。
だけど俺はもう半分寝ていたので、何も考えることができなかった。
そして俺は再び眠りに落ちた。

9

人の気配に目を覚ますと、もう朝だった。カーテン越しの薄明の中で、ミーコが荷物をまとめているところだった。
「帰るのか?」
「あ、お兄ちゃん」
床に膝をついたままミーコが顔を上げる。
ミーコの姿には何か違和感があった。ネコミミがないのだ!
俺は思わず身を起こした。
「お前、治ったのか……?」
「何が?」
ミーコは不思議そうに俺を見た。
ネコミミ、と言おうとして俺はやめた。あまりにもバカバカしい。人間にネコミミが生えるか、普通?
「……帰るのか?」
俺はもう一度尋ねた。
「うん」
ミーコはうなずいてスポーツバッグのジッパーを閉じた。
立ち上がり、帽子を深く被る。ここに来たときと同じ格好だった。
「お正月には、実家で会おうね」
俺に微笑んで、ミーコはスポーツバッグを持ち上げた。
「私もおせち作るから。楽しみにしてて」
「おー。楽しみにしてる」
「じゃ、またね、お兄ちゃん」
ミーコは小さく手を振って玄関へと向かった。俺はそのままミーコが出て行くのを見送り、再び布団に倒れこんだ。
布団にはミーコの体温とシャンプーの匂いが残っていて、ここで昨日ミーコがつぶやいた言葉が気になった。俺が何かを答えたとしたら、俺たちはどうなっていたのだろう?
俺は寝直す気にもなれず、牛丼屋の朝定食を食べることにして部屋を出た。
公園のイチョウは少しだけ紅葉していて、朝の風が身に染みた。
だけどもちろん、俺は後悔しない。当たり前だ。ミーコは大切な妹なんだから。
——それにしても、あのネコミミ可愛かったなあ。
俺はミーコの姿を思い出し、正月には絶対に帰ろうと心に決めた。
この感覚、わかってもらえただろうか?

phantom column 10

僕が脱オタしたわけ

安田理央
text by YASUDA, rio

僕はオタクだった。中学までの僕は、かなり正統派のオタクだった。いや、当時はオタクという言葉は、まだなかったが。

運動が、からっきしダメな文化系眼鏡男子だった僕が、そちらの道にハマったのは『宇宙戦艦ヤマト』がきっかけだった。ロボットが出てこない宇宙モノだなんて、オトナっぽいと思った。カッコイイと思った。当時の小学生は誰でも「ヤマト」に夢中というブームであったが、僕は「ヤマト」の記事が出ている雑誌を漁っているうちにあの伝説の雑誌『OUT』に出会ってしまった。一九七八年九月号。特集は「さらば宇宙戦艦ヤマト」ではあったが、表紙は第二特集の桑田次郎（現・二郎）の『8（エイト）マン』だった。充実した「ヤマト」特集に惹かれて買った『OUT』だったが、それ以外の記事が素晴らしく面白かった。マニアックなSF映画の紹介やアメコミ、ロック、そしてパロディ。当時の『OUT』はサブカルチャーの匂いが濃厚な雑誌だったのだ。それは背伸びしたい盛りの小学五年生にとっては、あまりにも甘美な果実だった。僕は『OUT』を入口に、ズブズブとアニメの世界へとハマっていった。当時はアニメ＝SFという風潮があり、SFにも手を出した。半村良と平井和正に夢中になり、青背表紙のハヤカワ文庫を片っ端から読み漁り始めた。なんとも嫌な小学生だ。

中学生になると、いっぱしのアニメファン、SFファンになっていた。もちろん大ブームの「ガンダム」にもハマったが、よりSF色の濃い「イデオン」が一番好きだった。中学生の分際で、スタジオぬえ主催の合宿イベント「クリコン祭」にも参加した。その世界にはオトナの匂いがした。オトナの世界に首を突っ込む快感があった。

そう、その世界は僕にとってはカッコイイものだったのだ。同学年の幼稚な奴らにはわからない別次元の世界。アニメとSFは「おれはお前らの知らない世界を知っているよ」という自意識を満たしてくれた。

しかし、ふと気がつくと、そんな自分の認識と世間の認識にズレが生じていた。アニメとかSFとか好きとか言ってるヤツらは、カッコ悪い。いつの間にかにそんな風潮が生まれていた。はじめは「根クラ」のレッテルを貼られていたその世界は、やがて「オタク」という蔑称で呼ばれるようになる。

え、なに？　この世界ってカッコ悪いの？　女の子にモテないの？

思春期の少年にとっては大問題だった。僕が思い込んでいたのとは違い、実はこっちの世界はカッコよくない。これは女の子にモテない。そう直感した僕は、高校生になるのと同時に、その世界から逃げ出した。ちょうどオタクという言葉が一般に浸透しはじめた時期だった。あわててオタク的なものとは一切、手を切った。アニメを見ることも止めた。『OUT』の購読も止めた。『Animec』も『ふぁんろーど』も捨てた。ロックバンドを始めた。髪を短く刈り上げた。人前ではアニメやSFが好きだったことは口にしないように気をつけた。元オタクだとバレたら、おしまいだと思った。女の子とおつきあいしたり、楽しい青春は謳歌できないと思った。

しかし、僕が逃げ出した先もマイナーなロックやマイナーな映画やマイナーな雑誌という世界だったので、やはり女の子にはモテなかった。モテという面では、この脱出劇はあまり意味はなかったのだ。モテない奴は、結局のところモテないような趣味にしか興味を持てないのだ。

そして僕がオタクから脱出して二十年。状況は一変した。え、何？　電車男が素敵？　オタクとつきあいたい？　眼鏡男子に萌え〜？　なんだよ、それ。僕が何のためにオタクを捨てたと思ってんだよ。何のために分厚い眼鏡を捨ててコンタクトレンズにしたと思ってんだよ。ああ、がんばって、オタクだと思われないように努力してきたのに……。

最近は再びオタク方面にも色目をつかい、コミケで自主制作AVを売るなどの試みに挑戦したりしております(笑)。しかも「恋風」ネタなんてのを…。ダリオレコード http://dariorecords.com/ にて購入可能。第二弾は古屋兎丸先生撮影の大型写真集（左上）だったりします。

勉強堂雑記 出張版

本家 http://get-ugly.jp/pornostar/zakki

玉置勉強

唐突でなんですが

この度リコンをしまして、ええ

離婚届

よく覚えてない

それはいいんですけれど

飼い猫がウチには3匹いまして

一番年上の♂
ノルウェジアン
フォレスト・キャット

全然アメショーと
気づいてもらえない
黒(ブラックスモーク)♀

上の2匹より
2さいくらい下の
三毛♀（ハナクソ）

?

細野不二彦さんのウチからもらった

ほんとにボク
おとこのこだよ

しんじられないなら……
ここ……さわってみてっ

はあっ
……

ぁ……!!

ぎん
ぎん

で先日

ウォオオオーーン

ノルが彼女の家へと
引きとられていきました

車が何よりも
嫌いなヤツ
なんで
ちょっと
心配したが

アー

アオ

ほどなく
到着後の
様子が
写メで送られて
きたけどそれが
いつも通りの様子で苦笑

しかし　やっぱり　さびしいできごとだ

残された2匹のうち
ミケは

ふあーーっ

「お兄ちゃんどこー？」
という感じで
家中を探し
回っている

もう一匹は
なんかもう
覚悟決めてますって
感じだけど
ゴハンをあげる時だけ
いつも順番が最初だった
ノルが
いないので

？

先に食べても
いいのか
迷ってるようだ

ノルは生まれて
はじめて飼った
恒温動物だった
ので愛着も
ある

いや・・これっくらい
何てことない
人間の子供
だったら
引きさかれる
ような思い
なんだろうな
畜生ごときで
甘いぞ

と

もっともらしい
相対化で
ごまかしてみたけど

さかな

いぬ

0

50

100

だんごむし

ねこ

にんげん

これって
悲しみとか
存在の大きさを
数値化する
ことだよなァ

そんなの
横暴だね

やっぱ
悲しくて
いいんだ。

相対的に考えられる
点があるならば
彼女の方もまた
ウチの2匹とは
会えなくなるってこと
だけだね

てっしゅ

その日の夜は
2回オナニーして寝た。
それもまた人の性。悲し。

phantom column 11

進め！ヲタク道 第一回

くりいむレモンゲームを究める！

かーず
text by KAZU

はじめまして。インターネットの片隅でFLASH&ヲタクネタのニュースサイトをやってます、かーずです。

編集さんからは自由に書いていいとの御達しだったので、唐突ながらも筆者のヲタク原体験を遡ってみますと、小学6年の頃に出会った『月刊コンプティーク』の「ちょっとHな袋とじ」の片隅に小さく載っていた5cm四方の『くりいむレモン・媚・妹・BABY』の記事。そこから転がるようにヲタク道を邁進していったわけですが、この体験が元で、どうしても『くりいむレモン』は別格でジャケ買いならぬタイトル買いをしてしまいます。そこで、そんな私が今までに遊んできた『くりいむレモン』ゲームを紹介していこうと思います。

▼STAR TRAP
（1987年7月　PC-8801他　JAST）

エスパーの女の子2人組が植物惑星でハチャメチャな騒動を巻き起こすSFもの、ぶっちゃけダー○ィペアの18禁クローンなんですが、そのゲーム化がくりいむレモンゲーム第1作目になります。

この頃のアドベンチャーゲーム（以下AVG）というと、今みたいなコマンドをカーソルで選択していくシステムではなく、「ミル　マド」「シラベル　ユカ」という風にキーボードに文字を打ち込んでいく「コマンド入力式」でした。シナリオライターの使いそうな用語を思いつくままに片っ端から入力しては、「ソレハ　デキナイワ」などと言われて凹むという砂漠に落ちたコンタクトレンズを拾うがごとき作業の繰り返しが当たり前の時代。このゲームの場合、開始して一番初めに入力する言葉が「れずする」など、のっけからつまずくこと請け合いの激ムズ難易度です。

▼SF・超次元伝説ラル
（1988年11月　FM-7　ポニカ）

美少女剣士キャロンが魔法使いラモー・ルーにさらわれた王女ユリアを助けに行く原作アニメをAVGにしたものなんですが、場所を移動したりコマンドを選択するたびに時間が経過していく時間制限式のシステムがなんとも曲者です。煮詰まって場所を何度も行ったり来たりしただけで、唐突に囚われのユリアが服を脱がされていくシーンに移り変わり、何度目かのシーンですべて脱がされるとゲームオーバー。無駄のない行動で先へ進むために、メモを取りつつ中学時代の暇すぎる夏休みを全部使い切ったんですけど、正直、無理でした。

さて、時代も進んで国産パソコンはPC-9801が天下を取った時代、デジタル8色からアナログ16色になり美麗なCGが表現可能になりました。そのせいかエロゲーの進化も恐竜のごとく多種多様な爆発的進化を繰り返す中で、『くりいむレモン』ゲームも自社ブランドでひっそりと、しかし何作もリリースされるようになります。

▼黒猫館
（1993年7月　フェアリーダスト）

1980年代の当時からメイドさん萌えを追求していたという時代を先取りしすぎたこのシリーズがAVGとしてリリースされました。

苦学生である村上青年が「書生求む」との求人広告につられてホイホイと山奥の洋館へ来てみれば、エロ未亡人とお嬢様とメイドさんによるくんずほぐれずの日々で飼い殺されるのが原作版。このゲームでは村上の友人となって、2人目として黒猫館を訪れます。

村上と同じように悦楽に堕ちていく主人公ですが、ここで原作アニメにはないクライマックスの展開が強烈でして、もうプレイする人もいないだろうから書いてしまいますと、この母娘は自分の腹にナイフを突き立てて、そこからぱっくりと割れて這い出てくる胎児が急速に成長していくというホラーなシチュエーションが秀逸の出来です。なぜかこの部分だけ台詞の描写やCGの塗りに臨場感がこもっていて、抜け殻となった亜里沙お嬢様の虚ろな瞳がモニタのこっち側をジーッと見つめるCGはトラウマ度が高くて鬱入ること間違いなしです。

この母娘の不老の正体は男の精を吸い取って脱皮しているからでした！　というオチなんですが、あれ？　黒猫館ってそんな話だっけ？

ちなみにWindows95用ゲームとしても黒猫館は発売されていますが、こちらは館内を移動するとOVAのシーンがダイジェストに流れるという一種のスライドショー。肝心のムービーシーンはケータイの液晶サイズ程度しかないという、なんとも「お察しください」というコメントしかできない苦々しい出来なので要注意。

▼亜美 〜風立ちぬ〜
（1994年6月　フェアリーダスト）

くりいむレモンの代表作といえば亜美シリーズ。ビデオはシリーズ通算

で8本もリリースされています。なのに、なぜか『ラル』や『STAR TRAP』の方が先行してゲーム化されてきたのが謎なんですが、ここにきてようやく本命が登場です。

しかもジャンルは「アイドル育成シミュレーション」。古くは『デビュー(誕生)』から最近では『アイドルマスター』までアイドル育成ゲームもいろいろありますが、本作が『くりぃむ』たらしめているのは、亜美ちゃんがやたらとオナニーしてしまうことです。

唐突に「……んっ……お義兄ちゃん……」と喘ぎ始めたと思ったら画面が変わって1枚CGでくちゅくちゅとイタしてしまう亜美ちゃん。局部が別窓でクローズアップされていてアニメーションで指が動く気合の入り方ですが、ユーザー的にはご褒美ではなく完全にペナルティ。オナると体力や学力といった各種パラメータが減ります。まあ体力が減るのは理解できるんですが、学力が下がるというのは「オナニーすると馬鹿になる」という俗説を制作スタッフがいまだに信じているとしか思えません。ちなみにオナニーイベントは頻繁に起こる上に、プレイヤーの努力で防ぐことのできない完全なランダム要素という底意地の悪いシステムになっています。

なお、滅多に起こらないレアなイベントとして、ヒロシお義兄ちゃんが「亜美、もう我慢できない…！」と押し倒すエッチシーンもありますが、この時のパラメータの減り方はオナニーの比ではなく激減します。これって、ヒロシが妹のアイドル活動に反対していることの実力行使なのかなぁ、と余計な勘ぐりをしてしまいます。

▼ラルⅢ 覚醒編
（1994年10月　フェアリーダスト）

あの悪夢のようなFM-7版から幾星霜、2度目のゲーム化を迎えました。原作ストーリーは先ほどちらっと書きましたが、キャロンがリバースの剣を携えてラモー・ルーにさらわれた王女ユリアを助ける『ラルⅠ』と、その3年後に復活したラモー・ルーにキャロンが再び対峙する『ラルⅡ』からなっているのが原作OVAでして、「Ⅱ」では様々な伏線が張られていて、おそらく続編の予定はあったんだと思いますが、ついぞ続きが世に出ることがありませんでした。

しかし、このゲームのタイトルは『ラルⅢ』！　アニメからゲームに媒体を変えての第3弾ですよ。当時の私は喜び勇んで購入、さっそくプレイしてみました。

「村娘のキャロンがアースガルドの剣を携えてゲルバザーに襲われた王女ルビーナを助ける」……って、あれ？

これ「Ⅰ」の焼き直しじゃないですか、冗談キツイなぁ。しかもキャラクターデザインだけは「Ⅱ」の3年後の大人びた方のキャロンです。

そこに至ってようやく気づいたんですが、もしかして「Ⅰ」＋「Ⅱ」＝「Ⅲ」って足し算でこのタイトルついてんのかコレ！　このタイトルをつけた人は、本当に地獄に落ちればいいと思います。

▼エスカレーション'95 お姉さまって呼んでいいですか？
（1995年3月　フェアリーダスト）

全寮制の女学園に編入してきたリエは才色兼備の生徒会長・ナオミに一目惚れ。超タチ系レズビアンのナオミにSM調教されてしまうというのが原作アニメのストーリーですが、このゲームではプレイヤーはナオミとなってリエやミドリを調教していきます。「リ○アン女学園で小○原祥子になりきって、祐巳ちゃんらプティスールをコマしていく話」と置き換えると、わかりやすいかもしれません。

学園内を徘徊してアイテムを拾い、それを使ってリエやマリを調教していくAVGなんですが、学園に落ちているものと言えば双頭バイブとか浣腸シリンダーとかそんなんばっかり。はたして大丈夫なんでしょうか？　この学園は。それはそうと、ナオミが下級生を付け狙う理由が「生意気だから」「可愛いから」と小学生のイジメレベルなんですけど、この人、学園一の才女じゃなかったんだっけ？

そんなナオミのワイルドな一面が出ているのが調教モードの選択肢。この頃のエロゲーというものは、エッチシーンの最初は「キスをする」「胸を揉む」からスタート、「乳首を吸う」「あそこを触る」など次第に下半身を責めていくという前戯の流れがあるんですが、そんなヌルい展開は一切なく、ミドリの場合はいきなり最初に選べるのは「顔を責める」「お尻を責める」の2つだけという徹底したストロングプレイに仕上がっています。

学園徘徊モードもかなりカッ飛んでます。ナオミが獲物たるリエ達に悪戯心でキスをチュッとしては相手に怒られたり引かれたりして、「本当にごめんなさい、私を嫌いにならないで」と殊勝な謝罪。で、「いえ、もう気になさらないでください」と相手が一歩譲歩した瞬間に「じゃあ好きなのね！」とガバッとスイッチが入って縛り上げて調教してしまうという一流の交渉術はまさに神業。しかもそれを計算でやっているわけではなく、どう見ても天然です、ナオミお姉さま。

この「学園徘徊→調教」の繰り返しを続けていけばいつのまにやらエンディング。学年的に共に在校しているはずがないアリサが出てきたり、ミドリがナオミに反抗的だったりと改変が加えられていますが、ナオミお姉様の言葉責めや当時から話題になっていた過激なSM描写は健在で

して、エスカレーションファンなら満足できる1本に仕上がっています。

▼5時間目のヴィーナス
（1995年4月　フェアリーダスト）

美術室で失神して保健室へ運ばれた『葵しめじ』の謎を保健の先生が調査するAVG。小説のように話が進んでいき要所で2択・3択を迫られて話がどんどん分岐していくタイプでして、「ミル　アオイ」だの時間制限式だのといった意地悪もなく、一見普通のゲームです。

……が、ここで終わらないのがくりいむゲー。触診と称したセクハラシーンでは、しめじちゃんの身体をマウスカーソルでクリックして性感帯を刺激するんですが、カーソルの有効範囲が微妙すぎて、しめじちゃんはまったく無反応なマグロ状態が続きます。乳首周辺をドット単位でカーソルをずらしながらカチカチと連打している自分の姿に、「俺って一体……」と、ふと我に返ることもあります。

▼STAR TRAP
（1996年1月　フェアリーダスト）

ここにきて、またもや『STAR TRAP』が2度目のゲーム化になっています。PC-88版の移植ではなく、ランとかなたのコンビと任務で同伴するスケベな男性調査官になって事件解決するというオリジナル要素を加えてのAVGです。

話の本筋は原作アニメと同じく植物惑星に潜入して囚われの女性たちを救う話ですが、新キャラとしてランとかなたをライバル視してつっかかってくるツンデレ女性調査官に注目。ただ気絶していたという理由だけで主人公タクヤは無理やり押し倒してレイプ！　手籠めにしてそのまま旅のお供にしてしまうというドラクエやFFでは決して学べない間違った仲間の増やし方に漢の生き様を見たような気がしますが、どこからどう見ても重犯罪行為です。

▼レモンエンジェル
（1996年2月　フェアリーダスト）

くりいむレモンから派生した3人娘のアイドルユニット「レモンエンジェル」。『ヤングジャンプ』に漫画が連載され、エッチな深夜アニメが放映されるなどメディアミックス展開がされた2.5次元萌えの先駆者ですが、その一環としてゲーム化もされました。

ヒロイン「桜井智」（そう、あの人気声優である櫻井智をモチーフとしています）が6つの世界を旅して、仲間である他の2人を救う紙芝居アドベンチャーです。

注目したいのはアイドルコンサート編。ドームでデュオコンサートを開くことになった智ちゃん、そのお相手はなんとトップアイドルの「野々村亜美」！　無事にコンサートを終えて控え室に戻ると、亜美ちゃんは「コンサートした後は興奮して身体が火照っちゃうの」と発情して智ちゃんに襲いかかります。現実のアイドル声優・智（3次元）とアニメのアイドル・亜美（2次元）の夢のエロコラボがここに実現！

「おっ、やってるな、俺も混ぜてくれ」と変に小芝居がかった寒いAVノリで河野が乱入してきて3Pに突入するのがいやはやなんとも……。河野が芸能事務所の社長になって改心したという設定は華麗にスルーされています。

▼亜美 ～傷心の天使
（1997年6月　フェアリーダスト）

あのヘッポコ育成シミュレーションから早3年、亜美シリーズ2度目のゲーム化は、お兄ちゃんとの情事が親バレして傷心のまま軽井沢で友達と過ごすAVG。冒頭の1人エッチからクラスメイトが駆け寄ってくるシーンに至るまでアニメーションして女の子が動きまくることに、さすがアニメ制作会社が母体になってるだけあるなぁと感心していたら、最初の5分を過ぎたら後はごく普通の静止絵になってるという竜頭蛇尾な仕様になっていてゲンナリ。

しかし、もっと萎えるのが男性ボイスです。棒読みの上に、エッチシーンでは亜美ちゃんと同じ文章量だけ野郎が喘ぐという嬉しくない男女平等主義を採用。絶頂の時には「ンッ、ンッ、ンッ、うわ～～っ！」という投げやりな男性の棒読みが強烈過ぎて脳裏に刻み込まれる怪作に仕上がっています。

さらなる問題は、まったく亜美に似ていないキャラクターデザインでしょうか？　PC-88の『STAR TRAP』やFM-7の『ラル』はチープなスペックながら、まだ頑張って原作アニメに似せようという意志が感じられましたが、『傷心の天使』はWindowsの1677万色にもかかわらず、似せようとする努力を放棄しているのが亜美ファンには非常に切ないです。

ざっと振り返ってみた『くりいむレモン』ゲーム、いかがでしたか？　その他、『魔人形』もWindowsでゲーム化されていたりします。

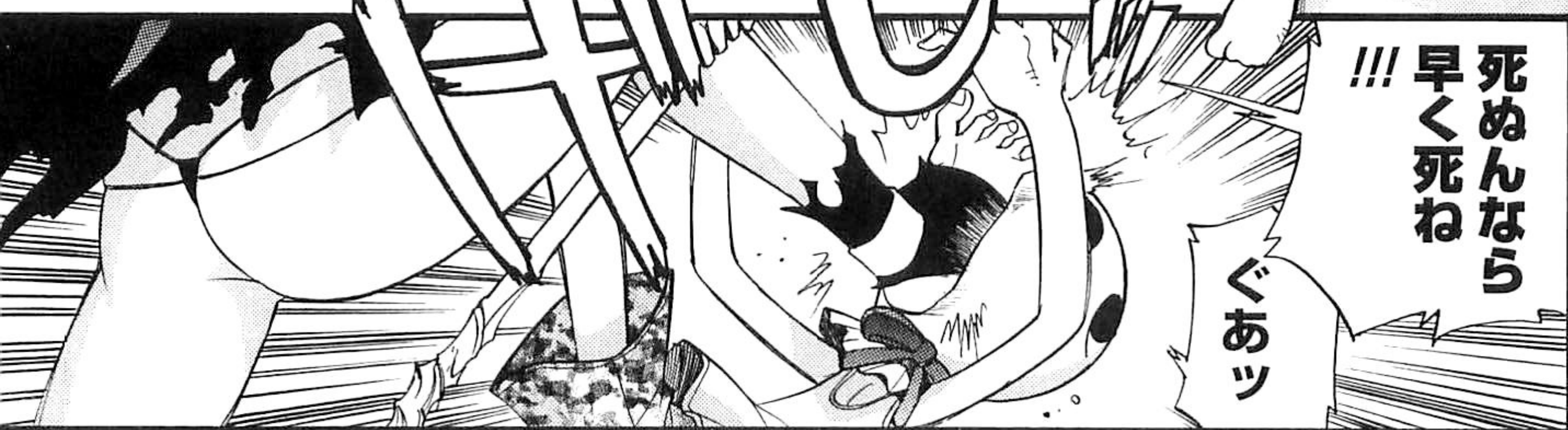
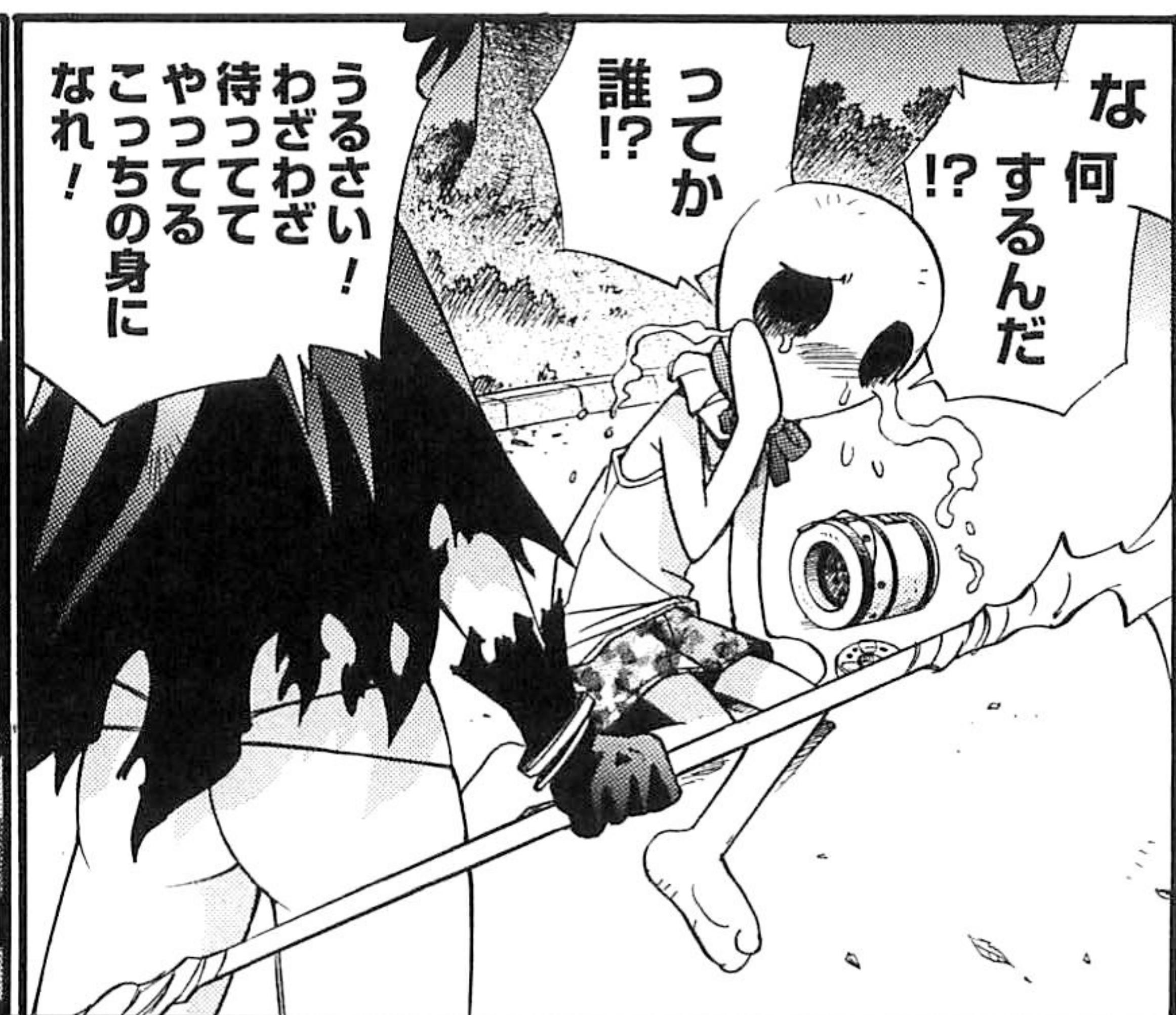
さて、いったいどれが一番楽しめるのか？という質問には『エスカレーション'95　お姉さまって呼んでいいですか？』を挙げておきます。しかし、すべてのゲームが一癖も二癖もあって何とも味わい深いのが『くりいむレモン』のゲーム達。普通のユーザーには許せないことだらけのような気がしますが、一昔前に『くりいむレモン』シリーズに魂を引かれたヲタクならば、また違った輝きをそこに見ることができる……と美化した物言いでごまかしましたが、どう見てもク○ゲーだらけです。本当にありがとうございました。

練炭

知らないことはわからない

小野敏洋

死ぬんなら早く死ね!!!

ぐあッ

な何するんだ!?

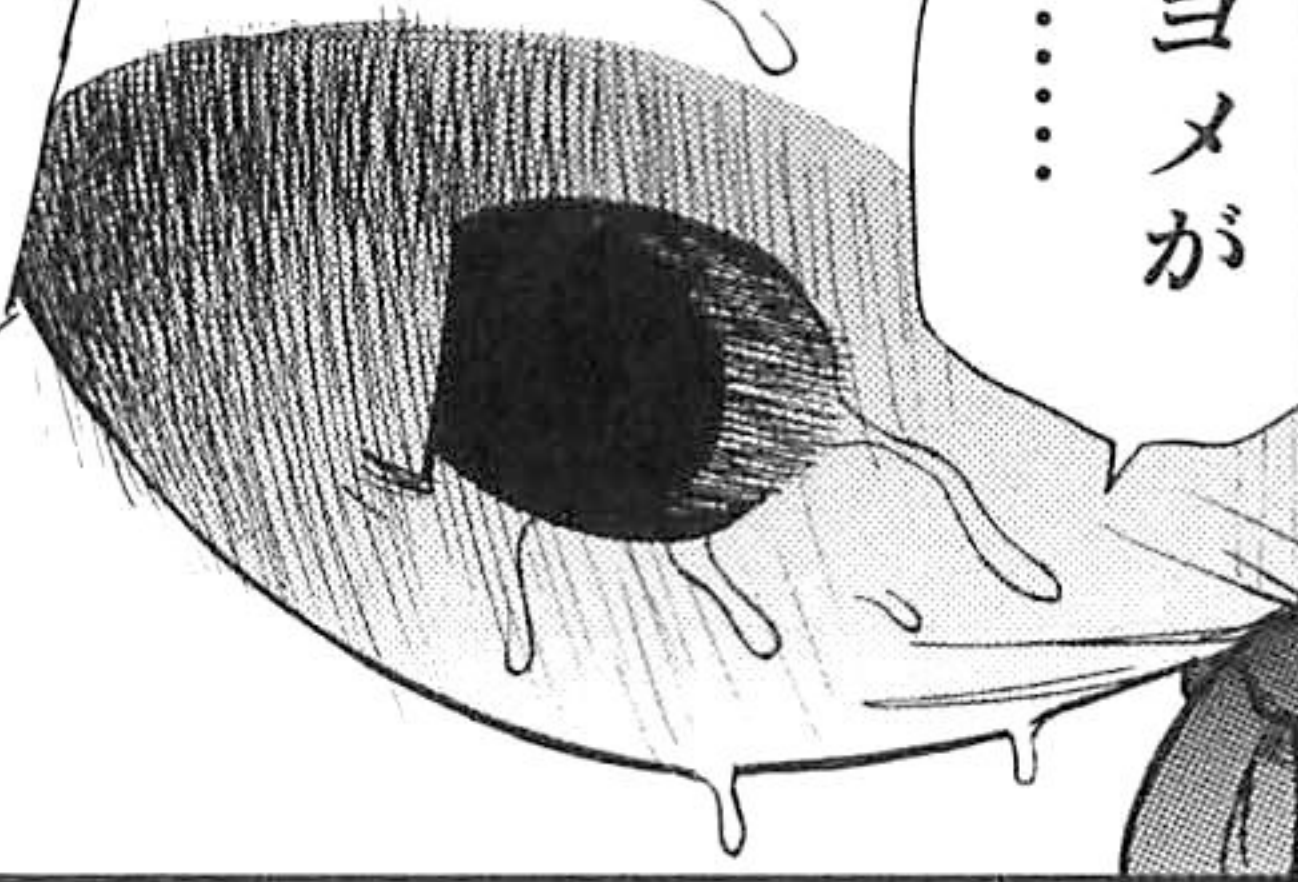
ってか誰!?

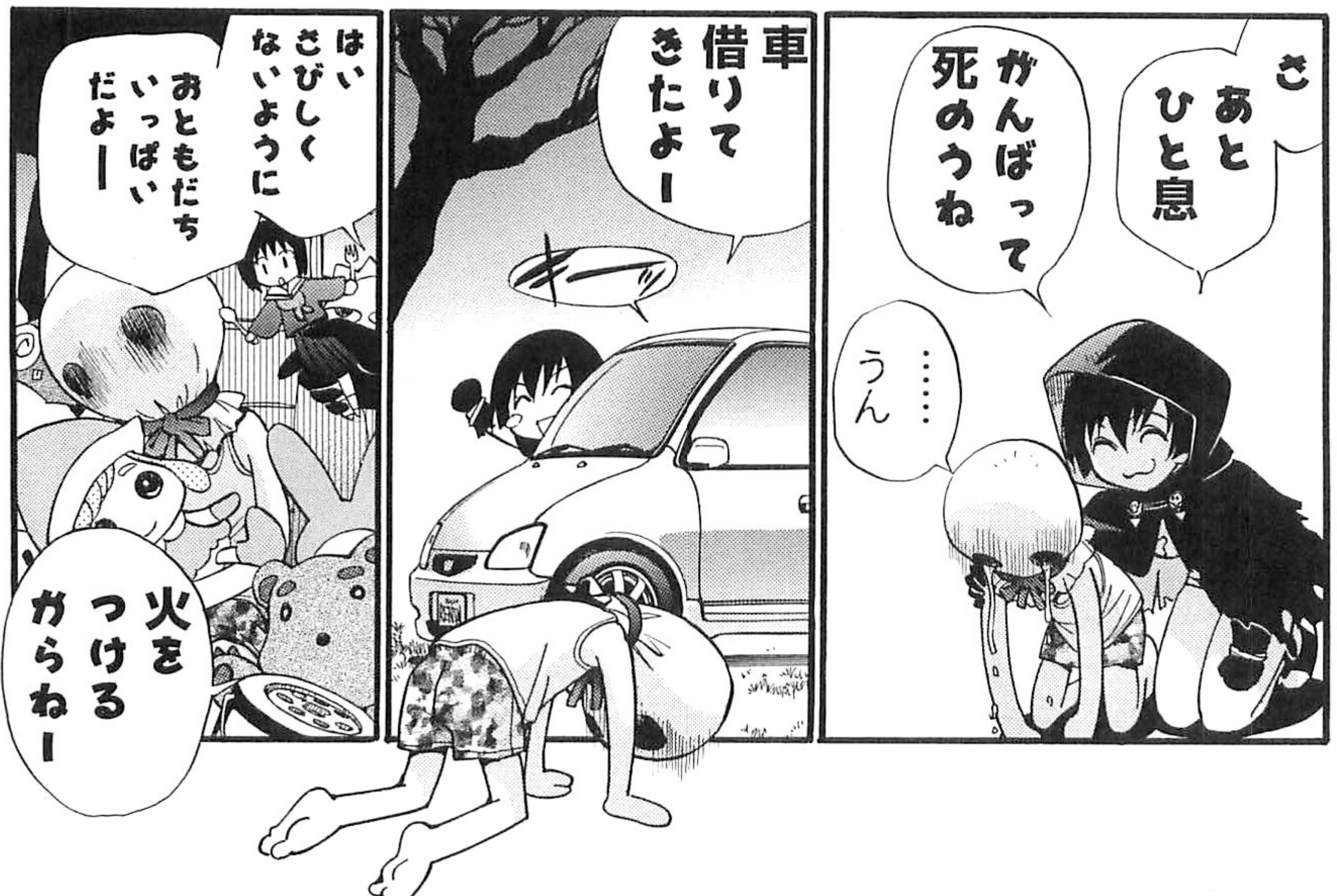
うるさい!わざわざ待っててやってるこっちの身になれ!

何もない人生に終止符をうちたいんだろ!

この無職童貞めが!!

わたしは死神だ!!
早くあんたの魂持って帰って一杯やりたいんだよ!
そんなベタな
はっはっはっ
ピキッ
ちょちょっと待って…
あれ?
しぶといな本気で死ぬ気あるのか?
ブスブス
君が死神かどーかは置いとくとして
三次元の女がおれに何の用だ!
金ならない!
無職にそんなもん期待するか!

魂だ！
魂をくれ
早く!!
どーせ
このまま
生きてたって
一生無職童貞
だ！
早く
死んじゃえ
よ!!
うん…
そーなの
なんかもう
あるハズの
ない未来を
夢見て
生きるのも
何もない
人生をネタに
して笑いを
とるのにも
疲れて
きちゃった…
「疲れたなんて
情けない」と
笑えば笑え！
だって
疲れを
癒してくれる
天使はもう
いないんだよ
生きてる
意味がない！
ヨメが
……
いるの
かよ！
なんだ
そりゃ
前は
優しく
語りかけて
くれた
ヨメたちが
…
「たち」!?
おれを
無視する
ようになったん
だよー！
二次元
かよ!!

これは何かのビョーキかと思って…
幻聴が聞こえなくなったんならむしろ治ったんじゃ…
掲示板でスレッドを立ててみるも
3日連続レスがひとつもつかない…
その時わかったんだ
おれは大人になっちゃったんだって!!
せっかくの無職童貞なのにおかしいよ!!
どーゆーこと!?
確かにおかしい
おまえの頭
きっと寝てる間に誰かがおれの童貞を奪って就職させたんだ
おれはもうダメ人間失格だ!
ポン
だから死ぬんだろ?
でも
大人視点でよくよく考えてみたら
間違ってんじゃないかと!
自殺が!?

いや世の中が!!
自分の子供を平気で虐待するバカな親や
厚顔無恥な政治家
罪悪感のカケラもないアレな犯罪者ども！
そんな連中がのさばってるのに善良な一市民のおれが自ら命を絶ってもいいのかと!?
滅びるべきは世界だろ!?
さあ死神くん手を貸してくれ！
一緒に人類を粛清しよう!!
そんなことしたら商売あがったりだよ
それにその理屈はおかしい
そんなことしたらあんたもバカな人間と同類じゃん
ハッ
言われてみれば

だいたい善良な一市民ゆえに
何の力も持てず
食っちゃ寝×2
起きては全裸でパソコンの前
匿名で一日中毒を吐き続けることしかできなかったんじゃないの？
それがあんたの限界であり
できることのすべてなんだよ
もういいじゃないかあんたはがんばって生きたよ
うう…
あんたの頭の悪い書き込みは永遠にネットに残る
それがあんたの生きた証だ
よかったな
さあとひと息
がんばって死のうね
……うん
車借りてきたよー
キーッ
はいさびしくないように
おともだちいっぱいだよー
火をつけるからねー

バイバーイ

いや やっぱりおかしい！

この期に及んで見苦しい!!

だってぇ～～！

ほら！死んだ気になってなんとかってゆーじゃん

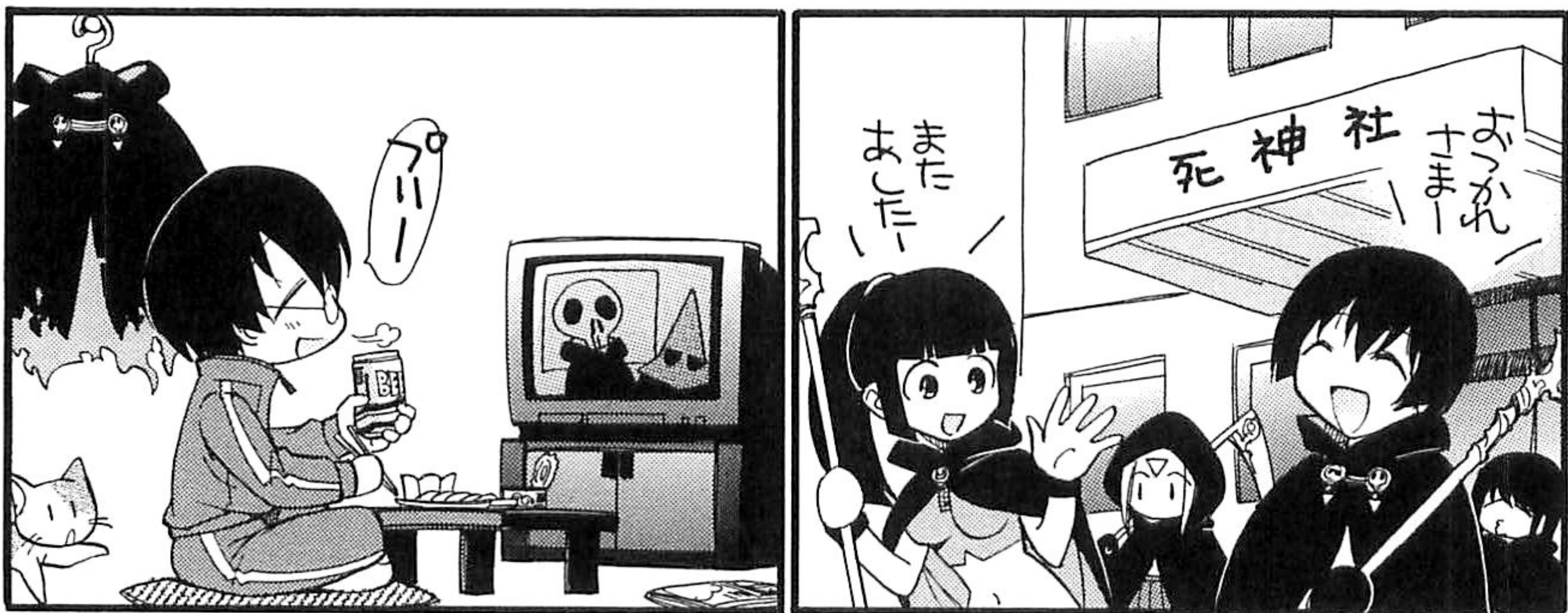
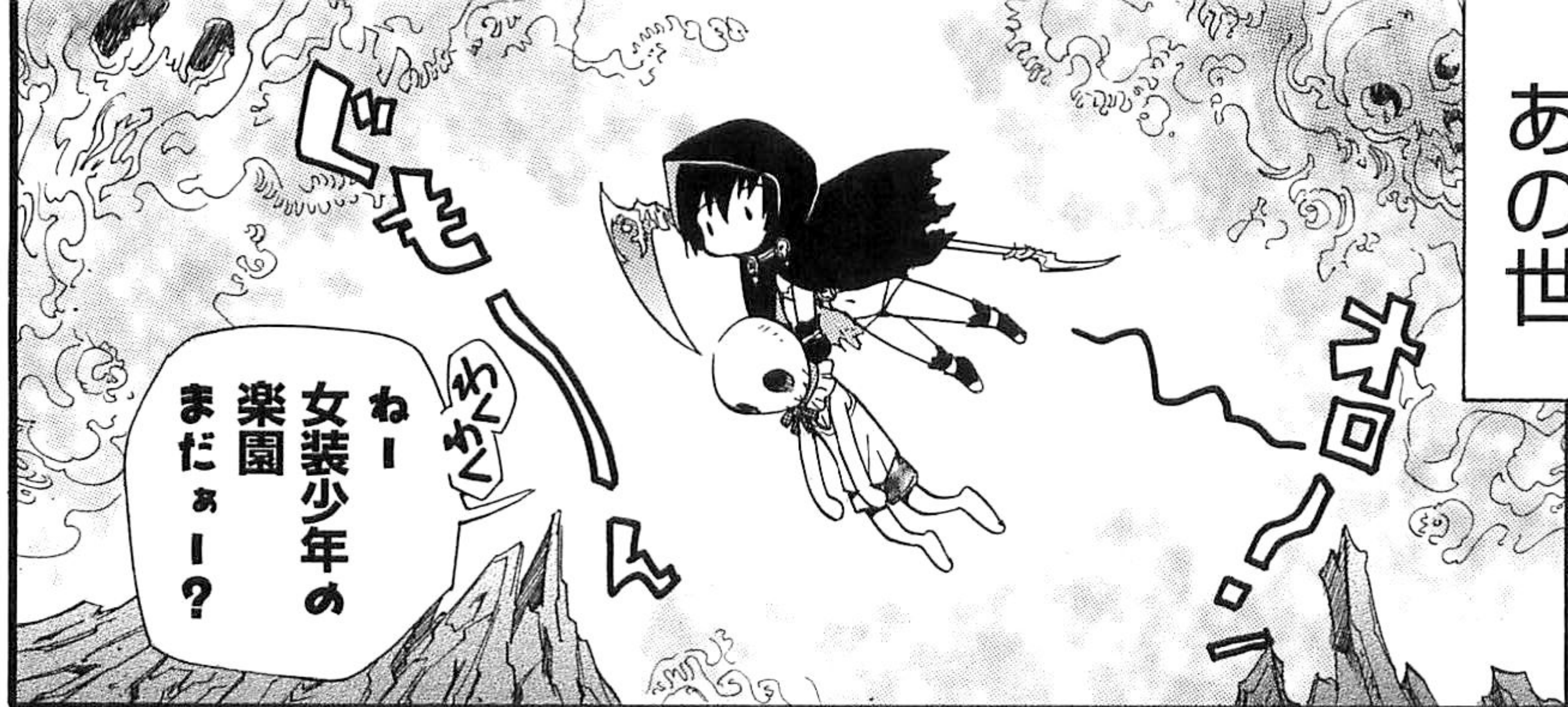
死んだ気になって死ね！

あ そーだ

あの世が女装少年の楽園だって言ったら死ぬ？

何やってんの!?

目張りしっかりして！

あの世
オロ〜〜〜！？
ぐも〜〜ん
わくわく
ねー
女装少年の
楽園
まだぁー？
はい
はい
ポイ
あれー？
ここ
年増園
だよー
死神
さーん
ま
これは
これで
おつかれ
さまー
また
あしたー
死神社
プハー
明日は
いい日で
あります
ように
死神

— END —

オレは遺跡ハンター
!
情報を辿ってこの遺跡についたお宝があるといいが
何でも大昔に滅びた国のモンだこの遺跡にもその時代の結界があるらしい
入り口発見！
空間的に絶対的な力が働いている
おかしなモノじゃなければいいが
ミタムラ発け～ん！
ニッ
今回もお宝は頂くわよ！
ギィ
いらっしゃいませ～

何をお探しでしょう？

特殊装備がご入用ですか

はいはい この間見つかった遺跡に必要な装備ですね

Costume Place

火浦R

ひょっとして政府指定〈8382〉の遺跡でしょうか

あの遺跡には強力な結界があるみたいですね

ランクは5つありますけど？

じゃあ一番安いのを

対抗レベルも下がっちゃいますけど？

いいよいいよ…

お求めの品はこちらになりますが…

サイズはMでよろしいですね

この装備には靴も必須です

こちらの鞄み今ならセットでお安くなりますよ

じゃあそれも

しめて五万八千エンになります！

高っ

ポイントカードはお持ちですか？

ホントにこんなんで大丈夫かね頼り無さそうに見えるけど…
スイッチ スイッチお仕事モードっと
てくてく
コレくらいの中級ダンジョンはそこらにゴロゴロしてる
場所によっては結界があることもあるが
お宝～ お宝っと
コッーーン コッーーン
盗掘は違法だから直接情報収集できないのがイタイぜ
コッーーン
その危険以上に魅力的なお宝が‥
シュウウウ
!!
しまっ…!!

あれっ
ハマッたーーーー!?
もう誰も いねーじゃん
もっといい装備にしておくんだったーーーーーーー!
解除方法は何だ？場所か？時間か？
ガラッ
何だよ 帰りにゲーセン行こうと思ったのに
いや そもそも この結界のカテゴリーが分かんねー
初体験だ!
誰もいねーよな ホントに…
何やってんだ オレはーーーーー!?
何だ…
ぷる
ぷる
ぷる
視覚ヤラれてるんだぞ
こんな得体の知れないものくわえられるか!!

ミタムラくぅ～ん
タタタタタタタタタ
ピシャ
ピシャッ
も～～～～～～～～
ミタムラ君たら～
ずっと校門で待ってたのにぃ
おどかそうと思って…
ユズキ待ちくたびれて
ミタムラ君の事
探し回ったんだから!!
もう帰っちゃおうかって思ったよ
ユズキ!!!
バーカ
バーカ
もーお宝は
頂いたわよ!
ガッ
ガッ
バサーバサー
38勝11負
5引き分け!
バカ
やめろ!!

ハマッた!!
ギャァァ
あの…
あのね…
一番高い装備にしておけば良かった！
色々トラブってる人も多いみたいですから
対抗装備はちゃんとして下さいねランクは5つありますが？
じゃあ下から2番目のやつでいいわ
それでもそこそこ使えるんでしょ？
はい そこそこです
ちゃんと調査された遺跡じゃないので万全かどうかは分かりませんが…
ですので注意して下さいませ
そうそう難度の高いダンジョンばかりじゃないでしょ
くるりーん
いいわねコレ
セットでみつくろってくれる？

カバンとシューズは必須アイテムです
今なら携帯通話魔導器もお得ですヨ
しめて十二万八千エンです
あのポイントカードは…
ボキ
バキッ
みてなさいよ
ミタムラァ
のしてやるわ!!

ユズキね……ミタムラ君と一緒に帰りたいな…
うる
うる
ギャアアアアァ!
何勝手な事言ってんだよこのクソ女!!
ダ ダメかな…?
何でオレに付きまとうんだよ…
抵抗できない…!? よりによってコレって…

よりによって
カテゴリー〃青春〃！

ドキン

ドキン

わ…私ね

その…

あのね…

ずっと前から…
ミタムラさんの事…

カテゴリー
〃正義〃とか
〃逆転〃なら
何とかなるのに

ドキ

ユズキ…

ドキ

ミタムラくん…

ドキ

オレだって
ユズキの事…

ドキ

ドキ

よりによって
こんなヤツに…

ふるっ

だめだ！
身体の自由が
利かねぇ

ストーップ！
もうちょっとで…

ぷるっ
ぷる

確か…コレの
解除解除条件の…

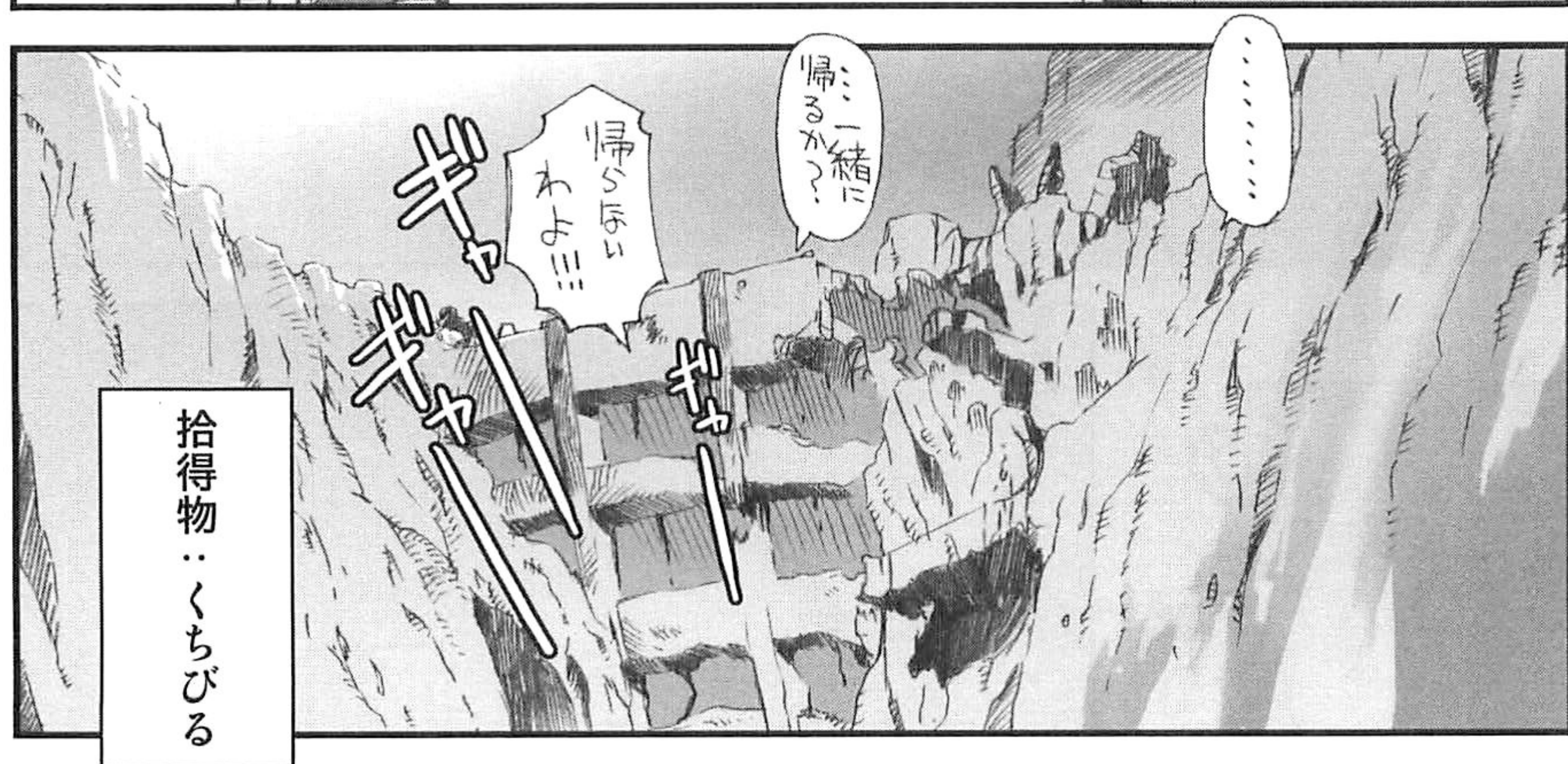
黄昏…終わ…

ぺたっ

はーーーーー
はーーーーー
はーーーーー
はーーーーー

今回は何も無かったからな
ハァ?言ってんの?あんたなんかと会っても無いわよ
どよーーーん

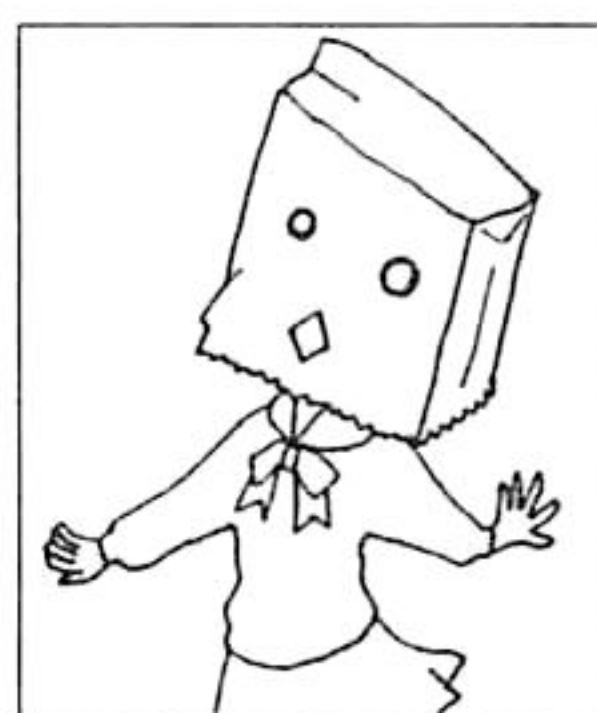
‥‥‥
い、一緒に帰るか?、
帰らないわよ!!!
ギャーギャーギャー

拾得物:くちびる

専属契約！ 業界騒然！ ラノベ界に世紀末救世主、現る！

バーチャル天才女子高生作家 にょにょにょ 先生 の実像に迫る

「いもうと☆水滸伝」で「アキバの滝沢馬琴」を目指しますにょ！

バーチャル天才女子高生作家「にょにょにょ」先生がファントムで堂々デビュー！　なんと、デビュー即「ファントム五冠王」！　しかも前代未聞の「単行本108冊契約デビュー」が内定！　そう、この『ファントム』創刊号で連載スタートするにょにょにょ先生のデビュー作「いもうと☆水滸伝」は、いきなり「全108冊完結予定」という壮大な妹サーガなのだ。日本全土に散った108人の妹が、お兄ちゃんが鎮座する梁山泊学園に結集して日本の不景気や族議員、ソニーの過剰な著作権保護などと戦うという破格の巨大スケールを誇る新王道ライトノベルだ。ここに「いもうと☆水滸伝」の第1話を掲載し、謎に包まれたにょにょにょ先生の作家像にも接近する。まずは、本邦初、にょにょにょ先生直撃インタビューをお届けしたい。

インタビュアー＝本田 透
interviewer **HONDA,Toru**

にょにょにょ（女女女）

謎のバーチャル女子高生作家。18歳。東京都在住。
いきなり「ファントム五冠王」を達成した天才ラノベ作家。
その私生活は謎に包まれているが、基本的に「昼間はごく普通の女子高生、夜は覆面ラノベ作家」という二重生活を送っている、らしい。口はひしがた。彼氏はいない。性格はいたって出鱈目で女の子なのかどうか疑わしくなるくらい。
新人なのにいきなり全108冊完結という遠大な構想「いもうと☆水滸伝」を各社に持ち込み、無謀にも（？）、二見書房『ファントム』編集部だけがこの超人的長編作家と専属仮契約にこぎつけた。

「ファントム五冠王」の内訳

第0回プレ・ファントム新人賞 佳作
新井薬師名誉市民賞
TVチャンピヨン ラノベ王選手権 一次予選突破
日本喪タク大賞 参加賞
餃子の玉将 餃子10人前早食い達成

普段はごくフツーの女子高生ですにょ

——はじめまして、インタビュアーの本田です。僕は女性が苦手なのですが、にょにょにょ先生は別ですね！　なぜか他人とは思えませんYO！

にょにょにょ（以下、にょ）　くっくっくっ、それは拙者がオタクの中のオタクだからだにょ。なにしろ拙者は女子高生妹にしか興味がないんだにょ。

——ということは、きょうびの女子高生どものように恋愛資本主義に洗脳されてはいないと？

にょ　当然だにょ、拙者はライトノベルの執筆のために青春を投げ捨てて出家しているんだにょ！　とはいえ、学校ではごく普通の女子高生を演じてやっているにょ。余計な波風立てたら執筆活動の妨げになるんだにょ。

——やっぱり学校行かないとお母さんが心配しますしねえ。

にょ　そうなんだにょ〜。

——少し気になるのは「バーチャル女子高生」っていう先生のプロフィールなんですが、バーチャルって何ですか。

にょ　オタクたるもの、細かいことを気にしていては、いけないにょ。もっと大きな視点から世界を見渡すんだにょ。

——なんか引っかかるなあ……。

にょ　まあ、高校生の官能作家も登場してることだし、そのあたりはオトナならスルーするべきですにょ。

——普段から「にょ」「にょ」って言いまわってるんでしょうか。

にょ　まさか。一般人の前では、こんなふうに普通にしゃべってるわ。あんな愚民づれどもの前で私の正体を明

かすようなヘマはしないわよ。
――おお。普通にしゃべると、ちょっとツンデレっぽくていいですね。でも「女子高生作家」って売りは数年で使えなくなりますよね。そのあたり先生はどうお考えですか？
にょ　あら、私が通っている高校はバーチャルだから100年でも通い続けられるのよ。
――えっ？　もしかして、きらめき高校っ？
にょ　ストーカーが押しかけてきたら困るから、学校についてはヒ・ミ・ツ、ですにょー。
――あやしいなあ……しかし「餃子早食い賞」って何ですかこれ？　ライトノベルと関係ないですＹＯ！
にょ　拙者は、餃子が大好物なんだにょ。餃子だけならなんぼでも食べられるのですにょ。特に、ニンニクの効いた強烈に臭う油ギッシュな餃子に、ラー油をドボドボとかけて食らうと、舌がビリッと痺れて小説のネタがどんどん湧いてきますにょ。
――女子高生が餃子中毒って。ニンニク臭くて男が逃げるんじゃないですか。
にょ　拙者は二次元の女子高生妹にしか興味がないので、ニンニクで男を避けられるのなら万々歳ですにょ。
――女子高生作家といえば、有名な「ねねね先生」という大先輩がおられますが、ペンネームはやっぱりねねね先生にあやかったんですか。
にょ　そんな「山止たつひこ」みたいな名前の付け方はしていないですにょ。後で変えなくちゃいけなくなるにょ。
――あれっ、関係なかったんですか。すいません。
にょ　元祖ラノベ五冠王のひひひ先生にあやかったんですにょー。
――あれは、「アキラ」って読むんですＹＯ！

決して業界によるヤラセではありませんにょ！

――にょにょにょ先生は女子高生でありながら「ファントム五冠王」という偉業をいきなり達成して、しかも「単行本108冊契約」という聞いたことのない破格の条件でファントム専属仮契約を結ばれたそうなのですが、どこまで信用していい話なのでしょうか。
にょ　拙者は偽物ではありませんにょ！　「いもうと☆水滸伝」が完結した暁には、ああにょにょにょ先生は本物の世紀末救世主だったんだなあと、ご納得いただけるはずですにょ。
――つーか「ファントム五冠王」の内訳がショボいんですが。餃子早食いとか関係ねーＹＯ！
にょ　まあ、本田クンは生まれてこのかた、一度も賞というものをもらったことがない負け組一本槍人生だから、拙者のような天才を妬みたくなる気持ちはわかりますにょ。
――「ファントム賞」を作ろうという話が進んでるんですが、第1回受賞者がにょにょにょ先生だといかがわしすぎるので、先生はとりあえず第0回受賞者ということにさせていただきましたよ。
にょ　拙者を妬むな、妬むな。ま、賞なんて拙者にはどうでもいいですにょ。栄光への通過点にすぎないにょ。拙者の目標は「アキバの滝沢馬琴」ですからにょ！
――八犬伝かＹＯ！　しかし「いもうと☆水滸伝」、さっそく第1話を拝読させていただきましたが、これ本当に完結するんですか？　これって全体のうちの……。
にょ　10分の1ぐらいの分量だにょー。
――このペースだと『ファントム』が1000号続かないと完結しないじゃないですか！
にょ　ま、そこは、横山（光輝）三国志みたく、途中からペースアップして巻きを入れますにょ。今回の第1話は、まだまだ「これから妹三国志が始まりますよ」という宣伝のためのパイロット版にすぎないんだにょ。
――しかし、いつも思うんですが、賞ってどうやって獲るんでしょう？　僕、一次予選すら突破したことがないんで……かと思えば、何の賞ももらわないまま、なんとなくデビューしてたりして、訳がわかりません。賞を獲らなくてもデビューさせてもらえるのなら、賞とは一体何のために存在するのであろうか、と。
にょ　新人の売り出しに一番便利だからだにょ。だって新人の才能なんて初めての読者には絶対わからないにょ。だから、ある程度の目安として、賞が存在するんだにょ。新人賞獲ってる人だから、きっと実力があるのだろう、という判断材料になるわけだにょ。こんなことはすべて『サルまん』で説明されている業界の常識だにょ。
――なるほど。じゃあ第1回ファントム賞は僕が受賞することにします！　さすれば読者の方々も「新人賞もらうほどの実力の持ち主なら、小説が掲載されてても仕方ないな」とご納得いただけるはず……。
にょ　自分で自分に賞を与えてどーするんだにょ！
――にょにょにょ先生は、僕の小説をどう思われますか？
にょ　小説を書かせてもらえない、仕事がないからって、まずは自分の小説を載せるための雑誌を自分で作ってしまおうという遠回りぶりは策士っぽくて感心しますにょ。しかし、そんな遠大な計画を立ててる暇があったらさっさと立派な小説を書けと言いたいにょ。
――ぐはっ！　言われてみれば、そうだったあっ！

ライトノベルこそ21世紀を牽引する最先端の文学ですにょ

――僕が『ファントム』を作ろうと思った最大の理由は、「ライトノベルこそが現代を牽引する最強の文学になるはずなのだ」という確信があったからなんですよ。ライトノベルって、文学界ではワンランク下に見られているじゃないですか。一番上に純文学があって、その下に一般文芸があって、

ずっと下にライトノベル。ところが、最近では文芸が売れないから、「ライトノベル風味の文芸」なんていうジャンルが作られて、そこではライトノベルを見下しながらライトノベルの美味しいところだけイタダクという搾取がですね……！『電車男』がオタクをバカにしながらオタク市場を搾取しようという態度なのと同じことが、文学界でも今、行われているんですYO！ 僕はそれに対して「NO」と言いたい！ ライトノベルこそが、今現在、リアルに読者から求められている「生きている文学」なのだと。ですから、『ファントム』は「子供の頃ライトノベルを読んできて、年とってからもずっとライトノベルを読みたい」という人を対象に作ったんですよ。もう一つは、ライトノベルの市場をどんどん拡大していくためにですね。出版業界にありがちなんですが、ライトノベルが流行ってるからっていろんな版元がどーっと参入して市場を供給過多にしてるじゃないですか。これじゃ焼き畑農業ですよ。謎本が流行ったらみんなで謎本を出しまくって枯らしてしまう。そういう出版業界によくある悪いパターンがライトノベルでも発生しつつあるので、僕はどんどん市場自体を広げていくことで「焼き畑」現象に対抗しようと……。「25歳以上」とか「ライトヘビーノベル」とか「キモイ系」とか言ってるのは、つまり、ライトノベルでありつつも、これまでのライトノベルとは市場が違うんだと。これでライトノベルの読者層を増やすことができたらなあと。ただまあ僕の志というのは遠大すぎて今すぐに結果が出るようなものでもないので、続けられるかどうか……。

にょ　インタビュアーのお前が自分の意見を熱く語ってどーするんだにょ！ お前は志ばかりで中身が伴わないのが良くないにょ！ ま、『ファントム』は漫画誌でいえば、『ガロ』みたいなものだにょー。

――『ビッグコミック』と言ってくださいYO！

にょ　まあ心配しなくても、拙者の「いもうと☆水滸伝」を看板作品として連載させれば、『ファントム』はあと10年は闘えるにょ！

――108冊完結だから、毎月1冊出しても9年かかりますもんねえ。

にょ　現代における芸術とは、大衆芸術ですにょ。芸術が金持ちの道楽だった時代は中世で終わりですにょ。アンディ・ウォーホル以来、芸術とは大量複製されるポップアートということに相場は決まっているわけですにょ。だから、「ライトノベルよりも格上で上等な小説」みたいな市場規模を限定したモノを作っても、それは芸術とはいえないですにょ。なので、大衆性を保ったまま市場規模を広げるというのはアリですにょ。

――おお、先生の口から、ようやく真面目な発言がっ？

にょ　一言で言えば、純文学では食えないんだにょ。

――オチをつけると思ってましたよ……。

にょ　拙者は、水滸伝とか三国志のように時代を超えて永遠に読み続けられる、そんな大衆小説を書きたいのですにょ。それこそが真の文学ですにょ。

――またスケールがでかいですね！

にょ　高校では、ほらふきドンドンと呼ばれてますにょ。

――本当に完結するのかなあー。

にょ　いざとなったら文章をコピー&ペーストする画太郎方式に走りますにょ！

――やめてくださいYO！

「いもうと☆水滸伝」最大の問題はキャラクターの数

にょ　しかし108人も妹を出すなんて言ってしまったので、今、イラスト担当の赤電車先生が壊れかかっていますにょ。ウーム、困ったにょ。

――あんたが言い出したんでしょっ！

にょ　この次のページに、108人妹全リストを掲載する予定なんですにょ。でも全然イラストがあがらないにょ。

――まあ、僕が赤電車先生だったら、ニューヨークに失踪しますね。そもそもオリジナルの「水滸伝」だって名前だけのキャラがほとんどですよ。

にょ　甘いにょ。北方謙三先生なんて水滸伝書きながらどんどんオリキャラを増やしてるにょ。

――そういえば北方水滸伝、完結しましたね。

にょ　北方先生は、なんと！ 自分で作ったオリキャラを主人公にして、水滸伝の続編を書くんだそうだにょ！ そこでは主人公が異民族と一緒になって宋を倒して金を建国するんだとか。

――それ、水島先生の「大甲子園」化してませんかっ？

にょ　もう一つ問題があって、アニメ化された際に動かせなくなるんですにょ。『ネギま！』でもう限界突破してたのに、さらに3倍増なんてセルアニメでは無理ですにょ。

――ポリゴンで作るしかないですよねー。

にょ　いずれ「いもうと☆水滸伝」がアニメ化されて中国市場をはじめとする全世界を席巻した暁には、ファンが108体のフィギュアを集めなければならなくなり、拙者も一見書房もウハウハという寸法なのですにょ！

――中国市場て。水滸伝をこんなんにしちゃって、バレたら怒られますYO！

にょ　その時はその時ですにょ。

……というわけで、どこまで本気でどこから詐欺なのかさっぱりわからないにょにょにょ先生であったが、にょにょにょ先生の存在から、「いもうと☆水滸伝」の存在から、全てが僕の妄想なのではないかという疑いも浮上してきた。はたして「いもうと☆水滸伝」は本当に108冊も続くのであろうか…？

108人妹全リスト!

illustration／赤電車

001.及時雨 草江
天魁星
生徒会書記

002.玉麒麟 俊美
天コウ星
生徒会長

003.智多星 陽子
天機星
先生

004.雲龍 勝耶
天間星
オカルト部

005.関 勝菜
天勇星
放浪の武道家

006.林 冲夜
天雄星
中国拳法部

007.秦 明
天猛星
剣道部

008.呼延 灼那
天威星
親衛隊隊長

009.小李 花恵
天英星
弓道部

010.柴 進奈
天貴星
理事長

011.撲天 理央
天富星
生徒会財務部

012.須藤 美瀬子
天満星
生徒会

013.楼 智森
天孤星
シスター

014.大蛇 撫翔
天傷星
カラテ部

015.董 平子
天立星
親衛隊

016.張 清美
天捷星
野球部

017.楊 志円
天暗星
生徒会

018.金鎗 樹音
天佑星
剣道部

019.千峰 咲蝶
天空星
馬術部

020.戴曽 新香
天速星
陸上部

021.エマニュエル
天異星
ニセ学生

022.黒旋 風毅
天殺星
生徒会牢の番人

023.九満流 史進子
天微星
プー

024.朴 墨子
天究星
馬術部

025.雷王 恵
天退星
陸上部

026.江龍 里数
天寿星
水泳部部長

027.立地 小二子
天剣星
水泳部

028.船火 児理沙
天平星
遠洋漁業部

029.立地 小五子
天罪星
水泳部

030.白条 浦那美
天損星
遠洋漁業部

031.立地 七子
天敗星
水泳部

032.楊 百合絵
天牢星
生徒会

033.石秀 光子
天慧星
購買部でバイト

034.熊胡桃 解珍
天暴星
山ごもり部

035.熊胡桃 解宝
天哭星
山ごもり部

036.青浪 つばめ
天巧星
盧俊義のメイド

037.神機 軍子
地魁星
柔術部

038.鎮三山 香
地サツ星
生徒会

039.孫立 いお
地勇星
生徒会

040.サン千尋
地傑星
生徒会

041.加来 しもん
地雄星
関勝の弟子

042.関東 茉莉
地威星
親衛隊副長

043.天目 芳紀
地英星
親衛隊

044.聖水 英子
地奇星
親衛隊

045.神火 貞子
地猛星
親衛隊

046.聖手 少女
地文星
書道部

047.鉄面孔 はいじ
地正星
海賊親分

048.金翅 まう
地闊星
吹奏楽部

049.火眼 闘陽
地闔星
海賊

050.錦毛虎 燕
地強星
演劇部

051.錦 豹子
地暗星
不良

052.天雷 コウ
地軸星
突撃隊

053.神 算子
地会星
吹奏楽部

054.小 公女
地佐星
三国志研究会

055.賽仁 貴枝
地佑星
三国志振興会

056.安道 せん
地霊星
女医

057.皇甫タン
地獣星
獣医

058.王 英里
地微星
演劇部

059.一丈 扈三娘
地慧星
中華飯店

060.喪門 りょう
地暴星
不良

061.混世 魔王子
地然星
漫研

062.諸葛孔 明子
地猖星
白虎隊

063.諸葛孔 亮子
地狂星
白虎隊

064.那咤李
地飛星
漫研

065.飛天 聖子
地走星
漫研

066.金田一 たくむ
地巧星
パソコン部

067.鉄笛仙 リン
地明星
吹奏楽部

068.童井 ドルフィ
地進星
水泳部

069.童井 いるか
地退星
水泳部

070.鮪 もこ
地満星
海賊

071.高見沢 円
地遂星
裁縫部

072.陳達枝
地周星
柔術部

103.孫 ニ娘
地壮星
コスプレ喫茶

097.青眼 リウ
地察星
建築部

091.独角龍 雛
地角星
柔道部

085.シオン金眼彪
地伏星
生徒会牢の番人

079.テート 中箭虎
地速星
野球部

073.白花楊春
地隠星
柔術部

104.王 定六子
地劣星
メイド喫茶

098.碇 ショウ
地悪星
サンボ部

092.早瀬 蘭
地囚星
梁山泊部（暴力メイドバー）

086.打虎将 りつ
地僻星
探検隊

080.墨 みはる
地鎮星
帰宅部

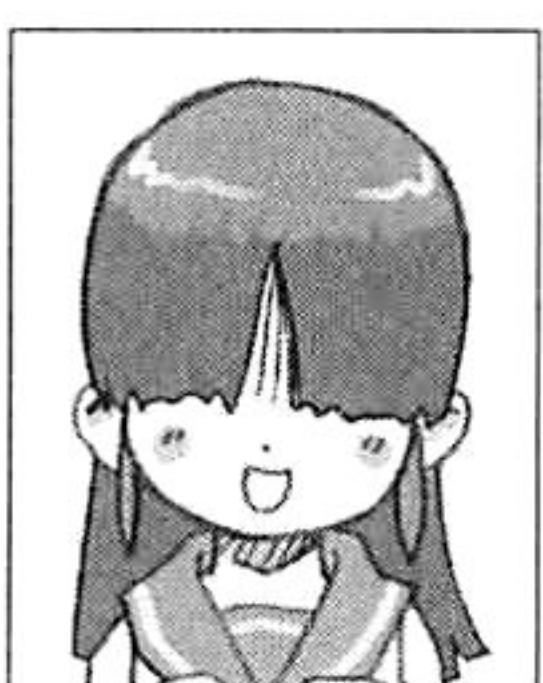
074.白面郎 てんこ
地異星
演劇部

105.郁保 四子
地健星
応援団長

099.石軍 勇宇
地醜星
麻雀部

093.三木 美樹
地蔵星
メイド喫茶

087.シュルツ覇王
地空星
探検隊

081.曹 聖
地羈星
生物部

075.九尾 陶宗旺
地理星
吹奏楽部

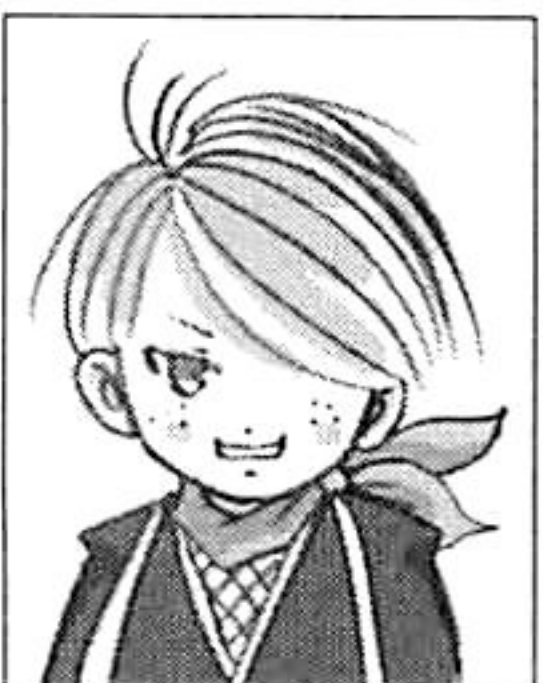
106.白 勝子
地耗星
購買部

100.冥途 こころ
地数星
コスプレ喫茶

094.福田 サイコ
地平星
生徒会牢の番人

088.湯隆 ホノカ
地孤星
刀鍛冶

082.ソーマ金剛
地魔星
梁山泊部

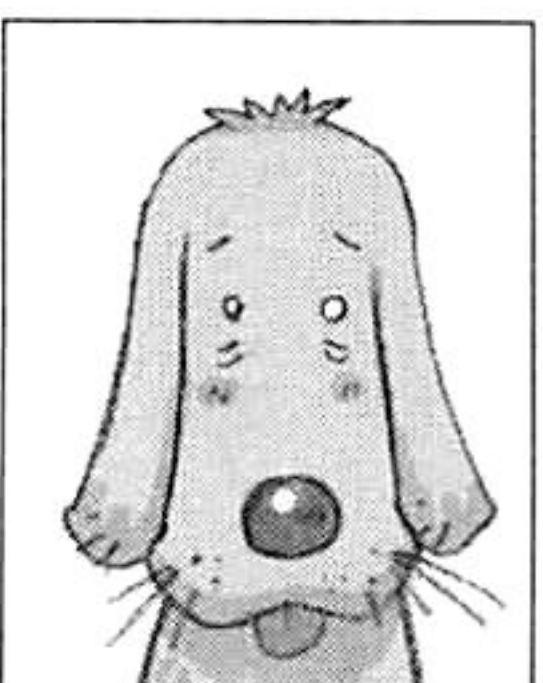
076.SO SIN
地俊星
ラッパー

107.時 遷子
地賊星
忍者部

101.小平 惣
地陰星
梁山泊部（暴力メイドバー）

095.一枝花 けい
地損星
生徒会牢の番人

089.児雷也 トトコ
地全星
メイド喫茶

083.摸着天 せと
地妖星
梁山泊部

077.鉄 叫子
地楽星
合唱部

108.金毛 犬子
地狗星
泥棒

102.張青 菜園子
地刑星
コスプレ喫茶

096.祭冥 リリス
地奴星
メイド喫茶

090.出林龍 スウ
地短星
柔道部

084.瀬都 エイ
地幽星
保健室

078.花項虎 しおり
地捷星
野球部

いもうと☆水滸伝――第一回

にょにょにょ
赤電車／Illustration

プロローグ　一〇八人妹、誕生

西暦一九九九年某日。

首都東京は見る影もなく荒れ果てていた。長引くデフレ不況。人生に光を見失った中高年サラリーマン層の度重なる自殺。モラルを教われなかった女子高生の援助交際。ドラッグ。性病の蔓延。暴走する若者によるオヤジ狩り。国際的な犯罪組織の流入。凶悪犯罪の横行。

　ほんの十年ほど前まで、首都東京は空前のバブル景気に沸いていた。六本木のホールでボディコン娘たちが扇子を振り回しながらパラパラと踊っていたはずだった。だが、すべては虚妄。実体の無い土地バブルによる空虚な繁栄の影に、頽廃が忍び寄っていたのだ。そしてバブル崩壊とともに、全てが音を立てて崩れていった。日本のサラリーマン層の労働意欲を支えてきた国民総中流幻想は、崩れた。そして、バブル崩壊後の東京は一握りの「勝ち組」と大多数の「負け組」に二分されたのだ。

　サラリーマンのお父さんが絶望したのだから、その息子さんの世代の絶望はもっと深かった。自分の未来に待っているものがドブネズミ色の「負け組」としての奴隷生活と判ってしまえば、真面目に勉強して就職したいなどと思えるはずがない。

　渋谷に出れば舌や鼻にピアスをして頭を金髪に染めた「マッドマックス」の雑魚みたいな連中に追い回され、カツアゲされ、嗤われ、クラスで気になるかわいい女の子も片っ端からマッドマックスサンダードーム野郎に淩われ……仮に今を耐えて頑

張り、将来一流企業に就職したとしても、そういうモヒカンパッキン野郎が食い残した残飯のような女を「嫁」にして一生お世話させられなければならない。しかも、その嫁は「不倫」と称して男遊び。自分の子かどうかも判らない子供まで養育させられ……最終的には「熟年離婚」。定年と同時に捨てられて莫大な慰謝料を奪われ……。

心ある若い青少年にとって、東京は地獄そのものと化していたのだ。彼らは、ただひたすらにこの世界を恐れ、自分の部屋にひきこもるしかなかった。

ここに一人の三十代独身喪男が登場する。国土交通省の下級役人・筑波である。何の野心も持たずに日々を安寧に暮らすことをモットーとしている筑波は毎日冴えない事務仕事を淡々とこなしていたが、ある朝、いきなり内閣総理大臣から直接呼び出されたのである。

「フハッ！　おお、なんということであろう。僕は総理に呼び出されるような悪いことをしてしまったのだろうか？　記憶にございません、と言っても信じてもらえないだろうし、ああ、困った」

目立たぬよう細々と地味な仕事をこなしてきた筑波にとって「総理に呼ばれる」というイベントは考えうる限り最大の災厄だった。何か身に覚えのない悪事の責任を押し付けられるかもしれない。逆に総理に評価されてビッグプロジェクトを与えられりしたら、さらに悪いことになる。たとえどのようなプロジェクトであれ、どうせ失敗するからだ。

（ああ、困った。まさか某リゾート企業の敗戦処理をやらされるんじゃないだろうなあ……これから数年で、日本中のスキー場がことごとく廃村と化すんだろうからなあ……）

筑波は、オドオドビクビク震えながら、とある料亭で総理と面会した。総理の周りには、官房長官や国土交通大臣、某大企業の会長や社長といった大物がずらりと並んでいる。しかも彼ら一人ひとりの横に、ぴったりとルーズソックスの女子高生がはべっているではないか。筑波はウームと唸りながら脂汗を流した。絵に描いたような「悪代官と越後屋の宴会」だ。眩暈がする。いったいこれから、どんな無理難題を押し付けられるのか。

「筑波君、君に秋葉原の再開発をお任せしたい」

総理は寿司屋の出前でも頼むかのような気軽な口調で、そう言いだした。

「フハッ？　あっ秋葉原を再開発ですかっ？」

「君は、ほら、今流行りのオタク族（仮）だったよね？　荒廃が進む東京を再生するには、まず、オタク文化の中心である秋葉原からはじめよう。そう決まったんだ。いっちょ頼むよ、世界中の観光客が驚くようなでかいビルをドッカンドッカン建ててくれたまえ。もちろん地下鉄でもなんでも作ってくれて構わんよ」

「ちょ、ちょっと待ってください。あの街をヘンに開発したらオタクの皆さんに僕が恨まれます」
「これはもう決まったことなんだ。とりあえず古くなったビルの撤去と整地からはじめてくれたまえ」
「そっ、そんなあ～っ？　ああ、どうして僕はこんなにも不運なんだ、フハッ！」
「君は、総理に逆らうのかっ？　このバカものっ！　びびびびびっ！」
「ああっ！　やりますっやらせていただきますっ！」

こうして筑波は不幸にも秋葉原の再開発プロジェクト責任者に任命されてしまったのだ。どうやら、出世したくない一心で毎日のように職場の机に新作のガチャポンフィギュアを飾ったりガレキを作ったりしていたのが仇となったらしい。言うまでもなく政府用語で「再開発」というのは「古くから居座っている住民や商店を強制撤去して、大企業のテナントがたくさん入ったビルや地下鉄や道路を作って、御用資本家どもに利権をくれてやる」という意味である。つまり秋葉原の街を支えてきた中小企業・零細企業・老舗の企業・お客さんたちを追い出して、政府と癒着した大企業に秋葉原の上がりをすべて吸い上げさせようというじつに意地汚いプロジェクトなのである。
（おお、これではまるでヤクザだ。しかも政府は警察部隊や軍隊を持っているから逆らうこともできない。フハッ。ごめんよ秋葉原のみんな。僕はしがない公務員、田舎の年老いたお母さんに仕送りしなくちゃいけないし、体制に逆らうことはできないんだ）
筑波は筑波で、わざと手を抜いて開発を遅延させようとか、地元の面々にプロジェクトの陰謀を教えて対抗しようとか、そういう英雄的な活動を始める気概もなく、言われたままに淡々と職務の遂行を開始するのだった。筑波は、巨大ビルと十字道路を秋葉原の中央に無理やりブチ込むため、次々と長年親しまれてきた名物ビルを解体していった。

そんなある日のこと。
筑波は解体業者から連絡を受けて、秋葉原の某廃ビル解体現場に顔を出していた。秋葉原を自分の手で壊すなんてあまりにも耐えがたくて現場に一度も顔を出さずビクビク隠れていた筑波だったが、「どうしても責任者の判断が必要なので来てください」と何度も懇願されたため、不承不承現場にやってきたのである。
工事の責任者が、筑波をビルの裏側に案内した。
「どうしますか、これ？」
「ウーム……どうしてビルの裏に、こんな祠のようなものが……？」
小さな古ぼけた祠がビルの解体中に発見されたのだ。祠のご神体らしき岩には、「伏魔夷殿」と彫られてある。いかにも曰くありげな代物だ。筑波は、「将門の首塚」の逸話を思い出した。都内の某所

には平将門の首塚が実際に存在する。筑波のような立場に立たされた開発者がかつて何度も首塚を撤去しようとしたのだが、そのたびに信じられない事故や不幸が重なったので、みんな「将門様の祟りだ」と恐れて近寄れなくなり、今でも首塚はビルディング街の真ん中でひっそりと祀られているのだ。

いかにも都市伝説臭い話なのだが、首塚が今でも取り壊されずに大事に祀られているというのは疑いようのない現実なのだ。ビルを建てて稼ごうという吸血鬼のような連中が本気で恐れて手をつけない首塚には、やはり何らかの心霊的な力が宿っているのであろう。平将門は、平安時代の昔、京都の貴族が日本を支配していた時代に、関東平野に独立政権を立てて武士の世の中をいちはやく作り上げようとした当時の謀反人である。武運つたなく破れ、その首は無念を飲んだ将門の恨みのエネルギーによって、今でいう千葉から東京まで飛んでいったという。その飛んできた首を祀ったのが首塚なのだ。なお将門の死後、将門が夢見た「関東の武士政権」は鎌倉幕府によって実現した。将門は武士階級による革命の先駆者だったわけだ。

「筑波さん、そろそろ決めてくださいよ。放置しますか？」

「しかし、放置していては、都市計画が頓挫してしまう……いいから壊してしまおう」

「ええっ？　わたしらは、イヤですよ！　絶対に祟られますよ！　どうしても壊すというなら、筑波さんが自分で壊してくださいよっ！」

「フハッ！　なんという無責任な業者たちだ！　将門様の首塚じゃあるまいし、どこの誰を祀ってるのか判らないこんな祠を放置していたら、僕が総理からお叱りを受けてしまう。いいかね。どこの屍だか判らない骸と、時の総理大臣と、どっちが恐ろしいと思う？」

「そりゃ総理でしょうけど、でもなあー。祟りはおっかないですよ？」

「僕は内閣のほうが怖いよ。だいたい秋葉原に曰くつきの祠があるなんて聞いたことがない。大丈夫、僕が祠を倒してあげよう。フンハッ！」

筑波は、「伏魔夷殿」と彫られた祠の岩にしがみつくと、気合一発、岩をごろりと転がしてしまった。封印は破られた。

「ああーっ！」

「うわあーっ？」

解体業者たちが「なんて罰あたりなことを」と恐れおののくが、筑波は久々の肉体労働行使でズレてしまった眼鏡のフチを指でくいっと直しながら、

「大丈夫大丈夫。この世紀末の東京に、オカルトなどあるものかね。ＵＦＯだってミステリーサークルだって、全てはプラズマの仕業なんだよ？　よもや、この祠の中に、恐るべき大怨霊の霊的エネルギーが封じ込められているわけではあるまい？　だいたい、僕みたいな地味な脇役キャラがそんな重大イベントに遭遇す

るわけが……」
しかし筑波が言い終わらないうちに、
ゴゴゴゴゴゴゴゴ
大地が激しく揺れ始めた。筑波たちは立っていられなくなり、思わず地に伏せてしまった。祟りだ、やっぱり祟りだぁ！と悲鳴が渦巻く中、筑波だけは、
「バカなっ！　呪いだの祟りだの霊魂だの、そんなものはこの現代には存在しないのだっ！　フハッ！」
と言い張り続けたが、しかし、倒された祠の下にあった穴の中から無数の光の球が飛び出してきて、ぐんぐん空へ昇っていったかと思うと、ぱーっと飛び散って関東平野のあちこちへ流れ星のように消えていくのを観てしまっては、もはや大槻教授のプラズマ説は採用できない。
この伏魔夷殿の祠は、やはり、何者かの霊魂を封じ込めていたものだったのだ。しかも、ひとつやふたつではない。百個を超える数の「球」を封印していたのだ。
「なっ、なんですかっ、今のはっ？　今の球も全部プラズマなんですかっ？」
「百個ぐらいありましたよっ？」
「俺、日本野鳥の会で鳥数えるのが趣味なんだけど、確かに一〇八個あった！　一〇八個！」
「ええっ？　それって人間の煩悩の数じゃないか？」
「あんな曰くありげな恐ろしいものが、関東中に飛び散ってしまったっ！　筑波さん、あんたの責任ですよっ！」
現場は「えらいことになった」と大騒ぎ。やらかしてしまった張本人の筑波はなすすべもなく、青息吐息。
「あわ、あわ、あわわわ……こっ、このことは……無かったことにっ……！　誰も何も見なかったことにっ！」
「そうですね……まあ、誰も信じちゃくれないでしょうしね」
「わしらには、あの球たちが何をしでかすか、予想もできませんからね……」
「ぼっ僕は気分が悪いので帰るっ！　帰るーっ！」
とんでもない真似をしでかしてしまったっ！　筑波は真っ青になって震えながら、大急ぎで秋葉原から逃走した。以後、筑波は二度と秋葉原へ入ることができなかったという。

そして……十六年の歳月が流れた。
ここから「いもうと☆水滸伝」の舞台は、二〇一五年の東京に移る。

九満流史進子登場編

二〇一五年、東京都。
一九九九年七月七日未明に関東平野全域の一〇八箇所で同時発生した巨大流星群の落下事件。この未曾有の大惨事により、東京を中心とする関東の治安および財政はさらなる悪化を辿り、今や関東はあたかも戦国乱世に逆行したかのような荒廃ぶりを見せていた。
関東全域におよぶ大災害がひきおこし

たインフラの崩壊は東京の首都機能を麻痺させ、企業は続々と関東から逃げ出し、政府すら東北に移転し、関東は打ち捨てられた巨大なゴーストタウンと化していたのだった……。

東京湾上に政府の肝いりで建設中だった巨大な人工島「ネオ・アキハバラランド」も、工事途中で資金がつき、計画途中で島の建設が中断されるという有様。このネオ・アキハバラランドは、秋葉原再開発計画に続く外国客誘致のための国策ともいえる巨大プロジェクトだった。いわばディズニーランドを数倍の規模に拡大した純国産キャラクターアトラクションセンターを東京湾上に出現させ、アニメ・漫画・ゲームを中心とした世界規模でのオタクコンテンツビジネス産業の「メッカ」にするという遠大な計画だったのだ。だがそれも、あの筑波の柄にも無い蛮勇によって夢と終わった。

しかし、工事が放棄されても、人工島そのものは残った。建物こそ途中までしか作られなかったが、土台は完成していたし、一度作り上げた巨大な人工島をわざわざ破壊しようという声は出てこなかった。そんなことをしたらまた巨額の解体費用が嵩む(かさむ)からだ。そこで、この広大なネオ・アキハバラランド跡地を再利用するための修正案が可決され、すぐに実行された。この島そのものを「女子校」にしてしまうというアイデアである。都内でも屈指の名門女子校である梁山泊(りょうざんぱく)学園に、ネオ・アキハバラランド跡地を二束三文で売り渡し、移転してもらうのだ。

このアイデアの優れている点は二つ。一つ目は、島を放置しておくと間違いなくならず者のアジトにされてしまい、ただでさえ崩壊している関東の治安がますます悪化する。故に何でもいいからとにかく企業なり団体なりを誘致しなければならないこと。二つ目は、東京都心の女子校は治安の悪化により正常な運営が困難になっており、続々と東京から女子校が逃げつつあるということ。隔離された人工島に巨大な学園を建設すれば、東京から女子校が消えるという最悪の事態は避けられるだろう。たとえ東京から女子校が消えても住民がいなくなってしまうわけではない。仕事や金銭面などの事情で逃げ出したくても引っ越せない家庭も多いのだ。すると未成年の女の子たちは、荒れ果てた共学校に進んで戦国時代に舞い戻ったような極悪な若い男どもの肉便器にされるか、ひきこもってニートになるか、いずれにしても未来は真っ暗になってしまう。そこで、人工島に隔離して、正しく将来の関東復興の戦力になる女生徒たちを大量生産するというのだ。

……志は正しかったかもしれない。

しかし、物事はそううまくは進まない。

鳴り物入りで作られた新・梁山泊学園だったが、予算不足のために島の大部分が手付かずのまま放置されてしまったのだ。予定では全ての区画を完璧に整備した夢の理想郷が完成するはずだったのだが、実際には島の三分の二ほどは相変わ

らず荒れ果てたまま。それどころか、例えば砂山には緑が生えて森と化している始末。ほんの数年でここまで荒れるのかと疑いたくなるぐらいの秘境が島の一部に現出してしまっているのだ。

そして、悪いことに、品行方正な女生徒はごくわずか。関東一円から優秀な女生徒を集めようとしたものの、長引く不景気と混乱のため、そんな注文通りの生徒はなかなか集まらない。数じたい減っているし、田舎の名家はいくら人工島とはいえ東京都内などに娘を転入させたがらない。危険だからだ。都心、特にかつての二十三区内は政府から完全に捨てられた街となっていて、警察権力も存在せず、自警団と称する連中がそれぞれの街を仕切っている有様。海に浮かぶ人工島とて安心はできない。

そんなこんなで、梁山泊学園には数合わせのために連れてこられた札付きの不良生徒が大量に流入してしまったのだ。今では、他に行くところがなくなった問題児が勝手に続々と集まってきていた。きちんと生徒を選べばよかったのだが、移転の際に多額の資金を使ってしまったため、生徒数の確保を最優先してしまったのである。それが失敗だった。

こうして梁山泊学園は、都内でも有数の問題校になってしまった……。本来学園が求めていた品行方正なエリートお嬢様のグループと、素行の悪い不良グループとが、同じ島に入れられてしまったため、果てしない派閥争い・主導権争いが続くことになったのである。エリート生徒のグループは当然ながら生徒会を頂点とするピラミッドシステムを学内に築き上げ、規律によって学園を支配しようとする。これに対して不良グループは打ち捨てられた山や森や荒地に勝手に割拠（かっきょ）して、追いはぎやカツアゲといった不法行為を繰り返す。警察権力が及ばない孤島は、たちまち、弱肉強食の「人間学園」へと変貌してしまった……。

滅び行く関東の最後の望みとなる「乙女の園」になるはずだった梁山泊学園は、いまや、ハルマゲドンの戦場と化していたのだ。

さて、いよいよ第一の妹が登場する。

梁山泊学園に、長いポニーテールと、背中と顔に貼り付けたクマさんのタトゥー（シールだけど）がトレードマークの九満流史進子（くまんりゅうしすこ）という変わった名前の女の子がいた。史進子は、日本有数の名家・九満流家の跡取り娘だ。ところがどうしたわけか子供の頃から礼儀作法やお茶やお花の習い事に全く興味を示さず、ひたすら武芸一筋で肉体を鍛え上げる始末。手に負えなくなった両親が「梁山泊学園なら、史進子を立派なレディに教育してくれるかも」と実態を知らぬままに史進子を転入させてしまったから、さあ大変。転入早々、史進子はほっぺたのクマのタトゥーを巡って担任教師のアルフォンヌ先生と大喧嘩になってしまった。

「なんざますか、そのクマはっ？　ご両親からいただいた大切な身体に刺青を入れるだなんて、乙女失格ざますよっ！　消しなさいっ今すぐレーザー治療で消しなさいっ！」
「このクマは、シールだもん！　ボクの顔に触らないでよっ、クマさんが剥がれちゃうからっ！」
「まぁ、まぁまぁ！　こともあろうに、乙女たるものが自分のことを『ボク』だなんて！　そんなKeyのエロゲーのヒロインみたいなキャラクター、うちの学校には不必要ざぁますよ！　わたくしの三倍もでかい乳をお持ちのくせに、実にけしからんざぁますよ！」
「うるさいなぁ。胸のことは言わないでよっ！」
「どうやら、あなた、口で言ってもわからないタイプざぁますね。転入試験の成績もボロボロで、名前以外は全部バッテンざぁますし……！　かくなる上は、身体で直接教えてさしあげましょう。このアルフォンヌ、こう見えても実は日本拳法五段、少林寺拳法三段の腕前で……」
「遅い！　はいきーっく！」
「ぐはっ！」
見た目は三角眼鏡のヒステリーおばさんだが、学園の教師の中でも最強の一角に属すると囁かれていたアルフォンヌ先生。そのアルフォンヌ先生を、史進子は左のハイキック一発で床の上に沈めてしまった。クラス中の生徒たちが騒然となった。
「すっ……凄いわっ！　何のフェイントも予備動作もなく、いきなりの一撃っ……！」
「あの優れた動体視力を誇るアルフォンヌ先生が全然見えていなかったっ！」
「女子高生離れした蹴りの速度っ……！　高い位置から振り下ろすような蹴りっ……！　なんと柔軟な……！　しかもとてつもなく重いっ！」
何故か格闘漫画の解説役のようにあれこれコメントを入れる同級生たち。
この一件で、史進子はたちまち、学園のニュースターとなった。
それからというもの、毎日のように女の子たちに囲まれて、
「史進子さん、ファンクラブを作らせてっ！」
「史進子さん最強っ！」
「ぜひぜひ、私たちのクラブに入ってくださいっ」
「あ……いや……ボクは面倒臭いからクラブ活動とかそういうのは、ちょっと……放課後、遊べなくなっちゃうしぃ」
「そんなこと言わずに、ぜひぜひ～」
「ごめんねっ！　焼きそばパン買いにいかなくちゃっ」
「あっ、逃げたっ！」
……。
とまあ、こんな感じで女の子たちにモテモテ。
で、当然、史進子の人気を心よく思わない連中もいるわけで。

とりわけ、学園を知性と財力で支配しようとする規律重視の生徒会の面々は、自由奔放でフラフラ遊んでいるだけのくせに人望がある史進子が気にくわない。
　何かというと史進子に突っかかっては
「そのクマのタトゥーを剝がしなさいっ！」
　といちゃもんをつけるのであった。
「やーだよ！　ハヒフヘホー！　このクマちゃんは絶対に剝がさないもんね！」
「なんですってぇ？　いい年して恥ずかしくないのっこのおバカ娘っ！」
「剝がしたくば、腕ずくで剝がしてみなさいって！　ばいばいきーん！」
「うっきーっ！　生徒会に逆らうとは、いい度胸ですことっ！　覚えてらっしゃいっ！」
　こんな調子で生徒会の面々を適当にあしらう史進子だったが、事態はそれくらいではすまされない方向へ進みつつあった。史進子の人気を妬(ねた)んでいるのは生徒会だけではないのだ。ゴロツキ山賊と化している不良グループの中にも、史進子を倒して自分こそが人気者に……と考える者がいたのである。
　不良グループは「グループ」と言っても生徒会のような一枚岩ではない。今のところは全く団結力がない。全てのメンバーを統括するボス的な生徒が出現していないので、各人がてんでんばらばらに行動している。せいぜい同じ部活の面子(めんつ)が集まっている程度で、つまり小集団や一匹オオカミが学園中の各地に群雄割拠しているのだ。
　特に、未開発で荒れ放題になっている山中の森林地帯には、いろいろな連中が潜んでいる。彼女たちの一部は道行く生徒たちを襲ってカツアゲしたり追いはぎしたりと、完全に山賊化しているのだ。このような無法な真似が許されるのも、ひとえに学園が陸の孤島となって周辺から隔絶されており、しかも警備体制がまったく微力であるからに他ならない。もっとも、もしも生徒会が本腰を入れれば討伐できる程度の小さな荒れ方なのであるが……。
　さて、奔放な学園生活を送っていた史進子の前に、評判の悪い柔術部の三人……神機軍子(しんきぐんこ)、白花楊春(しろはなようしゅん)、陳達枝(ちんたつえ)が立ちはだかることとなった。柔道部と比べてマイナーで予算を獲得できない柔術部は、他の不良系クラブ同様にプチ山賊と化して生徒たち相手にカツアゲを働いていたのだが、ある日、史進子の友達に手を出そうとしたことから争いになったのだ。当初、道の往来で口論となった史進子と柔術部三人衆は、見物人のいない山奥へと入り、そこで決着をつけることとなった。
　神機軍子は眼鏡が目立つ冷静沈着な知将タイプ。柔術部の部長である。知力も高いが、技の切れも当然一流。史進子のみたところ、この軍子がもっとも強敵である。とはいえ、勝てない相手ではない。
　陳達枝はキツネ目の茶髪娘。身体は細

いがスピードがありそうだ。とはいえ、史進子には及ばなさそう。一対一であれば簡単に勝てる相手だ。
　白花楊春はショートカットのロリ少女。三人のうちでは一番弱そう。しかしどういう隠し技を持っているのかわからない。
　三人が三人とも、通信販売で購入したブラジル直輸入の柔術着を着込んでいる。ただし、サイズがブラジリアンなので、一様にぶかぶか。
　史進子は「眼鏡の女さえ最初に倒してしまえば、残りの二人は雑魚だからどうにでもなる」と高を括っていた。
「ボクの友達にちょっかい出したお前らは許さないからなっ！　成敗してくれるっ！」
　大見得を切ってファイティングポーズを取る。史進子の修めている技術は打撃主体だが、柔術家に対してはタックルさえ防げば対処できる。組み付かせなければ良いのだ。
「一対多数の野試合で、まさか勝てるとお思い？　おバカさんだこと」
「……襲いますよー……」
「襲っちゃうぞー！　降参するなら今だぞ、悪党！」
「悪党はお前らだろっ！　この史進子さまの目の前でカツアゲするような奴らには天誅だっ！」
　複数を相手にする場合は、一番強いリーダーを最初に倒してしまう。これが梶原一騎以来のケンカの伝統！　史進子は、眼鏡を光らせて轟然と立っている軍子へと狙いを定め、ずいっと間合いを詰めて軍子の脚をローキックで薙ぎ払った。
「ええっ？」
　軍子は、いったいいつ史進子が制空権に入ってきたのか、わからない。安全な距離を保っていたはずだ。それが、かわす暇も与えられなかった。史進子がまったく殺気を発さずに無造作に接近してきたので反応が遅れたらしい。よもや、組み付いたら圧倒的に有利な柔術家に対して、まさか自分から間合いに入ってくるとは……。
「なんだよ、もうダウンするのか？」
「……ああっ……強い……」
「つっ強いぞー、こいつっ！」
「ま……まだこれからですわ！」
　軍子はグラウンドに仰向けに倒されたが、そのまま無理に起き上がろうとせず、頭の後ろで手を組んで史進子を待ち構えた。史進子の蹴りがあまりにも速いので、迂闊に立ち上がれない。寝ていれば安全……だが、無論、それだけではない。軍子の狙いは気の短そうな史進子を挑発して寝技地獄に引きずり込むことにあった。
「さあ、史進子さん。この猪木×アリ戦の体勢……野試合ですから、ブレイクはありませんよ。どうやって攻めますか？」
「ふん！　寝ていてくれれば、タックルでつかまれる心配がないぶん、かえってボクに有利だよっ」

史進子は無造作にジャンプすると、軍子の顔面目掛けて踵を落としてきた。ドスッ！　軍子は間一髪背中を捻って踵を避けたが、命中していたら一撃で失神させられていたことは間違いない。ぞっと身震いする間もなく、史進子は飛び上がっては顔面目掛けて蹴りを入れ、それを避けた瞬間にはまたも飛び上がっては顔面を狙って執拗に蹴りを入れてくる。
「なっ……なんという凶悪な攻撃……あなたねぇ、女の子らしいたしなみはないのっ？」
「そんなもの、ないねっ！」
「このままでは……危ない……迎撃！」
「おー！」
防戦一方の軍子を救うために達枝と楊春が左右から飛び跳ね続ける史進子の身体を捕まえようと突撃したが、史進子はひらりと飛び上がると左右の脚の爪先で同時に二人の喉下に蹴りを入れた。
「……げほげほげほっ……！」
「ぐえぇっ、やられたぁっ！」
「くっ……どうやら、一対一では勝負にならないようですわね……」
柔術部三人娘は揃って地面の上に転がされてしまい、敗色濃厚。とてもじゃないが一対一で敵う相手ではない。いや、二対一でも勝ち目がない。しかし……三対一ならば、勝機はあった。
「なんだよ、お前ら弱いなあ……降参する？」
史進子はもう勝負は終わったと油断して、三人が立ち上がるのを待ってしまった。それが命取りとなった。
「はあはあ……かくなる上は、三人がかりよ！　柔術部三人衆の必殺奥義・ジェットストリームタックルを受けてみなさいっ！」
「なにっ？」
なんとか立ち上がった柔術三人娘は一列縦隊を作ると、そのまま史進子目掛けて突進してきた。先頭にいる楊春が指をわきわきさせながら屈みこみ、史進子の腰に抱きつこうと迫ってくる。胴タックル。史進子はバックステップでかわしながら、下を向いた形になった楊春の後頭部に肘を入れようとする。だが、振り下ろした肘に、楊春のすぐ後ろにくっついていた達枝の腕が絡みついた。史進子は慌てて楊春の顔面目掛けて膝を出そうとしたが、先に楊春の腕が史進子の脚に巻きついた。二人の絶妙のコンビネーションで手足を封じられると同時に、達枝の肩の上から軍子が躍り上がって飛び降りてきた。迎撃できない。どかっ、と肩の上に乗られ、太股で首を締め上げられる。
「ひっ卑怯だぞっ！」
「あら、三人一緒に攻撃していけないというルールはありませんわ」
「……捕まえた……」
「捕まえたーっ！」
「そもそも本場の柔術家は一対一で闘うものなんだぞっ！　それをお前らはっ……！　コンビネーションでタックル攻撃なんて、こんなの柔術じゃないよっ！　邪道だっ！」

「これはブラジル柔術ではありませんわ。野外での集団戦闘に対応するために私が考案した梁山泊流ですわ。柔術は一対一では無敵だけれど、弱点は多数との戦いを想定していないということ……故に私は、一人の敵に対して集団でタックルを決めて倒すという戦法を編み出したのですわ。ちなみに新撰組の闘い方を参考にしておりますの」

「くっそー、詐欺だっ騙されたっ！　いてっいててて っ」

「三人に捕まえられてまだ倒れないなんて、さすがは史進子さん。素晴らしい足腰の粘りですこと。でももう、逃げられない」

「……逃げられません……」

「逃げられないぞー！」

「……むっ……無念っ……！」

軍子に首の上に乗られた上に、腰と腕をそれぞれがっちりと押さえられて圧力をかけ続けられている。完全に死に体。倒れたらもう絶対に脱出できない。かといって、耐え続けられるものでもない。史進子は一発の打撃を出すこともできぬまま、絶命のピンチに陥った。恐るべし集団柔術地獄。史進子は相手をあなどった自分の不覚を後悔した。一人ひとりは弱くても、確固とした集団戦法を取ってこられたら、それは烏合の衆ではなくなる……ああ、自分はこんなところで倒されてしまうのか。友達を守るはずが、自分の非力を思い知らされることになるとは。

だがしかし……。

そこに、中年親父のいななくようなダミ声が。

「かーーーーーっ！」

山がわれんばかりの音量。

不意をつかれて動揺した軍子がバランスを崩してふらりと揺れた。その一瞬の隙をついて史進子はぐるりと首を振り、軍子を振り落とした。達枝と楊春は史進子からひらりと体を離すと、落下する軍子をキャッチした。史進子はさっと距離を取り、三人と再び睨みあう。だが、親父の声はどんどん近づいてくる。

「双方とも、やめい！　やめんと、食っちまうぞ！」

アフロヘアーに黒いサングラス、胡散臭い髭、柔道着とも空手着ともつかない茶色く煤けた道着に裸足という胡散臭い親父が、両者の間にいきなり割って入った。

「なっ、なんですか、あなたはっ？　ここは男子禁制の梁山泊学園ですのよっ？」

「……男子禁制ですよ……」

「男子禁制だぞー！」

「かーっ！　ワシは通りがかりの素敵なチョイモテオヤジぢゃよ。ただ、このクマのタトゥーをしたお嬢ちゃんに用事が合って声をかけたまで！　お主ら三人は消えうせい！」

ぬーん。

オヤジが「マワシウケ」の型を構えて柔術三人娘の前に仁王立ち。

胡散臭い。
髭が、胡散臭い。
アフロが、胡散臭い。
サングラスが、胡散臭い。
道着が、胡散臭い。
型が、胡散臭い。
裸足が、胡散臭い。
声が、胡散臭い。
何もかもが、胡散臭かった。
「な、なんて、いかがわしい男……私の危機回避センサーが反応していますわ。嫌な予感がしますわ。ここは戦術的撤退ですわっ！」
「……撤退します……」
「戦術的撤退だぞー！」

かくして、史進子は危ういところを謎のオヤジに救われた。
オヤジは山の中にひっそり建ててある山小屋に史進子を案内すると、そそくさと妖しげな成型肉を焼き始めた。
「この荒みきった関東では一枚肉は高いんでのう、これで我慢してくれい、お嬢ちゃん」
「おじさん、ボクを助けてくれてありがとう！　でも、おじさん、いったい何者なの？」
「ワシかね？　ワシの名は王進。以前は梁山泊学園で武術指南をしておったチョイワルオヤジじゃよ。今ではリストラの憂き目にあって失業中の身じゃが。何しろ関東は戦国時代に逆戻りしたかのように荒れ果てておるゆえ再就職先もままならず、路銀が無くて梁山泊から出るに出られなくなり、やむなく野生化して山中に住み着いておる次第」
「そうなんだー、大変だねっ。でも、この学校、男子禁制だって聞いてたよ？」
「実は以前、ワシが生徒のパンツを盗んだり覗き見したりしておったために男子禁制になってしもうたんじゃ。うむぅ梁山泊学園の経営陣めが、ある日突然ワシを解雇しおって。なんたる理不尽な……」
「それって、おじさんが悪いんじゃん！」
「というわけで退職金も貰っておらんのじゃよ、にょほほほほ」
史進子は王進が焼いてくれた肉を頬張った。さすがは成型肉、見た目は「まんがの肉」そっくりだった。味はといえばハムステーキのように甘くてジューシイ。お子様な史進子にはぴったりの味だ。
「うわっ美味しい、美味しい。でも、どうしてボクを助けてくれたの？」
「ウム。なんとなく、ピンと来てな。ワシがこの学園へ来たのは、元はと言えばある重大な使命を果たすためだったのじゃよ」
「重大な使命？　パンツ泥棒が？」
「そっ、それは忘れてくれい！　ワシの使命とは、良いか、梁山泊学園に一〇八人の『妹』を勢ぞろいさせ、そしてただ一人の幻の『兄』を梁山泊へ迎え入れることなのぢゃ」
「意味わかんないよ、はぐはぐ。うーん、美味しいー」

「ワシは十六年前に夢を見たのぢゃ。関東に封印されていた一〇八個の妹の魂がこの関東平野に転生し、幻の兄を求めて荒野を彷徨うという夢を……！」
「一〇八人の妹って何だよ？」
「関東には将門伝説だけでなく、兄妹伝説があってな。その昔、允恭天皇の皇太子であった軽太子が、自分の妹である衣通姫と恋に落ちた。太子は帝の位よりも妹への愛を選んだのぢゃ。その結果、太子は囚われて伊予の国に流罪となったわけぢゃよ。さて、そして……」
王進は衣通姫の読んだ歌をダミ声で吟じてみせた。

君が往き　け長くなりぬ
山たづの　迎へを行かむ
待つには待たじ

「衣通姫もまた、伊予へ流されてしまった兄の軽太子を慕って、飛鳥から伊予へと兄を追いかけていったのぢゃ。かくして二人は国を捨て、帝の位も捨て、全てを捨てて兄妹の禁じられた愛に殉じて心中したのぢゃ」

真玉なす　吾が思ふ妹
鏡なす　吾が思ふ妻
ありと言はばこそに
家にも行かめ　国をも偲はめ

「ふーん。素敵な話だねっ！　文字通り、命がけの兄妹愛……うーん、これこそまさしく永遠の純愛！　……って、伊予って松山じゃん！　四国だよっ！　関東じゃないよぅ」
「この話には異聞があって、その説によれば実は二人は松山で最期をともにすることはできなかった、というのぢゃ。衣通姫が乗った船は伊予に辿りつくことなく遭難して当時未開の地だった関東まで流れ着き、そこで哀れにも悪人どもの手にかかり、一〇八個の肉片に切り刻まれてしまったというのぢゃ」
「えええええ？　ほんとー？　それって関東の人からクレーム来ない？」
「無論、この『衣通姫の最期』に関する逸話は、日本史の正史から完全に抹消されておる。関東に地震や反乱などの様々な不幸が起こり続けるのは、実はこの衣通姫の怨念の仕業なのだと考えられ、事の一切はタブーにされたのぢゃ。日本には古くから言霊信仰があったので、これほどの怨霊ともなるとただ語るだけでも厄災があると心底恐れられたのぢゃよ。しかし衣通姫が命を落としたご当地、現在の秋葉原では、密かに祠を建てて衣通姫の霊を慰め続けたという……ところが十六年前に、誰かがこの祠を壊してしまったらしいのぢゃ。衣通姫の魂は一〇八個の球に分断されたまま、関東平野じゅうに飛び散った……そしてそれぞれがこの世に人間として転生した。衣通姫の魂を持った一〇八人の妹がのぅ」
「えー、何それー？　どこのアニメ？」

「アニメじゃない！　アニメじゃない！　ホントのことさ！　ワシは十六年前、凄い夢を見たのぢゃ。衣通姫がワシの枕元に立って、そう伝えたのぢゃ。自分の魂を持った一〇八人の妹を集めてほしい、そして軽太子の魂を持って転生してきているであろう兄を探し出して会わせてほしいと。その時こそ、衣通姫の怨念は晴らされ、この乱れきった関東に平和が戻るはずだと。そして、その妹と兄が出会うべきは、逢瀬を約束していた海上の島。すなわち伊予に比する島でなければならないと……ところが、東京湾にそんな大きな島はない。ワシは長年いぶかしんでいた。夢は夢であろうと。だがどうぢゃ、突如東京湾に現れたこの島を。そして、なんということか、続々とこの島に十六歳の少女たちが集まってくる……！　そう、これは運命なのぢゃ。そして……おぬしもまた、その一〇八人の妹の一人なのぢゃ！」

「えええー？　ちょ、ちょっと待ってよ？　なんでボクがっ？」

その頃。

生徒会の主要メンバーが学内の某所にて一同に会し、史進子と柔術部三人娘の戦いの様子をプロジェクターで映し出して観賞していた。

「なんという無様な闘い方だ。どちらも問題になりませんね」

「この直後に、王進が現れて両者を制止したのです」

「王進がっ？」

「まさか、あの伝説をまだ本気にしているのか、あの男？」

「ついに現れましたね……九満流史進子の出現は、この梁山泊学園を戦乱の渦に陥れることになりそうです……」

「史進子が反生徒会派のカリスマとなってからでは厄介です。今のうちに倒してしまいましょう」

「そうですね、火事はボヤのうちに消してしまうことですわ」

今、梁山泊学園最大の権力を誇る生徒会が、王進と史進子をともに一網打尽にせんと動き始めた……！　さらに、柔術三人娘もまだ、史進子を狙っているのだ。さらに、史進子のすぐ後では、王進が指をわきわきさせながら史進子の豊満な巨乳を狙っている！

史進子、あやうし！

「ボクの戦いはまだ、始まったばかりだ！」

（つづく）

執筆者プロフィール（あいうえお順）

●赤電車（あかでんしゃ）
埼玉生れのお絵書きダンゴムシ、てゆーか、また無職になっちゃいました……日々ネットで面白そうなCDやDVDを探して時間を浪費してますが、そうそう買えないのが玉にキズ。お仕事ないですか？

●あかほりさとる
TVアニメ『ホワッツマイケル』の脚本でデビュー。以来、ヤングアダルト小説を中心に、コミック、TVアニメなど、メディアの壁を越えた作品を次々と発表。最新作に『神to戦国生徒会』『かしまし〜ガール・ミーツ・ガール〜』等。

●伊藤ベン（いとう・べん）
本職はゲームのグラフィックデザイナーとして籍を置きながら、ライトノベル挿絵のお仕事もちょこちょこ承っております。今回の絵は、全て「フォトショップ」の投げ縄ツールで描きました。人間やれば出来るモンですね！

●ういろう
何でも活字を読むのが好きです。新聞、雑誌、小説、ネットばかり読んでいます。3D酔いしやすくポリゴンを使ったゲームソフトが若干苦手。よって必然的に遊ぶゲームといえばアドベンチャーのとくにノベルゲームと呼ばれるものが中心です。コツコツと物事を進めるのが得意。記憶力はどうでも良いことは覚えているのに、肝心な大事なこと、すぐ前のことはよく忘れることが多い。それで最近は『大人のDSトレーニング』で脳を鍛えてます。

●大塚ひかり（おおつか・ひかり）
1961年、横浜生まれ。早稲田大学で日本史学を専攻。著書に『ブス論』『カラダで感じる源氏物語』『源氏の男はみんなサイテー』（ちくま文庫）、『愛とまぐはひの古事記』（KKベストセラーズ）、『面白いほどよくわかる源氏物語』（日本文芸社）など。月刊誌『美的』（小学館）で「古典美容道」、ウェブサイトの「WEB日本語」で「訳せない、訳したくない古典のことば」を連載中。最新刊は『オバサン論』（筑摩書房）。

●小野敏洋（おの・としひろ）
レズ声優好きな流浪の漫画家。趣味は「駅前のティッシュもらい」と「スーパーの買い物袋持参で3ポイントゲット」です。最新単行本は『ROOTねこねこ』（メディアワークス）。買って！（涙）

●鏡 裕之（かがみ・ひろゆき）
巨乳の快楽を追求しつづける官能クリエイター。小説に『タカビーな爆乳彼女のつくりかた』（二見ブルーベリー）、『ブラバスター』（青心社）、ゲームのシナリオに『MILK・ジャンキー3』（ブルゲ ON DEMAND）などがある。

●かーず
FLASHとヲタク系ニュースを扱うサイト管理人。本田透氏のイベント「妹祭り」に足繁く通っているうちに、いつのまにかスカウトされて『眼鏡っ娘大百科』『ツンデレ大全』などの萌え本で、ともに執筆する仲に。

●神野オキナ（かみの・おきな）
えーと、神野オキナでございます。今回はちょっとした昔のご縁から参上致しました。編集のK林さんには感謝であります。この本が出る頃にはGA文庫から『虚攻の戦士〜「ナツ」のキオク』という新作が出ますので、今回の短編同様、こちらもどうぞよろしくお願いします。

●木之本みけ（きのもと・みけ）
ゲーム開発会社勤務。『シスターコントラスト！』（AcaciaSoft）、『魔法とHのカンケイ。』（ういんどみる）などのシナリオを書きました。その正体は13歳の女子中学生。「ネコミミリア」は東京にいるお兄ちゃんのことを考えて書きました。ということにしておいてください。それがあなたと私の幸せです。CGを塗っていたこともありますが、こういう経緯でシナリオライターになったわけではないのでご注意ください（何を？）。

●倉田英之（くらた・ひでゆき）
59頁参照。

●黒石 翁（くろいし・おきな）
オタク業界を漂流し、土山しげる作品や料理コミックの世界にはまったり、巨乳眼鏡に萌えまくったりしてるフリー編集ライター。そんな趣味丸出しな、巨乳眼鏡な腐女子とスポーツ少年のすれ違いラブストーリー『かぷりっちお☆スノー』が二見ブルーベリーより発売中！ どうぞよろしくかしらー。ちなみに現在、他社より発行予定のショタっ子メイドものを執筆中……これからどこへ向かおうというのか、俺のラノベ坂!?

●KEI（けい）
1981年4月1日生まれ。北海道出身。現在東京都在住。大雑把でマイペース。ブラックコーヒーとビターチョコ、それと少しの煙を糧にもさもさと絵を描いてますよ。代表作『奇蹟の表現』（電撃文庫）『ゴーレム×ガールズ』MF文庫J）。http://kei-garou.net/

●砂浦俊一（さうら・しゅんいち）
1978年山梨県生まれ。同人誌活動を通じて編集者に拾われる。著書に『隣のドッペルさん』（集英社スーパーダッシュ文庫）など。活動状況はこちらのサイトにて。http://www.ne.jp/asahi/nanigashi/ss/

●サガノヘルマー
1966年生まれ。聖地中野育ちの下流マンガ家。昔の作品に『BLACK BRAIN』①〜⑩、『わんぱくTRIPPER』①〜②、他いくつかの痛作あり（いずれも講談社）。現在、マガジンマガジン社の『マガジン WOoooo! 狼』にてガチンコのヘンタイ・エロマンガ連載中。夏には単行本（もち18禁）が出る予定（ウレシイっす）。趣味、ガンプラ。MGやHGUCを無視してMSU以前のブツをチマチマ改造して一人悦にいっとりま

す。えーと……マンガ描きます。発注くださいー♡よろしくーー。

●左折（させつ）
最近コソコソ絵仕事中。兼業なので会社にバレないかと毎日食用豚のようにビクビクしてます。メガネ、脚フェチです。脳内メガネ特盛りです。メガネは世界を救うと思います。HPは最近忙しくて仕事情報くらいしか更新してませんが遊びにいらしてくださると励みになります！
http://go.fc2.com/horigotatu/

●サンキュータツオ
漫才コンビ「米粒写経」として活動、オタク芸人トークユニット「アニメ会」メンバー。アニメのほか、ガシャポンを中心とした造形物が好き。本人曰く「オレのフィギュア好きのルーツは仏像」らしい。天真爛漫と失礼のハザマを揺れ動く人柄。いわゆる大学の落研（オチケン）さん出身、『CDブック 八代目桂文楽落語全集』『CDブック 五代目柳家小さん落語全集』（小学館）に編集協力するなど、実は隠れた落語ファンでもある。

●しかげなぎ
漫画やゲームの絵をやっております。主にぎゃる絵メイドさん寄り。最近のメイドさんブームにいちいち「あれはウェイトレスさんだ」と反論しては、周囲からウザがられております。
http://www2u.biglobe.ne.jp/~nagi-s/

●しっと
こんにちは、しっとと申します。プリキュアンです。今回は、お誘い下さり誠にありがとうございました。「同人誌」というものへの自分の想いを詰め込んだつもりですが、少しでもお楽しみ頂けましたら嬉しいです。今後は4月20日売りの『週刊少年チャンピオン』で漫画を描かせて頂けたり、4月23日のサンクリでグッズを出させて頂けたり、といった感じです。またお会いできる日を楽しみにしております。
http://moemoecafe.com

●将吉（しょうきち）
1982年生まれ。作家。『コスチューム！』で第3回ボイルドエッグズ新人賞を受賞しデビュー。「きよしメモ」執筆にあたり、究極のメイド像はフレンチ・スタイルかヴィクトリアン・スタイルかに悩んだ挙句に山に籠もるが、答えはいまだ見つからない。今年の目標は地元さいたま市にメイド喫茶を誘致すること。新世代格闘技青春小説『バーリ・トゥード』を、ドコモ携帯サイト「P-SQUARE」および「最強☆読書生活」にて連載中。

●滝本竜彦（たきもと・たつひこ）
1978年北海道生まれ。ひきこもりが高じて大学を中退し、輝かしい青春のひとときをフルスイングでドブに投げ捨てる。2001年『ネガティブハッピー・チェーンソーエッヂ』で第5回角川学園小説大賞特別賞を受賞しデビュー。他作品に『NHKにようこそ！』『超人計画』（ともに角川書店）がある。『NHKにようこそ！』は漫画化され（漫画・大岩ケンヂ）、今夏にはアニメ化が予定されている。

●竹熊健太郎（たけくま・けんたろう）
1960年東京生まれ。独身で長男（バツイチ）。桑沢デザイン研究所中退。編集家（編集＋ライター）、多摩美術大学非常勤講師。80年代初頭から自販機ポルノ誌の編集を皮切りに、ライター、マンガ原作・評論方面で活動。代表作に『サルでも描けるまんが教室』（相原コージと共著。小学館）、『私とハルマゲドン』（ちくま文庫）、『ゴルゴ13はいつ終わるのか』（イースト・プレス）など多数。

●玉置勉強（たまおき・べんきょう）
こんにちは、玉置勉強と申します。エロ漫画や普通の漫画など描いてます。本当は女装した男の子同士が糞尿まみれでセックスしまくる漫画を描きたいのですが、どの編集部も描かせてくれないので、毎晩脳内でアスカ様と女装少年をいぢりながらキャキャウフフしてます。

●とりしも
新潟県出身、東京都在住、乙女座、B型、男、一応イラストレーターです。電撃文庫さんの方で『撲殺天使ドクロちゃん』の挿絵をやらせて頂いております。積みゲー、積みプラモをなんとか消化したい今日この頃です。はい。

●名瀬さおり（なせ・さおり）
刊行おめでとうございます。私は普段は紙媒体でデザインしたり、一般書籍に絵を描いているのですが、ひょんなことから漫画絵のお仕事をいただき緊張しております。PNも決まっておらず、連れに相談したところ「鉄仮面与太郎」はどうだと言われ、大喧嘩になりました。猫と沖縄が好きで、このところルーツレゲエとダンスホールに夢中です。さらに「海自萌え」もしており、どこへ行くやら2006年。よろしくお願いします。

●西E田（にしだ）
刊行おめでとうございます。趣旨がよくわからないままイラスト描きました西E田と申します。細々と女の子のイラスト描いたり内職したり引きこもったりするのが仕事の人です。絵より本人が趣旨にあってるのかもしれません。今後もよろしくお願いします。

●にょにょにょ
345頁参照。

●蓮海もぐら（はすみ・もぐら）
作家——。僕が悪と呼ばれるものと共存できるのは、「地獄の存在を信じる」といった弱者特有の生ぬるさを持っているからです。僕が文章を書き続けるのは、何よりも僕が臆病で、自分が犯してきた罪を吐露できない生ぬるさを持っているからです。咎人は生きるために、たくさんの言葉を必要とします。シンプルに生きられない人は、シンプルに生きられない罪を背負った咎人なのです。

●羽仁倉雲（はに・くらうん）
10月4日生まれの関西人。絵の仕事はこれが初めてです。ホームページを運営中。ただ好きなものを描いております。「チャンネルC」http://ikaika.upper.jp/

●火浦R（ひうら・あーる）
どもー。火浦です。そんな方向性でいいか分からなかったんで大振りなやつ行ってみました（笑）。どうなるか期待半分、怖さ半分といった所ですが

（笑）、個人的にも本が出るのが楽しみですわ。

●**平坂読**（ひらさか・よみ）
2004年に彗星のごとく登場したデビュー作がすぐさま異例の大ヒットとなりライトノベル業界を震撼させ漫画化アニメ化ドラマ化などあらゆるメディアを瞬く間に席巻していずれも大成功をおさめ今や押しも押されぬ小説界のトップスターでありなおも躍進を続ける麒麟児であり風雲児であり覇王であり国内のみならず世界中いや全人類史を探しても他に例を見ない史上空前の大作家だと言われていたら凄いのだが勿論そんな事実はない。

●**堀越英美**（ほりこし・ひでみ）
会社員、ライター。連載終わったけど、エキサイトブックス『非モテの文化誌』（http://www.excite.co.jp/book/daily/backnumber/?w=thursday）もよろしくお願いします。

●**本田透**（ほんだ・とおる）
評論家、ライトノベル作家（新人）。既婚。妻は川名みさき。最近、真紅様のSDドールが2・5次元部屋にやってきて2次元妻との間で混乱中。近著『アストロ！乙女塾！僕は生徒会長に恋をする』（集英社スーパーダッシュ文庫）、『本当は萌えるグリム童話』（ワニブックス）。Ｐｏｄｃａｓｔでアニメ会さんと一緒に「本田透と国井咲也（アニメ会）の二次元へ行きまっしょい」を毎週配信中。

●**みさくらなんこつ**
はじめましてです!! イラストのお仕事しながらも毎日ゲームやったり、なわとびしたり、アイス食べたりしてまーす★ お仕事いつでも受け付けてますよ～ヨゴレ上等です、内職とか経理以外ならなんでも受け付けちゃいますのでどうぞよろしくおねがいしますです！ とはいえ今年はちょっとひきこもろうかなーって……本文にも載せていただきましたがゲームを個人製作しますです、『楽園の令嬢（アリス）たち』……な～んか危なっかしくて見てられないぜ、俺が面倒見てやるぜって方がいたら声かけてやってください～!!

●**みやも**
新米の文章屋。長らくセミニート状態でネット上をくらげのように漂っていたところを人の縁に恵まれ、本田透氏が主宰する「恐るべきお兄ちゃん軍団」の末席に加わった。2005年11月に二見ブルーベリーから、初の長編小説『修正報告 銀河ツンデレ伝説』刊行。現在は新作を鋭意執筆中です。

●**ヤス**
1984年8月3日生。徳島県出身で千葉県在住。O型。電撃文庫『わたしたちの田村くん』『とらドラ』（共に竹宮ゆゆこ著）の挿絵等やらせてもらったりしてます。趣味はゲームとインターネット。忙しくて積みゲーが溜まりつつありますが……。あと微妙にダイエット気味。最近睡眠時間の大切さを知りました。色んな人に励まされたり凹まされたりしながらゆっくりゆっくり頑張ってます。そんな感じの奴ですがよろしくおねがいしますー。

●**安田理央**（やすだ・りお）
1967年生まれ。主にエロ系ライター。エッチな写真撮ったりエッチなビデオ撮ったりも。著書は『日本縦断 フーゾクの旅』（二見書房）などエッチな本多数。賞罰ナシ妻子アリ。
http://www.loveforsale.jp

●**柳下毅一郎**（やなした・きいちろう）
1963年大阪生まれ。特殊翻訳家・映画評論家・多摩美大講師。著書に『興行師たちの映画史』（青土社）、『殺人マニア宣言』（筑摩書房）など。訳書に『ケルベロス第五の首』（G・ウルフ 国書刊行会）、『デス博士の島その他の物語』（G・ウルフ 国書刊行会 共訳）、『悪趣味映画作法』（ジョン・ウォーターズ 青土社）、『ジェノサイドの丘』（P・ゴーレイヴィッチ WAVE出版）など。

●**山本弘**（やまもと・ひろし）
SF作家。代表作は『時の果てのフェブラリー』（徳間デュアル文庫）、『神は沈黙せず』（角川書店）など。新刊は短編集『まだ見ぬ冬の悲しみも』（ハヤカワSFシリーズJコレクション）。その後、長編『アイの物語』（角川書店）が控えている。『サーラの冒険』シリーズ（富士見ファンタジア文庫）最終巻は今年6月発売予定。

●**YU-SHOW**
北海道札幌市在住。本当は職業を「ギャルゲーマー」と名乗りたいなと思っているものの、ついつい「ライター」と書いてしまう、思いきりの足りない20代。キャラ属性なんて、萌えるための手段にすぎないという持論をかかげつつも、『ツンデレ大全』『姉ゲーム大全』（いずれもインフォレスト）などの属性本に携わり、すっかりその道の人の代表的存在ということになってしまい、「人生、ままならないっす！」とひとりごちつつ、今日も萌えと妄想の日々を送る。

●**吉井ダン**（よしい・だん）
愛知県名古屋市出身。高校在学中からイラストの仕事を手がけ、平成8年にフリーのイラストレーターとして本格的に活動を開始する。PCゲーム関連のキャラクターデザインや原画制作を中心に活動を展開し、その後もゲーム、書籍、WEBコンテンツなど様々なジャンルの制作に従事し、現在に至る。最近は拠点を秋葉原に移し、仕事帰りにフィギュアなどのアイテムを物色しながら帰路につく夢のような毎日を送っている（笑）。

●**米光一成**（よねみつ・かずなり）
『ぷよぷよ』『バロック』『トレジャーハンターG』などのゲーム企画脚本監督。最新作はWEBゲーム『キングオブワンズ』（無料で遊べる！）。雑誌『本の雑誌』『月刊Gファンタジー』、WEB「ブログ文章術」「ゲームデザイン研究所」連載。著書に『ベストセラー本ゲーム化会議』『日本文学ふいんき語り』『デジタルの夢でメシを食うためにボクらは！』等。池袋コミュニティカレッジで「発想力トレーニング講座」講師。「こどものもうそう」ブログを日々更新中。

**ご協力ありがとう
ございましたっ。**

企画・監修
本田　透

編集
米田郷之（二見書房）
船津　歩（二見書房）
神林千尋

取材協力
倉田雅弘

協力
片野吉晶

本文フォーマット・デザイン
ヤマシタツトム ＋ ヤマシタデザインルーム

本文 DTP
横川浩之

special thanks（順不同）
有限会社ボイルドエッグズ　村上達朗さま
株式会社アニプレックス　落越友則さま
ビクターエンタテインメント株式会社　菅原貴範さま
「R.O.D」スタッフの皆さま
「かみちゅ」スタッフの皆さま
「ガン×ソード」スタッフの皆さま
SATZ
BLOSSOM NETWORK JAPAN
MediaClip
株式会社アクアプラス（Leaf）
（株）インターハート／きゃんでぃそふと
有限会社煉瓦社
K&C コミュニケーションズ

ファントム

発行所
株式会社 二見書房
東京都千代田区神田神保町 1-5-10
電話 03（3219）2311［営業］
03（3219）2316［編集］
振替 00170-4-2639

印刷／製本
図書印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
定価は、カバーに表示してあります。

ISBN4-576-06017-1
http://www.futami.co.jp/

9784576060170

1920076016004

ISBN4-576-06017-1

C0076 ¥1600E

定価：本体**1600**円＋税